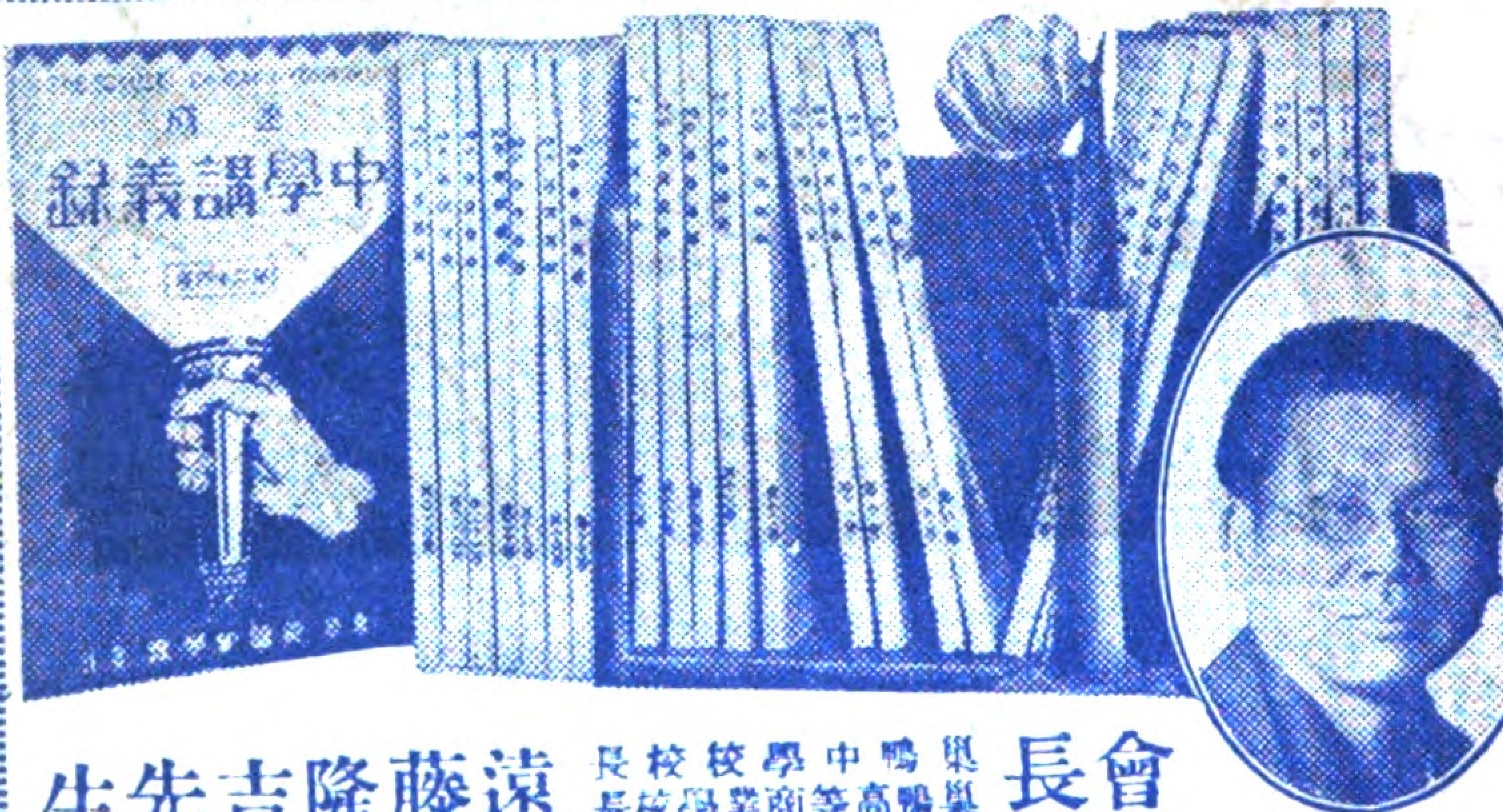

KING
キング
十月號

▶十五週年記念大特典提供◀



會長　巢鴨中學校校長　巢鴨高等商業學校長　遠藤隆吉先生

一ケ年の獨學自修に依って

中學全科が容易に習得できる！

この中學講義の內容見本を早く取寄せて御覽なさい

◆現代は何人も中等程度の教育が必要である、然し種々なる事情のために**中學校へ行かれぬ人々は**如何にして中等教育を受くべきか、云ふまでなく最も權威ある**講義錄に就て學ぶことである、**會長、遠藤博士は經驗から得た獨特の教授法に依り諸君が**職業の餘暇に勉強しながら中學全科を習得する**道をひらかれました、即ち讀み易く、覺え易い「**速成中學講義**」がそれです、殊に卒業が一年であるから會費が僅少ですむわけである（入會には今が最も好い時です！）

東京神田三崎町
帝國中學會
電九段一五六七番

內容見本 無代進呈

詳しいことは**今スグに**……「**キング**」で見た見本入用とハガキで申込次第規則書つき內容見本無代送呈す……

◉ペン字上手は時代の勝利者‼

近頃では事實あらゆる方面で**ペン**を使ふ方が多いので**ペン**字の練習はいよいよ急務となつてきたが、今評判の透寫式練習法とは他に類のない新式奇拔な新法にして短日月で日本字、英字、數字等すべてのペン字に熟達し得る珍しい通信教授である。詳細は今スグ「**キング**」で見た說明書●●●●●●と葉書に書いて東京市神田區三崎町●●●●●●**ペン習字研究會**へ申込めば說明見本無代にて送呈す。

時と雖ども、手から離さなかつた。
一年又一年、年はかくして油のやうに流れ去る。
本國では、蘇武の行衛を尋ねると、匈奴は答へて云つた。
『蘇武は、當國へ使に來たが、もう疾うに死んで了つた』
僞つて彼の所在を知らしめなかつた爲、本國に於ても、彼は死んだものと信ぜられて居つた。
偶ゝ上林苑をかすめて飛ぶ一羽の雁。
『あれを射よ』
天子の言葉に應じて、素早くこれを射落すと、不思議や、その脚に、帛に認めた書面がつないである。見ると、蘇武の書である。彼はまだ北海のほとりに生存して居るといふので、直ちに匈奴を責めたてたので、蘇武は始めて自由を得、釋されて本國にかへる事が出來た。匈奴に留ること、實に十有九年、國を出る時は壯齡だつたが、國へかへつた時は頭髮も、髭髯も、雪やうに白くなつて居て、武帝も世を去り、昭帝の世となつて居た。後世『雁のたより』と稱する故事は、此の蘇武から起つて居る。

ドクトル　高木中麿先生薬效御證明並に顧問

月やく

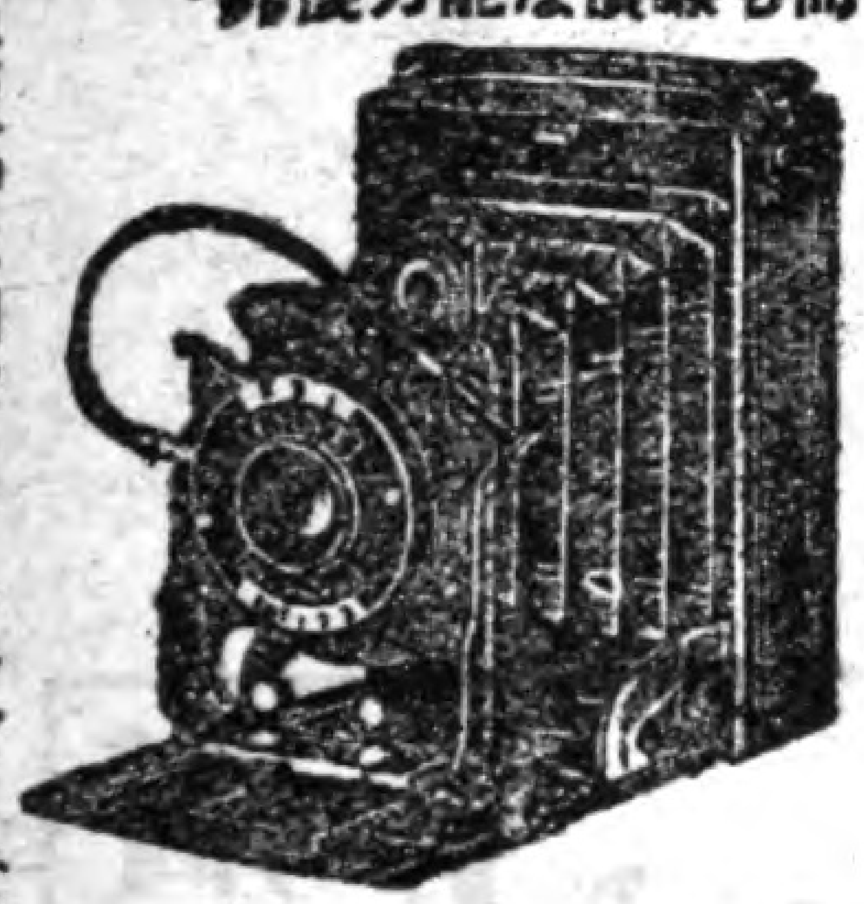
おろし
専門薬

滞りて御心配の方。他藥を用ひても效なきお方は一日も早く私方の秘藥で御安心下さい。キット通經の御滿足を得て戴きます。三錢切手封入御手紙下さい。詳しくお知らせします。

大阪市南區高津町三番丁一〇　和田山たつゑ

散歩に！旅行に

而も廉價な能力優秀・



―名刺形―

▽金屬製取枠三個パックホルダー付
▽一揃函入金十五圓（送料内地三十錢 領土六十錢）
▽附屬用品一揃金二圓五十錢（送料内地四十錢 領土八十錢）
▽カメラ用革鞄金二圓五十錢

イーストカメラ

外部は金屬製、蛇腹は本革張り、シャッターは速寫、バルブ、開放しの三樣式に働き、レンズは「よく寫る要素」を應用した特殊單玉に虹彩絞りを備へ最大絞りは軟焦點用、第二絞（1）以下で普通に極めて鮮鋭な描寫が出來ます。普通は名刺乾板を使用しますが、又二吋四分ノ一、三吋四分の一のフイルムパックを使用するパックホルダーも附して居りますから、申分なく實に重寶であります。特に學生用として本器は適當のものであります。

東京市本郷區駒込坂下町
大日本雄辯會講談社代理部
振替東京六六二九番

先づ健康は禁煙から

無代進呈

無努力 簡易 禁煙法

禁煙して根本的に強健を志す人には、雜誌名記入御申込み次第右の册子を無代送呈す、

東京市京橋區常盤町三　グランド社

見本進呈

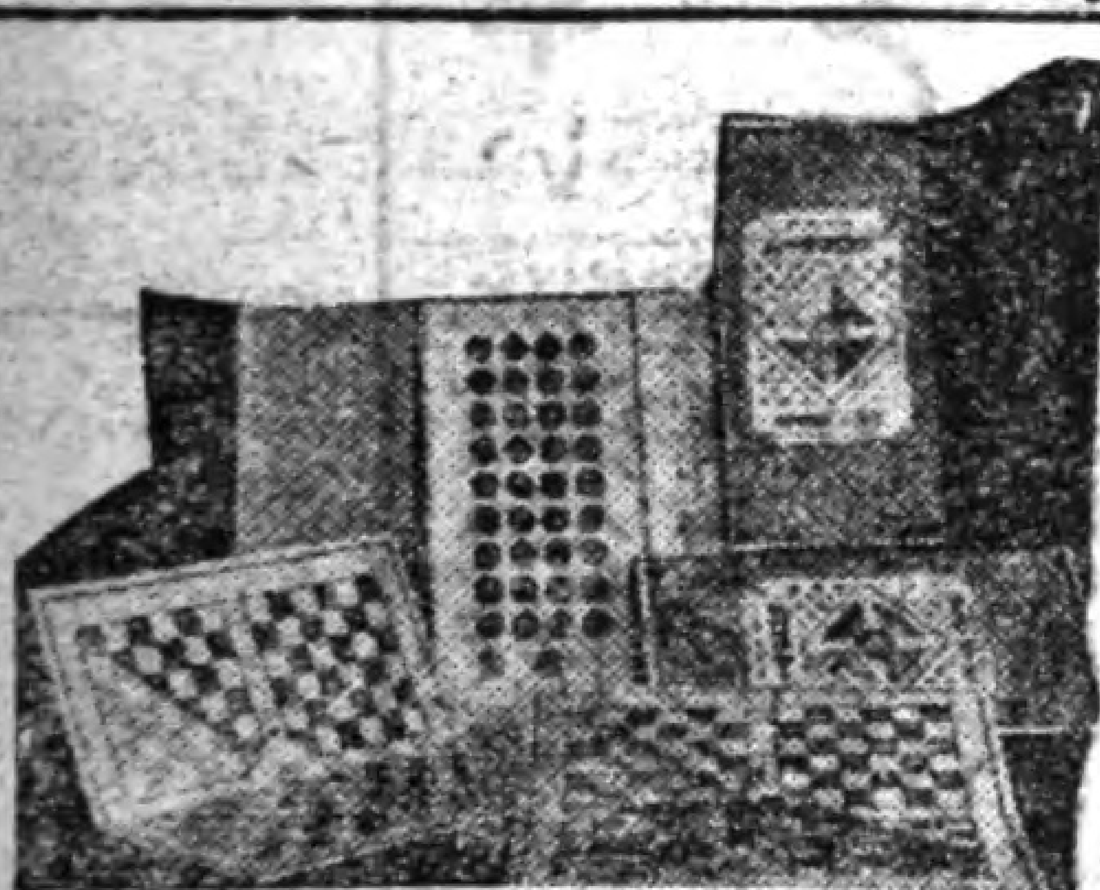
心身鍛練 交靈感應 氣合術 通信講習

あらゆる百般の諸靈術の奧義秘傳を惜し氣無く詳解して個人的に通信指導す、雜誌名記入文字を明瞭に書して御申越次第明細見本送呈す。

東京市京橋區京橋電車交叉點（日活前）　天玄洞本院

盤上野球

クロスゲーム



遊び方説明書付壹組壹圓

極く最近の人氣もの！
四人でも三人でも二人でも

家中揃つて樂しく遊べる

ストーブの前で、おこたの上で、野邊の芝生で、汽車の座席で、お父さんもお母さんも姉ちやんも弟も皆揃つてトテモ愉快な高尚遊戯です。折疊式で上等箱入ですから携帯に便利、總て堅牢損はれる心配のない優秀品。殊に競技盤上で可愛い純眞そのもの〻樣なランナーの走る美しさはタマラなく爽快自と心も躍ります。東京本郷大日本雄辯會代理部取扱

靜寛院宮



聖心畫譜　その十　（裏面參照）　吉村忠夫筆

靜寛院宮

文學博士　中村孝也

文久元年秋の末つ方、幕末の風雲の慌だしい頃、孝明天皇の皇妹和宮親子内親王は、公武合體の政策に餘儀なくせられて、關東にお下り遊ばされ、將軍家茂公の御臺所となられた。『惜しまじな君と民とのためならば、身は武藏野の露と消ゆとも』と詠ぜられた御心の雄々しさにしては、餘りにお痛はしき御齢。それはやうやく十六歳でいらせられた。

家茂公に嫁がれて、伉儷の御仲らひ睦しくいらせられたのも束の間の夢で、慶應二年七月、公は大阪城で薨ぜられた。將軍と和宮とは、御同年の二十一歳であられた。『世の中の憂きてふ憂きを身一つに、取り集めたる心地こそすれ』と詠ぜられ、薙髪して靜寛院宮と稱せられた御心根の詫びしさ思ひめぐらすだに涙ぐましくなる。

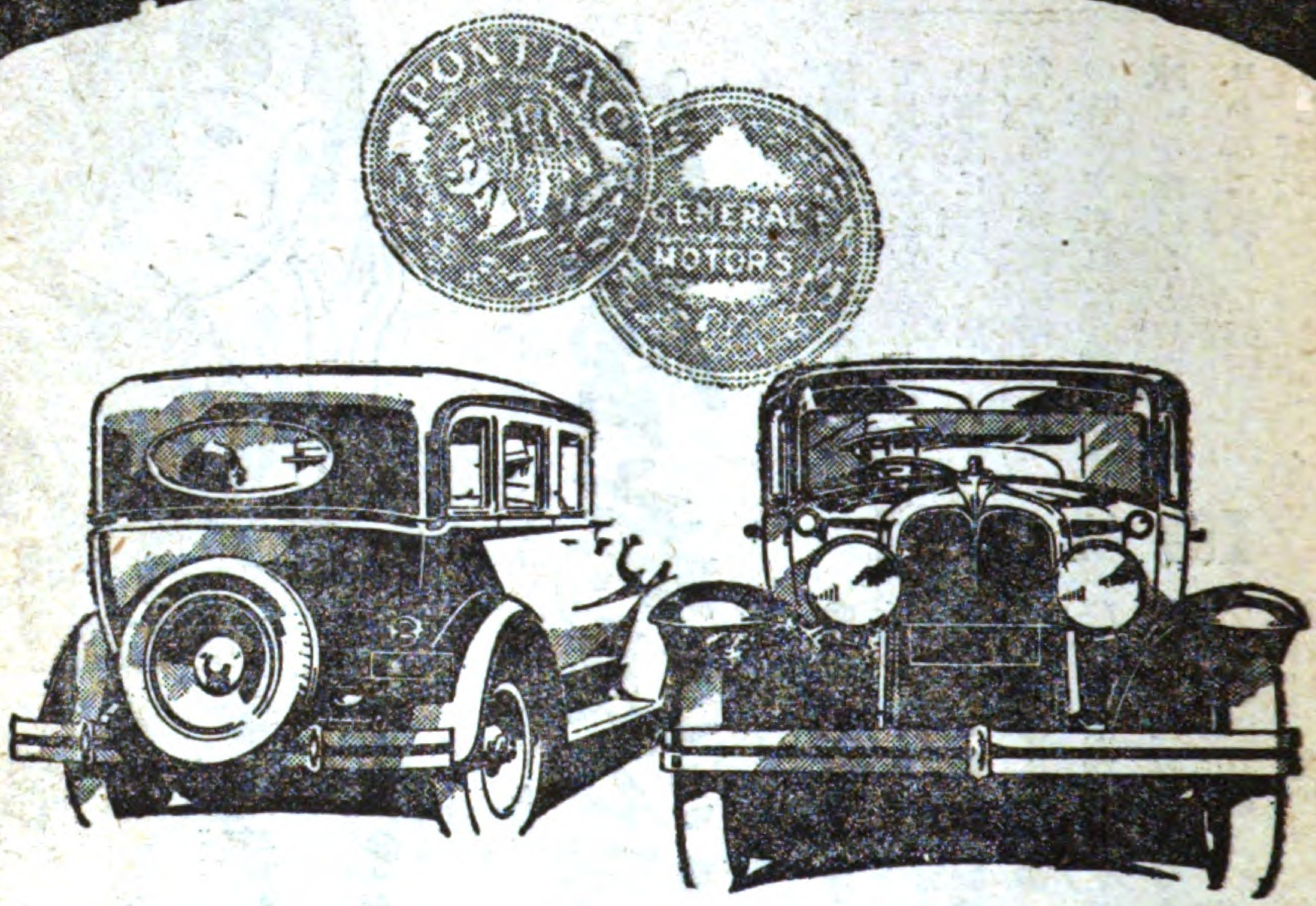
その悲しみの御中にして、將軍慶喜の大政返上、鳥羽伏見の戰、やがて官軍が潮のやうに江戸に押寄せて、德川家の存亡は風前の燈火よりも危くなつたとき、かよわき御身を挺して朝廷に歎願したてまつり、つひにその命脈を全うせしめられた烈女の御姿こそ、世にも神々しく拜せられる。

それより後は概ね京都の御詫住居に、亡き家茂公の御繪姿を御禮拜あそばされつゝ、心しづかに年月をお過しあらせられた。

　　誰がためにかたちつくらん朝鏡
　　　　向ふかひなくうつる年つき

と詠ぜられた御思慕の程、畏くも畏し。前栽の秋草にも、露がやどる。蟲の音も寂しい。

明治十年九月二日お隱れあそばされた。御齢三十二。東京芝增上寺境内、家茂公と同じ靈廟に御祀り申し上げられていらせられる。



雪白の宮殿



一眸の眺め、颯々の風……南獨にその景勝を誇るものは壯麗なバワリア王の宮殿である。巖頭に聳立つこと數十丈、全部雪白の大理石にて造られ、完成に十七年の歳月を費したと傳へられる。今は棲む人もなくバワリア名所として徒らにありし日の豪奢を物語つてゐる。

お猿さんの百面相



『やゝこりや大變、向ふに見えるは寄手の軍勢、ササ者共早う弓を持て弓を持て……』



『ホヽオ、それは君本當かい？ 又擔ぐんぢやないかい？ 本當にしちや馬鹿に話がうますぎるなア』



『月給は貰つたし、明日は日曜だし…一風呂浴びて銀ブラも惡くないな。それとも活動にするかな』



『だしぬけに首とは會社もあんまり酷すぎるよ。僕は家へ歸つて女房の顏を見るのが辛いや』



『こう見損くなつちやいけねいぜ。日比谷の猿三さんだあ俺のこつた。量見するなら今のうちだぞ』



『ヨウ君かい。久し振りだつたなあ。こんな處で遭はうとは夢にも思はなかつたよ。イヤ偶然々々』

發表！

富士 十月號





▲**右門捕物帖** 佐々木味津三

美男右門の水際立つた名捕物！萬人大熱狂の讀物！

▲本傳**御前試合** 霜田史光

初鹿野傳右衛門と朝比奈彌太郎の試合、愈々興味の絶頂

▲**火星の人間** 西田鷹止

驚くべき科學の進歩に伴ふ、奇想天外の大探偵小説！

萬人感激の二大讀物！

北海の涯まで……貴司山治

純な合唱と、大學生との清き戀も、意外の波瀾から悲しい運命を辿り、今は北海道の北端に育兒院を設けて愛の生活を營むまでの血と涙の人生記錄、何人も一讀すべき純愛物語！

ビール王成功物語……大瀧鞍馬

成功の秘訣はどこにあるか、一介の掃除小僧から、ビール王となつた馬越恭平翁七十年の奮鬪生活。何人か之を讀んで發奮せざるものぞ。見よ！直劍味流れ、波瀾に富める生涯何人も驚嘆

◎痛快講談 **任俠譽の纏** 圓谷竹山

◎昭和老俠 **大宮源次郎** 安藤盛

◎名人講談 **ぽんつく** 柳原緑風

◎北極探檢 **氷上一萬哩** 中正夫

◎**國際柔道戰** 嗚弦樓主人

此外・名篇數十篇

定價五十錢 送料二錢（振替東京三九三〇）

東京本郷 大日本雄辯會講談社



忙中閑

カナ〳〵と啼く蜩の聲は梧桐の梢なるべし。天愈ゝ高うして碧く、地愈ゝ廣うして萬物は稔る。今こそ天地の恩愛は渾然としてわが胸底に甦る。

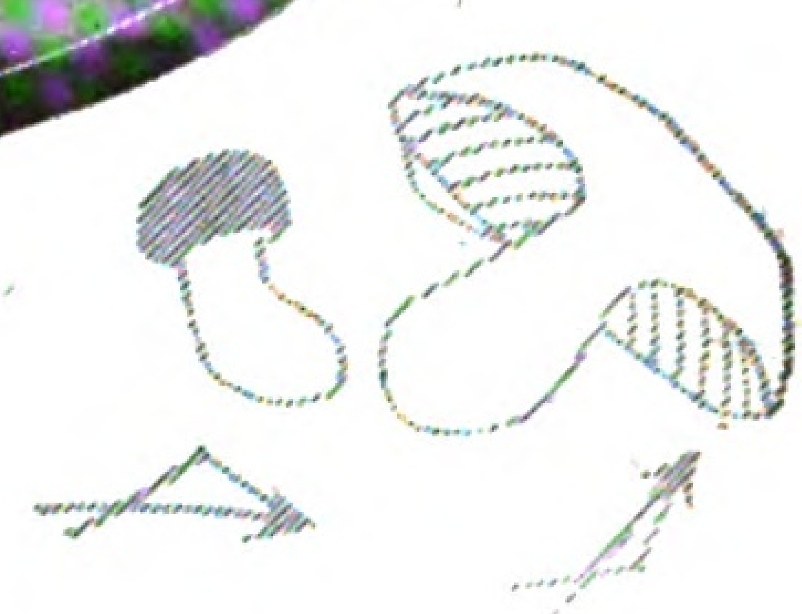
（寫眞は鎌倉の別莊に寸暇を利用して靜養さるゝ濱口首相）

大臣夫人の





（下）安達内相夫人。茶室のお掃除は雪子夫人の日課です。寸暇のない多忙の夫君に献ずる一服の薄茶はどの位慰めとなる事でせう。



浮沈の多いのは政界人のつねであります。その得意の時も失意の時もよく夫君を理解し、いつも麗しい内助者として夫君の力となり光明となつて行かるる夫人達の努力は實に涙ぐましいものがあります。（上）小橋文相夫人。何事も女中任せにせず、自ら先に立つて夫君のために盡して居られる秀子夫人は快活な捌けた方でいらつしやいます。

奥様振り（その一）



（上）松田拓相夫人。
明治神宮裏參道の拓相邸にはいつも甲斐々々しく働いて居られる文子夫人の姿が見られます。松田氏の今日あるは夫人の内助の功による處が多いといふ噂です。



（下）渡邊法相夫人。
芳子夫人は華族中でも平民的な方で、植木の手入れや盆栽の水迄女中さんの手を借らずにやつてゐられます。

大臣夫人の奥様振り（その二）



（上）井上藏相夫人。萬事床しい日本趣味の千代子夫人は特に生花にも御堪能でゐらつしやいます。

（右）宇垣陸相夫人。お子様中心のお睦しい御家庭丈けあつてお子様の事と云へば何から何迄貞子夫人の御心づくしの程がうかゞはれます。







姉妹品

ウテナクリーム

雪印（ウテナ・バニシング・クリーム）
月印（ウテナ・ハイゼニック・クリーム）
花印（ウテナ・コールド・クリーム）

——正價雪印六十錢、月印七十錢、花印一圓——

雪印は無脂肪乾性の美顔美白用！
月印は中性のお化粧下クリーム！
花印は油性の濃化粧用クリーム！
三種類揃つて大評判です。

東京本郷二丁目
ウテナ本舗
久保商店

專賣特許

ウテナ

色白く誰も美しくなる

十人が、百人が、萬人が、みんな色白く
誰でも美しくなる大評判の美白料『ウテナ』！

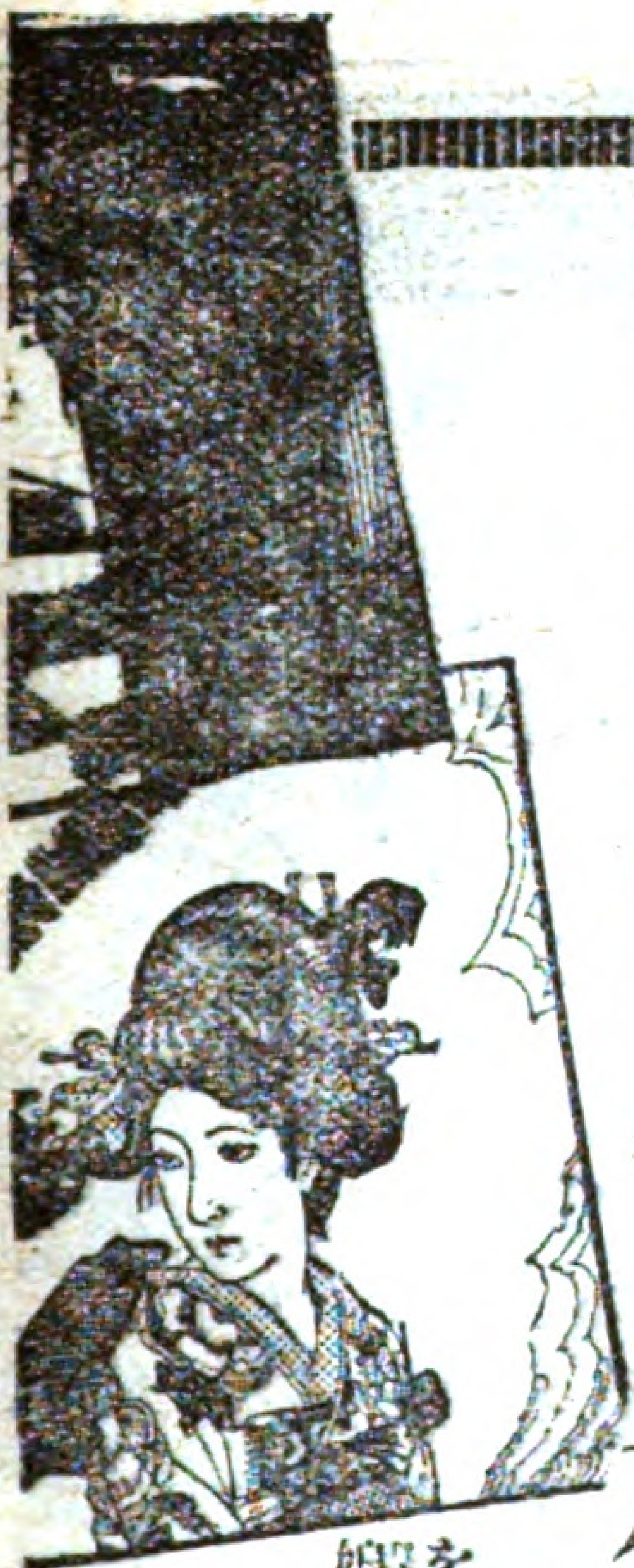
色の黒い方、赤黒い方、日ヤケ潮ヤケのした方、首筋の黒い方、垢ぬけせぬ方、あぶら顔荒性の方、ニキビ吹出物等のでき易い方、小皺を除きたい方、すべて色白くない方は、急いで『ウテナ』を愛用なさいませ、

全國の化粧品店、藥店、大百貨店にあります。

——『ウテナ』定價一圓、二圓、三圓。本社代理部でも取次ます。

佐々木味津三先生大傑作

右門捕物帖



右門通れば窓から覗く
娘ばかりか内儀まで
着流し反身の伊達姿

江戸中の女からヤイノ〱と騒がれた
水の垂れるやうな美男

キリ、と締つた唇、色白で高い鼻、素肌へ結城紬に茶無地の博多帶、蠟色鞘細身の大小を落し差し――兩脇に快男児傳六と、投繩の名人善光寺辰を隨へて懷手反身といふ伊達姿娘から内儀まで、ワイノ〱騒がれる近藤右門、人呼んでむつゝり右門といふ。

而も一度奮ひ起てば電光石火の奇智早業
どんな事件もズバリ〱と解決する快手腕



右門が甦つたといへば如何な悪漢も震へ上る。——顔はよし、男はよし、江戸中の人氣を一人で背負つて立つた名人右門が、捕物中の十五大事件

可憐袂を絞る悲壯事件、ゾツとする様な奇怪事件

妖艶胸も高鳴る美人の犯罪等、等、無類滅法面白い！

ズバ拔けて面白い本だ！
珍しい傑作だ、諸家大激賞

◎警視廳福岡警衛課長曰く『私は右門捕物帖の愛讀者です。誠に面白い。この物語の作者は一流の作家であり一流の犯罪學者であるらしい』

◎村松梢風氏曰く『私は夙に佐々木氏に敬服してゐたが、今度の右門には全く魅せられてしまつた。日本探偵小説界の大傑作だ』

◎三上於菟吉氏曰く『右門は僕の愛讀々物たる一篇々々と殆ど測るべからざる光採を呈してゐる。實にスバラシイ讀物だ』

大衆文學中最高の大名作

一度讀み初めたらトテモ手放せぬ。日本空前の捕物文學、男も女もゼヒ御一讀を乞ふ

◎四六判美本函入 挿繪豐富挿入 定價壹圓八十錢 送料十二錢

東京本郷駒込坂下 大日本雄辯會講談社發行 振替東京三九三〇

内容目次



小春日和

赤松月船

ほかほか　小春のお庭です。
ギイコロ　音がいたします。
それは　となりの　ぶらんこです。

ギイコロ　音がするたびに
青い帽子がのぞきます。
大きく振つて　のぞきます。

ピアノが　ポンポン鳴つてます。
それはおうちの　離家から。
しづかな　秋の曲譜です。

ほかほか　小春の日和です。
ほかほか　仔猫と母猫が
うつとり　見てます、聞いてます。

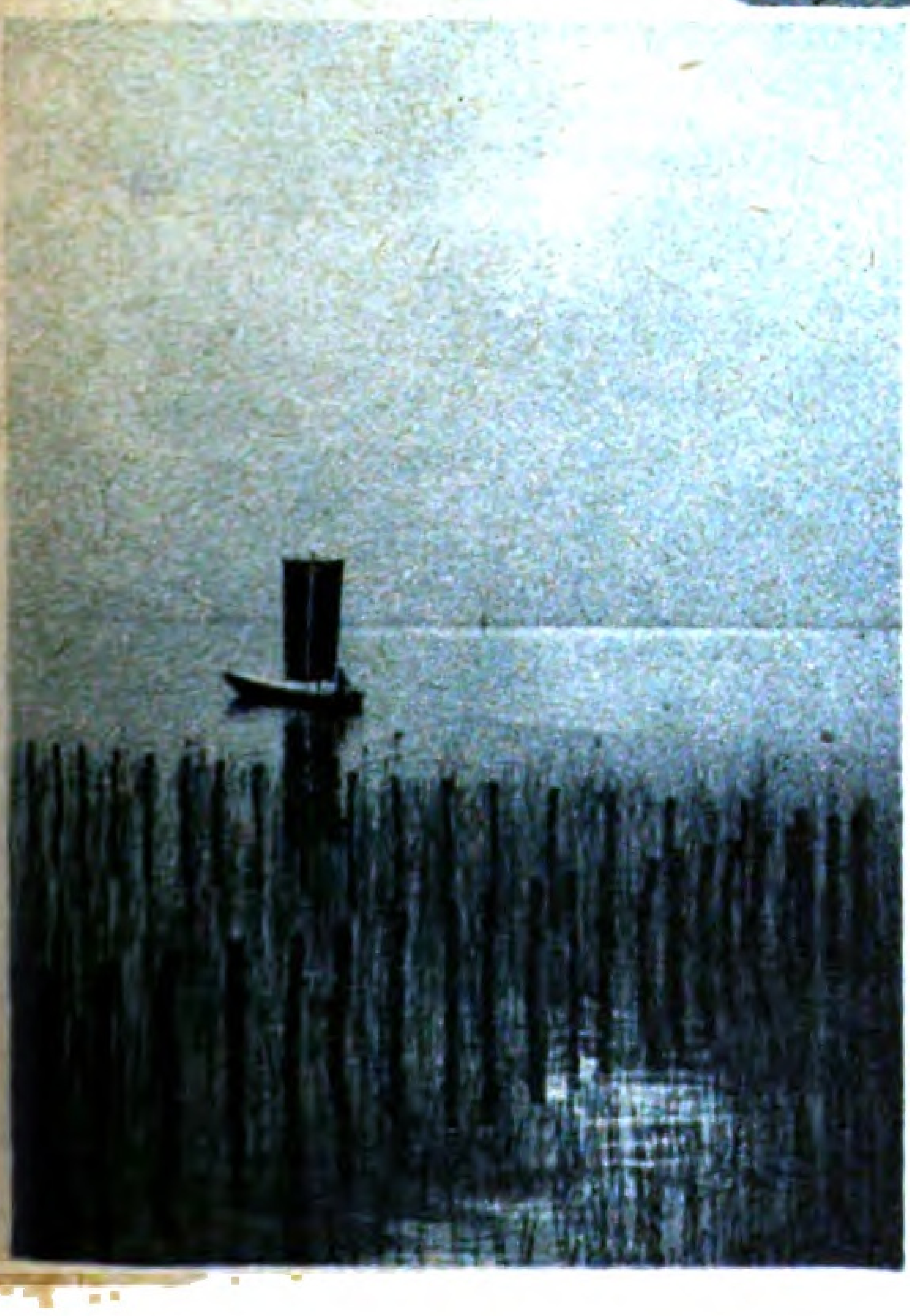


櫂(かい)あげて休(やす)む舟(ふね)の月見(つきみ)かな

― 如柳

花(はな)守は野(の)守(もり)に劣(おと)るけふの月(つき)

― 蕪村



三題



名月や畳の上に松の影　其角



京都　黒川翠山　撮影

覇權は
秋の運動界を飾る



（下）法政 若林投手

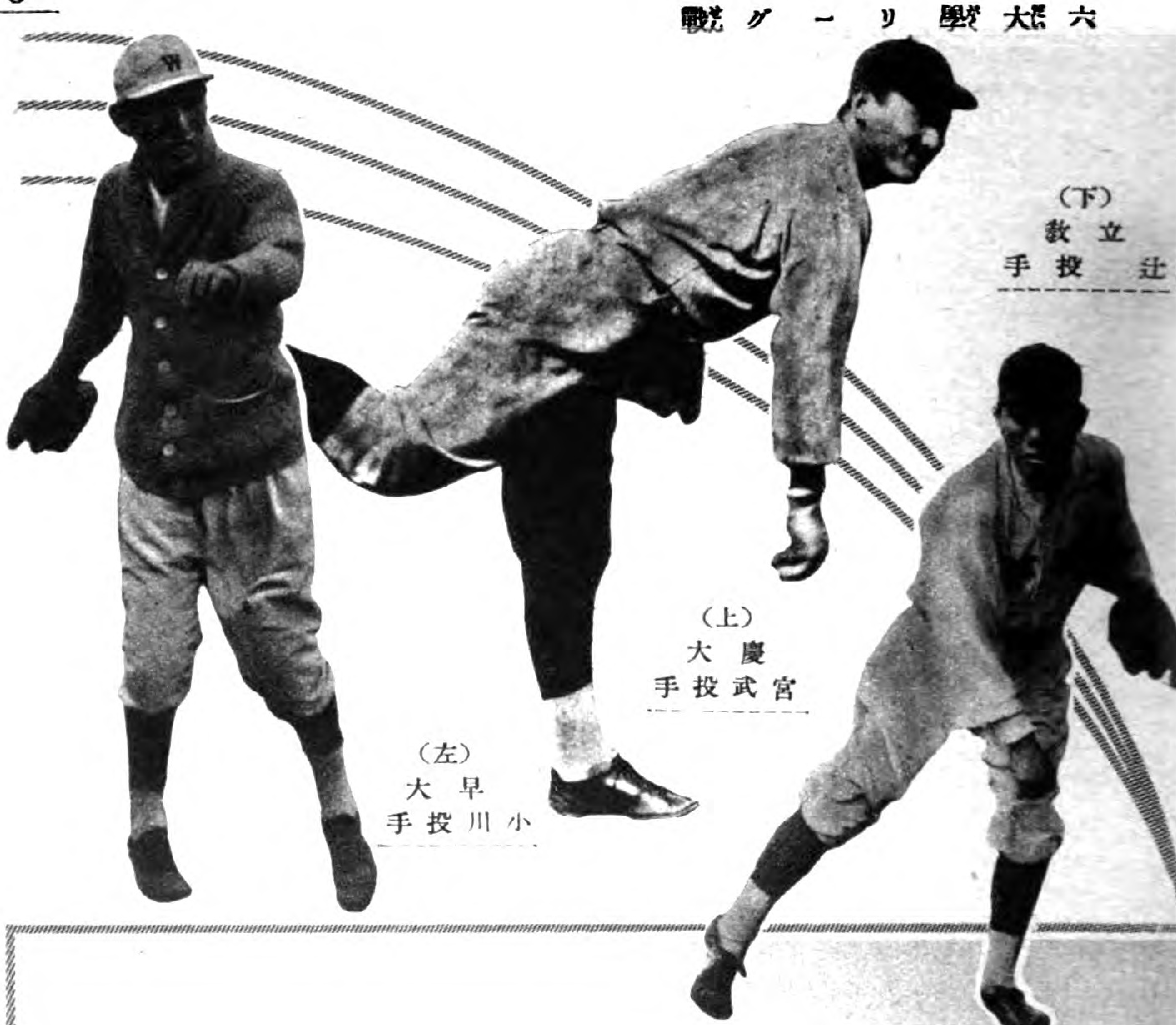
（上）帝大 遠藤投手

（右）明大 中村投手

數萬觀衆の熱狂する神宮球場の壯觀

何處に？

六大學リーグ戰



（左）早大 小川投手

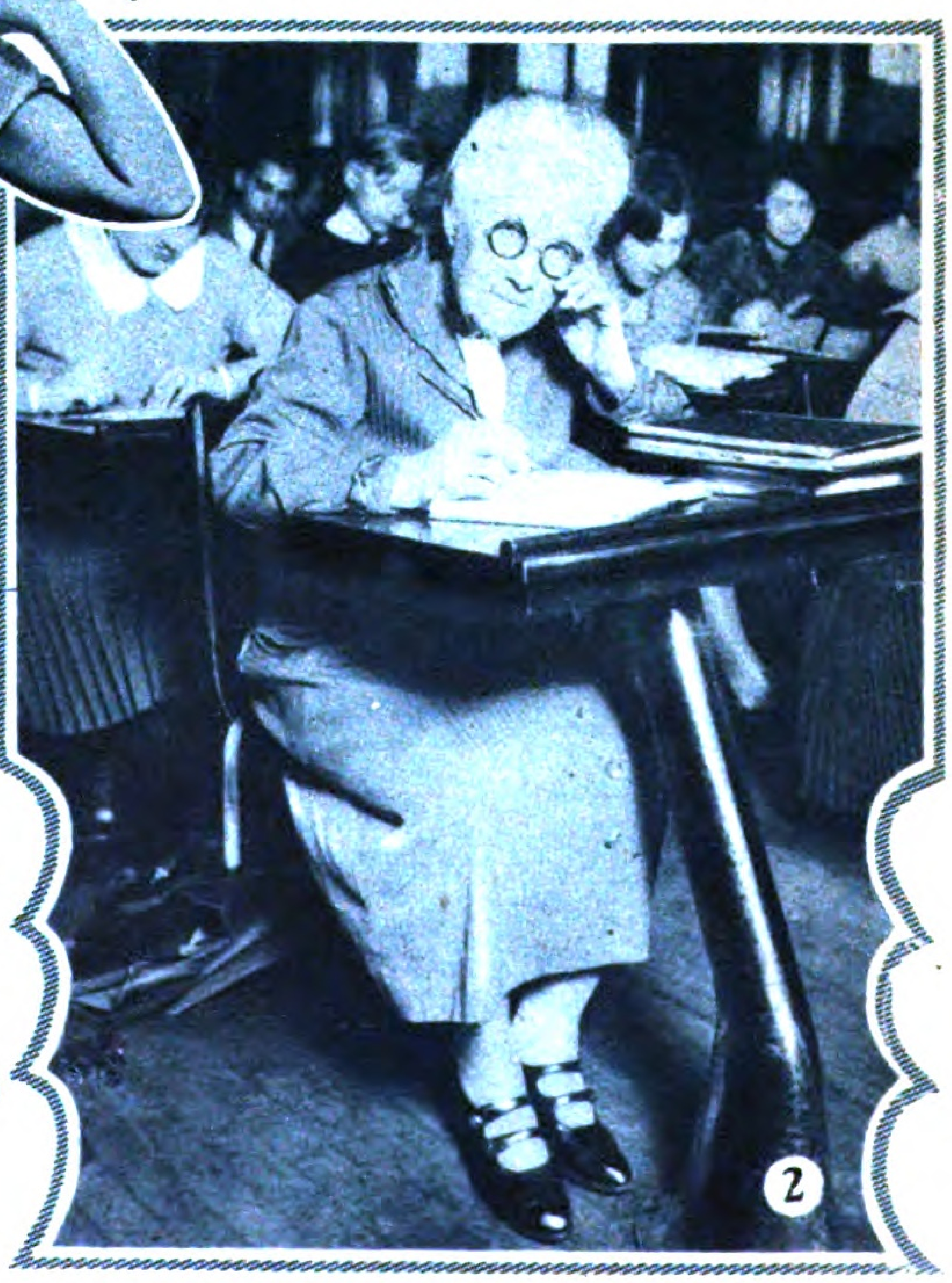
（上）慶大 宮武投手

（下）立教 辻投手





(1)英國の下院の前で勞働黨に屬する婦人代議士が勢揃ひをしてゐる處です。前列中央は勞働大臣ボンドフイルド女史。



(2)アリス夫人は米國シカゴの女學生で驚く勿れ今年八十二歲の高齡です。時世におくれまいと一生懸命勉強してゐるその意氣は評判になつてゐます。



(3)どうです此の素晴らしい體格は？米國砲丸投の女流選手マクドナルド孃のフオームです。

(4)角帽にガウンといふ隆とした此の婦人達は倫敦大學の卒業式から歸るホヤ〳〵の女學士です。(5)獨逸にも蓮葉女は居ると見えてこれは美人のマネキンガールからなる音樂隊であります。



5



4

(7)外國の婦人服は一つとして×

×同じ型のものがないと云はれる位ですが、これは佛蘭西婦人の流行服の一つ△



7

△で黒地の縮緬に薔薇模様のついたものです。

(6)今年米國で國際美人競走の行はれた時見事一等に當選し世界一の美人と折紙つけられたオーストリアのゴルダービーター孃です。



6





文壇の耆宿武者小路實篤氏が特にキングの爲に多年の蘊蓄を傾けて書かれた力作『二宮尊德』は愈ゝ本號より連載される事になりました。(上)は散步姿の武者小路氏。(下)はその挿繪に會心の妙筆を振はれる尾竹竹坡畫伯。背後は同夫人。兩側は令息。





文壇の耆宿武者小路實篤氏が特にキングの爲に多年の蘊蓄を傾けて書かれた力作『二宮尊德』は愈よ本號より連載される事になりました。(上)は散歩姿の武者小路氏。(下)はその挿繪に會心の妙筆を振はれる尾竹竹坡畫伯。背後は同夫人。兩側は令息。

見よ！名篇大

講談倶樂部

吉川英治先生苦心の大傑作

處女爪占師

人の指先を見た丈て、見事に運命を豫言する、而も頗る美人の女爪占師！彼女の美貌を恐ふ者と、一命をつけねらふ刺客とは、夜となく晝となくその身邊に迫つた。大膽か無謀か、彼女は目覺むるはかりに着飾つて、その誰にも美しい微笑を與へ、その誰とも勇敢に闘つた――

淫蕩極りなき德川大奥、色餓鬼の老中奸臣、

血に餓ゑた志士浪人、悲戀に泣く美男美女……

見よ！仇な女占師の出現を發端に、劍光閃き、情痴渦巻く驚くべき寛永大秘史!!

凄艶、怪奇、壯烈！面白いこと天下無比!!







（山本有三先生）

山本有三先生の長篇讀切大戲曲

盲目の弟

―（菊五郎丈上演台本）

わが劇作家中隨一の巨匠が年餘の苦心と努力を傾けた大雄篇！聖愛の兄に不具な弟を配し、地上に於ける最も莊嚴なる肉親愛の極致を描く、一讀萬人の肺腑を抉る感激の物語！

幕末秘史

小栗上野の首……

―前田曙山

怪傑か偉傑か？幕末謎の大人物として勝海舟と併稱される小栗上野が官軍に捕はれて處刑される場面より筆を起した悲壯痛切の大秘錄!!



ぢ疾は世界人類の苦惱！

かくして速かに根絶を圖れ

權威ある自宅療法の推奬

東京肛門病院長　谷　泉　述

世界人類の六十パーセントは痔疾患者であるといふ、余の見聞する處に於ても特に印度支那方面の如きは殆ど全部の人々が大なり小なり痔疾に呻吟してゐる有樣である。痔疾！この恐怖すべき肛門病こそ第二の亡國病として今更ながら戰慄に價する。しかして本症は、初期の裡非常な苦痛のない爲、患者は迂濶にも之を等閑に附する傾向多く、殊に婦人の如きは場所柄だけに之を隱ぺいするの風があり、爲に病魔は情容赦もあらばこそ、骨肉細胞の深きに入り、亦肺、肋膜、心臟病等の餘病併發の憂目を見、名狀すべからざる苦悶と慘狀を齎らすのである。

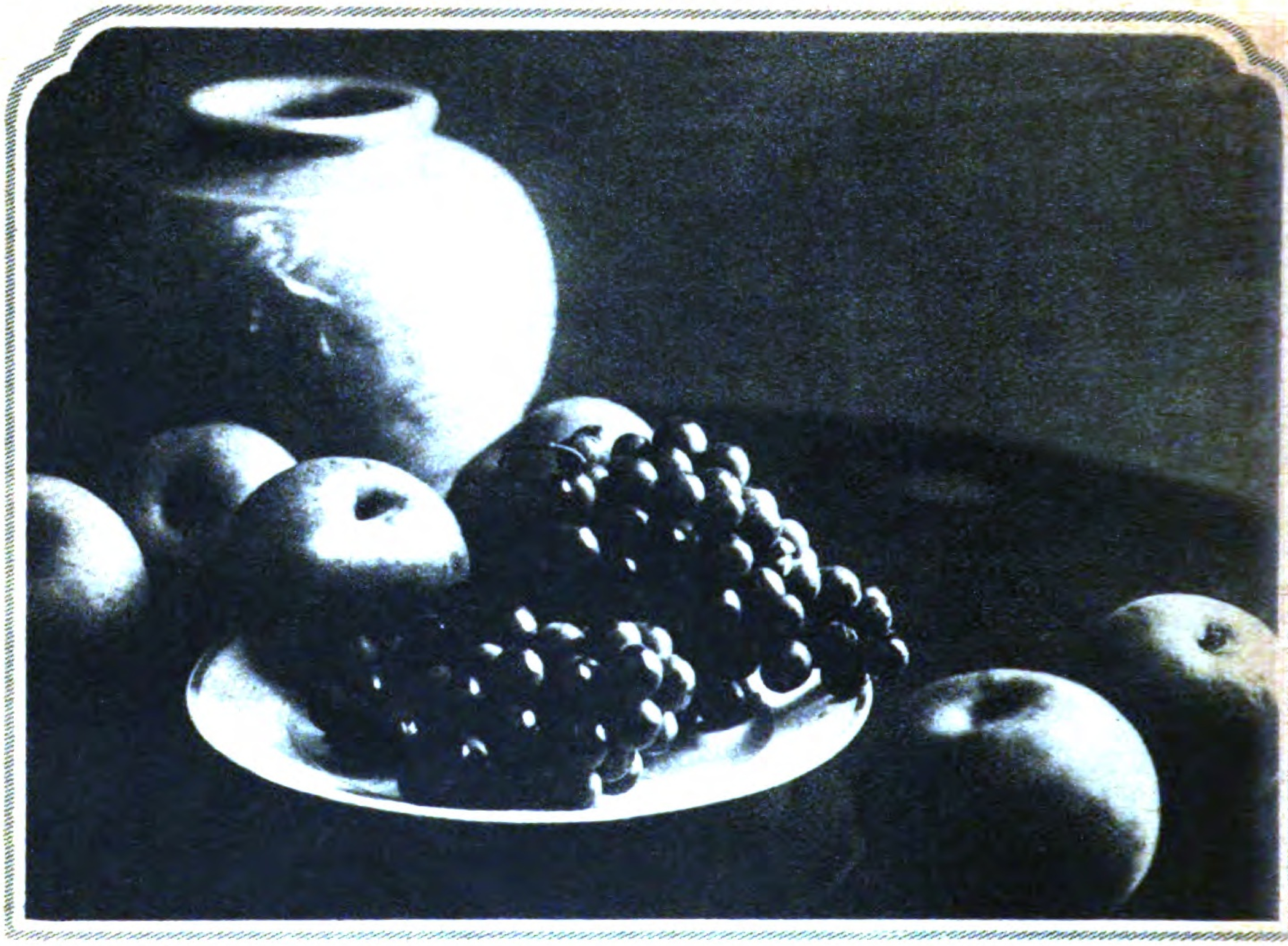
痔疾！痔疾！余は東京肛門病院にて多くの痔疾患者を診療するの時、常に念頭を離れざりしものは、種々なる事情の爲、責任ある醫師の治療出來ざる人、或は治療を嫌ふ人を如何にして救濟するかの問題であつた。即ち權威ある自宅療法藥の創製こそ！この氣の毒なる人々を救ふ最大の道ではないか！余は之を信じ、余の三十有餘年の實際的經驗と更に加ふるにドクトル・メヂチーネ谷岩太氏の最新學說を掛酌し、價格を超越せる高貴藥を配して、痔疾ヒットを江湖に送つたのである。

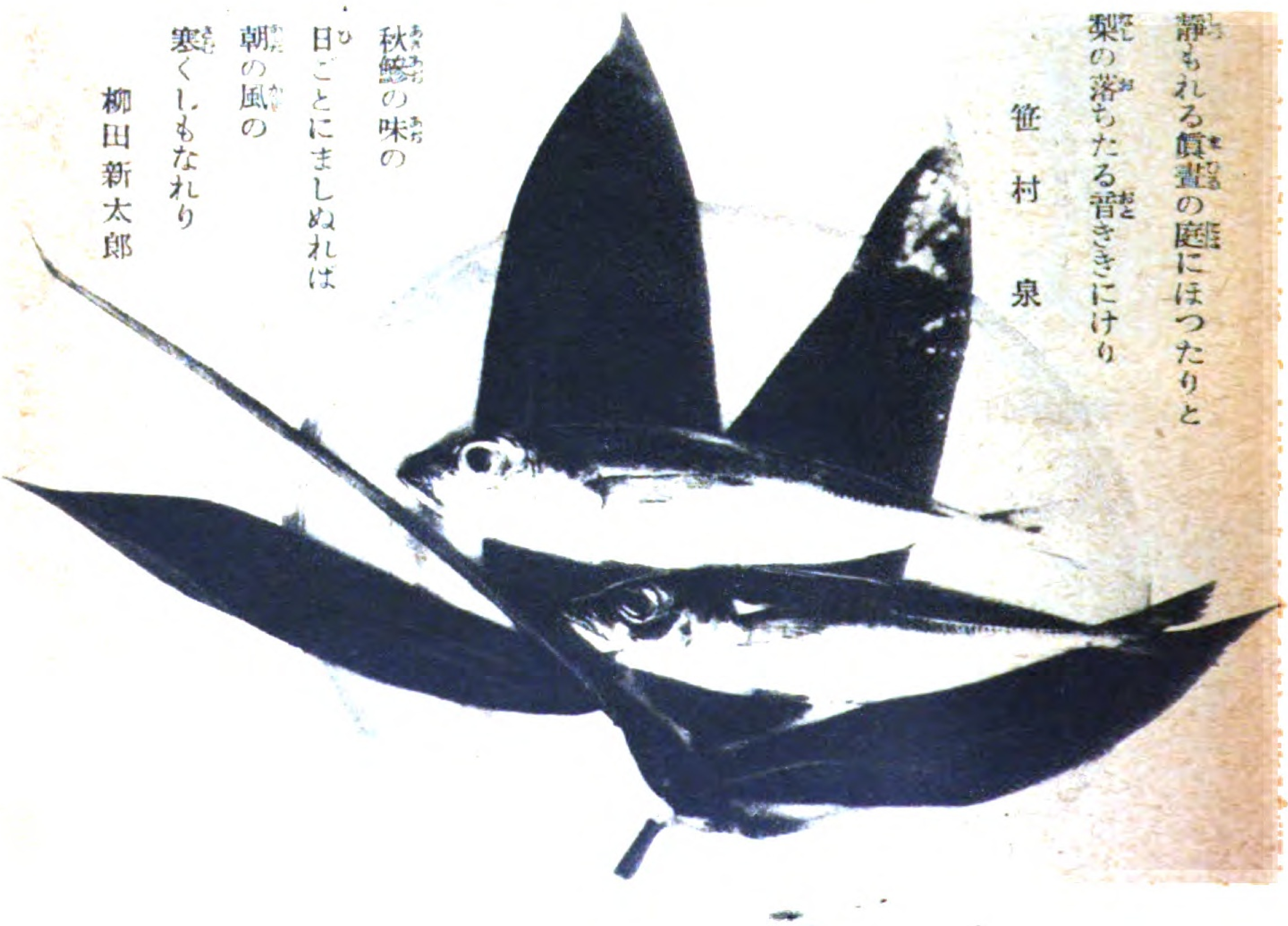
ヒットは含有各藥物の完全なる效果を速進せしむべく、最も愼重に配劑され、從つてその鎭痛、消炎、防腐、殺菌、止血、吸收等の實際的治療效果を最も安全に、最も迅速に擧げ得るのであり、この點斷然一般市場の痔疾藥と選を異にしてゐる。かくてヒットは手術を欲せざる人、できざる人等に眞に理想の自宅療法藥として推奬するを憚らないのである。

世に痔疾患者多く、痔疾藥亦枚擧に暇なき程であるが、醫藥をその儘賣藥とせるものは蓋しヒットを以て最初とする。江湖幾萬の痔持に惱む方々よ！宣傳のみを生命とする舊式賣藥や家傳妙藥等と稱する駄藥に迷はず、速かにヒットによつて恐るべき肛門病を根本より掃蕩せられよ！初期輕症の人は勿論、いかなる重症者も決して悲觀は無用である。

（ヒットは三種あり。挿入、塗布、內服、挿入は內痔核、痔出血、內痔瘻等に適し、塗布は痒痔、裂痔、脫肛、痔核、痔瘻等の外部症狀に良し、內服は一般痔疾を輕快ならしむるの效著大なり。以上三種を以ていかなる痔疾と雖自宅で自分獨りで安全に治療し得るのである、

ヒット藥價、挿入藥、一圓、二圓、五圓、十圓、塗布、五〇錢、一圓、二圓、五圓、十圓、內服、一圓、二圓、五圓、尙治療速進に**ヒット式痔バンド**あり。一具一圓。全國到る處の各藥店にあり。發賣元は東京市銀座新肴町八（振替口座東京七二二二）大阪市西區新町通一ノ二（振替口座大阪一〇六）丁子堂藥房（**誌名記入御申込み次第說明書進呈**）





静もれる眞晝の庭にほつたりと
梨の落ちたる音ききにけり

笹　村　泉

秋鰺の味の
日ごとにましぬれば
朝の風の
寒くしもなれり

柳田新太郎

どれが一番



國の母產れた文を抱きあるき

子を持つて近所の犬の名を覺え

井戸端へ子の行く夢に母の汗

可愛いでせう？



足の行

(1)文明の中心は足に移る？と云へば如何にも突飛×の様だが、足を見ると一番手取り早く世相が解る。先づ電車の中でもミツマメホールでも眼にチラつくものは人絹の靴下に包んだ女の雄大な足だ。健康美の表現か、それとも女性解放の凱歌か、何にしても木履の時代は去つた。

(2)試験地獄、就職地獄に悩まされ、素直に歩かなくなつたのは學生の足だ。今日は活動、明日はカフェーとぐらついた氣持は落着かない足取りによく現はれてゐる。



(3)『何でいく〳〵』といくら力んで見ても流石時勢に叶はない。から圓タクに跋扈されては人力車は淋れるばかり。トボ〳〵歩く車夫君の足には孤城落日の影がある。(4)モガ中のモガは洋服などで我慢出來ず、銀ブラには必ず支那服。そして曰く『ワタシユニツポジアリマシユ』だとはいやぢやありませんか。

(7)『何はサテおき此の試合を見逃して

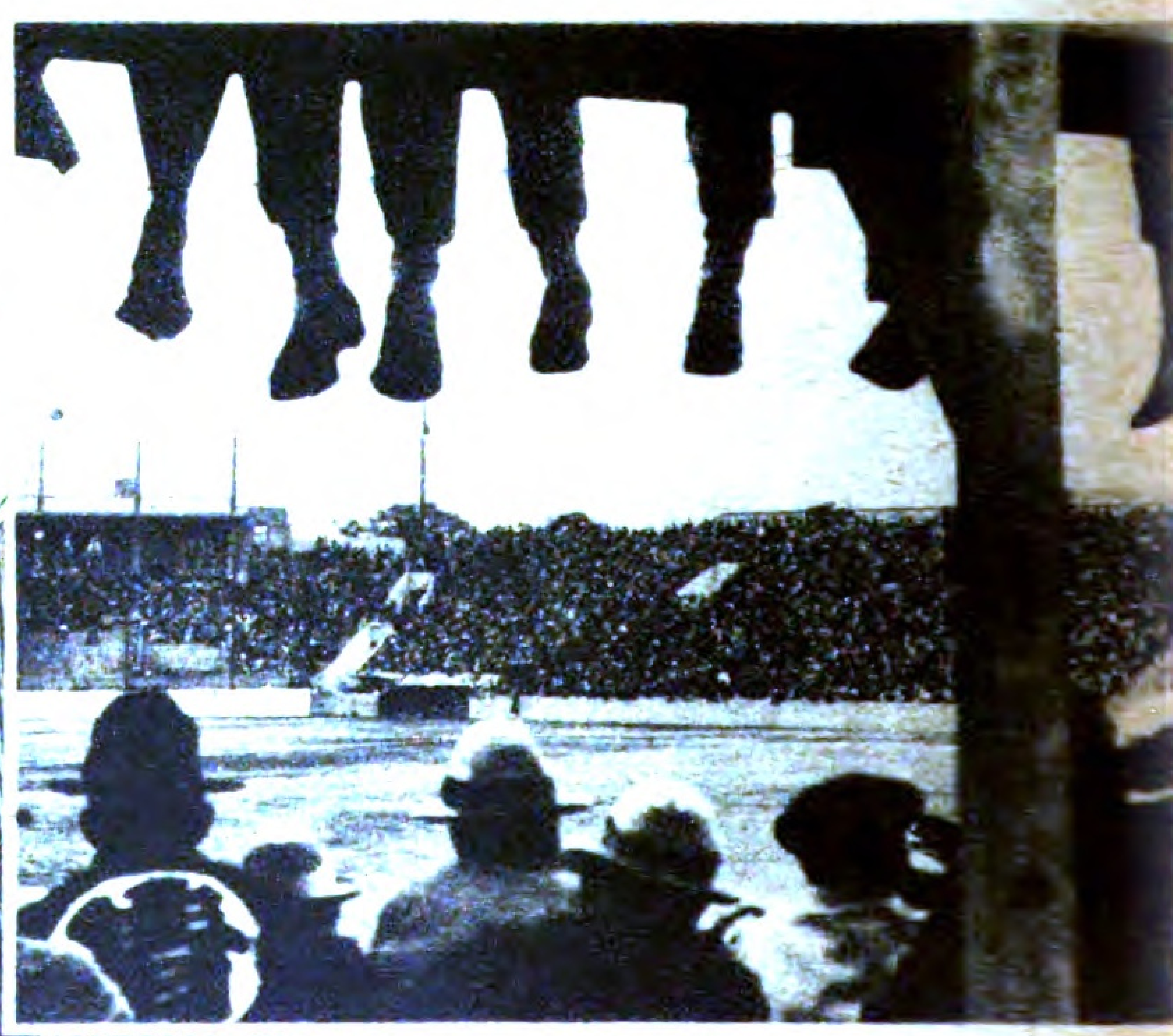
(6)すし屋の暖簾の下から覗く足は下品の様でも江戸情調の一つだ。笑はれない様にお鮨の立食が出來れば一寸まあ通人。

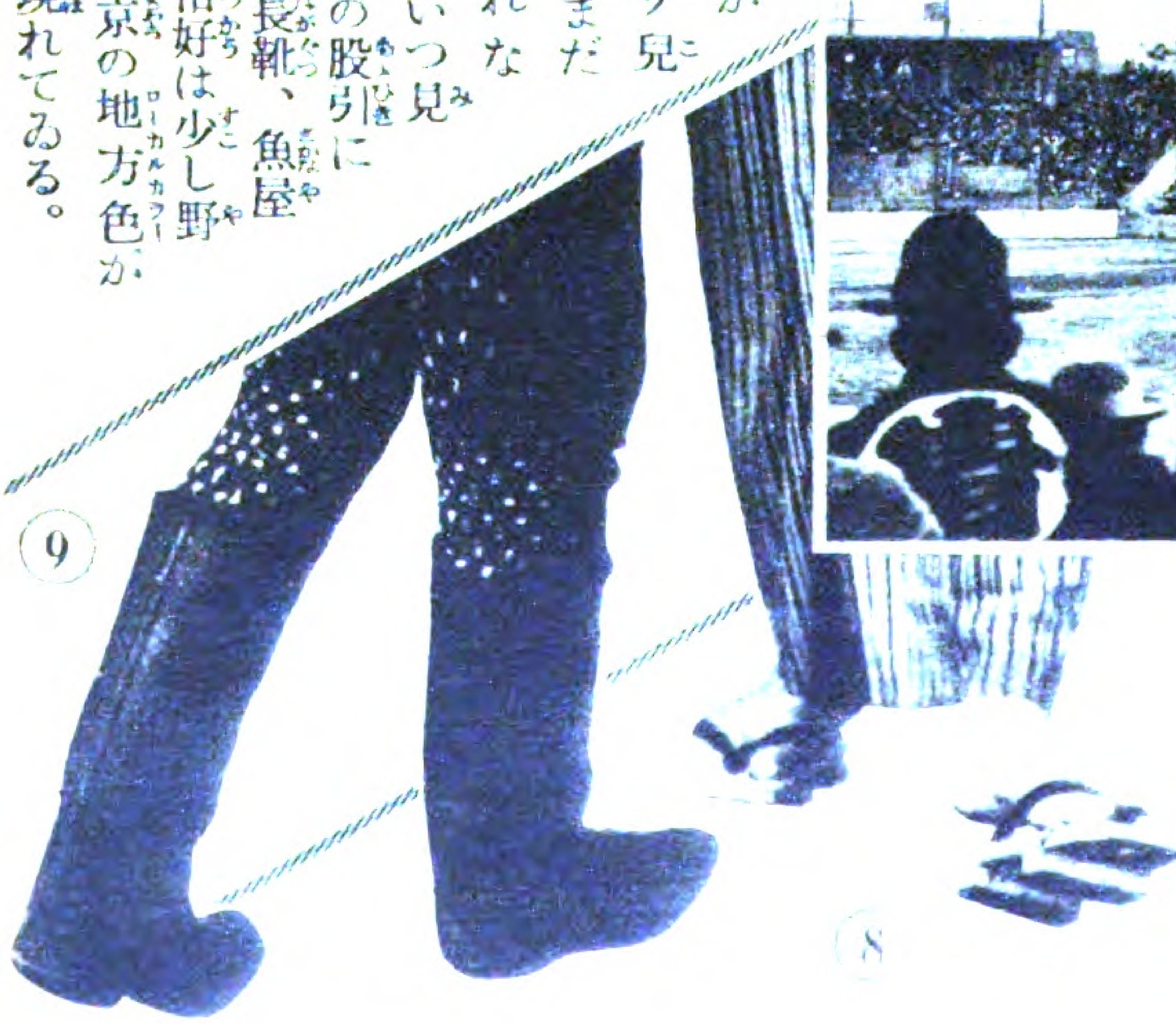




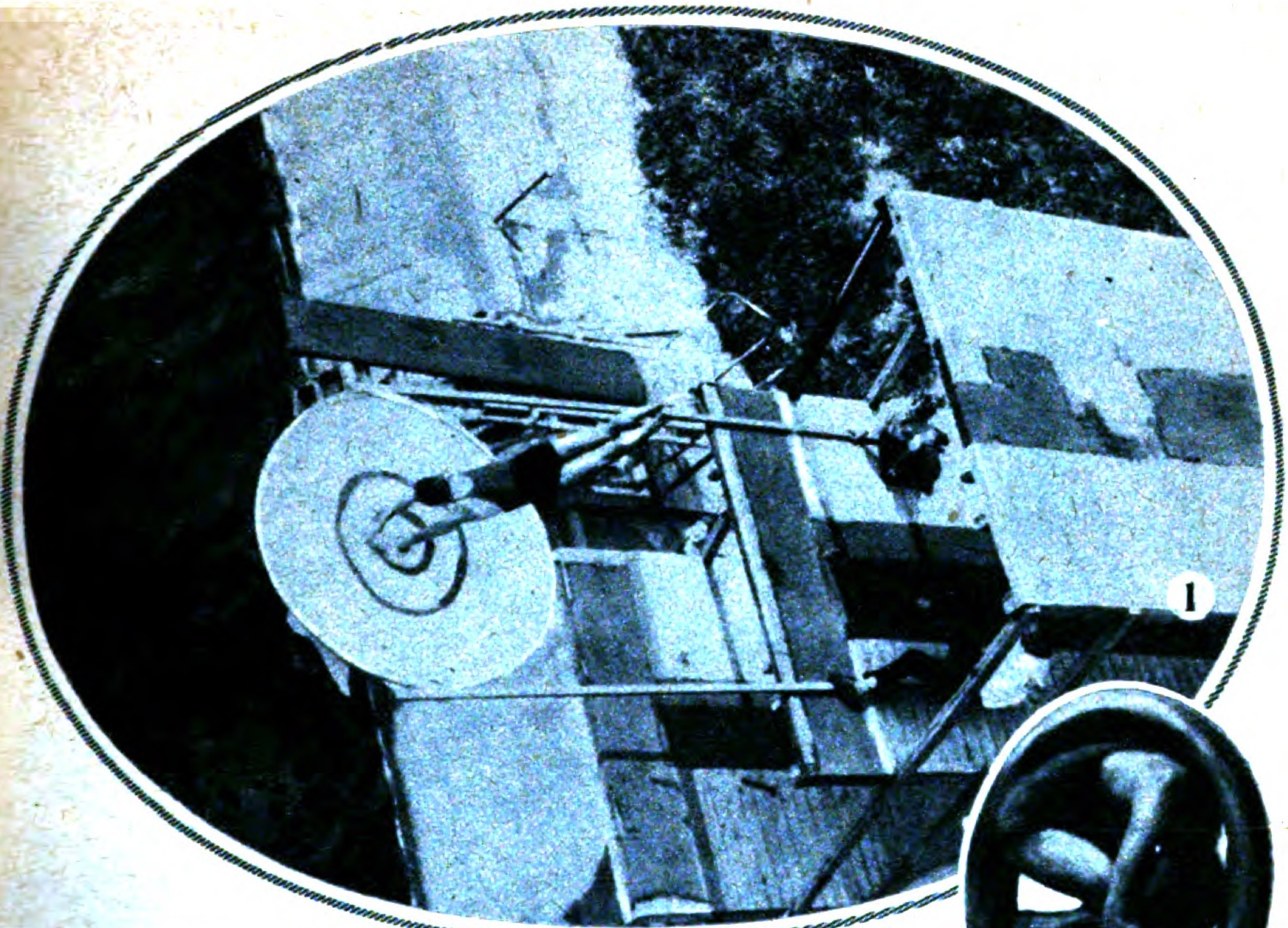
(5)キリギリスの様な細い足、南京袋の様な太いズボン。モダンボーイの内容と外觀はその足自體が物語つてゐるのかも知れない。(8)朝湯の歸りか輕く下駄を引かけたまゝ傳法肌の歩き振り、玉突きにでも消えるかと思ふと、屋根はトタンでも兎に角お稲荷×

×さんの前で足がとまる。江戸ッ兒氣質はまだすたれない。(9)いつ見ても絆の股引にゴムの長靴、魚屋さんの恰好は少し野暮でも東京の地方色が一番よく現れてゐる。

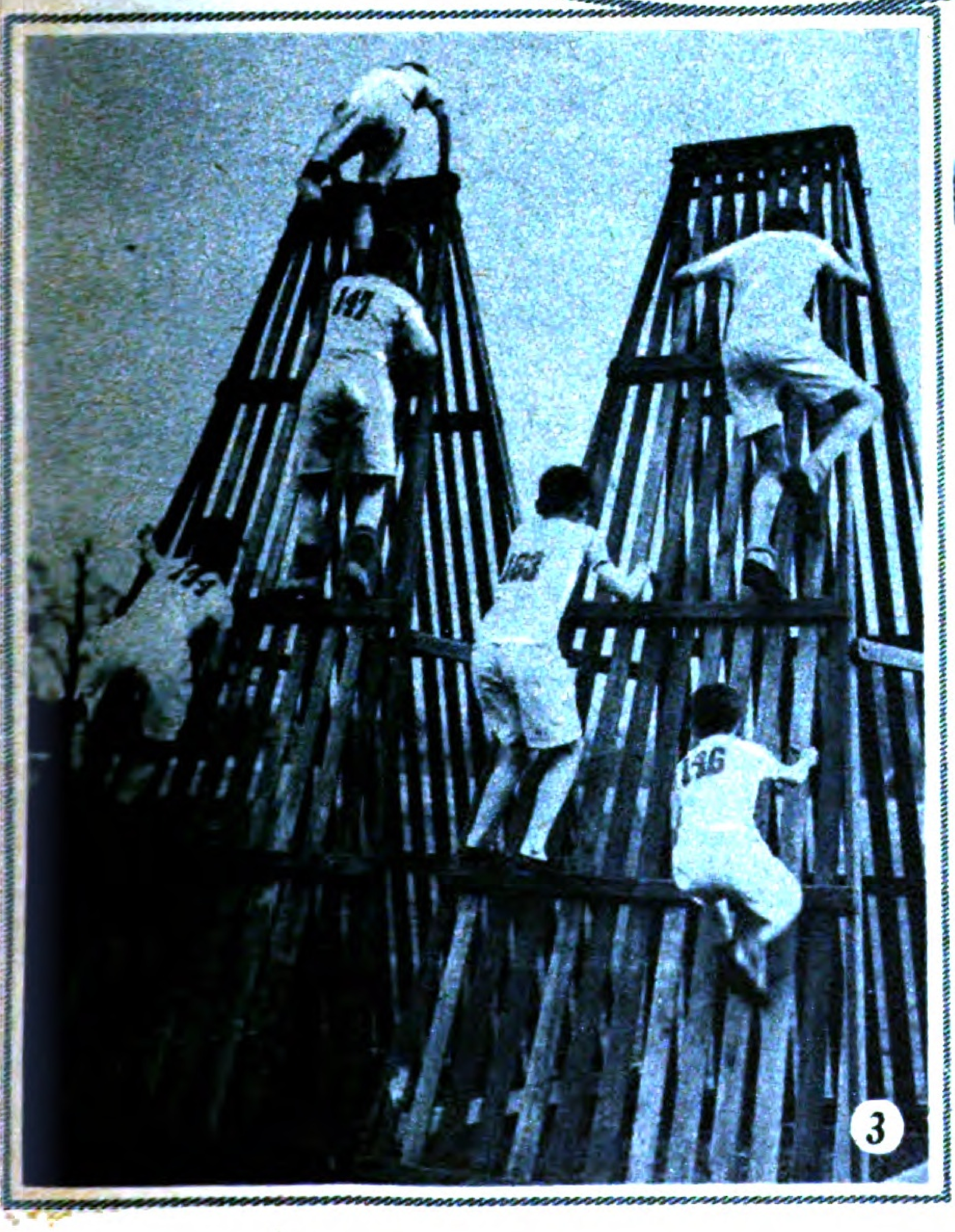




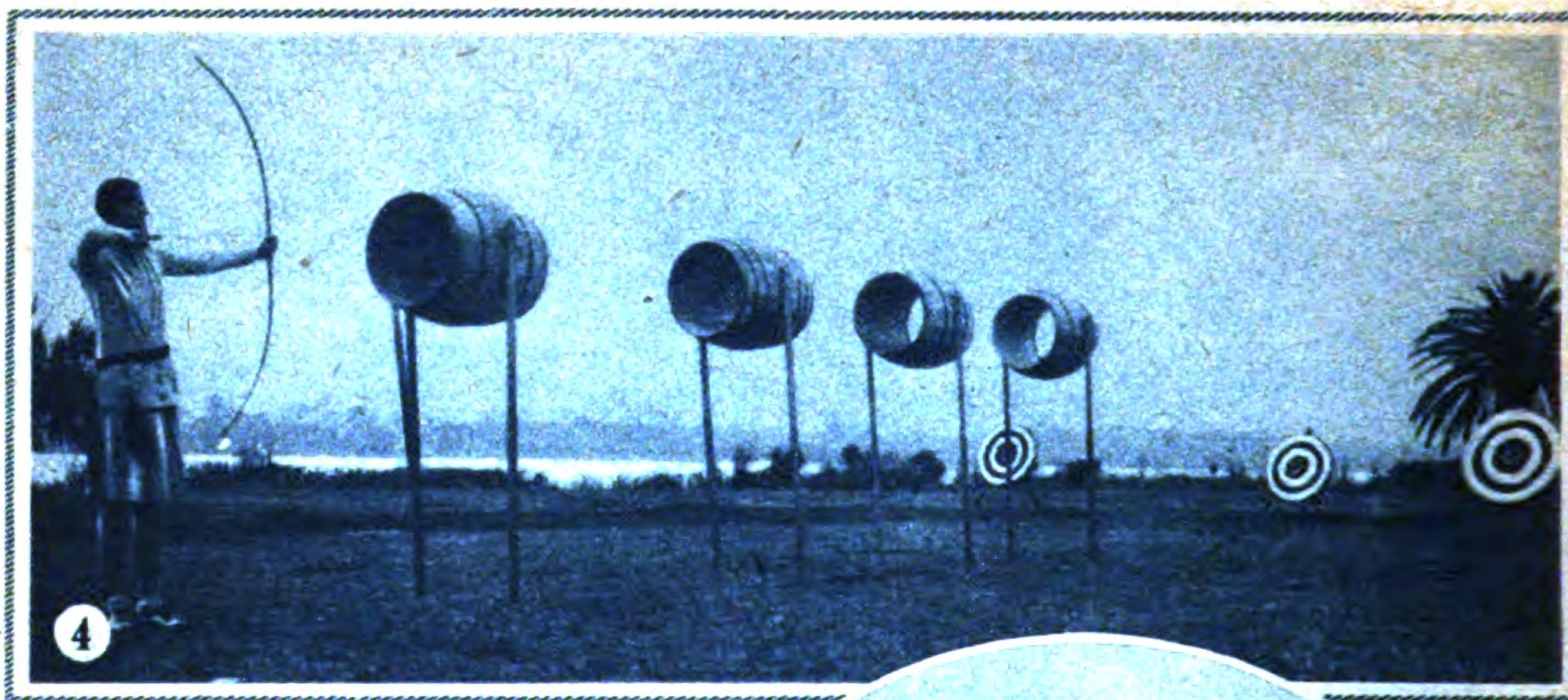
は」と學校も會社も商賣もそつちのけ。世は正に早慶野球戰時代だ。へちまの様にブラ下つてゐる足も近代生活の一産物である。



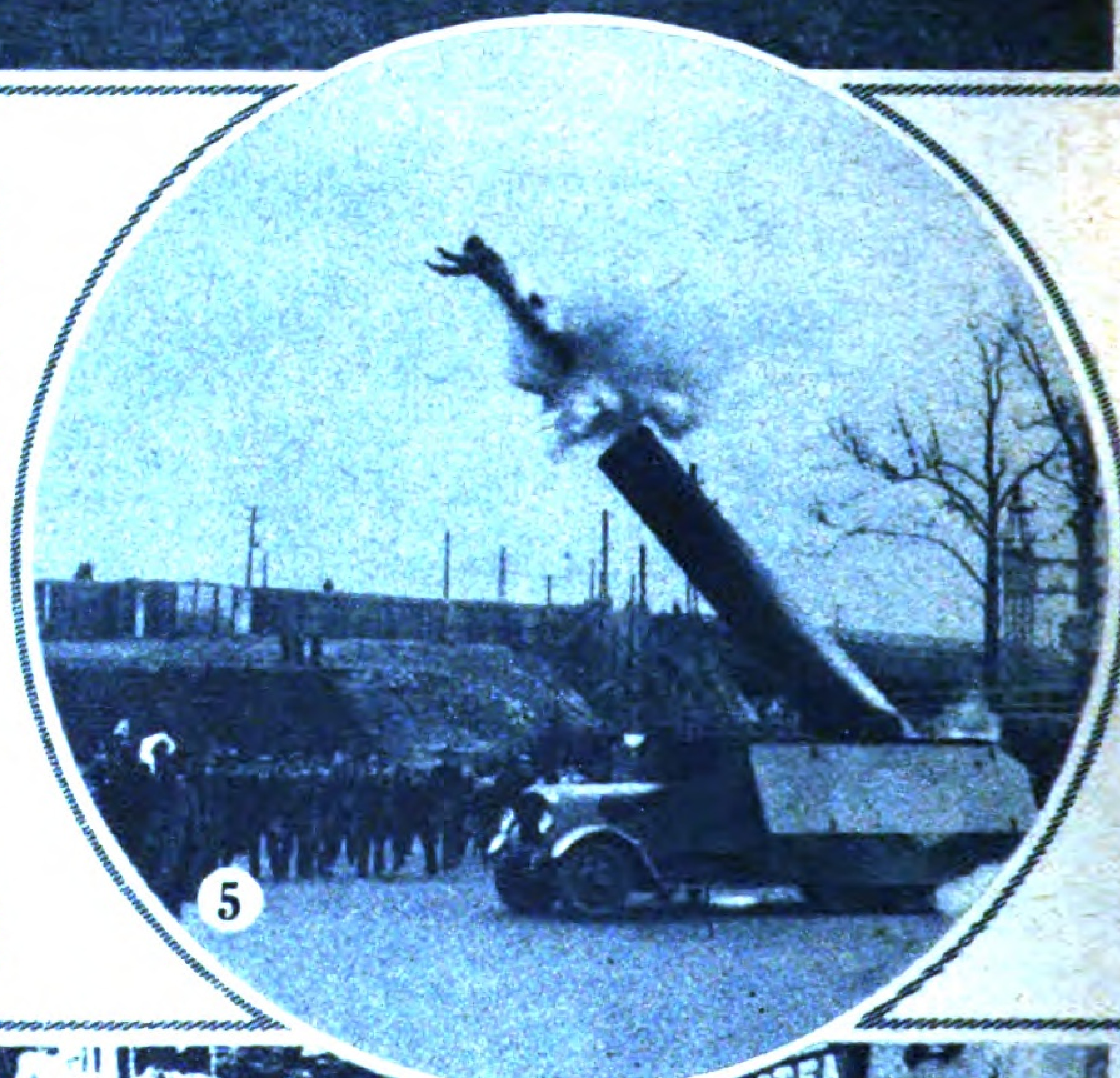


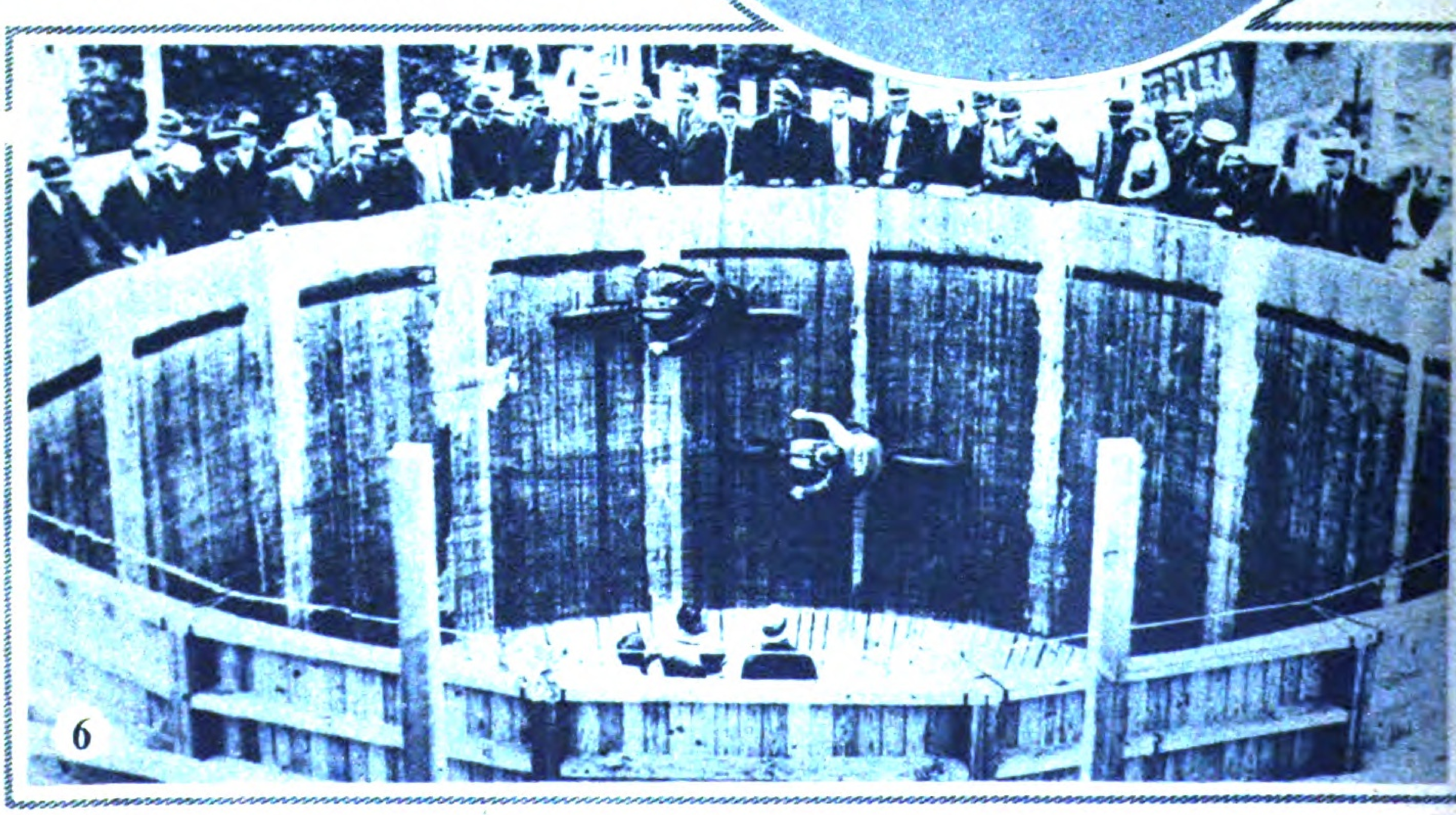


(1)『サテ何だらう？』此の寫眞には誰も一寸小首をひねりませう。それも道理米國でも斬新な『射的抜けダイビング』といふ水泳競技です。五十尺の櫓の上から下の段の的の中央をスッポリ突抜けて水に飛込むといふきはどい藝當。(2)も變つた飛込の一つ、ゴムのタイヤと一緒にくる〳〵廻つてドブン！　(3)奇妙な梯子をドン〳〵登る。これは倫敦マーサース小學校の運動會で呼物となつた障碍物競爭の光景。



(4)滿月の樣に弓を引きしぼりビールの空樽四つを貫いて發矢！　と的を射るの妙技、射手は米國のエリザベス孃、矢は普通虹形に飛んで行くので中々の手練が要る。(5)人間が大砲の彈となつて天國へ出發。イヤこれはお笑ひ沙汰ではありません。紐育の或るサーカス團で演じた決死の冒險。(6)これは奇怪！　二臺のオートバイは眞直に立つた壁を横ざまに走つてゐる。まるでやもりの樣だ。英國で評判の『死の壁面』と題する曲藝。





お化けでせうか？

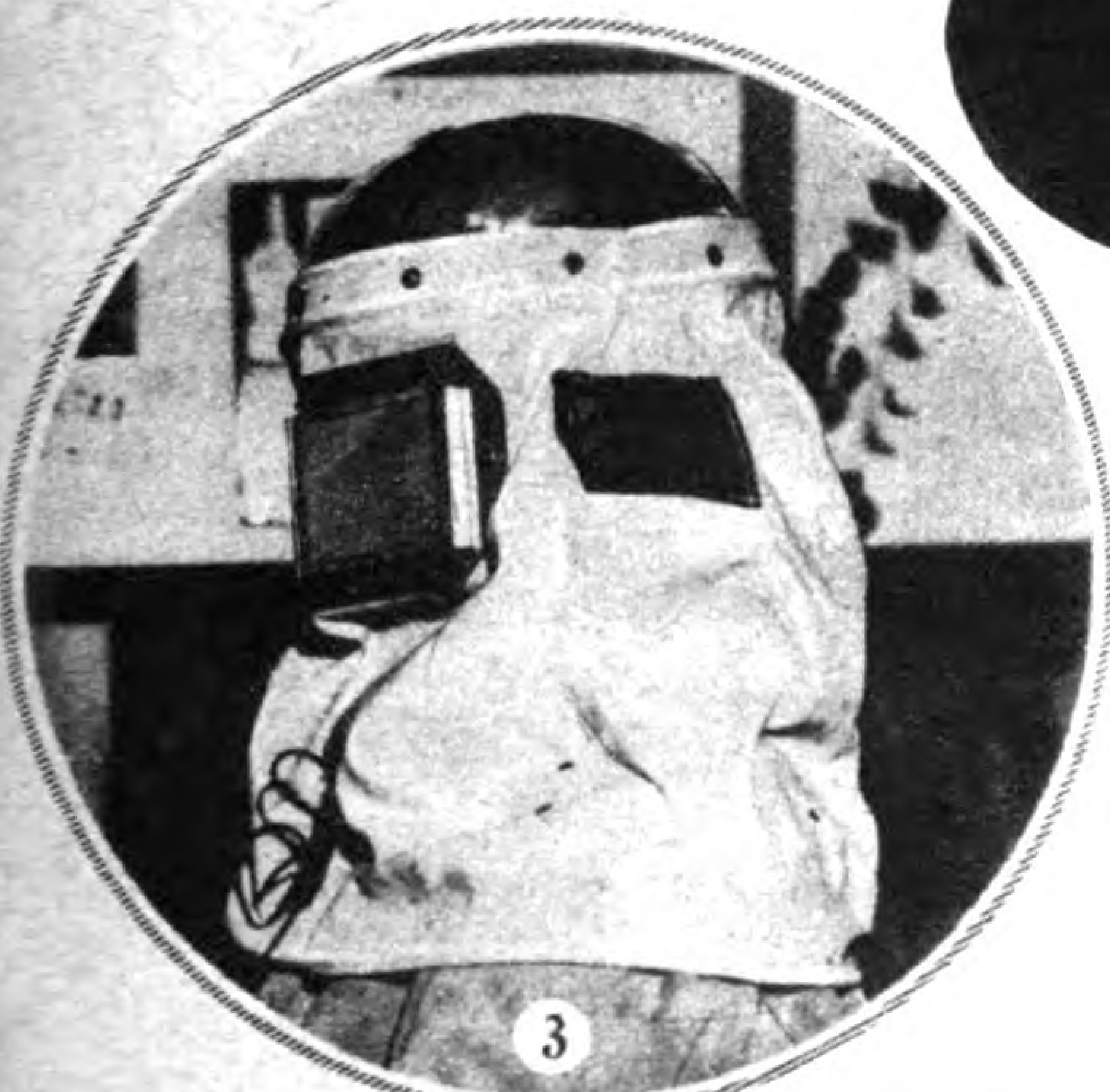
茲に掲げたのはみんな科學の進歩から生れたお化け？です。(1)伯林のおひろめ屋。埃よけのマスクに白い上衣も道は科學の國らしくあります。(2)最新式勞働者用マスク。主に製鐵工場の職工が使ふものです。(3)米國で發明された消防用の防火服で石綿で出來たものです。(4)露國農婦の用ふる瓦斯マスク。呼吸器病豫防のためださうです。



1



2



3



4

光榮 今上陛下皇太子殿下の御砌り御嘉納の光榮を賜ふ天下に類を

「絶した効力!! 驚くべき決定的事實!!」

信州鹽澤家三百年來の家傳

赤蝮蛇の絞り汁と高山靈草の合釀

精力飲料

養命酒

=腦神經衰弱の人、肺ろくまく弱き人、虚弱體質病後衰弱の人=

=慢性胃腸病の人、其の他難病に苦しむ方々の一大福音=

▲養命酒の由來と獨特の製法

信州天龍峽の鹽澤家は頼朝時代からの土豪であつた素封舊家で現在現職海軍少將も出て居るが同家で祖先が慶長年間大雪の中で由ある老旅人を助け、其の恩返しにとて傳授された秘法により、天龍峽赤石嶽の赤蝮蛇の活性絞り汁に、珍しい高山藥草七種を加へて藥酒を造り込み倉の中へ長く貯へて置くと海拔三千尺高地の風土氣候により幾年もの間に天然自然に工合よく相和し相熟し、其の交互作用により幾層倍の靈能を發揮する黄金色に澄んだ貴重靈酒を得る。是が即ち天下一品の有名な養命酒であつて香氣高尚の葡萄酒より風味よく、アルコール分少く瓶の中に蝮蛇の形はなく女子供も喜んで飲むが而も精分極めて強く小盃に、一二杯宛でメキ〳〵效く百藥效なき諸病人でも不思議に身體の眞底から強き回復力を生じ病に打勝ちズン〳〵健康になり虚弱の人や衰弱の人は見替へる樣に血色よく丈夫になる 又男女精力消耗衰弱に靈能著しく人生無上の幸福を增進し老人でも若めき血氣盛りに若返る



高山靈草七種發見
養命酒創始者
十八代前の鹽澤宗閑

◆藥以上の靈能

- ●神經衰弱の人
- ●虚弱貧血の人
- ●精力喪失の人
- ●肺病肋膜の人
- ●心臟胃弱の人
- ●性的衰弱の人
- ●老衰血管の人
- ●婦人諸病の人
- ●感覺缺乏の人
- ●病氣衰弱の人

無代進呈

「見本瓶詰」と說明書御希望の方はハガキで發賣元へ御申込下さい



養命酒實物の縮寫

定價 一瓶(約三週間分)金三圓
徳用(約五週間分)金四圓
送料 内地三十五錢 新領土六十五錢 代金引替實費

阪口醫學博士 横森醫學博士 御賞讚

◎御希望の方は東京市内各デパート一流藥店及食料品店又は講談社代理部にあり

◎全國各地は發賣元へ直接御註文下さい

東京澁谷町神宮通り一丁目十三番地

發賣元 **天龍館出張所**

電話青山五三九八 振替東京六八八五五

脱線

大評判の快小説愈出づ!!

明るくて上品で滑稽
面白いく痛快無類!

その中にホロりとさせる人情味——

無邪氣で快活な大家の一人息子新太郎君
聰明で勝氣で素敵に美しい近代的令孃秀子さん

二人の——
嬉し恥かしい戀と緣談——を中心に、新太郎君の相棒で好人物の青年、豪快で粹に碎けた苦勞人の父、滅法子に甘い母、聰明で親切な秀子さんの兄夫妻、緣談の事なら骨身を惜しまぬ仲人道樂の出雲の神樣、その他樣々の愉快な人物が大活躍!

眞に愉絶快絶!!

讀み始めたら面白さにつり込まれて一氣に讀了——

苦勞も、惱みも、サラリと忘れて、世間が愉快になります!



通信教授 音樂講義錄



偽物注意

ハガキにて申込次第
各科規則書進呈

實に輕く……よく鳴る
ハーモニカ出現!!

本會專賣の
ハーモニカ
スヰトホーム
見本呈進

家庭印
第一號 二圓五十錢

御大典記念
特價提供 貳圓
送料十八錢

通信教授 音樂講義錄

大好評百五十版 **ヴァイオリン科**
大好評八十三版 **マンドリン科**
大好評五十五版 **ハーモニカ科**
大好評百四十八版 **尺八科**
大好評九十一版 **琴曲科**
大好評三十八版 **三味線科**

專賣特許

賜天覧台覧

秋月作尺八、朝日ヴァイオリン、琴譜本、複音大正琴

特長

新案特許願濟（形式の如何に關せず模造僞造を嚴禁す）

一、此のハーモニカにて吹けば一日にて唱歌や簡單な流行唄等は何人にでも吹ける樣に新發明の獨習方法がしてあります。

二、願めて丈夫です、されば永久責任付です、若しハーモニカがこはれた場合には無料修繕致します。（但し送料二十一錢送金の事）

三、此ハーモニカは本會の專賣品なれば一般の店にはありません、又名稱スヰートホームは日本に只一つ特許されたる登錄商標ですから何人も之を用ふる事が出來ません。

◎音樂が通信教授などで出來るものかと云ふ人あらばそは此の本會專賣の巧妙なる方法を知らぬからであります。

即ち本會講義錄による時は上記各科希望の樂器を居ながらにして直接教師に就て學ぶより、ヨリ以上の效果と便利が多數あります。されば三ケ月を出ずして人の前で奏せる位にキツトなれます。論より證據ハガキにて上記各科の內希望の科目を明記して御申込次第くはしき規則書を進呈します。

發行所 東京神田區須田町二番地 振替東京二七八〇〇番
大日本家庭音樂會
東京支部



柔道を教はつた

活劇王 フエアバンクス

ダグラス・フエアバンクスは、壯快な男だ。その明るい豪壯さと、輕快さ、なかには不思議に、東洋風な色がある。

彼もまた日本が大好きだ。

『薄情で移り氣な米國人は、何時、俺を見捨てるかも知れない。しかし俺を眞に理解してくれるものは、日本人だ。しかも若々しい血潮をもつ日本の青年だ俺の生命はそこにある』

米國人に向つて、ツケ〳〵と、そんなことを言ふところにも、如何にもフエアバンクスらしいところがあつた。彼が愛する日本のフアンに贈つた名馬――『善良な惡人』に活躍した彼の愛馬――は、いまでも京都の動物園にある。

そのくらゐだから、彼は柔道が教はりたくつて仕様がなかつた。

『一つ我輩を貴君の弟子にしてくれ

ませんか』

伊藤五段を訪ねて、かう頼みこむと、伊藤五段は、苦り切つて答へた。

『止しませう。……米國人は厭きつぽくつて、それに、柔道の精髄を捉へることは忘れて、手つ取り早く業ばつかり覺えたがつて……』

そのブツキラ棒な、率直な答が、氣に入つたと見えて、フエアバンクスは、止むを得ませんと、早々引つ返して行つた。

が、不思議！伊藤五段が、彼を送り出して、二階の居



差しのべて、またも柔道を教へてくれと頼むのであつた。

伊藤五段は、こんどは念入りに、玄關まで見送つてフエアバンクスが、例の通り壯快な足どりで、口笛を吹きながら、立ち去る姿を見た。『これなら大丈夫！』

伊藤五段が、安心して、二階の梯子段を上つて自分の居間の扉をあけると、……驚いた！

そこにはまたもフエアバンクスが、彼一流の明るい笑ひを浮べて、立つてゐるのであつた。

『一體、貴君は何處から這入つたのです？』

伊藤五段が、不思議に思つて、かう訊くと、フエアバン





間に入つて見ると、何時の間に歸つて來たのか、そこには先刻歸つた筈のフェアバンクスが、チヤント突つ立つてゐるのだ。

『やあア』

彼はニコ〳〵しながら手を

クスは、窓を指した。『彼處ですよ』

二階の窓は相當に高かつた。しかし身輕な彼は、ヒラリと身を飜へして、伊藤五段がコツ〳〵梯子段を上つてゐるまに、窓から飛びこんでゐるのであつた。

この奇拔な熱心に動かされて、到頭伊藤五段も根負けして、フエアバンクスに柔道を教へた。彼が映畫のなかで、雲つくやうな大男を、見事な巴投げかなんかでやつつける壯快な場面は、かくして作られたのである。

書物を十五尺讀んだ

發明王　エディソン



エディソンは運送屋の息子であつた。

『お母さん、ぼく何處かで働いてもいゝ？　ぼく獨立したいんだもの』

小さいトーマスが、かうお母さんに切り出したのは、十二歳のときであつた。そして新聞賣子をやつた。

新聞を賣りながらも、彼は本を讀んだ。讀み耽つて、停車場を乘り超してしまふことなども、珍らしくなかつた。これを或る紳士が見て感心した。

『君、よく讀んでるね。何のくらゐ讀んだかね』

『は、十五尺ばかり讀みました』

エディソンが、眞面目くさつて答へると、紳士は聲をたてゝ笑つた。



『十五尺といふのは可笑しいね。多分棚の本を片ッ端から讀んだんだらう。本といふものは、無暗に亂讀したつて駄目なものだよ。』

これがエディソンの一生の教訓になつた。彼はその日から、一つの目的に向つて進むことを覺えた。



『一つの目的に向つて、一日に十八時間づつ働き、傍目もふらない人は、つひに人生の月桂冠を戴くことができる』

これはエディソン自らの言葉である。

エディソンは少年時代に、聾同樣になつた。この耳の遠いエディソンが、何うして蓄音器なんか發明できたのであらう？　或人がそれを聞くと、彼は卽座に答へた。

『私は齒からも聽く、頭の骨からも聽くのだ。もし聞えないときは、私は機械に頭を擦りつけ、その木の部分に噛りついてでも、一生懸命に音をとらへようとするのです』

努力！　熱心！　辛棒！　これがエディソンを發明王としたのだ。彼は發明のためには、いまでも一日に三時間か四時間しか眠らない。

エディソンが、電燈の自然線一つを發明するために、試驗した物質は、一千六百種であつた。そして或る日、座敷に扇が落ちてゐるのを見て、フト、『それには竹がいゝかも知れぬ』と考へつき、次に竹を試驗しはじめたが、その竹の種類も六千種に上つた。

『私の成功の一パーセントは、天から授かつた「靈感」の力で、あとの九十九パーセントは、自分の流した「流汗」のおかげです』

世の人は彼を天才だといふが、それは自然に生れた天才ではなくて努力の天才なのである。

（神保朋世畫）

舌一枚筆一本で國家を建設した

大統領マサーリック



×民族獨立の筆を樹て、活躍しつゝあつた老博士マサーリック。――

『七十に近い身だ。命は惜しくはない。だが今殺されたのでは大事は成就しない』

彼は蜘蛛の巣をはつたやうな警察網を巧みに潜つて伊太利へ逃れた。それから身一つで瑞西へアルプスを越えて――彼がチェック民族獨立のために、何んなに危險で壯烈な戰を戰つた△

『マサーリックの舌と筆とは、何をしでかすか判らない。彼を捕縛してしまへ！』

世界大戰がはじまつたとき、命令は秘かに墺太利政府から發せられた。チェックの×

△か、何んなに熱心に全世界を說いて步いたか。＊

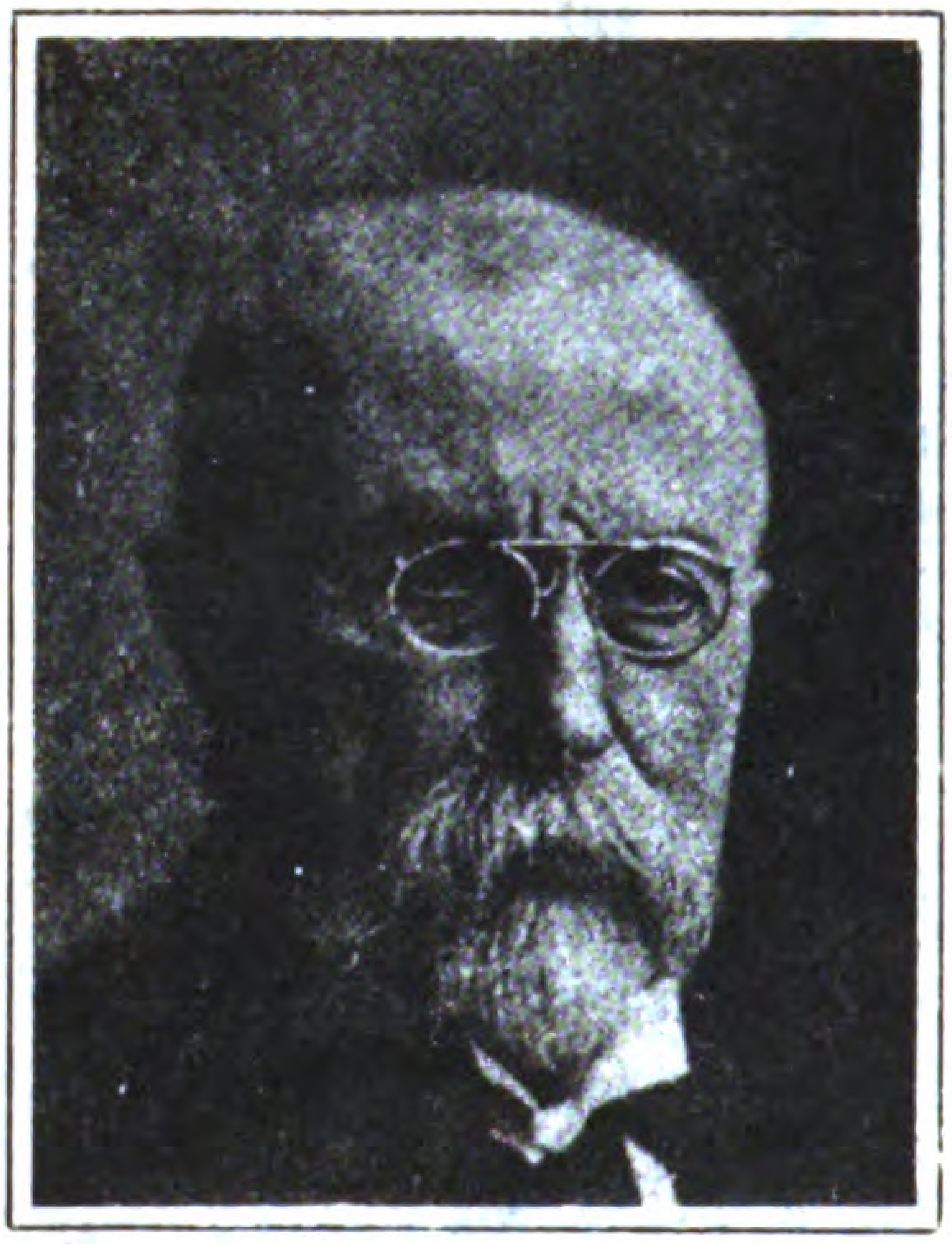
●それは世界戰史を貫く一場の活劇である。

かうして出來たのが、新建國のチェックスロヴアキアだ。マサーリック博士は、その大統領に擧げられた。このときの彼の言葉——

『私が今日、この榮位に選擧されたことは、非常な光榮ではあるが、私はこれを過去の仕事に對する報酬だとは思はない。今後この國を立派に仕上げるための、國民の委任であると考へる』

國を建て、國を護るものは人間である、人間の魂である。——そのことを彼はよく知つてゐた。彼の經國の中心はソコール運動であつた。

『ソコールはチェックの救主だ。チェック魂の羽搏きだ』



毎年一回國都プラーグでは、ソコール祭が行はれる。定刻四つ門が開かれると、音樂隊はソコール行進曲を奏し、一萬四千四百の全國から集つたソコールが、整然と入場する。隊員の帽子には、鷹の×



×羽をはさみ、濃青色のズボンと、眞白な運動着が、爽快無比な感じを與へる。●

●千變萬化、或は兩腕を高く揚げ、或は兩脚をサッと開いて、整然たるその運動が、たゞ一人の指揮者によつて行はれるのだ。いや、たゞ一つのチェック魂で動かされるのだ。

ソコール——それは天日をにらまへて起つ鷹の名である。マサーリックは熱烈な愛國者である。しかし決して愛國業者ではない。

『高らかに國民の自覺を叫び、國民の進むべき道を教へることは必要なことである。が、國民を導かんとするものは、第一に、チェック人が何んな生活をしてるかを知らねばならぬ。國民を貧乏のドン底に陥れて、知らぬ顔をしてるやうな人は、金輪際、愛國の名を唱へる資格はない』

そのマサーリックの志が、チェック國を、歐洲で一番よく治つた國にしたのだ。

（神保朋世畫）

『祈れ、そして、働け』といふ

大統領　ヒンデンブルグ

世界大戰のとき、露西亜の將軍レネンカンプの率ゐる九軍團の大兵が、潮のごとく東部戰線に押し寄せたときには、流石に勝ち誇つた獨逸の大本營も、呀ッとばかりに色を失つた。

そのとき東部には、僅つた五軍團の兵力しかなかつたのだ。

『この難局を切り拔ける者は、ヒンデンブルグ將軍より外にない』

現役を退いて草廬に起臥してゐた將軍が、大本營からの命令に接したのは、八月二十二日の午後四時であつた。そして將軍が急行列車に搭乘して、東部戰線へと急いでゐたのは、その十二時間後であつた。

タンネンベルヒの戰！　それは燦として世界戰史に輝く大勝であつた。倍にも當る敵軍を敗走せしめたばかりか、俘虜の數九萬二千、大砲三百五十門。

『いくら何といつてもこれは甚い。我軍の半數にも當る俘虜を獲るといふのは、ありえないことだ。何かの間違だらう』

と獨逸人は初めこれを疑つて、俘虜三萬、大砲二百門と報告した。

ところが、あとで精算して見ると、確かに九萬二千あるので、呀ッと二度吃驚した。



『獨逸軍萬歳！』

誰もかもが、躍り上つて喜んだ。そのなかにたゞ一人默々として靜かに歩を運んでゐる人があつた。

それがヒンデンブルグ將軍であつた。

將軍は戰が終ると、直ぐに、中世騎士の立てこもつた古城の近くにある寺院に行つた。そして、僧正が勤行の最後の言葉を投げかけようとする際、惶急しく驅けこんで、神前に額づいた。そして默禱をさゝげた。

この心持である。戰後、獨逸が亡びるか興るかといふ、危險い瀬戸際に立つたとき、萬人が齊しく仰ぎ見たのは、將軍のこの崇高な姿であつた。將軍は決して戰勝の武人だけではない。

いま大統領館のヒンデンブルグの卓子の上には、インキ壺のそばに、粗末な木の框にはめ、黄色に古ぼけた一枚の紙が置いてある。それには、拉典語で、

『祈れ、そして、働け』と記してある。

それがヒンデンブルグの心なのだ。そしてこの心が獨逸を復興させたのだ。

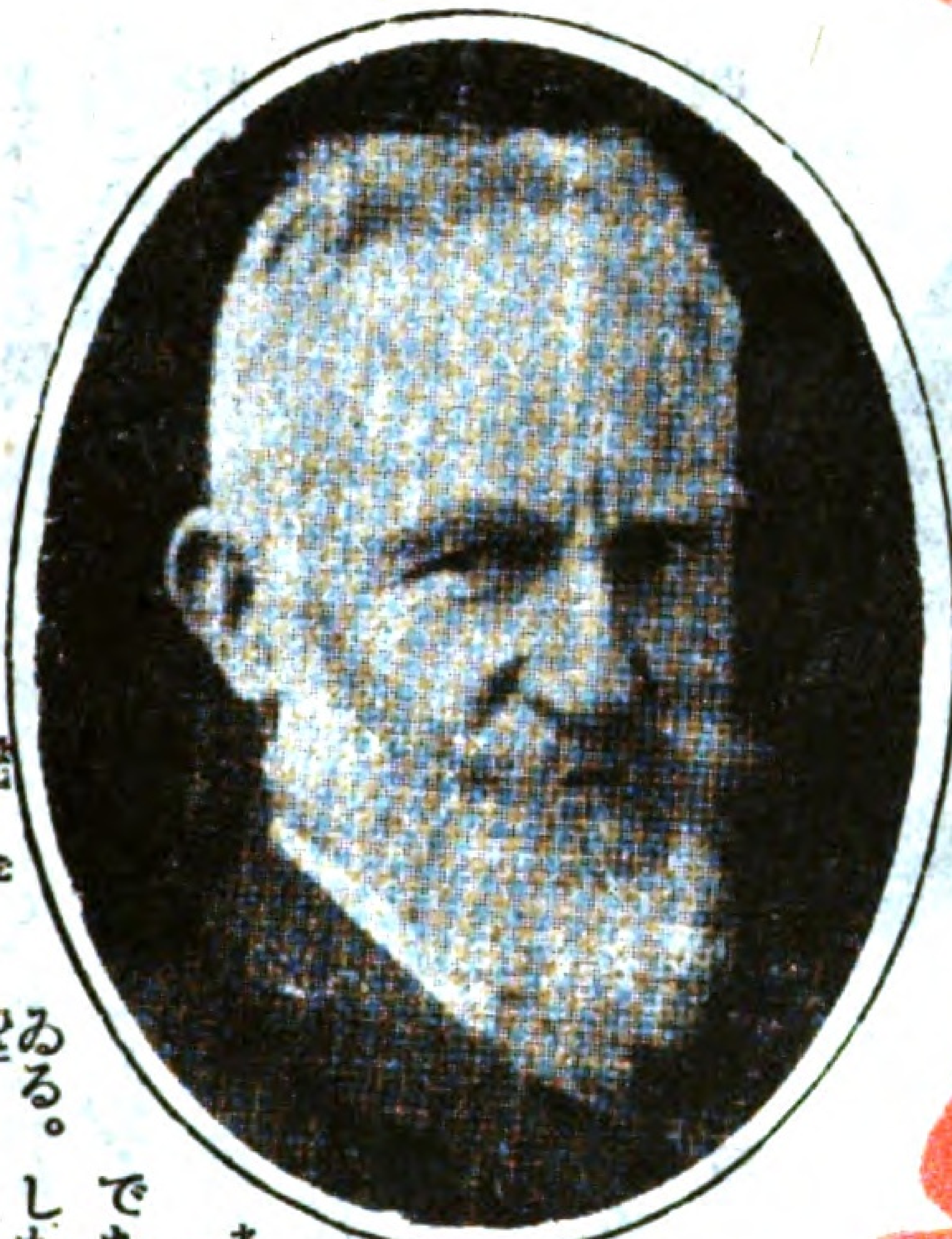
（加東三郎畫）





フロッコートに麥藁帽の

文豪 バーナード・ショウ



『バーナード・ショウこそは、沙翁以來の天才である』と言はれてゐる。しかしこの天才を磨きだすために、ショウほど骨の折れた人はない。大望を抱いて、愛蘭の片田舎から、蝙蝠傘一本さげて、都倫敦に出かけたのが二十歳のとき。――それ以來の惡戰苦鬪であつた。着物は全部、友人のお古を拜領して、間に合はせてゐた。だから當時の友だちは、フロッコートに麥藁帽といふ珍奇な姿のショウをよく記憶えてゐる。やつと見つけたのは、或る音樂雜誌の安記者の口であつた。

ならず、一代の雄辯家として知られるやうになつたのは、かうした青年時代の刻苦勉勵のおかげであつた。

ショウは皮肉な文學者だ。先生ノーベル賞を貰つたときも、『俺は去年、これといふ創作をしなかつたので、その褒美にくれたんだな』と、皮肉な微笑を浮べて、その賞金を送りかへした。しかし彼は皮肉だけではなかつた。

『ノーベル賞の表彰の方は、感謝をもつてお受けいたしますが、賞金の方は不必要なのです。私の創作の讀者や觀客から、必要以上の金を得てゐるので、これ以上貰ふと、私の精神的健康によろしくない。丁度、水を泳ぐ人が、無事に彼岸に泳ぎついてから、救命具を貰ふやうなもので、却つて荷厄介なのです』



の十二時から、晩の十二時まで、音樂會から演奏會、それから歌劇へと、驅けまはつてゐるうちに、身體はヘト〳〵に疲れ、流石頑丈な兵隊靴も、ボロ〳〵になつてしまつた。『失禮ですが、あなたは登山家ですか』こんな奇拔な質問を受けたのも、このころであつた。かうした苦しい生活をしながらも、眼はつねに向上の一路を離れなかつた。暇さへあると討論會や、講演會、それから場末の演說會へと、漁りまはつてゐた。それがあまり熱心なので、

『可哀さうにショウは氣狂になつた』

とまで言はれた。ショウが文豪としてのみ

から言つて、ショウはその賞金を、英瑞文學奬勵基金に寄附した。その通り、ショウは、皮肉なやうに見えて、眞底は非常に眞摯である。彼ほど生一本に、社會と人生を考へてゐる人は少ない。そしてその裏には、天に沖するやうな道義心が燃えてゐる。

それが人を動かすのだ。ショウも言つてゐる。

『俺の眼を眼科醫にみせたら、正視だといつて驚ろいてゐたよ。ほんとの正視といふものは、百人に一人しかない、珍らしいものださうだ。俺の思想だつて、あんまり正しいから、却つて珍らしく思はれるのだ』

『私の顔を立てゝ下さい』と日本に呼びかける
女大臣　ボンドフィールド



『世界最初の女大臣――女で、しかも學歷と言つたら、小學校卒業のほか何もない人が、こんど大英帝國の大臣になつた』

さういふ電報が、全世界に發せられた。それは何としても、劃時代的な出來事であつた。

ボンドフィールドは、まさしく、勞働婦人から身を起こした。たゞ、世のつねの立身出世とちがふのは榮達の今もなほ、勞働婦人をもつて任じてゐることである。

彼女は明治六年の生れであるから、日本風に數へれば今年五十七歳である。お父樣は、レースの圖案職工で、貧家の娘の常として、小學校しかでなかつたが、元來頭腦がよかつたと見えて、滿十三のとき、村の小學校の代用教員をやつたりした。

十六から先は、ずつと奉公人生活で、呉服店百貨店の女賣子をした。

女が社會の荒浪に揉まれながら、安い賃銀で身を支へることができない場合、彼女たちの一番陷り易い誘惑は何であるか、それは賃銀以外の種々の方法で、男から金を貰ふことである。

ボンドフィールドは、自分がその境遇に立ち、同僚たちの實際を見て、慄然と身戰ひした。

『可哀さうな姉妹たちを救はねばならぬ！』

それ以來彼女は、終始一貫して、婦人勞働運動の戰士であつた。二十五歳のとき、はじめて女賣子組合の副書記にあげられたときも、いま英國の女大臣と謳はれるときも、彼女の旗印は一貫してゐた。

『世界の働く女のために』

ボンドフィールドは、大正十五年の勞働總會には、勞働代表顧



間として出席したが、女や子供の深夜業廢止條約を、日本が批准してゐないこと、が問題になつたとき、彼女は起ち上つて叫んだ。『可憐無力な婦人兒童の身心を虐待搾取して、一國の富を作るといふやうな時代はすでに過ぎ去つてしまひました。如何なる國も、文明國といはれる以上は、この理を認めなければなりませぬ。……私は昨年、全國を歩き廻つて、日本を賞讚いたしました。「此處に一つの國がある。それはかくまで非常な困難を有しつゝ、少しも撓まずその困難に打ち克たうと努めてゐる」と、……私は日本に訴へます。何卒私の面目を立てゝ下さい。そして私が國に歸つたとき、日本もまた私たちと歩調を共にする國になつたと言ふことができるやうにして下さい。』

このボンドフイールドの熱辯は、滿場の喝采をもつて迎へられた。それは彼女の言葉に、犯し難い信念が動いてゐたからである。

（神保朋世畫）





同じ映畫を三度觀る

喜劇王チヤプリン

わが愛すべきチヤーリー・チヤプリンほど、藝術に熱心な俳優は少ない。

彼は、何んなちよつとした仕草——例へば、扉をあけてちよつと外に出るといふやうなことでも、それを少なくとも二十遍位は撮しなほすさうである。そして、



その二十通りの原板を現像させて試寫し、そのなかに自分の氣に入つたのがあればよし、なければ、次の日も、次の日も、同じところを撮しなほす。だから我々が、ほんの三十秒くらゐで見てしまふ一場面に、彼は一週間も、三週間もかかつてゐることがあるのだ。

チヤプリンの絶世の名作『キッド』が、封切された日であつた。ロス・アンゼルスの常設館の一人の女給が、滿員の普通席のなかに、奇妙なお客を發見した。

『ねえ、ちよいと、あのお客、妙ね。……今朝から、もう三時間も、あそこに坐つてゐるのよ』

その妙な客は、厚い外套の襟を立てゝ、そのなかに深く頸を埋めたまゝ、喰ひ入るやうに、チヤプリンの映畫を觀てゐた。

『困るわね、もう三度目よ。……今度濟んで、まだ出なかつたら、さう言つてやりませうか』

『えゝ』

そのうちに『キッド』は、三度目の映寫を終つて、觀客はドヤ〱と席を立つた。しかしその妙な觀客は、身じろぎもしなかつた。



女給は思ひきつて、ツカ〳〵とその妙な人のそばに近よつた。

『もし〳〵、……お氣の毒さまですが、滿員で後がさしつかへますから、一度御覽になつたら……』

今まで默々として、物思ひに耽つてゐたその觀客は、ハツと夢から醒めたやうに、女給の方を見た。……すると意外、女給の方がハツと、口がきけなくなつてしまつた。

それもその筈だ。

人波に埋もれた滿員の三等席の隅に、幾時間となく坐つて映畫を觀、大衆の批評にヂツと耳をすましてゐたこの妙な客こそ、この映畫の作者、チヤーリー・チヤプリンその人であつた。

（吉 邨 二 郎 畫）

百姓に球をぶつけた

本壘打王　ベーブ・ルース

ベーブ・ルースは、若いころから、途方もない腕力家であつた。どんな重いバットをかつがせても、木片を持つてるやうにしか感ぜられなかつた。だから彼は、小さな田舎野球團にゐたときでも、自分で木の皮を剝いで、自分でバットをこさへてゐた。



「叔父さん。そんなに木を削つて、何を煮るんだい？」

近所の子供たちは、ルースの前に集つては、こんなことを言つてからかつた。この大男には、何ともいはれぬ愛嬌があつて、子供には好かれてゐた。ルースも子供が好きであつた。



バットに署名してゐるルース

「炊くんぢやない。……まあ、このバットを持つて御覧」

子供たちは、二人がかりで、バットを擔いで見た。

「やア重いな」子供は眼を丸くした。

ルースはその自製のバットを擔いで、ボックスに立つた。

「ルース。本壘打！」

觀客席からは、子供たちが、騒ぎたてた。ルースが名をなすまでのファンは、子供であつた。

ルースはニコッと笑つて、投手を見た。何をッ、投手の手からは矢のやうな直球。

カーン！

球は青空の間を、グン／＼延びて、注文通りのホームランであつた。中堅手は、垣根のところまで飛んで行つて、茫然と佇んだ。

そのとき、野球場外では、教會堂の前で、一人の百姓が、馬鈴薯の皮を剝いてゐた。そこに球が飛んで來て、

「痛いッ。……誰だ、こんな惡戯をするのは？」

百姓はムッとして、四圍を見廻したが、人ッ氣はなかつた。そこに野球場の人が驅けて來て、譯を言つたが、百姓はそんなに飛ぶ譯がないと、なか／＼利かなかつた。

「しかし、ベーブ・ルースが打つたんです」

「さうか、ルースぢや、本當にさうかも知れない」

この強打力と、そして投手としての健腕とが、當時米國第一の野球團ボストン赤韜軍の監督に認められた。そして投手としてウオード・セリースに出場し、見事二年間のペナントを握つた。

後に外野に廻つて、本壘打王としての盛名を馳せてゐることは、人のよく知る通りである。

（横田弘著）



『無抵抗の抵抗』を說く

聖雄ガンディー

二千に餘る勞働者は、蜿々三哩半に亙る長蛇の列を組んで、埃だらけの凹凸路を、北へ北へと進んで行つた。彼等は殆んど全部、北ナタールの鑛山に働く坑夫たちであつた。

『われらは、かういふ惡法に從ふことはできない。だから、何うか私たちを、牢獄に送つてくれ！』

口々に彼等は叫んだ。

牢獄への進軍！　あゝ、何といふ悲痛な叫びであらう。

この行軍の先頭には、粗末な布を纏つて、杖をひき、腰を曲げて、足を引いてゐる、見るからに痛々しげな一人の小男が起つてゐた。しかし



彼の面上には、岩を貫ぬく覺悟が、自信に滿ちた微笑のなかに、力强くも躍つてゐた。

この小男こそは、ガンデイーであつた。當時、南阿政府では、勞働者に對して、その妻子や家族にまで、頭割り三十圓といふ人頭税を課してゐた。こんな惡税は、南阿の勞働者に、餓死しろと、命令するやうなものであつた。

では、惡税に反抗して、暴動を起さうか?――

ガンデイーは、それを禁じた。

われらは、名譽と人格とを護るために、最後まで戰はねばならぬ。……しかし暴力に報ゆるに暴力をもつてするのは、惡を二倍することにすぎぬ。それは光榮あるわれらの宗敎が許さない。暴力と戰ふには、忍苦をもつてせねばならぬ。』　かくして、悲痛な牢獄への進軍が始まつたのだ。無抵抗の抵抗がはじまつたのだ。

この驚くべき無抵抗によつて、印度民族の『自治』は、一歩一歩と得られつゝある。若し印度人のなかで、ガンデイーの掟を破つて、暴力に訴へるものがあると、彼はいつでも、『俺の德が足りぬからだ。白人と有色人との暴力的鬪爭がやむまで、俺は斷食して自罰する!』

と言つて、直ぐ斷食をはじめる。これには暴力を加へた白人がまづ感激し、暴に報ゆるに暴を以てした印度人が、つぎに悔い改め、何時でも圓滿な解決が行はれるのであつた。　（加東三郎畫）



『俺は何時でも二人だ』と言ふ

勞働宰相　マクドナルド



マクドナルドは田舍の水呑百姓の息子、その夫人は英國でも有名な名門貴族の姪であつた。この二人は、彼が三十のとき、國會議員に立候補してゐる最中、互ひに共鳴して戀におち、結婚したのであつた。

マクドナルドの成功の半分は、愛妻の功績であると言はれてゐる。

だから彼女が、若くして死んだとき、彼の悲みはたとへやうがなかつた。

『彼女なくして何の勞働黨首だ！　何の社會運動だ！』悲痛な叫びをあげて彼は、倫敦を去つた。

そして彷徨ひ來つたのは、新婚の夢のこる海岸地であつた。天は月なく星明らかに、海は同じ調べに鳴つてゐた。

『このとき天より聲あり』と、マクドナルドは自分で言つてゐる。

『俺の仕事は、俺一人だけの仕事ではない。亡き妻との共同事業だ。その半身が靈となつて天に去つたとき、この事業を完成するのは、地上に殘つた半身の、神聖な義務ではないか』



さう感ずるとすぐ、彼は再び倫敦に立ち歸つて、一層勇ましい勞働の戰士となつた。マクドナルドは、主義の人、節操の人として知られてゐる。世界大戰が始まつたとき、彼一人は非戰論を執つて動かなかつた。政府は彼を懷柔しようと思つて、大臣の椅子を提供したが、彼は肯かなかつた。親しむ勞働黨までが、黨首たる彼を見捨てゝ、戰爭熱に浮かされた。彼は全世界にたゞ一人、荒野のなかに殘された。やがて國民の迫害が始まつた。『國賊よ』『獨探よ』と罵られた。彼が演壇に姿を現はすと、群衆は彼に石を投げた。ゴルフ倶樂部は彼を除名した。それは彼を紳士と認めないことであつた。それでも彼は屈せず、全世界を相手に、一人で戰つた。『俺は一人ではない。何時でも天には、俺を見守つてゐる人が一人ある。全世界と離れても、俺はその人と離れることはできない』



八年の忍從の生活。――それはつひに報いられる日が來た。
彼が最初の勞働內閣をつくつたとき、宮殿の前は、男といはず、女といはず、倫敦の市民で一杯であつた。たゞそこに、たつた一人足りない人間があつた。
それは彼の愛する亡妻であつた。『ラムゼー萬歲！』『マクドナルド萬歲！』男は帽子を振り、女はハンカチを振り、熱狂する市民の姿を、宮殿の石段の上から、ヂツと見降ろしたとき、彼の眼には淚が光つた。

（吉邨二郎畫）

皇帝に名を削られた
文豪　ゴーリキー

アレキセイ・ペシコフ――と言つたつて、知つてゐる人は少ない。それがゴーリキーの本名だ。マキシム・ゴーリキーといふのは、『極大の苦惱』といふ意味である。それほど彼は、凡ゆる苦惱を經て來た。

三歳のときに、彼はコレラに罹つた。そのとき同じ病氣で、父親が死んだ。母親は彼が九歳のときに、世を去つた。

ゴーリキーは天涯の孤兒である。

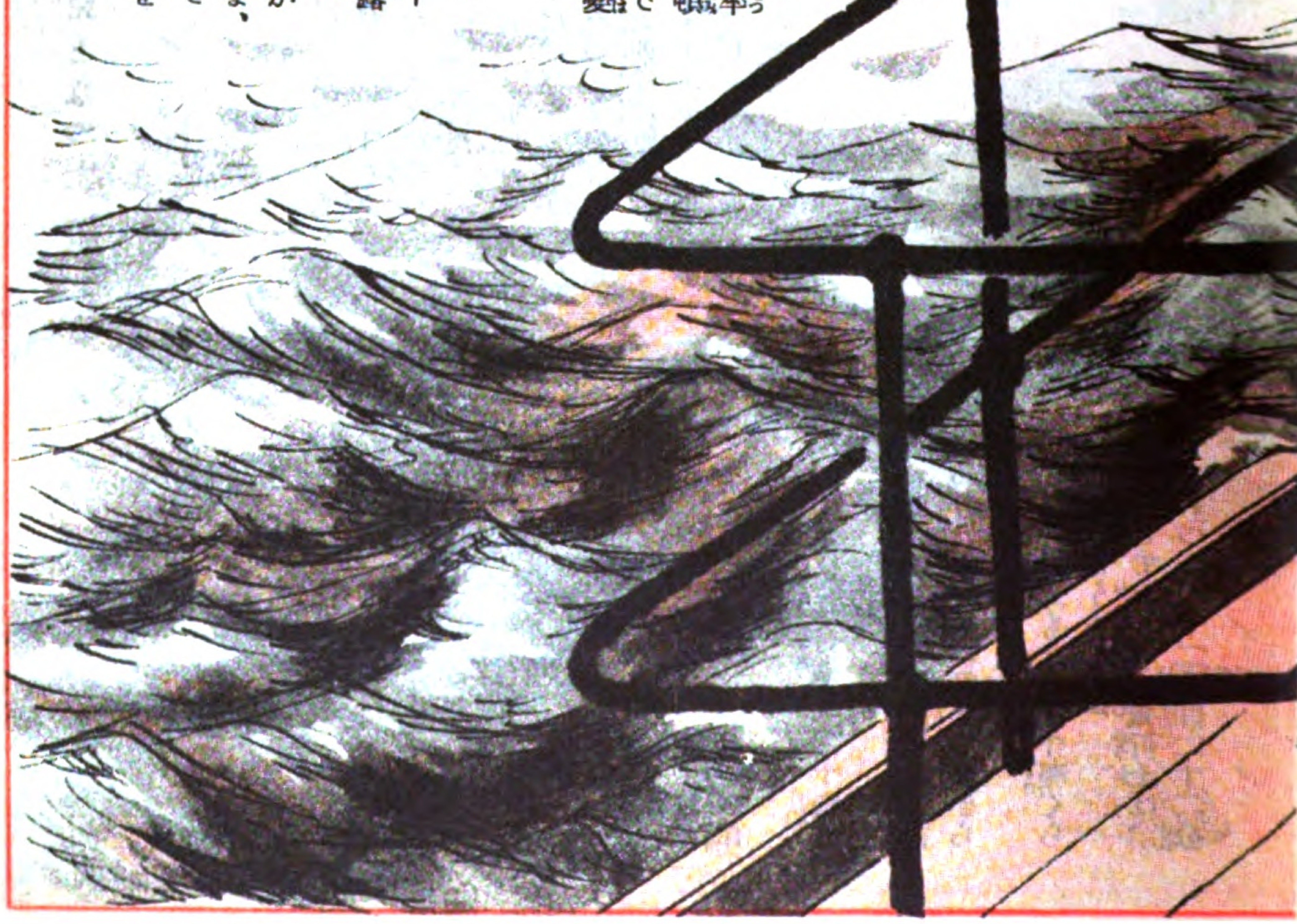
幼年時代から、彼は靴屋に丁稚奉公にやられた。

そこで煮え湯で大火傷して、送りかへされた。その傷が癒えると、聖像畫工のところへやられた。それからヴォルガ河の汽船の給仕に雇はれた。



露西亜の原野を貫いて、悠々と流れるヴォルガ河──
彼は閑暇さへあれば、甲板の一隅で、本を讀んだ。
『何うかして文學者になりたい！』
しかし、何うして文學者になれよう。彼は教育といふものを、殆んど受けた覺えがなかつたのだ。たゞ彼は、激しい勞働をやりながら、貪るやうに、本を讀んだ。
ポケットには、一文の金もなかつた。ビスケット工場の職工になつたり、木挽をやつたり、波止場人足をしたり、果物の行商をやつたり、あらゆる困苦をなめてゐる間も、彼の好學心は暫時もやまなかつた。『あゝ、この鐵柵が恨めしい。俺と學問とを境してゐるこの鐵柵が！』カザン大學の鐵門にとりすがつて、青年ゴーリキーはよゝと泣いた。
しかしそれが却つて幸福であつた。彼が文學に筆を染めはじめると、その率直で、飾りのない文章が、却つてひし〳〵と讀者の胸に喰ひ入つた。文名は頓に上り、つひに首都學士院の會員に選擧された。その學士院は、皇帝の直轄であつた。當時のニコラス二世帝は、その文書を讀むと、たゞ一語。『これは變つてゐるな』と申された。そして手近の用紙に何か書かれた。
翌日、見ると、折角選ばれたゴーリキーの名は學士院會員の名簿から削られてゐた。
しかし、その年、皮肉にも、ゴーリキーの『夜の宿』が發表された。それが露西亜の民心をドン底から揺り動かし、
ゴーリキーの文學的地位は動かすべからざるものとなつた。ゴーリキーはいま、革命政府の中央執行委員の一人となつてゐる。當時のニコラス二世帝は、それを何となく豫感されてゐたのかも知れぬ。
（石井朋昌畫）







三十二時間半で世界の英雄兒となつた

飛行家リンドバアグ

『大西洋を横斷して、紐育から巴里まで、一氣に飛んだ最初の人には、五萬圓の懸賞を出す』

レイモント・オウテイグといふ人の、かういふ廣告を見たとき、これに應募した一人の無名の操縱士があつた。シカゴとセント・ルイスの間の郵便飛行をやつてゐる二十五歳の青年飛行家――その名をリンドバアグといつた。

『こんどの飛行は、我輩一人でやるんだ。それにはまづ、飛行機の方から、工夫しなくてはならぬ』

これまでの長距離飛行といへば、大型の飛行機に、四百馬力もある發動機を二つも三つも積んでゐた。ところがリンドバアグは、ライアン・エム型の單葉陸上機といふ小型で、發動機も二百馬力であつた。その輕快さが、いかにも若武者の初陣らしくて、勇ましかつた。『しつかりやれッ』

五月二十日の拂曉、夜明の霧をおかして『スピリット・オヴセント・ルイス號』は、輕々と離陸した。まもなく機は、雲のなかに消えた。霧、雨、雲、――下はたゞまん〱として、湛ふる大西洋の水であつた。或る時は、水とすれ〱に、十米突ぐらゐのところを飛んだ。或る時は、高く、一萬米突の高空を翔けた。海も空も、際限なく擴がつたなかを、小さな飛行機が、たゞ一つ飛んで行く。

翌二十一日の夜、遙かに巴里の都の燈光が、灯の海のやうに見えたときは、流石に心がときめいた。やがてエッフエル塔が、脚下に臨まれた。

夜の十時二十一分。――彼の飛行機は、巴里の郊外ル・ブルゼーに、颯ッとばかりに降りた。

そのときの群衆は、戰爭以來の出來事であつたといふ。

大西洋横斷！――その若き英雄兒の姿を見んものと、巴里とル・ブルゼーとの間の道路は、自動車と人波とで、全く埋まつてしまつた。刻一刻を報ずる電信と電話は、一秒時の休むときもなかつた。

熱狂した市民たちは、その飛行機を、四十碼も擔ぎまはつた。

リンドバアグは、直ぐに醫者の手當を加へられたが、彼は微笑しながら言つた。

『機も私の體力もまだ一千哩ぐらゐは續きさうでした』

かくして無名の一飛行士は、わづか三十二時間二十二分

にして、世界の英雄兒となつたのだ。『世界最初の無着陸大西洋横斷單獨飛行の榮冠は、つひに米國飛行界のレコードに加へられた』と、大統領は祝電を發した。

しかし、全世界が、彼の噂に鳴り響いてゐるとき、彼はたつた一人で、ナンゼッセル大尉の母堂を訪ねに行つてゐた。ナンゼッセル大尉は彼より前に出發してつひに行衞不明になつてゐたのだ。來意をきいて、母堂はただ潸然と泣くばかりであつた。リンドバアグの眼にも涙が光つて、一語も發することができなかつた。

（横田　弘　畫）



伊太利魂を鍛へあげる

熱血宰相 ムッソリニ





南歐の陽がさんらんと大空に輝くごとき快男兒が、伊太利のムッソリニである。

その伊太利が、滅亡の淵に沈まんとしたとき、全國津々浦々の青年たちが、異口同音に叫んだ聲が、

『羅馬へ！　羅馬へ！』

嗚呼、その壯烈なる光景よ！　彼等の黒シャツの下には、天をも焦がすやうな愛國の熱情に燃えてゐた。死んでもいゝ、自分の命は投げだしても、伊太利は救はねばならぬ、といふ悲壯な決心が、青年たちの眉の間に動いてゐたのだ。その先登に立つたのが、當時三十八歳のムッソリニであつた。この壯烈なる黒シャツ隊が、物をもいはず、ヒシ〱と羅馬の城門に迫つてくるのを見たとき、守備兵たちは一度にドッと感激した。



『あれ見よ！　あの青年たちこそ、伊太利の花ではないか。同じ伊太利の血を享けた我々が、何とて、かゝる愛國の青年に銃を向らけられようぞ！』いままで閉めてゐた城門が、なかから颯とばかりに八字文に開かれた。羅馬キリナルの丘には、國王陛下の宮殿がある。その前の廣場に集つて、黒シャツの青年たちは、萬歳を三唱した。『アララ！伊太利國家萬歳！』

『國王陛下萬歳！　エア、エア、アララ！』

國王陛下には、親から王宮の露臺に現はれて、これに會釋を給はつた。かくしてムッソリニの青年内閣は成立した。血を流してではない。燒くがごとき愛國の熱情によつて、ムッソリニは天下をとつたのだ。『俺の親父は鍛冶屋だつた。朝から晩まで、火花を散らして鐵を鍛へてゐた。その息子の我輩は、いま、伊太利國民の精神を鍛へ上げつゝあるのだ』彼は國を愛する。伊太利を愛する。伊太利國民を、偉大な國民に鍛へ上げたい。それ以外に彼の志はないのだ。そのほかで、何んな間違があらうとも、彼は心中秘かに期するところがあるのであらう。

『伊太利のことについては、俺は全責任を負つてゐる。だから全權力を要求するのだ！』

凛たる一言！　そこに彼の獨裁政治の眞骨頂がある。責任はできるだけ回避して、權力だけは握りたいといふやうな、野卑な根性とはわけがちがふ。

（神保朋世畫）

脚の足ない靴をこさへる

自動車王 ヘンリー・フォード

『おい一寸、鉛筆を貸してくれ』

フォードは若い妻君の使ふ樂譜の紙の裏に、何かしきりに書いては、首をひねつてゐた。

『あなた、何してらつしやるの？』

『うン、いま自動車を考へてるんだ。簡單で廉價い車をこさへて、世界中の人間に、靴のかはりに履かせてやらうと思ふんだ』

それ以來フォードは、馬小屋のなかに籠つて、自動車の工夫に耽りだした。近所の人は狂人になつたと言つたが、△



△フォードは何と言はれても、初一念に噛りついた。

見よ！　米國は今では五人について一臺、一軒に一臺の割で自動車がある。『自動車を履いて歩く』時代も、決して夢ではなかつた。

フォードの成功は、工場の規則正しい能率と、そのなかを流れる、人類奉仕の道心であつた。

世界大戰に米國が參加することに決つたとき、フォードは政府の召に應じて、その長身を政廳に現はした。

『いよ／＼戰爭をやる

について、まづ要るのは自動車やトラックですが、これだけのものを送り出すのに、何のくらゐの時間がかゝるでせう？　非常に急ぐのです』

政府の大官は、心配さうに、フォードの顔を覗きこんだ。すると彼は、ブッキラ棒に答へた。

『明日の午後三時までに。…つぎの注文からは、五分の餘裕があれば充分です』政府の大官は、呀ッと驚いた。しかし整頓しきつた彼の工場は、×



×眞個に午後の三時を一分一秒もちがへずに、自動車を送り出した。以來、戦争中、彼の工場からは、機械のやうに規則正しく、注文だけの自動車が、ドン／＼流れ出た。



『あなたのお蔭で、どれだけ米國政府は助かつたか知れません』

戦争が済んだとき、政府の高官は、心から感謝した。フォードは答へた。

『いや、私は國民として爲さねばならぬことを、しただけです。就いては…』

フォードは鞄のなかから、五千八百萬圓の銀行小切手を取り出して。『これは戦争中。政府の御注文をいたゞいて、まうけた利益です。國を擧げて戦つてるとき、私だけが利益を儲ける理由はありません。何らか國庫にお納め下さい』

『いや、でなくてさへ、あなたのところの品物は、安いのですから、それは正當なあなたの報酬です』政府の高官が驚いて返へさうとすると、フォードは『私の良心です。お納め願ひます』

と、言ひのこしたまゝ、サッサと歸つて行つた、高官の頭は、自づと下らざるを得なかつた。

（加東三郎書）



孫逸仙の遺志を繼ぐ

國民政府の總帥 蔣介石

『せめては揚子江まで、進出したいものだ』

口癖のやうに、さう言ひながら、支那革命の祖、孫逸仙は、忽焉として北京の客舍に逝いた。その遺志を繼ぐ蔣介石が、一たび青天白日旗を、颯ッと烈風に飜へすや、揚子江はおろか、瞬くひまに全支那を統一した。

孫逸仙と蔣介石のなかこそ、世にも美はしいものであつた。

陳烱明の叛に、討伐軍司令官として出陣した蔣介石が、戰死したといふ誤報が大本營に傳はつたとき、

『何萬の大軍を失ふとも、一人の蔣は失ひたくなかつた』

と老眼をしばたゝきながら、愁然としてその電報を卓子の上に擲げ、天を仰いで長大息をしたのは、孫逸仙であつた。

その蔣介石は、遮二無二に陳烱明の討伐を急いでゐた。その理由を幕僚の一人が訊くと、彼は即座に答へた。

『先生の病氣は肝臟病だ。この病は元來、怒氣から發するもので、藥なんかで癒るものではない。陳を叩き潰して、怒氣を鎭めさへすれば、必ず全快されるに違ひない』

孫逸仙の信頼の心、蔣介石の追慕の情――この二つが融け合つて、あの國民革命の大業は成つたのだ。滿都の大衆歡呼の裡に、*



*北伐の征途に就いたときも、

『嗚呼我將士生死を共に……』と悲痛な宣詞を讀み上げて、

『誓つて故總理の遺囑に背かず』

と、決心の程を示したとき、はふり落つる涙に、面を上げるものさへなかつた。不思議な因緣は、この孫と蔣とを、義兄弟にした。

花の如く美はしといはれる蔣の新夫人こそは、孫夫人の實妹なのだ。

蔣介石の手兵は、軍規の嚴重なので、有名である。しかしその秋霜烈日の如き性格のなかにも、一脈春の水のごとき溫情が流れてゐる。

或るとき部下の一人が軍規に背いて、民家を掠奪したので、彼は斷然銃殺を宣告したが、その兵卒が悄然として刑場にひかれて行つたとき、彼はツカ／＼と近よつて、肩に手をかけて言つた。

『お前は軍規に從つて、潔く死に就かなければならない。しかし後のことは心配するな。兩親や妻子の行末は必ずこの蔣が見てやるから』

蔣はその後、毎月相當の仕送りを絶やさなかつた。





大統領フーヴァー

財産を擲つて人類に奉仕する

『苟くも男と生れて、他人の憐みを受けるなどとは、男子の面汚しだ』

鍛冶屋の息子のフーヴァーは、十四の時から、自ら働いて食ふ決心をした。始めは農園の小僧、それから會社の給仕、やがて皿洗ひをしながら、大學の鑛山科を卒業した。それからはトン〱拍子で、四十のときには、

『世界の鑛山で、フーヴァーの手にかゝらぬ山は一つもない』

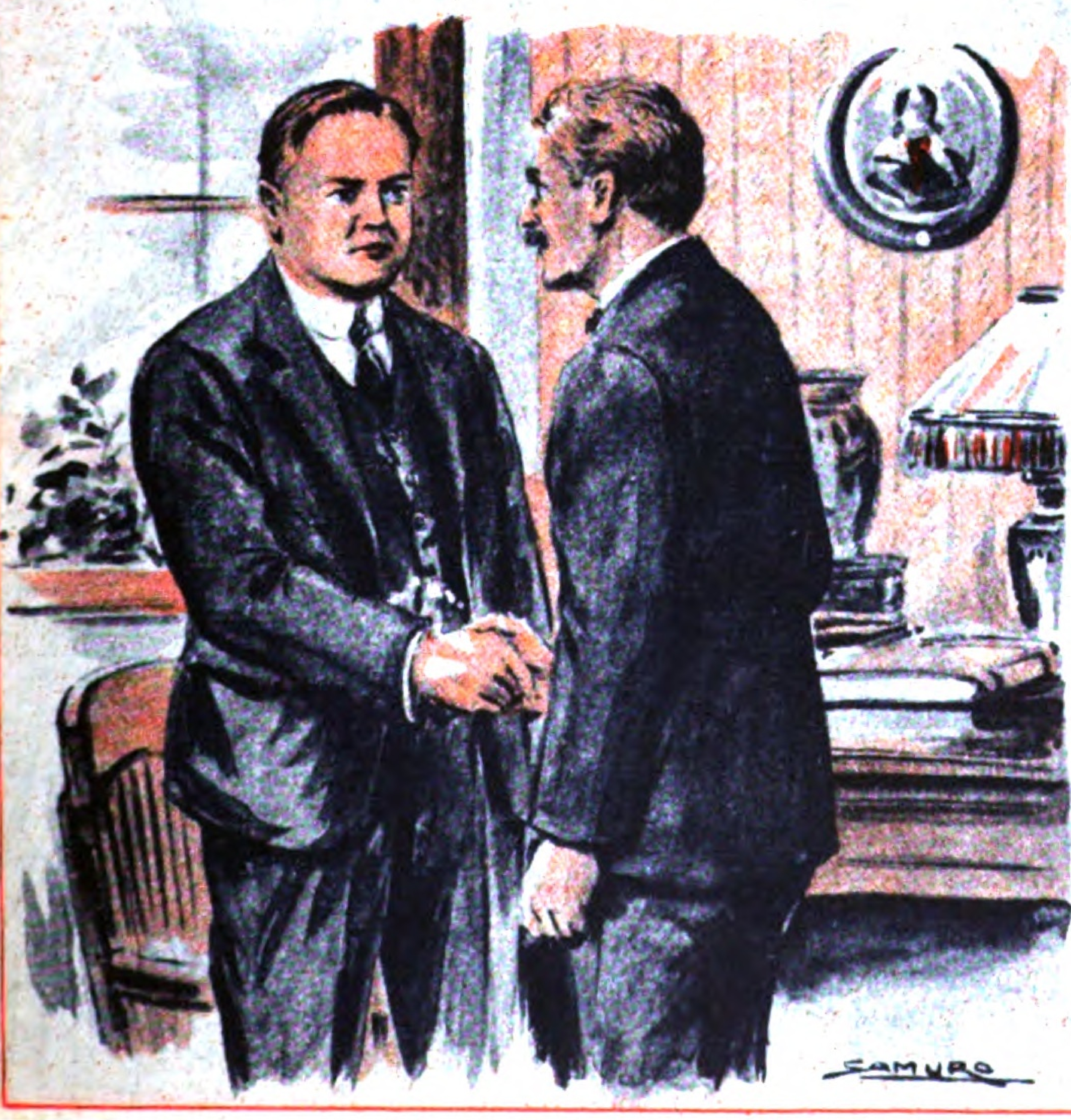
と言はれるほどの鑛山師となつてゐた。

そのとき世界の大戰が始まつた。潮のやうな獨逸の大軍が、夏草美はしく咲き亂れた白耳義の平原を、荒々しい汗馬の鐵蹄に踏みにじつた。

『何とかして白耳義の人民に食糧を送つて、これを援けなければならぬが、さて、この前代未聞の難事業をやつて貰ふには、誰がよからう』委員たちが額を集めたとき、期せずしてその口に上つたものはフーヴァーの名であつた。

その相談を受けたとき、流石のフーヴァーも躊躇した。何故なれば、全世界に散在する彼の財産は、戰爭勃發のために、一大危機に瀕してゐたからである。

『フーヴァーは一晩の熟考を了へ、翌日まだ黎明のうちに、晴々しい顔で友人の處にでかけて行つた。



『アーヴィン君。我輩は自分の全財産が蕩盡し去つても、悔いようとは思はない。斷じてこの高貴い仕事は引き受ける！』

その時からフーヴァーはもう一個の鑛山技師でなかつた。彼れの胸に燃えてゐた『人類への奉仕』はフーヴァー主義の名となつて全世界に鳴り響いた。

（加東三郎畫）

登録商標

獨逸ベルツ博士

SUZUKI NIPPON-SEIYAKUSHA

黴毒と體毒を

切らず注射せず治し美體にする

内服薬「ベルッ丸」の効顯

▽**捨て置けぬ梅毒性の諸症**

四季を通じ顔色着白にして季節の變り目毎に頭、顔、手、足、又は身體全體に吹出物や腫物が出來た子供を澤山見受けます。これは親の不品行が罪もない子供に報いたので遺傳梅毒と云つて居ります。又神經衰弱に似た頭痛を覺え腰と言はず頭と言はず倦怠疲勞、全く仕事どころか身體の置場所もない程いやな氣持で毎日過して居る方々の多くは梅毒性に因由する諸疾患ですから一日も早く適當の方法で治療せねばなりません。黴毒は自分一個の病氣に止まらず妻を苦しめ子を泣かし身を害ね一家を擧げて破滅に導くのみならず遂には國家をも亡すと言ふ恐ろしい亡國病であります。昔ローマの倒れたのも此の病氣だと言はれて居ります。恐れても恐るべきは此の病氣であります。

▽**黴毒體毒は内服薬で根治出來る**

最近醫學の進歩發達は非常なものですが、悲しいかな黴毒や體毒には内服薬では現在弊社創製薬ベルッ丸の外には發見されて居りません。手術が厭だ注射が嫌ひだと言ふ方は是非ベルッ丸を御服用下さい。切らず注射せず梅毒體毒を一掃します。ベルッ丸は我が國醫學界の大恩人ベルッ博士の創製されたものですから絶對に信用出來る良薬であります。既に御承知の如くベルッ博士は明治九年我が國政府の懇請に依つて來朝せられ爾來三十年間東京帝國大學教授宮內省御用係りとして令名天下に轟いた名醫であります。

▽**諸毒を除去すれば健康となり美體となる**

ベルッ丸は實にこうした權威ある薬ですから梅毒、りん毒、さう毒、梅毒性リウマチス。ひゑ毒、脊髄、悪性のニキビ吹出物又は黴毒性にて頭脳悪き方や常に便秘性にして苦しむ其他凡て梅毒性から來た諸疾患に思ひ當る方は速にベルッ丸を服用下さい。切らず注射せずして血液中の諸毒を大小便に夜つて體外に排泄します。試みに四五回服用すれば直ちに心と身の氣力は快復して頭脳は輕くなり胃腸は健康になり。食慾は進み。知らず識らずの間に血液は淨化され日ならずして全治の悦びに達します。これ迄御蔭様で助かりました一家幸福に暮して居ると言ふ禮狀を澤山頂いて居ります



梅毒や體毒の爲めに是れまで數十本の注射をしても尚且つ全治せぬ方がベルッ丸の服用に依つて全快したと云ふ實例が澤山あります注射の御嫌ひの方は一日も早くベルッ丸をお試めし下さい切におすすめいたします。

藥價は輕症用參圓、重症用五圓、頑固用拾圓、常服根切用貳拾圓。特別大徳用參拾圓送料內地十八錢領土六十五錢代金引替は切手三十錢封入

東京市日本橋區濱町三ノ四(新大橋下車)

鈴木日本製薬社

電話浪花一〇〇六番
振替東京一〇〇五番

回講談社代理部(振替東京六六二一九)にもあり

獨占的新職業案內

僅か二ヶ月間自宅獨習の上
無試驗開業！
好收入ある電療士を養成

求職者及び失業者は來れ！
男女何人にても責任指導す



世を擧げて不景氣をかこつ時、僅か二ヶ月間の自宅獨習で完全に習得することが出來て、卒業の上は全國何處にても極少の資金で自由に無試驗で開業なし得られ、醫師や齒科醫に劣らぬ好收入を得られる有利な新職業は當所の養成する新式電氣療法專門萬病治療の電療得學士並に美顏術師であります。この技術は極めて容易で學力程度を問はず男女何人にも習得することが出來ます。當所の卒業者は今や全國を通じて夥しき數に達してをりますが、何れも紳士的な生活の安定を得てをります。一日も早く安樂な生活を營まんとする人はハガキで申込次第內容見本付規則書を無代送附

東京市牛込區通寺町二三

東京電氣療法研究所

電話牛込四二一〇四番
振替東京四三三二〇番



十月

—鹿—

木島櫻谷畫
生田春月題

秋さわやかに吹く風を、それに見たのだ、峠の尾花に。

一莖の山の野菊は、吹く風の中に咲いてゐる。

この高原の一すぢの路に、一ぴきの動物を走らせて見たい。その敏感な耳をこの秋風の中に、一杯に開いて、草より草にかくれてゆくかの心地するその姿よ。古い代の山の繪姿、鹿の姿よ。

いま新しく吹くさわやかな秋風に、せめて、私の往く影を、鹿とも見よ、山の野菊よ、峠の尾花よ。



二宮尊徳

武者小路實篤
挿繪　尾竹竹坡

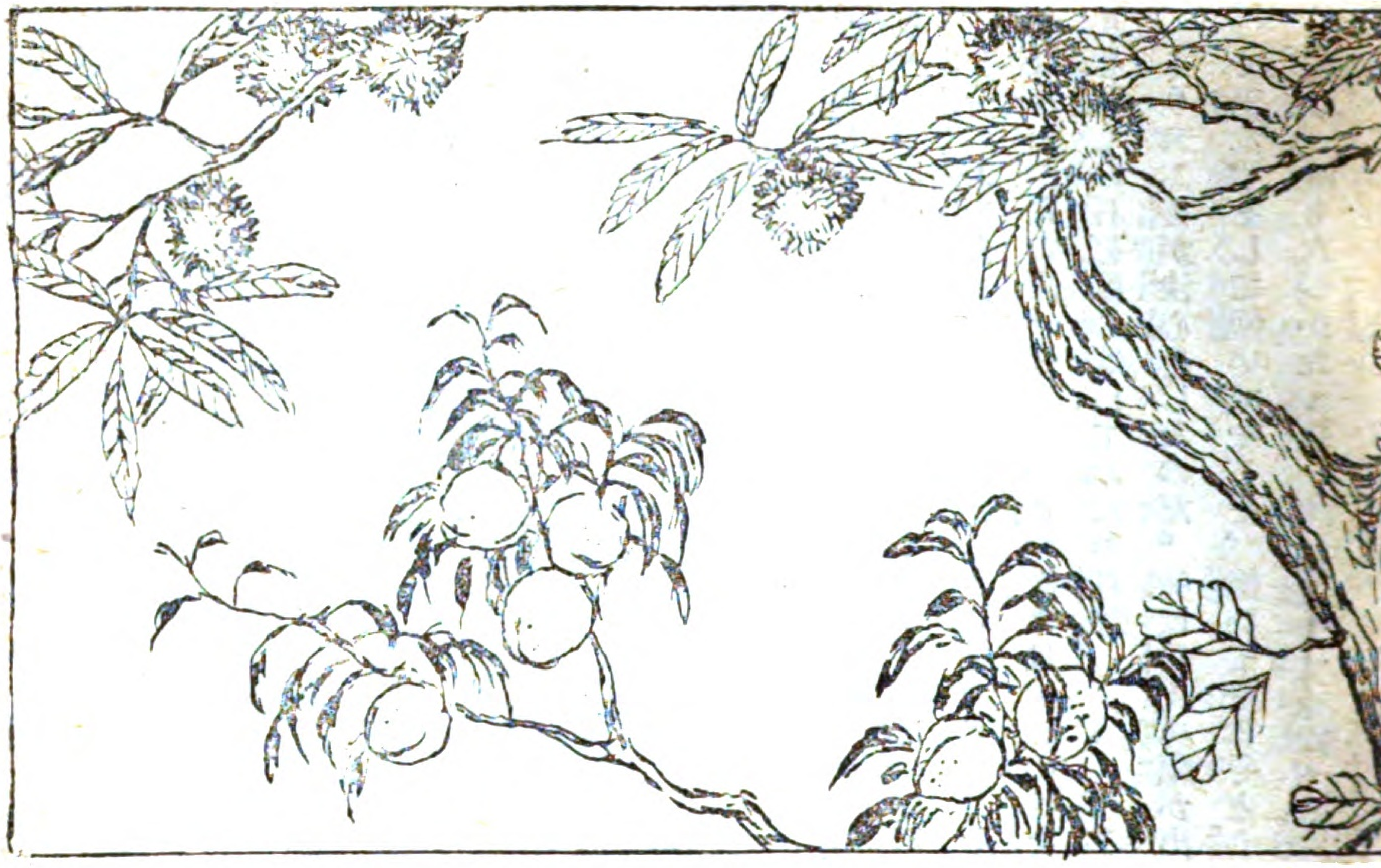
淸い涙　決心の涙

金次郎は夜中にふと目をさました。すると又母のすゝり泣く聲が聞えた。彼は母が一人で私かに泣いてゐるのに、氣がついたことを知られるのがいやで、默つて寢たふりしてゐたが、母のしのび泣く聲をきいてはもう我慢が出來なくなつた。

『お母さん。なにを、ないていらつしやるの』

十四歳の金次郎にさう云はれると、お母さんもつい本當のことを云はないではゐられない氣がした。

『富次郎のことがつい思ひ出されるのだよ。今時分泣いてはしないかつてね。乳がはつてくるたびに富次郎のことが思ひ出されて、ついかなしくな



るのだよ』

さう云はれると金次郎も、涙が出かけて困つた。

金次郎には二人の弟があつた。十一歳の三郎左衛門と、二歳の富次郎と。そして父がなくなつた時、母の手一つで三人の子は養へないと言ふので、末子の富次郎だけ縁者の處へあづけてあつたのだ。

『お母さん』金次郎は決心したやうに云つた。

『富次郎をつれて歸つていらつしたらいゝぢやありませんか。赤坊が一人位ゐたつて、どうにかなりますよ。僕達が本氣になつて働けば』

『それでもね』

『お母さん可哀さうぢやありませんか。つれて歸つていらつしやい。そして皆で元氣に働きませう。赤坊一人位どうだつてなるぢやありませんか。本當につれていらつしやい』

『それぢやつれて歸るかね』

『それがよろしい。さうおしなさい』

子供ではあるが、金次郎を唯一のたよりにしてゐる母は、かう金次郎に云はれると、急に元氣になつた。

そして起き上つて着物を着かへだした。

『お母さん、朝になつてからおいでになつたらいゝぢやありませんか。今子の刻ですよ』

『つれて歸るとなると、もう一刻も辛抱が出來ないよ。月がいゝから一寸いつてくるよ』

『だつて隨分ありますよ』
『富次郎をつれて歸るためならね』
金次郎も起きた。そして母をおくり出すと、金次郎は泣き出した。しかしそれは悲しくではない。決心したのだ。
金次郎はその前からよく働くので皆をおどろかしてゐた。彼は父が病氣の時、責任を感じて實によく働いた。彼は十二の時、酒匂川の土手をなほすため、一戸から一人づつ出て働かなければならなかつた。彼の家では十二の彼より他に出て働く者はなかつた。彼は出て一心に働いたが、とても大人と一緒に働くことは出來なかつた。それで彼は他の人が休む時も休まず、家へ歸つても夜なべ仕事に草鞋をつくつて持つていつて、自分の働きの不足分のおぎなひをした。しかし實際はおぎなひをする必要はなかつたのだ。休みない彼の働きは十二の彼をして大人よりも多くの石をはこばしてゐたから。
さう云ふ彼が決心をしたのだ。彼は益々勇氣が出、愉快になつて來た。そして働いてやるぞ、働いてやるぞと心に叫んだ。
母は一時もたつかたゝない内に歸つて來た。可愛いゝ赤坊を抱いていかにも嬉しさうだつた。



『之で安心した。今日からよくねられる』
母はさう云つた。彼は可愛いゝ赤坊の弟と、母のよろこ

び醜を見るとうれしくなつた。益々働いてやらうと決心した。

それからの金次郎の働きは云ふ迄もなく驚くべきものであつた。彼は朝早く起き、そして一里程ある山に行つて柴をかり、薪を伐つては町へ賣りに行つた。そしてその道々、彼は懐ろに大學を入れては時々出してよみ、興奮し、又いろ〳〵考へるのだつた。



そして夜は繩を索ひ、草鞋を作つた。その働きぶりにはならぶも*

*のはなかつた。勿論それで貧乏からのがれ出ることは出來なかつた。だが彼の決心と勇氣は益々ます許りであつた。この少年時代に人並はづれて勞苦に耐へ、しかもます〳〵勇氣がましてくる呼吸をのみこんだことが彼の一生を築き上げるのに役に立つたことは云ふまでもない。

彼は鍛へられるに從つて益々勇氣が出た。

彼は一時的の興奮で仕事をする男ではなかつた。彼は日常の勇士であつた。毎日々々勞苦の生活がくり返つて來ても彼はますます元氣になり、そして益々勉強した。

かう云ふ智慧もあつた

又或る年の正月、大神樂がやつて來て、在家を廻つて一曲舞つて千歳を祝ふのが例であつた。舞つてもらふには百の銅貨が必要であり、斷るには十二の銅貨が必要だつた。

處が二宮金次郎の家にはその時、十二の銅貨もなかつた。大神樂の音がちかづいてくると母はおどろいて金次郎に云つた。

『金次郎、大神樂が來た、どうしよう』

『十二錢おやりになればいゝでしよう』

『その十二錢がないのだよ』

『さがして見ませう』

『神棚にあるかも知れない、一寸さがして御らん』

『ありません』

『どうしたらいゝだらう』

『さうですね。金がないと云つたつて、いくらこんな家でも信

じてはくれないでせう。かうしませう。皆家中田へ行つて居ないふりしませう』

『さうしよう』

其處で俄に戸をしめ息を殺してゐた。

大神樂は來たが、誰もゐないとあきらめて隣りの家に出かけていつた。三人、母と金次郎と、金次郎の上の弟は顔を見合せて笑つた。

金次郎はかう云ふ智慧ももつてゐた男だつた。後年にも金次郎は時々、やむを得ない場合から云ふ智慧を働かした、だが誠意がないのではない。たゞ人を見て法をとくことを知つてゐた。馬耳に念佛をとなへる愚かさがなかつたゞけの話である。

貧しさは彼の一家を十重廿重にとりかこんでゐた、だが金次郎はそれに負けてはゐなかつた。そして母と子はお互に愛しあひ、いたはりあひ、助けあつてゐた。

だが天はなほ金次郎を苦しめようとした。十四で父を失なつた彼は十六で又母を失なつた。



母は無理をした、病んで十幾日目に死んだ。病氣の間の金次郎の看病は大したものであつた。だが病にはかてなかつた。愛する母は彼がものになるのを見ずに死んでいつた。

彼はどんなにがつかりしたらう。

さすがの彼も病人のやうに參つてしまつた。

心の置きどころ

さすがの金次郎も十六では十三と四つの弟を養ふわけにはゆかなかつた。金次郎には養へる自信はあつたとしても親類が許さなかつた。

そして彼は伯父萬兵衛の世話になり、弟達は母の實家につれられていつた。

彼は今迄苦しくとも母の愛、兄弟の愛になぐさめられてゐた。今は伯父の處へ一人で厄介にならなければならなくなつた。

萬兵衛はやかましい男だつた。

金次郎が晝働いて夜ねずに勉强するのを見て怒鳴りつけた。

『貴樣は人の世話になつてそれで遊んでいゝと思つてゐるのか、貴樣のやせ腕で働いて、自分の雜費が拂へると思ふのか、油をぬすんで本なんかよむのは恩知らずのすることだ』

金次郎は何か云ひたかつた。だが伯父はつゞけて云つた。

『貴樣の家は田圃もなく人に扶助されて命をつないでゐるのぢやないか。本なんかよんで何になる。そんな時間があるなら草鞋でもつくるがいゝのだ』

金次郎は泣いてあやまつた。



彼はそれから夜勉強したくも出來なかつた。そして草鞋をつくるより仕方がなかつた。だが彼はたゞへこたれて許りはゐなかつた。萬兵衛の油をつかふのがわるいと思つた彼は自分の油がほしかつた。其處で彼は、川縁の荒地を休みの時間に起してそして油菜の種を五勺人からもらつてまいた。そして半年程たつと、其處から七八升の菜種をとることが出來た。彼はよろこんで隣村の油屋に持つていつて一升あまりの油とかへてもらつた。

そして彼はその晩、彼は自分の油に火をつけて久しぶりに燈火の勉強をたのしんだ。しかし萬兵衛はそれを見て默つてはゐなかつた。

『あかりをつけてゐるのは誰だ。早くねろ、ねろ。ねるのがいやなら草鞋でもつくれ、土百姓が勉強したつて何にもなるものか。油が自分のものだと思つて得意になつてゐるのか。明日の仕事にさしつかへが出來てもいゝと思つてゐるのか。安眠のじやまをされてはたまらない』

萬兵衛の云ふことは理窟にあはなくとも、萬兵衛を怒らすことは、金次郎は好まなかつた。それで人々が寢靜まるまで彼は繩をなつたり、草鞋をつくつたりし、そして寢靜まるのを見はからつて、あかりがそとにもれないやうにして本をよんだ。

彼の智識欲は强かつた。彼は自分の話し相手に聖人君子を選んだ。彼はそれ等の本を讀むことで自分の心にぴつたりするものを得た。本當だ、本當だと思つた。人間はしつかりしなければならない。そして心がけをよくしなければならないことを知つた。決心があらたにされ、生きることがうれしくなる。

それは伯父達のまるで知らないことだつた。

金次郎は家を再興する決心はます〱强くなつた。彼は萬兵衛からいひつけられたことは立派にやつてのけた。非難されないだけに働いた、だがそれだけでは彼は滿足しなかつた。彼は與へられる運命だけでは滿足しなかつた。彼は新しい運命を切りひらかないではやまない力をもつてゐた。

彼は三日の內に半日休みをもらふ土地の習慣に從つて、三日に半日與へられる自分の時間を利用した。そして堤防の工事にやとはれたり、山へ行つて薪を伐つたりして、それを金にかへた。そして彼はそれを蓄へると共に、貧しい人がゐると、二百、三百を惠むことをよろこびにしてゐた。

そして洪水の爲にすたれてゐるあき地の水溜りに棄てられた苗を持つて來て植ゑた。

それが秋になると一俵餘の收穫がとれた。金次郎はそれに味をしめた。翌年は五俵の米がとれた。

こつ〱と人が見すてた苗をひろつて來て、人が見すてた土地をたがやして稻を植ゑ、休みの時には來て働く金次郎の姿を

見れば、人々は笑つたであらうが、同時に感心しないわけにはゆかなかつた。
一年半萬兵衛方にゐて、十八の年に同村の親族岡部伊助方に奉公した。
伊助の父は學問を好んだので伊助も學問では近所で有名な男だつた。そして近所の子弟を集めてよみかきを教へてゐた。さう云ふ處へ奉公したのだから金次郎の喜びは察することが出來る。
金次郎はもう十八である。
彼は或る日伊助がわからずに困つてゐる處をたちどころに說明した。
彼はよむことはまづかつたが精神をつかむことはうまかつた。彼は大事なことをちやんと知つてゐたから。
或る日彼は村の若衆が淨瑠璃を口ずさんで『不義の富貴は浮べる雲』と云ふのをきくと彼は大きな聲で怒鳴つた。
『其處だ』
皆、おどろいたが、はては金次郎らしいと云ふので、大笑ひした。金次郎は眞面目だつた。

彼は眞理を求めてゐた

彼が十月のある日飯泉を通つて觀音堂にお參りした。
その時一人の行脚僧が來て御經を讀んだ。金次郎はそれを聞いてゐると、ひし〱と自分の胸にひゞいて來た。彼は行脚僧がよみをはるときいた。
『今のお經は何と云ふお經です』
『觀音經です』
『觀音經なら今迄何度もきいたことがありますが、今日程感じたことはありません』
『それは普通吳音で云ふのですが、今のは國語に譯してあるのでおわかりになつたのでせう』
『さうですか』
金次郎は懷中から二百銅を出して遠慮しながら云つた。『之は少しばかりですがおをさめ下さい。そしてもしよろしかつたらもう一度よんで戴けないでせうか』
行脚僧は心地よく承知して、又よみ始めた。金次郎は一言も聞きもらさないやうに一心に聞いた。そして彼は其處に本當のことが說かれてゐることを知つた。
彼は心の內で『本當だ、本當だ』と思つた。
若い心は眞理にふれたよろこびに興奮して來た。
行脚僧はよみをはると挨拶して何處かへ行つてしまつた。興奮した金次郎はすぐ柏山の善榮寺に出かけて考中和尚に話した。そして自分の考をたしかめないわけにはゆかなかつた。

考作和尚は金次郎の語るのをきいておどろいた。
『私は何遍この經を誦したか知らないが、その深理にまだふれることが出來なかつた。あなたは菩薩の再來のやうな人だ。私にかはつてこの寺の住職になつて下さい』
しかし金次郎は斷つた。彼は自分の家を興す義務があると思つたので。
金次郎はたゞ働くだけの男ではない。彼は又たゞ本をよむだけの男でもなかつた。彼は眞理を求めてゐた。なんでもごまかしてはおけない男だつた。
なぜ人間は働かなければならないか。又どう働くのが本當か。心の持ちやうはどうしたら一番いゝのか。人間はどう生るのが正しいのか。彼はそれ等を考へないでは生てゆけない男だつた。
彼は翌年岡部方を辭し、又親戚で名主の二宮七左衛門の處に世話になつた。
その時分には自分で荒地につくつた米が二十俵もとれるやうになつてゐた。そして資金も多少出來てゐた。それで翌年、二十歲で彼は獨立することにきめた。
他家に寄食すること三年半で、彼はやつと自分の家に歸つた。
たが家は屋根が朽ち、壁がおちてゐた。そして蔓草が軒を蔽つてゐた。
彼は一人で草を切り、家をなほし、そしてやつと住めるやうになつた。彼は其處で一人の生活を始めた。彼は希望に燃えてゐたにちがひない。屈するのは伸びるためだ。彼は三年以上屈してゐた。今や獨立獨歩の人としての生活を始めた。
もう誰に氣がねをしないでもいゝ生活に入つた。元よりこれは以前よりも樂な生活ではないであらう。以前よりもなほ生活



のために戰はなければならなかつたらう。だがそれは彼の得意た處だ。

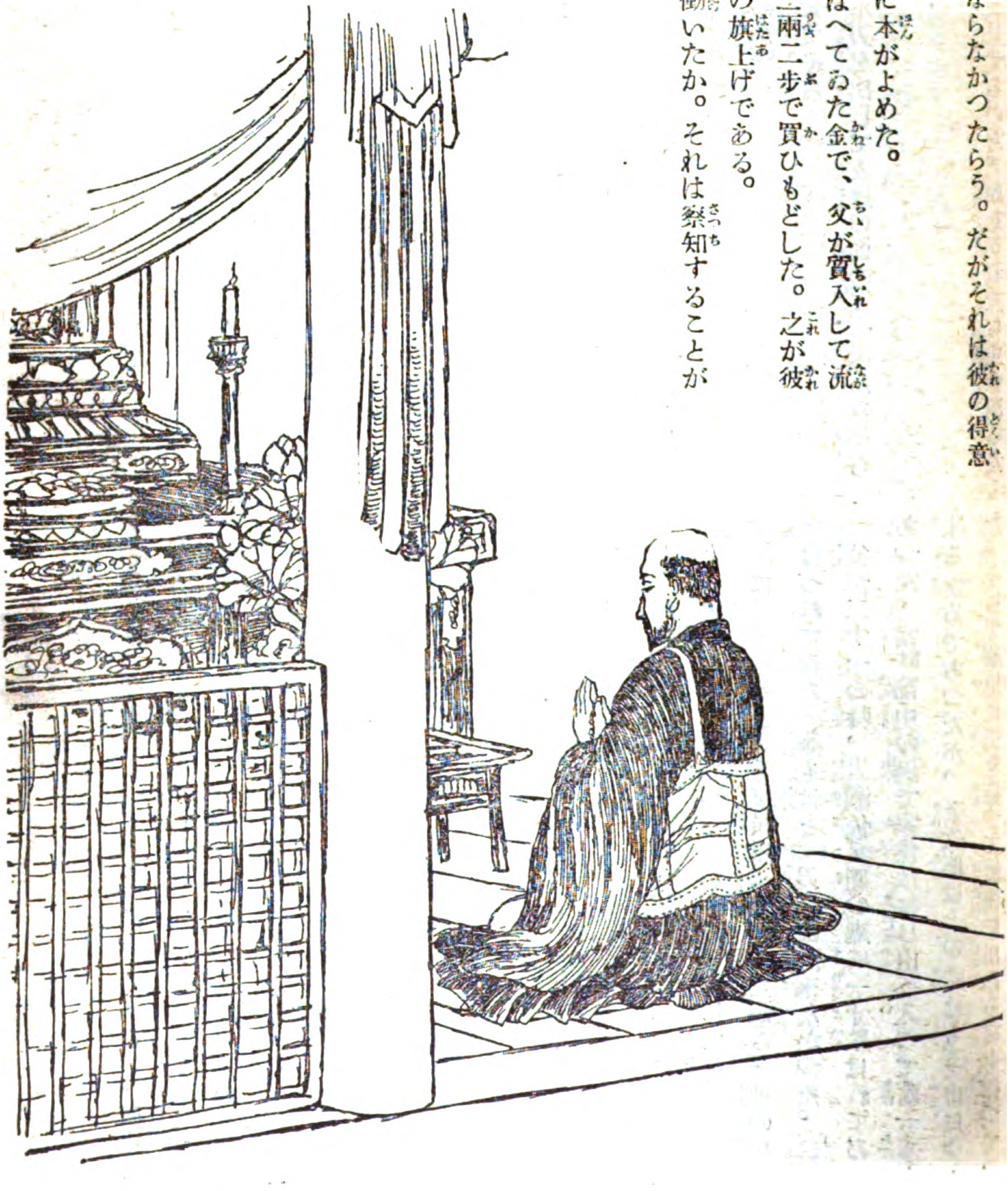
彼はもう氣兼ねせずに本がよめた。

彼はまづ第一にたくはへてゐた金で、父が質入して流した土地、九畝十歩を三兩二歩で買ひもどした。之が彼の我が家の復興の最初の旗上げである。

彼がこゝでどの位ゐ働いたか。それは察知することが出來るであらう。

彼は日夜家業をつとめ、仕事を段段手廣くしていつた。

そして彼は勸める人があつて結婚した。



あいつにや叶はない

彼は二三年でとう〳〵家を起した。そして父の失なつた田畑を買ひもどし、その上にだん〳〵廣げられていつた。

彼は働くことにかけて無類であつた許りではなく、農業にくはしいことも無類であり、又頭のよさでも無類であり、勉強することも無類であつた。彼は片田舍の百姓ではあつたが、栢山の二宮金次郎と云へば、すぐあの變り者かと云ふ風に近所で彼を知らないものはなかつた。彼は又強情でもあつた。自分の云ふことはあとにひかなかつた。だが彼の云ふことは本當だつたので、誰も不思議に思つた。彼は中々奇拔なことを云つた。しかし誰も彼に反對することは出來なかつた。

ある時彼は仲間と富士山にのぼつた、頂上近くに水があるので、皆不思議がつた。すると金次郎は全くそんなことは不思議はない。水がのぼつてくるのだと云つた。

『そんなことがあるものか』

『ない。よし證據を見せてやらう』

さう云つて金次郎は小刀を出して友達の頭のてつぺんを切らうとした。

『何をするのだ』

『頭のてつぺんを切つて見せるのだ。頭を切つたら血が出るだらう』

「あたりまへさ」

『そのやうに生きた水は下から昇つてくるのさ。體中の水は生きた水さ。だから上下左右に通ふ。大地の水も生きてゐるから上にもわき出るのだ。地外の水は死に水だ。だから下に許りおちるのだ。木のなかの水は生きてゐる、だからてつぺんまで上るのだ』

皆降參した。

彼の論法はこんな調子である。彼はどんなことでも自己流に合點がゆくまで考へてゐる。掘りぬき井戸や、温泉を見たら彼はよろこんで生きた水だと云ふであらう。

二宮金次郎と云へば、皆さはらないやうにしてゐた。『あいつにあつては叶はない』

金次郎は尊敬されると同時に煙たがられたにちがひない。彼はよく說教をしたにちがひないから。そして彼に大きな聲で斷定的に云はれると誰も反抗出來なかつたから。彼の生命力は人並はづれてゐた。誰も彼と太刀打は出來なかつた。

彼が二十一の時、岩瀨佐兵衛の處に一寸雇はれてゐたことがあつた。當時藩中の例で家僕は每日山へ入つて薪一束を採つて來る定めであつたが、金次郎はその時はもう山にゆかなかつた。そして部屋に引き籠つて繩機に用ゐる梭を作つて、それを

賣つて自分のとらなければならない分の薪を買つてすませた。そして彼は時間を節約して本をよんでゐた。

彼は中々經濟の心得のある男だつた。つぶしのきかない男ではなかつた。大事なのは義務を果すことであると同時に、勉強することであつた。時間は彼にとつて大事なものであつた。することとなすこと、彼は人並はづれて、そして彼一流の考へのもとに實行してゐた。

評判にならないわけにはゆかなかつた。

しかし彼には二十一の時、とり返しのつかない悲しみが、彼をまつてゐた。それは弟富次郎が九つで死んだことだつた。

彼はがつかりしないわけにはゆかなかつた。之から仕合せにしてやれるのにと思つたのに、その時に可憐な弟を死なしてしまつたのだから。だが之許りはどうにもならない。彼は嘆いて許りはゐられなかつた。

彼は段々自分の家を再興するだけでは力があまつて來た。二十二の時には、母の實家の伯父が死んだので、困つてゐるのを、丹誠して得た田圃を遣つて、それを助けた。

そして二十三の時には二宮家の總本家伊右衛門の跡を再興しようと骨を折つた。

彼は自分だけが富むことをもつて滿足しなかつた。自分の手のとゞく限り彼は誰をも富ましたかつた。其處が金次郎の金次郎たる處である。

自分だけがとめばいゝのなら、彼は非常な豪農になつたであらう。日本一の豪農にでもなれたらう。だがもうさうなつたら、僕は彼を尊敬することは出來ないであらう。

彼は彼自身のためにのみ生れた男ではなかつた。彼の内にある精神は彼に救世の仕事をする本願を起させないではやまなかつた。

それが彼の運命であつた。

運命は何處から彼をよび出すか。

彼は自分の方から求めなかつた。たゞ世間が實力ある彼をそつとしてはおいてくれなかつた。

大きな種をまいたのだ

當時小田原侯の大夫に服部十郎兵衛と云ふ人が居た。代々重役の家がらで、千三百石とつてゐたが、家政が亂れて今では千兩あまりの借金の利子さへはらへなくなり、整理のつけやうがなかつた。どうにもしやうがないので職を辭さうかと思つてゐた。

處がある日、彼に二宮金次郎の話をして、かう云ふ人に相談して、骨折つてもらへたら或は整理がつくかも知れないと話した人があつた。服部はそれをきいて大いに喜んだ。そして早速

使ひを出して、金次郎に家の整理をたのんだ。だが金次郎はすぐには承諾しなかつた。『私にはとてもそんな大任は果せません』金次郎はさう云つた。

だが今服部家にとつては金次郎が唯一のたよりだつた。他の人ではどうすることも出來なかつた。知れば知る程金次郎をたよるより他なかつた。再三、再四、たのまれて金次郎もとうとう決心をした。そして妻をよんで云つた。

『服部氏は領主の重臣だ、その力が私一人を信用して下さつて、節を屈し、禮を盡してたのんでくださるのだ。實際私が助けなければあの家はつぶれるのだ。つぶれゝば藩主も心配されるにちがひない、男子は己を知るもののために死ぬと云ふ言葉がある。私は決心して服部氏をたすけなければならない。しかしそれには五年の間私が向うへ行つて働かなければならない。その間の家事をしつかりひきうけてやつてくれ』

妻は泣いて承知した。

金次郎は再び決心したものとして立ち上つた。彼には成算が出來てゐた。あとはそれを實行するだけの根氣さだけである。



彼は服部家へ行つて云つた。

『私に全部お任せ下されば五年の内にきつときつと君の御心配をなくして見せます。しかし少しでもあなたの考へで私の計畫をかへられたら、私は責任がもてません。萬事任せていたゞけますか、』

『勿論任せる。他にもう道もないのだから』

『さうですか。それならば御安心下さい。しかしそれには千兩餘り負債をおかへしにならなければなりません。千石餘の世祿があつても今の處ないのと同じですから、節儉を守り、家をたもち、君恩と先祖の恩に報いることが必要と思ひます。今殿樣が、それにおきづきになり、自分の過をなほさうと思はれるならば、先づ御自身の身を責められることが必要と思ひます。それには食は飯と汁に限り、着物は木綿に限り、無用の事を決してしないこと、この三箇條を守ることが大事です。守つて戴けますか』

『よろこんで守る。それで家を興すことが出來ればこんな嬉しいことはない』

『ありがたい御決心です』

そして金次郎は下女、下男をよんで云つた。



『御主人の家事がゆきつまつてゐるので、今のまゝでゆくと御一家は三四年で倒れなければならない。それでもしあなたがたが、どうすればいゝか御存知だつたら云つてもらひたい』

『私達にはわかりません、どうかいゝやうにお計らひ下さい』

『あなた方が御主人の一家の御無事をのぞみそのために私にたのむ誠意は美しいことで、私は感心しました。しかし御一家を保つには私の示す通りをやつてもらはないと困ります。御主人の御意見もこの五年の間は一さい加へていたゞかず、たゞ私一人の指揮によつてこの一家を切りまはしてゆきますから、それに不服な人があつたらすぐ暇をとつて戴きたい』
『決して不服なぞは申しません』
其處で金次郎は自分の思ふ通りに整理をすることになつた。その時金次郎は二十三であつた。
彼は先づ收入と支出をしらべた。そしてしつかりした豫算をたて、方針をたてた。そして貸主をよんで事情を話して、五年の内に拂ふ約束をした。
服部家は千二百石の家がらだつたが、しかし千二百石と云ふのは千二百俵のことで年の收入は米の値段の上下によつて四百兩から六百兩の間だつた。
金次郎は數學的な緻密な頭の持ち主だつた。それが正確にきめて、そしてそれを又正確に監督して行なつた。五年たつと、千兩以上の借金をかへしてなほ三百兩のこつた。



金次郎はもう二十八になつてゐた。その三百兩をもつて服部夫婦の前に行つて云つた。
『五年前、殿樣のおたのみで、お家の整理にあたりましてから今日で丁度御約束の五年になりました。その間よく私の云ふことをお守り下さつたので、借金を全部返しまして、三百兩の金がのこりました。この内百兩は殿樣の手元において非常の時の君恩に報ゆる用として下さい。又この内の百兩は奥樣の今迄の御苦心の賞として奥樣にお上げになつて、それを別途として、家が再び衰へないための豫備になさるとい〻と思ひます。あと百金はどうぞ殿樣の御勝手にして下さい』
服部夫婦は感心して云つた。

『あなたのおかげでつぶれる處がたすかり、何とお禮を云つていゝかわかりません。このこつた金は私の金ではありません。すべてあなたのものです。しかしあなたの後來のことを教へて下さつた金は辭するのは反つて失禮と思ひますから、もらつておきますが、どうかこの百兩だけでも取つておいて下さい。あなたがうちで働いたらどんなに金が出來てゐたかわからないのですから、少しですがとつて下さい』

金次郎はよろこんで『それではお言葉に從つて戴いておきます。それから今後は私がしらべておきましたから、それによつて千石で生活をせられ、三百石はたくはへて臨時の時の用意にしておかれたら、今後御心配なことはないと思ひます』と云つた。

彼は百兩をもらつて服部夫婦の前をさがると、すぐ使はれてゐる男や女をよんで云つた。



『やつとお家も整理がつきました。之は殿樣や奧樣のお骨折りと同時にあなた方がよく私のやうなものゝ云ふことを聞いて骨折つて下さつたからで、そのお骨折りの褒美として殿樣から百兩戴いておいたから、どうか之を皆でおわけ下さい』

皆のよろこんだのは云ふまでもない。

そして金次郎は一文ももたずに我が家に歸つて來た。金次郎が普通の人間ではないことは之を見てもわかると思ふ。彼は大きな種をまいたのだ。そのかり入れるものは金ではなかつた。百兩をかり入れるために彼は働いたのではなかつた。

彼は百金をもらはなかつた清廉の故に賞められる人間としては少し大きすぎた。彼には大志があつた。彼のまいた種がどんな大木が生れるか、知つてゐるものがあれば彼だけである。彼の望みは救世にあつた。その眞理にあつた。(つづく)

名家百字文

小さき花

薄田泣菫



一葉蘭といふ草がある。深い山の木の下蔭に根をおろし、たつた一枚の葉と、二三寸の莖の端にたつた一つの小さな花を持つてゐるに過ぎない草である。そこらの草花が色彩と香氣とを濫費するのが多いなかに、これはまた何といふ謙遜な生れつきであらう。この草を見ると、破れた衣を着、ものかげに一炷の香をくゆらせて、靜かに祈念を凝らしてゐる貧しい尼の生涯が思はれる。

また思はれるのは、色とりどりな詞華集のなかに、たつた一首生地のままなる素朴さを殘してゐる無名詩人の、あの小さなかがやきである。

讀書は學に非ず

白井喬二



ナポレオンは孤島の配所で、二千七百冊の書物を讀んださうである。けれども、臨終のとき、その渾沌たる意識の中から叫ばれた言葉

は「ヅゼーよ」「マッセナよ」「我軍勝てり」「進め」「撃て」の五句であつたといふ事だ。實生活の根强さは、つひに英雄の心事を變へることが出來なかつた。「讀書は學に非ず」と山鹿素行は喝破してゐる。この戒心を用ひて讀書してこそ、やがて讀書もまた、學の王宮へ召されるであらう。



小人の鷹狩

遲塚麗水

綠の陰の安樂椅子に、老學士は睡つてゐる、其の夢に。
高麗豆のやうな小馬に乘つた豆粒に目鼻を描いたやうな狩裝束の小人の武者數騎、拳に据ゑた蠅より小さい鷹を放つて、飛び交ふ蜂や虻を驅つてゐた、やがて巨蟒が來たと微かな聲で叫びながら、駒に策うつて逃げ去つた。
夢から覺めると、三寸ばかりの細い蛇の子が、小徑の陰に南京珠のやうな眼を光らせてゐた。寓意のありさうな小話である。



池

土岐善麿

出入りの植木屋に庭の隅へ小さなコンクリートの池をつくらせた。息子が勘定をとりに來た時、すこし洩るやうだぜと云つたら、ヘエ、どうも新しい池は洩りますが、苔がはえたらとまりますといつた。
馬鹿々々しいので、笑つて金は拂つてやつた。

二三日後、親方が見廻りに來たので、そのことを云ふと、セガレの野郎、そんなことを申しましたか、相すみません、そのうちまた薄くセメントを塗りませうと、恐縮しながら云つた。

息子の見解だと、仕事はそれ切りになつてしまふが、親方の生活態度だと、また手間賃になる。どちらにしてもこつちは勘定を拂つてしまつたあとなのだが。

愚痴

長與善郎



昔僕は何にも解らなかつた時、そしてつまらぬ物を書いてゐた時、手にをへぬ不平家だつた。今になつて見ると、世の中の事は人が思ふよりは案外わりに資格相應になつて來るもんだ。少くともさう思つて生きる方が利口で、又得でもあると云ふ事が分つた。愚痴をこぼす前に、自分の眞正な資格を考へることつた。只資格を高めるだけを考へろ。僥倖を當てに思ひ煩ふものは俗物だ。

都會と自然

谷崎精二



田舍から始めて上京した青年が銀座通りに立つて高い洋館の屋根から靜かに夜の大空へ昇つて來た月を見て、其れを月だと思はなかつた。仁丹か何かの廣告裝置だと思つた——曾て聞いた此の話は少なからず私を微笑させる。

實際都會はそんなにも自然を人工化する。そして自然を人工化する事が、却つて本當に都會

が自然と調和する事なのだ。新装の高い建物は都會を美しくするばかりでなく、月を、空を自然其の物を、美しくする。街路に散つたビラ紙を吹き捲くる春風は、若草の野を亙る微風の様に心地よい。都會人に執つて都會を見失ふ事は同時に自然を見失ふ事である。



白樺の薪

白鳥省吾

千曲川の上流で金峰山の麓の或る部落に行つたことがある。戸數五十戸ぐらゐの處だが美人が多いといふ話であつた。

けれども美人はおろか、若い女の影も見えなかつた、一軒だけらしい雜貨店には婆さんが居た、川には材木流しの男が居た。小さい宿屋の夫婦は養蠶で忙がしがつてゐた。失望して歸る橋際で、白樺の薪を共に負うて休んでゐる四十ぐらゐの女と十ぐらゐの男の子を見た。その人達は極めて整つた容貌で、美しい膚をしてゐた。なるほどこの調子ならこの村の若い女は綺麗だらうと、私は若い美人を見なくとも滿足して歸つた。



眞は善を越ゆ

松原致遠

至孝の人中江藤樹は自分ほどの親不孝ものはないと言つた。眞の孝子には孝行などといふ觀念はなく親に對して盡し足らざるを慨くのみである。善行をなせりとするものに善人はない。わが惡を慨くもののみが善人である。



久留島武彦氏

眼のつけどころ

早蕨幼稚園主　久留島武彦

視界が廣ければ廣いだけ

「『運命の開拓』とか、成功とかいふことが、近頃の青年に、非常に強い刺戟を與へ、まだ生若い學生の身で、かゝる方面に、極度に神經を焦ら立たせる傾向が、特に著しく認められるやうであるが、これは、大いに考へものだと思ふ。

併し、働く神經を働かせるなといふのは、無理な註文であるから、私は寧ろ、この青年の焦ら立たしい心持に對して、聊かでも社會生活に經驗の多い者が、自己の體驗を披瀝して、『かゝることもあるものだ』といふ參考資料を提供するのが至當であり、義務であらうと信じる。その意味で、私は自分の體驗を、こゝに述べて見たい。

過去五十年の社會生活に於て、私は、自己の運命、或は立場を、より良き方面に轉換させたり、或は更に幸福なものを握つたり、大いに好都合な立場を取ることが出來たりした場合、その基因は何であつたか？如何なる心の働きが、かゝる結果に導いたかと回顧つて見ると、それは全く眼の着け處一つに基くやうに思はれる。

好運がないのではない。良き立場がないのではない。唯それに眼が着かなかつたのだ。狼狽て見當違ひを見てゐたり、焦慮りに焦慮つて、却つて眼が眩み、見出すべきものも見出し得なかつたのだ。故に、一度見出した時、氣が付いて見ると、それは前々から自分の眼前に轉がつてゐて、『こんなものが……』と輕んじて顧みなかつたものが、何ぞ知らん、自己を非常に優越な位置に導く重要なる基礎であつたことを發見することが多い。

故に、自己の將來を考へる者は、先づ、自分の眼を吟味せねばならぬ。自分の眼は明かであるか、自分の眼は果して正しい觀點に注がれてゐるか、一體何を見んとしてゐるのか、そして今何を見つゝあるかを充分考察した上でないと、折角眼を働か

せても、遂に徒勞に終らねばならない。詰り眼の着けどころが大切なのだ。

登山の經驗ある者は、誰も氣付くことであらう。山麓にあつた時と、山腹に立つて來し方の村落や平野を顧眺した時と、更に頂上を極めて一望千里の視野が眼下に展開した時とは、我々の視界は全く違つてゐる。登山者の位置が高くなればなる程、視界は廣まる如く、人生に於ても我吾の觀點の位置が高まるだけ、思想生活の範圍は擴大するのだ。

よく言ふことだが、素人は、飛行機が低空から墜落した場合は大禍もあるまいが、千米、二千米の上空から墜落した場合は、その慘禍は激甚であらうと考へる。成程、墜落する時は、高い程加速度も大であるから、慘禍の度も比較にならぬ激甚なものに相違ない。

併し、實際、空中で發動機に故障を生じ、進退全く谷まり、不時着陸を餘儀なくされた時、位置の高低は、何れが果して安全率が多いであらうか?



後藤新平伯

例へば、三百米の所で發動機が停つたとする、勢ひ空中滑走で着陸地を求める、その場合着陸地は高さの三倍を半徑とする圓內に求める原則と聞いてゐるが、九百米の半徑內には、或は單に麥畑と桑畑としか見出せないかも知れない。併し、これが若し千米、二千米の高さにあるなら、その三倍の半徑內には麥畑を越えた彼方に或は青綠の草原を見出すかも知れない。或は更にその附近に銀色に輝く河原を見出すかも知れない。即ち、素人考へでは危險率の多く見える上空ほど、飛行機には安全率が多いから、悠々として飛行し得るのだ。

吾人の生活に於ても、觀點の位置は高くせねばならぬ。高ければ高い程、幸福の草原や平和な河原など、包括範圍が廣く、從つて人生行路の安全率も多い筈である。

勝海舟伯の轆轤首說



勝海舟伯

嘗て後藤新平伯がまだ麻布狸穴に住んで居られた時、私に、こんな話をせられた。

『君は、僕の轆轤首の説といふのを聞いたことがあるかね。』

冬の寒い日であつた。伯は暖爐の前に立ち、無雑作にフロックコートの裾を捲つて、あの愛嬌のある口元に笑を浮べて、突然言ひ出された。

『いえ、まだ一向伺ひません。』

『これは勝海舟翁から承つた話なんだが、ちよつと面白いと思つたので、何か事に出會すと思ひ出す。それは斯うだ。』

伯は、そういつて次のやな話をされた。

伯が、例の名高い相馬事件で入牢し、後、出獄した時のことであつた。

一友人が伯に向つていつた。

『君も到頭前科者の中に入つた。今までのトン／＼拍子の出世が、これで鳥渡蹉跌いたやうだが、これから社會に乗り出すには、矢張り、ちと苦手のおやぢの説を聞いて見る必要があるだらう。それには、あの赤坂の氷川に隱居してゐられる勝海舟翁を一度訪ねて見たら何うだ。』

『うん、俺もさう思つてゐる。』

伯も常々、海舟翁は訪ねて見たいと思つてゐたから、かう答へた。すると友人、

『ところが、中々あの老人、一筋縄では行かない人で、二度や三度行つても會つて呉れん。さうかと思ふと、氣が向けば、通せといつて無雑作に會ふこともある。詰り、風の吹廻し次第だから、君も二三遍は無駄足を踏む覺悟で行つて見給へ。』

『ふむ――』

『それにあの人には妙な癖がある、必ず客に直面して坐らない、客の來る方角から少し横手に身を捻ぢらせ、背を丸くして坐り、煙草盆を前に置いて、眼鏡越しに睨みながら話すのが、あの人の癖だ。凄い眼だ。話もなか／＼皮肉だ。禪宗の問答の

出來損ねといふやうな所がある。餘程氣を付けて應對しないと、木で鼻を括つたやうな取扱ひを受けることがある。』

『成程。』

後藤伯は、それを聞いただけで、一種の興味を感じた。

そこで、或日、丁度赤坂を通り掛つたので、勝家の門を潜り、名刺を呈した。無論今日は老伯に面會は出來ないものと思つてゐると、何ういふ風の吹き廻しか、小間使が出て來て、

『どうぞお通り下さいまし。』

と言ふ。通れといふのを歸るにも當らぬから、後藤伯は上つたが、聊か小氣味が惡い。で、襖越しに手を突いて、靜かに押し開けながら躙り入ると、果して海舟翁は反對を向き、キヨトンとした調子で坐つてゐる。

『新平でございます、初めて御意を得ました。早速お目通りをお許し下さいまして、有難うございます。』

後藤伯は、委細構はず、一通りの挨拶をしたが、海舟翁は默つてゐる。そして、稍々暫くしてから、ゴホンと一つ咳拂ひをして、眼鏡越しにジロリと睨む。成程鋭い眼の光だ。來たなと思つてゐると、海舟翁が口を開いた。



大久保利通卿

『あゝ、お前さんも醫者だつたといふなあ。』

ぶつ切ら棒な挨拶。

『はあ、醫者と申しましても、ホンの藪醫の端くれでございまして……』

後藤伯が受けると、また暫くして、

『醫者なら、お前知つとるぢやらうが、人間の首の動かし方は分るか？』

遉がの後藤伯もこれには一寸たじろいだ。醫者だなあと念を押して置いて、醫者なら分るだらうが、人間の首の動かし方は分るかと問ふ。成程、禪宗の問答の出來損ねに相違ない。

『はい、……』

と答へて、後藤伯、二の句に詰つてゐると、海舟翁がいふ。

『あゝ大久保さんなあ。』

後藤伯は全く狐に抓まれた形。何しろ世の中に大久保と名乗る人も多いから、何の大久保であるか、一寸見當がつき兼ねて、間誤ついてゐる。とまた翁がいふ。

『あゝ大久保さんも能う首が動いたが、惜しいことに、たつた一ッ動かなかつた。それで清水谷で殺られた。』

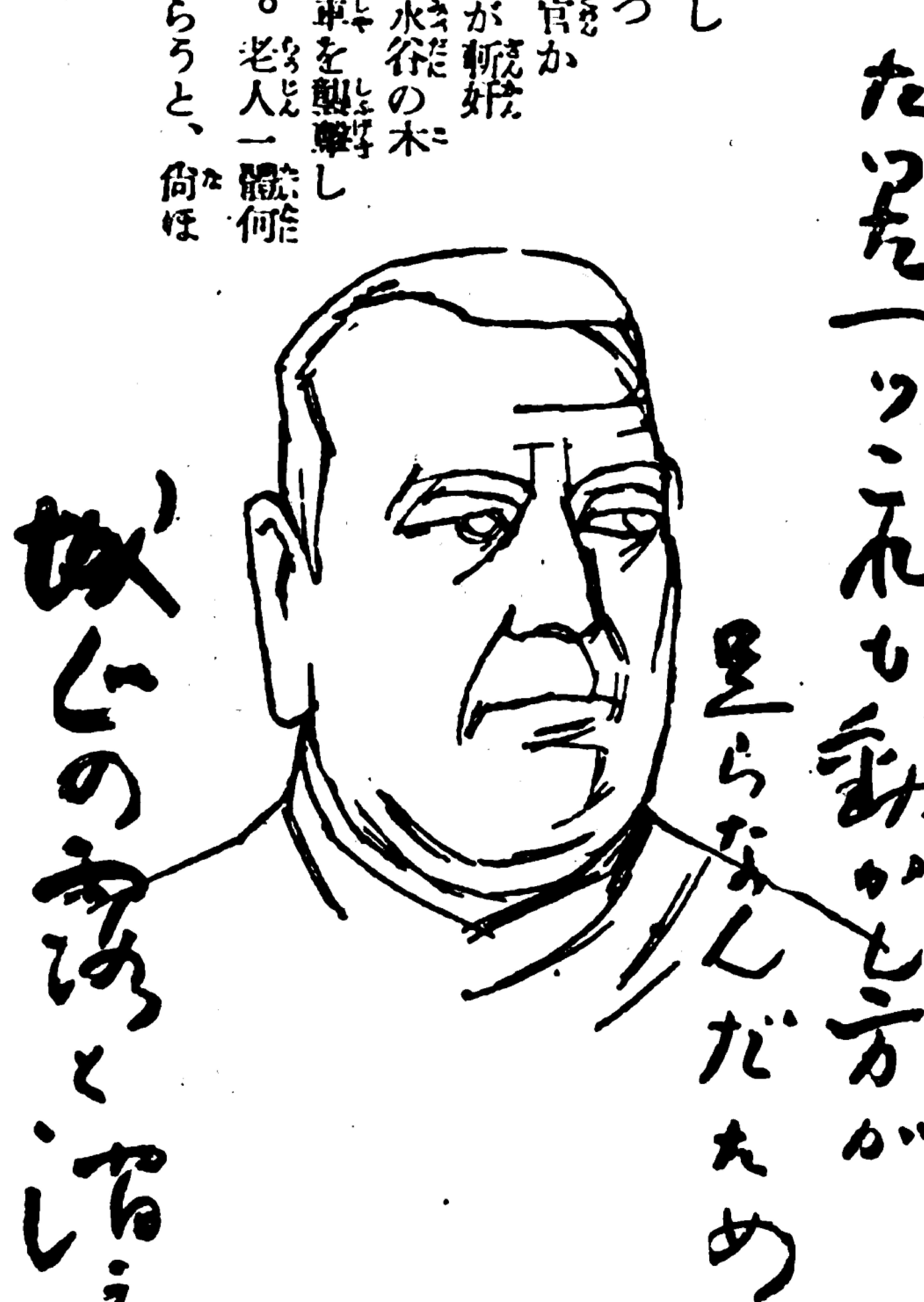
成程、清水谷でやられたといへば、參議大久保利通卿だ。併し、これは、首の動かし方を知るも知らぬもあつたものではない。太政官からの歸り途、島田一郎が斬奸狀を懐に入れて、清水谷の木下闇から飛び出し、馬車を驅撃してこれを刺殺したのだ。老人一體何をいはんとする積りだらうと、尚ほ耳を傾けてゐると、

『あゝ西郷どんなあ。』

といふ。海舟翁の話に西郷南洲の出ないことはないといふが、翁にとつては肝膽相照した唯一人の心友、如何にもさもあらんと思はれるが、西郷翁のことなら直ぐ分るから、後藤伯も、ハイ／＼と受答へをしてゐると、

『あゝ西郷さんも能う首が動いたが、たつた一ッ、これも動かし方が足らなんだため、城山の露と消えた。』

サア愈々出でて愈々難しくなつた。これを何と解釋すべきか、判斷に苦しむ。



西郷隆盛卿

併し、當年の後藤伯は若かつた。そこで、かゝる場合には、老人の前につゝしんで頭を低げるに限ると思つた。

『イヤ、新平未熟でございまして、甚だ心得ませんが、御隠居の御示教を仰ぎたう存じます。』

下手に出て頭を低げると、初めて老人の顔が少し寛いだ。そして莞爾やかに、後藤伯の方へ眼を捻ぢ向けるや、

『人間はよく物を見たい。世間を知りたいと思ひ、眼を見張

る、首を動かす、この努力は誰も同じだ。併し焦慮れば焦慮るほど、急げば急ぐほど、その首は肩の高さに坐つてしまふ。それ故に、見る所は誰も彼も同じだ。その間にあつて、大久保さんは、よく落着いて、焦慮らず騒がず、悠然と首を伸ばして人の上からものを見た。で遠くが見えた。現在よりも將來が見えた。千里二千里の彼方が見えた。故にあの人の施設經營を見ると、差向の人には一寸分らぬ、一體何をするのかと驚かれもし、怪しまれもしたが、さて今日になつて見ると、實にあの人の眼は高かつたと敬服される。然るに眼を下に置つた、足下を見ることが出來なかつた。ために島田一郎の暗殺する處となつた。

その反對に、西郷どんは、よう首が縮んだ人だ。足下がよう見えた。人情の裏が見透せた。世間の苦勞が見えた。けれどもあの人が、彼時にもう少し首を伸ばして、遠くを見、海外を見てくれて、更に手許を回顧つてくれたたら、どんなに宜かつたらうか。あの惜しい人を、城山に殺さずに濟んだと思ふ。詰り一つは伸びたが縮まなかつた、一つは縮んだが伸ばさなかつた。」

翁は斯う語つて來て、最後に附け加へた。

『後藤さん、貴方も大分近頃は新聞に書かれるやうになつたが、これから先は、轆轤首でなくちやなりませんぞ！』

後藤伯は、この話を私にせられた。私もまた面白い話だと思つて、その時の伯の話し振りさへ記憶してゐる。

脚下を照顧せよ

要するに觀點の置き所、換言すれば眼の着け所が、一生涯に如何に重大な働きをするかを考へねばならない。

物がないのではない。それが見えないのでもない。在る物の中から、見えてゐる物の中から、自分で自由にこれを拔くことも出來、取ることも出來る位置を與へられて居りながら、眼の着け所が惡いと、取るべきものを取らず却つて取るべからざるものを取る、眼を止むべきものに眼を逸らし、無用なものに眼を注ぐ不結果になる。

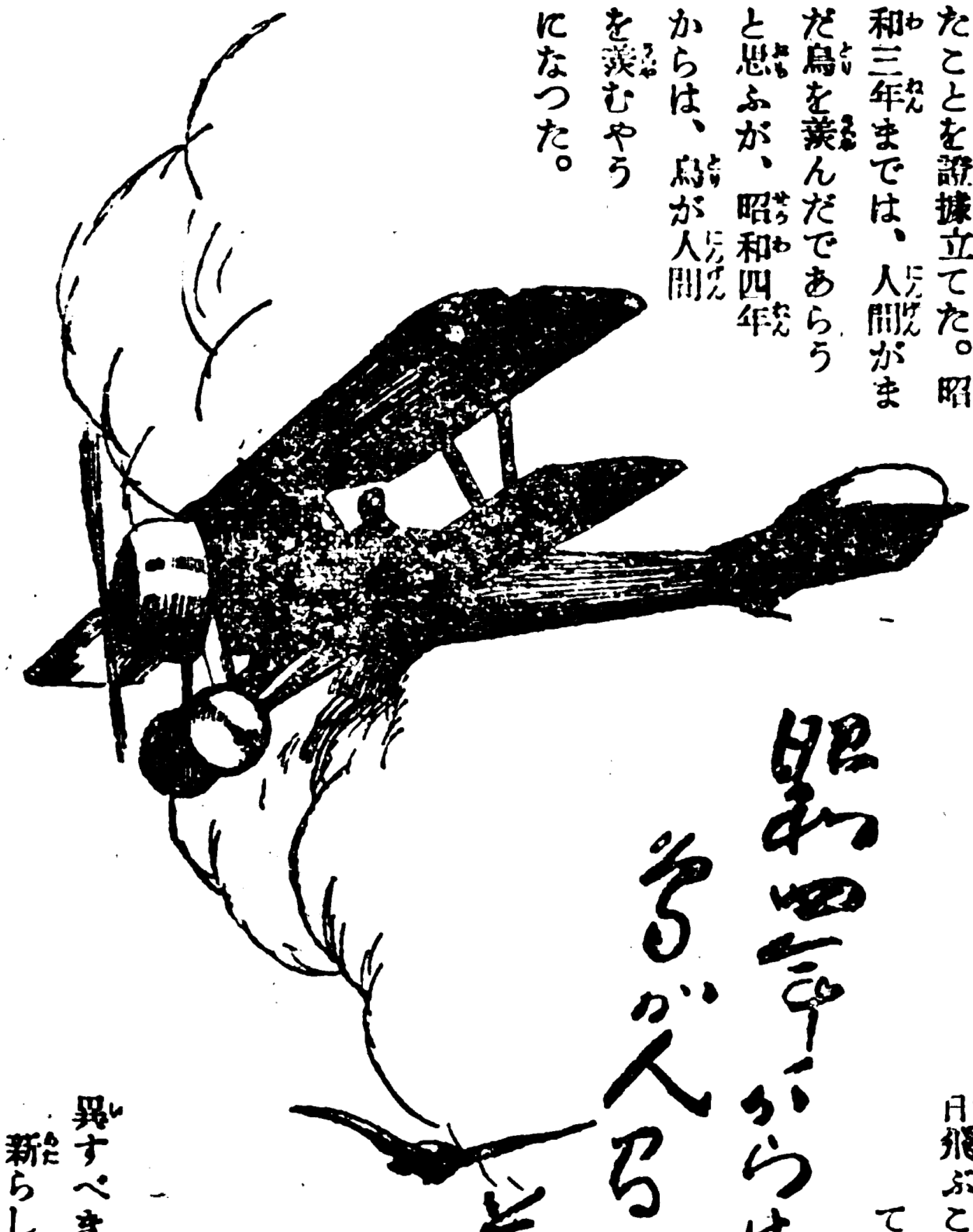
此處だ！　人間の處世方針や成功の秘訣は、特殊な位置や特別な技能や、又は特別の働きを必要條件とするものではない。平々凡々なものが、唯眼の着け所如何に依つて、平凡ならざるものに轉化するのだ。そこが人生の興味だ。社會生活の面白味だ。人生は苦患ではない。生活は忍苦の結晶でもない。眼の着け所一つで樂々と生きて行けるが、眼の着け處が惡いから忍苦になり、苦患にもなるのだ。

同じやうな問題だが、もう一つ實例がある。昭和四年の如き

は、殊に私のこの説を嘲弄をするものではないかと思ふ。

それは本年の元日から飛び始めて、五日間飛び續けた飛行機が亞米利加にある。名前をクエッションマークといふ疑はしき名目をつけてゐたが、事實はエキスクラメーションマークになつた。

詰り、空中征服は今や疑問ではなくなつた。立派に征服し得たことを證據立てた。昭和三年までは、人間がまだ鳥を羨んだであらうと思ふが、昭和四年からは、鳥が人間を羨むやうになつた。



即ち、如何なる鳥が五日間以上も空中に絶えず羽搏きしつゝ飛び得るものがあらうか！

所がこの百五十時間といふレコードは、六人に依つて成されたのであつたが、一月前の事實は、僅か二人の亞米利加青年に依つて、百七十時間といふレコードを示された。分り易くいへば七日七夜だ。斯うなつて來ると、もう十日飛ぶことも、二十日飛ぶことも、唯時間の問題で、一向珍らしい事ではなくたつてしまつた。

人類が鳥を羨んだのは、過去五萬年の生活であつた。人類が今日の如き社會生活を營んでから、

『あの鳥のやうに飛ぶ事が出來たら、何んたに面白いだらう？』

と、羨望の眼を空に向け續けること五萬年、遂にその希望は達せられなかつた。

それが十六年以前、一度百二十八尺を飛んでからは、忽然として過去の夢は現實となつた。そして十六年後の今日、百二十尺とは比較すべくもない距離を悠々百七十時間も飛び續けるに至つた。驚異すべきこの偉大なる結果は、抑も何に基くのか？

新らしいものを發見したのではない。今までになかつたもの

が、忽然として現はれたのでもない。唯、眼の着け所が違つたために、遂に空中征服を可能ならしめたのだ。

過去五萬年の間、人類の眼は、空を征服するものは羽搏きであると見てゐた。然るに、今より八十年以前、小さいもの程羽搏きの數多く、大きなものは羽搏きをせぬことに着眼した者があつた。彼のリ、エンタールやカヌート等が、それである。これは吾々の常に經驗してゐる所で、日當りのよい障子に打ッ突かりながら、ブン／＼音を立てゝ飛んで來る羽虫は、眼にも止まらない震動數で羽搏きをする。これが雀となり、燕となると、羽搏きの數が眼で算へられる。それが更に、鴉となり、鳶となると、羽搏くよりも、羽搏かざる姿勢が吾々の眼に止まる。彼のアンデス山に棲むといふコンドルの如きは、いつ羽搏くかと疑はれる程、唯その偉大なる兩翼を擴げたまゝ、空中を自由自在に征服してゐる。所謂翼の角度を變へて、風壓に依つて、自由自在に、左右上下に方向を轉換させながら、空中を飛翔してゐる。こゝに眼を着けたのであつた。

忽然として悟るものがあつた。風壓を翼面に受けて、角度を轉換すれば空中滑走が出來るといふことだ。そして考案されたのが、滑走機である。

その應用が、今から十六年前、亞米利加のライト兄弟によつてなされ、現實なる飛行機の製作となつて、初めて百二十尺を飛んだ。續いてドーヴアー海峡の飛躍となり、段々進歩して今日に及んだのである。

長い間人類が研究に研究を重ねた努力も、唯着眼點が悪かつたのみに、何等の業績を殘さなかつた。それに反して、一たび眼を轉じ、大きな鳥の羽搏きがないといふ事實に眼が着くと、忽ちにして空中を自由に飛べるやうになり、七日七夜飛び續け、尚ほ飛べる能力を示しながら、二人の青年は笑つて地上に立つといふ驚くべき進歩を見るに至つた。

然らば何萬年以前に羽虫はゐなかつたか？ 鳶やコンドルはゐなかつたか？ 否、彼等は、何萬年の昔から、悠々と空中滑走をして見せてゐたのだ。人類がそこに氣づかなかつた。眼を着けなかつたのみだ。

出來ないと思ふこと、到達し得ないと思ふこと、この問題によつて何ものか悟るところがありはしないだらうか？ 私は常にかく信じて生活を進めつゝある。唯自分の顧みて愧らず思ふことは、自分の眼がハツキリしてゐないこと、さうして見るべからざるものを見る。役にも立たないものに眼が止まることが多い。故に、私は常に、自己の觀點は今果して正しき方向に向けられてゐるかどうかを吟味しつゝ努力してゐるのだ。

『脚下を照顧せよ』とは禪家の語だ。この言葉は、前述のことを説明するものではないだらうか？（ ）

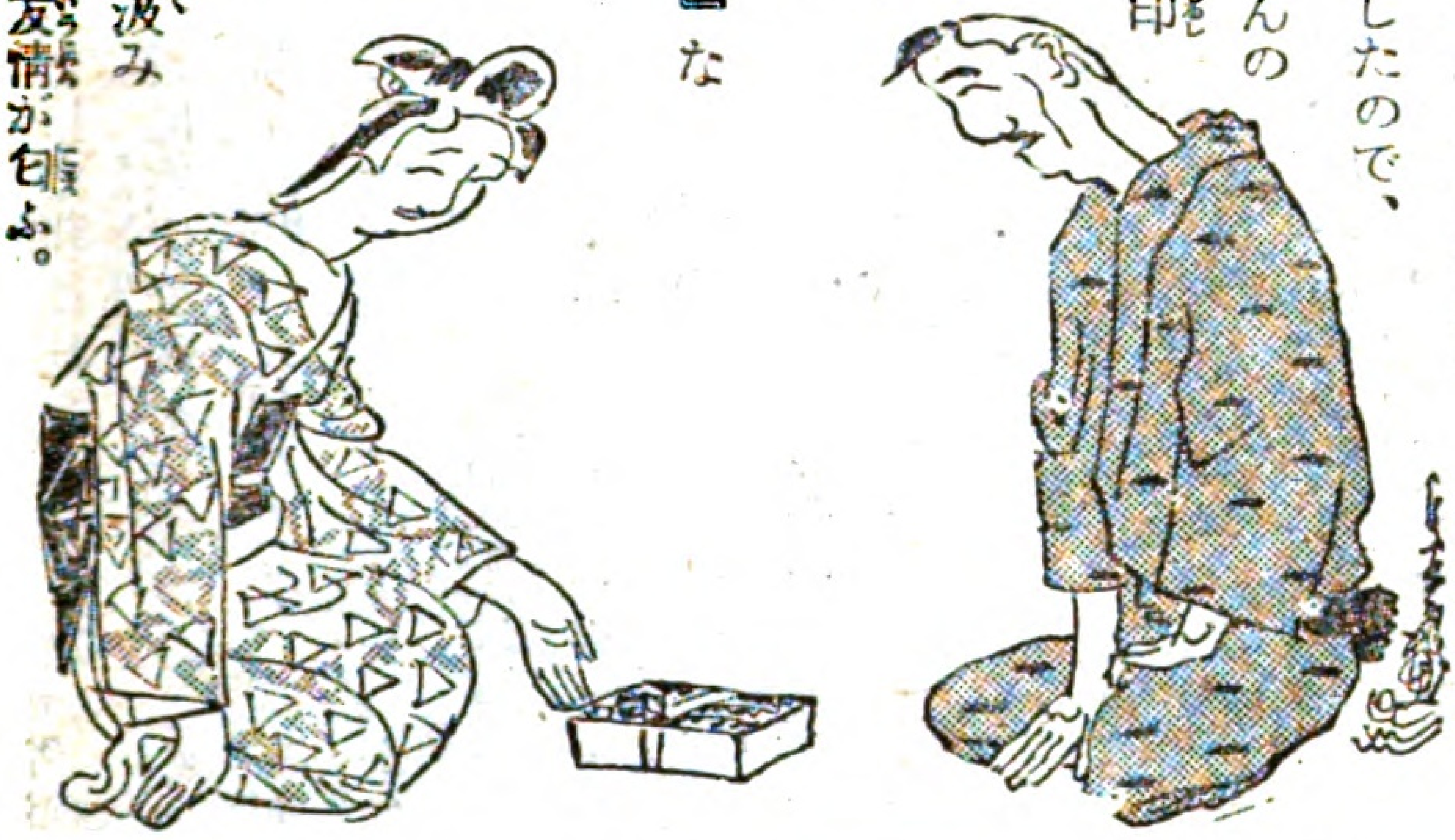
漫畫

魅力の世の中

向う三軒兩隣篇

田中比左良

一――『遠い肉身より近い他人』と昔から言ひ傳へる通り親しい向う三軒兩隣りを持つことは日常生活をどんなに力強う樂しうしてるか知れない。『一寸郷國へ行つて參りましたので、これはほんのお土産の印だけですが國の名物の栗團子を』なんかと、あつさりした隣附合になか〳〵汲み味ふべき友情が匂ふ。



二――『めつきり夜が長くなりましたねえ、昨夜の雪辱戰を願ひますかな？』

『さアいらつしやい、今晩は飛車角拔いて見せますかなアツハ、、、』

碁將棋の敵ほど憎くて可愛いものは無いといふか、碁敵を隣りに持つことは秋の夜長を忘れて暮せる。



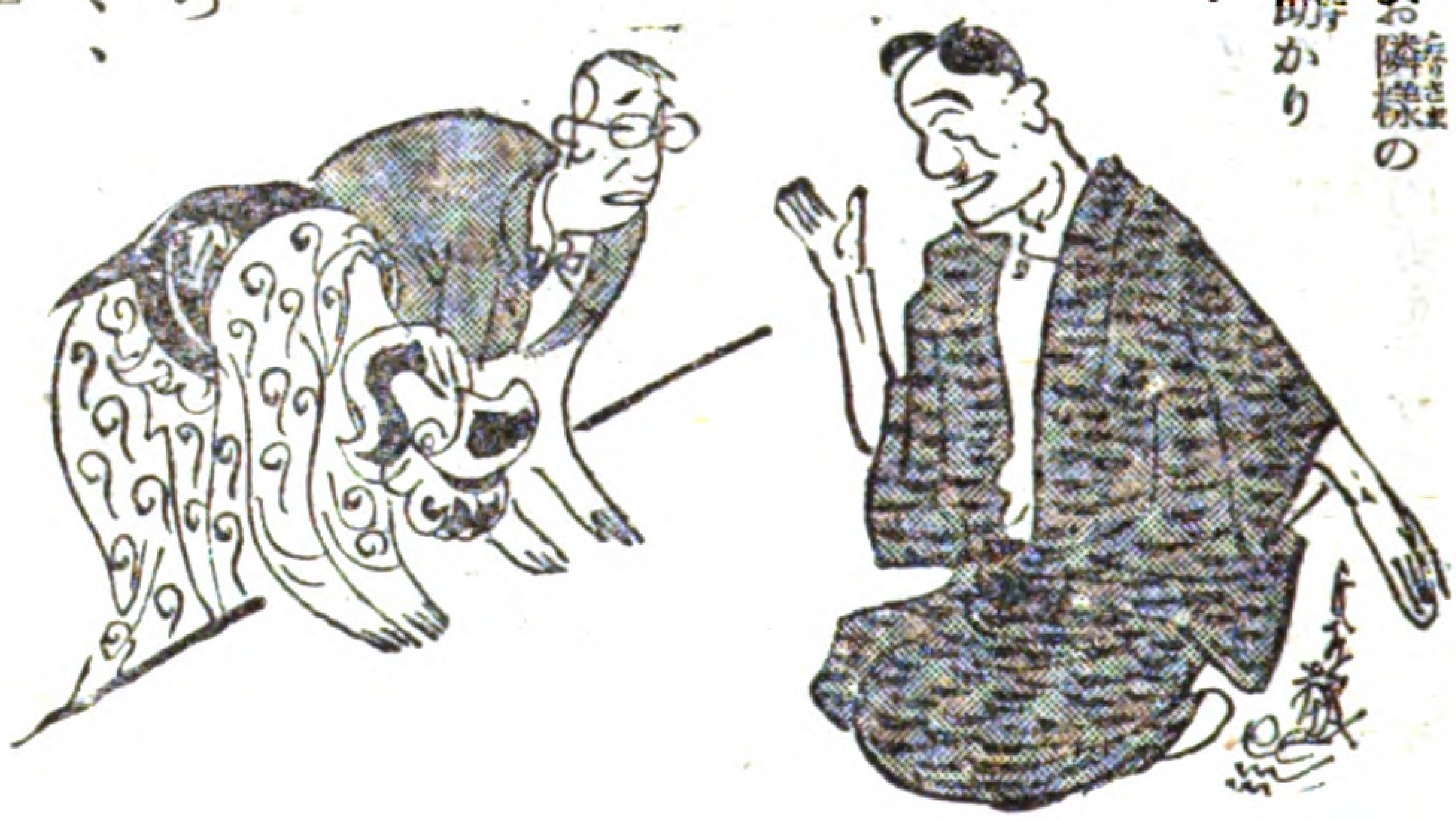
三――『奧樣、今度電氣館に掛る阪妻物は素的らしうございますのよ、奧樣御一しよに願へませんでせうか、奧樣さへいらつしやれば宅に頼みいゝんですから』

『まアあたしこそ御一しよに願ひたう存じますの、奧樣と御一しよなら宅に承知させますから』

とお互ひに利用し合つて一夕の歡を夫からせ占める。



四――隣りの夫婦喧嘩の仲裁に行つた翌日圓く治つた夫婦が禮に來た。



『全くお隣樣のお蔭で助かりました、あのまんま放て置いていただいたら何んな成行になつたか知れなかつたのを、、を、、』

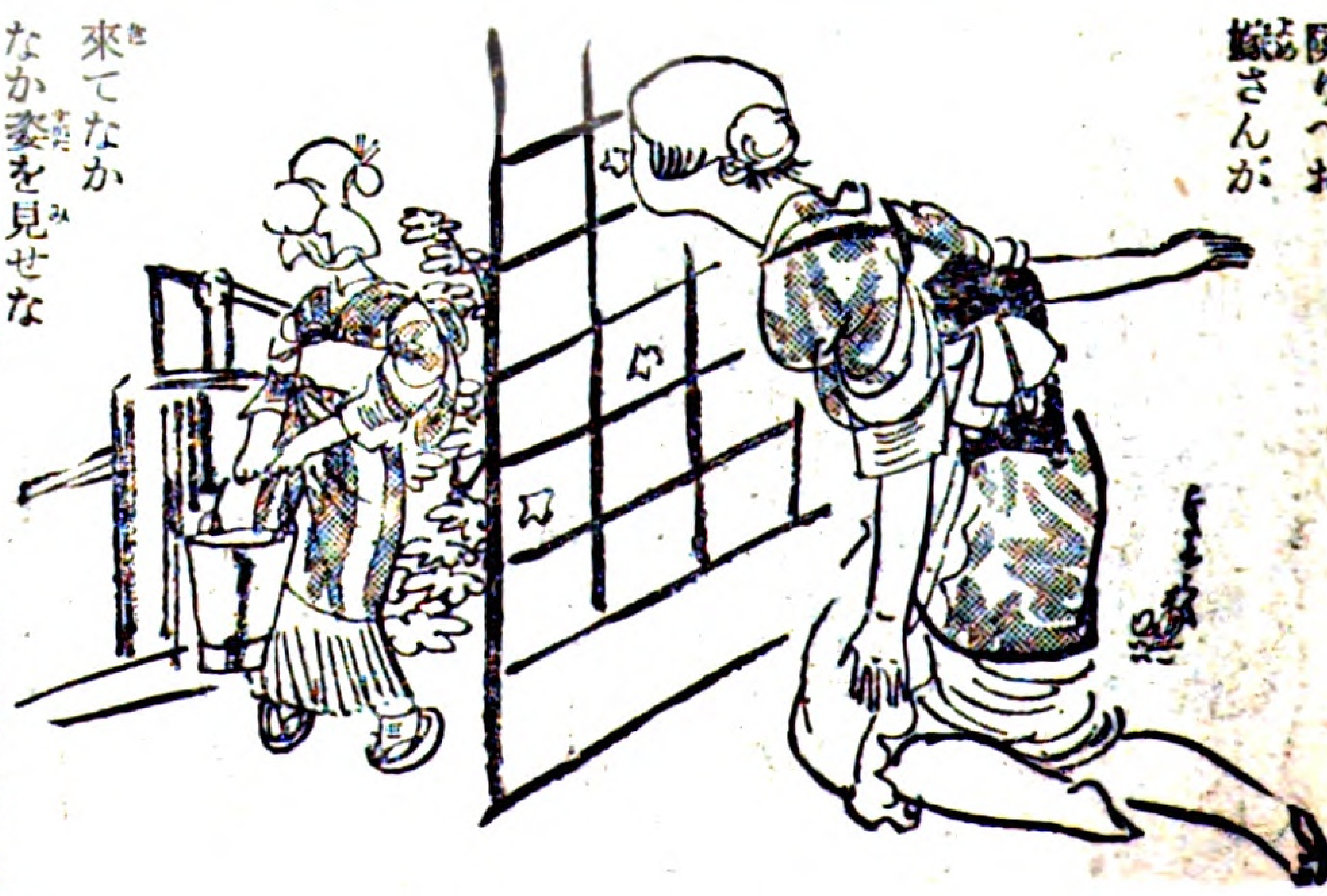
『いや宅の女房にも好い參考になりまして、イエ、ナニ、アハ、、、、、、まア〳〵お茶でも一服』

五――『會社へいかにも遠いから引越したいとは思ふんだけど近所にすつかりお馴染が出來てね、子供がお隣の子供達とあゝして仲よく遊ぶとこを眺めると、つい引越す決心が鈍るのだアハ、、、』

『全くだよ、其處が人間のしほらしい好いとこなんさアハ、、、、』

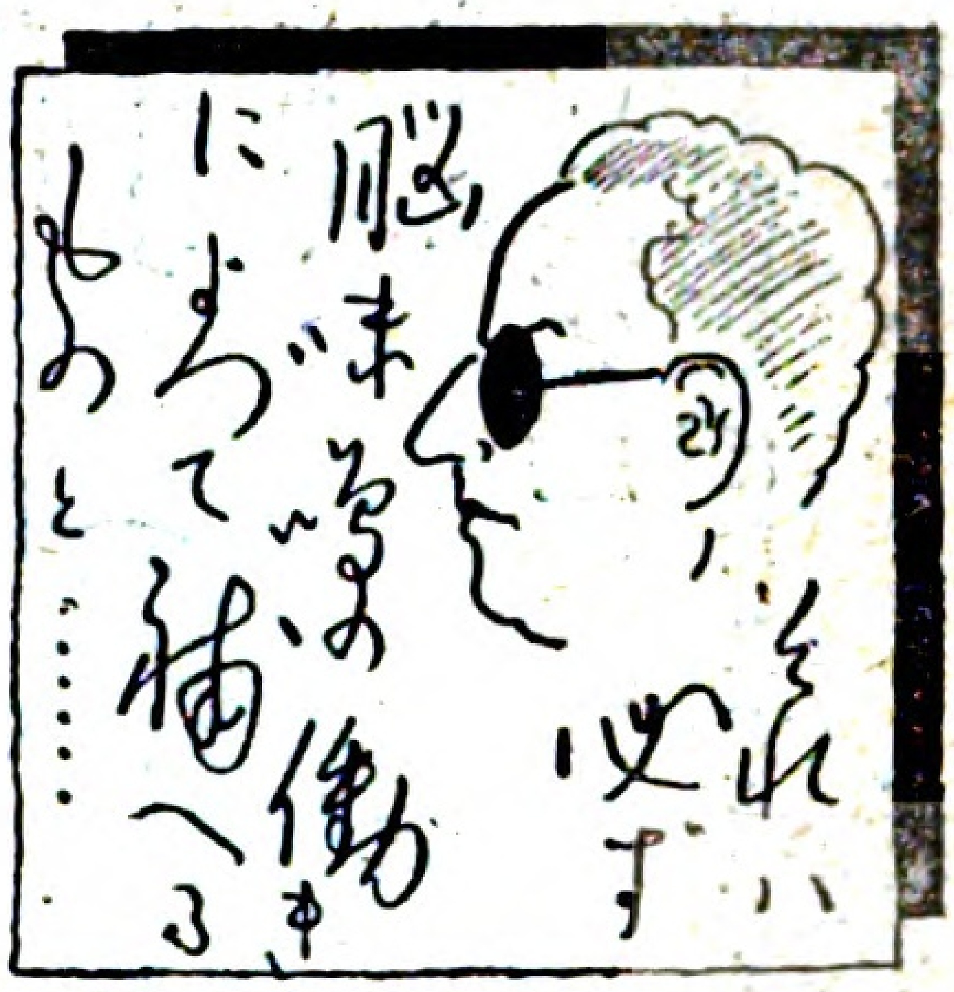


六――お隣りへお嫁さんが來てなかなか姿を見せなかつたが、三日目にとう〳〵井戸端へ姿を現した。



『貴郎一寸々々、出たよ出たよ出ましたよ』近所の女連大騒ぎ。

こんなのも向う三軒兩隣りの魅力の一ツである。



元氣を出す秘訣

ニフィセンシー協會々長　池田藤四郎

アメリカの鐵道界に於いて、當時賣出しの大人物、ジョン・バーネット君は、田舍鍛冶屋の小倅であつたが、子供の時分に視力を傷め、力も度胸も充分備はつて居ながら、どうにも元氣が出なかつた。

如何に腕力があつても、兩眼の故障では、鍛冶職を繼ぐことも出來ない。先づ何よりも大事な鐵材の火色熱加減が判らぬやうでは、てんで仕事の見當もつかない。父親はこの事を甚く心配した。醫者にも診せ、養生も手の屆くかぎり行はせたのだが、大した効驗もなかつた。

ジョンは、スツカリ打萎れて、毎日爲すこともなく、村外れのステーション附近を、ブラ〳〵して居た。門前の小僧が、習はぬ御經をスラ〳〵と讀むやうに、彼は何時しか、ステーション内で電信技手の忙しげな手つきを見ながら、トンツートントンの電信符號を呑込んで了つた。電信技手と土地の子供等は、何處の國でも、スグ懇意になる。御人好しの技手は、ジョンに電信機械を説明してくれた。偶にはキイをたゝくことさへ教へたりなどした。

それが緣となつて、彼は其の鐵道會社の電信技手に雇はれ、六年間キイをたゝく身分となつたのだ。大きな望みをいだく少年は、無心に電報の着發は扱はない。ジョンは、油斷なく氣を配つて、電報の文面を研究した。機關車や貨車のヤリクリ、天氣模樣と列車の發着關係、農作物と乘客の動き工合、その他鐵道業者の當然心得べき事柄を、電報の文面から推して、悉く覺え込んで了つた。

時には切符賣りの手傳、開札の手替などをも辭せず、年寄客の手荷物を運んだり、町場へ送り出す牛乳の大罐、さては取扱ひに面倒な豚や鷄の積込にも手を藉して居た。

段々仕事を覺えて居る内に、何とも言へぬ一種の元氣が出て

來た。折よく彼は、その勉強振りを認められ、操車係の助手として、大都會の停車場へ轉勤を命ぜられた。

自分の視力に故障があつても、それは必ず腦味噌の働きによつて補へるものと悟つたところは、大いに買つてやるべきだ。身の不幸を喞つばかりでは、結局自己憐愍に陷つて、何事も爲し得ない。

心得方の正しかつたジヨン・バーネットの出世は、實にトシトン拍子であつた。その間の長い道中は一切此所に略すとして、彼は終にアメリカ隨一のニユウヨーク中央鐵道會社の副社長をつとめる身分となつたのだ。

鐵道に關することなら、何でも承知して居たジヨンは、到底他人の所有する鐵道に高級役員としてとゞまることは出來ない。彼は、その當時破産に瀕して居た俗稱ニツクル・プレート社線を、友人と協同で手に入れた。



ジヨン・バーネット氏

誰も彼も手を出しかねて居た有名なボロ鐵道は、ジヨンの大膽極まる經營法の御蔭で、忽ち息を吹返したばかりでなく、十年目には、立派な儲け事業となつて、反古同樣の株券に大したプレミアムがつくやうになつた。

それに勢ひづいたジヨンは、更に手を伸ばして多數の聯絡線を買收し、思ひきり巨額の資本を投じて、全線の整理を行つた。普通の鐵道經營者では、迚もその眞似も出來まいと思はれたのは、彼の手で一時に三百三十五臺の舊式機關車を廢車にして、殆ど一億弗近くの新支出を斷行し、多數の新式機關車やら、貨車客車を買入れたことだ。

ボロ鐵道の合同は、とゞのつまり、アメリカの東部三大幹線中へ、更に一本加へることになつた。從來之は殆んど不可能と見做され、餘程の大器量人でも、これだけは手がつけられぬものと諦めて居たのだ。

それを鍛冶屋の小伜が、多くの年月をかけずに、易々と爲し遂げたのは、一に元氣と勇氣の賜であつた。元氣よく一日二十時間づつ働きづめであつたのも、要するに彼が人の氣をもつかぬ點に至るまで、鐵道事業の一切を調べつくして、全智全能の鐵道神になり納まつたからだ。

元氣の正體は、健康と勇氣と自信、それに熱心を加味したものだ。殊に自信がなくては、金輪際、元氣は出て來ない。自分の一身を投じた仕事に關して、何もかも知りつくして了へば、否應なく自信がついて來る。

ジョン・バーネット君は、電信技手から鐵道の運輸方面へまはされ、その與へられたる機會を十二分に利用して、專門家以上に鐵道通となつたものだ。萬事を心得た人は、事に當つて常に自信がある。先々の見極めがつくから、自然元氣も出るのだ。

バーネット君の目覺ましき成功は、今日アメリカ中の評判となつて居る。而かもそれが幸運の惠によつたものでなく、一に自信を土臺に置いた元氣一點張の、極めて秩序正しいものであつたことを思ふと、吾々も、この先油斷なく、元氣の修養に身を入れなくてはならない。

知識から自信が生れ、自信は人を元氣づける。之に對して、異論のある筈もない。活々とした元氣のある商店員は、品物の説明が正に御手に入つたものだ。さういふ店員に出會つては、氣持よく物を買はされる。彼は物を能く知つて居るからだ。所謂知識の所有者であるからだ。

巾ケ也もなく、陽氣放溢の人物は、引込思案の人よりも、成功の機會が多い。困ることには、無内容のカラ元氣を、本當の元氣と心得て、社會の各方面を泳ぎまはる人間の多いことだ。



『どうだ、我輩の元氣振りを見てくれ。』

と、飛んだり跳ねたり、大聲で怒鳴り散らすやからに限つて、進歩がない。愉快に、元氣に、世を過して行くには、日本の將來を、何處までも信じて居らねばならぬ。一時の不景氣や、辻褄の合はぬ政治家の態度を見て、

『日本もこれでは到底駄目だ。』

などと悲觀すれば、本當に樂觀すべき事情が生じても、一向それが目には映らない。

生前、飛ぶ鳥をも落す勢であつた金融王大モーガンは、會

ふ人毎に、

『この世で成功するには、萬事を樂觀するに限る。』

と語つたものだ。

凡そ悲觀論ほど尤もらしく聞えるものはない。引込思案の人は、どうかすると着實無類の堅人と見られて、萬事を任される。その結果のいゝこともあり、恐ろしく悪いこともある。さて、世界の人口は、年々歳々、殖える一方だ。

世界の富も亦、増すばかりで減ることはない。地中から新たに掘出す富、捨てて顧みられなかつた水の流れを利用する動力、科學の進歩發達、文化の向上、右を見ても左を見ても、氣を強くすることのみだ。

ジリ〳〵と進むこの世界に住んで居ながら、何もせずに立停つて居る人は、後日發心して動き出しても、容易には追付けない。



それこれを知つたなら、元氣よく働くことだ。

元氣の有る無しは、場合によつて、自分にも判らない。親しくして居る人が、それを一番能く知つて居る。二三の親友に、遠慮のないところを言つて貰へば、果して無内容のハシヤギ者か、それとも元氣一杯の精力家であるか、それがハツキりする。

『自分では相應に元氣があると思つては居るが、一體君の目には、どう見えるか、友達甲斐に遠慮のないところを聞かしてくれ給へ。』

と聞いて見るのだ。人に小ウルサがられて居るのを知らずに、元氣者の積りでハシヤギ廻る男ほど、氣の毒なものはない。

萬一にも、元氣が缺けて居ると知つたなら、それを身につける工風に取りかゝる。

第一、元氣の容物は、生身の肉體であるから、何よりも先づ健康に注意する。人は丈夫でなければ元氣は出て來ない。

頭痛、便通、息切れ、睡眠、疲勞、さういふ點に氣をくばつて居ると、健康狀態を突留める手がかりとなるものだ。一日一度は、必ず汗ばむ程の運動を試みる。朝起きて二合くらゐの生水を飲む。田舎なれば、薪割をするとか、都會なれば、早足の

散歩又は啞鈴運動などが適當だ。

大抵の病氣は、適度の運動と、誰も心得て居る普通の衞生法を守つて、恢復は容易だ。少々手重いと覺つたなら、醫者に診て貰ふ。

とに角、年に一度ぐらゐは、醫者の手で健康診斷を受けるのがよろしい。

次に元氣者となるには、是非ともニコ〳〵主義を守らなければならない。如何に苦虫主義の人でも、毎日凡そ十分間づつ、鏡の前で、

『御機嫌よう、御休みなさい。御早うございます。どうも有りがたうございます。』

といつたやうな言葉を使つて見る。これを單に子供らしい馬鹿げたものと思つては、よろしくない。斯ういふ事柄を、多年に渉つて研究して居る專門家の苦心を、無下に斥けてはならない。ニコ〳〵に必要の顏面筋肉を、存分に發達させると、澁面が作れなくなるとさへ言はれて居る。

この顏面筋肉運動を、一日十五分間づつ、一ケ月間缺かさずに實行して居ると、容貌に和か味が加はり、相手方に好印象を與ふるものだ。

現在の鋼鐵王チャールズ・シュワブ君のニコ〳〵顏が、若しも金錢で買へるものなら、即座に百萬弗を拂ふと言つた人もあるくらゐだ。



この先、益々人口も殖え、品物も殖え、忙しくなる一方だと知つたならば、浮かぬ顏などして居られるものではない。

ニコ〳〵の次ぎには、勇氣を養ふことが必要だ。恐怖心と臆病神に取りつかれては、何事もなし得ない。

人間の持つて生れた恐怖心は、決して多いのではない。この問題を二十ケ年餘續いて研究して居る心理治療會のデーヴィッド・ミッチエル博士は、人間に生來備はつて居る恐怖心を、僅か二つだと發表した。

實驗者は、生れて間もない赤子を抱き上げ、突然手を離して、柔い布團の上へ、輕くそれを落した。赤子は、驚いて泣出した。

持つて生れた恐怖心の一は、これだ。

次に、赤子の傍で、戸をピシヤリと音を立てて閉めたり、犬を吠えさせたり、金棒を床の上へ落したり、色々音をさせて見たら、赤子はワツと泣出した。これが先天的恐怖心の二である。

この外、學者は數々の手段方法によつて、赤子を脅し、その恐怖心をためして見たのだが、大きな音を立てた時と、高いところから落ちた場合とを除き、外に何の手



應へもなかつた。

若しもこの研究の結果が正しいとすれば、人間の恐怖心は、大部分、生れてから後に覺えたもの丶みだ。

中途で身に覺えた恐怖心は、實驗心理學の應用によつて、必ずそれを拭ひとることが出來る。

少年時代に、恐ろしい目にも逢はず、怯えるやうな話を聞かなかつたものは、全然怖いもの知らずで、ノビ〱と成長する。絶對に恐怖を經驗せずに育つたものは、成長後、恐ろしい場合に出會つても、割合に平氣だ。たとへば、雜沓する道路で、自動車に轢かれかゝつても、怖いもの知らずの子供は、狼狽して轢かれるやうなことはない。

斯うして育つた子供は、自然勇氣の分量が多いと見られる。勇氣と、蠻勇とは、全く別物だ。向ふ見ずの蠻勇は、確信のない勇氣にひとしい。日の下開山天下の横綱力士をひねり倒さうとしても、勇氣だけでは、先方が倒れない。充分に稽古を積んで、五體を強くすれば、その確信に力づけられた勇氣によつて、敵を倒せる。勇氣は必ずしも腕力沙汰を必要としない。それは全く心の働きである。であるから、その出發點を、銘々の仕事に對する徹底的の確信に置くべきだ。

相手の人間は、すべて自分同樣、生身の人に過ぎないと覺れば、その確信が勇氣を生むものだ。何時までも幽靈を見て、怖

い怖いでは、果しがつかない。

根據ある自信は、元氣の母だと言はれて居る。根據とはジョン・バーネット君の場合の如く、事物に關する知識に外ならない。銘々の目的を達するに必要の事柄について、それの間に合ふ知識と經驗とを、身につけさへすれば、自信も元氣も出て來るものだ。

元氣の土臺となつて居る自信は、自己解剖を試みて、大に湧き起つて來る。

自己解剖を、一例によつて示せば、左の通りだ。

1 自分は十六歳の時、小學校を、中以上の成績で卒業した。學校の手不足を氣の毒に思ひ、無給で一年間、一番下の級を教へた。

2 次に保險會社の給仕に雇はれた。三年つとめて、使ひ走りやら、社員の勤め振りを見て居る内に、どうやら自然に保險の仕事が判るやうになつて來た。

3 兵役の關係で會社を罷めた。戻つて來れば、何時でも又使つてやると言はれた。

4 除隊後、會社へ戻つて、人のイヤがる外交を一ヶ年やつた。成績中の下。

5 友人の手引で、ある會社の夜勤事務員となり、給料を學費に充てゝ大學に學んだ。氣に入らぬ仕事ではあつたが、大學を卒業するまで勤めて居た。

6 學問は割合に好き、享樂は一切避けた。

7 病妹の世話と、家事の手傳ひなどで、相應に忙しかつた。

8 非常に失望したことも、再々であつたが、どうやらそれに打勝つことが出來た。

9 終始一貫、眞つ正直で通した。

10 大抵の仕事は、兎に角間違へずにやれる。時間もキチンと守れる積りだ。

之に類した事實を、幾つも書上げて更に友人十名の姓名を、書き取り、その人達と自分とを比較して見る。たとへば、

1 甲に比べると、自分の方が着實だ。

2 乙よりも、風采身の廻りに一層注意する。

3 丙よりも、教育がある。

4 丁よりも、判斷がよい。

斯んな順序で、特殊の點について、友達と自分とを比較し、その優劣を具體的に書いて見る。この比較によつて、自分の力量が、幾分か正確に判つて來る。何もかも、人に劣るといふ場合は、極めて稀なものだ。

但し歷史にその名を留むる巨人と比較しては容易に自信が出て來ない。けれども、天は公平だ。何人に對しても、特徴を授

けて居る。正直を多分に授けられたのは、それを飽まで磨いて居れとの神意だ。

本當の正直者は、目的のために手段を選ばぬ大政治家大實業家を、眼下に見下し得るのだ。自分を他と比較して、少くとも或一點につき、自分でも滿更ではないといふ確信を得たならば、おのづから自信の念が湧いてくる。

面倒を厭はず、前に記した例に從ひ、自己解剖を基礎として、自他の比較を試みると、意外の收穫にありつける。

熱心に缺くるところがあつては、元氣の出しやうがない。

曾てアメリカの一大實業雜誌社へ訪ねて來た十五六歳の一少年があつた。

少年は、通信係の助手になりたいといふ希望を述べた。社主は快く少年を雇入れて、毎週十貳弗の給料を彼に支拂つた。

少年の教育は、小學程度であつた。けれども彼は、教育の不足を十二分に補うて、まだあり餘る程の熱心を持合はして居た。その仕事には、白熱化した眞心がこもつて居た。



通信係の助手として、少年の認めた勸誘文は、空前の成績を擧げた。その手紙にこもつた熱は、忽ち名宛人へ傳染して、同社の雜誌を購讀せねば、商賣が出來ないとまで思込まれたものだ。

雜誌の發行部數は、瞬く間に增した。少年は入社後三年經つか經たぬうちに、年俸貳千五百弗と、年極賣上總額四十萬弗に對する二步口錢、即ち八千弗、合はせて一萬五百弗を所得する身分になつた。その後貳萬五千弗の年俸で、この熱心な男は、他の會社へ召抱へられた。

『自分は、この仕事なら熱心にやれる。飽まで踏止まつても、熱の出し甲斐がある。』

といふ確信があれば、捨てゝおいても熱心になれるものだ。さういふ氣組となるには、矢張り仕事の一切を紙へ書きならべて、丁寧に考へる。假に通信係であるとすれば、通信文の要領を、相手方と親しく面會して語る時の心意氣で、それをつくる。色々の場合を豫想して一と先づ問答風に要領を文書化して見る。考へれば考へたゞけのことはある

ものだ。軈てその結果が現はれて來ると、驚くほど熱度を増し、仕事が第一、報酬は二の次ぎと見るやうになる。

要するに、本當の元氣は、健康、ニコニコ、勇氣、自信、熱心等が、渾然と一體をなしたるところに、盡きざる泉の如く湧いて來るものだ。

その一を缺き、その二を缺いた元氣は、チンバの元氣だ。チンバは兎角ころび易い。元氣よく轉ぶなどは感心出來ない。

そこで元氣を養ふ秘訣は、此所に記した筆法で、凡ての條件を文書化する一點にある。

何でも書いて考へる。具體的に物事を書き現はすといふことは、曖昧を明確に變じ、事物を暗黑から光明へ引き出すことだ。

症狀不明では、明確な治療法を講ずる手がかりがない。病源を突留めてこそ、手當も出來るのだ。

何となく蟲が好かぬと思つただけでは、益々間柄が惡くなる。蟲の好かぬ理由と、相手方の長所とを、具體的に紙へ認めて見ると、蟲の好かぬ點が、案外ツマラヌ事だと判つて、その反對に相手の長所が眼について來る。

その人のいゝところが判ると、氣持よく交際を永續することが出來る。

萬事この調子で紙へ書いて見る。

それも決して、毎日行ふ必要はない。アメリカの專門家の研究と實驗によれば、三ケ月毎に一週間づつ之をやると、驚くほどの效驗があるといふことだ。即ち之は年に四週間の辛抱だ。

この辛抱が出來れば、全然その人の性格を一變して、元氣滿滿たる立派な人物に仕上げ得るのだ。物はやつて見なければ判らない。唯讀んで感心したばかりでは、眞の味が出て來ない。



花賣り娘

霜田史光

花を召しませ！
花を召しませ！
乙女ごころの鈴蘭や
熱い情のアネモネや
山でさびしい車百合
都に派手な金蓮花
銀座の街に
灯がをどり
道ゆく足の
交響樂

月はいつ出て
いつ沈む
情忘れた人々よ
せめて野の味
山の味――
花を召しませ！
花を召しませ！」





怪盗夜叉王

前田曙山
挿繪 山川秀峰

大牢の美味

屋敷の周圍に汐入の濠を繞らして、高野槇の生垣、名代の梅林には點點たる若芽の仄めき、月朧の樹影は斜めに仆れて、大蛇が地に横はるかと驚かれる。

庭には若宮形の燈籠、夫から洩れる灯に、苔蒸した緣の寂が、キラキラと輝やき、泉水の魚の動きに、小やかな波紋が擽ばゆく微笑む。

遙か奥まつた書院の障子は、目も鮮やかな銀燭に照し出されて、仄めく人影に心憎い軟か味が漂よふのは、小梅の御館と呼ばれる萩の門琴子御方の家。

新しい酔は芳醇玉と滑らかな美女の肌を蒸して、移り香ならぬ留木の

薫りが、凡ての人の魂を蕩めかせる程、やんはりと媚めく。

主人の姫は床を脊に脇息に凭られて、心之くばかり客の話に心の底まで傾けられるらしく、客の右近は其の愼しやかな敬虔な態度の中に、柳營隨一の美男の匂ひを、憎い程極度に昂めて行く。月朧の夢路を辿る主と客との鮮かな眼の澤は、口程に物言ふ妖冶な彩りを戰はせるかと思ふばかり、好一對の美女と美男の、いづれ劣らぬ妖冶かさが、フックリと盛り上つて來た。然し如何なる場合、如何なる人にも油斷せぬ鬼玄蕃の疑ひ多き團栗眼は、ギヨロリ／＼と、唇食ひ反して睨まへて居るから、右近には徐ろ煩たく、姫にもいぶせく思はれぬでも無いらしい。

『喃、右近、思はぬ花の媒で、圖らず御許に逢ひました。何かと東の名所古跡の物語を聞きたう思ひまする。今日に懲りずと度々尋ねて見えるやうに。』

妖艶塗るが如く滑らかな朱唇は、花の蕾が春風にほだされたやうな妙なる綻び、目も眩むばかりの眞珠の齒が、右近の魂を吸ひ出すやうに燦めく。

『ハツ、御手厚き御饗應に預り、右近冥加至極、家門の面目に存じまする。』

恭しく手を支いて頭を下げると、滑々しい青黛の月代が、邪慳に御方の目前に媚めきを擴げた。假令男に誘ふ水の心無くとも、饑ゑた目に大牢の美味を見せびらかす酷らしさで有る。さらぬだに傲ぶる女性の弱點は、畏れみ愼しむ男の恭しさが、目も綾に好もしき者に思へて、貞女が堅い關の鎖をも蝕ばみ行くかと危ぶまれる。むづかしい顏をして、側に苦り切る玄蕃は、天下一の上﨟と驕る淀殿を手管に丸めて、飴の鳥の惱みのやうに、グタ／＼に蜿蜒打ち廻らせた佞臣大野修理を思ひ浮べずには居られなかつた。

然し姫と右近との間に、何等花の薫りの仄めくやうな話もなければ、擽ばゆい瞬き一つ有つたのでは無い、普通の御酒下されが濟むで、四方山の話が交されたに過ぎないけれども、玄蕃は始めから右近といふ者を虫が好かず、殊更女のやうな美男といふのが、虫津が走る程心地惡いのである。

『妾は世にも人にも捨られた倚頼無き身、友垣としまするは古今の歌の本、優しく妾を守りまするは是なる玄蕃、妾の乳の嫗の子で有りますから、玄蕃ばかりには何事も心を措きませぬ。』

姫は述懷のやうにシンミリと言つた。夫は許婚の君に捨られた寂しさから、世を難面く喞たれるのであらう、其の寂しさを紛らす爲に、京方の隱密となつて、大反れた天下の大事に立入られるかも知れぬと、右近は姫の境遇が寧ろ傷はしく覺えられた。恁いふ男優りの上﨟の心を奪つて、無左々々と墮落の滑め

きに陥し込むは、惨い罪作りの業で有る。あはれ男と生れた甲斐には、此の様な上﨟の温かき御眦りに浴し、身をも心をも一つに煉り固めたいと、怪しく心の底にときめきを生じた。然し武士と生れた忠義には、柳營公儀の御篤天



下静謐の生贄として、御力を魔道へ引込まねばならぬかと思ふと、自分の胸に貯へた女人墮落の誓願が、身顫する程空恐ろしかつた。

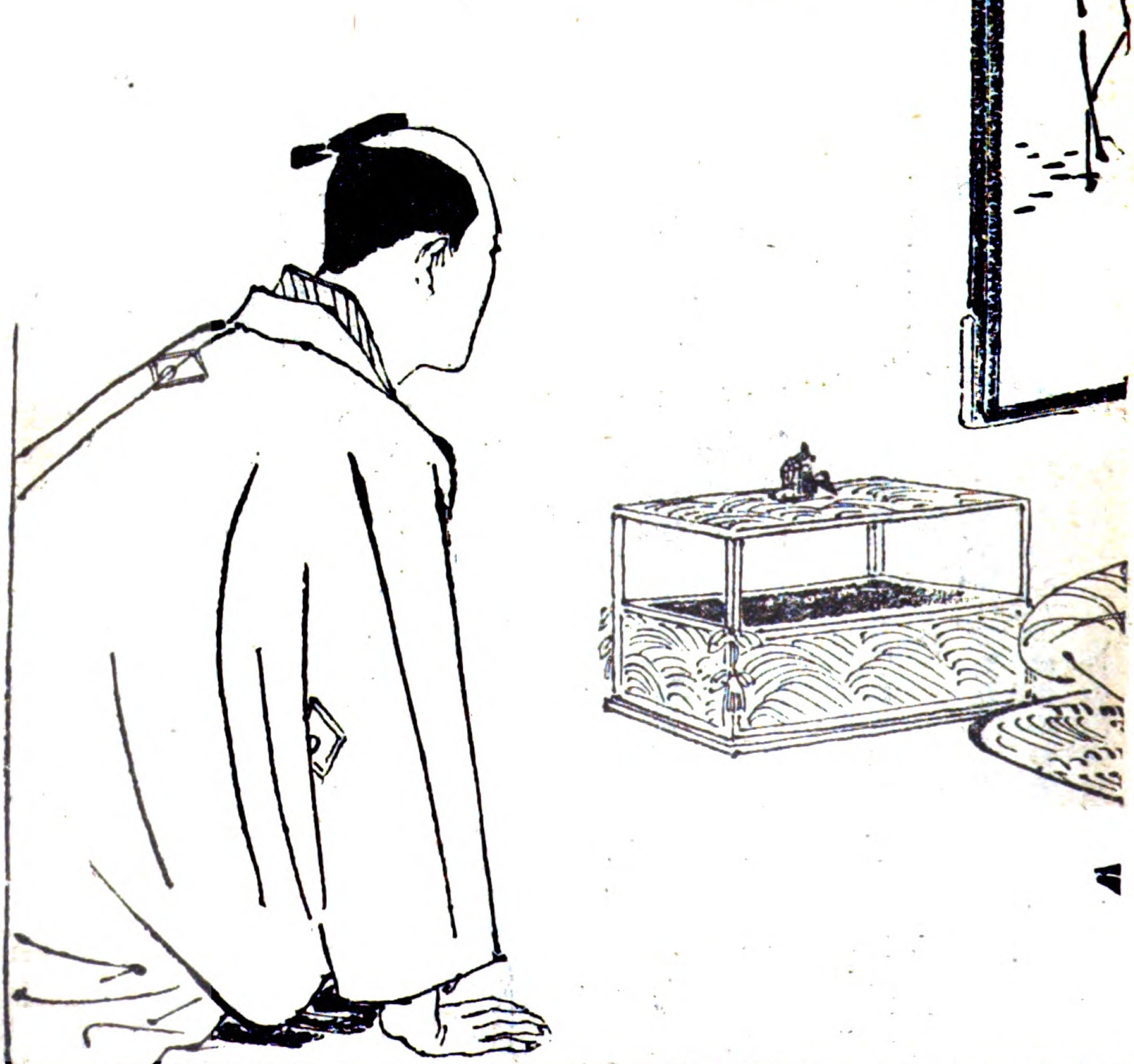
『畏れながら手前御許しを蒙りますれば、姫君様の垣とも塀ともなりまする所存。』

右近の美男の匂ひは此時に仄めき、徐ろに姫の顔を仰ぐと、瞰下す姫の黒目勝の瞳と、一分一厘の隙もなく、端無く抱擁するやうに、犇と空間で出會つたので有る。見やうに因つては胡散な微笑みが、上と下との目許に漂よふのだ。鬼女番の鋭どい眼光は、此の時苦々しくギロリと輝やく。

『ほんに嬉しう思ひまする。』

御方の上品な顔ばせは、美男の親切を快よく請入れたらしい。

『殊に此の頃は噂に聞きまする夜叉王といふ怪賊、何時狼藉を致すまいものでも御座りませぬ。左様な場合には、右近身命を拋ち常御

館の御防ぎを相勤めまする。』

右近の中高な顔には、精根から搾り出さうな薄紅が映し、必死の思ひを眉目の間に罩めた。其の優しき心根は、弱き女に取つて、千萬無量の甘い滋藥で有る。

『此の住居などに、曲者が參らうとも思ひませぬが、もし左樣の事もあれば。』

右近の厚意を姫が床しく請入れられようとした時に、鬼女番は障子がピリ〳〵と響ける程に呶鳴り附けた。

『波多野氏措いて呉。當御館には拙者が居るわい。』

膠もなく眞向から微塵に打碎いた。女番に取つて、右近の助力は絕大の侮辱で有る。さしもの右近も眉を曇らせれば、姫も氣の毒さうに、右近の顏を見て苦笑ひ。

『コレ女番、折角右近が言うてたもるものを、其方のやうに沒義道に言ふでは有りませぬ。』

右近に言譯がましいのが、一入女番の氣に入らない。

『姫君拙者が控へて有るからは、夜叉でも鬼でもあれ、指でも指せば、粉微塵に捻り潰して呉まする。何處の馬の骨とも知れぬ者の助勢などは要り申さぬ。』と、右近を睨み附けた。天下一の美男も、横に裂けた女番の口に懸つては、哀れ三文の價値も無い馬の骨で有る。

此の無遠慮の惡罵に衝激され、美男の眉宇には、險惡な電光がキラリと迸走した。公儀直參の旗下を、素性も知れぬ馬の骨にされては、武士の不面目、祖先の恥辱、八幡堪忍ならぬので有る。

『何と言はれる、怪しからぬ事を。』

込み上げる激怒を、僅かに胸三寸に堪へたが、荒ぶる息は肩先に込み上げた。

『何も怪しき事は御座らぬよ。女番斯て有るからは、其公の御世話は入らざる事。……拙者は姫君御幼少の頃よりして、曾て御側を放れぬ御傅仕。此の度も尊き御方よりして、姫君御守護を仰せ附かり居る者ぢや。左樣た要らざる推強な御世話は以來無用にさつしやれ。』

肩を怒らせ肚を張り、鼻嵐を吹いて空嘯ぶく。宛ら生きた仁王が時化を食つた形相其の儘で有る。姫は餘りの可笑しさにオホホ〳〵と愼しやかに笑はれた。

『右近、御許氣にかけてたもるな。女番は一刻者、妾さへ叱られるものを。』

姫に宥められては、女番と爭ひもならず、右近は之を機にお暇を賜つた。

『今日に懲りず、度々尋ねてたも。』

姫の如才ない愛想か、乃至は本心のときめきかは知らず、右近は終に御側近く接近する機會が出來たのを、天の與へと飛び

立つばかり喜んだ。

『難有き御言葉、又重ねて御目通願ひ上げまする。』

坐作進退法を外れず、優美の限りを盡して退出する後から、太く聞ゆる女番の囁きは、

『夫には及ばぬ事ぢや。』

美しき花の毒

何とは無しに癪に障る右近の差出た取做し、假令姫君に階を越ゆる思召しは無くとも、右近如きが僭上無作法の了簡を以つて出入致す時は、姫の御名を汚し、併せて女番の面目を踏み附けるので有ると、彼は怒氣紛々として、小姓達に八ツ當りした。

『夫ッ、淺間山が噴出したぞ。』と、人の悪い若衆小姓は、遙かに遠退いて、障らぬ神に祟り無しと、息を殺して白眼を反らして居た。

『姫君、彼様な者をお近づけ遊ばしてはなりますまい。』

待て少時も無い女番は、遠慮會釋も無く、短刀直入に突き進んだ。引くも躱すも無い手詰の一突きで有る。

『オホホ、女番其方も事々しい。右近は關東公儀の旗下衆、假令餘分な事とは言へ、花の堤にて妾の爲に曲者を取挫しぎ呉ましたもの、其方のやうに膠なうもされませぬ。』

頭の先から湯氣を立てる女番の眞劍の怒が、我身を思うて呉れる老婆心とは知りながら、噴出さんばかりに可笑しかつた。

『彼様な曲者の一人や二人、姫君の御手の内ならば、只小指の先にて彈き飛ぶので御座りまする。忠義立の加勢こそ、片腹痛う御座る。』

風にも堪へぬ姫の手の内を、知り盡して居るのは、年來側近の女番より外ないのだ。

『人の志といふものは、請けてやらねばなりませぬ。』

『美男面した奴の志は、碌な志では御座りませぬぞ。』

姫は何氣なく傾國の微笑を片笑靨に啣ませたが、此の無遠慮の突貫には、少なからず慌てたらしかつた。胡散な苦笑ひが朧に滲む前に、火よりも熱い血の狼狽へが、豐艶た隆起の下を、八方に蜿蜒打廻つて、粘濃い膩と浮き出で、目に見えぬ香汗となりつゝ、額口に粘つた。

『去る者は逐はず、來る者は拒まずとやら、もし右近が此の先出入する事もあれば、右近を媒ちにして、思はぬ寶を拾はぬとは限るまいに。』

此の口吻に因る時は、果して京方の隱密にして、柳營の爲には戻り橋の鬼女より恐ろしいのである。時の大老が早くも夫と目星を付けて、隱密の根城を よはすべく、狐の化けた美男を送つた時、姫が果して右近を夫と察したであらうか、さしもの女番さへ、只理由無しに右近の近づくのを嫌つただけで、左様

まで深い根柢があらうとは考へなかつたのだ。

『いや兎角實だと思うたものは、開けて口惜しき玉手箱となりたがる者で御座る。』

美男を美女の側に置くのは、油を火に近づけるものだと、玄蕃は危險でならなかつた。

『ホヽ玄蕃、要らぬ配慮しやるより、早う休んだがよい。妾も寢間へ引取りまするぞ。』

　男優りにして女に稀な早技の持主、天下重大の御用を懐に納めながら、歌枕見んとて東路遙けく下られたる姫の事、よもや右近の野干などに誑らかされ御在す事は有るまいと、玄蕃は堅く信じ切つて居ながら、主思ひの一心から、彼是と取越苦勞に氣を病むのは、豪放磊落の鬼侍の可愛い半面、さればこそ雲の上の尊き御方から、姫の守護にと御聲がかりが有つたので有る。

　玄蕃は言ふだけの事を言つて了へば、心に懸る雲もなく、ノツサ〳〵と遠侍の定めの部屋へ下つて來て、ドツカと机の前に大胡坐を組むだ。

『丸でビイドロの毀れ物の番をして居るやうぢや。』

　醉ざめの太い息を、渦卷き上る程に一息吹いたのは、鯨が汐を吹き上げる勢ひ、草臥た手を大の字に伸して、ドシンと机の上に落した時、嚴重に置いた文鎭が、消し飛んで、下より現はれた白字の封筒。圓な目を三角にして、ジツと夫に見入つたが曾て見覺えの無い品である。

『何ぢやい、是は。』

口の中に呟やきつゝ、邪慳に封を切つて倒まに振ると、バラリと飛び出した一片の書附。

『美しき花には賊ありと知れ。』

只一行の文字ながら、墨痕鮮かにして、龍蟠り虎嘯ぶく名筆、生きて舞はんとする勢ひが有る。

　玄蕃は愕然として、頭の心を鋭い槍先で突き刺されたやうな感じがした。用心嚴しき館の奧へ、何者が宛名の無い書面を屆けたであらう。玄蕃は慌だしく小姓を呼んで尋ねたが、其答へは更に雲を掴むが如きもので有つた。

『手前共は一向に存じませぬ。何處からも御使などは參りませぬ。もしかしたら、女中方が知つて居られやうも知れませぬ。』

之が異口同音の答へである。然し女嫌ひの玄蕃の部屋へ、誰一人書面を取次ぐやうな親切者は、四人の女中の中、一人半分も無いのだ。

　玄蕃はウームと力強い唸り聲を、丹田の眞正中へ押込んだが、其の反響としては、暖簾に腕押のたより無いものである。

　天より降つたか、地から湧いたか知らず、只一行に書き流した名筆の痕、夫は如何なる意味を、何の目的で運むで來たので

あらう。』

『美しき花には毒有りと知れ。』

彼は険悪な蚰蜒眉を八字に寄せながら、繰返し〳〵黙讀した、と同時に、盆の窪から、脳天へかけて、金蛇の閃めきが矢の如く走つた。

『左様だ、彼奴の事を心附けて呉たのぢやぞ。』

彼奴とは言ふ迄も無く波多野



右近、美しき花とは彼の事を指したので、毒有りと告げるからは、右近が姫君に近づき參らせるは、其の毒氣を吐きかけて、神身を惱らさうとするのだと敎へて吳たので有る。

　然し今日の今の事を、誰がどうして知つて、自分の部屋へ書面として屆けたので有らうか、之こそ神變不思議の奇しき仕業で有る。既に此の部屋へさへ、影か幻に出入する者が有るとすると、姫君の御閨こそ一層心許無き極みでは無いか。伊賀流の忍術、人の目を掠めて、煙か霧のやうに朦朧と出入する魔物が、此の館へ立入つたので有る、其の者の善惡は兎も有れ、眉へ火の附くやうな大事が足許から突發したのだ。

　足無くして動き來つた怪しき書面の出現、豪勇自慢の玄蕃の分別では、徹夜し考へても思案に餘つた。

　兎もあれ、何者かゞ姫君の御爲を思うて、自分まで忠告して吳たに違ひないから、右近が不爲の人間で有る事は他人にまで知れて居る、どうでも彼樣な男を近附けてはならぬと思ひ込んだが、其の書面の事は姫にも明さなかつた。

夜叉王の名書

　中一日措いて、波多野右近が先日の禮だと言つて、挨拶の爲に罷り越した。何かと名を附けて、姫に近づく手段に相違無い。折柄玄蕃は外出して居たから、姫に取つては烟たい者が無く、右近としては眼の上の瘤が取れたので有る。

關東第一の美男、殊更に磨き立てたかして、今日は一層近まさりする艶やかしさ、心なき花も面羞く、軟らかい春の風も避けて亙りさう、玲瓏たる地肌の下に、汚ない血肉を蓄はへようとは思はれぬ程透き徹る匂はしさ。美しきを好むが人情ならば、如何なる男も女も、我知らず魂を掠り取られ、覺束ない足取りになつて來る。

　見る度毎に目を拭はせる嬋娟さに、姫は恍惚として立眩みするやうな、擽ばゆさを覺え、右近と對ひ合ふのが、寧ろ極り惡くなつて來た。

　先日の禮から浮世話、名所古跡の話に續いて、端なく西園中納言雅信朝臣の上に及んだ。夫は右近が話を其處へ持つて來たのでは有るが、極めて巧みに、宛轉たる筋道を辿つて來たから、姫は隱すにも隱されなかつた。

『畏れながら朝臣は、東國の歌枕をお探り遊ばされる爲、一昨年の末に京をお立出相成りました赴きに承はりますが、今以つて御音信は御有り遊ばしませぬか。……姫君には定めし御配慮の御事と存じ上げまする。』

　右近の見舞の言葉は、心の底から染じ入つて吳るやうに、姫の内懐へと滲み透るので有る。

『よう尋ねてたもつた。今以つて御行衛が知れませぬ。』

　人に答へるさへも裏羞かしいのは、男に捨られたやうに思ひ取られる怨みで有る。

『然しながら決して御身に御間違の有るやうな事は御座りませぬ。尊き御身で御有り遊ばすにより、萬一如何様かの事有らせれゝば、直ぐに其の向の領主代官にも知れねば相成りませぬ。』

『ハイ、妾も其の様に思うては居ますが、朝臣が街にも妾の事を思はれるならば、今迄に風の便にも薫らうものと思ひまする。』

海棠の雨を傷む幽情に悩み、是程の美女なり才女なりを塵芥と捨て顧みぬ朝臣は、能く〳〵男冥利に盡きたので有る。

『手前の考へまするには、物騒がしく蒼蝿き世の中を厭はせられて、何れかの山邊に心を澄ます庵でもしつらへ、夫に御住居遊ばして、光風霽月を弄ばれてゞも御在すでは有りますまいか。』

よもやとは思ふけれども、關東暴虐の政道を怒り、世と絶つて行ひ澄さぬとも限らぬので有る。さうなれば架す掛橋中絶えて、再び塵の世に引戻すのは難いのだ。夫を考へると、寂しい行末が危ぶまれて、姫は壯胸を衝かれる思ひがする。

『妾は儘ならぬ世の中が、忌はしうなりました。』と、姫は遣る瀬無い述懐の言葉、其の隙に晄け入つて次第に姫の心を捉へて行くのは、戀の手練で有るが、苟にも祖先以來三河武士の血の流れる右近は、卑劣な賤しい手段を弄するに忍びなかつた。右近が姫を思ふ心は眞劍で、色を以つて尊き姫を穢らすに忍びぬので有る。

『いや〳〵仰せとも覺えませぬ。朝臣の御行衛は、右近必ず御尋ね申上げまする。』と、世にも頼母しき言葉。倚頼少なき女の身には、甘露の慈雨の恵みで有る。

『もし御行衛が知れました時、心から妾を振捨られたと知れましたなら、反つて妾の心を傷る事と、夫のみ案じられてなりませぬ。』と、姫は弱々しい取越苦勞。

『萬一其の様な事が御座りますれば、其の節こそ手前が。』と右近の膝は思はず蠢めく。

『エッ。』と、姫はハッと顔を赧らめた。

『いへ、手前が此の身を拋つても、御意見申し上げまする。』と、吻と危ふき息づかひ。

『其の様に妾の身を思うて呉ますかへ。』

姫の軟らかい胸先には、目にも止まらぬ纎美の顫へが在つた。

『手前の如き賤しき身が、多少なりとも姫君の御役に立てば、冥加の至りに御座いまする。』

際どい中庭へ陥れんとしては、間一髪の隔りを以つて、着かず離れず縺れて行く。右近は其の女の妙な手應を突き止めるやうに、密かに姫の顔色の妙なる動きを見た。

色白の姫の顔には、桃の花を吉野紙に包んだやうな仄めきが、下萌え出づる、春の陽炎と燃えて、手持なげに脇息の上を撫で

られる。其のしなやかな白魚の指の觸る丶所、石も金も勿體なさに蕩けて行く。此の時銀燭ゆるく流れて、光なだらかに、燃え靜まり、金屏の描ける鴛鴦も、生きて羽を交すかと思はれるばかり、篆字を描く香のときめきは、刻々軟らか味を挑みかけるのだ。

　姫も言はず、右近も語らず、言はず語らぬ室がしつとりと落着く時、下手の襖を開けて、ヌツと姿を現はしたのは思ひもかけぬ玄番である。

　彼は爛々たる目の一瞥を颯と、頭の腦天から右近の上に注ぎ、更に其の眼を嶮しく姫の顏へ落した。

『姫君、玄番只今戻りまして御座いまする。』

　例に因つて、姫と右近との間に、動がさる事山の如く座を占めた。右近に取つては、可惜流星光底に長蛇を逸する無限の怨み。

『オウ戻りましたか。……先程より右近が參つて、面白い話を聞かして呉れました。』

　姫の取做しは、聞きやうに因つて、言譯とも取れる。

『姫君、只今まで御披露致しませんで御座つたが、幸ひ波多野氏も見えられたに因つて、御覽に入れまするが、一昨夜波多野氏が引取られ、夫よりして手前詰所へ下りましたる處、何人の所業とも知れず、手前の机の上に、之なる書附けが置いて御座りました。』

　玄番は右近を尻目にかけて、無名の書面を取出した。

『御覽ぜられい此の通り、――美くしき花には賊ありと知れ――と、何物かの心附けに御座ります。姫君は御大切の御身、萬一の事もと存じ、天が戒しめ下されたものと存じまする。』

　と遠慮會釋も無い。

　姫がハツと顏を赧らめれば、右近もドキリとした。

『見事な手蹟、何者の仕業で有りませうか。』と、姫も痛からぬ腹を捜られる擽ばゆき思ひ。

『何分にも此の書物を手前机に置きましたのを、誰一人知る者が御座りませぬから、悉皆忍術者の所業に御座りまする。』

『甚だ以つて無用心にも覺えまするな。』

　と、右近も仕方なしに相槌を打つ。玄番に取つては好き機會で有る。

『波多野氏、此の文句を何と思はれるな。』

『されば。』と、右近は流石にたじろかずには居られない。

『外でも御座らぬ。美しき花とは御邊の事、其の美しき花には賊ありと、將來を察して、神の戒しめられたものと存ずる。』

　玄番は歯に衣着せず、待て少時も無く打つかつて來る。

『之は又迷惑千萬、手前美しき花でも御座らねば、從つて賊有りとは、如何にも心外至極。』

『御邊の心外は御隨意ぢや。拙者は左樣に解くより外御座らぬのぢや。』

此方が腹に据ゑ兼れば、夫を機に二度と足踏みさせぬ考へが見え透いて居るから、右近は込み上げる蟲を堪へて、容易く其の手に乘らない。

『一寸夫を拜見願ひたい。』

竪に横に筆蹟を眺め、白字の封筒を火に翳して見て居ると、不思議や忽ち紙面に叢雲立つて、見る／＼現された炙り出しの文字。『夜叉王丸』と筆太に書いた署名が、マザ／＼と浮出て來た。

アツと幽かな叫びが期せずして三人の口から同時に擧つた。誰かの惡戲と疑



つたのが、驚くべし江戸八百八町を荒し廻る怪盗夜叉王の仕業であらうとは。

玄番は忠告の寂びを忘れて、無念の怒に断を決し、右近は默つて眉を寄せた。只姫のみは騒がず忙てず、二人の樣子を眺めて、顔色一つ變へぬのは女ながら流石に修養の程が偲ばれる。

『波多野氏、御邊は此の狀袋に、炙り出しの仕掛ある事を、前以つて御承知で御座つたか。』

『いや以つての外、火に翳して文字が現はれたは、只怪我の功名とでも申すので御座らうか。』

『默らつしやい。』

玄番は肩を怒らして屹度身構へた。

『御邊は夜叉王と申す盗賊に由縁が有つて、當御館の樣子を窺ひに參つたのであらうな。』

橫に車を押したら、いつかな後へ下らぬ權幕。

『拙者が盗賊の手引を致すと言はれるか、聞き捨ならぬ一言、今一言言うて見られい、姫君御附人たりとも、容赦致さぬぞ。』

相手に激發されると知りながら、年若だけに右近は腹に据ゑ兼ねた。盗賊の同類と言はれては、第一に姫の思はくも折角で有る。

『同類でなくて、白紙に炙り出しの仕掛の有る事を知らうか。』

目に角立てゝ詰め寄れば、落花狂亂の風は、あはや渦を捲いて倒まに狂瀾せんとする。

『玄番控へや。右近が賊と知己ならば、何で夜叉王の名書を出しませうぞ。滅多に人を疑うてはなりませぬ。……右近も玄番の言ふ事を惡く聞きやるな、玄番の一刻は玄番の病、妾さへも持ち扱かふものを。』

姫が双方を宥められたので、玄番も強て言ひ募れず、怪しい書面を中に置いて、互ひに出所を稽へ、來歷を案じて見たが、只五里霧中を摸索するに過ぎなかつた。

兩虎の死鬪

美しき花に毒有りと、玄番に注意を促したのは、萩の門御方漆姫の爲を思うての心入れで有るが、夜叉王の手から出た書面で、何の爲に姫に好意を寄せるかゞ、油斷も隙もならぬ疑問で有る。

古今不思議の怪盗、曾て姿も形も見せずして、江戸の金銀財寶を浚つて行く、或時は十人二十人の徒黨を組むで橫行するが、誰とて正眞の姿を見た者がない、南北町奉行手附の與力五十騎、同心二百四十人、其の外火附盗賊改ため加役の面々、岡引と稱へて、十手捕繩を預る不浄吟味の役々が、目を皿にし、手具脛を引いても、手下の小賊只一人をも捕へ得ぬのみか、其の巣窟とも覺しき處を嗅ぎ出しも得せず、怪盗は天より降つて天

に歸り、地より湧いて地に戻り去る。

　此の怪盗が荻の門の小梅御館に出入したと言ふ事は、假令姫や玄蕃が微賊を感ぜぬ迄も、目の中へ芥の入つた程、聊さか小蒼蠅い心地がせねばならぬ。分けて右近に至つては、窃かに苦い顔を禁じられなかつた。

　噂に聞いても、跋扈横行の蹤を見ても、夜叉王の犯す處は、公儀昵近の譜代乃至は大町人に限り、街にも勤王の義を稱へるか、京家に深い由緣の有る處は、態々避けて通つて居る。さればこそ掌を指すやうに、右近の心中を見破つて、姫の油斷を警戒するので有るから、右近の邪魔になるものは、玄蕃の外に此の夜叉王を加へたので有る。然し玄蕃は明らかに其の人が有るけれども、夜叉王に至つては、影も形も無くして、如何なる密所へも立入るので有るから、右近に取つては難澁此の上も無い相手に打つかつたのだ。

　然し夜叉王の入らざる横世話があらうとも、姫が温たかい懐を擴げて、自分を迎へて呉る事が、明らかに右近に意識された。よし何人の邪魔が有ればとて、心と心との凭れ合ふのを妨げる事はならぬので有る。堰けば堰かるゝ隙間を洩れて、水の流れは毛筋の間からも通つて來る。玄蕃にあれ、夜叉王にあれ、人知れぬ姫の心に立入つて、悶える胸の玄妙な時めきを押へる事はならぬのだ。軈ては彼等に地鞴踏ませ、逆筋斗を打つて無念がらせる時も來ようと、若い右近の誇りがましい勝利の笑びが、擽ばゆく趾裏から這ひ上つて來た。

　月は朧に包れて、花には情の露の茂み、黒い川水は蒲鉾形に盛上りつゝ、音も無く逝く水の數を書く。待乳の森は低く沈むで、漕乗り込む舟もなく、浮寢の鷗が夢に魘え、キリリキリリと啼く音淋しく焦れ行く。

　館を暇乞して、堤へ來ると、俄かに醉を發した右近は、花やかに生温い思ひを夢見つゝ、雪踏の足許も緩やかに、牛の御前を竹屋へと下つて來た。折から撞き出す金龍山の亥刻の鐘、陽に開いて陰に消えるのが、漫々たる水の上を這ひ亙り、何處とも無く消えては撞き出す、戀の人には陽氣の響きよりは、寂有る陰の囁きが頼母しいので有る。右近は何を思ひ出したか、獨り笑みして振仰ぐと、空に知られぬ雪と散る花片が、美男の匂ひに蕩けて、ハラ〳〵と舞つた。

　突然シト〳〵と追ひ迫る跫音、人一人無き櫻の堤を、遠くより明らかに響いて來る。右近は何の懸念もなく、微音の謠ひを口三寸に漂よはせながら、樂しい夢を浮べつゝ歩きつゞける。

『待つしやい。』

　跫音がピタリと止まると、吠ゆるやうな地太の聲を、後から叩き付けた。

　右近は悠々たる歩を止めも敢へず、靜かに後を顧みた。六尺を



もあらうかと思はれる大男が、月に背いて眞黒に突つ立つ。

『何用ぢや。』

右近は追落しか辻斬の悪戯かと思つたので有る。敵が鬼神天魔ともあれ、一刀流極意の腕の冴えは、槍も刀も苧殻程にも思はぬのだ。

『待つしやい、貴公に談示の筋がある。』

重ねて浴びせかけた言葉は、耳に覺えの野牛の哮え聲。

『やあ御邊は望月……玄蕃殿か。』

『如何にも御館の玄蕃で御座る。』

心中穏やかならぬのは、怒氣を帯びた口吻でも首肯かれる。」



『ホホウ、某に談示の仔細とな。』
所詮滑らかに折合ふ筋の話では無いのだ。
『外でも御座らん。向後御館へは出入なさらぬやう頼みたいのちや。』
頼む者が肩を怒らして詰寄せて來た。頼まれる者が詫びて逡巡む道理はない。
『何とで御座る。』
右近は毅然として對峙した。摑み懸る荒鷲に、五彩の羽を擁たんとする孔雀の嶮しき意氣で有る。
『館へ出入は無用と思はつしやい。』
『夫はならぬ。』
右近は心持よく鮮かに言ひ切つた。
『ならぬとは怪しからぬぞ。』
『御邊こそ怪しからぬ。自體某に伺候致すやうとは、姫君の厚き思召しでは無いか。』
『姫君何と仰せ有るとも、此の玄蕃奴と不同心ちや。』
『主君の御意と有るを、御邊家臣の身として、自儘にならぬと言はれるか。』
『如何にも、拙者は御家來ながら、姫君守護の仰せを、去る尊き方より仰せ付けられ居るのちや。姫君の御不爲とあらば、御怒りに觸れても御止め申すわい。』

『某が伺候致すを御不爲とか。』
『如何にも御不爲ちや。尊公如きは巧言令色を以つて近づき、如何なる事を勸め參らすかも知れぬ。拙者斷じて承知致さぬぞ。』
『御邊が不服とあらば、勝手に不服に致されい。某は姫君の御言葉に甘え、隨意に參殿致す迄ちや。』
『どうでも聞入れぬか。』
談示とは名のみ、始めから高飛車の脅しなのだ。
『聞入れぬ。』
右近は一歩も假借しない。姫の面前では憚かり有るが、人交もせぬ春の夜の長堤十里、男が意地を較べるには、誂へ向の風流で有る。
『オウどうでも聞入れぬとあれば、玄蕃刀にかけても承知させるぞ。』
左手の拇指は弗りと鯉口切つて、忠義の魂は早くも反を打つた。
『オウ、刀にかけても承知致さぬ。』と、右近は突と足場を計つて、早くも敵の襲擊に備へた。
『汝ッ。』と、玄蕃が獅子吼の一聲。
『何をッ。』と、右近が叱咤の聲、夜氣冷やかに河風を捲くと、劍光閃めいて星群凄めく。
『鋭ッ。』『應ッ。』

花驚かす深夜の鋼鍛、兩雄の眼光には必死の精氣が充ち、足の拇指はジリ〳〵と大地を噛むだ。陽に開けば陰に閉ち、互ひに隙を覗がふ所、劍尖活きて靈有り、肉を截ち骨を斬らむとして、殘忍の光は蒼白く迸ばしつた。

玄蕃は右近如き泰平の飾武士は、只一刀の刃の露、鎧袖一度觸るれば仆れんのみと齒牙にもかけない。

右近は一刀流の極意の精華、玄蕃の胴殼を獨活の大木と兩斷になさんずものと思ひ做どつた。況して我極秘の大望の妨げとなる邪魔外道、此處で出會つたは天の與へで有る。

然し互ひに位取を附けるに及んで、兄たり難く弟たり難く、全く互角の驅逐で有る、聊かたりとも動いた方が體の破れ、自然の變化を待つ外は無いと、案に相違して、ジリ〳〵と額口から汗を搾つて來た。

劍光一閃、動中の靜は變じて靜中の動となつた。斬り込む一擊、斬り返す一刀、殺氣江に横はつて、凄風面を撲つ、一上一下の奮擊突戰、其處に二つの男の魂は、赤裸々に撞突するので有る。背は汗と滴たり、氣は虹と嘯ぶく。互ひに微傷だも負はないが、必死の精根は湯氣となつて雲蒸するので有る。今一時戰かへば、疵無くして、二人は諸共に絶息する外はない。

突如堤下に繋がれた家根船の中より現はれた一人の武士、時ならぬ劍戟の響に驚かされたか、目前龍虎の爭ひを見上げると、其の儘悠然と堤を上つて、二人の横合へヌツと姿を現はした。

『白痴者奴、役にも立たぬ命の取り遣り、夫でも貴公達は武士の端くれか、もそつと嚙み合へ犬侍、無聊の折から見物して遣はすぞ。』

間を分けて止めるかと思ひの外、魂を貫ぬくばかりのキビキビした高飛車の惡罵、剩さへグツと決鬪ひの側へ接近されたので、二人は自づと後へ退つた。邪魔になる事一通りで無い。此方の侍は二人が別れれば別れる程、益々劍と劍との間へ分け入つて了つた。

『退け〳〵、邪魔するな。』

敵と敵とが異口同音。

『貴公達は主持か浪人か知らず、能く〳〵不用の命を持つと見えるな。』

双の手を懷にしたまゝ、悠々寛々と二人の間にのさばり立つた。玄蕃も右近も、此の不思議な男の口達者に、腹を立つ方角も無く呆れ返る。

『夫程要らぬ命なら、無用の爭ひには及ばぬ。二人ながら其處へ列べ。此の方が首を刎ねて、地獄へ旅立たせて遣はすぞ。』

飽まで侮どられて、玄蕃は赫と忿激した。

『汝は何者だ、武士の決鬪に入らざる差出口、然も惡口雜言の



有らん限りを盡す。其の儀ならば汝から先に打斬るぞ。』

『言ふにや及ぶ、我々武士と武士との意氣地を妨げる憎くき奴、退れ、手は見せぬぞ。』と右近も氣色ばむ。

『アツハツハツ、貴公等夫でも武士だつたか。』と侍は飽まで相手を小兒扱ひ。

『汝ツ、今一言言つて見ろ。』

『控へろ。見受ける處、二本の刀を帶して居るにより、形は武士でもあらう、然し魂は鈍りか鰹節か、乃至は下檪で行はれる浮世節と申すのか。誠の武士と言ふ者は、伊達に刀を差しては居らぬぞ。』

宛ら師範が教へ子を叱り附ける權式が有る。さしもの二人も殺氣を拔かれて、怪訝な心地に呆れ惑つた。

『武士の刀と云ふものは、此細な爭ひに拔くべきではない、此の刀一度拔けば、天下を平げ、國家を治める。私の爭ひに拔き閃めかすならば、出刄庖丁で十分であるぞ。武士の本分は熊や八の行ひとは違ふ筈ぢや。貴公等の太刀筋も見受ける處、蠅が燃芯を遣ふでもないらしい。生かして置いたら、何かの用にも立つであらう。古い諺にも兩虎闘ふ時は一虎は倒れ一虎は傷つく、尤も虎か犬かは知らぬが、折角世の中へ生れて來て倒れたり傷ついたりするは、武士商賣の資本摺ぢや、喧嘩の仔細はどうでもよい、此方が扱かつて取らせるから、花の下の長刀は廢にせい、可惜刄風に散らすは惜しいでは無いか。』

口に皮肉の殺氣を含むが、何處までも鷹揚にして氣高き口吻。いきり立つた女蕃は、聊さか覺束なくなつて來て、蚰蜒眉を寄せながら、朧に暗い月明りに透して、此の不思議な仲人を見ると共に、ヤツと言つて我知らず飛び上つた。

『ヤヤツ、畏れながら御前樣では御座りませぬか。』

女蕃は山のやうな大きな身體を、其の儘足下へ蹲まつたが、物に動ぜぬ鬼侍も、餘りの奇遇に夢心地に惑はされたのだ。

『何を言はれる。牛御前の前なればとて、此の方までが俄かに御前樣になるのか。』

相手も訝かし氣に立ながら瞰下すと、見上げる女蕃の顏は、類と眞似手のない彪のやうな醜面。

『オウ、其方は望月女蕃で有つたな。これは〳〵、廣うて狹い世の中、向島の夜陰に、其方に逢ふとは思はなんだ。』

川面に響く凛然たる聲の冴え、多年尋ねに尋ねる糸姫御方の許嫁の背の君、西園寺中納言雅信朝臣が、江湖に放浪の氣儘姿で有つたのだ。

『矢張御前樣で御座りましたか、思ひも寄らぬ御目通り、祝着至極に存じまする。何として懸樣な處に。』

『ハテ、其の樣な事は、船中にて申さぬものぢや。』

何處までも茶にして、迂濶に要領に觸れようとはしない。

『夫よりも其方達の他愛も無い叩き合ひ、先づ夫を仲裁せねば相成らぬぞ。』

『いへ、之は誠に些細な事に御座りまする、之なるは關東貞參の旗下波多野右近、姫君御館へ伺候致す者で御座る、夫故少々此の處にて談示に及びましたる處、計らず言葉の間違致した迄に御座りまする。』

當の背の君にさへ逢へば、此の後右近が隙を狙ふ恐れが無いから、玄蕃に取つて、右近は有つても無くてもよい人物、僅かに吻と重荷を下したので有る。

『オウ波多野右近と言はれるか、此方は西園雅信といふ公卿上りの瓢軽者ちや。』

名乗られて右近は消えも入り度、八萬四千の毛根から、ジリジリと脂汗を流した。軈ては此の君の簾中たるべき萩の門の姫君に思ひをかけ、戀の魔道に蕩し込まうと目論見つゝ有る事を思ふと、武士の面目を大切にする右近は、地の中へ消えも入り度、初見參の言葉も四度路によろめいた。

『御前、早速之より御供申し上げまする。』と、玄蕃はもどかしさうに促し立てる。

『何處へ參るのちや。』と、朝臣は空惚ける。

『姫君樣御待兼に御座る。定めし御喜びで御座いませう。』

『姫君とは何處の姫ちやな。』

『畏れながら小梅に御在します泰子姫君。』

『ハヽア、泰殿か。何の事ぢや、其の樣な者よりは之より御身等二人を仲直りに伴なはうと存ずる。此の方の富見城へ參つてお見やれ、泰殿などは野暮のヤの字、水仕女でも今少し垢が拔けて居るぞ。』と傍若無人の遊蕩子。生眞面目の玄蕃は、憮然としていきり立つた。(つゞく)

見よ！　一波起るところ萬波起り、數奇なる人物と、矢つに怪々の事件とは狂騰して脈々波瀾重疊！　寧を迫うて呼吸を吐かせざるところ、正に讀物中の白眉。

夜叉王來るの聲を聞けども、未だその何人たるやを知らず！　怪盜果して何者？　善か！　惡か！　斯かる時公儀の爲に奮起した關東一の美男右近は、一人畫策して敵に迫る！

彼の前には既に玄蕃あり、然して又謎の人西園中納言突如として現はれ、はしなくも事件は一展開を將來せんとす。さもあらばあれ右近と泰子姫の奇しき緣や如何？　夜叉王が活躍は奈何？

見るべきは次號！　次の一篇こそ全篇の眼目を語らんとするもの、乞ふ熱烈なる御期待を！

○こちらむけ我もさびしき秋の暮　芭蕉
○白露やむふんべつなる置所　[illegible]
○咲く菊に見ゆるや當の心持　[illegible]

滑稽逸話集

飛んだ間違ひ

故貝島翁嘗て同業者に引張られて上海に行つたことがある。或日翁の姿が見えないので之を探すと、上甲板に外人の船客が大勢集つて何か見て居る様子。同行の連中何事やらんと近寄つて見ると、翁は浴衣がけで大胡坐をかき、得意の義太夫を唸つて居た。之には一同流石に恐縮したが、義太夫を始めて聞いた外人は、この爺さん何か悲しいことがあつて泣いてゐるものと思ひ、言語不通ながらも氣の毒がつて慰めて居るのだといふことなので、その手前笑ふことも出來ず大に困つた。一生懸命に語り居るを泣きくづれて居るものと推測したなど飛んだ間違ひもあつたものかな。（逍遥遊より）



文晁のゑかき

文晁の聲名天下に普きものから、酒樽の菰、扨は杯などに揮毫を請ふ者數多ありけれど、自重して之を肯んぜざりき、茲に門弟に佐竹永海なるものあり、特に依頼しやらんとて之を引受け、師の僞筆を作り、大膽にも文晁の落款までし、之に依りて産を成し、根岸に新宅を構ふるまでに至つた。一日文晁に何卒門札を一筆願ひたしとて上等なる檜板を削りて携へ行つた。文晁がよしよしと氣輕に承諾し、直に筆を執りてサラ〱と認めしを見れば、こはしたり、

文晁のゑかき

他に一言も云はず、永海は意外なる悪事露顯と意外なる無言の譴責に平身低頭罪を謝した。文晁はたゞニヤリとばかり。（意外録より）



弱蟲の英兵

歐洲戰爭中のことである。或日戰方に酣なる時、巨彈空を切つて一戰友の頭部を奪ひ去つた。その體を見た一英兵、ぞつと竦み上つて顔色を變へた。その時又も一彈飛來して他の戰友の指を奪り取つた。彼は苦痛に耐へず悲鳴を擧げて銃を抛り出した。件の英兵つと其の側へ馳せ寄り、「仰山な聲を出すな、弱蟲奴、見ろ首を捥がれた者でも其麼に喚いちや居ないわ」（逍遥遊より）



珍なお經

長崎の素行といふ俳人、或る日行き暮れて路傍の小屋に宿を乞ふと奥から老婆が出て來て、「行脚の僧ならばお泊め申さう」素行は素知らぬ顔で、「あゝ俺はその行脚の僧ぢや、よろしく頼み申す」と云つて奥へ通つた。老婆は早速佛壇に用意をした。素行は困つたが、すました體で、行李の中から俳諧七部集を取り出して、

其イ角、嵐雪、去オ來、丈草、野ア波、杉風、北オリ枝、凡兆、支イ考、惟イ然、士オ芳、猿ン雖チヤン〱〱とやつた。（稀窓奇譚）





妻の心

中村武羅夫
挿繪 林唯一

東京行きの特急列車は、ちやうど、興津、由比のあたりを、烈しい勢ひで疾驅してゐた。

最後部の展望車は、先刻まで、かなり混んで、どの椅子も塞がつてゐたのが、今は、三分の二以上も空いて來た。新聞を讀んでゐる外國紳士、熱心に編み棒を動かしてゐる貴婦人、それから、絶えずひそ／＼と、何か囁き合つて、樂しさうに微笑し合つてゐるのは、多分、新婚旅行から歸りの新夫婦に違ひない。きれいな丸髷に結つて、七八つの少年を連れた婦人は、窓際の椅子に依つて、飽きずに外の景色を眺めてゐる……

目に立つやうな展望車の乘客は、十五六人くらゐに過ぎなかつた。ちやうど、晩餐の時刻なので、みんな食堂車の方へ行つてしまつたのだらう。それも、一人去り二人立ちして、午後から賑かだつた見晴らしのいい列車の中は、だん／＼淋しくなつて行くばかりだつた。

『あの、失禮でございますが……』

丸髷の婦人が、ちよつと、ためらつた後、しとやかに聲をかけたのは、彼女の隣りの椅子に就いて、もう長いこと、ぢつと動きもせず、さうかといつて、窓外に移り變る景色を見るでもなければ、本や雜誌を讀むでもなく、煙草も吸はず、話し相手があるわけでもなく、獨りで、ぽつねんと考へ込んでゐる紳士だつた。

紳士は、年の頃は三十五六でもあらうか。丈は高いといふ方でもなく、また低くもなく、こんなのが、中肉中丈とでもいふのだらう。丈といひ、肉附きといひ、よく均整のとれた身體に、ウーステッドの脊廣を着たのが、ぴたり身に附いた。色が白く男らしく廣く秀でた額には、房々とした柔かな髪の毛が垂れ、濃い眉の下には、如何にも冴え〴〵とした、けれども、どこかに憂色を帶びた黒い瞳が、靜かに輝いて、すつきりとした形の鼻が高い。

上品で、男らしい顏立ちでも、感じよく調和のとれた姿でも、その紳士が上流の階級に屬する人物で、教養でも、趣味でも、よく洗練された人柄であることは、直ぐに分つた。そして、風采の垢拔けがして、すつきりとしたところ、擧止動作が、優雅なところは、長く外國にゐて、ヨーロッパの上流の社交界に親しんだ者でなければ、とても見られないやうなところがあつた。

たゞ、どう見ても、その紳士の様子は、決して快活とはいへなかつた。寧ろ、ひどく悲しみに打ち沈んでゐるやうに見える。その目に涙を浮べてゐるわけでもなければ、唇から溜息を洩らすわけでもない。だが、彼の顏全體が――いや、身體全體が、彼の深い心の悲しみを現はしてゐるといつてよかつた。

實際、その紳士の姿を一目見た者は、彼の身體の全部を、冷たい悲しみが蔽うてゐることを、直ぐに氣が附かずにはゐられないだらう。

紳士は、丸髷の婦人から聲をかけられても、聞えないのか、それとも、聞えても自分のことだとは氣が附かないのか、悲しさうに沈んだ目を、次第に暮れ行く窓の外に、ぼんやりと向けてゐた。

『もし〳〵。』

丸髷の婦人は、紳士の方に向いて、もう一度、聲をかけた。

『私でせうか？』

紳士は、初めて氣が附いたやうに振り返つたが、上品な、美しい婦人の顏を、ぢつと見詰めた。彼の沈んだ瞳の光りの中には、不思議さうな色が漂うてゐた。

『そこに落ちてゐますハンカチーフは、あなたのではございませんか？』

『あゝ、これですか。』

紳士は、スパッチを着けた靴の爪先に、ひらりと落ちた、雪白な麻のハンカチーフを見ると、拾ひ上げた。

ハンカチーフの隅のところには、黒い色で、T・Kと頭文字が、ローマ字で刺繍してあつた。

『どうも、有難うございました。』

紳士は、愁ひに沈んだ白い顔を　少し羞含むやうに赧らめて、丁寧に會釋をした。

『どういたしまして。』

丸髷の婦人も、同じやうに、淑やかに會釋を返した。

二人は、今朝、同じやうに神戸から、この列車に乗り込んで、しかも、偶然、同じ車室を取り、それから、この展望車でも、直ぐ隣り同士に座席に着きながら、お互ひに、今まで口を利き合ふ機會がなかつたのである。

『確か、神戸からお乗りになりましたやうに思ひますが。』

暫らくしてから、紳士が、突然言つた。

『はあ。あなたも確か……』

『やつぱり、神戸から乗りました。』

『東京へ、お歸りになりますの？』

『さうです、東京へ歸るのですが……』



と言ひかけて、紳士は悲しさうに口を噤んだ。

婦人は、その悲しげな紳士の顔に、心を惹かれずにはゐられなかつたが、しかし、立ち入つた事情に話をすゝめて、聞くわけにも行かなかつた。

でも、それから婦人と紳士とは、次第に打ち解けて話しをするやうになつた。

その婦人は、外國に行つてゐた夫が、ドイツで客死したのを、今度、神戸まで歸つて來た夫の友人が、遺骨を携へて歸つてくれたので、子供を連れて、神戸まで迎ひに出かけて、今、その夫の遺骨を守つて、歸京するところだといふことが分つた。

『それは〳〵。』

紳士は、暗い顔をして、痛ましさうに瞳を曇らせ、同情深さうに言つた。人生は、どこに行つても、不幸

や悲しみを以て滿たされてゐるのだ。こんな若くて、こんな美しくて、外國で夫に死なれ、未亡人となつた婦人の痛ましい身の上に對して、紳士は、深い同情を寄せずにはゐられなかつた。

　だが、彼は、婦人に同情すると同時に、自分のことを思ふと、更に暗然とならずにはゐられなかつた。



『何しろ、突然のことではございましたし、不斷丈夫な夫が亡くなつたなどとは今でも思へません。』

　婦人も涙含んだやうな目をして、溜息を吐いた。

『さうでせうとも。』

　紳士は、同情するやうに、いくたびか頷いてゐた。

『それも、自分で看病もしたり、臨終の床にでも附き添つてゐたのでしたら、亡くなつたことが本當とも信じられ、また諦める道もあるのでせうが、外國へ旅立つ時には、あんなに丈夫で別れましたものが、それに、來る手紙にも來る手紙にも、身體は丈夫だから、安心する樣にと書いてありましたのに、突然、亡くなつたといふ電報を受取り、壺に納られたお骨を見せられましても、これが、夫の變つた姿だとは、どうしても信じられません。夫が出立する時の丈夫な姿だけが目に見えまして、世界のどこかに、まだ、丈夫でゐるやうな氣ばかりいたして、仕方がありません。』

『ほんとに、さうでせうとも。』

　紳士は、婦人の悲しい衷心の想へに對して、どういつて慰めたらいいか、分らなかつた。

『一時は、尼にでもなるか、自分も夫の後を追うて、死なうかとも思ひましたが、子供のことを考へますと、それも出來ませ

んし……」

『ご尤もです。』

『まあ、わたくし、初めてお目にかゝりましたあなたに、こんな愚痴までお耳に入れまして……どうぞ、ご免あそばせ。』

婦人は、自ら恥づるやうに顔を赧らめ、頭を下げた。

『ご主人は、ドイツで、どういふ仕事をしてゐらしたのですか？』

『ある物産會社の支店長として、働いてゐましたのですが。』

『それが、またどういふご病氣で、そんなに突然、亡くなられたのでせう。』

『中耳炎の手術から、黴菌が腦を冒したのだといふことですの。』

『それは實にご不幸でした。失禮ですが、深くご同情いたします。』と、紳士は誠實にいつた。

『有難うございます。』

『ですが、不幸は決してあなたお一人ではないのです。世の中には、もつと〳〵不幸な人間も多いのですから、さう思つて諦めるよりほかはないでせう。』

『でも、こんな不仕合せな目に逢ひますと、世の中で一番の不仕合せに見舞はれたのは、自分一人だけのやうな氣がして、悲しくもなれば、怨めしくもなり、つい愚痴もこぼしたくなりますのね。』

『ご無理はありません。』

『でも、考へて見ますと、あなたのおつしやいます通り、世の中には、わたしなどより、もつと〳〵不仕合せな目に逢つても、それでもぢつと堪へ忍んで、生きて行く人もあるのですから、それを思ふと、わたしなどは、ほんとに、愚痴などこぼせた義理ではありません。』

『差し當りわたくしなども、そのより不幸な人間の一人ではないかと、思つてゐるのですが。』

斯ういつて紳士は、その高雅な顏に、悲しげな微笑を浮べた。

『まあ。あなたが。』

婦人は、驚いたやうに目を見張つた。が、愁ひに沈み切つた紳士の樣子を、列車に乘つてから、今まで、ずつと見つゞけて來た婦人は、紳士の言葉を、決してこの場のいい加減な出たら目だと思ふわけには行かなかつた。何かこの紳士の上に掩ひかぶさつてゐる大きな不幸と、深い悲しみとを、彼の簡單な言葉の奥に感じて、ひし〳〵と胸を打たれずにはゐられなかつた。

『たゞ、さういつたゞけでは、あなたには、或ひは信じられないかもしれませんが……………』

『いゝえ。』

『若し、あなたが、私の現在の事情と、心持ちとを分つて下すつたら、ほんとうにさうだと、お感じにならずにはゐられないだらうと思ひます。』

『と、おつしやるのは？』

『人間は、どんな境遇の者にも、それ〳〵の苦しみや、悲しみがあるものですが、現在の私くらゐ、最も大きな不幸、最も恐ろしい打撃を感じてゐる者は、ないと思ふのですが……』

『まあ。』

婦人の美しく澄んだ目が、ちつと紳士の顔を見守つてゐた。

『愛するご主人に、死別されたばかりの深い悲しみを、ご自分で經驗してゐらつしやるあなたは、きつと、私の悲みと苦痛とをも、分つて下さるだらうと思ひますが……』

『一體、どんな不幸が、あなたを、そんなに苦しめてゐるのでせうか。』

『……』

紳士は、婦人から熱心に聞かれても、直ぐには答へることが出來なかつた。暗い〳〵表情をして、苦しさうに、呼吸を喘がせてゐるのであつた。

『お差支へありませんでしたら、お聞かせ下さいませんでせうか。人間は、身に餘る苦しみや悲しみでも、たゞ、それを人に話すことだけで、深い慰めになることもありますから。』

『私は、この世の中に於いて、最も大きな不幸、悲しみ、痛手は、自分の最愛の者に死別することだと思ひますが……どんなに愛してゐても、どんなに思つてゐても、死んでしまへば、もう逢ふことは出來ないのだ。呼んでも答へず、泣いても、笑つても分らない。死ぬといふことくらゐ慘酷で、恐ろしいことはない！』

紳士は物狂はしさうにいつて、熱い溜息を吐いた。

『ほんとに、さうでございますわ。』と、婦人は心から同感した。愛する夫を失つたばかりの、生ま〳〵しい悲痛な氣持を味つてゐる彼女は、死別の悲歎と絶望の感じが、ひし〳〵と胸にこたへずにはゐなかつた。

『僕の妻は、今、死にかゝつてゐるのです……』

『まあ。』

『斯うしてゐる間にも、車中宛てに、妻の死を知らせる電報が來はしないかと、びく〳〵してゐるのです。』

『……』

婦人は、無言のまゝ、痛ましさうに頷いたゞけだつた。

『この汽車の走るのも猶かしい！私は、妻が生きてゐる中に、どうしても、一度妻に逢ひたい！妻の生きてゐる身體を、この腕に抱きしめてやりたい！』

『……』

『私は、妻が危篤の知らせを受取ると、ベルリンから、斯うした苛々した思ひで、漸つとこゝまで歸つて來たのです。が、私が、どんなに焦つても、猶かしく思つても、汽車は汽車だけの速力でしか走らないし、汽船は、汽船だけの速力でしか走らないのです。私の心は、既に妻の傍に飛んでゐるのですが、身體は、斯うして、このノロ〳〵とした汽車に運ばれてゐなければならない！あゝ、どうして日本の列車は、こんなに走るのが遲いのでせう！』

紳士は、さういつてゐる間も堪へられないやうに、焦り〳〵して、窓の外を覗くのであつたが、いつの間にか沼津を過ぎ、箱根にかゝつたので、汽車の進行は、一層のろくさかつた。早春の日は、すつかり暮れて、窓の外は眞暗だつたが、列車の中には、華やかな電燈が輝いた。

『あなたのお苦しみは、ほんとに、よく分ります。』

婦人は、同情の涙に瞼の中が、自然と熱くなつて來た。

『妻の方でも、私に逢ふのを、どんな思ひをして、待ちこがれてゐるかしれないのです。』

『それは、ほんとに、さうでございませうとも。』

『私も、妻の顔を見、妻の身體を、この腕に抱きしめてやるまでは、どんなことがあつても死なしたくない！　妻の方でも、私の顔を見るまでは、どんなことがあつても、死にたくないでせう。何かにしがみ附いても、死ぬまいとしてゐるでせう。』

『……………』

『私たちの間には、子供が二人あるのです………』

『まあ。』

『兄が八つ、妹が六つです。』

『そんな可愛いお子さんが、おありになりますのにね。』

婦人は、我が身に思ひ比べて、深い溜息を吐いた。

『私は、ちやうど三年前に洋行したのですが、私も妻も、二人の子供を、どんなに可愛がつてゐたでせう。』

『よくお察し出來ますわ。』

『私が洋行する時、兄の子供は六つ、妹は四つでした。』

『……………』

『妻は、二人の子供を連れて、横濱の棧橋まで送つてくれましたが………その時分から、妻の健康は、普通ではなかつたのです。顔色も惡く、夕方になると輕い熱を出して、力のない咳をしてゐました。』

『失禮でございますが、あの、奥さまのご病氣は？』

『肺結核です。』

紳士は、躊躇するところもなく、きつぱり答へた。

『……………』

『いよ〳〵結核だといふことが分つたのは、私が洋行してから、ちやうど一年ばかり經つてからですが、妻は、自分の病氣が傳染性のものだと分ると、直ぐに湘南の療養院へ入院して、それから足かけ二年間の病院生活をつゞけて來たのです。』

『……………』

『どうかして癒らうと思つて――夫のためにも、子供のためにも、また自分のためにも、どうしても癒らなければならないと思つて、妻は、ありたけの力で、憎むべき病氣と戰つて來たのです。』

『まあ。』

『が、妻の力は、とう〳〵病氣に勝てなかつた。』

『……………』

『妻は、慘酷にも、病氣に負けたのです。妻は、今、死なうと

してゐます。』

『ほんとに〳〵、お氣の毒だと思ひますわ。』

婦人は、それ以外に、どういつて慰めたらいいか、分らなかつた。

『氣の毒だと思つてくれますか？　さうして死んで行かなければならない私の妻を、そして、こんなに愛してゐながら、死なせるよりほかない私を、それから母を失ふ二人の子供を、あなたは、ほんとうに氣の毒だと思つてくれますか？』

紳士はさういつて、ぢつと婦人の顔を見まもつた。

『えゝ！　心からお氣の毒だと思はずにはゐられません。』

婦人は、眞心籠めていつた。

『だが、奥さん、お聞き下さい。もつと〳〵可哀さうなことがあるのです。』

『その上に？』

『さうです。』

紳士は、感動的に強く頷いた。

『人間に、その上、もつと悲しい、氣の毒なことがあるでせうか？』と、婦人は目を見張つた。

『妻は、病院に入つてから、足かけ二年にもなるのに、一度だつて、子供に會はないのです。』

『まあ。』

『母として、子供を傍に置きたくないものは、一人だつてないでせう。殊に、死を目の前に控へた不治の病氣に罹つて、たつた一人で、病院のベッドに横はつてゐる身では、子供に逢ひたいのも、一しほだと思ふのですが……』

『それだのに、どうして、お子さまにお逢ひにならないのでせう。』

『お分りになりませんか？』

『……』

婦人は無言のまゝ、物問ひたげな眼ざしが、ぢつと紳士の顔を見詰めた。

『それは、自分の病氣が、傳染性だからです。妻は、自分の病氣が、可愛い二人の子供に傳染することを恐れて、自分の愛情を殺し、淋しさに、ぢつと堪へて、子供に逢はずに來たのです。死んでも、子供には逢はないといふのです。何んのために？　愛すればこそ！　あゝ、世の中に、これより大きな母の愛があるでせうか！』

『まあ、ほんとに、何んてお立派な、何んてお偉い方でせう！』

婦人も、烈しい感動を受けずにはゐられなかつた。嵐のやうに胸が波打ち、瞼からは熱い涙が溢れた。

『私の妻ながら、ほんとに立派な、偉い女です！　だが、病氣には勝てない。もう直き死なうとしてゐる！』

紳士は、自分を抑へることが出來なかつた。兩手で顔を掩うたかと思ふと、人前もなく烈しい慟哭を初めた。

だが、誰に笑ふことが出來ただらう。

二人の子供

川村禎輔といへば、或る一部では、尊敬を集めてゐる、世界的の學者だつた。子爵で、理學士で、その専攻は生物學だつたが、三十七八で、既に、世界的の研究と發見が、五六種にも及んでゐる。日本よりも、寧ろ、歐米の學界で、更らに重きをなしてゐるくらゐ、權威のある存在だつた。

神戸から偶然同車した丸髷の婦人は、見知らぬ紳士と話しをしてゐる中に、その紳士が、川村禎輔であることを、だん／＼知つて來た。彼女は、彼が誰であるかを知ると同時に、更らに畏敬の目を見張らずにはゐられなかつた。

そして、婦人は、川村禎輔の結婚ローマンスを、その當時のいろ／＼なゴシツプで、見たり聞いたりしたことを覺えてゐた。

川村が、アメリカの大學を卒業して、歸朝して間もなくの頃だつたらう。彼は、北海道の農大の教授として迎へられたが、或る陸軍中將の令孃と、烈しい戀愛に陷つた。そして、一ケ年ばかり後に結婚したのが、現在の夫人の芙美子である。芙美子は、學習院を卒業したばかりで、その美貌と共に、竹柏園の才媛として、當時の社交界では、誰知らぬ者もないくらゐ、有名な花形だつた。

川村も、專門の學問が、生物學でありながら、文才の中々豐かな、多感多恨の青年學徒で、歌や、詩や、創作などを、よく書いた。そして、その作品は、當時華冑界の若い連中が同人になつて發刊してゐた『樅の木』といふ雜誌に、毎月發表された。清新で、情熱的で、力強い川村の作品は、若い男女の心を魅惑せずには措かなかつた。彼の存在は、直きに、青年男女たちの渇仰の的とならずにはゐなかつた。

川村と芙美子とを結びつけたのは、同じ、文學的な趣味だつた。二人が結婚して、札幌の閑靜な博物館附近に、新家庭を作つた時には、少し大袈裟ないひ方をすれば、殆んど全國の青年男女の、羨望のまととなつたといつてもよかつた。

もちろん、新家庭の幸福な生活や、甘い感情は、彼等の作品となつて、月々の雜誌に發表され、若い、あらゆる讀者に愛讀され、魅了せずには措かなかつた。二人の幸福な新婚生活は、いろ／＼なゴシツプとなつて傳へられ、新家庭の寫眞なども、度び／＼雜誌の口繪などに飾られた。

それは、もう十年近くも以前のことだつたが、さう分れば、丸髷の婦人も、なるほど、紳士の顔に、どこか見覺えがあるやうな氣がするのであつた。多分、時々、雜誌や新聞などで見たことのある寫眞の記憶が、心のどこかに殘つてゐるのだらう。

その川村禎輔が、今、愛妻の臨終の床を見舞ふべく、遙る遙るとベルリンから歸つて來たのである！

丸髷の婦人は、深い感慨を催さずにはゐられなかつたと同時に、川村の悲痛な歎きに對して、更らに哀切な同情をそゝがずにはゐられなかつた。



どんなに愛し合つた仲でも、無慈悲な死のためには、冷酷に引き離されなければならない！

さう思つて、鋼のやうに冷たい死といふ事實が恐ろしく、呪はしかつた。

最愛の夫を、自分から奪つたのも死である！　愛し合つた妻を奪はれようとして、一人の男が、こんなに心を痛め、悲しみ歎いてゐるにもかゝはらず、その妻を奪つて行かうとしてゐるのも、やつぱり死である！

しかも、一度、死の冷たい手と握手してしまへば、もうどんなことがあつても、二度と再び、歸つて來ることはないのだ！

婦人は、慄然として戰かずにはゐられなかつた。また、かつとして憤らずにはゐられなかつた。

が、恐ろしい『死』は、見えないところで、氷のやうに冷たい微笑を含んで、氣味惡い眼を光らせてゐる！　あらゆる人間に對して、その恐ろしく、忌はしい手を擴げてゐる！

汽車は、山北のステエションを過ぎて、下りになつた線路を、烈しい速力で走つてゐた。トンネルを出たと思ふ間もなく、また、次ぎのトンネルを入つて行くのであつた。

『折角、お目にかゝつたのですが、お別れしなければならない時が來ました。』

斯ういつて紳士は、悲しみの底から、やつと立ち上つた。

『あら、まだ、東京までは、かなり間がございますのに。』

婦人は、不思議さうに、川村の顔を見上げた。

『私は、國府津で、下りなければならないのです。』

『あら、東京まで、眞直ぐにお歸りになるのぢやありませんでしたか。』

『いゝえ、奥さん。妻は、茅ケ崎の療養院に入院してゐます。私は、この特急を國府津で下りて、次ぎの普通列車で、茅ケ崎まで參らなければなりません。』

『まあ、さうでございましたか。』

『國府津まで、私の妹が、二人の子供たちを連れて、迎ひに來てくれてゐる筈ですから……』

『では、ほんとに、もう直ぐ、お別れでございますのね。』

婦人も、ひどく殘り惜しさうにいつて、自然と、悲しみに蔽はれて來た暗い面を、俯垂れずにはゐられなかつた。彼女の連れた小さな子供も、いつの間にか川村に馴染んだと見えて、侘しさうな眼色をして、川村の顔を仰いでゐた。

『こんなことを申し上げては、失禮かも知れませんが、何んだか、私は、奥さまに、初めてお目にかゝつた方のやうな氣がしないのです。』

『わたしこそ。』

『いろ／＼詰らないことをお耳に入れましたが、どうぞ惡しからず。』

『いゝえ、どういたしまして。わたくしこそほんとに失禮いたしましたが、どうぞお心にかけられないやうに。』

『若し、ご縁がありましたら、この次ぎ、また、どこかでお目

にかゝれることもあるでせう。』

『そして、命がありましたら。』

『さうですね。』

川村は淋しく微笑した。

列車が國府津驛に停ると、川村は、もう一度婦人に別れを告げ、トランクや、スウツケースを赤帽に渡し、自分は、ステツキ一本の身軽になつて、プラツトホームに降り立つた。

『ほら、パパさんが。』

―プラツトホームには、川村に似た品のいい一人の婦人が、男の子と女の子と――二人の子供を連れて、立つてゐたが、ステツプから降りた川村の姿を認めると、口早やに子供たちに囁いて、小急ぎな足どりで、せかせかと近づいて來た。

もちろん、川村の方でも、彼等の姿を認めると、つかつかと寄つて行つた。

その時には、ちやうど、列車が動き初めたところだつた。丸髷の婦人の美しい顔が、或る一つの窓からプラツトホームを覗いて、涙含んだやうに潤んだ目が、ぢつと、その光景を見入つてゐたが、列車の速力が早くなると同時に、だんだん遠ざかつて行つた……

『お歸りあそばせ……』

二人の子供を連れたのは、川村の妹で、愛子といふのだつた。川村の妻が入院してからは、母の代りになつて、二人の子供の面倒を見てくれてゐる。

『いろいろお世話だつた。』

川村は、我が妹ながら、彼女の前に輕く頭を下げずにはゐられなかつた。

『さあ、隆也さんも、知子さんも、パパさんにご挨拶なさい。―覺えてゐて？　あなた方が、あんなに毎日いひ暮して戀しがつてゐたパパさんですよ。』と、愛子は何時の間にか涙含んでゐた。

『パパ、お歸りなさい。』

と、隆也がいつて、小さな頭を下げてお辭儀をすると、妹の知子も、房々したボッブの頭を下げて、

『パパ、お歸りなさい。』といつて、くるくるとした目で、父の顔を仰いだ。

濡れた野葡萄のやうに、黒く輝いた知子の瞳、智的な額、すつきりと高い鼻、それは、母の芙美子の面影を、そのまゝ傳へたやうに、よく似てゐた。

『おゝおゝ、二人とも、おとなしくしてゐたでせうね。』

川村は、二人の子供の額に、代る代る、長い長い接吻を與へた。子供の可愛さ、妻の死！　彼の瞼の中は、自づと熱く濕らずにはゐなかつた。

『隆也さん、あなた、パパさんのお顔を覺えてゐて？』

愛子は聞いた。

『僕、覺えてゐる？』

『さう、偉いこと。それでは、知子さんは？』

『わたしだつて、覺えてゐるわ。』

『まあ。』

『ママと一緒に、大きなお船のあるところへ行つたでせう。パパは、そのお船に乘つて行つてしまつたのよ。』

『あゝ、船に乘つた時のことを、覺えてゐるのだね。』

川村は、深く感動すると同時に、新たな愛を感ぜずにはゐられなかつた。母の芙美子に抱かれて、横濱の埠頭に見送つた時には、まだ、漸つと四つになつたばかりだつたのに、その時の目で見たことを、よく覺えてゐるものだと思つた。小さな子供の魂の不思議さに、驚かずにはゐられなかつた。

特別急行が發車した後、次ぎの普通列車までは、三十分あまり待たなければならなかつた。

川村は、妹と二人の子供を伴ひ、驛前の待合所に行つた。そこで、輕い夕食をとり、子供たちにも與へた。

『やつぱり、子供たちには、今はないといつてるのか?』

川村は、忙しさうに食後の紅茶を啜りながらいつた。

『お姉さまは、病氣が傳染することを、恐れてゐらつしやいますの。それから、病みやつれた母の姿を見せて、子供たちの純潔な魂に、暗い影を投げることを、恐れてゐらつしやいますの。』

『芙美子の力でも、子供が、斯うして大きくなつたところを、どんなにか見たいだらうのに。』

『それは、もう!』

『やつぱり、子供に病氣が傳染するとイケないと思つて、ぢつと我慢してゐるのだな。』

『えゝ。齒を喰ひしばるやうにして、我慢してゐらつしやるのですわ。』

『それで、病院には、誰が附き添つてゐるのだ?』

『看護婦が二人ですの。』

『それきり?』

『えゝ。ほかの人は、必要がないとおつしやるものですから。』

『やつぱり、傳染するやうなことがあると、イケないと思つてだらう。』

『さうらしうございますの。お姉さまは、たゞ、お兄さまが歸つて來て下さるのを、どんな思ひをして待つてゐらつしやるか、しれないのです。』

『さうか。』

川村は、暗然として唇を結んだ。

だん〳〵、發車の時間が迫つて來たので、川村は、その待合所を出ると、またステエションに引つ返して來た。

『それでは、お前たちは、これからどうする?』

川村は、茅ヶ崎で降りて、眞直ぐに病院に行くつもりだつた。

『わたしたちは東京へ歸らうと思つてゐます。』

『さうか。』

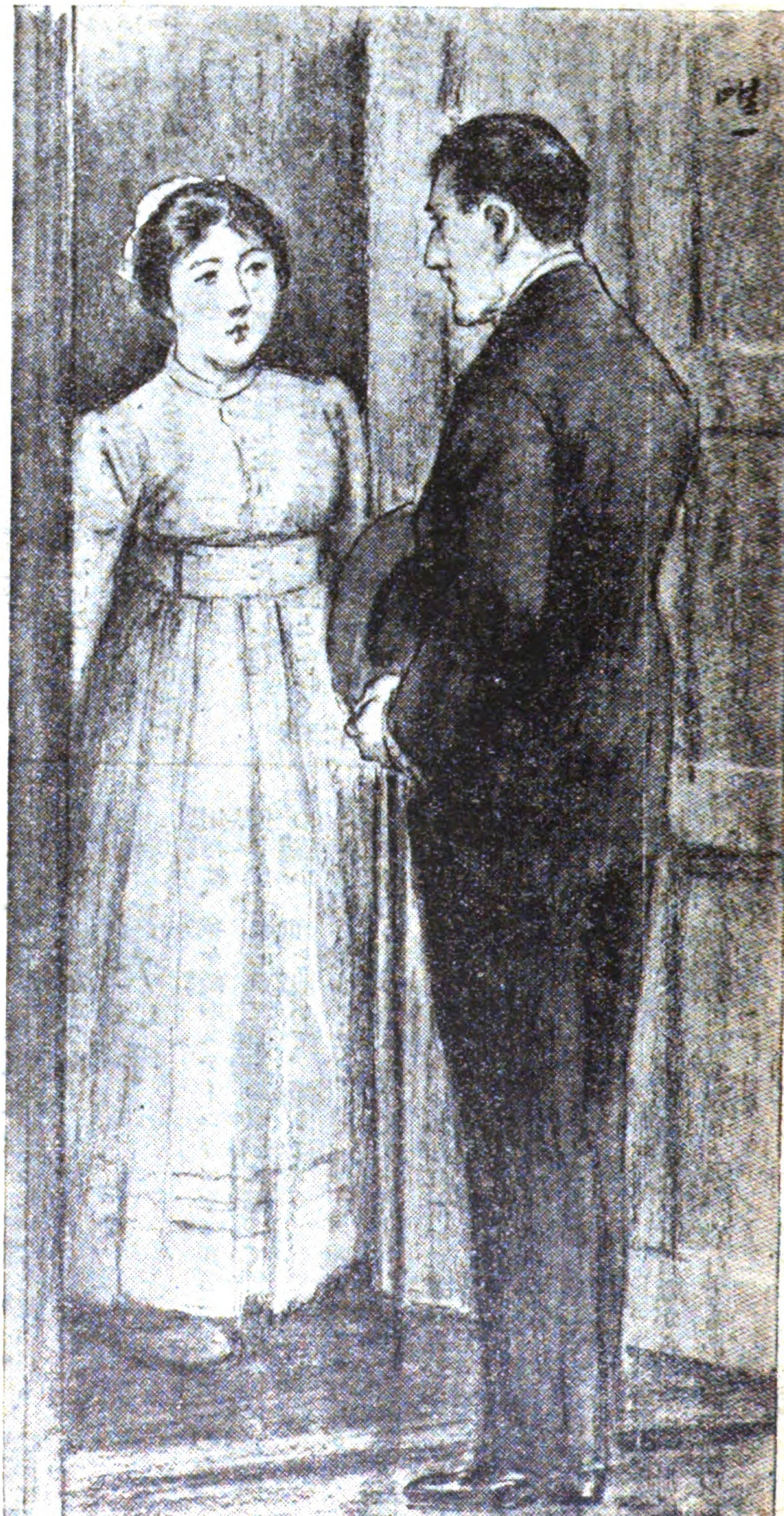
『子供たちが、パパさんに逢へましたから、東京に歸つて、パ

パさんのお歸りを、待つてゐます。』

『さうしてくれ。』

『僕、パパと一緒に行くの。』と、隆也がいつた。

『わたしも。』



知子も、負けずにいつた。

二人には、久しぶりで顔を見た父が、懐しかつたのである。

『いゝえ、パパさんは、これから病院に行らつしやるのですから。』

愛子が、優しく宥めた。
『パパは、ママの病院へ行らつしやるのでせう。』
『さうなの。』
『僕も、病院に行きたい。』
『わたしも。』
知子もせがんだ。
『いゝえ。子供は、病院なんかへ行くもんぢやないの。ご覽なさい、隆お兄さまが、分らないことをおつしやるものだから、知子さんも一緒になつて、同じことをおつしやるではありませんか。』
愛子は、二人の子供を、頻りに賺したり宥めたりした。
『さうだ、二人とも、愛子叔母さまとご一緒に、おとなしく東京の屋敷に歸るんだ。パパは、病院に寄つて、後から直きに歸るから。』
川村も、一緒になつて子供たちを宥めるのであつた。
『パパは、いつ歸るの?』と、隆也は父に聞いた。
『さうだね、直きに。』
『今夜歸るの?』
『さあ、今夜は歸れないね。』
『では、明日?』
『ママのご病氣の工合で……だから、二人とも、屋敷でおとなしくして、パパの歸りを待つんだ。』
川村は、子供たちの淋しい氣持ちを考へると、胸が裂かれるやうな氣がした。が、これから妻の病床を見舞はなければならない彼は、二人の子供と一緒に、このまゝ屋敷に歸るわけには行かない。また、芙美子の病氣の模樣に依つては、そのまゝ、病院にゐて、附き添つてやらなくてはならないかもしれないのだ。
自分を慕つてゐる子供の可愛らしい姿を見る目も、次第に涙に曇らずにはゐなかつた。

冷たい手

川村は、茅ケ崎のステーションを下りると、俥に乘つた。
愛子に連れられて東京の屋敷に歸つて行く二人の子供は、列車の窓から顏を覗いて、頻りに、
『パパ、早く歸つてね。』といつて、頼むのであつた。
母が病院に入つてから、もう一年以上も逢はないのだ。母の方でも、どんなに逢ひたいか知れないに違ひないが、子供たちの方でも、どれくらゐ淋しいかしれないのだ。
川村は、母の心を察し、子供の心を思ふと、暗然として涙なしにはゐられなかつた。これくらゐ悲しいことが、ほかにあるだらうかと思はれた。
今更ら、どうすることも出來ないことながら、妻が、肺結核などといふ傳染病に罹つたことが、哀れでもあれば、怨めしくもあつた。
これが、若し、そんな心配のない病氣なら、子供たちにも、

會はせることも出來れば、どんなにか逢ひたいに逢ひない母にも、子供たちを逢はせてやることが出來るものを！

俥の上に搖られてゐる川村の瞼の內側は、つい熱く濕つて來ずにはゐなかつた。

　川村は、茅ケ崎は初めてだつたが、ステエションから病院までの道のりは、かなり長かつた。電燈の仄暗い、貧弱な一筋町を通り拔け、線路の踏み切りを越えると、ポプラの並木や、暗い松林などがあつて、ちらほらと、別莊風の家が見えた。晴れた空には、十日ばかりの月が懸り、どこかで、波の音が、微かに聞えて來る。生溫かいやうな潮の香も、ぷんと鼻に來た。

　川村は、本當に日本に歸つて來たのだといふ氣がした。自分は今、日本の大地の上に立つてゐるのだ。もう直ぐに、戀しい妻にも逢へるのだ！

　さう思つて、川村の胸は躍らずにはゐなかつた。

　だが、その妻は、死に瀕してゐる！　斯うして自分が、俥に乘つて病院に行きつゝある間にも、妻の臨終は、迫りつゝあるかもしれないのだ！

　川村の胸は、のろ〳〵した俥の上で、焦らずにはゐられなかつた。

　こんもりと茂つた大きな松原の中に、病院の明りが、チラチラと瞬くのが見え出した。暗い中に、病室の窓々の電氣の光りが、さも懷しさうに、瞬いてゐる。そこには、どれだけの病人がそれ〳〵の嘆きと悲しみと、それ〳〵の諦めと希望とを持つて、生きてゐるかしれないのだと思ふと——そして、自分の妻も、その中の一人なのだと思ふと、明るい窓々の光りを見ただけでも、川村の胸は、一ぱいにならずにはゐなかつた。

　俥は、直きに病院の玄關に着き、川村は、妻の病室に案內された。

　先に立つた看護婦が、コツ〳〵とノックすると、

『はい。』と、中から優しい返事がして、ドアが開いた。

　一人の看護婦が、その清淨な眞白な姿を、ドアの隙間から覗いた。

『どうでせうか？　妻の容態は？』と川村は、附き添ひの看護婦の姿を見ると、急いで聞いた。

『あの、ご主人さまでゐらつしやいませうか。』

　優しさうな中年の看護婦は、川村の姿を眺めながら聞いた。

『さうです。』

『外國からお歸りになりました？』

『今、歸つて來たところです。東京の屋敷にも歸らずに、こゝに降りたのです。』と、川村は急き込んだ。

『失禮いたしました。奥さまが、他の方だと、どなたでも、病室にお入れにならないものですから。』

　看護婦は、頭を下げた。

『よく知つてゐます。』

『どうぞ、お入り下さいませ。どんなにか、お待ちになつてゐらつしやいました。』

『どんな樣子でせう？』

『只今は、ちよつとお眠りになつてゐらつしやいます。』

『さうですか。』

川村が、一歩病室に入つて行くと、消毒藥の涼しい臭ひが、ぷんと鼻を襲ふと共に、調節された軟らかな光線の中に、病室の有樣が、はつきり見えた。

部屋の眞中に、白く塗つた鐵製の一つの寢臺があつて、白いシーツ、白い毛布の中に埋まるやうにして、纖細い身體を横へてゐるのは、確かに、妻の芙美子に違ひなかつた。

川村は、つか〱とベッドの傍に近づくと、芙美子の寢姿を、ちつと見下ろした。眞白な枕の上に、痩せた芙美子の顔が少女のやうに小さく見えた。少し落ち窪んだ瞼を輕く閉ぢ、長い、美しい睫毛が、黑々として見えた。つんと高い鼻は尖つたやうに鋭くなり、乾いた唇を、少し開き氣味にして、力ない、不規則な呼吸を、微かに通はせてゐる。

川村は、妻の寢顔を一目見ただけで、それが見違へるほど憔悴し盡してゐるばかりでなく、あり〱と、冷たい死相が現はれてゐることを、はつきりと感ぜずにはゐられなかつた。病氣のために、どんなに憔悴しても、彼女の靜かな美しさには、ちつとも變りがない。以前のやうに房々として變らぬ豐富な髪の毛を、無雜作に束ねたのが、重さうに、枕の上に垂れてゐる。中高で、面長な、氣品に富んだ顔立ちは、ます〱氣高くなつて、何んだか神々しくすら見えた。

川村は、妻の寢顔を、つく〴〵と見詰めてゐる中に、何んだか堪らなく胸苦しくなつて來ると同時に、涙が、止め度もなく頬に流れた。留めようとしても留まらなかつた。

彼は、思はず身をかゞめると、妻の額の上に、唇を押し當てた。

芙美子は、その時、ぱつちりと目を開いた。

『芙美子！』

川村は、靜かに唇を離して、身を起すといつた。

『……』

芙美子は答へなかつた。小鳥のやうに黑い目を、くる〱と見張つたまゝ、何かにひどく驚いたやうに、ちつと川村の顔を見上げてゐた。

『漸つと、今歸つて來たよ。』

川村は、萬感こも〲胸に迫つて、喘ぐやうにいつた。

『……』

それでも芙美子は、やつぱり、何んにもいはなかつた。たゞ、見る〱瞼の中に、水晶のやうな涙の玉が溢れたと思ふと、長い睫毛を傳うて、ほろ〱と、枕の上にこぼれた。

『氣分は、どうだ？　元氣を出して、よくならないといけない。病氣なんか、氣の持ちやう一つで、どうにでもなるのだ。』

川村は、ほかに慰める言葉がないので、漸つとそれだけいつた。

『あなた！』

芙美子は、力のない細い聲で、一生懸命にいつた。

『どうした？』

川村の目からも、新らたな涙が流れた。

『よく歸つて來て下さいました！』

『うむ。』

『ご無理なお願ひして濟みませんでした。いろ〱のご都合がおありになることは、よく分つてゐましたので、出來るだけ我慢してゐましたの。ですが、もう、どうしても、我慢がしきれなくなつてしまつたのですわ。わたしの我儘を、どうぞご免下さい。』

『もつと早く歸つて來たいと思つて、いろ〱焦つたのだが、豫定より一年も早く歸朝するためには、いろ〱の都合もあるものだから、こんなに遲くたつてしまつて、ほんとに惡かつたと思つてゐる。』

『どういたしまして。』

『これでも、精一ぱい早く歸つて來たのだから、勘辨してくれ。』

『わたくし、逢ひたうございました。ほんとに逢ひたうございました。どんなに待つてゐたでせう。でも、斯うしてあなたのお顏を見て、これで、わたくし、何んにも思ひ殘すことはありません。』

芙美子は、さも懷しさうに、しげ〱と夫の顏を見上げるのであつたが、彼女の目は、後から〱と溢れて來る涙のために曇らされて、懷しい夫の顏も、ハツキリとは見えないのであつた。

『…………』

川村は、妻の言葉を聞いてゐると、胸が刺されるやうな氣がした。どうかして助けてやりたいと思ひながら、既にこんなになつてしまつてゐるものを、どうしても助ける道がないことは、明らかだつた。

『わたしね、あなたのお顏を見るまでは、どうしても死ぬまいと思つてゐましたの。誰に逢はなくてもいい。あなた一人に逢つてあなたの手に抱かれて死ぬことが出來れば、それで幸福だと思つて、あなたのお歸りを、待つてゐたのですわ。』

『隆也や、知子や――可愛い二人の子供を殘して、お前は死ぬといふのか。』

『でも、仕方ありませんわ。二人の子供を、どんなに可哀さうに思ひましても。』

『お前は、こんなにお前を愛してゐる私を殘して、死んで行くといふのか。』

『わたしだつて、どんなに生きてゐたいかしれません。』

さういつて芙美子は、暗然とならずにはゐられなかつた。

『元氣を出してくれ。』

『いくら元氣を出しましても、わたしには、もう生きて行くだけの力がないのですわ。それは、誰よりもわたしに、ちやんと、よく分つてゐますの。』

芙美子は、もう泣かなかつた。が、彼女の絶望的な言葉は、泣くよりも、もつと悲しかつた。

『お前は、病院に入つてから、子供たちには、一度も逢はないさうだが……』

『えゝ。』

『一度、逢つたらどうだ？』

『逢ひたいのですわ。でも、わたくし、ぢつと我慢して、逢ひません。』

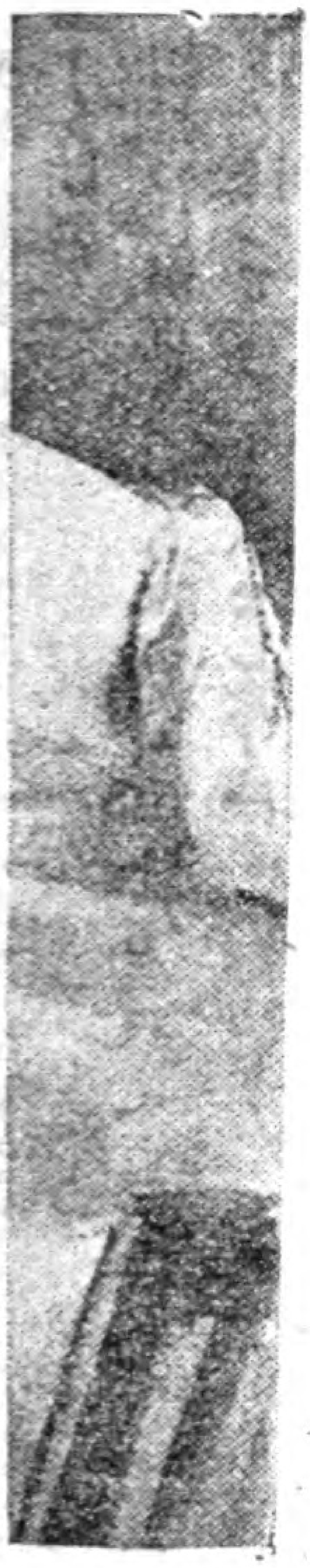
『子供たちも、どんなに、お前に逢ひたがつてゐることだらう。』

『子供たちが可愛いければこそ、わたし、逢ひたいのを、ぢつと、斯うして我慢してゐるんですわ。』

『それは、よく分つてゐる。』

『わたし、あなたに、斯うしてお逢ひ出來たゞけでも仕合せです。子供たちのことは忘れて、あなたの妻として、あなた一人に傍に附いてゐて頂いて、死んで行かれゝば、それでわたしは滿足です。――どうぞ、お手を貸して……』

斯ういつて芙美子は、纖細い、顫へる手を延べると、夫の手に縋つたが、その手には、既に縋りつくだけの力もなかつた。



川村は、痛々しい妻の手を、しつかりと握つてやつた。――泣くまいとしても、泣かずにはゐられなかつた。

附き添ひの二人の看護婦も、傍らに立つて、嗚咽の聲を呑んでゐた。

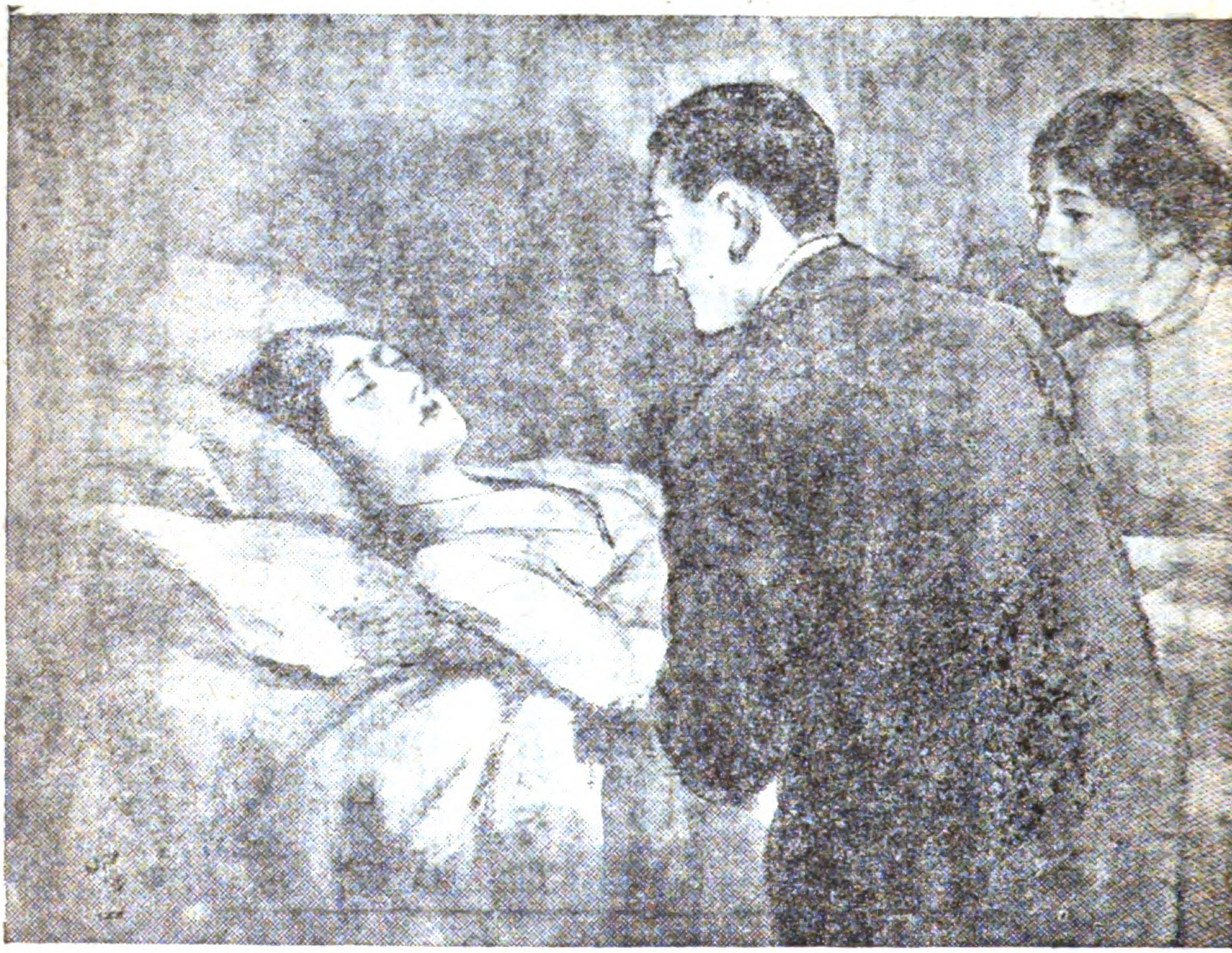
日の出前

芙美子は、彼女の希望通り、夫の手に抱かれて死んで行つた。

川村の悲しみと、絶望とは、見るものも痛々しいくらゐだつた。彼は、あんなに愛し合つてゐた妻に死に別れた後、生きて行くことの無意味を感ぜずにはゐられなかつた。胸が掻き毟られるやうに切なく、頭の中が物狂ほしくなつて、このまゝ、妻の後を追ひたいと思ふことも、度び〳〵だつた。

でも、川村は、妻の臨終のことを思ふと、自分の悲しみのために、取り亂してばかりゐられなかつた。

『わたし、今、死んで行くのは、殘念です。あんな小さくて、母に死に別れる二人の子供たちのことを思ふと、わたし、何かに噛り附いても、生きてゐたい。ほんとに〳〵、子供たちが可哀さうで堪りません。あなたにも、お氣の毒です。でも、自分では、どんなに生きてゐたいと思つても、生きてゐられないものは仕方がありません。ですから、あなたも諦めて下さいませ。二人の子供たちのために、今までよりも、もつともつとしつかりして、生きて下さいませ。母を失うた可哀さうな子供たちを、母の分まで可愛がつてやつて下さい



ませ。』

斯ういつて芙美子は、瀕死の息の下から、手を合せんばかりにして、夫に向つていつた。それは、遺言も同じことだつた。それからは、彼女は、もう何一つとして、まとまつたことは言へなかつた。

『あなた、歸つて來て下すつたのね。』

時々、不安さうに目を開いては、夫の顏を求めていつた。

『あなたと一緒に、いつまでも〱生きられないことは、ほんとに殘念ですわ。——でも、ご免なさい。』

さういつて、先立つ死を、夫に詫ぶる日には、自然と涙が浮んだ。

『わたしは……………幸福です……………あなたも……………どうぞ……………仕合せに……………子供……………子供を……………』

低い、聞き取りにくい聲で、喘ぎ〱いつた時には、川村の胸は、刳られるやうな氣がした。

そして、何んにも言はなくなつたと思つたら、芙美子の魂は、もう早や、地上のものではなかつた。

芙美子が、息を引き取つたのは、夜中の二時だつた。ほんとに、果敢ない死別だつた。長い間、外國と日本とに別れてゐて、漸つと逢つたと思ふ間もなく、心行くまで看護してやる間もなく、夫の歸朝を待ち兼ねたやうにして死んでしまつた。

それは、川村にとつて、餘りに他つ氣なかつた。彼は、

妻の身體が冷たくなつてからも、二時間も、三時間も、妻の死に顔を見守つたまゝ、石のやうに動かなかつた。

芙美子は、美しい、安らかな顔をして、眠れるが如く死んでゐる。

『もう、再び口を利くこともないのだ！　何をいつても、分らないのだ！』

幽冥、ところを異にしたといふ感じが、烈しく川村の胸を嚙んだ。そして、汪然たる悲しみが、彼の全肉全靈を掩はずにはゐなかつた。

だが、生きてゐる者は、動かないわけには行かなかつた。川村は立つて、窓のカーテンを絞つた。

外には、早春の曉が來てゐた。空は蒼く、松林の向うに、紺碧の海が擴がり、遙か地平線の彼方は、日の出前の赤々とした光りに、だん〱明るくなつてゐた。

ほんとうに、すが〱しい朝だつた。

川村は、冷たい窓硝子に、熱した額を力なく押しつけて、爽かな朝の明るい光景を眺めてゐる中に、殆んど萎え切つたやうな身内に、だん〱一種の生氣が漲ぎつて來ることが感ぜられた。

偶と、汽車の中で、偶然一緒になつた、美しい丸髷の婦人の姿が、川村の心に思ひ浮べられた。

『さうだ、夫に突然死なれた妻でも、あゝして健氣に生きてゐるではないか！　妻の死に逢うて、このまゝ碎けてしまふやうなことで、どうするのだ！　それは、妻の本意でもないに決つてゐる！』

川村は、さう思つて振り返つて見ると、眞白なベッドの上には、芙美子の小さな顏が仰向いて、窓から射し込む朝の光りが、彼女の顏の上に、白々と流れてゐるのが、死んだといふよりも、ちやうど、眠つたまゝ、微笑んでゐるやうに見えた……。

『芙美子！』

川村は、思はず心の中に、妻の名を呼ばずにはゐられなかつた。

彼は、さうして朝の光りの中に、つく〱と妻の死に顏を見守つてゐるうちに、だん〱、妻が死んだのではなくて、今までとは別の形で、生きてゐるのだといふ氣がして來た。どこかで、妻の微笑した目が、ぢつと、自分を見まもり、自分の耳に、何か囁いてゐるやうな氣がした。

『あなた〱、どうして、そんなに力を落してゐらつしやるの！　あたしは、ちやんと、こゝにゐるぢやありませんか。ここで、あなたのことも、子供たちのことも、ちやんと見てゐますの。』

妻の聲が、どこかで、さういつてゐるやうな氣がした。

川村は、當てもなく、ぢつと空間を見詰め、耳を傾けた。妻の生きた姿を求め、妻の言葉を聞かうとするやうに――

『生きてゐる〱。そして、どこかで、私や、子供たちを、ちやんと見まもつてゐるのだ。』

川村の胸の中には、或る希望の光りが流れた……。（終）

泰西挿話選

◇數の奇績

西洋で十三の數を忌む事は誰でも知つてゐる事だが、ギリシヤの哲人ピタゴラスの定義によると『二』がいけないとある。いかさま二月の二日が、冥土の神と云はれるローマ神話のプリユトー神に捧げられてゐるのは緣起が良くない。今、各國國王にとつて、二の數が如何に不吉であるかをお眼にかける。



先づ英國では、ハロルド二世がヘスチングスの役で戰死し、ウイリアム二世は弑され、リチヤード二世は廢されるし、ゼームス二世は讓位を餘儀なくされてゐる。佛國では、シヤトル二世が毒殺され、フランシス二世は特に不幸な境涯に陷り、ジヨン二世は王位に上れず、ヘンリー二世は競技中に突然殺され、ナポレオン二世も統治の實權が握れなかつた。

◇系圖自慢

家系を大變自慢にするマクドナルドと云ふ蘇格蘭人があつた。機會さへあれば、先祖の古い事、先祖に名士の多い事を自慢にしてゐた。これを聞かされつけてゐる友人は、苦々しいものに思つてゐたが、たうとう或る晩のこと、堪忍袋の緒を切らして、

『君は先祖が古い古いつて云ふが、ノアがマクドナルドを箱舟へ乘せたつてことは、バイブルに見えないぜ』

『いや、わが先祖マクドナルドともあらうものが、何の必要あつて、ノアの如きと箱舟を共にしよう。わが祖先で自分の舟を持たなかつた者は一人もないのだ』

友人は開いた口が塞がらなかつた。

◇最も有效な金の使ひ方

印度の土人の少年の學校を經營してゐる英國の牧師が、男性的精神を奬勵するために、クリケツトを敎へてやり、少年達も大變熱心だつた。このチームを物にするには、隨分苦勞をしたが、愈々附近の學校へ挑戰するまでになつたので、牧師は是非とも全力を盡して勝てと激勵した上、新しいバツトやタツクルの購入費として十五ルピーの金を與へ、最も有效な方法を考へて使ふやうに申し渡した。愈々當日は來た。新チームは晴れの試合場へ、必勝の喜色滿面、勇躍して姿を現はした。が、何としたことか、どの選手も古いタツクルを持つてゐる。驚いたのは牧師、

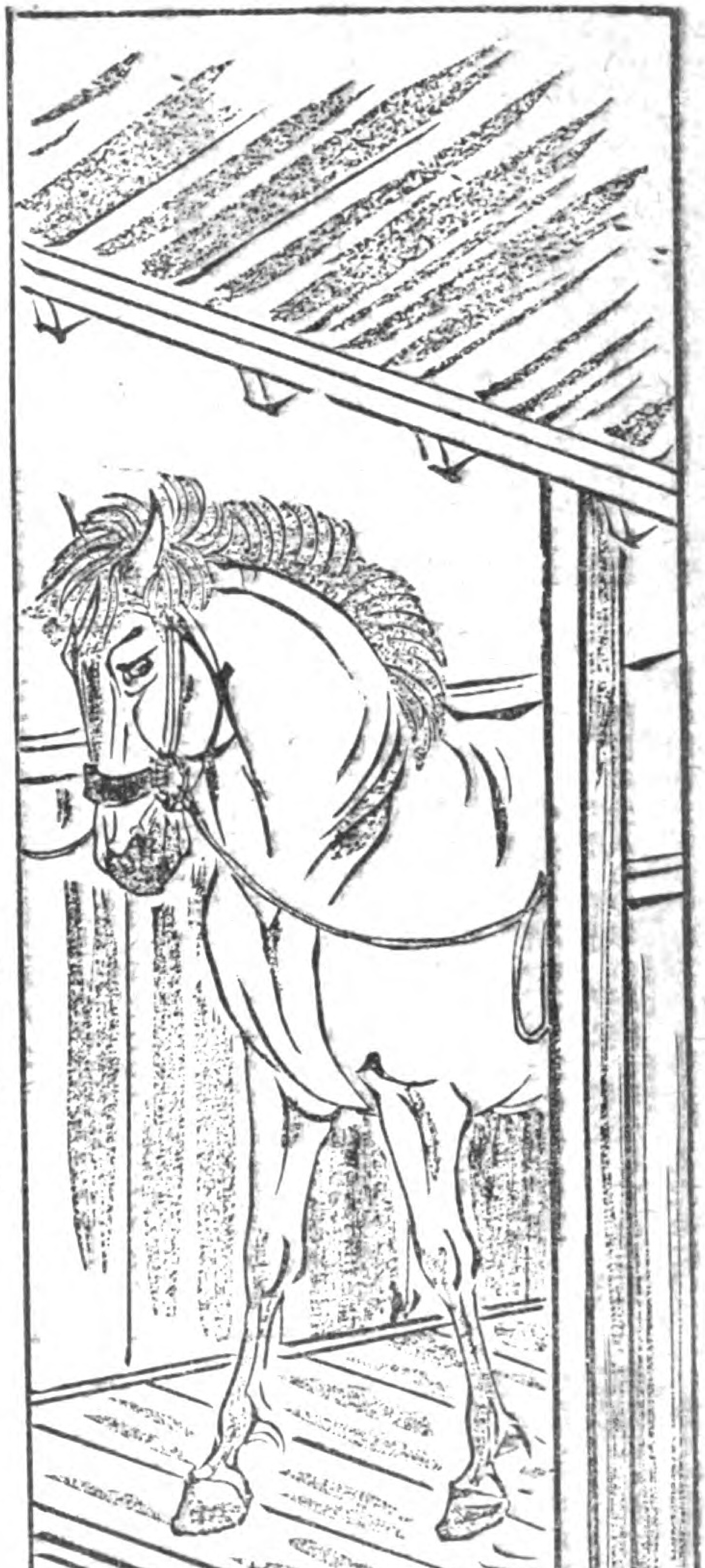


『おい〱、私のやつた十五ルピーをお前達どうしてしまつたのだ。新調のバツトはどこにある』すると主將の答がいゝ。『はい、先生が、この試合に勝つために最も有效な方法を考へて使つていゝと仰有いましたから、皆審判にくれてやりました』

かくて新チームは大勝を博した。

時代小説 大醜女物語

本田美禪
挿繪 磯田長秋



相弔ふ淋しき兩個

小雪とお袖とは佇んだまゝ、眼に一ぱいに涙を湛へて、面あてらしく聞えて來る謠の聲と鼓の音とに小耳をじつと澄まして、ゐたが、暫くすると着物の袖で涙を拂ひながら小雪はいつた。

『今はお邪魔をせぬ方が好い、來や』

『でもこのまゝで放つて置いては……』とお袖は矢はり口惜げに紙門の面を睨まへてゐる。

『來やと申すに』

『はい……』

『妾に少し考へがある』といひながらお袖の手から小雪は薙刀を無理に取り、先に立つて廊下傳ひに自分の居間の方へと來たが、谿川の上に架けられた渡り廊下の上まで來ると、また立止つて耳を澄ました。

『翠帳紅閨に、まくら並ぶる床の上』といふ謡の聲が、嘲けるやうに彼等の後からまた朗々と聞えて來たのだ。

・・・・・・

お袖の手から受取つた斑月毛を厩に繋いで、厩仲間に鞍を卸させ、秣を與へさせたりしてから、加地はまた元の屋方の方へ來ようとしたが、どう思つてか踵を回へすと、厩に沿うて爪先上りに、後の松林の中へ入つた。

林はすべて赤松で、どれを見ても百年以上の巨木が密生してゐるのだが、眞直によく伸びた樹木は建築用としてみな斫出されてしまつてあるので、裏山へかけて蓊鬱と繋つた松の間には、ぽかんと穴のあいたやう日光の射す許もある。伐株のある所にも自然と道が作られて、其れが縦横に這つてゐる。城普請にかゝらぬ前には、人跡未踏の深林で、丈にあまる雜草や灌木が生えてゐたのだが、其等の物も大方は伐り仆されたり、蹂躙されたり、薙ぎ仆されたりしてしまつてあるので、林の中はからッとしてゐる。眼を擧げて見下すと、間近に建つた厩を初め、主人夫婦の屋方から、今普請最中の大手の見附あたりまで、一眸の中に集まつて來る。

彼はその中を逍遥しながら、何か煩悶をするやうに、眉を顰め、唇を噛み、腕を拱いたり總解いたりして、折々溜息を漏らしてゐたが、一本の深山櫻が、恰も逝く春を追ふやうに殘んの花をちらり〳〵と空に翩へしてゐる下まで來ると、ふと氣がついて頭上を見仰げた。

晩春の日は西へ傾き、燃ゆるやうな夕陽を山の端ごしに這つてゐるので、若葉に交る花びらは薄紅に色染えてゐる。

『ふん、山中にも花はある、而て時が來れば矢はり咲く……』

と眺めてゐたが、やゝあつて淋しく笑ふと、側にある伐株へ崩れるやうに腰を下した。腰には小刀だけを帶び、縞の袴を穿いてゐる。

鶯の啼く聲が左方の谷の底から聞える。

『さて什うしたら好いだらう』呟きながら折曲げた足の爪先のあたりを見入ると、彼はまた溜息をした。道中にては彼女もまた奥方と共に夜の目も合はさず、武器馬具の買入や、仕官志望

者の檢査など、次から次へ多忙しく立働いてゐたゝめに、云ひ寄る隙がなかつたのだが、當地へ着いて既に一月いや五十日あまりになるのに、尙ほ矢はり落ちついて言葉を交す隙もない。尤も今は普請最中、猫の手も借りたいくらゐに家中一統朝から晩まで働いてゐる場合であるから、然うあつたとて止むを得ないが、さればとてあのやうに、影の形に伴ふごとくに、領內檢分の供にまで付いて行かんでも好さゝうなもの。風呂に入るにも飯を食ふにも——はゝゝゝ冗談じやない、瞬く暇も奥方の側から退いた例がないのだ。あれではいかに腕いても手のつけやうがないではないか』

『五郎太、何を獨りして喋つてゐるのだ』といふ聲が後でしたので、渠は驚いて振り向くと、酒氣滿面の雅樂之介が櫻樹に倚りかゝつて立つてゐる。

『や、いつの間にお越しであつた』

『無論今來たのだが、お身が獨言をいつてゐるので、爰で竊聽いて居つたのだ』

『人が惡いな』加地は起ちながら苦笑する。

『まだ一言もお袖には心の中を明かさぬやうだが、その樣子では何年經つても、那奴はお身の物にはならんぞ』

『うゝ……』

『思ひきれ、思ひきれ』雅樂之介は揶揄するやうに、『思ひきつて戰爭に行くのだ。先刻熊本の留守居から來た書狀は朝鮮へ行つてゐる主計頭殿の戰捷報告、お身も多分聞いたであらう』

『うん、奥方からそのやうに……』

『躬も小雪が厭味交りの手紙の中へ卷き込んで遣してくれたのでやつと今書狀を披見したわけなのだが、何にしてもかの地では戰爭は既に初まつて諸將は戰功を立てゝゐる。其れに我々は斯んな所で……あゝ考へても齒痒くて、この腕節が鳴るではないか』

『だが然し什うにもなるまい』と加地は冷靜な態度で答へた。

『拙者は兎も角、貴所は二三年領地にあつて、武藝鍛練をするやうに上意を受けて來られた體だ』

『其れは然うだが、躬は什うしても落ちついて、あの化物に劍法の指南をうける心になれぬ。殿下の仰せ止むを得ず當領地へはまゐつたが、元々妻の頂いた領地にあつて暮らす氣はない。家來共にした許で、面と向つては何もいはぬが、肚ではみんな躬のことを小雪の居候ぐらゐに思つて、いや、酷い奴は男妾ぐらゐに思つてゐるに相違ない』

『其れは僻見だ』

『否や全く』と雅樂之介は頭を振つて、『で、自然面白うなく、何も斯も小雪任せで、心にもない遊興三昧、早苗相手に辛うじて日を送つてゐる次第だが、心の中は矢はり苦しい。二三年は

おろか一日も斯うして居ることは厭なのだ』

『無理もない話說だが』

『いや』手を擧げて抑へる眞似して『お身にしても然うではないか。躬が眼を瞑ちて化物と夫婦の語らひをせぬ以上、お袖は矢はり何所までも心を他へは移すまいから、お身の本懐は遂げられぬ。二年ゐても三年ゐても到底其れは駄目なのだ』

詮方なしの發憤

『だが……』加地は矢はり冷靜に『貴所と兩個して當地を脱して、戰地へ行つたとて誰一個振り向いてくれる者もあるまい。貴所は殿下お聲がかりの大功のある妻を捨て、且つ擅に領地を離れた罪の科命は免かれぬ。拙者とてもそのとほり、いや其れはいふだけが野暮、何所へ行つたとて武士として身の置所はないのであるから、戰地へ行つたとて什うにもならぬ。未しも貴所は一二年、當地にあつて武藝を修め、傍ら領内の百姓を悅服させて領主たる責務を曲りなりにもすまして、其れから行けば何所へ行つても歡迎される望みがあるのだ。まア些との間の辛抱だ、輕擧妄動はせぬ方が好い』

『う、……』

『其れに拙者にした許で、一旦斯うと思ひ込んだる大事な戀を此のまゝで抛つてしまふわけにはゆかぬ。貴所御夫婦の語らひがいつまで什うであらうとも、拙者は拙者自身の工夫で、何とか其所に眼鼻をつけねば男の一分が相立たぬ』

『駄目だ』

『だが其所を什うかして』

『はゝゝゝ執念深い男ではある！』雅樂之介は哄笑したが、心の中の鬱憤を吹き拂ふやうにふうッと一つ、大きく酒氣を吐くかと思ふと、それぎり口を噤んでしまつた。

口では何といつたところで、渠の現在の境遇は什うすることも出來ぬのである。大政所の痼疾を癒して、秀吉をして朝鮮手入に後顧の憂ひなからしめたる小雪の功は頗る大きい。その功によつて阿蘇益城二郡と共に渠の體を小雪にたまはつて現在の生活すべく秀吉の指圖を受けて來たのであるから、もし渠が現在の生活狀態に慊らず、自由行動を執る日になると、今加地からもいはれたとほりに、六十餘州何處へ行つても身の置所のないのは勿論、よし潜行して朝鮮へ逃げ、諸大將の同情に縋らうとしても駄目なのだ。罪人として縛られて、死の座について萬人の嗤笑をうけぬわけにはゆかぬ。

『殘念だが致し方がない』雅樂之介は呟くごとくに『お身のいふやうに一二年、當地にあつて神妙に武藝鍛練に出精するかな』

『はゝゝゝ往生したか』

『うん』雅樂之介は大きく頷き『實際今の武術では出征しても

人に優れた手柄を立てるわけにはゆかぬ』

『拙者とても其れは同じだ』

『だが殿下仰せのとほりに、小雪に就いて劍道を勵むといふことは死んでも厭だ』

『なら召抱へた家來の中から、撰拔をして武藝師範の役目を申しつけたら好からう。千人近い家來の中には、師とする者が居るに違はぬ』

『其れは無論あらうと思ふが、家來はすべて小雪の家來で、躬を主人とは思つて居らぬ。其んな者を師と仰ぎ、主たる者が劍道修行の手を執らすことは出來んでないか』

『然う什うも自分から家來を疎外するのは好くない』

『だが行きがかりで今はもう什うすることも出來ぬのだ』

『其れも然うだな』

『知つてのとほり有らゆる仕事が小雪の手によつて行はれてゐ



る。家來召抱への事は勿論、武器馬具の買入から、當座の城普請まで、みな渠奴の手に任してあるので、躬はいはゞ案山子同樣、家來の目には見えてゐるのだ。誰一個として躬に對し敬意を拂ふ者はない。其んな者の指南を受ける……主たる者の恥ではないか』

『……』

『其れに劒は一人の敵、大名として學ぶべきものではないやうに思はれる』

『其れは然うだが……』

加地は苦笑を嚙みながら、

『のッけから武勇絕倫、萬夫不當の豪傑を家來に持つて戰場へ出て采配を振るわけにもゆくまい。何事も沙彌から長老、まア一人の敵を討つ道から確と會得して、將たる者の貫祿を次第につけて行くのが順だ』

『其れより外に道はないかた』

『無論だ』



『ではお身と兩個して——小雪が吉良でお袖を相手に武藝鍛練をしたやうに、師匠なしでこつそりと其所らの山で行らうでないか』

『好からう！』加地は心よく同意しながら、『女性でさへも一心籠めれば那れだけの者になれるのだ。況て堂々たる男子一匹、魂籠めて修行して堂に到り得ぬ筈がない』

『では行るか』

『行る！』

『一二年脇目も振らずに、勇猛精進を續けたら、何の多寡が小雪風情に……』

『だが然うするには酒と色とは——早苗どのも當分は構はぬやうにしなけりやなるまい』

『いふまでもない、お身も當分はお袖を捨てろ』

『う、……』

『諦められぬか』

『いや』加地は苦しさうに破顏しながら、『諦めぬといつたところで、貴所が奧方と本當の夫婦の語らひをしてくれぬ以上はいかに跪いても什うすることも出來ない相手だ。まア一二年はふッつり諦め、武藝鍛練に精進しようよ』

『では其れで話說は極つた』

『だが早苗どのが歎くであらうな』

『お身も隨分苦しいだらうな』

『はゝゝゝゝ』

『はゝゝゝ』兩個は顏を見合つて笑つた。

この時だつた一個の家來が慌忙しくやつて來たのは。

『殿、爰にお在でしたか』

『何か用事か』雅樂之介は屹と訊ねた。渠が家來全體に毫も親みを持たないどほりに、家來等もまた渠に對して毫も親しみを持つてゐぬ。で、應對も形式的でたゞその用を辨ずるばかりだ。

『奧方樣仰せには、最前お文にて申し上げたる、今日買入れた不思議な軍馬の御檢分の儀が願ひたい。其れにその外にも直々にお指圖仰ぎたい事があるから、恐れながら下にある軍馬お厩までお供をするやう——との御意なので御さいます』

『ふん』雅樂之介は冷然と、『文は見た。が、躬がまゐるには及ぶまい。好きやうにいたして置けと、躬が申したと申し傳へい』

『は、御免』家來は一禮して早々と立ち去る。

その水のやうな主從の應對ぶりを片はらで淺ましさうに聞いてゐた加地は雅樂之介に向つて尋ねた。

『不思議な馬ッて、どんな馬を買入れたのだな』

『鬼鹿毛とかいふ牝馬ださうだが、まア其んな事は什うでも好

から』樂雅之介は他家の事でも語らふやうな調子で答へた。

『其れよりはお身と兩個で、明日から劍道の修業する場所でも行つて探して置かう。來やれ』

『うん』と加地は續いた。

その時はもう春の日は暮れるに近く西へ沈んで、四方は少し、、、ぼんやりしてゐた。

怪童駒市騎馬奉行となる

斯んなことで春は逝き、夏もやゝ中葉を過ぎて、城普請は竣工したが、樂雅之介の家政に對する態度は毫も變らなかつた。政治の事も軍備の事も氷のごとく冷やかに見て頓着をしなかつた。で、召抱へた家來の中から、一藝一能に秀でた者を撰んで適材適所に配置し、大名としての吉良家の組織を立派に立てたのも小雪の仕事で、その諮詢には家老首席と軍師が與つて意見を伸べたが、其れはたゞ參考に資せられたゞけのものだつた。家老、家老格、侍大將、物頭、町奉行（寺社奉行を兼ぬ）兩郡奉行（勘定奉行を兼ぬ）、騎馬組、弓組、槍組、鐵砲組の各頭、番頭、横目、小姓以下、みな其々に任命をして、先月以來確實に職務を執らすやうになつてゐる。奧向の制度も立てられ、お袖をもつて總體の女中取締とされてある。小大名の新世帶、衣食住總ての事に不備不自由であることはいふまでもない話說だが、何にしろ主人夫婦の居方からして黑木造りで、疊は敷かず莚を敷いて滿足をしてゐるのであるから、長屋住居の家中の者等もみな一樣に質素儉約、武道を磨き、士氣を砥勵し、忠實恪勤、誠意を傾けて奉公してゐる。

その中にあつて最も顯著に、特異の性格を發揮して不羈奔放の行動を執り、家中上下の注視の的となつてゐるのは、騎馬奉行に特任された例の自然兒の駒市である。渠は眼に一丁字なく、武士たる者の作法は勿論、殆ど人間の作法を知らない。が、然し天眞爛漫、純良無垢の少年で、言行共に粉飾がなく、憎げといふものを少しも持たない。その上馬を馴らしたり取扱つたりすることは、何々流の名騎手と呼ばれる者も及ばぬくらゐの手腕を十分に持つてゐる。で、今度破格をもつて、五十石取の騎馬奉行に任命されても誰一個苦情をいふ者はなかつたのだが、渠の不作法と亂暴にはさすがに、ちよつと辟易してゐる。問題はつまり其所にあるので、今度騎馬組に編入された浪人あがりの猛者の中には、渠の命令を聽くことを屑しとせぬ者もある。『馬術にかけちや敵はぬが、あの不作法には全く謝る。第一誰を捉へても奴だの畜生だのと口汚くいふ。奧方樣が那んな者をば秘藏になさるのが宜しくないのだ』といつた工合で、陰では渠を重く用ゐる小雪の事までも誹謗してゐる。

が、其れだけにまた駒市が、小雪の信任に對して捧ぐる殉忠

的の忠誠は人一倍に眞劍である。渠の眼に映ずる小雪は、神格化された人間で、崇拜の的となつてゐる。渠は同僚や配下の者から、嘲弄された場合には、必と鼻先でせゝら笑つて『ふん何とでもいふが好い。おらの心、おらの價値は奥方樣が知つてゐるのだ。今に朝鮮へ行つて見ろ、熊本の殿樣（加藤清正の事）でも及ばぬほどの手柄を現はし、御當家の御武名を天竺までも揚げて見せるよ』といふやうな廣言を吐き、少しも怯む色さへ見せない。其れほど深く小雪には、心服もすれば、崇拜もして、奉公をしてゐるのであるから、小雪の上に面白からざる噂を聞くことは渠に取つては身を斬られるより愁いのだつた。神のやうな奥方の器量は必と女神のごとくに氣高いものに相違ない。綺麗なものに相違ない。其れはあの覆面の中から見える眼や鼻の美しいのでも知れてゐる。だが何だつて年百年中那アして顏を包んでゐるのか――といふ點に思ひ至ると、徹頭徹尾小雪には心醉しとる渠の胸にも疑惑の影は動くのだつた。尤も同僚や配下の者から、小雪について種々の噂を聞いてゐないのではない。化物のやうな醜婦だとか、其れがために殿樣との御夫婦仲が什うだとかいふやうな事はちよい／＼と耳に引ッ挾んでゐるのだが、渠は什うしてもそのとほり信ずることが出來ぬのである。

今日もまた其れにつき、渠は先刻から考へてゐた。組下の者を馬に乘せ、望京の川に入矢野で軍馬の訓練を濟ましに來ると、五十餘頭の駿足をまた元のやうに廐に繋がせ、騎手は解散して渠一個廐の中に殘つてゐたので、渠が今ぼんやりと柱に倚りかかつて立つてゐる、その後には渠の秘藏の名馬鬼鹿毛が桶の中なる飼葉をもぐ／＼と食んでゐる。

『噓だ、其んな事があるもんじやねえ』渠は終に獨にも聲に現はして呟き初めた。『あの美しい奥方が、化物のやうな片輪だの、醜婦だのといふ筈がねえ。この若いのに今もつて覆面をして御さらつしやるのは、何か外に仔細があるんだ。もし本當に醜婦で、其れが殿樣のお氣に入らずに、御夫婦仲が惡いてふ噂が噓でなかつたら、おら何とかして上げなけやならねえ。あの早苗てふお妾が、お側に居つて猫茶羅いつたり、甘ッ垂れたりするために、殿樣の氣は狐にでも憑かれたやうになるのに違はぬ。あのお妾が惡いんだ。那奴さへ亡してしまへば、殿樣の氣は獨り手に奥方の力へ向いて來るんだ。今狐めは姙娠になつてて、この間から二度も三度もお産をやりかけた樣子だが……、何にしても殿樣のお側にあんな畜生が附きゝりにしてゐるが好くねえ。那奴さへ亡してしまへば――啞、痛ッ！』渠は叫びながら後を向いた。

秣を食んでゐた鬼鹿毛が、いつものやうに戯れに、オムのやうに彈力のある鼻づらをもつて渠の項をいきなり一つ撫でたの

ぜつた。

『畜生め、吃驚するじやねえか唐突にほたえた眞似をしやがつて！』

『ひゝゝゝゝイん』

『笑つてゐやがる』駒市は愛惜しさうに、笑つた馬の鼻づらを右手をもつて撫でてやりつゝ、『だが、いつ見ても可愛い奴だ。其れにこの頃は大人しく奥方樣をお乘せ申してお馬場の中を走つてくれる。手前のやうな暴れ者でも、奥方樣に出會つては、俺同樣に猫のやうに大人しくなるところが妙だ』

『ふ、ふう――！』馬は鼻息を大きく吹いた。

『これ、序だから聞かしてやるがな』駒市は手を上げて、今度は肉の張りきつた平首の邊を撫でてやりつゝ、『今朝鮮では戰爭最中、日本中の大名が手柄を爲放題に踊つてるんだ。手前も俺も遠からず奥方樣のお供して戰爭に行くやうに必となるから、その時は兩個して暴れ法題に暴れまくらう。喃ア分つたか鹿毛！』

馬は前肢を高く擧げては、進に床を蹴つてゐた蹄をいつか行儀よく揃へてじつと傾聽してゐる。

『多くある大名中でも』と駒市は直に續けた。『女の大名は俺と手前の御主人樣があるだけだ。多くある軍馬の中でも、女の軍馬は手前一個だ。女大將が女軍馬に物の具をして跨つて、戰陣の軍勢を蹴ちらすところはどんなに勇ましいか分らねえ。おらその時は奥方の鹿月毛を借りて乘り、お側にあつてうんと働く。このお家では男より女の力が偉いんだ。殿樣なんざ床の間の置物同樣で役には立たねえ。手前だつてそのとほり――』

『お組頭』呼びかけながら樂の配下の、妹尾仁右衞門といふ足輕が、其所へ慌忙しくやつて來た。

『何だな慌てゝ？』駒市は例の調子で、いけ粗雜に妹尾に訊ねた。

『またお産が初まつたんです』

『お妾が餓鬼を産るのか』

怪僧突として路上に現る

『ふむツ』相變らず行つてゐやがる――といふやうに仁右衞門は、駒市の顏を眺めたが、すぐ氣がついて早口に、『然うです、お妾が餓鬼を産るんで、取上げ婆さんを呼んで來るやう手前が吩附かつて來たんです』

『婆さんならばお奥にゐるだろ』

『ところが那んな婆さんでは駄目、お産だ／＼といつちやア喚いて、空騷ぎした事はこれで三度目、その度ごとに御典醫と一緒に御介抱申したんだが、御承知どほりお産はお流れ。で、今日は一つ御城外から試しに呼んで見ようといふので、金内村の

貞といふ婆さんを呼びに行くんです』

『貞ならばこの矢部で名代の取上げ婆さんだ。好し俺が行つてやる。鞍を置け』

『は……』と仁右衛門はぐづ〳〵してゐる。

『何がはだ變な面して、汝が行くよりは俺が行く方がどれだけ早いか分らねえ。く、鞍を置けッ』

『でも手前が行くやうに……』

『莫迦野郎！誰が行つたつて早くさへ御用が足りや其れで好いんだ。鞍を置け』

『は……』

『お組頭のいふことを肯かんか』

『然ういふわけじや御ざいませんけど……』

『何だか是れを知つてるか』駒市は拳を固めて、仁右衛門の前へ突き出した。小兒にしては恐ろしい大力のある渠の拳は、是れまでとても配下の者等を威壓し脅喝した事がある。其れにくわつと息を吹ッかけ、亂暴者の本性の輝いてゐる眼を剝いて突き出されたのだから耐らない。仁右衛門は縮み上つて、いはれたとほり唯々として鞍を置くより仕



様がなかつた。

鞍を置かれた鬼鹿毛は厩の外へ引ッ張り出された。手綱は無論つけられてある。

其れに飛び乗ると駒市は、大手の方へ驅け出した。道路も城の建物や塀や石崖と同じやう、普請後日數が經つてゐぬので、地面に土砂が馴染んでゐない。其れが水無月の炎天に、照りつけられて干いてゐるので、灰のやうな砂ッ飛塵が一跑ごとに舞ひ騰る。

金内までは二里足らず、往復にして四里あまり、石ころ道と坂路でづッと繋がつてゐるのだが、名馬鬼鹿毛で飛ばせれば、物の半時とはかからない。

が、然し駒市は、城から離れると馬の足搔きをわざと、ゆる〳〵と運ばせ初めた。振返つて左方に高く森林中に隱見してゐる本丸の側の屋方を仰ぐと、渠は呵々と哄笑した。

『莫迦な、誰が早く婆アなど連れて來てやるもんじやねえ。出來るだけゆつくりと道草食つてゐる中にや、あのお妾めは苦しんで苦多張つちまふに相違ねえ。奥方様の思ひだけでも無事には產は出來ねえ筈だ。あのお妾めが死んでしまへば、殿様だつ



て奥方を可愛がるやうに必となる。然うすりや俺がこつそりと殺生するにや當らねえ。まア出來るだけゆつくりと道草食つてゐる事だ。斯んな時に奥方に忠義を爲なきやする時はねえ』呟きながらのそり〳〵と名馬の足を進ましてゐる。

と、向ふから、やつて來た乞食坊主が天蓋を傾けながら渠の前途に立ちはだかつて渠を見仰げた。行脚の僧と覺しい姿で、胸にうす汚い頭陀袋をかけ、錫杖を突いてゐるのだが、その身長は圖拔けて高い。天蓋の下の黒い顔には、一癖ありさうな光る眼と、嘴のやうに尖つた鼻と、嚴い口がついてゐて、胡麻鬍髯が火口でも食つつけたやうに雜々してゐる。まづ怪僧といひたい頭丘入。年齢はもう五十五六だ。

『や、好い許でお目にかゝつた』行脚の僧は駒市に馴々しげに言葉をかけた。『この馬はたしかに鬼鹿毛、其れに乘つてゐるところを思ふと、お身は肥後で有名な駒市殿に相違ない』

『俺が肥後で有名だ!』駒市は吃驚しながら、『有名とは何の事だい』

『まづ名高いといふ事だ』

『はゝゝゝゝ莫迦な事をいつちやいけねえ』と駒市は馬上で笑つた。『俺は今は斯うやつて、侍らしい身装してゐるが、百日あまり前までは、この上の方の矢部の牧場で馬と一緒に馬小屋で寝泊りをしてゐた者だ』

『いや、恭しやうは什うであらうと、鹿兒島の牧場でも、矢はり鬼鹿毛と呼ばれて居つたこの荒馬を乘り粉し、然もこの馬に毎年々々二匹づつ子を産ましたといふ不思議なお身の評判は九州一圓に響いてゐるので、駒市といふお身の名も自然と人に知られてゐるのだ』

『とすると坊さんは薩摩の方から來たんかね』

『然うだ、儂は鹿兒島の崇善寺といふ一向宗の寺の坊主で、六十餘州遍歴の旅を續けてゐる者だが、國元を立つ時に、この鬼鹿毛の産んだ子を種馬として鹿兒島へ引かれるやうに相談してくれ、是非にといつて頼まれたんでな、熊本から延岡へ出る序に當方へまゐつたところが、ついこの先でお身の噂を——今は吉良殿へ抱へられ、立派な侍になつとるといふ話説を聞いたので吃驚しながら、この街道を來たところ、運よくも途中においてぱつたりお身に出會つた次第だ』

『では坊さんは伯樂の代りにやつて來たんかね』

『ま、其んな勘定になる』行脚の僧は苦笑した。

『だが是れくらゐの馬ならば、鹿兒島にだつてある筈だ。此奴は現に鹿兒島から種馬として引いたもんだよ』

徐々と説く怪僧の辯

『其れは知つとる』僧は天蓋を揺つて領き、『だが鹿兒島からこ

の馬を種馬として遣す時には、後日是程の馬となり、また二匹づつ毎年々々子を産むやうな名馬にならうと思つた者はなかつたさうでな、孰かといふと手におへぬ悍々馬として困つてゐたのを他の種馬の中に交ぜ、厄拂ひをする考へで遣したやうにいつてゐた』

『じや鬼鹿毛として遣したんだね』

『其んな話だ』

『畜生め――といつたところで、この鬼鹿毛を引いたのは、おらがまだ四つの時だて、今さら何と爲やうもねえ上、金を出したのは牧場の老爺で、俺には何の關係もねえこつたから什うでも好いけど、其れにしても伯樂なんて横着なことを爲やがるもんだな』

『然し其れが今となつてはお身等の幸福となつたのだ。うん成程！』

と感心しながら、僧は手を擧げて鬼鹿毛の額の邊を撫でてやりつゝ、

『好い馬だ、實際名馬だ。この年齢で是程に使へる馬は珍らしい。毛並も丸で若駒のやう、艶々として眞赤に燃えとる』

『玄人らしい事をいつてるが、お前に馬が分るのかい』

『うん、今は坊主だが、以前は多少名のある武士でな、馬に乗つて戰場へ出たことなども一二度あるのだ』

『其れは話せる』

『はゝゝゝゝ、ま、兎も角も馬から下りて、爰で一休みしようでないか』

『好からう』

『あの木の下が日陰になつとる。那れへまゐらう』

行脚の僧は先に立ち、槃桓として枝を擴げて道一ぱいに綠陰を作つて立つてゐる老樹の下へ、巨軀を悠々と運んで來ると、天蓋を取つて側にある捨石の上へ腰を下した。手に突いてゐる釋杖は、全部が鐵で出來てゐるので、突く度毎にづしり〳〵と地上に重い音がした。その重量は少くも五貫目ほどはあるらしい。

駒市もまた悠々と馬を引いて來て老樹の幹へ手綱の端を括りつけると、僧と向合つて老樹の根株へ大小を差した腰を下した。以前と違ひ今はもう立派な武士になつてゐるので、服裝もまたきちんとしてゐる。黄平の紋付の帷子を着て、窮屈袋さへ穿いてゐる。馬子に

も衣裳の襟へのとほりに、然うした身裝が自然兒の渠の風采を揚げてはゐるが、然し何所となくうつりが惡い。きよろつく眼ざし、野卑は擧措、殊に不色氣に取り上げた前髮立ちの大髻など、どう見た許で荒若衆、福島正則の市松時代、加藤清正の虎之助時代を思はせる豪毅さである。

渠の腰を掛けた老樹の根株は、斷崖の角に立つてゐるので、崖下の谿川から吹き上げて來る風は氷よりも冷つこい。岩を嚙んで鞺鞳と流れる水の響きも聞える。向ふには日向さかひの三方、國見、烏帽子の諸山が、火雲の中にうす蒼くその頂きを見せてゐる。左方に仰ぐ崖の面には、植ゑつけられた杉の木が矗矗として行儀よく、梢を天に朝しつゝ競つて舞ひ立つてゐる。城普請最中には、この閑寂な道路の上にも、木石材を積み上げた牛車や馬車が陸續と往來をしてゐたのだが、今はもう普請を終つて、徵集された諸工夫や、賦役に取られた人夫等は居村へ歸されてしまつてあるので、通行人の姿さへたまさかにしか路上に見えない。蟬の聲や松虫の音や、老鶯の凋らしい音などが絕えず何所かでしてゐる。

『あゝ好い氣色だ』

行脚の僧は汗を拭きつゝ、眼を細くして獨語つたが、側に繫がれた名馬を見ると、すぐ氣がついて口を開いた。

『さて今の話說だが、この鹿毛の子を二三頭、種馬として鹿兒島へやつて貰ふことは出來ぬだらうかな』

『駄目だ』

と駒市はきつぱりといふ。

『什うふわけでな』

『馬はみな御主人に差上げちやつたから今はもう俺の自由にはならんのだ』

『だが二三頭ぐらゐは好からう。其れに値は一頭につき二百兩づつ出すさうだ』

『隨分張むな』

『うん、何にしろ今は戰國、殊に朝鮮征伐で良馬をどし〱と拵へて送らにやならぬ時節がら、好い種馬には幾らでも牧場の持主は金を出すのだ』

『成程なア』

『是れはちよつと話說が違ふが、馬には限らぬ。人間でも人に優れた長所のある者は何所へ行つても出世がすぐに出來るんだ。お身は今吉殿の家來となつてどのくらゐ知行を取つて居るのか知らぬが、お身ほどの男なら、何所へ行つたつて馬術だけでも千石以上と貰へる。何うだ、鹿毛の子を殘らずつれて、鹿兒島へ行く心はないか』

『鹿兒島へ行つて何をするのだ』

『今いふとほり千石以上の大將株の武士になるのよ』

『誰が俺の主人になるのだ』

『いふまでもない薩摩の殿様、島津薩摩守義弘公よ』

『六十萬石の大々名だな』

『然うだ』

『だが今は殿様は朝鮮へ行つて留守だらう』

『殿様はお留守でも、留守居の御家老が控へてゐるから、千石や二千石の家來は何時でも抱へてくれる』

『然うか』

いひながらぢろりと一瞥、額越しに僧の面を嘲けるやうに眺めると、腕組をして頭を垂れる。

『考へる事はないではないか。立ち寄れば大樹の蔭とか。三萬石の吉良殿よりは六十萬石の島津殿の方が主人に持つにや持ち榮がある。戰爭に行つて手柄をするにも爲效があるといふものだ。場合によつちや一足飛に大名にだつてなれぬた限らぬ。什うだ、氣があるんなら話して見てやる』

『本當か』

『誰が嘘をつくものか』

『いつ鹿兒島へお前は歸る?』

『お身が本當に行く氣なら、儂は直にでも引つ返す』

『では行くことに話説を極めるが、この鹿毛の子は十頭あるのだ』

『ふん其れで』

『で、一頭が三百兩づつに賣れるとするとみんなでは二千兩になる勘定だ』

『無論だ』

『その金はいつ渡してくれる』

『其れは鹿兒島へ行きさへすれば――』

『駄目だ』と駒市は頭を振りつゝ、『おら茲でむらひたいんだ』頑是なき小兒のやうに、眼を輝かして斷乎といつた。(つづく)

(訂正) 前九月號、熊本の留守居より、吉良雅樂之介に宛てた書狀中、末尾の恐惶謹言の上へ、『尙ほ殿下御朧をもつて關白職秀次公にお讓りあそばされ候については、爾來太閤殿下とお稱し申上ぐべきの旨、お達し有之候につき、序ながら貴意得申し候』の一項を挿入す。

思ひ

わが故郷

中村武羅夫

四季の移り變りに、思ひ出されるのは故郷の自然だ。わが故郷は北海道の中央、石狩の國である。梅櫻桃李が、一時に花を競ふ春の喜び、朗らかに晴れて、風は冷たく、日の光りの荒々しい夏の爽かさ、渡り鳥の群れが飛んで、蕭條たる日のつづく秋の侘びしさ、それから、滿目、白皚々たる雪に埋もれてしまふ冬――その何れの時、いづれの季節も、わが故郷なればこそ、いつでも懐しく思ひ出される……

臼田亞浪

遠くなりぬる墓よ母の墓よ。
住みなし家の住まひや故郷へ。

京の思ひ出

吉井勇

はからずも逢ひし機縁となりしゆゑ祇園祭のおもひでもよし。

おもひでは加茂の磧の暗闇に飛ぶ螢よりはかなきものか。

母の唄

濱田廣介

鬢のほつれ毛　つかね髪
かざし櫛かけつつ　野にでては
鈴鹿ことまち　唄の節
われはうたひし　わが母よ

年ふるままに　くろ髪は
老いたまへども　ああ母よ
御唄は今も　あらたなる
わかくやさしく　わが耳に

堀口大學

夏が來て
紫陽花の花が咲く頃
よみがへる思ひ出がある
三年前のことでした
二人が戀に泣いたのは
死にもならずに泣いたのは
生きもならずに泣いたのは……

思ひ出

夏が來て
また紫陽花の花が咲き
また思ひ出がよみがへる。

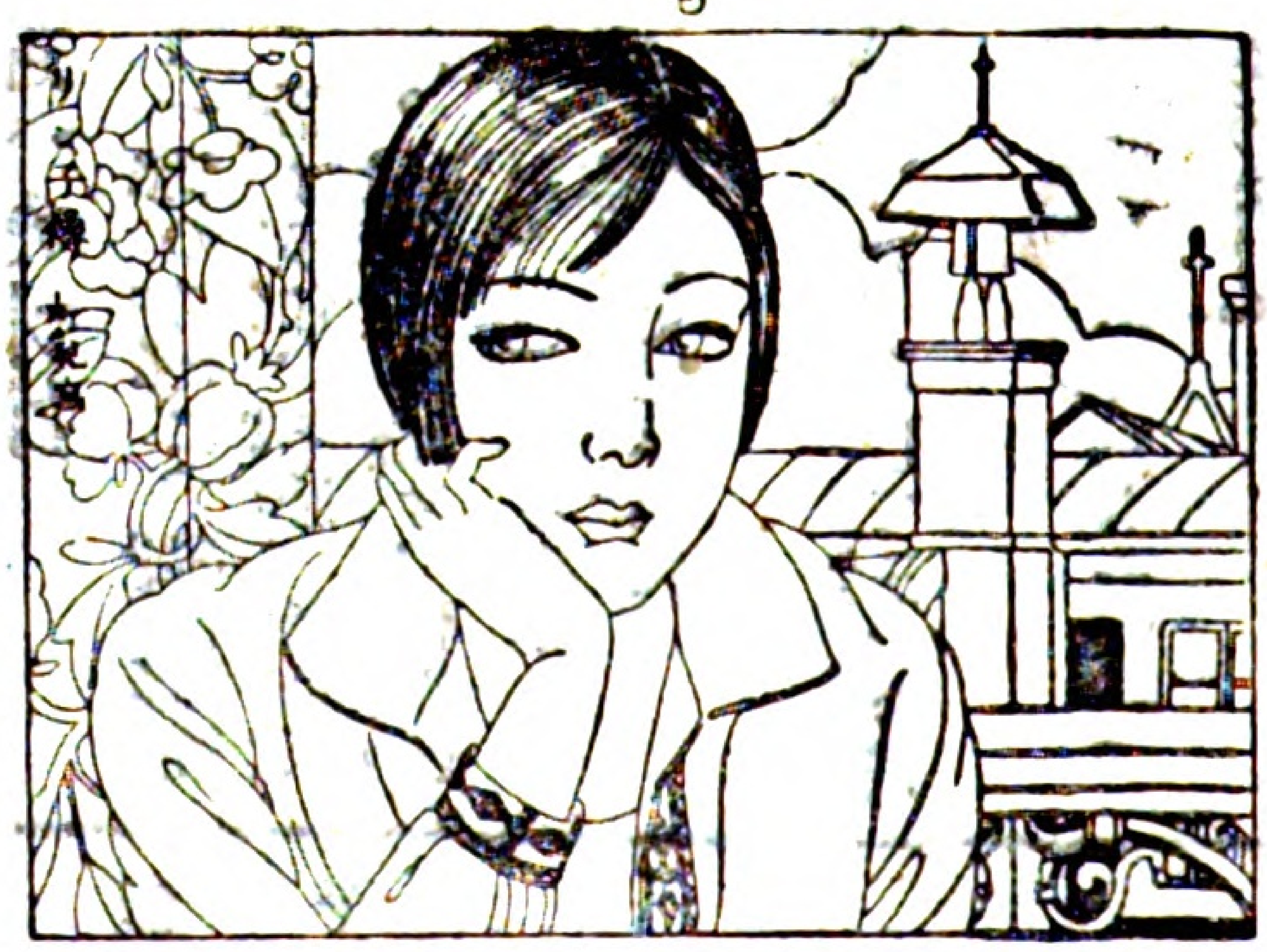
雲亭金升

雪を踏む富士より風に乗る人は
上にも上の有る空の旅。
唐崎の松の雫の音絶ゆるとも
緣は盡きぬ琵琶の湖。

前田夕暮

夏蜜柑の花の匂ひはかぎにつつ
父母おもふ、日は杳なり。
ふるさとの水のみたしといひし父を
かなしと思ふ水のみにつつ。（山にて）

橋田東聲



蕗谷虹兒畫

思ひ出はなべてはかなしあわゆきの
春の日向にきえゆくがごと。
思ひ出はなべてうつくし短夜の
夢よりさめてゆめをおもふごと。

鷹野つぎ子

思ひ出と言へば、漠然とした過去のなかから、そのひとふしが現在の生活に何か關聯して思ひ出されて來る場合が多い。かと思へばふつと思ひがけない時に、思ひがけない思ひ出を呼びさましたりもする。が今は私はそのいづれの氣持にも接近してゐない。或は短かい章句ではお答へに窮する氣持に近いものかも知れない。しかし、出來るならば一應はゆつくりと自分の思ひ出のなかに浸つてみるのも無駄ではないと思つてゐる。私たちの經路のなかには存外偶然的な事が今日の眼からは必然的に見えてきたりする。そんなことを考へてみるのもおもしろい。

喋るな而して行へ！

朝鮮軍司令官
陸軍中將　南次郎



南司令官

◇穿き違へた才媛

英王ゼームス一世の時代に、學は哲理の蘊奥を極め、語は羅甸、希臘、希伯來の諸國に通じた、妙齢花の如き、博學多才の一少女があつた。推薦する者があつて、ある時、王に謁見を願ひ出た。

『よろしい、會つてやらう。』

王の許容を得たので、推薦者は、少女を伴つて玉座近く伺候した。そして王のお賞めの言葉を待ち構へてゐた。王は靜かに、

『見ればまだ妙齢のやうぢやが、よくも左樣にいろ〱の學問を修め得たものぢや。それ程の才女なら、お縫物などの女藝は、いふまでもなからうな？』

『は、はい、それはその……』

痛い皮肉にぎやふんと參つて、推薦者も、續く言葉がなかつたといふ。

女には女の本分がある筈だ。それが出來た上で、更に餘力あつて學問にも通じてゐるといふのでこそ、尊敬に値ひするのである。己が本分を知らず、徒らに男子を眞似

英傑民謠

横瀬夜雨

兼松平四郎

彥『鳶の巣山の一番槍……』
平『また初まつた彥左衞門
眞田が仕懸けた地雷火に
泡を喰つたは權現樣
逃ぐるお馬の口執つて
腰を拔かした醜體してからに

薩州薩摩の殿さんを
俵で釣つた豹の皮
繪の具溶かしてしてやつた
水野十郎左が五色の紅葉
それでも天下の御意見番』
彥『和田平助が首捕つた……』
平『何をお言やる彥左衞門

て、博學を衒ひ、社會運動に沒頭し、或は馬に乘り、短艇を漕ぎ、ランニングをして、僅かな技能を發揮したとて、何處に女として尊敬すべき價値があらうか。

事は婦人に限らない。學生にして、野球や蹴球には技倆はあるが、學業は常に劣等だといふやうなもの。之を模範學生といはれようか。ゴルフは上手いが國政には何の貢獻する所もない政治家といふのがあつたら、どうか。事業や金儲けには長けてゐるが軍務には疎いといふ軍人だつたらどうか。

軍人は軍人らしく、學生は學生らしく、女は女らしく、日本人は日本人らしく、その各〻の本分を盡し、その眞價を發揮してこそ、始めて敬服に値ひするのではないか。

『らしくせよ。』私は、人に望むにもそれをモツトーとし、自らを戒めるにもそれを座右の銘としてゐる。

◇らしき人

らしき人として、私の常に尊崇して止まぬ人が二人ある。卽ち乃木將軍と東鄕元帥だ。

勿論、世界の英雄偉人中には、一生をらしく送つた人も多いだらう。だが日本の軍人たる私は、英國や獨逸の將軍らしくなる必要は毛頭ない。私は日本の軍人らしくあればよいのだから。

乃木將軍を、如何に縱橫に觀察しても、些の政治家らしい處もない。一點の事業家らしい色彩も認められない。軍籍を退いて、那須野ヶ原に鋤鍬を執り、悠々農事に勤んで居られても、やはり將軍は軍人らしく、決して百姓らしくはなかつた。また一

昔取つたる杵柄が
どら程今日の役に立つ
口惜しかつたら
入齒でなりと
おいらの腕に
喰ひつけ
おれを知
らぬか奧
州は
五十四郡
の禿頭
伊達のめ
つかち喰
はした
旗下兼松平
四郎
見て置け目
玉ひん剝い
て』



伊達政宗は家康の與へた百萬石の御墨付を楯にして、何かといふと幕府を困らせた。御旗下八萬騎の中には千軍萬馬の間を往來した猛者が居たので、伊達のわうへいを憎んで、御旗下で頭をぶん撲つた者があつた。政宗は淺野長矩とは違つて、賣られた喧嘩を買はなかつた。亂暴人は松平四郎だつた。獨眼龍をすらぶんなぐる男だが、同僚の大久保彦左ヱとは眼中に無かつた。

授學習院長として、多くの子弟の師父と仰がれても、將軍は依然として軍人らしかつた。慈父の如き愛を以て、子弟の教育を勵んで居られても、所謂教育家らしい色彩は少しも認められなかつた。そこが、將軍の偉大なところで、眞に軍人であつた證據である。軍服を脱いで政治に關與すれば、急ち一個の政治家となり、事業に携はれば、直ちに軍人の臭までも消えて、純然たる事業家となり濟ますといつたやうな才子とは固より同日の論でない。

東郷元帥から、海軍と日本海々戰とを取去つたら、元帥の全部が消えてしまふだらうと思はれるほど、それほど元帥は、海軍々人として一貫され、そこに元帥の人格の立派さが、燦として輝き出てゐるのである。

◇滅びゆく『日本』の姿

翻つて、現代の風潮を見ると、到る處、らしくないもののみを發見する。例へば一たび銀座街頭に立つて一瞥するとき、我々は何を感ずるだらうか。

華やかな光の下に、雲の如く集散する人々の姿にも歩調にも、我々は『日本』を感ずるよりも、先づ『外國』を感じないだらうか。日本を誇る女の美しい黒髪が、可惜短く切られてゐるのを見て、我々は『日本』が消えたやうな淋しさを覺えぬだらうか。酒場や喫茶店に押し寄せる多くの學生を見て、我々は、何を『日本』の誇として見出し得るのだらうか。

我が持てる尊きもの――本分を忘れて、たゞ目先の奇を追ふに汲々たる國民を、輕佻といはずして浮薄といはずして何と云はう。鵜の眞似をする烏は溺れる、我が國民も何時かは溺れねばならぬのではあるまいか。

北條氏康

天文十四年川越の役

一

蹄の音のとゞろく
嘶く駒は八千騎
甲の袖に白妙の
布を佩へた八千騎
川越指して靜々と
押すは誰様小田原様
入間は秋の月更けて
駈けるに好し馳くに好し
勝つた勝つた



◇言ふな、そして行へ

一體、現代は餘りに多く喋舌り過ぎる。毎日諸所で行はれる演說會の如何に多きかを見よ。

また日々月々に刊行される印刷物の如何に夥しきかを見よ。そしてその何れもは、立派な言葉や、華麗なる文字で、美しく飾り立てられてあるのだ。愛國の熱辯、正義人道の議論、思想善導、生活改善の叫び、何れも慷慨淋漓たらさるはない。然るに何事ぞ!　世間は、かゝる言葉や文字とは何の關係もなく、いな寧ろそれを冷笑するかの如く、滔々として逆行し、惡化し、腐敗しつゝあるではないか。

百の言論文章も一の不言實行に若かず、何よりも實行だ。『先づ行へ!』それこそ刻下の日本を救ふ喫緊の急務である。かけすや鸚鵡のやうに自己を沒却した空理空論の徒を千萬人持つよりも、一人の眞摯熱烈なる實行家を持つことが、どれだけ國家の幸福か知れない。一人の實行は、既に一步の改善であり向上であるからだ。

その點でも乃木將軍は偉かつた。將軍は決して、人に斯くせよとは說かれなかつたが、自ら實行することは實に嚴格峻烈であつた。日曜日でも軍服を着て居られた、神社の前では威儀を正して敬禮された。

その日常生活は、凡て不言實行の生活であつた。しかもその一言も發せぬ生活こそ、千古不滅の大雄辯でなければならぬ。

今や口舌の時ではない。たゞ默々として實行し、各人、自己の本分を盡すべき時代である。實行なくして、何の日にか、世の立直しが望まるゝものぞ。

『喋舌るな、そして行へ!』

二

勝つた　勝つた
綱成を
八幡!　見捨てゝ
なるものか
躍り込め　蹴込め
兩上杉の
八萬人の只中へ
先を駈けたる
氏康が
轡に從ふ八千騎
入間は秋の
月更けて
駈けるに好し
引くに好し
勝つた　勝つた



天文十四年上杉憲政今川氏親足利晴氏等八萬騎を率ゐて、北條綱成の川越城を圍む。北條氏康綱成を救ふべく、精騎八千これに赴く。時に上杉氏白布を樹へ、令して敵を斬るとも首を取る勿らしむ。四月二十日の夜、月明に乗じて上杉氏の陣を襲ふ。城將綱成は黄八幡の名あり、つねに大刀を揮ひ、衆に先んじ「勝つた、勝つた」と呼びつゝ馬を躍らする習あり。氏康の來援を知り、遂に城門を開いて「勝つた」「勝つた」と大ごゑにわめいて突出して出づ。上杉氏八萬の兵、一夜に殲滅し、小田原公の名關東に轟る。

名士の談話室

工學博士　佐藤功一



近頃は、學者も大分覺醒して來て、科學の民衆化に努力するやうになつて來て洵に喜ばしい。併しまだ〳〵こんな程度では駄目だ。

ロマン・ローランが『どんな高遠な學理でも、これをヂヤナリストイツクに傳へる事が出來なかつたならば、何等の價値がない』と云つた言葉は我々學者に對して正に頂門の一針と云ふべきである。

農學博士　澤村眞



學者つて面白いものさ。英國の有名な數學者——多分ニユートンだつたと思ふが、猫が大變好きで、研究室に居る時でも始終傍に置いて可愛がつてゐた。

猫の出入りに都合のよい樣にと入口に態々穴迄明けておいた。——其內に愛猫が出產した。研究室の中は急に賑かになつた。

するとニユートンは子猫等のためにも一つ入口へ穴を明けてやつて、『これで子猫も出入りが出來るだらう』と得意になつてゐたと云ふ話がある。親猫の通る穴と子猫の通る穴と區別して考へる等、隨分秀逸ではないか。

彫刻家　北村西望



私は十五六歳の頃、師範學校を病氣のため退校して郷里の天草で靜養してゐる時分でした。父親から新築の隱居所の欄間に『何かて彫つて見ろ』と云はれて初めてノミを取つた一週間許りと云ふものは薄暗いランプの下で殆ど不眠不休でやつたものです。

私がノミを持つ事が好きだといふ事を父親はとうから見拔いてくれたものと見えますね。全く一生懸命でした。

それからと云ふものは彫刻に趣味が出て遂々今日迄やつて來たのですが、これから考へて見ると、親なり、學校の先生なりは其子供がどんな事が好きか、どんな事に天稟を持つてゐるかを見定めて好む道に伸ばしてやる事が必要だと思ひますよ。好きな事をやらせれば、勉强するなといつたつて不眠不休でやりますよ。

本社々長　野間清治

『西瓜を冷藏庫へ入れてつめたくしておい

て吳れ』から私は少年に賴んだ。其日の午後は隨分きびしい暑さでした。私は不圖西瓜を思出して早速取り寄せた。——あの何とも云へない滴る樣なつめたい甘味を想像しながら——



所がつめたい所かヌルイ〳〵何とも云へないいやな味、こんな筈ではなかつたと少年に訊ねて見ると其答が振つてゐる。

『初め冷藏庫へ入れて置きましたが其內に氷が澤山來まして氷の入れ場所がなかつたので西瓜を出して仕舞ひました』

と彼は眞面目くさつた顏をしてゐた。其時私はこれは冷藏庫と西瓜の問題だけではない、此麼事が世の中にはザラにある。今日、顧問をしてゐる人の多くは氷を入れるために大切な西瓜を取り出してゐるではないかと思はず嘆息をしたことでした。

文藝家　望月紫峰

中野正剛氏が八月號で紹介した金子雪齋翁。ロシヤの騷亂最中にハルビンの市中を散歩した時、多くの露西亞人が土にまみれながら支那人に使役されてゐた。



すると案內役が、『先生、五、六年前、露西亞帝國の盛んな時は今と全く反對でした。實際、國家が衰へると國民は可哀想なものですね』といふのを聞いた金子翁、

『何!!國家だつて、一體御前達の考へてゐる國家つてどんなものだい。一ツ俺に見せてくれ』と相變らずの鋭い言葉で痛烈に遣返し、『お前達は國家、國家つて云つて國家にたより過ぎてゐる。國家は我々の胸の中にあるのだ。我々の活動が卽國家の活動だと云ふ事をしつかり刻みつけておけ。そんな依賴心が海外發展に大禁物だ』

ときめつけたと云ふ話がある。聞いただけでも胸がすつきりするではないか。

文藝家　生方敏郎

『自分の事は自分でせよ』と學校で敎へてくれる。洵に有難い事だが、どうもあれは、自分の事の始末の出來ないブルヂョウアの家庭で必要な事で、僕達のやうな家庭では一寸不向だよ。



何故つて、君、兄樣、姉樣連中が自分の事だけやつてすましてゐると、五ツ六ツの小さな子供は實にミヂメなものだよ。大きい連中からは、

『自分の事は自分でしろ』

とやられる。

『さりとて自分でやりたくも思ふ樣には出來兼ねる』さ。

そこで私は、

『自分の事をやるのは勿論のこと、小さな弱い者のためにも出來る丈つくしてやれ』

と迄擴充して貰ひたいと思ふね。



カムラン灣外の奇禍

公爵　伊藤博邦

一

『未だ書かれざる頁』として、即ち將來帝座にいかれたなら、定めし非常な活躍をなされるだらうと、一般獨逸國民から仰望されてゐた皇太子フリードリッヒ・ウイルヘルム殿下が、皇太子妃として、自ら選ばされたのは、メックレンベルグ・シュエリン公女セシリア姫であつた。その御成婚式が、愈〻一九〇五年の夏御擧行になるので、我國からは、故海軍大將有栖川宮威仁親王殿下が、勅令によつて、御列席することゝなつた。私も宮家別當として、御伴を仰せつかつた。

『氣をつけるがよい、今度の宮殿下の獨逸行は、隨分途中危ないであらうから……』

みなから注意される迄もなく、實は私もひや〱して居つた。

なぜといつて、一九〇五年といふと、丁度明治三十八年に當り、日露戰爭の眞最中である。戰爭は戰爭として、日獨國交の上から見て、たとへ危險を冒しても、御慶事奉祝の特使を差立てねばならぬといふ明治天皇の思召で、宮殿下は、陛下から特にカイゼルに贈らせらるゝ御親書を御預り申上げた。

就中、私共が懸念して居つたのは、露國のバルチック艦隊で、已に極東に向つて出航したといふ報をうけて居る。日限をくつて見ると、どうも此の敵艦隊と海上に於て出會ひさうな氣がする。さうなつたら一大事、宮殿下の御搭乘遊ばす汽船は、彼等に拿捕されるであらう、そして宮殿下を始め隨員一同も捕虜となるであらう、……これが、一つの重大な惱みであつた。

私共は、悲壯な決心をして、船に上つた。船は、獨逸汽船で、我國から母國へ歸航することになつてゐた。どこに、どういふ間諜がひそんでゐて、敵に內報するかもしれぬので、出發は、全然秘密にした。

『有栖川宮殿下が、今度獨逸へ御出發遊ばされた』

かういふやうな事は、新聞にも書かせなかつたので、政府部內の極く一少部分の人々以外には、誰も知らなかつた。

船は、かくして恙なく海上に浮んだ。

ところが、バルチック艦隊は、其年四月八日、舳艫相含ん

で、支那海に入つた。十三日には、早くも佛領安南のカムラン灣に投錨したのである。

それが、此方に分つて居さへすれば何のこともなかつた。だが、敵艦隊は、巧みに蹤跡をくらましつゝ、日本艦隊の眼をぬすんで、浦鹽に入港しようといふのが目的である、詳細なことは、分りよう筈はない。

一宮殿下御坐乘の獨逸汽船は、至極平穏な航海をつゞけて、カムラン灣に入港したのは、同じく十三日であつた。中立國の領海である安南に、まさか敵艦隊が居ようとは、夢にも思はなかつた。

殿下をはじめ、私共は、甲板に於て、折角食事中であつた。

その日は、ヴエールで掩はれたやうに海上に霧がたちこめてゐたが、やがてそれがうつすらと晴れてくると、灣内に軍艦がぎつしりと並んでゐるのを見出した。

『おや』

びつくりして、望遠鏡で見ると、白地に青を交叉した軍艦旗が、へんぽんとひるがへつて居る。云ふ迄もなく、バルチック艦隊である。

『や、敵艦隊ですぞ』

隨行員は、急にさわめき出した。船長もいたく驚いて、待暫しもなくすぐさま取舵の號令を下した。

『全速力！』

船は何は構はず、逃出すことにした。針路を灣外に急轉して、疾走すると、敵艦隊も此方の船影を認めたらしい。

二三隻の艦が、直ちに出動して、私共の乘つて居る船を追ひかけて來た。その中でも、快速力の巡洋艦は、イズムルード號と知られたが、まつしぐらに白波を蹴たてゝ、追ひ迫つてくる。此の艦は、後に日本海々戰の日にも、大損害をうけたにかかはらず、到頭浦鹽まで逃げのびた位で、頗る艦脚が速い。

『逃げられる丈逃げて見せる』

船長の腹もきまつた。

乘つて居る私共も氣が氣でない。だが悲しいかな、此方は汽船、向うは精鋭な快速力の巡洋艦、ぐんぐんと距離がせばめられて行つた。

『さア、どうなるか』

ほんとうに生きた空はなかつた。すると、此時、香港から乘りこんだ、一人の英國人が居た。

『船長、ボートを卸して下さい』と、頼んで居る。

『どうするんですか』

『私が、あのロシアの艦へのりこんで、犠牲になります』

『そんなバカなことがありますか、あなたは捕虜になりますぞ』

『そんなことはない、私が艦長にあつて、此の船には、戰時禁制品などは搭載して居らぬことを説明します、その際に船は逃げなさい』

『そんなことを仰在つても、ロシアの軍艦で承知するものぢやありません、……それに、あなた一人の爲にボートを卸すこと

などは出來ません』

『よろしい、では、此船にのつて居る日本の宮様に御願します』

彼は、宮殿下に對して、ぜひ船長にボートを卸すやうに命じて下さい、さういふ意味をあなた方から殿下に申上げて下さいと、何度も私にくりかへして云つた。

何うも容子が可怪しいと思つた。だが、素より此の危急の場合、そんなことが出來るものではない。ボートは卸さなかつたが、可なり後に至る迄、此の怪英國人のことが氣になつてゐた。何でも、日本で使つてゐた間諜が、あの邊に張り込んでゐたと聞いたので、或はそれであつたかもしれない。危中の危を冒し、却つて敵艦にのり込んで、確乎たる情報を手にしようと云ふ心であつたかもしれない。

彼は新嘉坡で、どこへどう消えたか、影も形も見えなくなつた。

二

こんな譯で、露艦イズムルード號は、刻々に近づいてくる。もはや先方から停船命令が下るだらうと思はれた、そこ迄來ると、いや應はない、船は、命令に從はねば最後、一發喰つて海の藻屑とならねばならない。

『危い！』

私共は、ハラ〳〵した。今か、今か、停船命令の信號が出やしないかと、敵艦から眼を離さなかつた。

船が停れば、船内捜査が行はれる、宮殿下をはじめ、御附の武官、文官、みな發見される、私共は、非戰鬪員として釋放されるとしても、海軍大將であらせらるゝ宮殿下は元より御附の武官は悉く捕虜として、敵艦移乘を餘儀なくされる。かくなつた曉は、宮殿下は御使命を果し給ふことも能はず、御懐中の獨逸皇帝宛の御親書も、自然何うふことになるか、甚だ心元ない。

金枝玉葉の御身をもつて、敵國の捕虜とならせらるゝことは、宮殿下の御苦痛はさる事ながら、我國の歴史始つて以來、曾つてない事である。

お附の武官が、顏色をかへたのも無理はあるまい。

『殿下』

私は、思はず知らず、殿下を御呼び申した。

『む！』

殿下は屹然として、望遠鏡を御目にあてられたまゝ、冷然として落ついて居らせられる。私は、自分で餘りあわてゝ了つたのが氣耻しくなつて、又默つて了つた。

すると、武官等は、もう辭氣はげしく斬死だと、さゝやき合つて居た。私達も文官ではあるが、いざとなつたら、さうするより外はあるまいと覺悟した。

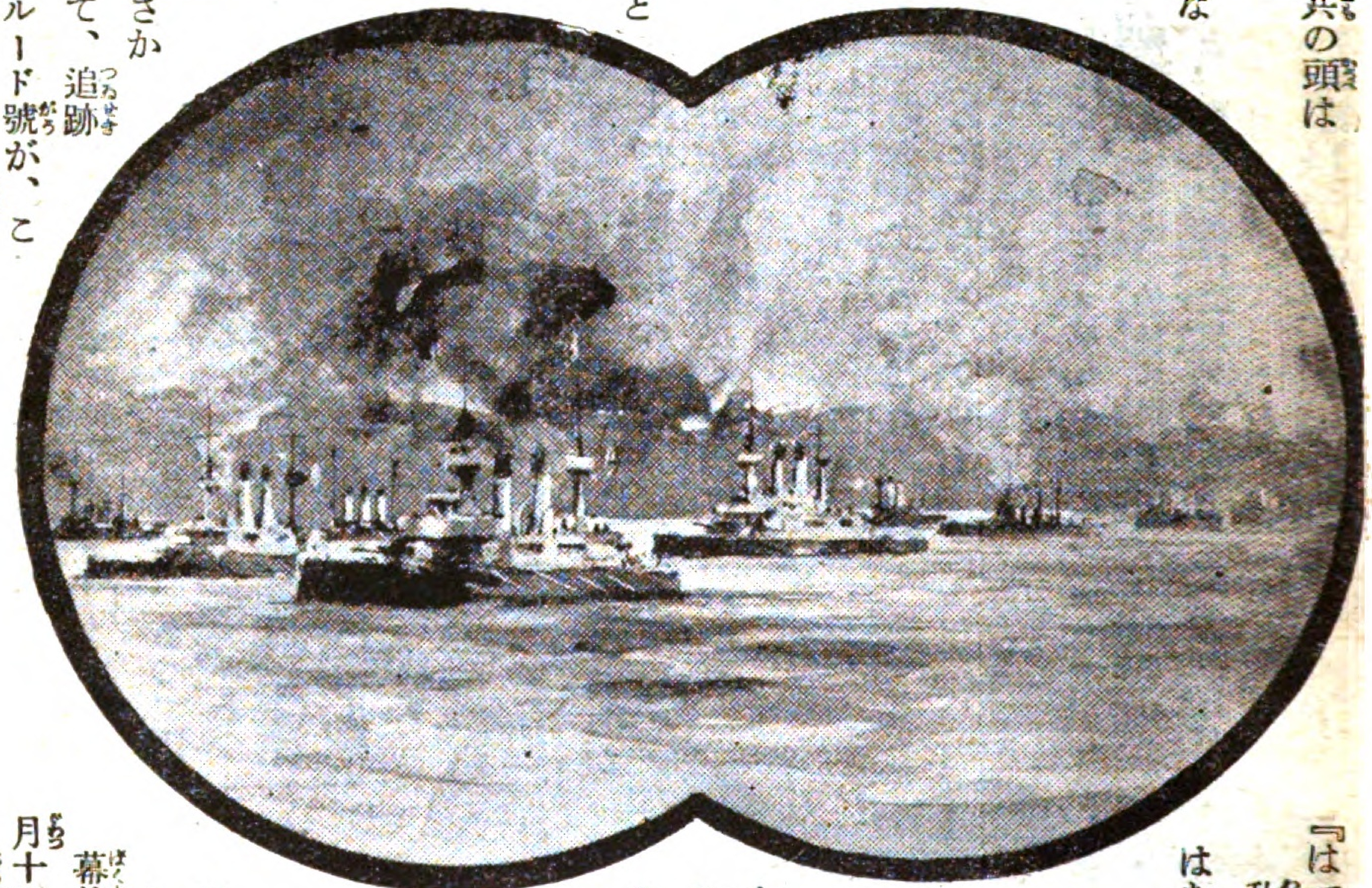
殿下は、やがてじいツと私共の顏を見つめて居られた。何とも仰在らなかつたが、殿下御自身も、御決心遊ばされたらし

く、その刹那私共の頭はおのづと下つた

『まことに勿體ない事であるが、殿下はむざ／＼と敵の捕虜になる思召はござるまい、さすれば、愈々最後のお伴を申上げねばならぬぞ』

　隨員一同それとは口に出して云はぬが、からといふ臍を堅めると、不思議なもので、悉皆心が落ついてくる。

　で、もう一度瞳をむけると、さかんに黒烟を吐いて、追跡して來たイズムルード號が、こはいかに、突然、ピタリと停つた。



『はてな』

　私共は駭いた、何か故障でも起つたのかと思ふと、さうではない、くるりと針路を向け直して、引かへしてゆくではないか。』

『やア』

　私共は期せずして、一度に聲をあげた。

『どうしたんだ、引かへしてゆくぞ』

『こりや妙だ、天佑だ』

　ほつと胸を撫下したが、此時、露艦が何の爲、急に引きかへしたか、久しい間私共には謎であつた。こんな馬鹿なことはない、何うしたわけだと思つたが、後になつて、漸やく事情が判明した。

　それは何でもない、此の汽船が日本に向つて往航の途中露國軍艦の臨檢をうけた。そして、積荷中の日本行郵便物の一切を押收した爲、獨逸皇帝は、露國政府に向つて、嚴重な抗議を申込んだ。ところが、イズムルード號が、勢こんで追跡したのが、カイゼルから抗議をうけた問題の船だつたので、追跡を中止したのだつた。その船に、宮殿下が御乘込みになつたのは、全く天佑だつたのである。面白いのは、バルチック艦隊の旗艦スワロフ乘組の幕僚ポリトウスキーが書いた『露艦來航日記』を見ると、四月十三日の條に此ういふことが出てゐる。

早朝カムラン灣に到着した際は、濃霧があつたが、霧が俄か

に晴れると、艦隊と海岸との間に一汽船を發見した、その汽船は我艦隊を見ると、遁れ去らうとして全速力を出した、ゼムチユーグ、スウエトラナ、イズムルードを遣はし、これを臨檢させようとしたが、三艦は、一汽船を追うて、あつて臨檢することなく放ちやつた、今迄も此ういふことは度々あつたが、自分は、此の汽船の多くは、必ず日本に軍需品を輸送せるに相違ないと思つてゐる、然るに、此の如き汽船に對し、甲板の上にのぼつて一見することもせず、一應尋問する位で放ち遣るのは、あきれた話である、直ちに臨檢して、然る後これを放ちやるのがほんとうである、もし藥制品を搭載して居らねば、何ぞ匆々と逃れ去る必要があらうぞ、日本人ならば此ういふ馬鹿な眞似はしないであらう。

此ういふ言葉を洩して居る。

しかし考へると、實際危機一發のところであつて、よく無事でゐたものだと、今でも不思議な位である。

船は、虎の頤を逃れて、無事にマルセーユについた。巴里に一週間程滯在して後、伯林に出發したが、汽車がコロン驛につくと、獨逸の接伴委員ケンピッツ大將の一行が出迎へてくれた。

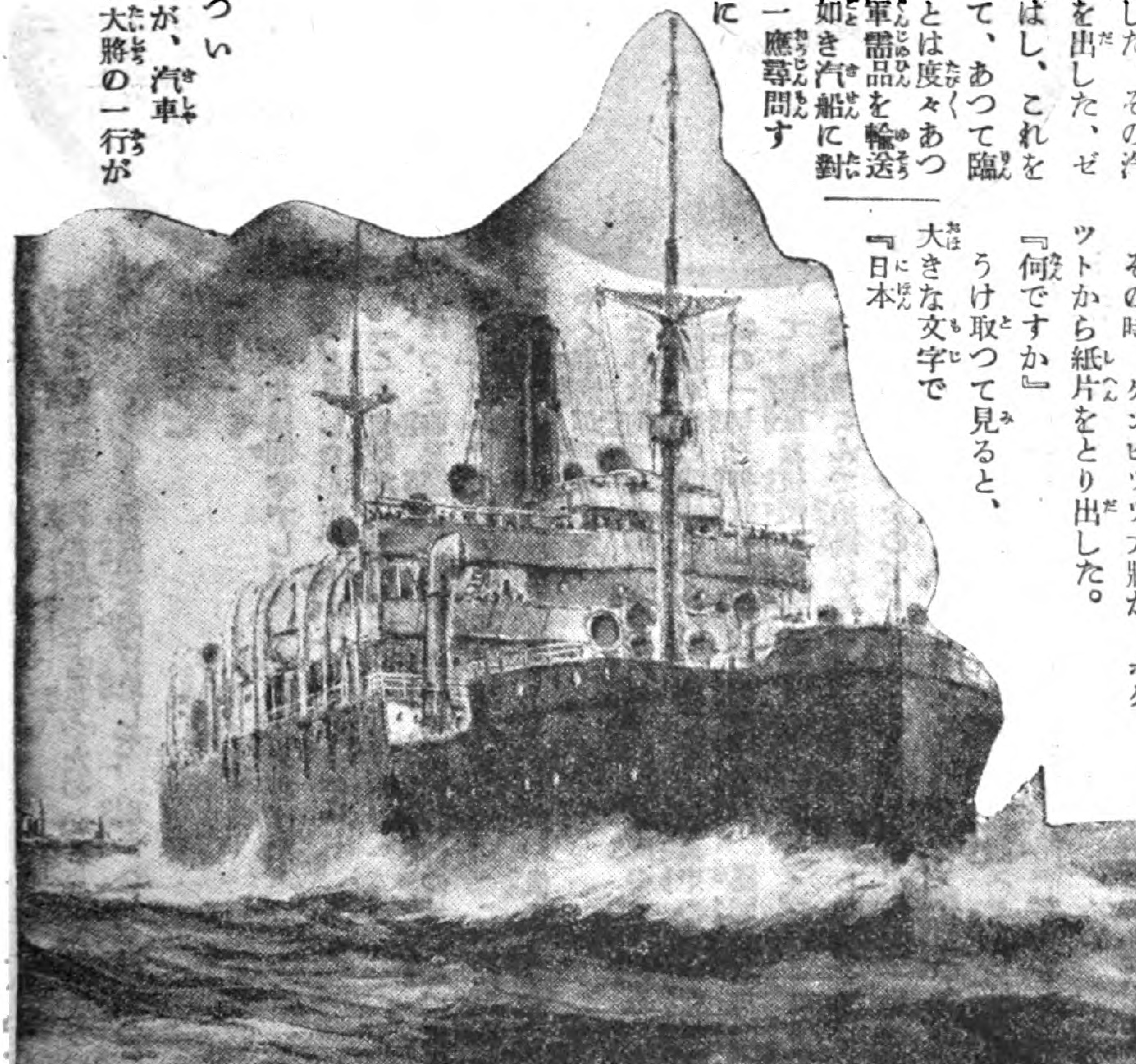
『伊藤さん、これを御覽下さい』

その時、ケンピッツ大將が、ポケットから紙片をとり出した。

『何ですか』

うけ取つて見ると、大きな文字で

『日本



海に於ける日露兩艦隊の大會戰』と印刷してある新聞の號外だつた。

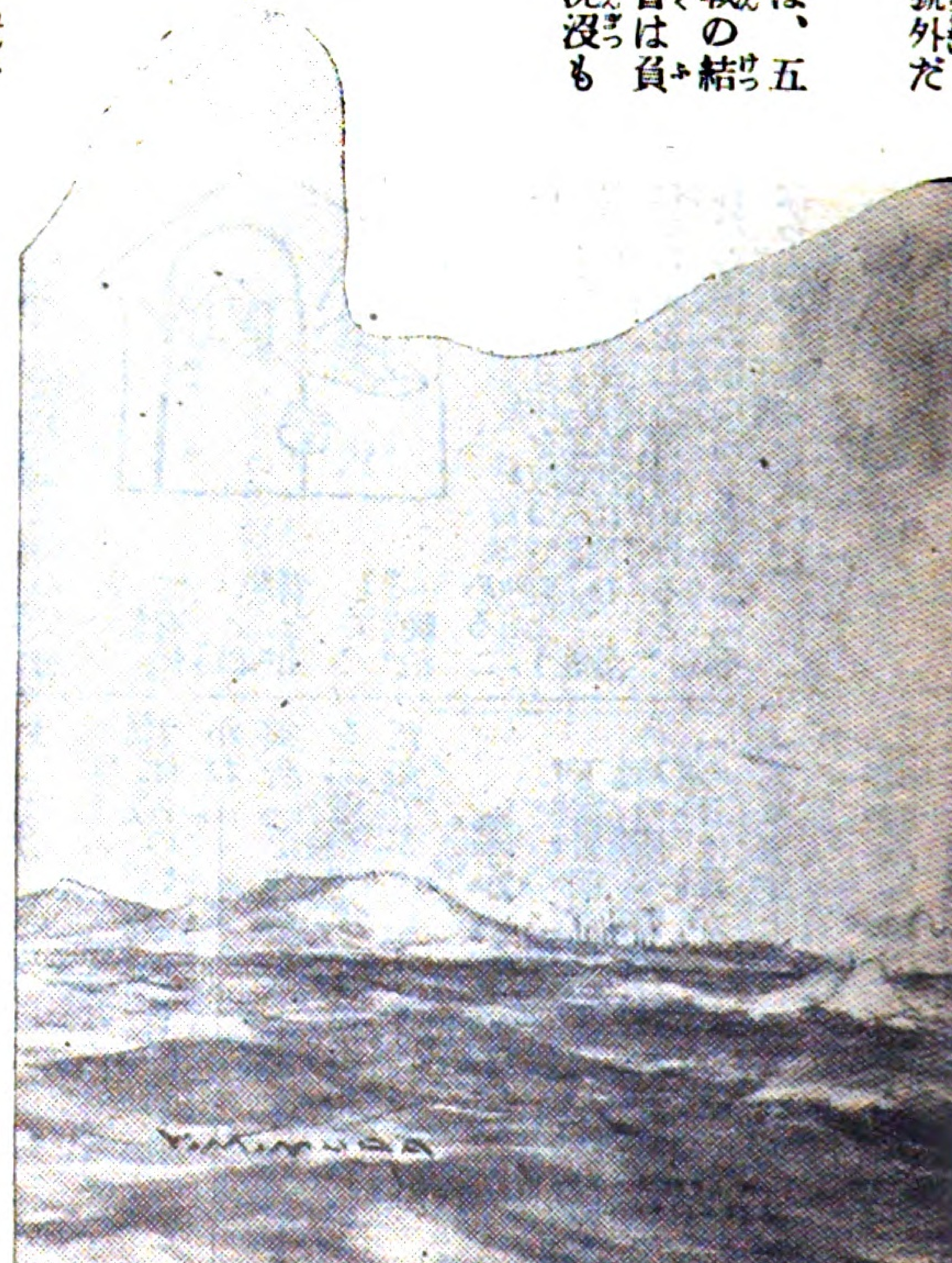
半歳の長航海をつゞけて東上した露國バルチック艦隊は、五月二十七日、日本海對島に於て、日本聯合艦隊と會戰の結果、殆ど全滅し、司令長官ロジエストウエンスキー提督は負傷、ネボカトフ將軍は捕虜となる、日本艦隊は一隻の沈沒もなく、實に有史以來の大捷なり。

私共は、顏を見合はした。だが、何うしても信用出來なかつた。カムラン灣で堂々たる雄姿を目擊したる私共は、あの立派な大艦隊が、殆ど全滅するといふのは有り得可からざる事だと考へた。

しかし、何にしても、大吉報であるので、躍る心を抑へて、獨逸皇帝及その軍隊に迎へられて伯林に入つた。驛頭に群つた市民達は、私共の姿を見ると、萬歳を連呼して、自分の國が勝つたやうに熱狂して居た。こゝで始めて確報を得て、日本海々戰の大勝利を信ずることが出來た。

翌日、ケルニッシエ・ツアイツングの紙上には、此事實を報道した後、次のやうにつけ加へてあつた。

有栖川宮殿下が、日本海軍の偉大なる勝利の確報が發表せられた當日、恰かも國賓として伯林に御入京になつたのは、まことに一奇である。獨帝親しく停車場に臨幸せられて、軍隊の禮式を盡してこれを迎へられた時に當り、伯林市民が、偶〻世界歴史に特筆大書せらるべき勝利を得たる國の代表者たる殿下の御姿を拜するの機會を得たのは、甚だ愉快とする所である。



おかげで、私共は、カムラン灣で死すべかりし一命が助かつて、伯林市中で『日本バンザーイ』の聲を聞くことが出來たのである。

――(完)

笑ヒバナシ



開業早々

世智辛い世の中になつて、普通の手段では飯が食へなくなつた乞食、唖のふりでもすりや人が憫れんでくれるかと考へ、愈よ開業當日出會つた一人の紳士に口を指して見せたまではよかつたが、この紳士は乞食を見知つてゐたので驚いた。



『おや、お前いつからおしになつたい。』

乞食ウツカリして、

『へえ、生れ落ちるとからでやす。旦那。』

肥る譯

肥滿夫人『こんなに肥つてゐますと、夏はやりきれませんよ。何とか痩る工夫はないものでせうか？』



御醫者樣『ありますとも。林檎三つ。葡萄酒一杯。パタにパンを一斤づつ毎日召し上れば痩せます。』

肥滿夫人『さうですか。それは食前に食るのでございますか？ 食後に食るのでございますか？』

それぢや判らぬ

失踪した友人の事を心配して、尋ねあぐねた男、もしやと死體假置場へ來て聞いて見た。

『何か特徴のある方でしたか。』

と管理人、

『左樣。左の耳が一寸聾でしたな。』

締込

或家で夫婦喧嘩が初まつた。餘りの大騷ぎなので、その家に忍び込んでゐた泥棒が飛び出して仲裁する。そこで夫婦は、見馴れない人だがあなたは誰かといふと、泥棒だといふ。然し仲裁は時の氏神と云つて有難いと酒肴を出して、一晩泊めることにした。いざ床を取つて寢ようとする時、亭主は女房に向ひ、物騷だから締をしろと吩咐けると、泥棒なら家の中にゐると云ふ『そんなら表から締張を支へ。』



お禮

辯護士『私に辯護が頼みたいと云ふが、お禮の金は出來たかね。』

被告『いや出來ません。しかし小馬一匹と鷄が二三羽、それに豚が一二匹出來ました。』



辯護士『夫で結構だ。さて、と、君は何の窃盜で告訴されたのかね。』

被告『それが……小馬一匹に鷄を二三羽、それに豚を一二匹盜んだんでがす。』

柔かい鷄の買ひ方

下宿屋稼業の或る男、鷄行商人の車の所へ出かけて行つて、

『今日は鷄があるかな。』

『ありますとも、上玉ばかりですぜ。』

『何羽ゐるね。』

『十二羽ゐます。皆上玉でさ。』

『成程、ところで物は相談だがな、おれん所にやとても大食ひがゐやがつて、餘り食はれるんで商賣にならないのさ。硬い肉の鷄をあてがはうと思ふんだがあるかい。』

『オッと、承知の助ー一イ、二ウ、三イ、四ウ、五イ、六ウと、六羽ゐまさ。』



『それだけかい、外にやもうないね。』

『これつきりでさ。外の鷄あ雛見たいに柔かいのばつかり。』

『ぢや、おれあその「外の鷄」を買ふとしようぜ。』

坊やの理窟

父親、坊やがテーブルへ上つたので、

『坊や、きつと落つこちるから、早く降んりなさい。』

坊や一向耳に入れなかつたが、



直ぐ落つこつた。すると坊や泣きじやくりながら、

『父ちやん、何故坊やを掴まへてくれなかつたの。父ちやんは坊やが落つこちる事を知つてる癖に。』

謙讓の德

裁判官『被告の名はなんと云ふか？』

被告『いや、旦那、、、わつしは名前を申上げるやうな者ぢやねえんでがす。ほんの驅出しの端野郎で——。』

好機會

第一の惡漢『昨日は萬引に百貨店へ出かけたと思ひねえ。すると、都合よく、停電で眞暗になつたと思ひねえ。』

第二の惡漢『畜生！ い、い、うまくやりやがつたなあ！』

第一の惡漢『ところがお前、そこが、大型ピアノの賣場と來てらあ！』

神通力！

署長『どうしてあの慘虐な男を逮捕したかねえ？』

巡査『はつ！ 僕は勇敢に、單身彼奴の家を



包圍したのであります。』

火事まで待て

家主が物になりさうな借家申込人に家を見せに連れて行つた。その家たるや實に濕氣が烈しいと見えて隅から隅まで苔蒸すさま。申込んだ人呆れ顔に、

『隨分濕氣が酷いぢやありませんか。』

『濕氣ですと。固より濕氣はありますが。』



と家主昂然たるもので、

『考へて御覽なさい、火事の時にはどの位役に立つか知れませんぜ。』

下には下

慈善家、お馴染みの乞食に、

『僕も最近に結婚するから、今までのやうにさう金をやる譯には行かないよ。』

乞食、憮然として、

『と云ふと、つまり貴方は、、わしの金で結婚しようと仰有るんですなあ。』

名人達人

決死の大試合

講道館柔道
最初の他流試合

講道館師範　山下義韶
挿繪　山口將吉郎

○

講道館柔道の發生に就ては、鳴弦樓氏が、度々、筆を費やされたのであるが、それに就て自分も、講道館柔道に最初から關係した一人として此處にその當時の事情と、講道館柔道が世に認められた、最初の試合を述べて見よう。

講道館柔道が嘉納治五郎先生によつて、發明された事は、今更云ふまでもないが、明治十七、八年頃、この流儀が案出され、世に知られ、必死の努力に依つて、當時の他流を、滅盡して、一世を、風靡するに至るまでの、苦心は非常なもの、當時、麹町區下二番町にあつた、嘉納塾は夜の夜中でも、白衣の壯士が、凄まじい稽古をしてゐたものだ。

嘉納先生始め、故横山作次郎八段や、不肖私なぞも、夢にまで、新しい業を發見した程で、中にも嘉納先生は突然夜、夜中我々を起しては、霜凍る道場に、引つ張

り出して今、夢に見た、新しい業を、憑かれたもの丶如に、試み合つては夜の明けるのも知らずに、工夫に工夫を重ねると云ふやうなことも、しば〱あつた。

併し、如何に我々が苦心しても、まだ〱講道館流柔道なるもの丶聲價は實に微々たるもので、當時、警視廳、武術世話係として、都下の、柔術界を牛耳つてゐた、中村半助、佐村正明、植原正吾、などと云ふ、所謂明治維新以來の大家連中は、

『講道館柔道？　柔道とは何だ、柔術と云ふものが立派にあるのに、今更事あたらしく柔道などと云ふものを、作り出す必要はどこにもない、書生どもの座敷水練ぢやらう、どうで學習院教頭の嘉納治五郎氏のやることだ』

と、あたまから相手にしてゐなかつた。

然るに、明治十九年の始め、時の大警視、三島通庸（警視總監）は、斯道の奬勵に就ては、非常な熱心を以つてゐた爲に、先づ武道奬勵の一手段として他流仕合を決行すると云ふ意見の下に、これも、肝膽相照す、舟越千葉縣知事と相談の上、東京警視廳師範の大家强剛連と、千葉にあつて、その武名天下に高き戸塚彦九郎一派との、他流試合を實現することになつた。


山下義韶氏

然かも、三島大警視は當時、學習院教頭の嘉納治五郎先生にも、

『今回、警視廳師範對、戸塚派の他流仕合があるから、貴下の門下生も試合させて見ないか』

と、云つて來た。

勿論、嘉納先生は言下にそれを引き受けた、そして、我々に云はれるには、

『愈よ〱講道館柔道の實力を發揮する時が來たぞ、またとない機會だ、所謂大家連中に、講道館流の眞價を知らしてやれ！』

當時は嘉納先生も若かつた、その意氣込みその熱心――我々は今に尙、その言葉を覺えてゐる。

さあ、そうなると、稽古は、更に、一段の猛烈さを加へて來た、朝から晩まで、ドタンバタン、まるで、神がかりにでも、なつたかのやうに、夢中である、話と云へば業の話か、警視廳師範の品定めか、乃至は又、戸塚柔術に對する攻防の研究ばか

り、寝ても、起きても、たゞ試合と云ふ一念に、こりかたまつてゐた、——忘れもせぬ明治十九年二月の事である。

偖て愈ゝ、警視廳主催の他流試合の前夜、嘉納先生は我々を集めて曰く、

『明日だぞ、けやぶる覺悟で、ぶつかつて行け、但しことわつて置くが、大敵でなければ、試合をしてはならぬ、末輩と組んでは、仕方がない』

と、聲を勵まして言つた。

明くれば、今日は愈ゝ試合、嘉納先生引率の下に、岩波靜也、西郷四郎、それに斯く云ふ私の三人が、選ばれて行くのだ、當時、警視廳は監獄署と並んで鍛冶橋にあつた、我々は警視廳に近づくにつれて、胸がわく／＼した。

愈ゝ警視廳についた、試合はその庭で決行されるのである。

が、先づ驚いたことは、其處に居並ぶ警視廳、世話係の連中、及び戸塚道場の面々が孰れも皆、體軀が立ちすぐれてゐるのと、所謂大家の風格を備へてゐることとであつた。

彼れ等は、我々を、睥睨してゐる、

試合場の一隅から、妙なさゝやきがきこえて來る。

『あれが、嘉納塾の書生共か、馬鹿々々しいにも程がある、戸塚派と云ひ、警視廳の師範と云ひ、皆、戰場萬馬往來の古強者だ、あんな書生つぽとは、修行が違ふ、よくも、をこがましく、今日の試合に出て來られたものだ、盲、蛇に怖ぢずとはこのことだ』

我々は憤激した、中にも西郷四郎はその聲のした方を睨みつけて、

『ほざいたな、木偶ども、盲、蛇に怖ぢずか、目明き蛇に怖ぢるか、今に見ろ、目にもの見せて吳れるから』

と、わざと四邊に聞える樣に云つた。

○

組合せが發表された。

これより先き我々は、嘉納先生の勵言に從つて、たゞ、一本槍に大家を目指して試合を申し込んだ、我々の相手は、戸塚道場の强剛連ときまつた、と云ふのは、その頃ほひ、千葉の戸塚彦九郎は、流石に、今警視廳に集まつてゐる全國つぶよりの大家精鋭を向ふにまはして、一道場の身を以つてこれと雌雄を決しようと、云ふだけあつて、その强味に於ては、確かに警視廳の師範連を拔いてゐた、これは三島總監はじめ、斯道に心ある人ならば、ひそかに知つてゐたことである、いや、三島總監が、特に戸塚派と他流試合をさせようとするのは、やゝもすれば、大家風を吹かして、研究精進をおこたり勝な、警視廳師範連を刺激し、その惰氣を一洗し、その士氣を振興しようと云ふ



のが、或は三島總監の胸の中だつたかと思はれる。

だから、我々は此の際、その戸塚派と、決戰することが、講道館、柔道の爲だと思つたのだ。

而かも我々の相手として選ばれたのは、戸塚の四天王とよばれた、强剛揃ひ、照島太郎、好地圓太郎、片山新太郎、と云ふ顏振れ、そして、自分は照島太郎と組み、岩波靜也は、片山新太郎と組み、西鄕は、好地圓太郎と、組んだ。

何がさて、明治維新以來、はじめての、他流試合であり、更にまた、我々若輩――、當時、嘉納塾の、書生つぽと云はれ、雜巾をどりと、輕蔑されてゐた我々が、柄にもなく警視廳に乘込んで、當時、武名赫々たる、戸塚一派に、對抗しようと云ふので、新聞がこれを仰々しく、報道したものだから、都下の武術者は、もとより、警視廳、關係の人々、及び、一般觀衆も、ところ狹きまでにつめかけてゐる。

中にも三島大警視は正面に、巨眼を光らして見てゐる、その傍らには、武道熱心の、舟越千葉縣知事が控へてゐる。

自分は、さすがに氣壓されたやうな氣持であつたが、これではならぬと、氣を取り直し講道館の先頭として、戸塚派の照島太郎に立ち向つた。

面白いのはこの時の試合である。

名にし負ふ、照島太郎は、自分のやうな、かぼそい身體ではなく實に四肢、完備した、均整の發達で、當時、楊心流中の猛者である、戰はざるに早くも、此方をのんでゐた。

が、この試合は、私事にもわたり、自慢話のやうになるから、餘り詳説しないことにする、たゞ照島は組んで間もなく、彼れ得意の大内刈り――さうだ、今で云ふ、大内刈りに――出て來たが、自分はこれを、膝車にかけて、首尾よく彼れを仕止めた。

一本である。

併し他流試合では、講道館流の試合と異ひ、投げたから勝つたと云ふわけにはいかない、而かも、一度投げられたかれは、いさゝか驚いたか、それからは、腰をおとして近よらず、あはよくば、得意の寢業にて、此方の首を搔切らうと云ふのだ、此方も、その手には乘つて居られない。



戰ひ、戰つて、つひに勝敗決せず、引分けに終つた。

滿場は、意外の感に打たれたやうだつた。

と、云ふのは、若輩たる自分の如き、戸塚楊心流の照島太郎にあつては、鎧袖一觸だと思つてゐたのに、意外にも先づ、彼れを膝車に投げとばして、引き分けに終り、而かも分は、此方にあつたのだから、驚いたのであらう。

『ホウ、この書生、なか／＼やりよるな』

皆さう云ふやうな面持ちであつた。

現に自分が場を退いた時にも、

『これが、一番強いのだらう。だから最初に出したのだ。なアにこれからさきは、駄目なんだ。それにきまつてゐる』

と、云ふ聲を耳にした。



併し、事實は正にこれと反對である。我々の策戰はこれからなのだ。

『見てゐろ』

とばかり、同志、岩波靜也が出た。

相手は戸塚四天王中のわざ師、片山新太郎。

しばし、ジリ、ジリ、ジリ／＼と互ひに呼吸をうかゞつてゐる。

年齢は勿論、片山が上だが、兩者殆んど互格の體格、

『ヤツ』

つひに引組んだ、引組んだと思ふと、岩波の兩手は早く、彼れの襟にかゝつた。

何事ぞ、突として、悲鳴に似たる聲、

『ヒイツ！　ヒイツ！』



素早いかな、岩波は、組むや否や、立ちながら、首をしめる、立ちじめの戰法に出たのだ。

滿場は、餘りのことに呆然としたが、やがて、戸塚派の面面、いきり立ち、

『片山……』

『どうした……』

『ぶんねぢればいゝ！』

とそれでも、まだ、岩波を輕視してゐるのか、

『ぶんねぢれ』とか、『やれ〳〵』とか、さながら攻撃の時に應援するやうな、聲援振りである。

突如、敵、片山の顏面、サット暗紫色にかはつたと思ふと、次ぎの瞬間には、早や、口から泡を吹いてゐた。

『參つたな』

我々はさう思つたが、當の片山はまだ、

『參つた』の合圖をしない、手を叩かない。

その時岩波は、敵の頸に食ひ込んだ手を、ゆるめて、パット放した。

バタリ……ボクタウのやうに、倒れたのは片山新太郎、

『ヨシ、それまで』

審判は、さう宣告しておいて、のびた片山に活を入れた。

自分もこれまで、それこそ數限りない程、しめの手を見てゐるが、あの位、鮮やかに、水際立つた絞めの手を、見たことがない。

而かもそれが、立絞めなのだから更に妙だ、驚いたのは、戸塚派及び、警視廳の面々、講道館の書生共にこんな妙技があらうとは誰れが、豫想したらう。



中にも、今日は、戸塚派の總師として出場してゐる好地園太郎は驚いた。いや、たゞ、驚いたのではない、憤激したのだ。

『えゝ、言ひ甲斐なき、味方の面々かな、餘りと云へば腑甲斐なし』

我こそ書生ッポ共を、一ひねりに、ひねりつぶしてくれんずと、勢込んで出場に及んだが、彼れは、身長五尺七寸、而かもその骨太き體軀、隆々たる筋肉、有髯赭顏の大男、グット、講道館席を睨みつけて、わが同志、西郷の出陣を待つてゐる。

私がこゝで述べようとするのはこの試合なのである。

○

さて、敵の大兵、好地園太郎に對してわが講道館の西郷四郎が出場すると、滿場は、一時に哄笑した。

何故の哄笑か？

餘りに體格が違ひすぎるからである。

何さま、西郷は、我々よりもはるかに小さい。

而かも横にとて、さして大きいのではなく、普通の標準を以

て見ても、たしかに小男の部に屬する方である。

しかし、勝負度胸にかけては、講道館創立以來、これに次ぐものはなく、更にまた、そのわざの冴えに至つては、今になほ、定評あるところ、あの小さな身體を以てして、大業、小業、あらゆるものを連發し、その立つや、相手の意表に出て、相手を完膚なきまでにやつゝけて了はなければやまない。就中奇手『山嵐』は彼れが、得意中の得意、これにかゝつたが最後、目のクリ玉のとび出る程に、投げつけられる。彼れなき後は、彼れの如き山嵐を見ることが出來ない。

さて、二人は默禮終つて左右に、サツト分れたが、途端、西郷は彈丸の如くとび込んで行つた。

意外である。

正しく意外である。



さすがに好地も、餘りの急にハツトしてゐると、パツトさがる西郷の足、釣り込まれて好地は、とゝツと、追込んで來た。矢にはにのびた好地の猿臂、グイと引摑まうとした。

西郷は逃げた。ツ、、、、ツ、一氣に追込む好地の體、そこへ西郷、疾風と寄せ返した。

イヤ、寄せ返さんず氣配に見せて、踏込みさまの背負ひ投げ、

『えーいツ！』

氣合諸共ブンまはせば、長身二十三貫の肉塊は芋俵のやう

に投げ出された。

『アッ！』

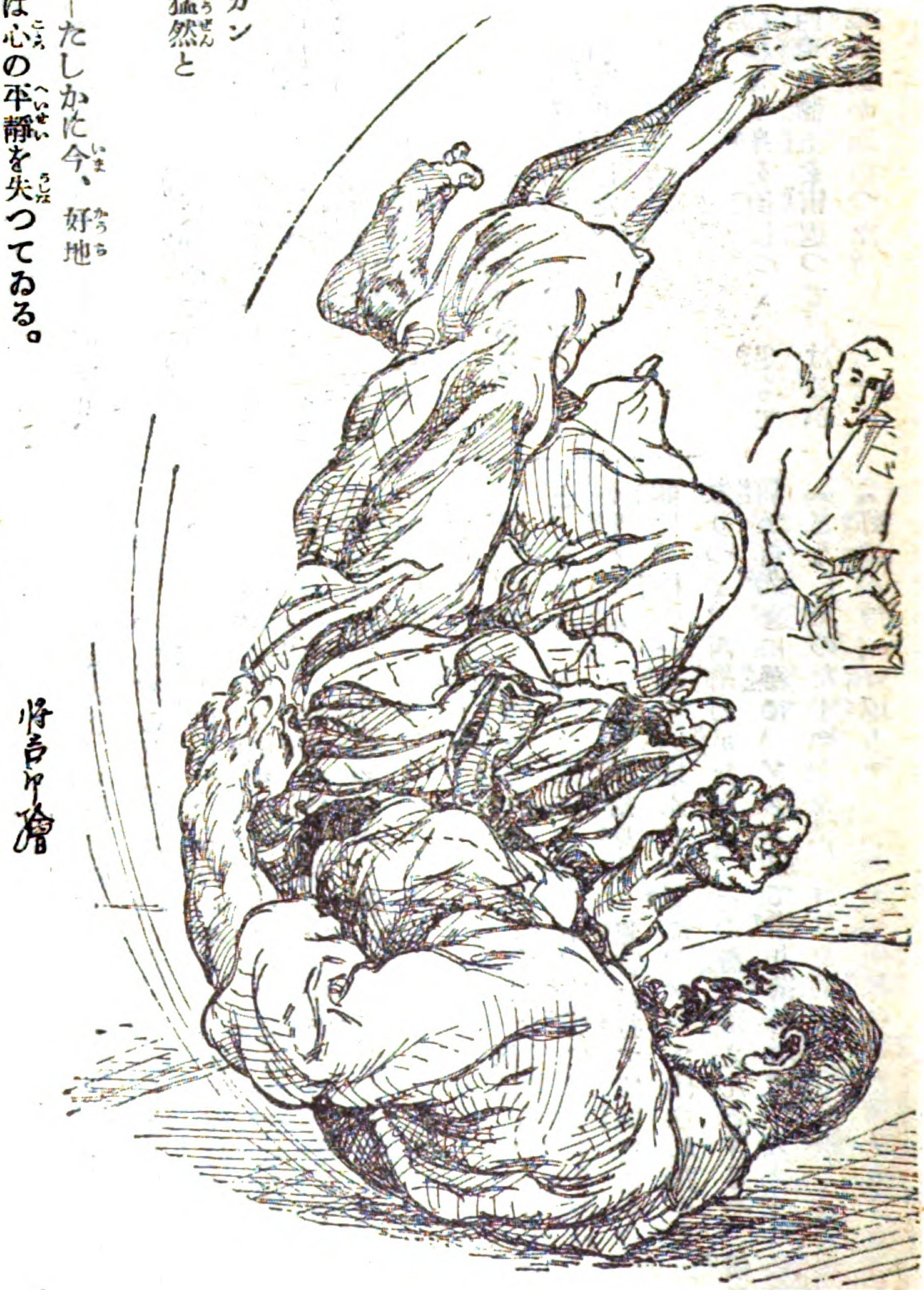
満場ハッと前にのり出すとき、この投げや餘程、骨身にこたへたか、好地園太郎は、しばし、起き上り得なかつた。

が、白面の小冠者西郷が、口邊に笑ひをうかべつつ、おのが投げ出された醜態を見てゐるのを發見すると、さすがに満面眞朱をそゝぎ、ガンバとばかりに起上るや否や、猛然として襲ひかゝつて來た。

氣分のスキ、身體のスキ――たしかに今、好地には、そのスキがある。彼れは心の平靜を失つてゐる。その體勢も周到を缺いてゐる。而かも一氣に、ブツかつて行つたのだ。

西郷の匕首、山嵐はスツ飛んで來た。

實に快刀亂痲、好地の體は宙にドンデン返しを打ち、モロに頭を下にして頭から先きにたゝみにめり込んでしまつた。



『ウアッ！』

さう云ふ聲だつた。その時好地の聲は。餘りと云へばヒドイ投げられやう。今度こそ、起上り得ないかと思はれたが、敵も今は氣が立つてゐる。

またもかつと、とび起きた。途端、フラ〳〵、として危ふく

倒れんとした。

眩暈である、それも道理、頭をしたゝかに打つてゐるのだ。

が敵もさるものである、危ふく倒れんとする足を、グット踏みしめて、腰を、おとし、もう、この手にはのらないぞと、今度は、守りを堅くして、引組んで來た。

この時、西郷は、これも極度に腰をおとし敵の大兵に食ひさがりつゝ此處に引き、彼處に引き、グン〳〵グン〳〵引ずり、ひん廻す。

かうなつて腰をおとしたとなると、大兵は却つて小兵に苦手、おのれの體が大きすぎるために、いかに腰をおとしても、敵に喰ひ下られて了ふ、而かも中腰で、力を一つぱいに張ることが出來ないに引きかへ、西郷はこの體勢を利用して、兩手に敵の、下襟を摑み、その敏捷無類な體を以つて、はつかねずみの樣にかけまはる。

大兵が小兵に、引きまはされるのはこう云ふ場合である。

而かも、好地は今、したゝかに腦天を打ちつけて、フラ〳〵してゐるのだ、西郷は思ふ存分に引張り廻した。

突として聲あり!

『えッ……!』

これぞ、西郷の巴投げ、先づ己れより身を倒しつゝ、足もて敵の腹部を蹴上げれば、敵體、西郷の體上を宙返つて、はるかの彼方にズンデンドウ。が、好地は動かなかつた。

ハテナ? と思ふ一瞬間、

『さア來い!』

強情我慢にも、彼れは『まだ參らんぞ』と云はぬばかりの破れ鐘聲。今度こそ、起きられなかつたので、この挑戰の言葉に、寢業の策に出たのである。

何ぞ知らん、この時西郷は、起きあがりこぼしのやうに、素早くとびおきざま、既に敵の片手を引張つてゐたのだ。

而かも、西郷の敏捷なる、引くは――引くは。大兵好地の體は、臀部を中心にして、コマのやうに、ブンまはされた。如何にかれでも、かう引きまはされては、起きずにはゐられない●

彼れは最早、試合の度を超えた憤慨だつた。そして西郷の手に引かれて起き上るや否や、彼れら一派のよくやる、大内刈りの強襲に移つた。

『アッ! 危い!』

渾身の力に打つた大内刈り、さすがに西郷も、トトトットトッと、うしろ一文字に逃げて來たが、突嗟にパット身をひねるより早く、隼の如き横捨身! 無言に打てば凄まじや、好地の體は、棒の一端を引摑んで一氣に、ブンまはされたやうに、うなりつゝ、西郷の足を超え、その疊に落さんとするや、俄然、肩から先きに疊に、ブツカツて滑り落ちた。

『どうしたのだ!』

『好地!』『好地!』

聲援も今は、叱りつけてゐるやうに聞える。好地は、まだ起上らない。イヤ起上らないと、云ふよりは動かなかつたのだ。

ヘテナ？　見よ、好地は顔をしかめてゐる。

まさしく痛いのを怺へてゐるのだ。

『肩を突いたな！』

さうだ、横捨身を避けようとして肩を痛めたのだ。

西郷は靜かに、敵の渋面をうちまもつてゐる、漸くにして好地は起きた。そして端然と坐つた。

『参りました！』

さすがに彼れは、禮儀整然たるものである。

滿場は、呆氣にとられて、歡聲をあげるものもない。拍手をするものもない。

その時西郷は、好地のそばによりそつて、抱きかゝへるやうに彼れを起した。

溜飲の下がるやうな試合、と云ふことがあるが、自分はこの感を如實に味はつたのはこの時が最初にして、また恐らく最後であるかも知れない——それほど西郷の勝は鮮やかであつた。

『オイ、西郷、今日はまた、ヒドク躍氣に投げ飛ばしたな』

講道館軍の一人が、更衣場に來た西郷にさう云ふと、西郷の曰く、

『イヤ、あれで講道館の立業、投げ業と云ふものが、分つたらう。投げたゞけでは何にもならぬ、などと云ふから、本當の投げと云ふものは、こんなものだ、投げ業でも敵はヘトヘトになつて参つて了ふものだ、と云ふことを知らしてやつたのだ』

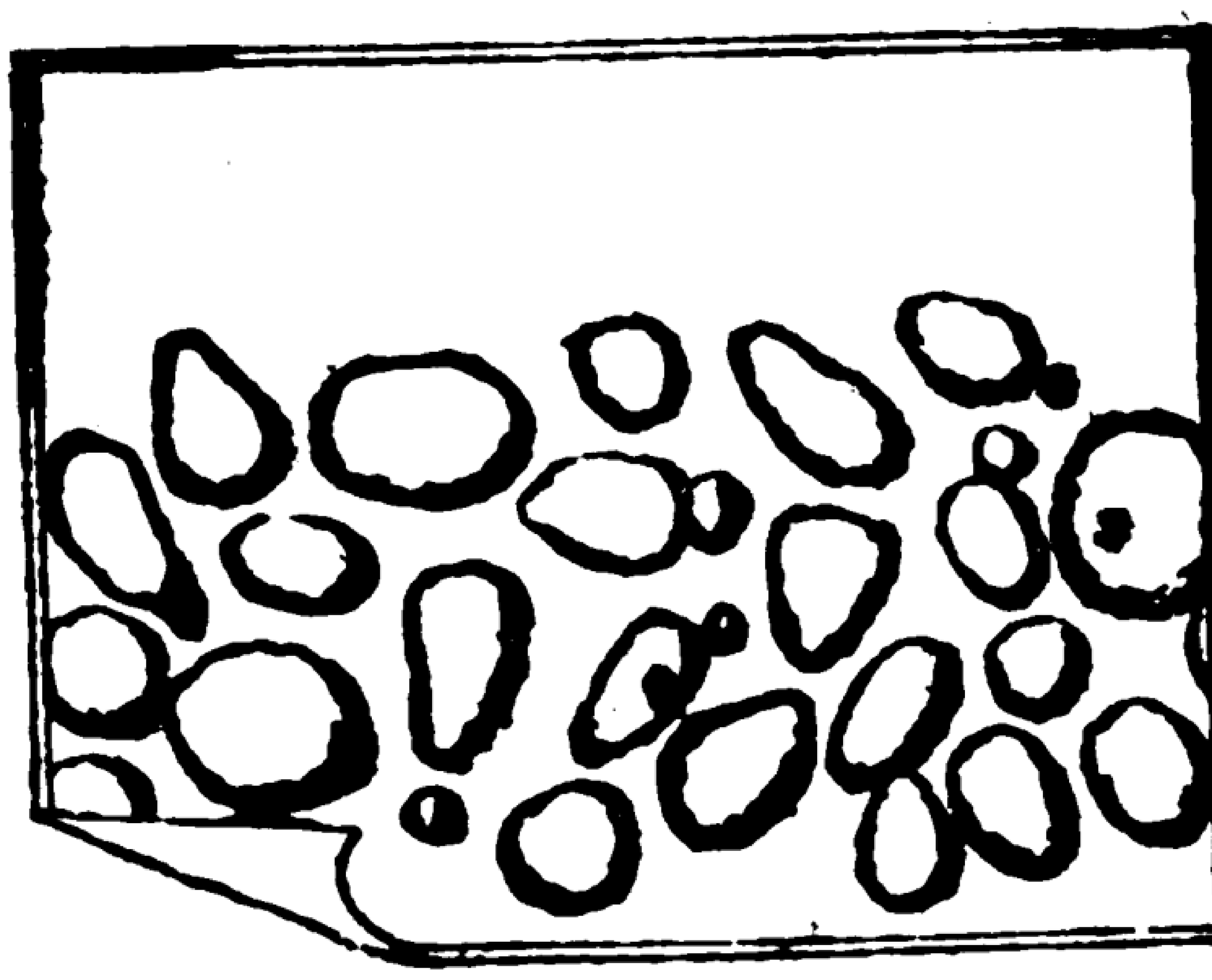
これが講道館柔道の初めての他流試合である。

かくて柔道は、警視廳をはじめもろもろの他流柔術に非常なショックを與へ、眠れる當時の武道界に一味清新の氣を注入した。柔道が警視廳に採用されるやうになつたのは、この事あつてからである。

獨逸皇帝と不老長生藥

東京帝國大學名譽教授
農學博士　澤村眞

近代醫學上から長命藥と認められる
有益菌ヘーフェの一千倍擴大寫眞



萬人の望む不老不死藥

不老長生といふ事は洋の東西を問はず、昔から總ての人間の持つ最も根強き欲望である。西洋では錬金術といふのがあつて、他物を化して黄金とする法と、不老不死の藥を製することを工夫してゐた。大概の帝王は錬金術士を抱へて、その研究をやらせてゐたものである。東洋でも不老不死の仙藥が世界の何處かにあると信ぜられ、秦の始皇がその藥を求めるために、徐福を東海の蓬萊島に遣はしたといふのは有名な話である。

實驗を重んじ、確實な事實の推究に立脚する近代科學が興つてから、總ての迷信的な虚妄な性質のものは一切學問外に排斥せられてしまつたが、それでも不老長生研究だけは遂に捨て去られなかつた。そして今度は何處までも學問的に研究しようとした。一時世界を聳動した細菌學者メツチニコフ博士の不老長生論などはその一例である。

腸の長い人間は命が短い

メツチニコフ博士は種々の動物の壽命とその生理狀態との關係を研究して、老衰の起るのは腸内で食物の殘渣が大腸菌の如き細菌に依つて腐敗醱酵されて毒素を生じ、それが血液中に吸收される爲であつて、人間の腸管は牛馬につぐ長さを有し、食物の停滯時間が長いから、從つてその殘渣が腐敗醱酵する事が多く、ために比較的短命なるを免れない。然るに乳酸菌を服用すればそれが腸内に入つて、有害大腸菌の繁殖を防ぐから、毒素の發生が防止され、從つて老衰を豫防し、長壽を保つことが出來ると主張した。このメツチニコフの説によつて、一時乳酸菌製劑が流行したが、これは菌が生きてゐなければ全く無効で、製劑にすると殆んど菌が弱つたり死んだりして、思ふやうに効がない。それにメツチニコフ博士は先年さほど長命もせずに長逝したので、乳酸菌になる不老長壽論は、つひに歴史上のものとなつて了つた。しかし腸管の長い人間が食物の停滯から毒素を生

じ老衰を早めるといふ事實は、眞理として認めなければならないであらう。ところが最近に至つて腸内制腐の效は乳酸菌に數倍する上に、他にも種々の貴重な效果を持つた黴菌のある事が發見された。メツニコフ博士をして今日あらしめば、必ずや乳酸菌を措いてこの黴菌を推奬し、自分も長く天壽を全うしたであらうと思はれる。この黴菌はヘーフエといふもので、これについては獨逸皇帝の功績を沒することが出來ない。

黴菌を喰べて戰つた獨逸軍隊

ヘーフエは古くから麥酒などの釀造用などに使用されてゐたが、それが亦非常に色々の病によく利くといはれて、獨逸では民間藥として賞用されてゐた。

ところが歐洲戰爭が勃發して獨逸は聯合國の封鎖を受け、甚しい肉類の不足に陷つたので、獨逸皇帝は多數の學者に命じて肉類代用品を研究せしめた。ところが此のヘーフエが蛋白質、脂肪、ヴイタミン等に富んで居て、組成が肉類に酷似し、優に牛肉代用品とするに足ることが發見された。それで旺んにこの菌を培養して軍隊に喰べさせたのである。或る學者の計算によると、ヘーフエ一貫目は牛肉三貫三百匁に相當する榮養分を含むといふ事である。さういふ譯でヘーフエが獨逸軍隊の戰鬪力を助けたことは一通りでなかつた。

不老長壽藥としてのヘーフエ

併しながらカイゼルも惜しいことには、まだヘーフエの本當の貴重な價値を知らなかつた。それはカイゼルがヘーフエの食品としての利用の途を發見したのに刺戟されて、戰後引續き各國の學者がヘーフエの成分を研究した結果、明かにされたところで、つまりヘーフエは昔から何千年來、帝王も乞食も等しく求めてやまなかつた不老長生の藥として、現代の科學がある程度まで許し得るものの中で最高の位置を占めるものであるといふ事が出來るのである。この研究に導く緖を開いた意味で、カイゼルの效は長く記せらるべきものである。

難病慢性病者には大福音

ヘーフエの成分と效能は非常に多いが、最も特色とすべきは近來世界の醫療界で重要視されてゐる、プロトプラズマ・アクチヴイールング作用、即ち如何なる病者でもその病菌に犯された細胞、衰弱疲憊した細胞に直接に活力を與へて、病氣の根本より導く效があることで、病氣が慢性となつた人、重い病氣で衰弱の甚だしい人などには殊に大きな效果を示すのである。また食慾を亢進し、消化を助け、榮養を佳良ならしむる働きも驚くばかりで、慢性胃腸疾患、肺結核などの人はこれによつて治癒に向つた例が多い。又ヴイタミンBの含有量は生物中第一であるから、脚氣に對する效も極めて強い。私はかくの如きヘーフエを大衆の利用に便したいと考へて、その全成分と米胚の主成分とを結合せしめた新榮養素『若素』を作つたのである。



歐米流行の大勢（洋行土産話）

東邦電力會社々長　松永安左エ門

無髯大流行

世界に於ける現時流行の大勢は、端的に言へば、亞米利加風に染つてゐるといふことだ。なぜ亞米利加風が、世界流行の大勢を作るに至つたか。それは恐らく、戰後に於て歐洲諸邦が、亞米利加から辭を低うして金を借らねばならぬやうに成つた結果、その前へ跪きその鼻息を窺ひ、御機嫌を取る必要に迫られ、遂に亞米利加風に感染し、それが世界に瀰漫するに至つたものらしく想へる。

髯は舊時代の遺物

さて、昨今歐米では、昔のやうに紳士が鼻下に髯を蓄ふることなんかは、全く流行しなく成つてしまつた。これは、女が髯を歡ばぬのに、或は其端を發してゐるやにも想はるゝが、その邊の機微なる消息までは、私に頓と解らぬ。然し兎に角男は髯を綺麗に剃り落して無くしてしまふのが、是れ昨今西洋に於ける流行である。殊に米國の實業家で髯を生やしてゐるものなどは、一人も無いと稱しても、過言に非ざるほどだ。爲に私も今回の外遊中に、かねて蓄へておいた鼻下の美髯を剃り落して綺麗薩張りした顔で、歸朝した始末である。



髯なしがよろこばれる

編上靴廢る

歐米今日の實業家は、決して編上の靴を穿か無い。否な、ひとり實業家のみならず、總ての者は、短靴のみを穿く。それが

流行なのだ。

私は、今回の旅行に出發前、そんな消息に頓と接してゐなかつたので、日本に於て赤皮とか黒皮とかの編上靴を、特に自分の足に合ふやうに別誂で注文し、之をヤツチ〱携帶して出かけたが、彼の地へ着いてみると、全く不用に歸してしまひ、更めて短靴を新調したやうな次第である。されば、之から洋行せられる〱紳士方におかれては、編上靴を用意して旅程に就る〱要は毛頭無い。御注意までに一寸申上げておく。



編上靴廢る

ステッキ流行せず

ステッキをついて歩るく流行も今や全く廢れてしまつて、若し強ひて之を突いて、道を歩るいてでもゐたら、足が病氣で不自由であるか、或はヨボ〱爺さんででもあるかのやうに間違はれてしまふ虞れがある。紳士はステッキを携帶して外出すべからずだ。



ステッキは病人か老人



カラーはソフトばかり

カラーはソフト

カラーは、總て皆なソフトで、之まで流行してゐた固いカラーなんかを着けてゐる紳士は、一人も無い。然し、唯今はソフト・カラーの中へ、一寸した輕い芯を入れて、それで外觀の形を保たせるやうにしたセミ・ソフトのものを着けてゐる連中が、無いでも無い。

時計の鎖

從前は太い金の時計鎖を、チヨツキの穴へ通し、之を左右へ割つて、その兩のポケットへ納めて、ビール腹を突き出してゐるのが、紳士たる條件であるかの如くに目されてゐたが、今日そんな眞似をしてゐる男は、米國なんかでは一人も見當らぬといつても、可いほどだ。總ては皆な腕卷時計である。金鎖を得意氣に胸のあたりへブラブラさして歩るいてゐることなぞは、過去の夢に成つてしまつた。

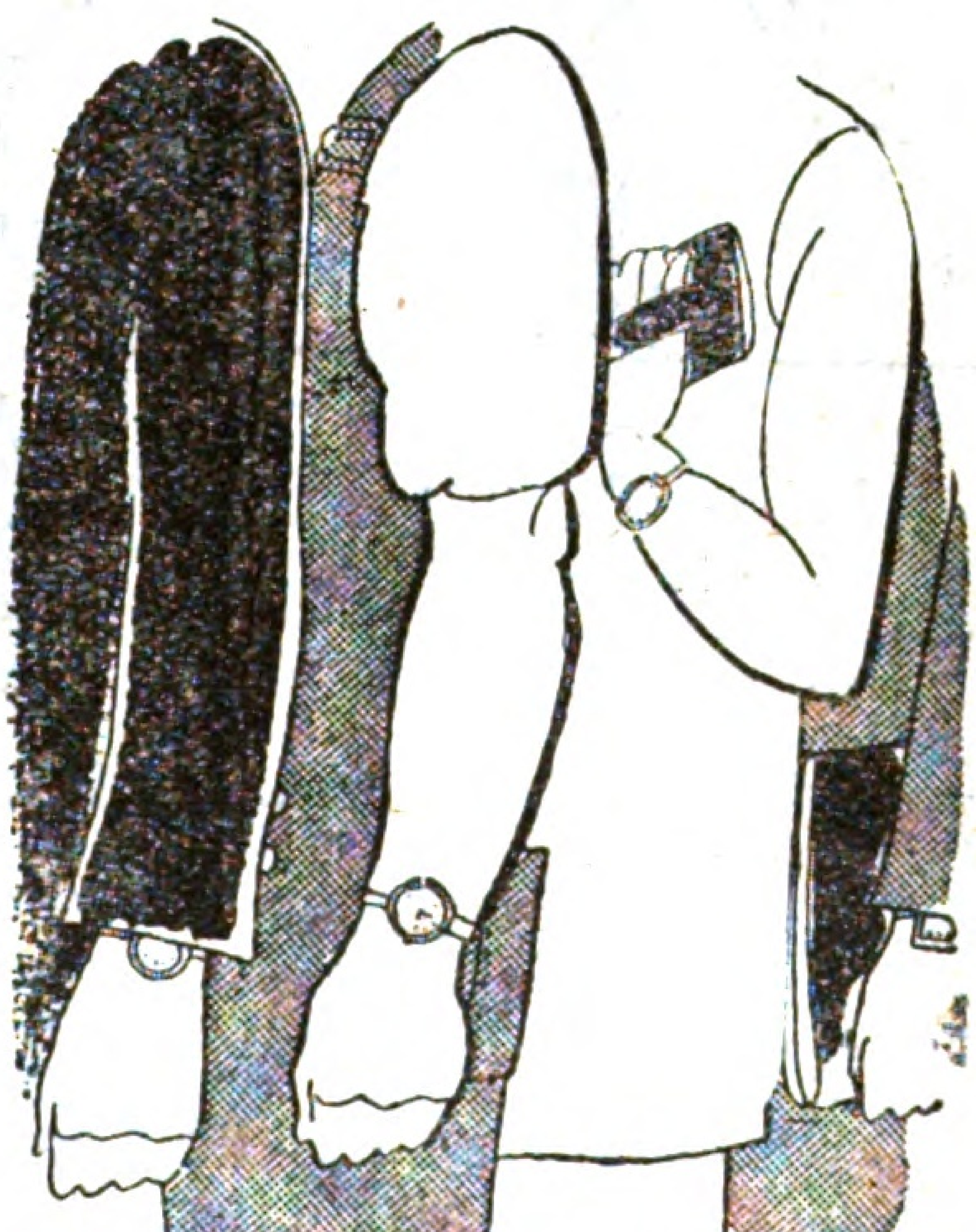
モーニング・コート

今日の歐米、殊に米國でモーニング・コートを着てゐる紳士なんかは、一人も無い。況んやフロック・コートに於てをやだ。すべては皆なジャケットである。葬式へでも何んでも、皆な之れで出かける。晩餐の時なぞには、偶とスモーキング・ドレッスを纏うてゐるものを見かけるが、その多くは矢張ジャケットである。唯、レデーと席を同うする正式の晩餐會やダンスのある夜會などには、燕尾服を着用に及んで出席するといふ例外があるのみだ。勿論晩餐會へモーニング・コートで出席するものなどは、藥にし度くも見當るもので無い。





フロックやモーニングを着るものはない



腕巻ばやり

女の髪は断髪

女の髪は殆んど皆な断髪で、それが大流行で勿論、良人の好に引きずられて、今尚ほ髪を束ねてゐる女もある。断髪と謂つても、色々の型がある。中にイートン・スタイルなんかと稱せらるゝものは、英國のイートン學園に於る男生徒の髪の型を眞似たもので、總てをオールバックに撫でつけて、毛を毫も縮らさずドンの窪のところで揃へて截り、前髪のところの毛を兩方共ちよつと出して、渦巻のやうに巻いたのがそれだ。

断髪は、手入に手數を要せず至つて經濟的のものらしく、何にも知らぬ男なんかは想つてゐるだらうが、さに非ず。あれを絶えず綺麗に長短の無いやうに揃へておくには、不斷の注意と手入とを必要とし、三日に一度ぐらゐは、理容師の手を煩して、鋏んでもらはねばならぬさうで、却つて髪を束ぬるよりも、手入に手數と費用とを要するとの事だ。

髪の變色

彼國では、昨今髪の毛の色を變へる法が非常に發達してゐて、何んな色にでも之を隨意に變色することが自由に成つてゐる。從つて女は、その情人又は良人の好みに應じて、如

何やうにも其髮の色を變へてゆく。

或る女と曾つて曩に逢つた時には、ブロンドの金髮であつたのに、今度逢つてみるとその色が一變して、ブルーネットの黒染んだ色の髮に變つてゐるのに驚いた其女の知人が、其の所以を訊すと『前の夫は金髮を好みましたが、今度の夫は黒い髮毛を好むので、その色に變へたまでなんですよ』と、涼しい顏をして答へたといふ嘘のやうな本當の笑ひ話が巷間へ傳はつてゐることほど左程に、髮の色を變へることは自由である。女の髮の色の變り方によつて、良人を幾度取變へたかを、知り得らるゝことはさても便利な世の中に成つたものだ。



髮の色を自由にかへる流行



流行髮の世界

女の靴下

女のスカートは益々短く成り、靴下は之に反比例して、愈々長く成つてきてゐるが、スカートが斯く短かくなつてくれば、如何に靴下を長くしてみても、椅子に腰を懸けた時なぞ、自然の勢ひ猿又の端がチョイ／＼顏を出すやうなことに成る。初めのうちは、流石にお轉婆のフラッパーどもも、之をひどく氣にして手でスカートを引つ張つたりなんかして、之を隱さうとしてゐたものなさうだが、昨今では泰然自若として兩股を四十五度の角度其のまゝにしておき、之を氣にせぬやうに成つてしまつた。

紐育の日本人倶樂部で、將來女のスカートが、果して今日の如く短いまゝに成つてゐるものだらうか、それとも又漸次長く成つて昔に還へるものだらうか、と却々の議論があつて、說が二派に分れた。長く成るといふ論者は昨今でも既にダンスのある時に着て出る女の夜會服は、スカートの短いうちにも、長い裾らしいものを背後につけるやうに成つてきてゐるくらゐだから、必ず長く成るに相違無いと主張するのであつたが、その長い裾のやうなもの



愈々短いスカート

は、短いスカートに趣を添へる爲めの、單なる景物に過ぎないのみか、スカートの短く成ることは、男の一般に歡迎する處であるから、私は將來とも女のスカートは長くなら無いで、彌やが上にも短く成るものと思つてゐる。

ダンスの大流行

ダンスは大流行である。機會だにあらば、踊らうと思つてゐるのが、是れ昨今の歐米人氣質である。爲に、ダンスは、一般に夜のものとせられてゐるにも拘らず、アフターヌーン・チー・ダンスと稱し、白晝の三時頃からでも踊るほどのものだ。そして、夜は夜で、九時頃から始め、普通は夜半の十二時半に終つて、其儘自宅へ歸つてゆくのだが、更に其の後を承けて、翌曉の五時六時頃までも踊り得らるるやうに成つてゐるナイト・クラブなるものがある。之に就ては餘り詳しく知らぬが隨分亂痴氣騷ぎをやるらしい。



晝でもダンス



便利至極な結婚

これほどダンス熱は、彼國人の間に昂かぶつてゐるもんだから、その影響を受けたものは俱樂部で、元來俱樂部なるものは、女を會員とせざるのみか、苟も女と名のつくものは、一切出入さへせしめなかつたのだが、戰後に於て、女が漸次男の領域へ進出してきようとする傾向のあるのと相俟つて、ダンスをしたさの餘りばかりに、女を俱樂部の會員とし、之を俱樂部に出入せしむるのみか、男女同伴の出入をすら、許容するところがあるやうになつてきた。

結婚の行き方

財産の保護なぞいふことも、其原因の一つに成つてゐるだらうが昨今米國では宗教上の儀式を擧げたり、法律上の手續をしたりした上で結婚するといふやうな煩雜なことが、流行らなく成つてきてゐる。それが善いか惡いかは別問題として、互に好い時には結婚し、嫌やに成つたら、直ぐ離れるには、かうする方が如何にも簡單明瞭で、何等の手數を要せず、便利至極なわけである。（をはり）

意外な節約三百萬圓

無駄を省いた活きた實例

アメリカ政府は、愈々本年七月十日から、舊紙幣を新札と引換へることにした。兎に角五十億弗、九億三千萬枚の發行高を、全部取替へて了ふのであるから、右から左へサツサと片附けることも出來ない。

舊札は、六十餘年前の發行にかゝるもので、紙質も大きさも、現代的ではない。この不經濟に氣のついた大藏當局は、數年前から新札の發行を思ひ立ち、漸く本年に至つて、その印刷に取りかゝつた。

一日七噸、即ち千五百萬弗以上のものを、現に印刷して居るが、舊札に比較して、一ヶ年百五十萬弗(邦貨約三百萬圓)の節約を見る勘定だ。舊札は、全紙一枚につき八枚の札を刷つたものだが、新札は同じ紙で十貳枚取れる。



新舊紙幣の比較

白い部分が新紙幣、外側の斜線の部分が舊紙幣の大きさ。

今度は、別して紙質に注意した。曲げても折つても決して折り皺が出ぬところに、新札の特徴がある。それは特別の糊を漉き込んだ無類上等の紙であるから、贋造の掛念も少ないと見られて居る。新札の壽命も、たしかに舊札とは比較にならぬほど長い見込で、意外にその紙質は丈夫のものだといふ折紙がついて居る。長く流通すればする程、その方の經濟も決して少額ではない筈だ。新紙幣の種類額面は、一弗、二弗、五弗、十弗、貳十弗、五十弗、百弗、五百弗、千弗、五千弗、更に一枚一萬弗の大ものがある。大小寸法は、一弗も一萬弗もすべて變りなく、唯その圖案の中心を占むる大統領の肖像が變るのみだ。尤も一萬弗札は、大統領ならで米國紙幣の父と呼ばるゝ、時の國務卿チエース氏の肖像を入れてある。

額面を見ずに、大統領の肖像を頭へ入れて置きさへすれば、子供でも金高が讀める趣向だ。さすがに、無駄嫌ひのフーヴァ大統領時代に、新舊入れ替りを斷行して、氣のつかぬ方面に年額百五十萬弗の節約を行つた點は、如何にも面白い。



負けたら兵役二年

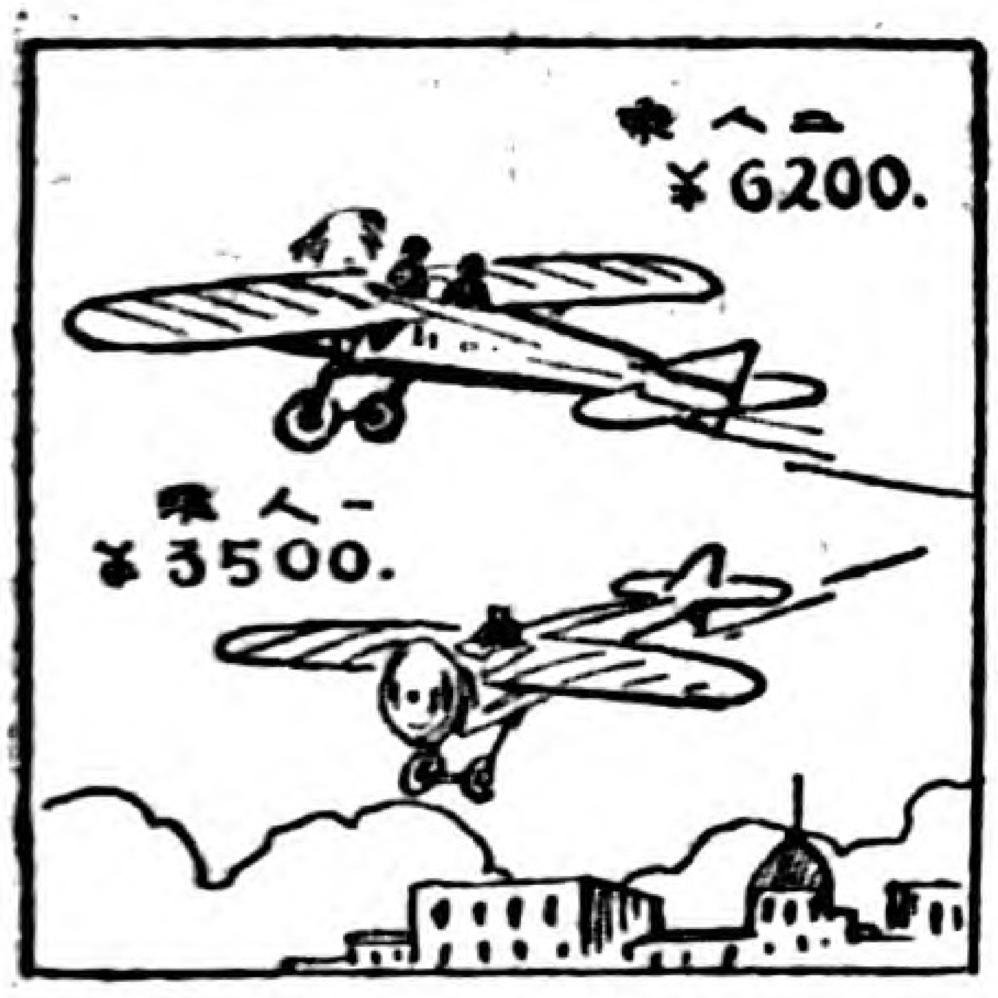
英國の下院議員でスポーツの熱心家であるハーバート・ダンニコ氏は先般英國の蹴球選手の一團を引率し、歐洲諸國を巡歷して歸國したが、其御土產話だとてデーリーメールは左の話を載せて居る。



伊太利と墺太利の蹴球仕合が或所で催された。其時多數の見物人のうちに伊國の首相ムツソリニも交つて居たが、仕合が進んで行くうちに、だん〱伊太利側の旗色が惡くなり、勝利は墺太利側の方に行くべく思はれた。負け嫌ひのムツソリニは氣を焦立てゝ見て居たが、遂に堪りかねて伊太利の選手達に、若し負けたら二年の兵役に服せしむるから其積りで奮鬪せよと申し渡した。二年も兵營に入れられてはたまらぬ、選手達は死物狂ひになつて奮鬪したので、遂には頽勢を挽回して、勝利を獲得した。

飛行機の時代

飛行機が自動車に代る時代が近づきつゝあることは前にも述べたが、これを示す徴候の一と見るべきは自家用の飛行機を有つて居る人が益〻多くなることである。英國では既にかゝる人が百五十名もあり、飛行機製作を專門として居るデハヴイランド會社では毎週二十臺を仕上げて居るが引續き來る注文に應じ切れない程の盛況である。同社で供給さる手輕な飛行機は二人乘り一臺六千二百圓から六千五百圓の價で、一人乘りは三千五百圓である。



親子三人當選

過般の英國總選擧に關して種々興味ある事が出現したが、其うち殊に注目すべき事は婦人が十四名當選して婦人代議士が前議會より四名增員したこと、このうち九名迄は勞働黨に屬して居ること、幷に共產黨が二十五名の候補者を出したけれど、一人も當選せず、其うち二十一人迄は所得投票數が法定票數に達しなかつた爲め百五十磅（千五百圓）の保證金を沒收されたこと等である。猶ほ一つ面白いのは同じ家族で立候補して當選した人達が少なからずあつたことである。それ等の人達を擧ぐれば左の通りである。



夫と妻　勞働黨のオスワルド・モズレー氏夫妻共に當選。

父、娘及び息子、自由黨の首領ロイド・ジョージ氏、幷に其娘メーガン嬢、其息子ギリム少佐、いづれも當選。

父と息子、前首相スタンレー・ボールドウイン氏幷に其息子オリヴアー・ボールドウイン氏、共に當選したが、父は保守黨で、息子は勞働黨である。又首相ラムゼー・マクドナルド氏は其息子のマルコルム・マクドナルド氏と共に當選、同じく勞働黨のアーサー・ヘンダソン氏は其二人の息子と共に父子三人揃つて當選した。

誕生祝に百萬圓

コロンビヤ蓄音機會社の社長スターリング氏は今年五十の歳を迎へたが、其第五十回の誕辰の祝ひとして十萬磅(百萬圓)を其一千人ばかりの使用人に贈呈した。銘々の金額は其勤務期間の長短により二百五十圓より一萬圓に至る間を上下し、十五年以上も氏の會社に勤めた者は七千五百圓乃至一萬圓の贈與を受けた。



獨逸第一の金持は

ルードルフ・マルチンといふ獨逸財界の事情に明るい人の調査に據れば、同國人で一番の金持は廢帝ウイルヘルムで、其所有の總額は五億マークであり、其次ぎに多くの財産を持つて居るのはヤコツプ・ミハエルといふ地主兼銅鐵商で其財産は一億マークである。第三の富豪は炭鑛を經營して居るエルンスト・ペチエツク其弟、カール・ペチエツク及び從兄ポール・ペチエツクの三人で各々五千萬マークを所持し、有名な實業家フリツツ、チツセン、染料會社の社長ボツシユ亦各々五千萬マークの富あり、猶ヤコツプ・メンデル及びフランツ・フオン・メンデルゾーンの二銀行家は、各々四千萬マークの富を有して同國財界の大立物である。





武勇講談

三家三勇士

大島伯鶴
挿繪 井川洗厓

縄に掛った和田平助

いかに隣家の主人とはいへ、あまりの無體にこらへきれず、したゝか懲らしめ歸つた下郎の平助、もとより主人國次惣左衛門の怒をうけるは覺悟の前、今しも『ヤツ』と叫んで平助の胸元を望んで惣左衛門が突出して來た槍先、心得たりと平助、ヒラリ體をかはしたから、槍は空を流れた。隙かさず手許へ飛込んだ平助が、惣左衛門の利き腕を丁と叩けば覺えず槍を取落した惣左衛門、平助の手練の早業に思はず膝をポンと打つて感嘆し、

惣『さても恐ろしきその腕前、身は下郎にやつしても眞は何のなにがしと、立派の本名のある者と、疾くより見極めてをつた

が、包まずこれにて名乘られよ』

平助ハッと兩手をつき、

平『御眼力恐れ入りましてございます。今こそ改めて本心お明かし申す。それがしは水戸の家來和田平助平の政勝の遺兒同姓庄次郎平の政直と申する者』

惣『なにッ、さては豫て噂に聞及ぶ田宮流の達人たる和田先生の御子息でござつたか』

庄『いかにも平助の伜でござる』

惣『その又身分ある其許が陪臣のそれがし方へ、何がために下郎奉公』

庄『それは申さずともとくに御存じの筈。その儀に就いては後刻詳しく申上げまする。今は隣屋敷の事、捨置かばいよ〳〵以つて大事を起し、事面倒。今のうちにこの庄次郎政直、隣屋敷へ押しかけまゐり、陶兄弟を取つて押さへ、かたく將來を戒しめん所存。若し應ぜざるその時は、已むなく彼等を打ちはたさんばかり。兎にも角にも萬事は拙者にお任せを願ひたう存ずる』

惣『いやまことに恐れ入つたるその度胸。しかし和田氏、御身一人では危うござる。それがしお供を仕らう』

庄『いや〳〵、先生の御助力は手前好み申さぬ。なあに高の知れたる陶兄弟、拙者がまゐらずとも、要助茂助で事足るくらゐでござるが、陶兄弟よりの手紙に對して拙者が參らねでは不面目。必要の場合は兩人を拜借いたす』

惣『下郎の茂助要助、彼等兩人がお役に立ちませうか』

庄『なか〳〵以つて侮り難き腕前。長い間それがしが夜なく〳〵彼等兩人には劍術柔道を仕込み置きましたれば、まづ片腕には成り申す。あれで人間が今少し利巧ならよろしいが、どうもお目出度いのが玉に瑕でござる』これを聞いた茂助が驚いた。

茂『オイ早く來いよ、要助……エ、旦那』

惣『オ、茂助、要助、そこに居つたか』

庄『オ、何だ。お前達二人はそこにゐたのか』

茂『居たのゐねえのツて、乃公達は人間の殺されるのを見たことがねえから、どういふ工合かと袖垣の間からそツと覗いてゐたんだが、殺されるどころの話ぢやアねえ。中國九州で鬼神、麒麟といはれてゐる家の旦那が、お前のために手の先でおもちやにされてゐなさるんだ。驚いたぜ乃公達は。だがね兄い、茂助要助の二人は片腕になるは嬉しかつた。けれども後が惡いや。あれでもう少し人間が利巧ならいゝが、お目出度いのが玉に瑕はひどからう』

庄『アハヽヽヽ、お前達、聞いてゐたのか。さうか、それぢやアお前達に吩咐ける役がある。乃公に繩を掛けて隣り屋敷へ連れて行け』

茂『さうすればどうなる』

庄『乃公を隣り屋敷へ連れて行つたら、お前達二人は涙を流して命乞ひをするのだ』

茂『冗談いつちやア　いけねえ。あんな奴の前で命乞ひだの涙を流すことなど出來つこねえ。行つたら直ぐに兄弟をやつ付けて



しまひなよ』

庄『馬鹿をいへ。涙を流して謝つて、それで先方が納得し、それならば向後は心得違ひをしないやう、心を改めるやうにといつて、命を許して呉れたならば、それで話はつくといふもの。假にも相手は一廉の先生だ。何處までも一應は立て〻置かなければいけねえ。だが、それでも勘辨ならねえと來たら仕方がねえ。その時は手前達も腕に覺えのある所を現はすがよからう』

茂『それでいよ〳〵チャンチャンバラ〳〵か。舞臺が龕燈返しになるつて寸法だな』

庄『二人ともぬかるまいぞ……然らば國次氏、ちよつと行つて

参る』

惣『和田先生、如才もござるまいが、恐るべきは飛道具、それがし幸ひ鐵砲を所持しをれば、これなる築山の木蔭にて様子を覗ひ、萬一陶兄弟、卑怯未練にも飛道具を以つて貴殿を撃たうといたしたら、それがし木蔭よりその者を見事に撃止めて御覧に入れる。その儀は御安心が願ひたい』

庄『ハツ、その御一言は百萬の味方でござる。然らば何分お願ひ申す……さア繩を掛けろ。本當に縛るんぢやアねえ。いざといふ時、すぐに解けるやうに……』

茂『成程、さうか。狂言だからな、よし心得た』

これから庄次郎の平助に繩を掛けましたが、いざとなれば、バラリ解けるやうになつてをります。茂助、要助の二人が繩尻を持つて隣屋敷へ参りました。

無禮咎めのお手討

直ぐに庭前へ廻される。正面の所には陶大之進宗連。その傍らに頭に繃帯をしてゐるのは弟の大次郎、平助のために泉水に投込まれた時に怪我をしたものとみえます。左右に居並ぶ門弟七八十人。銀杏穂抜身の槍が三四十本、薄尾花の如くに立て列ねてをります。これを見た時は流石に茂助要助、好い心持はいたしませぬ。ジロリと見た陶大之進。

大『隣家の下郎茂助並に要助、繩取役、大儀』

要『大きな聲を出しやアがるな……エ、今日は、誠にはや結構なお天氣でございまして……えゝ、ぢやア乃公からやつ付けようか……エ、扨はや、命乞ひを申上げ奉るやうな譯柄でござり奉りまして、こんな所がどうもこの野郎何でござんして、飛



んでもない野郎でござり奉ります。そこでまアこれ〳〵だといつたやうな譯柄でございますが、一體全體が何でございまして、それが誠に所謂就中かるがゆゑに……』
大『何だ。貴樣の申すことは少しも分らぬね』
要『さうでございませう。言つてる私にも分らねえんで……』
茂『ヤイ〳〵要助、何をいつてやアがるんだ。喧嘩をする時ばかりボン〳〵啖呵を切つたつて、いざとなりやア一人前の口が利けねえぢやアねえか。退け〳〵、乃公がやるから……エ、さて代り合つて代り榮えもいたしませぬ……』
大『まるで落語家だな……何だ、茂助』
茂『この度はこの平助が心得違ひをいたしまして、先生に對して御無禮をしたといふお咎めで、主人への申込み、主人も申譯がないから、平助に繩を打つて隣り屋敷に引連れて行つて、御存分になさるやうにと、かういふので、私共が繩取り役を吩附つて、この野郎を引張つて來たのでございます。ところで、その成程若先生に御無禮をしたといふことは重々申譯ございませぬが、この野郎だつて年が若うございますし、まだ親もあれば兄弟もある。若し當家樣でお手打になつたといふことを親兄弟が聞いたらば、定めし泣くことゝ存じます。私共も一つ鍋の物を食べ合つて長い間暮して見れば、犬も朋輩、鷹も朋輩、この野郎の殺されるのを兄弟分として他所に見ちやアゐられませぬ。可哀相で〳〵堪りませぬ。御成敗の出來難い所もございませうが、この茂助要助の二人に免じて、どうか御勘辨が願ひたう存じます。へえ、この通り可哀相で涙が出てならねえんでございます』と、そツと指の先へ唾をつけて、眼の縁へこすり付けてゐる。
茂『ヤイ〳〵要助、乃公にばかり謝まらせねえで、手前も一緒に命乞ひをしろやい』
要『フツ、クツ〳〵……』
茂『笑ふ奴があるか、涙を流せ〳〵』
要『馬鹿々々しくつて涙なんぞ出るものか』
大『これ〳〵茂助、貴樣が涙を流して命乞ひをする後で、要助はクツ〳〵笑つてゐるのはどういふ譯だ……はゝア分つた。貴樣達は諜し合せて、かくいふ陶兄弟を嘲弄いたすのだな』
茂『冗談いつちやアいけませぬ。嘲弄どころか、嘲弄が斧を以つて龍車に向ふ如しといふやうな譯で……』
大『默れツ。吾々を侮るに於いては、其方共兩人も助けぬぞ』
茂『そーれ、いよ〳〵龕燈返しが來たぞ……何をツ乃公達二人を助けねえ……何をいひやアがるんだ。米搗飛蝗か、鰯が年始に來やアしめえし、ひよつこすか〳〵頭を下げてゐるのは、平助の命を助けてえばつかりだ。箆棒めえ、手前なんぞに本當の涙を流してたまるものか。唾を眼の縁へ付けたのが分らねえの

か、おたんちんめ』

大『何ッ……』

茂『何が何だ。斬るなら斬つて見ろ』

庄『これ〳〵、お前達は何だつて乃公の命乞ひなんぞするんだ。却つてそれでは後々の爲にならねえ。この平助のためにさうやつて謝つて呉れる志は有難てえが、もう乃公はこれまでの運と諦める……もし陶先生、この平助は若先生へ御無禮をした爲め、御手討になることゝ覺悟はいたしてをりますが、茂助要助の無禮はどうかお許しの程が願はしう存じます』

大『ウム、無禮な奴め。許し難き奴なれども、平助が詫びることゆゑ許して遣はす』

庄『ところで大先生に平助が改めてお願ひがございます』

大『改めて願ひとは何だ』

庄『外ではございませぬ。私は盗み騙りをした罪に依つてのお手討ではございませぬ。若先生へ御無禮をした、その無禮咎めのお手討。縛り首といふものは盗み騙りをしたものに限ると存じます。さすれば、私はこゝで繩目の耻辱を受けるは心外。この繩を解いていたゞいて、西に向つて合掌を組み、お念佛の一つも唱へて潔く死にたう存じます。お願ひといふのは此の事でございます。どうかこの繩を解いていたゞきたう存じます』

大『ウム、成程、いやいかさまそれも尤もの次第……大次郎、どうだ、彼奴の繩を解いてやらぬか』

大次『あいや兄上、それは相成りませぬ』
大『なぜ成らぬ』
大次『なぜ成らぬと仰しやつて、兄上、人間はそこでござる。繩を解けば身體の自由が利く。從つて命が惜しくなり、逃げる氣にもなります。さすればつい一突に急所を突いて、彼の命を取ることが出來かねて、數ケ所の手傷を負はせ、寧ろ長い苦しみをさせるといふことは本意でござるまいと存ずる。繩さへ掛けておけば、見事に急所を突いて、長き苦しみをさせぬ道理。これは繩を解かぬ方が、兄上、お宜しいかと存じます』といふのは、大次郎、平助の腕前を知つてゐる。手玉に取つて、池の中へ投り込まれた覺えがあるから、平助の繩を解けばどんな事をするか知れないと思ふので、それとなく止める卑怯の振舞ひ。
大『ウム〱、さうか。もと〱これは大之進に對する無禮でなく、其方に對しての無禮、本人の其方が繩を解くことはならぬとあらばそれまで……平助、氣の毒だが、本人が繩を解くことはならぬと申す。左樣心得ろ』
庄『ぢやア何でございますか。平助のお願ひを、どうでも肯いては下さいませぬのですか』
大『殘念ながら肯くことはならぬ』



弟子の方から破門
此の時に後の方にをりました大之進の門弟の一人。

門『あいや先生』
大『誰だ』
門『坂本新次郎、ちよつとお願ひがございます』
大『何だ、坂本』
新『只今これにて承つてをりましたが、無禮のお咎めによつて彼をお手打になるといふことは、先生の御存分でございますが、只今下郎の申分を聞けば、盗み騙りをいたしてのお手打ではない、無禮咎めのお手打だから、繩を解いて貰ひたい、西に向つて合掌を組み、潔よく念佛唱へて死にたいと、下郎としては殊勝の言葉。然るに若先生の仰しやるには、繩を掛けておけば一突に急所が突けるが、繩を解いたならば自由が利く、従つて命が惜しくなつて彼れ逃げる氣になるだらう、さすれば一突に急所を突くこともならず、數ケ所の手傷を負はせ、却つて長の苦しみをさせるは本意でないと、かういふお話。しかしこれは甚だ以つてその意を得ざる仰せ。吾々が朝から晩まで痛い思ひをして稽古をいたしてをるのは何の爲め。彼れ天に翔



び地に潜るの術ありとも、先生には投槍といふ術のある筈。それが所謂槍術ではございませぬか。縛つて置けば木偶の棒も同様、縛つて置かなければ急所が突けぬやうな槍術なら、朝から

晩まで痛い思ひをして稽古をする必要はなからうと存じます。どうか下郎の繩を解いておやり下さい。繩を解いて、貴樣逃げるなら逃げて見ろ、見事我が槍術で突いて見せる。――さういつた意氣を示していたゞきたいと存じます。縛つたまゝで突くといふのは卑怯千萬……』

大『默れッ。生意氣なことを申すな、無禮者。貴樣如きの知つたことではない』

新『はゝア、それでは繩を解かず、縛つたまゝで突くおつもりでございますか』

大『言ふまでもないわ』

新『アハヽヽヽ、それでは先生は死物を突く思召しか。それでも一流の指南をいたす槍術家と思召すか』

大『ヤア、汝、師に向つて口返答をいたすか』

新『口返答をいたす譯ではございませぬが、餘りといへば卑怯の振舞ひ、先生が笑はれます。先生の恥辱を見るに忍びず……』

大『默れ〳〵默りをらう。さがれ、無禮者』

新『さがれと仰しやればさがります。さがるより寧ろ破門を頂戴する。今日限り師弟の縁を切ります』

大『なにッ、破門……』

新『されば、師から門弟を破門するばかりが破門ではござらぬ。一旦は師と仰いでも、道に背きし卑怯者を師と仰ぐは身の恥辱。よつて手前の方から破門を求めます』

大『勝手にいたせ』

新『勝手にいたします……陶氏』

大『何だ、陶氏などと、無禮な奴』

新『いや、師弟の縁を切れば五分の交際。先生の尊號は用ゐぬ。下郎の潔い言葉も容れず、繩を掛けたまゝ突かうとは、貴方方の御心中が見えすいて、お氣の毒に存ずる……さて御一統、お聞及びの通りの次第、手前の申すことに誤りはない筈。それとも手前の申すことが誤つてゐると思召したら、誤つてゐると仰せを願ひたい。どこまでも手前お答をいたす。心ある武士は、今の中だ、破門を取つた方が武士の體面を傷けぬ。かやうな卑怯な者を師と仰いでゐたのでは、親に對して面目ない。第一、主君に對して申譯がござらぬ。拙者に同意をして破門をする者はござらぬか』といふと、邪は正に勝ち難し、陶兄弟の卑怯の振舞ひを心憎く思ふ者もございますから、

○『ヒヤ〳〵賛成』×『同感』△『いや、貴殿に御同意仕り、拙者も破門をする』

新『えらい。人間らしい者がゐるな』

□『此方も破門』◎『此方は五人一緒に破門』

新『あゝ團體の申込みは三割の割引だ。さア如何、もう一聲どうだ』まるでバナナでも競賣をしてゐるやうな鹽梅。過半以上

腹を立つて道場を立去りましたのは、悪に與せざる誠にきびきびとした有樣でございます。さアからなると、陶兄弟、意地でも繩を解く譯になりませぬ。平助は始終の樣子を見て笑ひながら、

庄『エヽもし先生へ、それぢやアどうしても繩は解けないんですね。天にも地にも替へ方ない御門弟方、それを破門をなすつてまでも解けねえといふんなら、それもようございます。それぢやア無理に解いて貰はうとはいはねえ。私が勝手に解きますよ』グイと身體を搖つたかと思ふと、首にかゝつてゐた繩がバラリと落ちた。大之進これを見て、

大『やア大次郎、下郎の繩は怪しいぞ』

大次『兄上、これだから油斷はならぬと申したので』

大『それツ』兄弟が立上がるうちに、平助、後に持つたる繩を放すと、繩は悉くそれへ落ちてしまふ。そのまゝ平助はバラ〳〵ッと逃げて行く。

大『やア逃げるか、卑怯者、待てツ』

これは逃げるのではない。懐にある刀を出す間は仕方がない。芝居などで演りますと、牧山丈左衛門が清水一角に突ッかかつて來ると、チットン〳〵チト、ントトンといふ鳴物で、突つかける槍をかはしながら袴を穿くといふ立廻りがありますが、あんな馬鹿々々しいことが出來る譯はない。懐にある刀を出すのでもなか〳〵餘裕の要るもの。それゆゑ大事をとつた平

助、逃げながら兼光の脇差を拔いて、黒塀の所まで來ると、黒塀をピタリと小楯にしたのは、この塀を境に背後は主人の屋敷ですから背後からやられる虞れはございませぬ。中段眞の位に付けたが、これぞ八重垣小太刀の半身入身の構といふ片手正眼、八重垣流の極意。

塀の陰に木の間からそツと覗いてゐた國次が驚いた。惣『よくも取つたり、よくも盗んだり、本家の自分よりうまい。恐るべきものだ』と、惣左衞門舌を卷いて見てゐる。大次『兄上、かやうな事かと存じましたゆゑ、御油斷なさるなと申したのでござる。それツ、と云ふと、兄弟二人槍を拔いて左右からジリジリと詰寄つたが、なかなか突出すことは出來ませぬ。たゞ睨み合つてゐるばかり。

茂『そら、お出でなすつた。待つてゐたんだ。要助、舞臺は龕燈返しになつたぜ。支度をしろい』

要『合點だ』向う鉢卷ぢんぢん端折、何時の間にか塀の陰に隱して置いたタンポ槍を引出すと、リウリウと扱いて仁王立ち。

茂『さア助太刀は助太刀同志だ。弟子達手出しをして見ろ。乃公達二人の腕前の程を見せてやる。覺悟をきめてかゝつて來い』と身構へたが、どうして侮り難い意氣込み。これを見た殘つた門人達、何も陶兄弟に味方するために殘つてゐるのではない、義理合ひで立去りそくなつたので、なまじ手出しをして下郎などに突かれては恥辱になると思ふから、二人去り三人去り、コソコソコソコソ何時か逃げ出してしまつた。

茂『態ア見ろ。こんなものだ……平助兄い、頼むぜ。いざとなつたら助太刀をしますぜ』と、怒鳴つてゐる。



重ね餅の陶兄弟

こちらは黒塀を小楯に取つた平助の和田庄次郎政直。

庄『さア突けッ。貴様達は生きてゐる人間を突いたことがあるか、さア來いッ』

如何なる隙を見出したか、弟大次郎『エイッ』と叫んで突出したる槍先、心得たりと平助、腰をひねつて空を突かせ、よろめく所を『エイッ』切下ろした一刀に槍の柄をスカリッ、中央から切落してしまつた。その間に兄の大之進、無言のまゝでいきなり突出した槍を、平助かはしもやらず千段巻のあたりを摑んでエイッと前へ引けば、いゝはずみを喰つてトン／＼とのめる所を、左の足を揚げて腰を蹴たから、ズルズルズルッと前のめりに倒れる今度は大次郎が、殘つた槍の柄を取つて打込んで來るのを、ヒラリ體をかはしておいて、襟首を引ッ摑んだかと思ふと、『エイヤッ』と、兄貴の倒れてゐる上へ同じやうに重ね餅、その上へウムとのしかゝつた平助。



庄『さアどうだ』

大『ウーム……』

庄『動いてみろ。動きやアこのまゝ田楽刺だぞ。悪いと知つたら詫びろ。まだ手對ひをする氣なら、一刺になるつもりで動いてみろ』

大『ウーム……恐れ入つた。どうか御勘辨に預りたい。命だけはお助けを願ひたい』

庄『アハヽヽ、弱い音を吹いたな。助けてくれといふなら、手前のやうな奴の命を取つたところで仕方がねえから、助けてはやるが、今この平助の言ふことを、耳の穴をかツぽじつてよつく聴け。一體手前達は嫉妬心が深いからいけねえ。國次先生の評判のいゝのが嫉ましく、動もすれば悪口雑言、それだから手前達は憎がられるんだ。見ろ。手前達の卑怯な振舞ひを見て、弟子達の方から破門をして出て行つたぢやアねえか。物の師として、門人から破門をされるほど耻なことはねえ。それほど人が嫉ましく思つたら、自分の腕を磨くがいゝ。自分さへ腕が出來て、行ひを正しくさへすりやア、默つてゐたつて評判もよくなれば、また弟子も殖える。出世もすらア。その道理も考へねえで、人を嫉んで無謀な事をするから、かういふ目にも遭ふんだ。さアこれから先、今日のことが口惜しいと思つたら、人を怨まず、みんな自分が悪いのだと思つて、一心になつて修行をしろ。それが人間の道だ。いゝか。解つたか。どうだ』

大『解りましてございます』

庄『解つたらいゝ。忘れるな。だが、高の知れた仲間にかういふ目に遭つたとあつては、貴様達もこの後殿様へ御指南も出來めえ。今更めて乃公の本名を明かして聞かせる。下郎平助といふのは、世を忍ぶ假の名。眞は水戸中納言光圀公の指南役和田平助政勝の一子同姓庄次郎政直といふ武術修行の者であるぞ』

大『エヽッ』

庄『さアその和田政直に負けたとあれば、別段恥辱にはなるまい。決して人を怨まず、耻を受けるは自分の未熟と、我身を振返つて修行をしなさい。この言葉を決して忘れぬがよい。さア分つたら助けてつかはす』

懇々と説き諭して徐かに立ちのけば、陶兄弟は大地に兩手をつき、

大『和田先生とは存ぜず、失禮をいたしてござる。何とも面目次第もござらぬ。御説諭に從ひ、今後は一層の修行を仕る心得にございます』と、嘘か眞か、涙を流して詫びる様子。

庄『いや、それは何より。手前もちと力が過ぎました。無禮の段水にお流し下されい……さア茂助要助、これでいゝ。引揚げようぜ』

茂『いやどうも、兄い、いゝ心持だな。胸がスーッとして、一遍に溜飲が下がつてしまつた』

庄『そんな事をいふものぢやねえ』

意氣揚々と引揚げて參りました國次の邸。主人惣左衞門の後から奧樣、娘のおみつも共に玄關へ出迎へる。

庄『これはどうも、先生、奧樣もお孃さんもお出迎へで恐れ入ります……おや、奧樣お孃樣、お顏をどうなすつたのでございます』

妻『どうかなつてゐますかえ』

庄『どうかなつてゐるかどころぢやございませぬ。額と鼻の頭が眞黑でございます』惣左衞門は笑ひ出して、

惣『アハヽヽ奧と娘は、どうなるかと夢中になつて、黒塀の節孔から隣り屋敷を覗いてゐたのぢや』

庄『アハヽヽヽさうでございましたか』

妻『あれまアさうかえ。おみつや、お前まア猫のやうに鼻の頭を黒くして……』

みつ『阿母さまも同じやうに、オホヽヽ』

果ては笑ひになつて、さて改めて奧の座敷。

惣『さて和田氏只今の爲され方、いやどうも恐れ入つてござるが、併し八重垣小太刀も能くもあれまでに覺えられましたな』

といはれた時に、庄次郎政直も流石にきまりが惡い思ひ。

目出度く内祝言

時に庄次郎は容を更め、

庄『國次氏、誠に申譯ござらぬ。最前はお話し申す暇もなく隣

家へ參つてあの如き次第。實は主人光圀公の御内命により御當家へ八重垣小太刀の流儀を見習らひにまゐつてござるが、何分にも吉川家にてはお止め流儀として他藩の者には一切許さぬとのこと。それがため下郎に身をやつして御當家へ入込みましたが、流儀盗みは天下の法度。命は助けぬ、首打つと仰せあれば、決して拙者卑怯は申さぬ。潔く首さし伸べてお渡し申す。又貴殿が胸中大海の如くにして、この流儀を他藩の者にも敎へ、八重垣小太刀の最も利ある所をば弘めたき思召しならば、拙者これより江戸表へ立歸り、廣く藩中の者は申すに及ばず、他藩の者にも弘めたく存ずる。我等の命をお助け下さるか、それとも速かにわが首召さるゝか、二つに一つ、我等にとつて命の瀬戸際、御返事を願ひたい』滔々として述べた時に、國次が

惣『素より吉川家に於いて御止め流儀と相成つてゐる八重垣小太刀、他藩の者には許されませぬが、敢へて拙者お敎へ申したといふではなし、御自身にて自然御會得なされたはそちらの御



技倆、貴殿の御首級いたゞいたとて何に相成らう。この上ともお覺え殘しの所もあらば、御隨意に研究なされて差支ござらぬ。しかし最前隣家にての御腕前、いや元祖のそれがしより却つて立勝つたやう拜見いたした。決してお敎へ申す所はござらぬ。能くもお覺えなされた。併しこの土地に長く足をとゞめられては、卑怯未練の陶兄弟、改心をいたしたと口で申せばとて油斷のならぬ人物、この後何か貴殿に禍ひをかもしては相成らぬ。早々御出立なさるがお宜しからう』

庄『忝じけなきその仰せ。然らば仰せに從ふことにいたします』

惣『就いては和田氏に改めてお願ひがござるが、何と御聽屆け下さるまいか』

庄『何事でござるか』

惣『娘を妻にしてやつては下さるまいか』

庄『エ、ッ……』

惣『娘みつ、當年十八歲、親の口から申すも如何だが、心も素直、裁縫は固より女の道、女一通りのことは敎へ申した。拙者の眼で徒者ならじと見込んだ御身、流石に娘も同じ心か、下郎の御身に疾くより思ひをよせをる樣子……』

みつ『あれお父樣、そのやうな……』

惣『アハヽヽヽ、いや娘、何も羞しいことはない。それとなう御身に寄する心づかひ、それを知つて意に介せぬ御身の堅き心、惣左衛門ほとほと感心いたしをつた。併し今日別れとなり、この周防の岩國と江戸表、遙かの道を距てゝそのまゝと相成つては、娘も定めて本意ないことゝ、それが誠にふびんでござる。子に甘きは親心、馬鹿な奴と思召さうが、子ゆゑに迷ふ親の常、お察しあつて、庄次郎殿、不束ではござるが、娘みつを妻に娶つてやつて下さるまいか』

庄『はい……』といつたが、流石の庄次郎も、直ぐに返事も成りかねて、さし俯向いたまま考へてをります、惣左衛門の妻と娘のおみつは、庄次郎が何と云ふかと涙の目にぢつと、庄次郎を視つめてをります。

惣『如何でござる、和田氏、それとも不服とござらうか』



ホツト息を吐いた庄次郎政直。

庄『國次氏、忝じけなき只今の仰せ、何の不服を申しませう。併し何を隠さう、實を申せば、拙者の父平助政勝は仔細あつて腹掻き切つて相果て、只今和田の家は斷絶いたしてをる次第。この八重垣小太刀を習ひ覺えて國許へ立歸らば、それにて初めて和田家の家名は再興が出來ることと存ずるが、それまでは確たる御返事が成りかねまする譯……』

惣『いや、それは御尤も。それなれば御家再興まで、娘はたとひ白髪の生えるまでなりと手前手許に置き申す。どうか妻に持つてやるといふ唯一言、それだけ御承知下さらうか』

庄『恐れ入つたる御言葉。左程までの御思召、然らば……』

惣『オヽッ御承知下さるか……娘、喜べやつと其方の想ひも屆

いたぞ……なに羞しがることはない。家内、お前も喜べ。私もこれで安心をした……就いては今日は何よりの吉日、善は急げぢや假の祝言、唯盃事だけを……」と、これから早々に支度をして、急にまとまる内祝言、これが濟めばいとしい良人は直ぐに旅立ちかと思へば娘のおみつは嬉しいやら、悲しいやら、心そは〱一間の内、祝言の盃事も目出度く終つて、庄次郎は直ぐさま常陸屋文助を呼んで話をする。文助も喜んで衣類萬端支度に及びましたが、昨日に變る武士姿、盡きぬ名殘をしみつつ、見送る一家見返る政直、振り返り〱國次の邸を立出でましたが、常陸屋文助は城下外れまで見送つて、こゝで別れを告げて立歸る。こちらは庄次郎政直、周防岩國を出立、主命を無事に果して、八重垣小太刀の奥義を覺えたかと思へば心も勇み立つてまゐりますが、別に急ぐ旅でもないから、途々名所舊蹟を見物しながら、やつて參りましたのが京都。三條小橋の釘貫屋といふ旅籠へ宿泊いたしました。その夜は休んで翌朝、早くから宿を立出で、まづ銀閣寺を第一に諸方を見物をしながら、三十三間堂へ參りました。時は貞享の三年四月十二日、ソロソロ〱人が行く樣子に、何事ならんと思ふうち、ドツト上がる鬨の聲。ここに測らずも一つの騷動出來をいたし、庄次郎政直が初めて八重垣小太刀の玄妙を現はす端緒を得るといふ、いよ〱三勇士出合の一席は次號に申上げます。（つゞく）

探偵コント

現場不在證明(アリバイ)

加戸田英雄

木犀の甘い香がむせ返るやうな或る黃昏のこと、下僕を一人連れた紳士が英國北部のとある宿へ旅裝を解いた。夕飯を濟ませると宿の亭主を呼んで、

『この邊に何か見るものはないかね、二三日逗留の間の退屈凌ぎになれば何でもいゝ。』

『左樣で。恰度今週はこの邊の巡回裁判がありましてな。明日の裁判は一寸面白うございます。窃盜事件でございますが、動かぬ證據がありますのに、被告は犯罪當時には現場より遙か離れた土地にゐたと云ひ張つてをります。』

『ほゝウ、そりや是非傍聽したいものだが、席はとれるかな。』

『なに旦那方なら席の一つ位わけはありませんや。一つ明朝御一緒に參つて見ませう。』

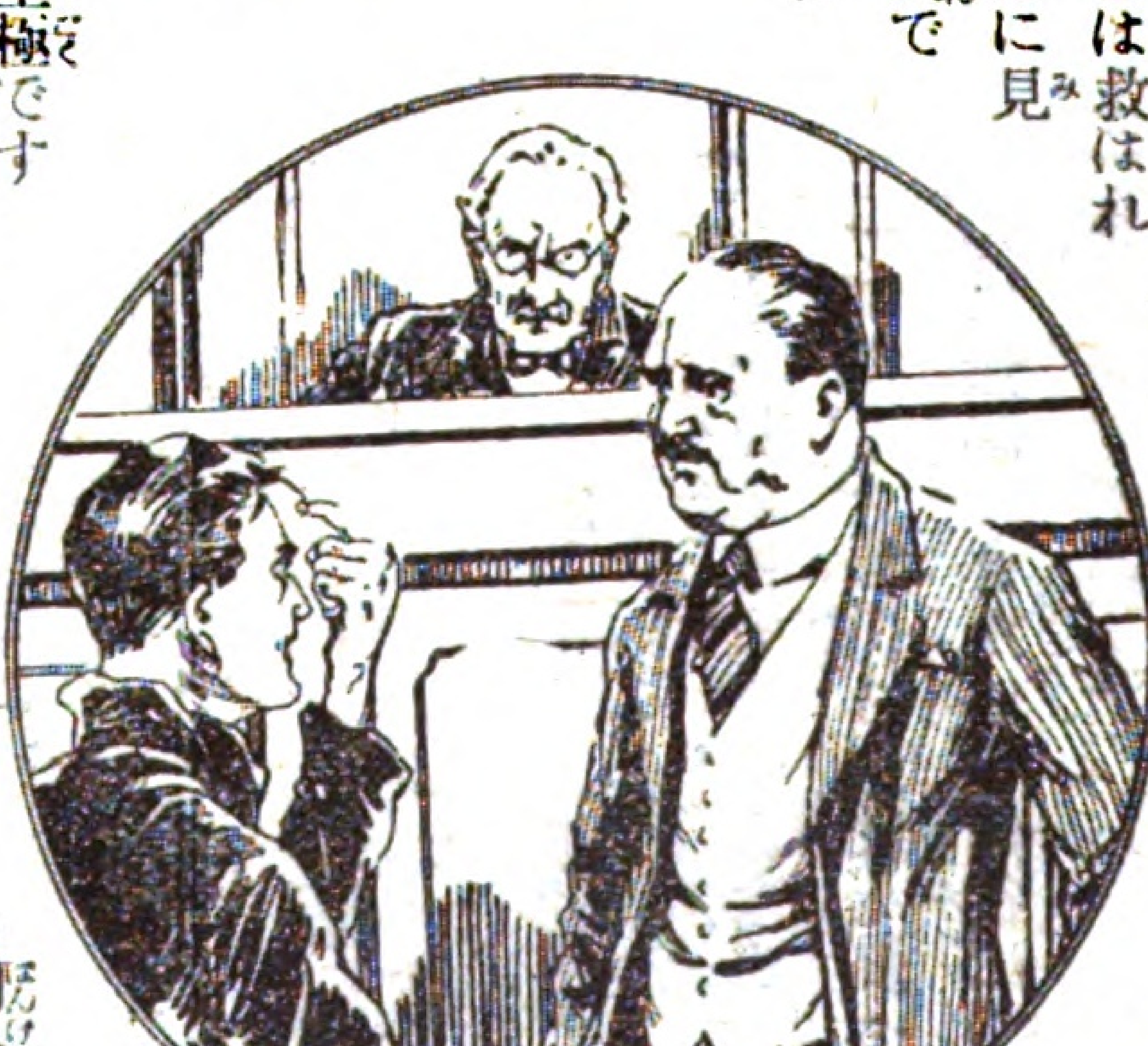
翌朝紳士の席がとれると、間もなく公判は開かれ、證據調べの間被告はジッと眼を落してゐたが、それが濟むと顏を上げて、ふと傍聽席なる紳士の顏を見ると、何に驚いたか、ウンと云つて氣絶してしまつた。滿廷大騷ぎの揚句やつと息を吹き返させた後、判事は

『一體何事ぢや。』

『旦那、あつしは救はれました。あすこに見える紳士が證人でさあ。あの方に一寸お訊ねして見ても宜しうござんすかい。』

滿廷の視線を浴びた紳士、弱つた顏付で、

『これは迷惑至極ですな。一向見覺えのない男ですが、望みなれば何なりと返答は致しませう。』



『では伺ひますが、旦那は一と月程以前にドーヴァへ御上陸になつたんでござんせう。』

『如何にも。確かな日は覺えてゐないが。』

『ぢや旦那のトランクをホテルまで運んだ背ジャケツの男は御記憶にありませんか。』

『さあトランクは運んで貰つたに相違ないがジャケツの色まで覺えてゐないね。』

『でもその男は途すがら旦那に身の上話をして、こき使はれた話から額の傷までお見せした事を覺えてらつしやいませんかね。』

この言葉を聞いた紳士の顏はだんだんと變つて來た。

『さう云へばそんな事もあつたやうだな。』すると被告は額に亂れかかる髮を拂ひのけて、凄い創痕を見せた。

『や、今やつと判つた。君はあの時の男だつたな。』

これで被告がドーヴァで紳士に會つた日と、ドーヴァより遙か遠方の地で行はれた窃盜事件の日とが一致し、これが動かぬ現場不在證明となつて被告は即日無罪の判決を受けた。

それから一箇月後――

その當時の紳士、下僕、被告は一網打盡に捕へられて同じ刑務所に冷たい月を眺めてゐた。三人は當時有名の三人組列車强盜なのであつた。（完）



諧謔小説

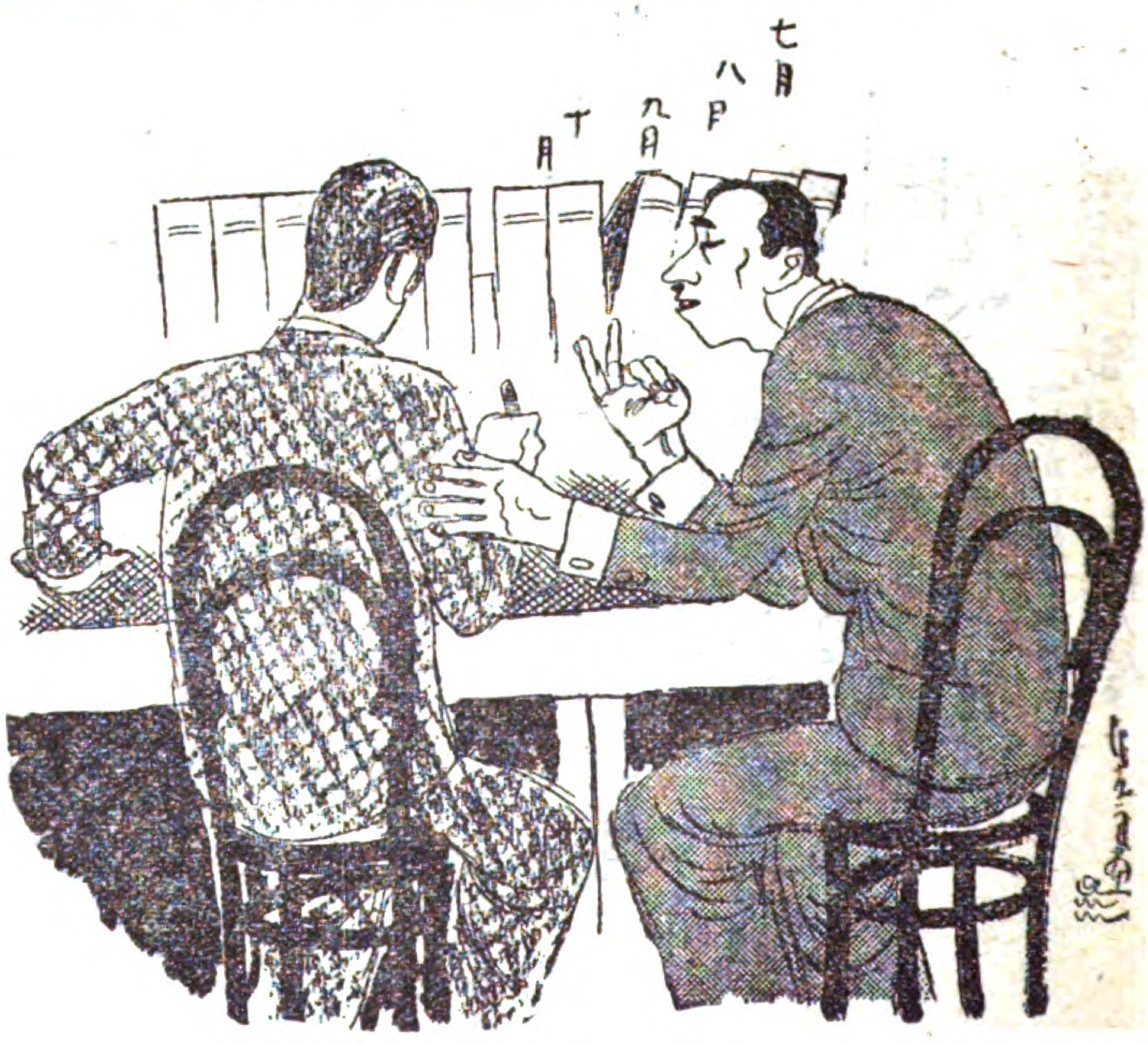
新家庭双六

佐々木邦
挿繪　田中比左良

鬮引き

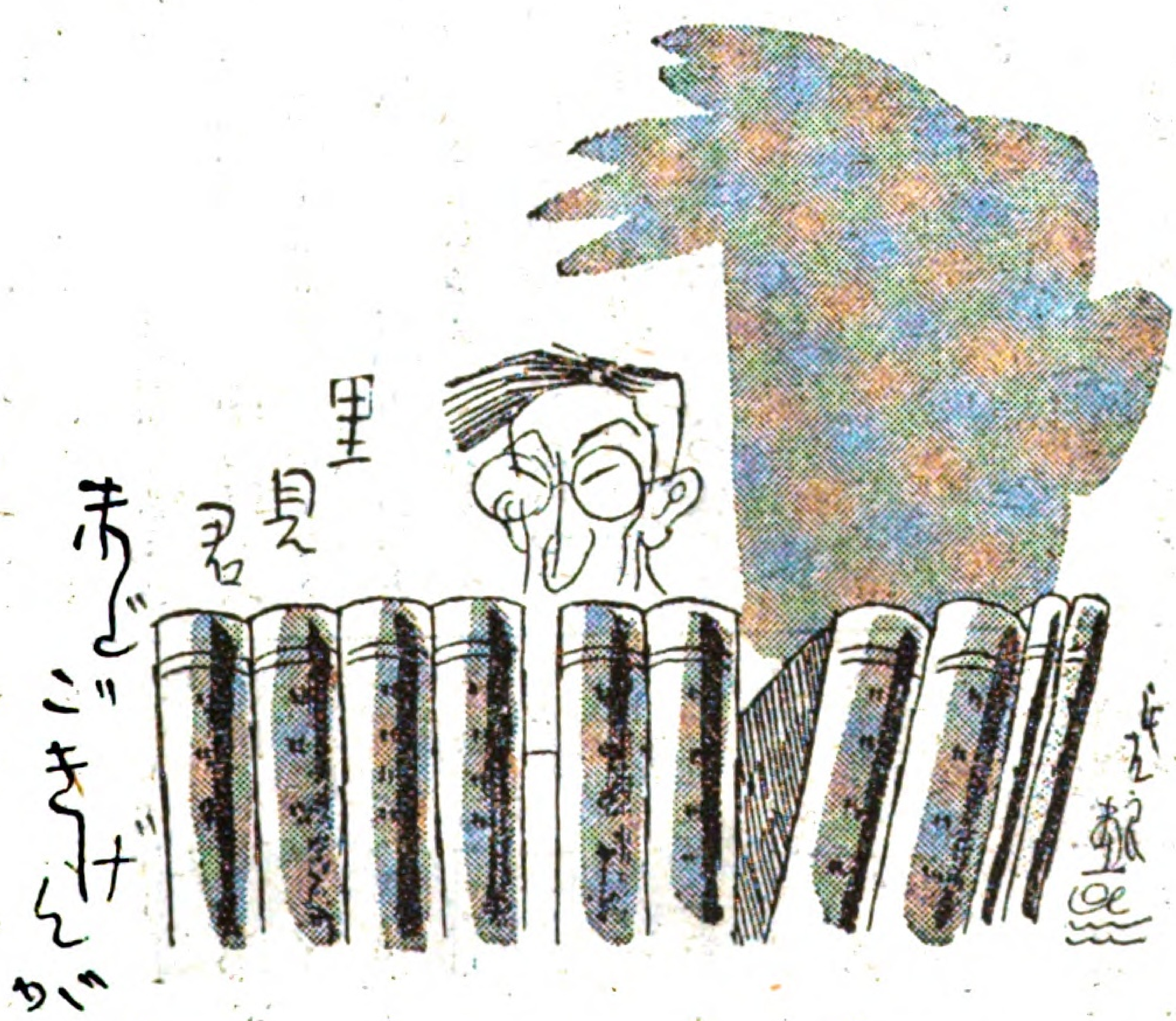
『時に君、この間の話は何うなつたい？』
と坂木君が執務中、一服やりながら向き直つた。
『何が？』
『家の話さ。越すのかい？』
『さあ。』
『やめたのかい？』
『さあ。』
『何方だい？』
『未だ考へ中だよ。』
と里見君は煮え切らない。徳子さんの里の近くに手頃の家が一軒明く。お母さんはそれへ徳子さんを引き寄せたい、徳子さんは無論行きたい。何彼につけて調法だからと、親子の間に手筈が定つてゐる。
『ザックバランに言ふと、僕は餘り賛成しないよ。』
『實は僕も進まないんだけれど。』
『それぢや斷り給へ。』
と忠告係は分別ありげな顔付だつた。
『さあ。』
『言はないこつちやないぜ。』
『何が？』

『それでなくても里の母親つてものは世話を焼きたがるんだからね。僕のとこなんかは三百里彼方から種々のことを放送して女房に智慧をつける。』
『僕だつてその邊は考へてゐるんだけれど。』
『それぢやキッパリ斷るさ。』
『しかし手不足だからね、心細いよ。』
『そこが好いのさ。今の中は。』
『いや、僕は君と違つて、東京に親類がないから、事があると何うしたつて里の世話になる。』
『然う度々盜難もなからう。里の近邊なら泥棒が入らないつて理窟もない。』
『偶發事故は仕方がないさ。しかし考へて見ると、矢つ張り今の中に越して置く方が好いやうな事情もあるんだ。』
『宣傳に乘つちや駄目だよ。』
『いや、僕達の方の都合さ。』
『何だい?』
『未だハッキリしたことは分らないんだけれど。』
『ふうむ。』
『…………』
『出來たんだね?』
『うむ。』



と里見君は頷いた。
『式は七月だつたね。七月八月九月十月十一月と。成程。ハッハ、、。』

『おい、聞えるよ。』
『徴候があるのかい？』
『ある。』
『確かだね？』
『未だ見ては貰はないけれど、食物が納まらない。』
『吐くのかい？』
『うむ。始終ぢやないけれど。』
『悪阻だよ。僕のところの奴もあれで難儀をする。』
『不愉快なものだね。』
『御機嫌が悪いだらう？』
『頗る斜めさ。』
『神經過敏になるんだよ。逆らつちやいけない。』
『僕も然うだらうと思つて、何でも御無理御有理にしてゐる。』
『して見ると、君のところの奥さんもナカ〳〵やるんだね？』
『何故？』



『あれは普段我儘な女ほど激しく來る。』
『然ういふものかね。』
『何でもないことを問題にするだらう？』
『うむ。直ぐに憤る。』
『僕のところは妙に考へ込むで陰氣になる。』
『僕のところも然うだよ。急に陰氣になつた。』
『何うせ御機嫌は悪い。』
『生れるまであれが續くんだらうか？』
『そんなことはない。その中にケロリと治まるよ。』
『兎に角、厄介なものだね。』
『我儘病氣さ。』
『何うも然うらしい。飯の香が嫌ひだなんて言ふんだもの。』
『兎に角、お芽出度う。』
『餘り感服しない。』
『しかし仕方がないさ。』
と坂本君が祝した。何方も現代人だ。
『里見君、未だ御機嫌が直らないのかい？』

と書類棚越しに庄司君が伸び上つた。

『いや、何あに。』

『名譽回復の爲めに改めて又伺はうか?』

『もう結構だよ。』

と里見君は懲りてゐる。

『僕が行くと何うも新家庭は後が好くないやうだ。』

『下らないことをベラ〳〵喋るからさ。』

『新家庭には限らないぜ。尤も僕のところあたりはもう免疫になつてゐるけれども。』

と坂本君も經驗があるらしい。

『別に悪い料簡もないんだがね。』

『その上あられて溜まるものか。』

『一體何ういふところがいけないんだい? 君のところあたりへ行つては特に警戒してゐるぜ。少し危いと思ふやうなことは一應御意向を伺つてから話すぢやないか?』

『あれが悪いよ。「時に例の件だが、よさうかな? 奥さんに濟まないから」なんて言やがる。』

『ハツハ、、。』

『宜いさ。正月早々敵を討つてやる。』

と里見君が興じた。

『僕は寄せつけないよ。』

『押しかけるよ。』

『家庭を持てば君達とはもう絶交さ。』

『それぢや僕達は絶交されに大阪まで行つて式に列するのかい?』

『まあそんなものさ、煎じ詰めたところ。ヘツヘ、、。』

と庄司君は圖太いのを誇りとしてゐる。

執務時間中だから長話は出來ない。庄司君の笑ひ聲を合圖のやうに、そのまゝ默り込むで仕事に移つたが、間もなく、

『里見君。』

と坂本君が囁いた。

『何だい?』

『しかし奥さんの姙娠と引つ越しとは問題が別ぢやないか?』

『妻が心細がるんだよ。イヨ〳〵つて時には人手が

要るからね。』
『病院へ入れ給へ。病院へ。』
『成程。』
『あれが一番簡單だよ。さうして安全だ。間違ない。』
『それにしても晝間は家が明くぜ。』
『差當り人を頼むさ。女中を置いても宜いだらう？』
『迚もやり切れない。二人きりでさへ毎月二十圓から持ち出しだよ。』
と里見君は盗難以來手許こそ樂になつてゐるが、收支は依然相償はない。
『ボーナスまで入れてかい？』
『いや、俸給丈けでさ。』
『それなら當り前だよ。マイナスにはならない。』
『カツ／＼だよ。』
『暮に上るさ。』
『何うだかね。上つたところで女中の給料にも足りない。』
『何うせ當分は持ち出しだよ。お互樣だ。』
『僕のところは出しやうがない。』
『しかしその問題と引つ越しは違ふぜ。』
『それは然うだけれども。』
『頑張り給へ、妙に力瘤を入れるやうだけれど、君は細井さんの關係がある。その上奥さんの里の近くへ引つ張られて行つたんぢや皆の色眼鏡が益々濃くなるばかりだ。』
『僕もそれを考へてゐるのさ。』
『この向うの先生なんかひどいことを言つてゐるよ。』
と坂本君は庄司君の方を顧でしやくつた。親しい間柄丈けに急所が能く分つてゐる。



その夕刻、里見君が歸宅した時、德子さんはイソイソして出迎へた。

『何うだい？』

『今日はお晝から忘れたやうに心持が好いんでございますの。』

『それは何よりだ。』

『母に訊いて見ましたら、誰でも斯うなんですつて、初めの中は。』

『お出になつたのかね？』

『はあ。』

『何かお土産があつたかい？』

『慾張つていらつしやるのね。』

『ハツハヽヽ。』

と笑つたもの〻、里見君は又かと思つた。何うも里のお母さんが來過ぎる。第一回戰以來特別頻繁になつた。軍師について、その都度入れ智恵をして行く證據に、後から必ず註文が出る。

『あなた、見識も大切ですけれど、叔父さんも大切ぢやございませんの？　里見は何故來ないんだらうつて、この間お母さんが上つた時、お訊きになつたさうでございますよ。』

と言つたのもその一つだつた。

『あなた、里の筋向ひの家が明きますのよ。越しませうよ。こゝぢや手不足で心細いわ。萬一重くていけないにしても、私、親兄弟の近くで死にたいわ。』

と脅したのもその一つだつた。德子さんは元來かなり賢い。それにお母さんの分別が加はるから、里見君はいつも受太刀だ。その夕刻も多分に洩れず、

『あなた。』
と直ぐに來た。
『何だい？』
『家のこと何うなさいますの？』
『さあ。』
『早く何とか申上げないと困りますわ。』
『それよりも早く御飯にしておくれ。腹がへつた。』
と里見君は一日働いて來たのである。相應頭を使つてゐる。小面倒な問題は後廻しにして貰ひたかつた。
しかしもう女房になり切つてゐる德子さんはそんなことに頓着ない。食事中、
『あなた。』
『何だい？』



『今日母が参りまして、早くお産婆さんに見て戴く方が宜いつて申しますのよ。』
と又別口を始めた。
『それは俺も言つてゐる。』
と里見君は小々不服だつた。既に再三再四勸めたのに、恥かしいの何のと口實を設けて應じない。然るに里のお母さんのは鶴の一聲だ。今始まつたことのやうに吹聽する。
『ですから、私、お母さんにお頼みしましたわ。』
『何を？』
『お産婆さんを。』
『何處だい？』
『里の直ぐ側よ。』
と德子さんは産婆までお里へ持つて行く。
『それはいけないよ。遠いと間に合はない。』
『でも越すんぢやありませんの？』
『未だ定めてゐない。』

と里見君は里のお母さんの出しやばりが癪に障つた。苟くも里見家へ嫁がせた以上、お婿さんに一言も相談もなく産婆を定めるといふ法はない。

『……』

『その産婆さんが來るのかい？』

『はあ。』

『それはいけないよ。』

『何故でございますか？』

『間に合はないよ。遠いもの。』

『電話をかければ直ぐ自動車で參りますわ。十五分か二十分ぐらゐのものよ。』

と德子さんは申開いた。

『それは然うだらうけれど、近い方が便利だらう。何彼につけて。』

『信用のあるお產婆さんでございますわ。華族樣方へお出入をしますのよ。家でも裕子や季雄の時來て戴いて、私、知つてゐるんですから。』

『俺には俺の考へがある。こゝの家のことは俺の考へに從つて貰はなければ困る。』

『……』

『產婆さんに賴むよりも入院したら何うだい？　あれが一番簡單で安全だ。間違ない。』

と里見君は坂本君の忠告をそのまゝ自分の考へに利用した。

『今から入院するんでございますか？』

『いや、その時さ。』

『その時までこのまゝ見て戴かないんでゞ



さいますか？』
『然うぢやない。見て貰へとはこの間から言つてゐる。』
『ですから丁度宜いぢやございませんか？』
『それはお前の口實だよ。何もそんな遠いところから呼ぶ必要はない。近所に産婆は幾らでもある。』
『好い加減のものなら何處にでもございますよ。あなたなんかに産婆の好い惡いが分るもんですか？』
と徳子さんは突如高飛車に出た。良人たるもの、憤慨せざるを得ない。
『斷りなさい。』
『……』
『いつ來るんだ？　その産婆は。』
『……』
『いつだよ？』



『二三日中ですわ。母と一緒に。』
『斷りなさい。』
『……』
『俺がこの家庭の主人ぢやないか？』
と里見君は家長の權能を振り廻した。これが甚だ拙い。斯う眞向から壓迫しても利くものではない。却つて、
『さあ、主人のアラを探して見ろ。』
と批評の許可を與へたことに當る。後から屹度取つ占められる。尤も未だ素人だから、それに氣がつかない。
『徳子、早く斷つてしまひなさい。』
と再び威張つた。
『私、これから里へ行つて參ります。』
『行かなくても宜い。手紙で斷りなさい。』
『いゝえ、詳しくお話しなければ分りません。』
『夜出て歩いちや困る。』

『構ひませんよ。』

と徳子さんは簞笥の前へ進むだ。

『待ちなさい。』

『宜しいぢやございませんか？　断れと仰有るから断りに行くんですもの。』

『態々出掛けるほどのことぢやない、手紙で間に合ふ話だ。』

『それぢや私、有りのまゝに書きますよ。』

『宜いとも。』

『あなたに叱られたからつて書きますよ。』

『何とでも書きなさい。』

と里見君も騎虎の勢だ。但し出掛けられては困る。

『書きますとも。』

と徳子さんも素人だ。この際是非とも行くと頑張れば、それなり手数が省けるのに、馬鹿正直に机に坐つた。しかしそれから後は至極要領を得てゐた。筆を手にしたまゝ突つ伏して泣き出したのである。

『おい。』

『……』

『おい〳〵、徳子。』

と里見君はもう慌て出した。

『……』

『何うしたんだよ。』

『うつちやつて置いて下さい。』

と徳子さんは泣いてゐるにしては力強く振り払つた。

斯うなると敵はない。水力も大洪水だ。

『徳子や。』



『……』

『断らなくても宜いよ。電話をかければ直ぐに間に合ふんだから、その産婆さんに頼みなさい。』

『……』

『お産のことなんか俺には分らないんだから、萬事お母さんと相談しなさい。』

『はあ。』

『分つたら機嫌を直しておくれ。ね、徳子。』

と里見君は一も二もなかつた。主人だと言つて力むだ手前も具合が悪い。しかしそれ丈けでは事濟みにならないから厄介だ。女といふものは當面の主張を通したばかりで満足しない。勝ちに乗じて、必ず火事泥を働く。



『私……』

と徳子さんは涙を納めてから未だ言分があつた。

『何だい？　徳子。うむ？』

『私、今からこんな風ぢやこれから先が案じられて悲しくなりますわ。』

『何うして？』

『あなたは御自分本位で、私つてものに些つとも同情して下さらないんですもの。』

『そんなことはないよ。』

『いゝえ、最初申上げた時、あなたは何と仰有いました？』

『いつのことだい？』

『少し變だつて申上げた時よ。』

『……』

『あなたはこんなに早く親父になるのかなあつて、失望のやうに仰有いましたわ。』

『あれは冗談だよ。』

『いゝえ、本氣でございますわ。一年や二年は二人きりの方が呑氣で宜いつてその前から仰有つてゐたぢやありませんか？』

『それは言はないこともないが、是非つて意味ぢやないよ。』と里見君は被告の地位に立つた。日頃へラ〳〵喋つてゐる丈けに分が悪い。當の徳子さんも子供が出來れば樂が出來ないぐらゐは考へてゐたが、決して發表しなかつたから、斯ういふ場合、大きな口がきける。多少共鳴してゐたことを武器に使ふのだから有力だ。もう理論の問題でない。生理的變化は當然思想の上へ及ぶ。

『いゝえ、子供は嫌ひだとも仰有いました。』

『それは餘所の子供の話だよ。自分の子が好きか嫌ひか、そんなことは未だ分らない。』

『ですから、あなたは私が悪阻で苦むでゐても、些つとも同情して下さらないんですわ。』



『そんなことはないよ。』

『ございますよ。直ぐに厭なお顔をなさるぢやありませんか?』

『これでも隨分努めてゐる積だがね。』

『可哀さうだとは思つて下さらないで、厄介だと思つていらつしやるんですわ。』

『神經過敏になつてゐるんだね。』

『病院へ入れば簡單だつて仰有つたのもその意味ですわ。簡單は面倒の反對ぢやありませんか? 面倒を御覧になるのがお厭だからでございますわ。』

『そんなことがあるものか。病院なら充分手が屆くだらうと思つて、大事を取つて言つたことだ。』

『母だつて入院のことは申してゐま

す。里のお産婆さんは兄さんが博士で産科を開業してゐますから、いつでも入れて戴けますわ。』

『産婆の方はもう解決がついたんだから宜いぢやないか？』

『あなたは里の母が煩いんでございませう？』

『そんなことはないよ。』

『いゝえ、母がお嫌ひなんでございますよ。餘計な世話を焼くと思つていらつしやるんですわ。』

『そんなことはないよ。』

と里見君は一々急所を突かれるから、手際の好い受け答へが出來ない。極力單調な否定を繰り返すばかりだつた。

これが第二回だつた。斯うなると、第三回第四回が必ずある。しかしその都度双方の意思が疎通する。竟には帶一本買ふにも一喧嘩しないと話が纏まらないやうなことになる。それでも夫婦仲が悪いのでない。單に時折意思の交換をするのだ。默つてゐては何を考へてゐるのか分らない。十中七八の家庭は夫婦喧嘩に一種の効用を勤めさせてゐる。



『あすこの家では能く喧嘩をする。』

といふのは皮相の觀察だ。實は大きな聲で熱烈に相談事をしてゐるのである。それは兎に角、里見君は讓歩序に、徳子さんの里の筋向ひへ引つ越すことに承諾して、

『おれは主人だ。』

と高壓することの不得策を覺つた。

それから數日後、夫婦は叔父さんの家へ招かれた。會社の廊下で行き合つた時、

『何うだね？　明日の晩あたり徳子をつれて話しに來ないか？』

と細井さんが思ひついたやうに言つたのである。

『はあ。伺ひます。』

と里見君は重役に對する禮を執つた。

しかし私宅へ行けば、徳子さんを通しての叔父甥だ。

『何うだね？　未だ喧嘩はしないかね？　ハッハヽヽ。』

と細井さんも寛ろいで冗談口をきく。

『まさかね。オホヽヽヽ。』

と叔母さんも席に列して打ち興じる。

『六輔は斯う見えて、ナカ〳〵我儘でございますのよ。』

と徳子さんが訴へた。但しこれは情愛の移つてゐるところを見せるつもりだつた。

『そんなことはあるまいよ。』

と細井さんは態とらしく否定した。

『いゝえ。』

『寧ろアベコベだらう？』

『あらまあ！』

『ねえ、里見君。』

『はあ。』と里見君は四角張つてゐる。

『あら！』

『オホヽヽヽ。』

『ハッハヽヽ。』と叔父叔母とも上機嫌だ。

里見君は遠慮がある。重役の前へ出てゐるといふ心持が抜けない。徳子さんが主としておしやべりをした。

『叔母さん、私達、今のところ越しますのよ。』

『まあ。何處へ？』

『四谷の家の筋向ひよ、オホヽ。』

『まだお母さんのお乳が飲みたいのね？』

『でも手不足で泥棒に入られたりするんですもの。』

『丁度好いところがありましたのね。』
『えゝ。』
『いつ？』
『明き次第。來月早々でございませう。』
『それぢや未だ入つてゐますのね。』
『えゝ。小ぢんまりした好い家よ。』
『その引越しは何うだらうかね？』
と細井さんが唇から葉卷を離した。
『……』
『里見君。』
『はあ。』
『見合せ給へ。』
『はあ？』
『近いのは好し惡しだ。』
『そんなこともありますまいけれど。』
『まあ〱、何處に限らず、引つ越しは少時見合せ給へ。』
『はあ。』
と里見君は上役から命令を受けた時の態度だつた。
『叔父さん、何故でございますの？』
と徳子さんが訊いた。
『何故つてこともないが。』

『いけませんの？』
『いけない。』
『家へ近いと私が我儘をするからでございませうか？』
『然うだ。』
『あら！ ひどいわ。』
『ハッハヽヽヽ。』
と細井さんは移轉問題を一笑に附し去つた。
『徳子さんも六輔さんもこれからね。』
と叔母さんが二人を見守つた。
『何がでございますの？』と徳子さんは無論未だ目立ちはしないが、羽織で腹部を匿すやうにした。
『何でもよ。』
『實際これからだ。』と細井さんも何か感慨があるやうだつた。
『前途遼遠です。』と里見君は一寸悲鳴を洩らした。
『俺はこの間から考へてゐるが、結婚つてものは鬮引きだね。男は兎に角、女は良人委せだから、鬮を引いたやうなものさ。』
『はあ。』
『婦人に取つては結婚は鬮引きなりつて警句は何うだらう？』
『結構でございませう。』
『實際鬮引きだ。社長を見給へ。俺は若い時からの交際で能く知つてゐるが、昔は決してあんな豪い人ぢやなかつた。誰もあ

の人が今日あらうとは思はなかつたらう。

『しかし立志傳中の人物でせう？』

『それは後から見ての話さ。社長ぐらゐ勉強して一向梲の上らなかつた連中が幾らもある。運だよ、一つは。』

『はあ。』

『俺は社長の結婚式に出席したが、簡單なものだつた。「いろは」といふ牛肉屋の二階でやつたんだからね。この頃社員のやる披露式はあれに較べると、まるで華族樣だ。』

『恐れ入ります。』

『當てつけぢやないよ。當時社長は平社員で月給二十八圓さ。俺が十九圓か二十圓だつたらう？ 一圓宛上つたんだからね。』

『はゝあ。』

『社長夫人は社長が……いや、當時は社長ぢやない。單に一介の丸山君だ。新婦は丸山君が將來社長になつて數百萬の產を爲すとは決して思はなかつたらう。平社員へ嫁ぐ積りで貰はれて來たんだ。しかしそれが豪い鬮だつたんだからね。』

『はあ。』

『引き當てたのさ。』

『はあ。』

『引いた鬮が二十年三十年後に當るんだから、氣の長い話さ。中には鬮が途中で死んでしまふこともある。』

『御道理です。』

『俺も今日あると言ふと少し高慢のやうで氣が映すが、打ち明けた話、自分でもこれまでになるとは思はなかつた。此奴も苦勞をしたものさ。最初は貧乏の仕續けで、飛んでもない鬮を引いたと思つてゐたに相違ない。なあ、お勝。』

『然うでございますとも。』と叔母さんも承認した。

『しかし二十何年後に開けて見たら三等賞つて次第さ。先づ先づ引き當ての方だらう。』

『後から一等賞になるかも知れません。』と里見君は敬意を表した。事實、細井さんは長生き次第で社長になれる立場だ。

『ハッハヽヽ。』と自分でも否定しない。

『僕達は等外でせう。』

『そこさ、君達は皆鬮だ。二十年後女房が開けて見ると、課長になつてゐるのもあれば、重役になつてゐるのもある。等外で永久の平社員もあれば、全くの空つ鬮もある。運だよ、一つは。』

『はあ。』

『婦人に取つては結婚は鬮引きにして、その當り外れは二十年後に分るものなり。期して待つべし。何うだね？ この警句は。』

『結構です。寸鐵人を殺します。』と里見君は重役の創作だから實は尺鐵でも批評の餘地がなかつた。（つゞく）



落語 寄合酒

三遊亭圓生
挿繪 谷脇素文

一席伺ひます。よく『酒と女は敵なり。どうぞ敵に巡りあひたい』なんと云ふことを言ひます。尤もどちらかと云ふと、酒と云ふものは多量に飲つては毒なものですが、少し飲つてをりますれば又益なもので、憂ひをはらふ玉帚とかいうて、少し氣の欝いだ時などに一杯召上りますと、其苦を忘れる。苦を忘れる位な程度にあがつてをれば、百藥の長にもなりませうが、餘り飲り過ぎると、何かにつけて宜しくないやうで。醉つ拂ひを通り越して、宛然性の惡い蟒蛇見たやうに、ペロ〱舌を出しては上唇と下唇を舐めながら、目をドロンと据ゑて、往來を摺れ違つた人が欠伸でもしようものなら『ヤイコン畜生、手前俺を吞まうてんだらう。さア吞め』誰が吞む奴があるものですか。『皆集つてゐるな。イヨーすつかり町内揃つたな。ウム、こんなに顔が揃うてえのは滅多にねえことだ。どうだい、一つ久振りだ、顔が揃つた所で、まア大したことも出來ねえが、持ち寄りで一杯飲らうぢやアねえか』△『結構だな。酒だらう』○『さうよ。飲むかい』△『飲むとも』○『錢はあるかい』△『ないとも』○『淡白してゐやがる。其方はどうだい』＋『どうでもいゝ』○『どうでもいゝぢやいけねえ。有るのか無えのか、どつちかに片付けろ』＋『これぢやア無い方にしとけ』○『隣りはどうだい』甲『お生憎様』○『お生憎様とは吐かしやがつたな。お生憎様なんてえのは手前達の言葉ぢやアねえ。始終持つてゐる人が偶にやるからお生憎様だ。お前なんぞは年百年中お生憎様ぢやねえか』甲『もう十五年續いてらア』○『長えな。其方はどうだい』丙『うるさいッ』○『うるさいと云ふ言ひ草があるかい。聞いてゐるんぢやアねえか。貴方は』丁『さう恥をかゝせるない。錢がある位なら、お前ン所へ來やしねえ』○『喧嘩を吹つ掛けてゐやがる。お隣りは』戊『紙幣か銀貨か』○『大きく出たな。紙幣でも銀貨でも、どつちでもいゝんだ』戊『ぢやアどつちもねえ』○『どつちもねえのに、紙幣か銀貨かと云ふ奴があるかい』戊『けれども餘り皆無え〱いつて景氣が惡いから、ちよつと聞いたまでさ。お前の方で紙幣がいると云へば、ドッコイ銀貨ばかり銀貨がいると云へば、紙幣ばかりと言ひぬけようと思つたんだが、どつちでもいゝと云ふから仕方がねえ。どつちもねえ』○『手數を掛けるなよ。オイ、其方

の哥兄さん、お前はどうだい』已『皆無いのかい』○『ないんだよ』已『情ない奴ばかりだな。みつともねえや。恥を知れ恥を。江戸ツ子の職人ぢやアねえか。こつちとらア親の遺言だ。男てえものは敷居を跨げば八人の敵がある』○『へエ、七人と云ふことは聞いたことがあるが、八人と云ふのは一人多いぢやねえか』已『多いのは融通がつく』○『何を言つてやがる。さう云ふのなら幾らかあるんだらう』已『あるんだらうと來やがつたな。錢のために恥をかくなと言はれてゐる哥兄だ』○『偉いな』已『肌身はなさず、ちやんと持つてゐるんだ。パツパと使つてくんねえ。剰すな。皆使つちまへ』○『威勢がいゝな。偉い。感心だ。江戸ツ子だね。さ出しな』已『ホラ、出すぜ』○『なアんだ。たつた五厘か。五厘でどうするんだい。剰すな、パツパと使へたつて、五厘で剰すもパツパもあるかい。第一、五厘ばかりで七人の敵が討てるか』已『敵を討つたお剰だ』○『何を言つてやがるんだ。そんなものは邪魔だい』已『邪魔ならしまつとく』○『アレしまつてしまひやがつた。吝つたれな奴だな。仕方がねえ。何奴も此奴も金ツ氣なしで來やアがつて』△『拂えをした跡見たいだ』○『餘計なことを言ふな。とても酒は飲めねえ』△『水も飲めねえ』○『情ないことを



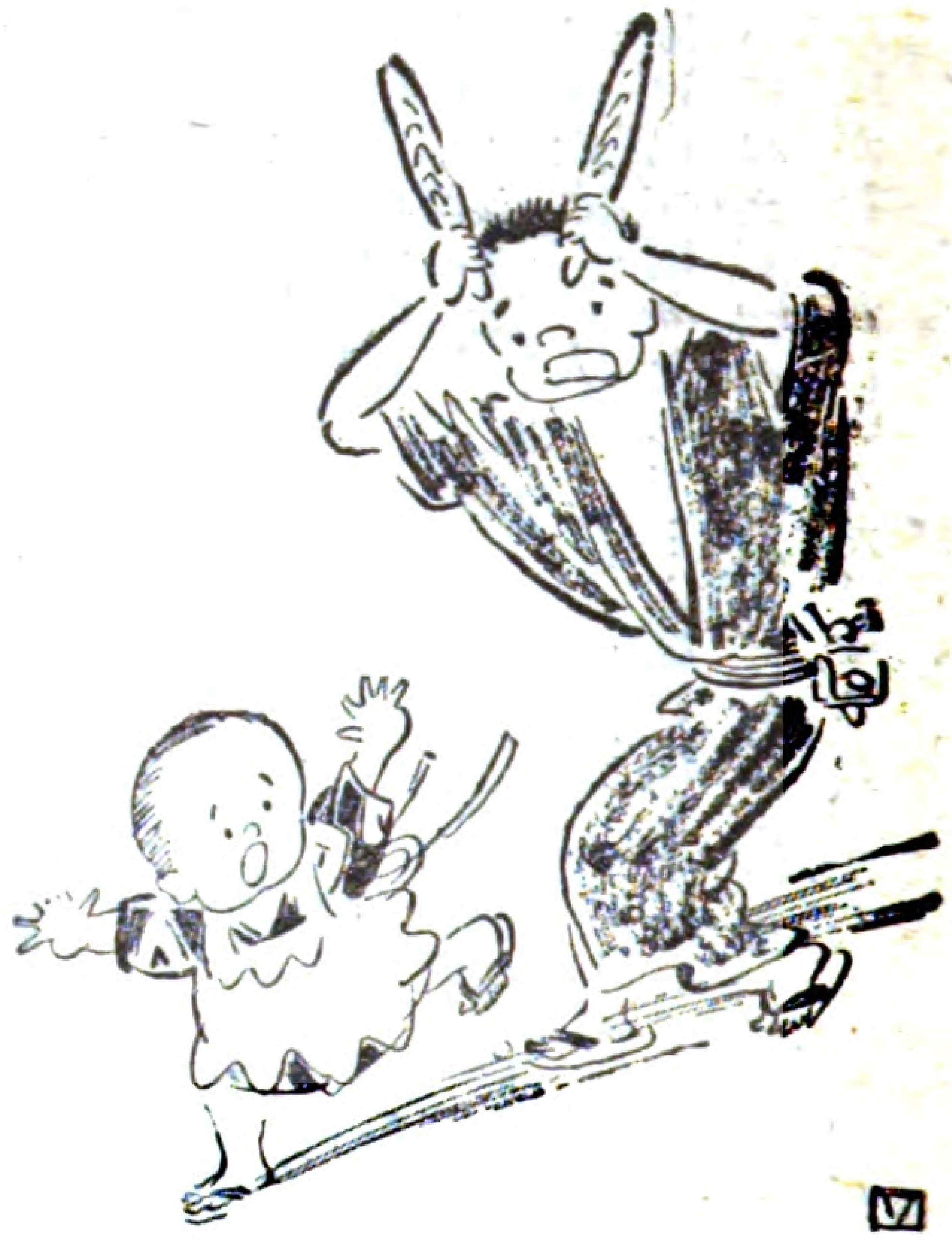
言ふない。誰か酒屋に信用のある奴がゐるか』□『よせやい。信用がある位なら、金もあるんだ。金がねえから、信用もねえものと見てもれえてえ』○『弱つたな。ぢやア仕方がねえ。酒はどうにか俺が算段しよう』△『さうして呉んねえ。頼まア』○『肴くらゐはどうかして來いよ』△『肴も序に頼まア』○『俺にばかりさう押ツ附けるない。何とかして來いよ』△『ぢやア行つて見よう……』△『オイ、持つて來たぜ』○『オ、なかなか素晴しい鯛を持つて來やがつたな。安くねえな、その鯛は』△『安いとも』○『安いかい』△『安いさ。犬が啣へて來たんだ』○『何だ。犬のを横取りしやがつたのか。酷いことをしやアがつたな、まア何でもいい。疵もついてゐねえやうだ』□『うるめの干物を五枚持つて來た』○『又犬か』□『犬ぢやアねえ。店から公然と持つて來たんだい』○『どうしてだい』□『魚屋の前を通るとね、親父が坐睡をしてゐやがる。これ幸ひと、太い奴を五枚失敬しちやつた』○『ウム』□『そして後の

方へ隠して置いて、そのまゝ逃げて來ようかと思つたけれども、それぢや卑怯さ。事は公にしてえからな。坐睡をしてゐる親爺を起しちやつた』○『なる程』□『こゝにある干物は幾らだいと、俺が聞いた。三十五錢でございますと云ひやアがる。高いよ。それが三十五錢は高えや。俺ア此先で以つて、この干物を三十錢で買つて來たんだ。どうだい、同じぢやアねえか。お前ン所は高えや。負けろよ。さうすりや好きだから買ふがてえと、負かりませんと來た。さうか、又來ようと、そいつを持つて、ズッと歸つて來た』○『盗んだのも同じぢやアねえか』□『早くいへばね』○『おそく云つたつて同じだ』甲『オイ、鰹節を二本持つて來た』○『いろ〳〵なものを持つて來やがるな。どうしたい、鰹節は』甲『鰹節屋



の前でね、小さい子供が遊んでゐたから、坊ちやん一寸お出でと云つて、傍の方へ呼んだな』○『ウム』甲『何だ小父さんと傍へ來やがつたから、どうだい、小父さんと二人で鬼ごつこをして遊ばうかと云ふと、ア、遊ばうと云ふんだ。吞氣な子供よな』○『手前の方がよつぽど吞氣だ』甲『ぢやア小父さんが鬼になるからな。鬼には角がなくちやいけない。角にするんだから鰹節の大きいやつを二本持つてお出でよと云ふと、あいよと云つて二本持つて來たから、その鰹節をお額の所へ押ッつけてさ、ソラ鬼が行くぞ行くぞと云つて追ッ駈けると、怖い怖いと云つて逃げちまつた』○『酷いことをしやがるな。今更返しに行く譯にもいかねえ。まアいゝや。これで一杯飲まう』△『飲まうたつて、飲む酒がねえぢやアねえか』○『酒は俺が工面する』△『工面すると云つて、どうするんだ』○『實はな、半公の奴が今度横丁へ世帶を持つたんだ』△『ウム』○『その時に菰冠が二本着いてやがつた。派手ッ氣だからな』△『成程』○『それをちやんと睨んであるんだ』△『ア、さうか。ぢやア其奴を飲ましてくれてんだな』○『馬鹿なことを言ふない。此奴氣の利かねえことを言つてやがる。江戸ッ子の職人ぢやアねえか。飲ましてくれなんと云ふない。向ふから飲んで下さいと云はせるんだ』△『へエ、どうするんだ』○『糟はねえからな、お達前は半公の家の表へ隠れてゐるんだ。俺が一人でこの魚を持つて殘らずでよ。家へはいるんだ』△『成程』○『哥兄。今

日來たのは外でもねえが、お前ン所の座敷を貸して貰ひたいと思つて、町内の若え者が俺ン所へ揃つてゐるんだ。一ツお



四

前はん所で飲まして貰ひたいと、さう云つてるんだが、どうだらう。今日一日座敷を貸してくれる譯にいかねえかと云つて、聞きに行くんだ』△『フム』○『さうすると、半公の奴はあゝいふ氣のいゝ奴だから、どうせ空いてる座敷だ、お安い御用と來らア』△『成程』○『そこで此の魚そつくり出して――之を肴に飲まして貰ひたい。決して散財は掛けさせないから。今若い者に言ひつけてあるんだから、酒はこゝへ樽で持つて來るから……てなことを吹ツ掛けておく

んだ』△『大丈夫かい、そんな大きなことを言つて』○『大丈夫さ。ぢやア俺ン所でやつてくれてえから、さうしたら俺が隱れてゐるお前達に怒鳴るんだ』△『フム』○『座敷が借りられることになつたから、皆樽を持つてへえつてくれ。かういつて怒鳴るからな。さうしたら誰でもいゝ、一人がいけねえ〱と、かう云ふんだ。何がいけねえんだと俺が聞き咎める。咎めたらかう云ふんだ。實は樽で持つて來ようと思つたけれども、德利で各自一升づつさげて來た方が景氣がいゝぢやアねえかと云ふんで、德利で持つて來ることにしたんだが、途中まで來るてえと、面倒臭えから坊主持ちにしようてん

で、來かゝつた途中、馬が不意に暴れだして、こいつが德利に衝ッ突かつたんだ。で、酒を皆こぼしちやつたものだから、もう一升取つて來ようかどうしようかと聞きに來たんだ……と、かう云ふんだ』△『成程』〇『そこで俺が怒鳴る。巫山戯るな。そんなヿを聞きに來る奴があるか。哥兄の耳にそんなことを入れちやアいけねえぢアねえか。默つて取つてくるのが當り前だ。早く取つて來い。かう云ふと、オイ來たと、一人が駈け出す振りをして……駈け出しちやアいけねえぜ』△『むつかしいね』〇『その呼吸がむつかしいんだ。すると、牛公の奴だから、まア〳〵待ちねえ。お前達に散財をさしては氣の毒だ。肴はお前達の方から持つて來たから、酒は俺の所の酒を飲んでくれ。かう云ふよ』△『どうだか分らねえ』〇『言ふよ、彼奴のことだから。ぢやア入つて御馳走にならうと、そこで以つてワーッと入つて、さうしてガブ〳〵飲んで引揚げてしまふんだ。どうだ。うめえだらう』△『こりや驚いた。泥棒どころの騷ぎぢやアねえ。まるで強盗だ。さううまくいくかい』〇『いくよ。俺の腕にある。委してくれ』



△『ぢやア何分賴むぜ』〇『よし。では後から來な。表へ隱れてゐなくちやいけねえぜ、……え、今日は。兄哥、ゐるかい』牛『誰だ。オ、まア入んねえな。此の頃ちつとも顏を見せねえな』〇『御無沙汰しやした』牛『無沙汰はお互えだ。まア入れよ』〇『えゝ、有難うございます。すつかり片付きましたね』牛『いや、どうもまだゴタ〳〵してしやうがねえ』〇『いゝ家だね。一寸手傳ひに來なけりやならなかつたんだが、何しろ貧乏暇なしで、どうも濟みませんでした。成程、廣い良い家だ……ア、哥兄、今日は少しお前はんに賴みがあつて來たんだ』牛『何だ』〇『實は町内の若え奴が俺ン所へ今大勢揃つてゐるんだが』牛『ホホー何か間違えでも起つたか』〇『いや、そんな事ぢやねえ。久振りに顏が揃つた所で、一ツ景氣直しに持寄りで、まア大したことも出來ねえが、一杯飲らうぢやアねえかと云ふ相談がまとまつたんだ』牛『フム〳〵』〇『同じ飲むなら、心持のいゝ所で飲みたい。哥兄の家は今度廣く

て綺麗だし、それに姐さんもゐるから、三味線でも彈いて貰つて、ワツと飮んで一つ景氣よく騷がうぢやアねえか。かういつてやがるんでね。迷惑だらうけれども、一ツ座敷を今日一日貸して貰ひてえと思つてな。賴みに來たんだよ』半『さうか。それは結構だ。俺も仲間にへえる。まア盛んに俺ン所でやつてくんねえ』○『どうか一つお賴み申します。往つたり來たりするのも面倒臭えから、肴を持つて來やした』半『いゝ鯛だな。安くねえな』○『なアに、幾らもしやしねえ。干物を五枚ばかりと、鰹節を二本』半『變な取合せだな。鯛に干物に鰹節か』○『持寄りなものだから、色々になつちやつた。今、若え奴が樽を持つて來ますから』半『大變な景氣だな。天氣が變りやアしねえか』○『ハヽヽいや、偶にやアその位なことをやりますよ』半『何しろ、今日は一ツ飮めるてえ趣向だな』○『へエ、どうかお賴み申します。はて、もう來さうなもんだが……オイ、來たか。來やがつた。オヽ座敷は借りられることに決まつたからな。構はねえから、樽を持つて此方へへえつてくれ』△『やつてやがらア。圖々しい奴だな。あん畜生、よくあんなことが言へるものだな。俺には賴まれても言へねえ』○『オイ、どうした〳〵。樽がへえらなけりやア格子を外しやア樽が樂にへえらア』△『何を言つてやがる。樽なんぞありやアしねえや。なに、今言ふよ。だが、さううまくトン〳〵いかないよ。弱つたな……オ、駄目だ〳〵』○『何が駄目だい』△『何が駄目だつて……もう止すよ。體裁が惡いから』□『しつかりしろい』○『どうしたい』△『思ひきつてやらうか』○『何を言つてやがるんだ』△『どうも困るな。ぢやア やるよ……あのね、樽で持つて來ようと思つたん

だよ』○『ウム』△『さうしたところが、各自一升づつ徳利をさげて行つた方が景氣がい〻ぢやアねえかてんでな。徳利を持つて來ることにしちやつたんだよ』○『誰がそんなことを言ひやがつたんだい』△『誰だつて……源兵衛さんが』『源』よせよ、俺の名前を出すなア』△『途中まで來るてえと、面倒臭えからな、坊主持ちにしようぢやアねえかと云ふんで、坊主持ちにする途端に馬が暴れやがつて、徳利を落ことして壞しちやつた。酒を皆こぼしちやつたんだ。もう一遍取つて來ようかどうしようかと云ふので、實は哥兄に聞きに來たんだ』○『馬鹿野郎、そんなことを聞きに來る奴があるかい。間拔け奴、哥兄にそんなことが知れちやア困るぢやアねえか。默つて取つて來い』△『オイ來た……だが、こりやアいやな役だな。駈け出す譯にいかねえ。厄介だな』半『オイ〳〵、い〻よい〻よ、行かなくても。待ちな〳〵。怒つたつてしやうがねえや。まアい〻や。家の酒を飲んで行きねえ』○『だつてそりやー、哥兄、氣の毒だ』半『まアい〻や。この通り、菰冠が二本着いてるんだ。氣よく飲んでくれ。こんな時に飲まなくちや、飲む時がねえ。飲つてくんねえ』○『どうも濟みませんね。ぢやアみんな、哥兄があ〻云ふのだから、入つて……』△『もと〳〵そのつもりだ』□『默つてろ。餘計なことを言ふない……今日は』半『よう此方へへえんな』△『どうも御無沙汰致しました』甲『今日は、どうも御無沙汰……』乙『え〻今日は』丙『ええ今日は』丁『え〻今日は』戊『え〻哥兄、今日は』半『恐しい入つて來やがつたな。町内中殘らず入つて來やがつた。一々挨拶は面倒臭えや。ズン〳〵此方へ入んな、障子を外して緣側の方へ食み出す？　恐ろしい大勢だな。まア大勢の方がい〻けれども、ちつと多過ぎるな。馬が暴れたさうだな。危かつたな。何處で馬が暴れたい』△『え〻、ヒン〳〵と云ひやがつて』半『當り前よ。馬はヒンヒン云ふよ。怪我はなかつたか』△『怪我はねえんで』半『怪我がなかつたらいいや。何處で暴れたい』△『え〻あの先の所なんで、へえ。その、あの米屋の前で……』半『それは危なかつたな。徳利を壞しちやつたのか』△『こな〳〵になつちやつたんだ』半『それはよく怪我をしなかつた。徳利はそのまんまか。打つちやらかして？　そいつは危ねえ。往來を歩く者が足でも怪我をするといけねえ。お前氣の毒だが、俺ン所の庭へ、もぐらもちが穴をあけて困つてるんだ、その徳利の破片を持つて來て埋めてくれ。誰でもい〻、一寸行つてくんねえ』△『大丈夫だよ、そんな事をしなくても。足で以つて溝の中へ蹴込んで來たから』半『アアさうか。それはよく氣がついた。まア今日は一つ飲つてくんねえ』△『どうも濟みません』半『オイ〳〵、出て來なよ。町内の若え者がな、家で一杯飲りてえてんでな、みんな出て來たんだ。こんなに大勢來るてえのは珍らしいや。何か支度をしねえた』女『アラ皆さん、いら

つしやい。近頃とんとお見えにならないから、どうしたのかと噂してゐたんですよ。今日はうんと飲んで下さいな、御馳走しますから……』○『どうも姐さん、濟みませんね。忙しい所を遠慮なしに來て。みんなこれへ來て禮を言ひなよ。よく出來たお內儀さんだな。こんなに大勢押掛けた日にやア、大概うちの內儀さんはいやアな顏をするぜ。それをお前いやな顏を一つ見せねえで、うんと飲んで下さいよ、御馳走しようからと、かう云はれて見ねえな。心持ちがいゝぢやねえか。又來る氣にもならアね。お前のお內儀さんとは違はア』△『餘計なことを言ふな』○『何しろ、何だ、姐さんばかりに手數を掛けちやア濟まねえ。皆で手分してやらうぢやアねえか。丁度いゝ。お前庖丁が持てるんだな。そいつは幸だ。お前、一寸庖丁を持つてくんねえ。今の鯛を三枚におろしねえ。片身を刺身にしてな、片身を鹽燒にして、中落ちをぶツ切りにして置きな。この家に味噌があるからお汁を拵へようぢやアねえか。お汁の中に中落ちを放り込むんだ。萬事頼むぜ、……手前、この家に數の子があるてえから、數の子を鹽でもんで鰹節をかけねえ。葱は細かく刻んでな。お汁の中に入れるやうにするんだ。いゝか。摘み喰ひするな、汚ねえから。それからお前、其邊が大變散らかつてるな。店へ行つて箒を借りて來て、其邊を綺麗にしてくんねえ。それからお前はな、便所を掃除してくれ。さつぱりしていゝから』×『何だ、汚ねえ用を言ひつけるな。お前は何をするんだ』○『俺はこゝの指圖をするんだ』×『指圖は樂でいい』○『樂でねえなか〱……』×『ぢやア俺が代らうか』○『馬鹿いひやアがれ。手前達の指圖で動く奴があるかい』×『だけれども便所の掃除は酷いや』○『酷いといふ言ひ草があるかい。禮を言ふのが當り前ぢやアねえか』×『何が當り前だい』○『だつてさうぢやねえか。これで手前の顏を立てゝゐるつもりだ』×『どうして』○『お前は清潔會社に出て、毎日バケツと箒を持つて方々の便所を掃

除して歩くのが、お前の稼業だらう』×『まアさうよ』○『まアつてことがあるか。それを他の者に無斷で以つて言ひつけちまつちやア、お前の顔が潰れるぢやねえか。お前の顔を立てゝ、ちやんと渡りをつけて……』×『何を言つてやがるんだ。だから俺はあの會社へ行くのは嫌やだと云つたんだ。それを遊んでゐるのも詰らねえ、行け行けてんで行つたんだ。今日便所の掃除をしようとは思はなかつた』○『オイオイ、みんな出來たら持つて來てくれ。數の子はどうした、數の子は』□『まだ煮えねえ』○『おや、數の子を煮てしまひやがつた。煮て食ふんぢやねえ』□『刺身かい』○『何を言つてやがるんだい。數の子の刺身があるかい。どうしたい數の子を』□『今細かく刻んで、お汁の中に投り込んだばかりだ。まだ生煮えだ』



○『しやうがねえな。數の子をお汁の實にしやがつて。麩はどうした』□『鹽でもんで鰹節をかけた』○『反對だい。それで兩方滅茶々々にしやがつた。兄哥、役に立つ奴は一匹もゐねえ』半『まア仕方がねえ。素人だ。どうせ碌なことの出來つこはねえ。今、誂へ物が來るからいゝよ』○『どうも濟みません。お燗番は誰だい。アッぐづ寅か。惡い奴がお燗番してゐやがる。オイお燗番、しつかりしやがれ』寅『なに、こん畜生、何がお燗番だ。生意氣なことを言ふない』○『おや、お燗番が醉つ拂つてゐやがらア。手前酒を飲みやがつたな』寅『飲みやしねえ』○『醉つ拂つてゐやがるぢやねえか』寅『加減を見い〳〵こんなになつちやつた』○『しやうがねえ。よつぽど加減を見やがつたな』寅『たつた一杯』○『嘘をつけ。一杯でそんなになるかい』寅『へゝゝ、バケツだい』○『何をしやがるんだい。下等な眞似をするない。バケツで加減を見る奴があるか。其方へ引込んでろ。ベロベロになつてゐやがる。仕方がねえ、お前代つてお燗番をしろ』半『まアいゝや。飲める奴にや飲ましておけばいゝ。何か出來て來たか。ズンズン持つて來な。なに田樂?しやうのねえものが先に出來て來やがつたな。實は豆腐屋の開業式があつてね。つい先刻誂へて遣いたんだが。まア旨くねえだらうが、うんと食つてくんねえ』○『どうも濟みませんね』△『有難えな、田樂と來た日にや目

がねえや』〇『何を言つてやがるんだ。食物だと一番に手を出しやがる。待てよ。おでんと云ふものは、運がよくなるやうにと云ふので食ふんださうだ。たゞ食つちやつちや面白くねえから、何でも構はねえ、言ふことの中にんが一つ附いたら一本、んが二つ附いたら二本、かういふ事にしようぢやアねえか』△『んを言ひさへすれば、いゝんだらう』〇『さうよ。んを言はなくちや食へねえんだ』△『なか〳〵むづかしいな』〇『難かしくはねえ。何でもいゝ、やつてみろ』△『ウーン』〇『えゝ？』△『ウーン』〇『大層氣張つたな。何のことだい』△『坂の中途で車の後押しをして力のへえつた所』〇『巫山戯るな。しやうがねえ、一本やらア』△『有難え』□『だいこん』〇『一本、よし來た』×『にんじん』〇『二本』甲『みかん、きんかん、酒のかん、四本吳れ』〇『この野郎、呆れたな』乙『本山坊さんかんばんかん』〇『何のことだい』乙『本山の坊さんが、看板に頭を打つ突けたら、カンと音がした。これ即ち本山坊さんかんばんかん』〇『何を言つてやがる』乙『さア七本だよ』〇『ソラ七本』丙『えゝ俺は、こんじんかんしんさんさんらんしんと云ふんだ。八本吳れ』〇『何だ』丙『金神てえ神樣は感心な神樣だ。不法をなすと散々亂心する。これこんじんかんしんさんざんらんしんと云ふ。二度やつたら十六本』〇『馬鹿にするない』丁『オ、算盤を一寸持つてくれ』〇『なに算盤』丁『ア勘定を間違へられるといけねえ。いゝか、カチンで一つ、ドンで一つ、ドンドンで二つ』〇『オイ串戲するねえ。これなら何ぼだつて殖える。みんな此奴に喰はれてしまはア、いゝ加減にしろ』戊『ブスッと』〇『何だいブスッと云ふのは』戊『藝の細かい所だ。紐がぶら下つてゐやがる。紐に矢が中つて、ブスッだ。すると風鈴がリン〳〵リン〳〵〳〵〳〵……五十八本』〇『馬鹿ア言ひやがるな。お前これを喰ひねえ』戊『えゝ』〇『これを喰ひなよ』戊『何だい、これは、豆腐ぢやねえか。巫山戯るない。皆燒いて味噌を附けたやつを喰つてゐるのに、生の豆腐を喰はせるのは酷いぢやアねえか』〇『仕方がねえ、喰つてみねえ。今やつたのは楊弓の眞似だらう。だからやかずで喰はせるんだ』

（終り）

娯楽室

醫者いらず

藤井眞人（賞）

○骨を折つた世話人
○膽をつぶした臆病者
○脛を嚙られた親父
○胸を焦した箱入娘
○首をチヨン切られた月給取

運迷餘言 滑稽易斷

吉渡當象



【時計屋の息子】貴公は頗る几帳面な性で働き者ぢやから、萬人に愛され、如何なる高位高官の許へも出入り出來る福運者ぢや。濕氣を避け、轉ばぬ用心をすれば長壽請合ぢや

【氷屋の娘】貴孃の性質は一見冷めたい樣ぢやが、其の冷淡な點が、又特長でもある。高熱患者に對して徹夜の介抱をするなど其の一例ぢや。炎天、火の側などに近寄ると命が危い。氣をつけさつしやい。

【お汁粉屋の主人】貴公は根が甘い性ぢやから下戸には好かれる。上戸は大敵ぢやから忘れても近寄るまいぞ。色の黒いのは生來ぢやからあきらめなさい。

【瀬戸物屋の娘】貴孃は甚だ以つて固いお人ぢや。長壽の相があるが、そゝつかしい人の許へ嫁げば立所に身の破滅を見る。此の點用心さつしやい。

○まはりよみ

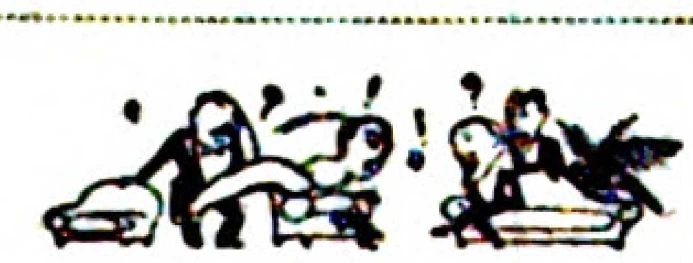
△私の皺。
△よく聞くよ。
△へいと言へ。
△那須野の砂。
△枇杷を取るとお詫び。
△運の業か澤の砧。
△洗濯物もくだんせ。

浮世の縮姿



笑話

渡邊汲



△男子が來たから仇が死んだ。
△此の小猫の子。
△柄が長柄。
△無いわいな。

○來ない時は



主人出掛けに『私の歸らない内に山田さんが見えるかも知らんがね、その時はお晝過ぎにこちらからお訪ねするつて申し上げて呉れ』

女中『畏まりました。それで、お見えにならなかつたら、何と申し上げて置きませう』主人『!?』

手品



これなる白いきれの上へ一錢銅貨を置いてこのコップを置きます。と、オヤッ、銅貨が見えなくなりました。とつて見ますとやつぱり、ある。何と、不思議でせう。（説明）コップの底へ白い圓い紙を貼つておくのです。白いきれもそれをごまかすためです。

○笑はぬ譯



子供『今日學校でね、一人の子が居眠りしてゐてイスからおつこちたんだよ』

ママ、『そう、みんな笑つたどらう』

子供『え、けど僕は笑はなかつた』

ママ、『何故？』子供『だつて、落つこちた子が僕なんだもの』

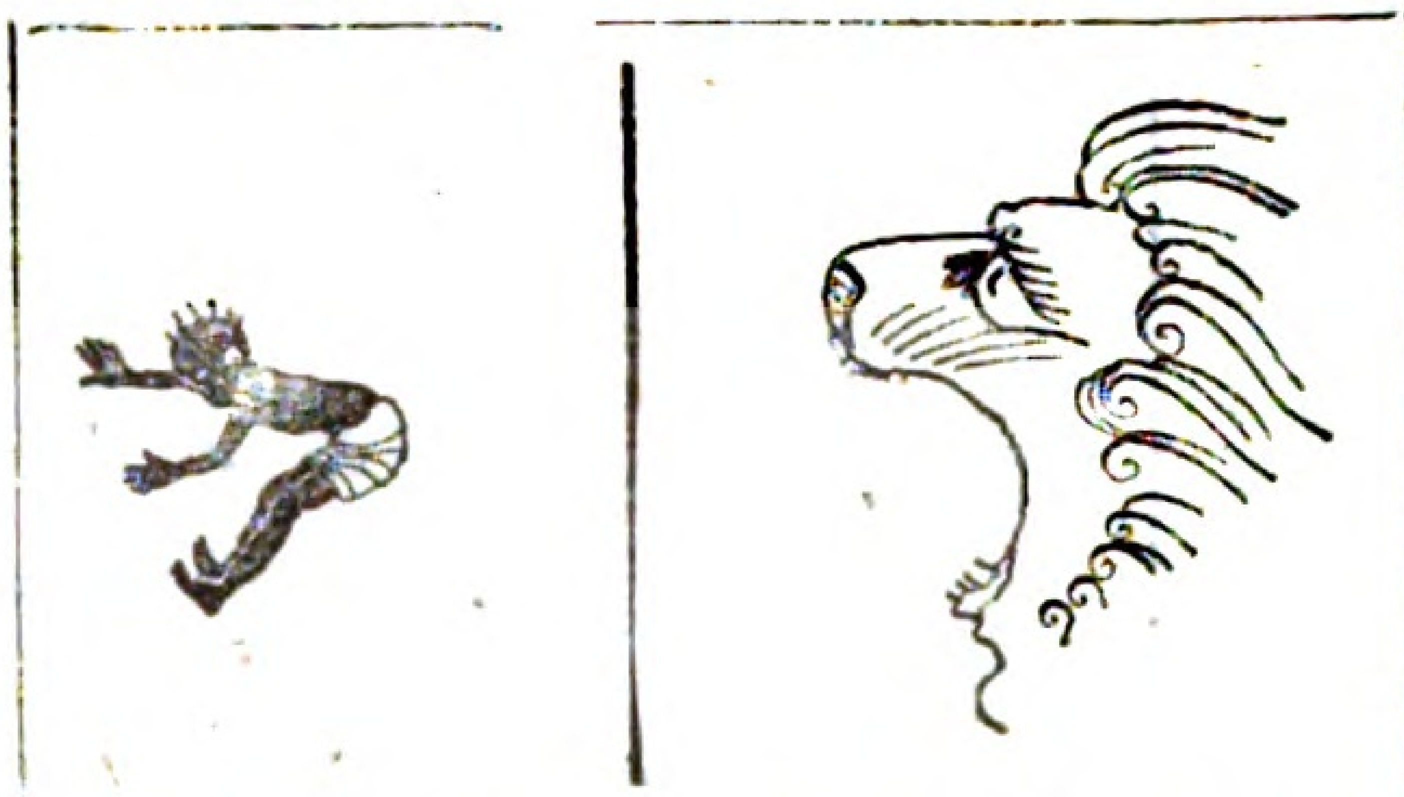
○古くする



『君は金廻りがいゝつて云ふが、どうしてやりくりするかね』
『譯ないさ、古い借錢を返さないよ』
『成程……新らしいのは？』
『いろ／＼考へて古くするさ』

○何年かゝる

『時は金なり』と聞いた大工さん、『フン、甘く言つたもんだナ、處で千圓の借金を濟すには何年位かゝりやせう』



中央の黑い點を鼻に近づけて、しばらくそれをみつめて下さい、おや黑ん坊がライオンの齒に引つかゝつた不思議不思議。

浮世の繪姿

『これ／＼ポチ／＼、來い／＼』といふのに、振りむきもせずに行つてしまつた。「父うちやん、ありや太郎といふんだよ。ポチなんていふから來ないの」

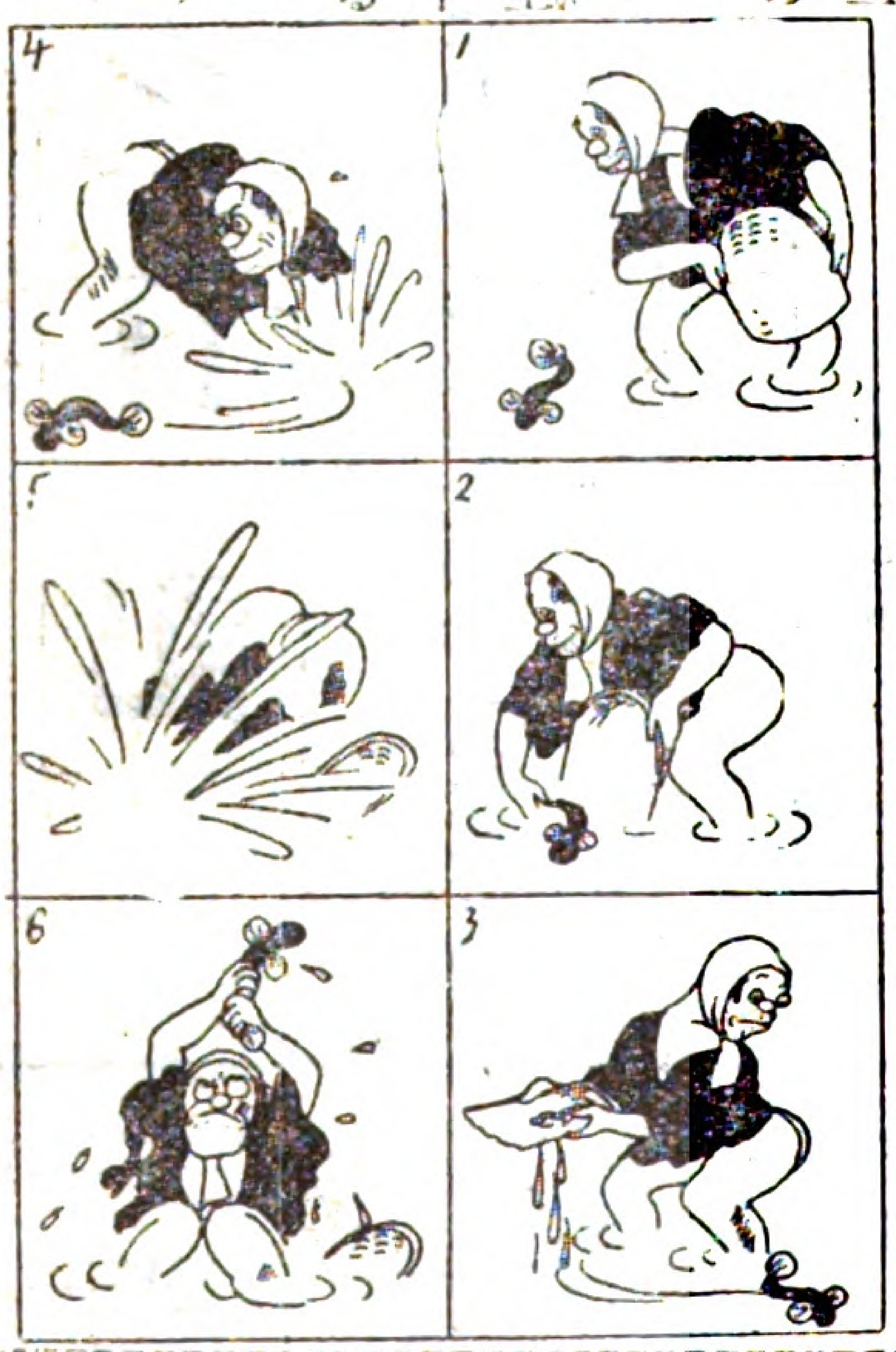
子を持て近所の犬の名をおぼえ

（川柳）



○數字詠込み面白俳句

(一)行水やにはか垣根の戸・一枚。
(二)雪の日や二・の字一つの汽車の路。
(三)夕立や傘一・本に三・書生。
(四)四・方から十の字に寢る炬燵哉。
(五)五月雨やアツケ・ラカンと消防夫。
(六)宿六・の影踏み付けて田植哉。
(七)さも似たり七・面鳥と秋の空。
(八)追羽子やおさんの顏に八・字髭。
(九)九・尺二間へ持ち込む初鰹。
(十)十・の心十色に月を眺めけり。



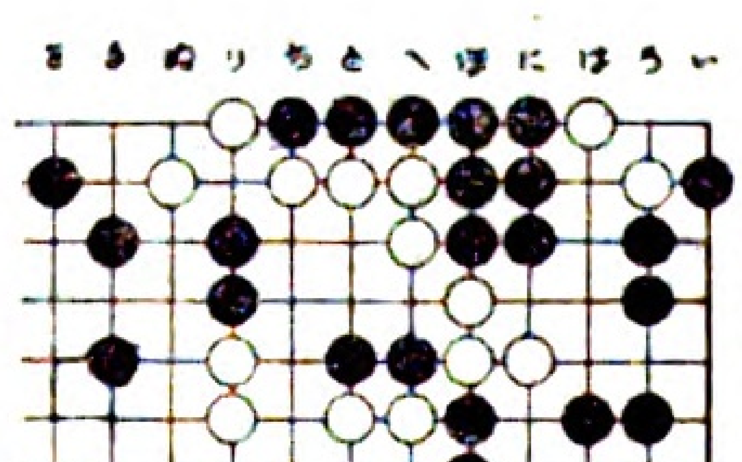


○離れない

圖のやうに兩手の指先を合せて、誰かに背後から兩手をさしこんで引き放して見ろと云つて御覽なさい。どうしたつて離れませんから。

漫畫どぢやうすくひ　大阪　濱風生（賞）

○詰碁新題

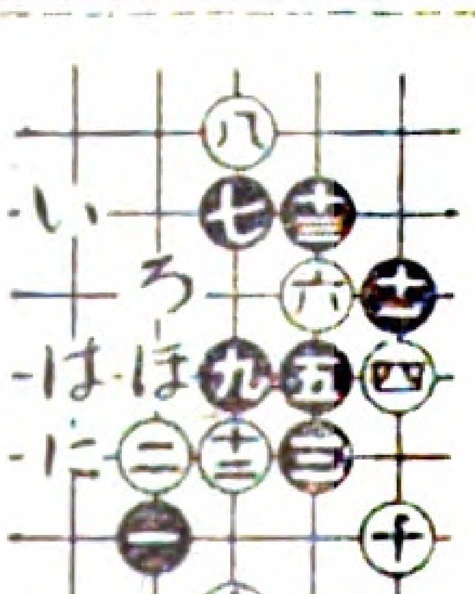


黑先結果如何

五段　福田正義

○聯珠新題

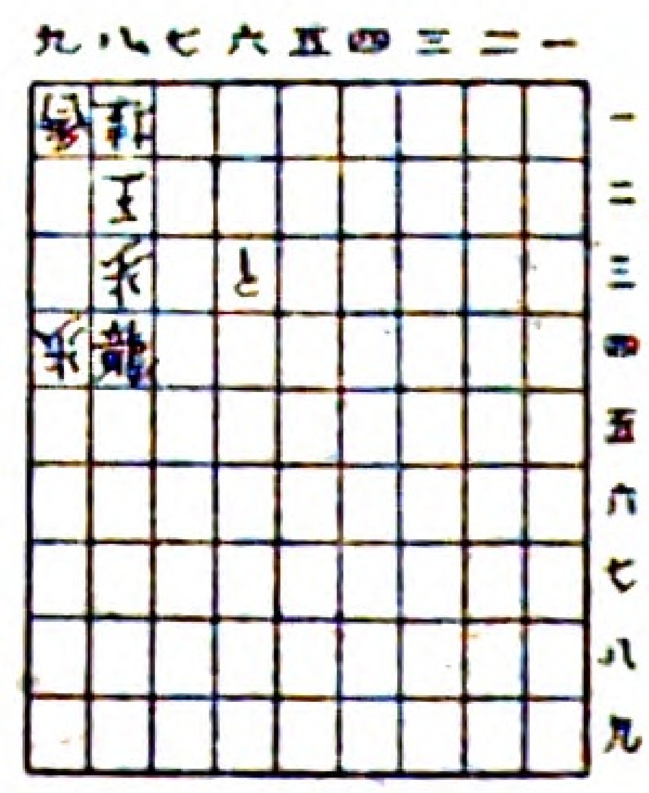
珠叟　淸水吾石



◎黑の（十三）に對して白は黑面目に止めて居てはとても適はぬと！て一策を案出して圖の如く（十四）と打つた黑は好期逸すべからずと斗り（十五）から『いろはにほ』の順で必勝と讀んで打進んだ。所が最後の（ほ）に四三を打つと（イ）に白の四勝が乘るので決勝の四三を捨て（イ）に打たねばならぬ事になつて！（ほ）に止めて三勝が乘つたので遂に混戰の結果は白が勝ちましたが、これは黑が早合點で敗を招いたのです、（十五）から追詰で正しく勝つとこでせう。

（本欄解答頁三七五頁）

○詰將棋新題



持駒、銀、銀

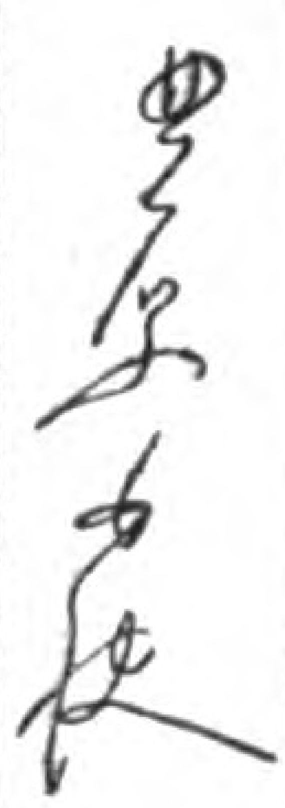
四段　小林泰桂

ある日の日記

卓越した人の日記には、書籍に見られない生きた教訓を發見する。然して、それは一種の「人生案内」である。　トルストイ



詩人　北原白秋氏



六月八日　越後にて

國上山への登り口で自動車を乗り棄てた私達は、たちまち水田の畦から駈け出して來た泥まぶれの村の子供たちに取り巻かれて了つた。この山間の田といふ田は今が田植の最中であつた。苗代の爽かな綠、植ゑつけにいそしんでゐる早少女、たもの掛稻木の靑嵐、蛙のこゑ、午後二時過ぎのかがやき、さうしたものがよく調和されて、鄙びたながらに何となく風流な野趣が感じられた。

子供たちはわいわい騷いでゐた。よほど自動車が物珍らしい見物であつたにちがひなかつた。

ほう、良寛様もかうした子供たちと、いつもこんな田の畷で遊んだのだな、手毬をついたり、積藁の中でかくれんぼをしたのも、ちやうど此處らあたりだつたろなと思ふと、何

時代諷刺選

西洋の舞踊

芥川龍之介



芥川龍之介

一體西洋の舞踊なるものは獨樂のやうにくるくる廻つたり、空中へひらりと飛上つたりする。あれは衞生上には、——少くとも看客の衞生上には餘り好結果を與へないらしい。仕合せにも僕は眼まひだけだつたが、幕合ひに廊下へ出て見たら、喫煙室のテエブルの下に、うんうん呻つてる紳士があつた。この紳士などは聞いて見ると、丁度船に醉つたやうに、ロシヤ舞踊に醉つたのだと云ふ。——が、眞面目に驚かないでも好い。これは僕の小說である。

（帝劇の露西亞舞踊より）

死

かしら豐かに微笑まれもした。

山は極めて閑かであつた。坂はさほど險しくもなかつたが、木の根や岩角や杉の落葉などが、ただありのままに雨風に吹き曝されたものか、手が少しでもはひつてゐさうには見えなかつた。

松風の音がしきりに頭の上でした。谷かげの明るい雜木の中では郭公の聲が時折きこえてゐた。この山道を朝夕に登り降りした人のことを思ふと、私はまたうつらうつらと辿つてゆく私であつた。

國上寺は古風な大きな伽藍であつた。本堂の暗い隅には和尚の木像がほのかに匂つてゐた。黑い中門をくぐつて、萱葺の庫裏を訪うた私たちに、おとなしやかな老僧が出て茶をすすめた。そのほかには人のけはひもなかつた。

五合庵の跡は、その山の南のかげにあつた。僅かばかりの空地に、さほど古くもなささうな一字の草の庵があつた。その横に建てて間もなささうな句碑があり、その句碑に紙を當てて、ほとほとかろくかろく墨でたたいてゐた人があつた。その石刷りの面には、

焚くほどは風がもてくる落葉かな

といふ和尚の句が浮き出してゐた。

板屋楓の廣い葉が風にそよいで、あたりが青く青く反射してゐるのも涼しかつた。蟲の音もした。

その見おろしにまた、思ひもかけぬあの清新な桐の花が明つてゐたのもうれしかつた。

松風の音がまた前の山を流れて行つた。

國上の片山かげの桐の花遠く蛙の鳴くがしづけさ

『殺された蟻は死んでしまつたのさ。』

『殺されたのは殺されただけぢやないの？』

『殺されたのも死んだのも同じことさ』

『だつて殺されたのは殺されたつて云ふもの。』

『云つても何でも同じことなんだよ。』

『違ふ。違ふ。殺されたのと死んだのとは同じぢやない。』

『莫迦、何と云ふわからないやつだ。』

父に叱られた保吉の泣き出してしまつたのは勿論である。が、如何に叱られたにしろ、わからないことのわかる道理はない。彼はその後數箇月の間、丁度一とかどの哲學者のやうに死と云ふ問題を考へつづけた。（「少年」より）

俺も正しい

山鴫を覘つたツルゲエネフの彈丸は確かに手應へがあつた。『俺は山鴫を射止めたぞ。』ツルゲエネフは得意滿面。獲物をくはへず歸つて來た犬を見てトルストイは『撃ち落したのは噓だ。』と吐き出す樣に言つた。二人の間には白々しい沈默が續いた。翌日少年が同じ地點の木の枝に山鴫のひつかゝつてゐるのを發見した。『どうだ射とめたのは本當だらう。』と

家達



公爵 德川家達氏

五月四日 土 雨後晴

午前九時五十分出門議長官舍へ立寄日本工業倶樂部に於ける帝室博物館復興翼贊會理事會へ出席細川副會長鄕中島兩男爵黑板博士安達謙藏堀啓次郎荻野仲三郎等出席午食相用午後四時霞ヶ關離宮英國皇族グロースター公殿下御旅館へ伺候貴族院議長の資格を以て「貴族院を代表殿下へ歡迎文を奉呈する光榮を荷ふ」旨言上、殿下より「貴族院の諸君へ宜敷謝意を傳へよ」との御言葉有之夫より日本倶樂部謠會に於て（景淸岡本松平、黑塚德川矢部、杜若野口佐野、大原御幸渡邊横山）へ出席午後五時過一旦歸邸午後七時四十分再出門燕尾服本綬佩用英國大使館晩餐會へ出席左の通參會、秩父宮、同妃、高松宮、閑院宮、東伏見宮大妃各殿下、グロースター公殿下佛伊獨土各大使夫人同伴、田中首相白川陸相岡田海相牧野內府一木宮相鈴木侍從長夫妻林式部長官松井大使夫妻松平駐英大使夫人關屋宮內次官夫妻吉田外務次官夫妻黑田侯爵櫻井博士岡部式部次長夫妻松平式部官夫妻二宮接伴官夫妻等七十六名翌五日午前零時十五分歸邸。

五月七日 火 曇後雨

午後零時三十三分、グロースター公殿下隨員と共に御成午餐を呈す。秩父宮殿下英國大使林式部長官松井前駐英大使德川賴貞德川圀順德川達孝德川喜翁蜂須賀侯爵等御同席午餐後相撲台覽、秩父宮妃殿下も御成其他英國大使夫人令孃松井大使夫人松平大使夫人英國大使館員チヤーレス一等書記官夫妻始相招陪觀午後三時過御歸午後四時御禮の爲め、秩父宮御殿へ參上午後六時五十分出門首相官邸晩餐會へ出席、グロースター公、秩父宮、同妃、

ツルゲエネフ。鼻の先で笑ひながらトルストイは云つた『山鴫は枝にかゝつてゐた。擊ち落したのは嘘だと云つた俺も正しい。』（山鴫より「梗概」）

六十年の習字

池上文僊

京都の谷鐵心といふ人は如意山人と云つて有名な書家であつた。或る時、一人の老僧が義之の書を習ふこと六十年、自らよく義之を學びたりと信じて居た。そこで京都に上り、盛んに揮毫して見たが、誰も顧みるものがない。遂に堪り兼ねて谷鐵心の許に至り、『自分は義之を學ぶこと六十年、最もよく學び得たりと信ずるに、人これに一顧だも假さぬは何故であらう。』

と尋ねると、鐵心は之を見て曰く、

『成程、御身は云はるゝ通り甚だよく義之を習はれてゐる。しかし義之に非常に能く似てゐるといふだけで、御身の精神がない、つまり義之の義之で、御身の義之が一寸もない。』

（禪窓奇譚より）

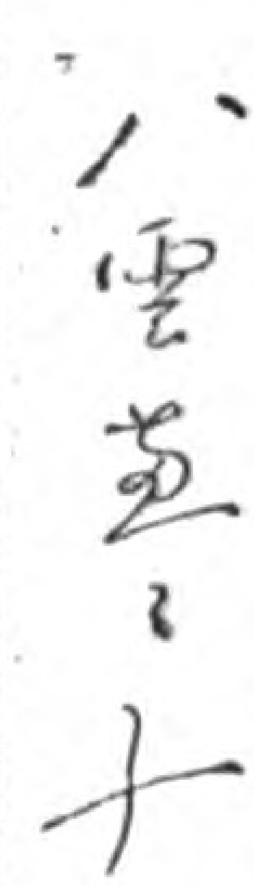
ほんとの事

吉井勇

高松宮、閑院宮、東伏宮大妃各殿下御參會其他英國大使夫妻娘大使館員夫妻各大臣夫妻等陪席食後觀劇夜半過歸邸。

前年英國皇太子殿下本邦御來朝之際にも自邸へ台臨相願本年も亦、グロースター公殿下を御招申上ることを得誠に光榮之至に堪へず玆に此事を特に記し置く。





映畫女優
八雲惠美子氏

七月二十日

今日もまた朝寢坊をしました。

晝食を兼ねた朝食を濟ませてファン諸兄姉からの手紙に禮狀を書く。

二三日怠けてゐたお蔭で二十六本も溜つてしまつて大骨折り。でも、どれもこれも熱烈な聲援と夏の撮影に同情の言葉であつて見れば書かねばならない。――一と汗をかく。

午後は踊りのお稽古でへと〳〵。湯をつかつたところへ文さん（岡村文子氏）が銀ブラの誘惑に來る。一緒に出掛く。

リッチで輕く頂いて、和かな宵の灯の下をブラ〳〵歩いてゐると、目の先へ止つた自動車がある。中に四十歳位の紳士が赤い財布から金を取り出して同乘の若い婦人にやつてゐるのが不快に目に入つた。氣障な紳士！　と思つて通り過ぎたが、文さんから「あれは××映畫會社の重役よ」と敎へられて、同じ映畫事業に關係の人だけに、いよ〳〵不愉快で堪らなかつた。爽な銀ブラの氣分は之れで滅茶々々に壞れて仕舞つた。

夜間撮影があるので、急いで撮影所に歸る。眞晝中の撮影より幾分は樂だが、何度も何度も强烈なライトやマグネシユームを眞正面から浴びせられ、また眼を燒いてしまつた。

俺は目が見えなくなつてから不思議にほんとの事が分つて仕樣がねえんだ、人間はほんとの事が分る位寂しい事はありやしねえぜ、俺はもう目が見えなくなつてから六年になるが盲目になつて口惜しいなんて思つた事は唯の一度だつてありやしねえぜ、なあに俺あ負け惜しみで云つてゐるんぢやねえぜ、全くの所盲目になると目の明いてゐる内に見えなかつた物がハッキリ見える樣になるからなあ。（小しんと驢馬より）



吉井勇氏

雜草

幸田露伴

舊いものは敵である。自分の地に生じて居たもので、何でも古いものは敵である。雜草を耘り去つて仕舞はねば、新しく菜蔬は播き付けられぬ。（努力論より）

勝負

大町桂月

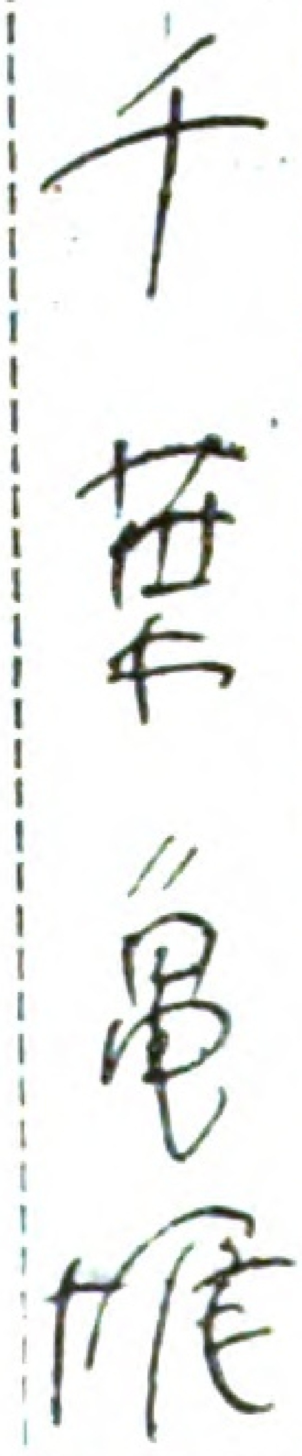
社會は一種の土俵也。智者必ずしも勝た

監督さんの細い註文のまゝに身體を操り人形にして働きつゞけて、仕事を終つたのは明け方近かつた。

辛いワと愚痴りたくもなる——けれど矢張り辛いことを働いて行かう。藝道の爲に。



文藝批評家
千葉龜雄氏



六月廿八日

八時の定刻に、L大學へ行く。今日は今學期の最終である。來月からは暑中休暇だ。東京生れのA君に、故郷を持たぬ都會人は、空虛を感ずるのではあるまいかなど、問答をする。初戀の味ひはカルピスといふ廣告があつたが、故郷の持つスヰイト・サドネスは何と云つたらよいか。……調べて行つた講義材料が足りなくなつたので雜談をする。二ヶ月間の健康を祈つて、教室を出る。

三時に社を出て、偕樂園へ行く。S社の座談會があるので。……O氏と短篇小説の將來を論ずる。機械時代が將來する藝術の理想など……座談の主題は、第一線の人物！いろんな意味で「時代の英雄」はあるが、さて、第一線の人物となると、さうざらには見當らない。が、大衆の進出する今日日に、昔しのまゝの姿の、第一線の英雄を求めようとするのが間違ひかも知れない。そして、それはそれで好いのではないか。

六時からは、上野の自治館に居た。市の教育課の企てで、若い處女達に、新聞學の講義をして吳れといふのである。その第一日だ。定員がかつきり百名。みんな職業を持つて、自分の額の汗で生活する若い尊とい女性達である。すつかり疲れ切つた身心をここまで引きずつても、飽くなく、知識を吸收しようとする、眞劍さと、熱情に搏たれる。仇やおろそかの講義が出來ない。自分を耻ぢる。

ず。勇者必ずしも勝たず。強者必ずしも勝たず。勝負は何時も、土俵際にて決す。土俵際にて踏ん張り得る者は勝ち、踏ん張れざる者は敗る角力と同じく、腰の強きを要す。權威に腰を拔かす者、利害生死に腰を拔かす者いかに學力あるもいかに智力あるも竟にこれ社會に於ける拙手の角力取なるべし

(土俵際より)



大町桂月

夫婦

夫婦の間には、敬意を失ふべからざれども、婦が夫に事ふるは、人が神に事ふるとは異る也。如何に誠意をつくせばとて余り遠慮に過ぎ、たしなみ過ぎて陰氣くさくなり、他人行儀になり、眞面目に過ぎて、枯淡乾燥になりては、夫婦の情愛はなかるべし。

(わか筆より)

學者

夏目漱石

『分らぬ所に馬鹿に出來ないものが潛在して、測るべからざる邊には何だか氣高い心持

館を出る。蒼い月光と、密集した黒い若葉の陰だ、冷たい微風を汗ばんだ頬に感ずる。ほのかな都會の雑音、ぼかされた都會の光飾、ほがらかな若い人々の時代を、とりとめもなく考へ込みながら、省線へ乘る。

六月廿九日

政友會の天下が、一夜の中に引つくり歸つた。煮えかへるやうな新聞社内の空氣。



文藝家 新居格氏

新居格

六月廿四日

前夜の九時ごろ、わたしたち五人は前橋から自動車で伊香保に向ひ、岸權旅館に投宿したのであつた。浴泉して寛いで漫談を交した。わたしは今朝が晴れてゐたなら榛名湖畔に行く積りだつた。が、今日は雨、榛名湖畔へ行くことを止めて正午過ぎ歸京することに決定した。わたしはどうも榛名湖とは緣がない。幾年か前の秋に伊香保へ來たときも長雨に降り込められて、一週間あまりを宿の一室だけで過し、伊香保の町を一度だつて散歩もしずに歸つたことがある。今度こそはと念じたがまた雨だつた。しかし宿の主人に案内されて橋本ホテルへ輕いランチを執るべく行つた。初めて伊香保の街の一部分を見た譯であつた。わたしは幾年來の不規則な生活で身心共に疲勞してゐることを自覺してゐる。それは山の湯につかつてみる時にハツキリ分かるやうな氣がする。東京での生活は交渉が徒に繁く、その上煩はしいことが多過ぎることがつく〴〵思ひ出された。橋本ホテルへ行く途中、生ひ繁る山の繁みを見ながら、わたしは松岡讓君に、「しづかな溫泉場で、靜養しながら勉強をしたい。僕は近ごろひどく疲れてゐるのでその願ひが切だ」と話したりした。が、さうするには常に貧しく、一日だつて呑氣に遊んでゐる譯にも往かない自分であることが癪だつた。

が起るものだ、夫だから俗人は分らぬ事を分つた樣に吹聽するにも係はらず學者は分つた事を分らぬ樣に講釋する。大學の講義でも分らぬ事を喋舌る人が評判がよくつて、分る事を説明する者は人望がないのでもよく知れる。』世の大學者先生達もつて如何となすべきである。（「吾輩は猫である」より）



夏目漱石

三角術

『金を作るのにも三角術を使はなくちやいけないと云ふのさ。義理をかく、人情をかく、恥をかく、是で三角になるさうだ、面白いではないかアハヽヽヽ。』

其善惡は別として、人生は常に金を中心に廻轉してゐる樣に見える。恒產なくして恒心なし、從つて金がなければ三角と云ふ事になつて自分で自分の世界を小さくする、この諷刺の一句思はず微苦笑を洩らす。

（「吾輩は猫である」より）

強情

強情さへ張り通せば勝つた氣で居るうちに

橋本ホテルは清閑であつた。ランチを取りながらわれ〳〵が話し合ふのにふさはしかつた。照井榮三君がいろ〳〵と外國の面白い話をしてきかせてくれた。

英吉利人らしい若い外人夫婦が食事をとるべくその食堂に入つて來た。

雨が青葉に降りそゝいでゐる。陰影を少々織り交ぜた光景だが、わたしの心にはむしろそれがその場合望ましかつた。



陸軍大佐　櫻井忠温氏

櫻井忠温

六月二十二日（土）

元氣は非常にいゝが、朝からムシムシする。

けふは大臣が地方長官を下志津へ招待して、各兵連聯合の演習を見せた。新聞記者團を案内してU少佐出張した。

自分は首が痛いのでけふはお留守。首から肩へ鉛の板でも入れたやう。首が廻らない。

このごろ上顎が馬鹿に痛い。

顎が上つたり、首が廻らぬとあつては人間もおしまひだ。

この一と月の間に友人が四人も死んだ。『こんどは自分だ』しきりにさう思ふ。W中佐が飛行機から落ちて死んだ。中佐と太平洋の船、巴里の宿で一しよに暮した日のことが思ひ出される。巴里でY大佐、I中佐が丹毒で死んだ。自分が同病でアメリカに病んだ日のことが思ひ出される。

人間も『死』『病』などといふことを考へるやうになつちや、もう駄目だ。

今は夜の十二時だ。起きてゐるのは自分ひとりだ。

けふもこれで終りか。このごろは非常に時間惜しくなつた。もう先が見えたと思ふと、馬鹿にあせり出した。これといふ仕事もしないで『日』を送り出すと、その淋しさたらない。

當人の人物としての相場は遙かに下落して仕舞ふ。不思議な事に頑固の本人は死ぬ迄自分は面目を施した積りかなにかで其時以後人が擯蔑して相手にして呉れないのだとは夢にも悟り得ない。幸福なものである。こんな幸福を豚的幸福と名づけるのだ。（虞美人草より）

自覺性馬鹿

自分で自分の馬鹿を承知して居る程尊く見える事はない。此自覺性馬鹿の前には、あらゆるえらがり屋が悉く頭を下げて恐入らねばならぬ。當人は昂然として吾を輕侮嘲笑して居る積りでも、こちらから見ると其昂然たる所が恐れ入つて頭を下げて居る事になる。（吾輩は猫である」より）

偉人

德富蘆花

古の大人豪傑と云へば宮に祠り畫にかき記念碑を建て詩歌に詠じ、金泥をもて其傳記を書いても猶足らぬ癖に鼻の先に佇ずむ大人をば氣もつかず、途に袖觸合ふとも知らず看過すはまだしも少し異な人間と見れば直に化物視して迫害を加へる。而して猶偉人出でよ、天才生れよと云ふ。（思出の記より）

父・ダミエンの聖愛

岡山縣金川中學校長 服部純雄

布哇群島のうちに、モロカイ島といふ小島があります。

この島が、天下に名高い譯は、そこに、完備した癩病院があるからであります。亞米利加各州の癩患者達は、悉く、この島へと送られて來るのでした。

若し、この世の中に、最も凄慘な運命に弄あそばれた者があるとするなら、それは、これらの癩患者であらねばなりません。

ドロドロに爛れゆく筋肉、魂の底までかきみだす腐肉の臭氣、無慘醜惡を極めた人の世の重荷にして、これ以上の暗い運命はありますまい。

紫紺に輝く熱帶の海も、眞紅に燃ゆる暖國の草花も、空を蔽ふ椰子、ココナツツの綠も、荒みきつた癩患者の、絕望の魂をあかるくすることは出來得なかつたのであります。

そこには、毎日のやうに、患者同志の深刻な爭鬪や、自棄の末の狂踏亂舞や、慘鼻を極めた自殺者達が次から次へと續出するのでありました。

しかるに、この癩患者達の魂を熱愛し、自分の一生を捧げ盡して、寂しき人々を聖愛の翼に包まんと、雄々しくも決意した、一人の偉丈夫がありました。それは、後世、父・ダミエンと呼びなされた、慈眼愛腸の勇者でありました。彼は、亞米利加政府に懇願して、單身、人の怖るゝモロカイ島へと到着したのでありました。

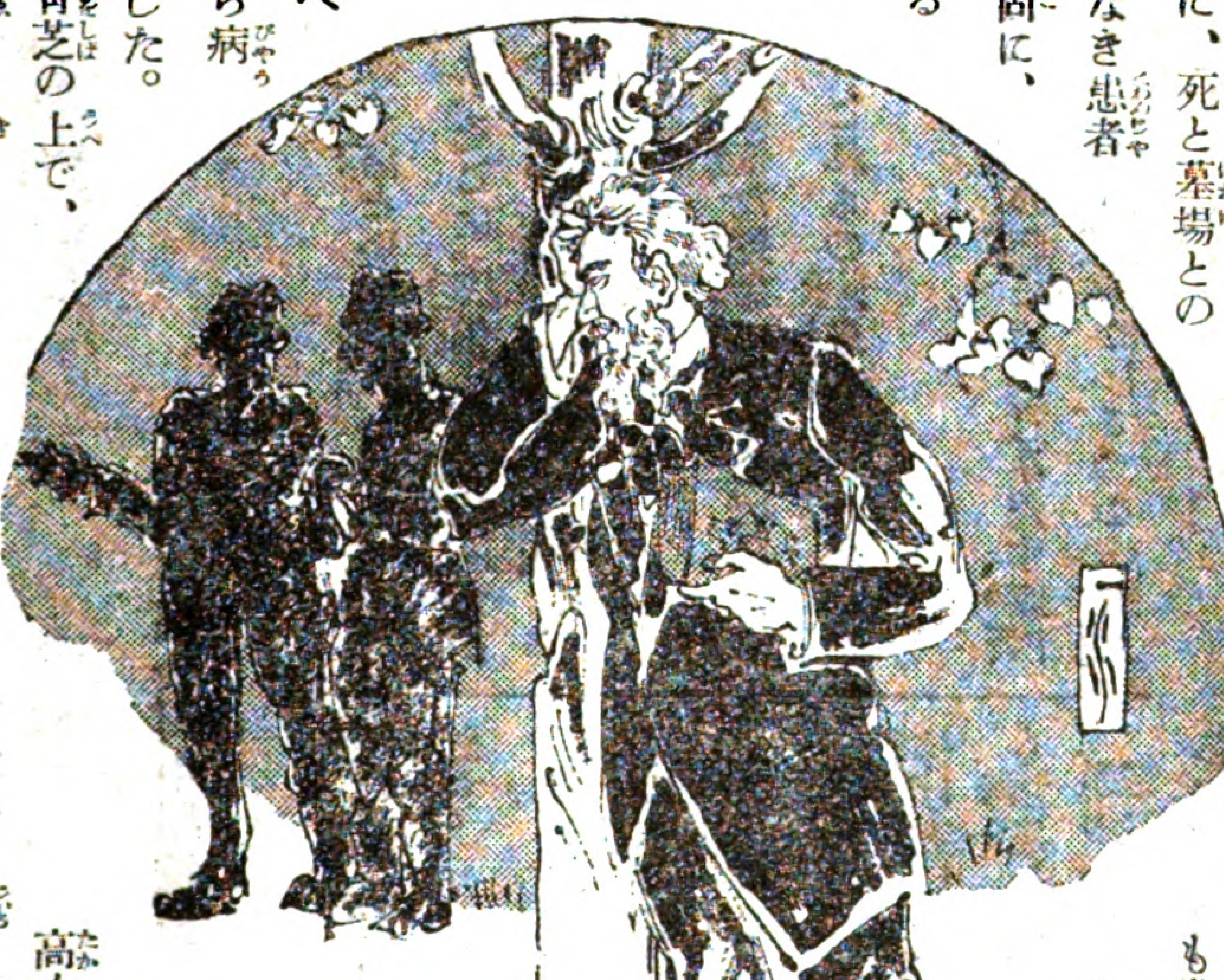
彼は、朝より夕べまで、癩患者の片意地な偏見を、あた

たかい微笑で答へ、折にふれては、熱淚をふるひ、悲淚を流して、一意專心、患者の慰安に健鬪したのでありました。しかし、病魔のために、死と墓場とのほか、目指すところとてなき患者達の魂は、石の如く頑固に、氷の如く冷たくなつてゐるのでした。ある夜のことでありました。

丁度、集會が終りを告げ、患者達は各自の病室へ三々五五と歸り往くときでありました。ダミエンも、自分の部屋へ歸らんとして、集會所から病院の中庭へと立ち出でました。

その時、絨毯のやうな靑芝の上で、二人の患者達の甲高い話聲が、聞くともなしに彼の耳へと傳はるのでした。

ダミエンさんの感謝話も、もう、俺達は聞きあきたよ、」



ダミエンさんのやうな健康體なら、誰しも感謝は出來るであらうが、俺達のやうな業病にとりつかれては、感謝も糞もあるものか。

この言葉は、まるで、ダミエンの肺腑を、錐で突きさすやうにくひ込みました。

この夜から、ダミエンの祈りは、深刻悲壯なものと一變しました。彼は、自らの體内に、一日も早く、癩菌の傳染することをのみ祈り求めたのでありました。

暫くすると、彼の掌に、白いあやしげな斑點がポツリポツリとあらはれ始めました。しかも、彼の惡疾は、次第次第に醜惡な形態をとりて、彼の生命を脅威するのでありました。

然し、この時以來、彼の魂は、いよいよ高く澄み渡り同病者を想ふ熱愛は、火の如く炎上するのでありました。

彼は壇上から、雄々しくも、勇しい聲をあげました。

愛する兄弟姉妹！

私を御覧下さい

私の外形は、昨日より今日は、今日よりも明日は、次第次第に、頽れゆくことでありませう。

しかしながら、いかに外なる我は頽るゝとも、内なる私の魂を御覧下さい。

既に、神に愛せられたる私の魂は、日に日に新に日に新に、感謝に溢れて生長しつゝあるではありませんか。

凄まじい黒雲の奥深く、美しい碧空が、永遠のしづけさをやどすが如く、外なるものがいかに無慘に頽れても、内なるものは、永遠に、そのしづけさをみだされぬ、勝利の生涯もあるのです。

愛する兄弟姉妹

私の言葉を信じて下さい

私の歩んだ魂の足跡をみつめて下さい！

彼の熱烈なこの叫びは、不幸な癩患者達の全き共鳴を得ました。さしも頑固な患者のこころも、ダミエンの深遠な同情の鍵に開かれて、一道の光明を見るに至りました。

爾來、モロカイ島の癩病院は、全くその内容を一變しました。自殺者は影をひそめ、爭鬪はそのあとを絶ち、荒涼たる砂漠は、番紅花の花匂ふ美しい春野の光景と一轉しました。

かくて、ダミエンの大愛は、アメリカの大衆を揺りうごかし、莫大な奉仕金は、瀧のやうに、モロカイ島へと流れこみました。

人道の選手、父・ダミエンの記念塔は、世界第一の完備せる癩病院となりて殘されたのであります。

そして、今も尙、モロカイ全島には、ダミエンの聖愛が充ち溢れ、世界全人類の感謝と敬慕とは、限りなく、父・ダミエンの名に於て記憶せらるゝ事と確信します。

傷を負へる人に

傷は、如何に痛むやと、聞く前に、

まづ、自ら、傷を負うた人になる

とは、新大陸の民衆詩人、ワルト・ホヰツトマンの、強い同情の言の葉であります。

（吾の敬慕せし、老祖母の一周忌當日、自由病舍にて）

不老長生は可能か？

胃腸病、脚氣、肺結核衰弱、老衰に光明を齎した「若素」發見者澤村名譽教授を訪ねて

一記者

現代醫學が解剖した長命法

澤村博士は皆様も御承知の通り我國に於ける榮養學の一大權威者であつて、幾多の輝かしい業績を有せられ、現に東京帝國大學名譽教授の榮職に在られます。別項博士執筆の「獨逸皇帝と不老長生藥」に説明されました通り、有益菌ヘーフエが種々の貴重な成分を有して、現代醫學から觀て不老長生藥の理想にもつとも近い事は、ワイカルト、フエルネルなど世界醫學界の大家によつて闡明せられたところで、博士はこれを我國民に利用させようと種々苦心の結果、その全成分を巧みに製劑化し、加ふるに之に博士の特許方法による米胚の有效成分を結合させて、劃期的の新榮養健康素「若素」を發見創製せられました。

細胞を若返らせる特殊作用

古人が求めたやうな永遠の不老不死藥はもとより現代科學では不可能とされてゐますが澤村博士の「若素」は身體の細胞に活力を與へて之を若返らせ、内臟諸器官の機能を旺盛にし、榮養を昂め、新陳代謝を活潑にし、病氣に對する抵抗力を劇增しますので、結局は老衰豫防の效果をも擧ぐる譯になり、之を服めば健康の人は愈々精力横溢、病氣に罹らず、若々しい元氣を保ち、病人は病氣を征服擊退する精力を得て、その治療期間を早めますので、「若素」を服んでゐる病人には藥の利目が大變早いと、多くの醫師は認めて居ります。

右の作用は普通の榮養劑のやうに蛋白質とかアミノ酸とかいふ單に榮養分のみを補給するだけの弱い效果のものではなく、直接細胞に働きかけて細胞を若返らせる特殊の成分があるからで、從來の榮養劑には絶對に見られないヘーフエ榮養劑獨特の效果であります。

大學病院其他病醫院で賞用

それで醫學界の「若素」に對する信頼は非常なもので、大學病院始め臨床大家が爭つて之を使用され、この頃醫藥學者の集る席上では、これが話題に上らないことはありません。

『大したものが出來た。こんなに利くとは思はなかつた。』

『各國に先んじてヘーフエの榮養劑を完成したのは、さすがに榮養學の泰斗だけある。世界に誇るに足る立派なものだ。』

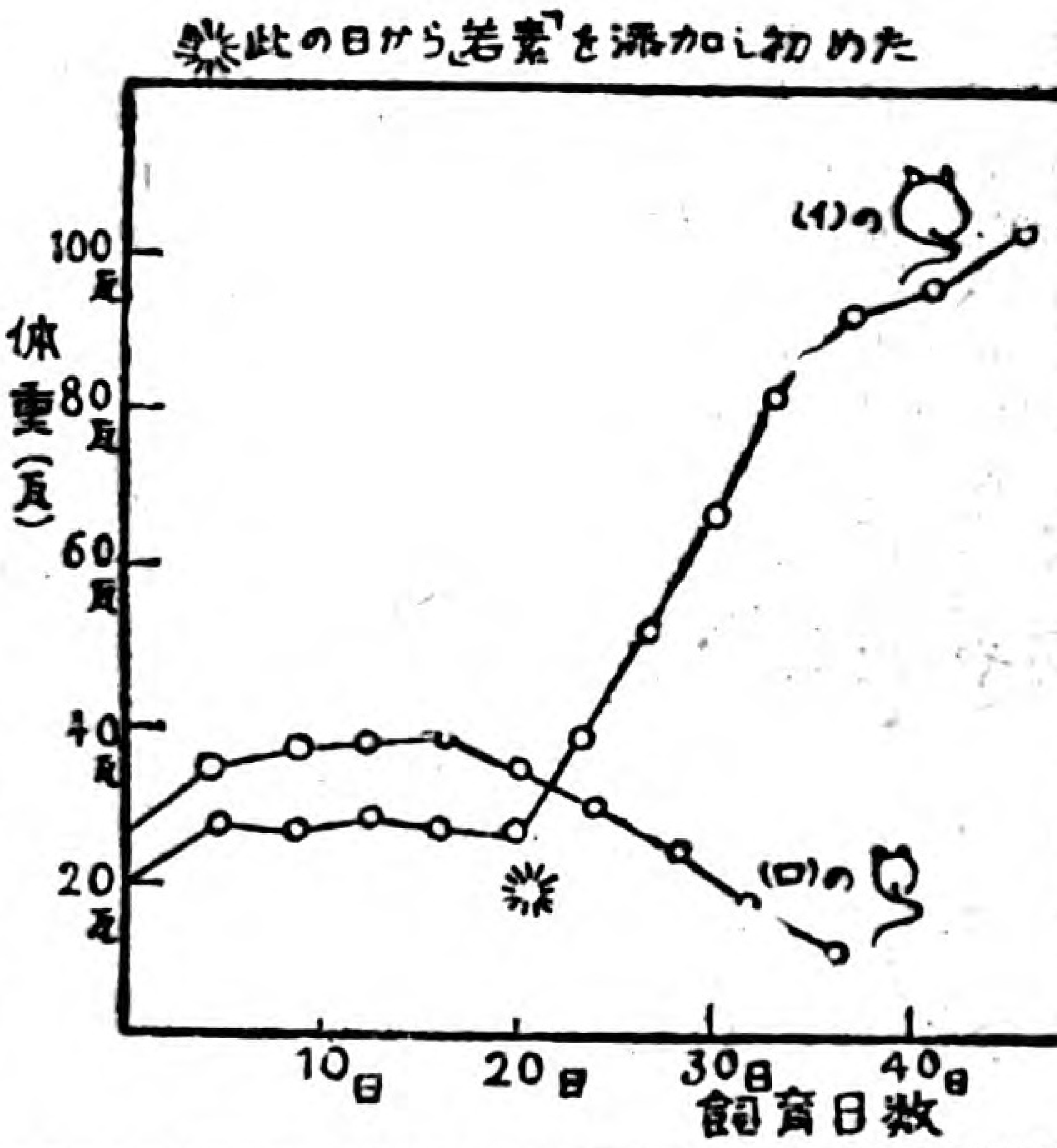
記者は先日もある病院の醫局で、二人の若い醫學士がかういつて激賞してゐるのを聞きました。「若素」を服用して病苦を免れた人々の喜びにも方々で打附かります。

食欲を增す作用の强さ

それらの醫界大家の實驗批判と、服用者の

體驗した效果を綜合しますと、前述の直接細胞を若返らせる效果は申すまでもありませんが、殊に食欲を進め、胃腸を丈夫にする働きの強いことも大きな特色で、ボアスといふ有名な大醫學者は、肺結核等で衰弱が甚だしく、どうにも食欲がない、絶望に近い患者でも、たゞヘーフエを服用續行の力さへあれば、間もなく食欲が出て恢復に向ふので、これは食欲素」といふべきだと驚かれた名高い話があります。それですから難治の慢性胃腸病や肺結核、肋膜炎、その他痼疾の衰弱病者の榮養療法は、「若素」を俟つて始めて滿足すべき效果を擧げられるとの定評になりました。





上圖の如き脚氣に罹つた瀕死の鳩でも、「若素」少量を與へると、三時間後には立上つて餌を拾ふまでに恢復する(澤村博士・實驗) 左圖は(イ)と(ロ)の鼠が生れてから二十日間は同一食物で育てた後、(イ)にだけ「若素」を加へると四十日後には(ロ)の鼠の五倍の體重を示した(生育試驗)

强腸作用と中毒豫防作用

最近百合野醫學博士は三百餘名に上る入院外來の患者に詳細な實驗をして、此の驚くべき效果を裏書されました。それに腸内の毒素を吸着排除する作用、有害菌を撲滅する作用が著しいので、水當りや食物中毒、幼兒の消化不良などを確實に豫防します。秋冷と共に食過ぎから失敗を招き易い時節柄、「若素」は何人にも、「轉ばぬ先の杖」であります。

便通作用と脚氣特殊成分

又便通を順調にする作用も見逃されません。それは下劑的の作用でなく、便を適度の柔かさにするのでありますから、何等の副作用もなく、常習便秘や血壓亢進症、姙婦、痔疾患者に取つて大なる喜びでせう。脚氣病に對しては前述の通り米の胚芽の有效成分までが加はつてゐますから、ヴイタミンBの含有量は如何なる脚氣專門藥にも劣らず、これさへ服めば胚芽米や半搗米の必要がありません。

腦病や神經衰弱に

その他、腦や神經の榮養になる有機燐酸化合物や、利尿作用、體重增加、生長促進等の效ある成分も含んでゐますから、その應用の廣いのには專門家も驚歎してゐます。

僅か一ケ月分一圓六十錢

記者はこれらの評判を齎して一日澤村博士をお訪ねし、「若素」禮讃の言葉を繰返しました。しかし博士は謙讓な態度で、

『私は榮養學者當然の務めとして「若素」を製つただけの事です。たゞ如何に效能のあるものでも、値段が高くて汎く一般の人を益する事が出來ません。營利的立場を離れた「榮養と育兒の會」から、一箇月分一圓六十錢といふ低價で提供なさしめたので、私は滿足です』と仰有いました。

實に效能から云へば五圓十圓しても高くないものを、そんな低價で世に出された博士の有難い御精神に、記者は涙ぐましい感激を覺えずには居られませんでした。

希望者は講談社代理部(振替東京六六二九番)へ御送金御注文下さい。(價格)粉末一月分一圓六十錢、三月分四圓五十錢、錠劑二三〇錠入一圓六十錢、特別大瓶五圓、荷造料各十二錢海外四十五錢、粉末最大瓶八圓五十錢、送料十八錢、海外五十五錢。發賣元東京市芝公園門内ほ號『營養と育兒の會』(振替東京一七〇〇番)

美談の華　逸話の泉

含羞草の教訓

天保の頃越前福井藩士で馬廻りを勤め、祿三百石を食んだ三好泰輔の息松之助といふのがあつた。美男の上に文武の兩道に長じ一藩の評判は一方でなかつたが、その姉が要路の妻になつてゐる所から、些細な事にも威を笠に着るやうに思はれはすまいかと成るべく人の事には口を出さぬやうにして能く謙抑を守つて居た。がそれでもなほ人の妬みを受け同じ年頃の者に兎や角云はれがちであつた。けれども松之助は堪忍の二字を忘れず常に聞かぬふりをしてゐた。ところが或る時、さる家に用事があつて訪れた折、主人が不在で一間にその歸りを待つてゐると其の隣の室に藩中の若侍が四五人集つてゐてさも聞えよがしに『松之助は姉の袖にかくれて立身をしようとしてゐ



る女の蔭によらずば武士らしい出世の出來ぬ奴よ』と罵り立てゝ居るので、松之助はそれを聞くが辛さに庭に出て了つた。がどうしても心外に堪へやらず、遂に堪忍袋の緒を切つて刀の鯉口を切るや否や、矢庭に其の室に躍り込まうとする途端、その足が芝生の敷石近くに咲いてゐた含羞草に觸れた。この草の特性として物に觸れると葉が萎むのであつた。松之助はつく〴〵それを見て、

『草でさへ打たるれば萎んで天より賦けた勤めを全うする、人間ともあらう者がこれほどの堪忍が出來ぬとは我ながら羞かしい』とそのまゝ胸をなでさすつてこらへた。

後に松之助は家を繼いで破格の立身をしたが、いつも刀に覇袋をかけ、それに含羞草の繪を描いてゐた。

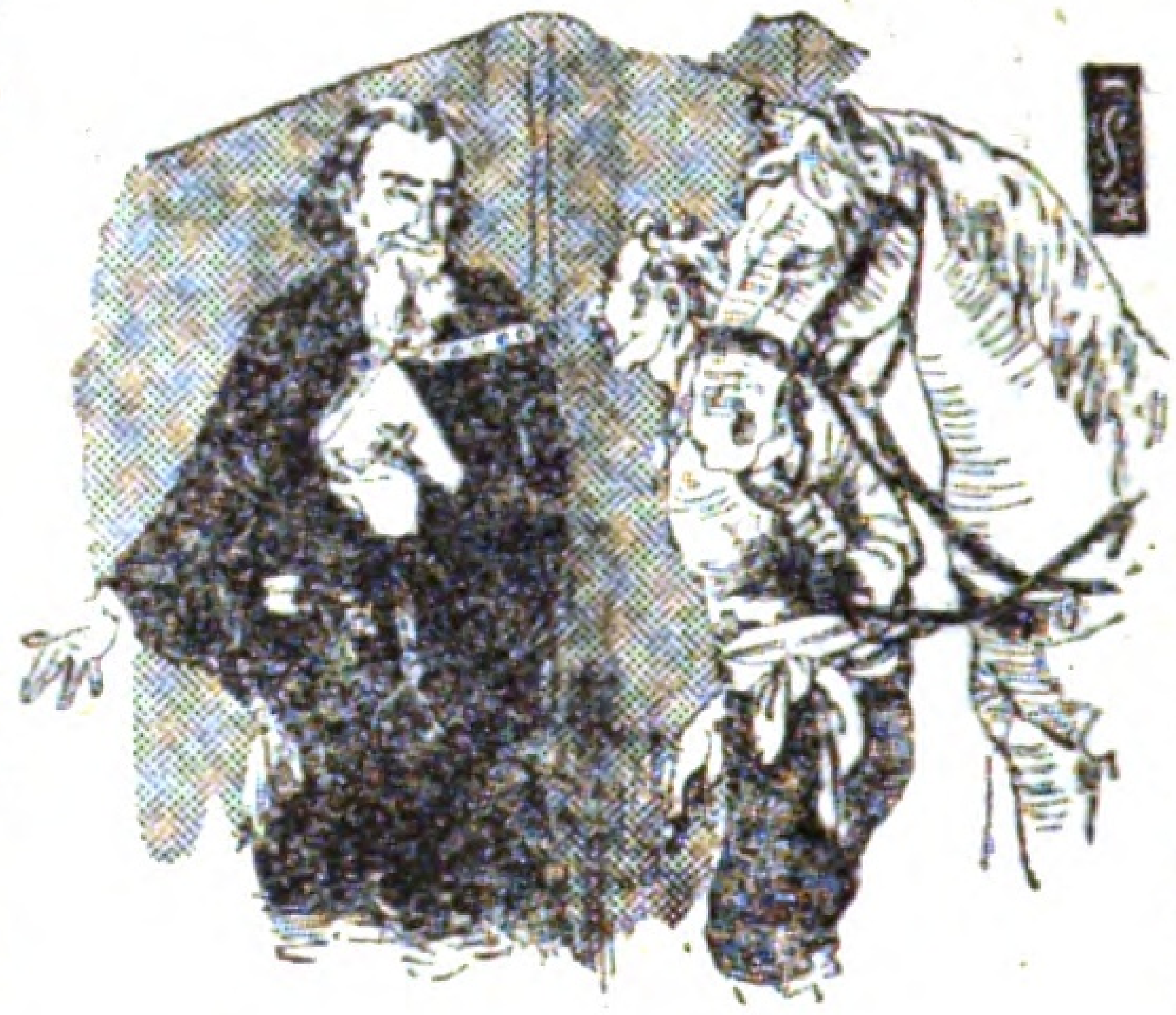
三つの難問題

ロンドンのカンタベリ大僧正は非常に奢つた生活をしてゐたのでジョン皇帝の怒りに觸れ、打首にすると申し渡された。僧正は蒼くなつていろ〳〵と命乞ひをすると、それでは此處に三つの問題を出すから、それによく答へられたら許してやらうと云はれた。三つの問題とは、

一、朕はいつまで生きることが出來るか。

二、朕は馬に乘つて地球を一週りしよ

うと思ふが、どれだけの速力ならどれだけの時間で一週りが出來るか。
三、朕はいま何を思つてゐるか。



僧正は問題がむづかしいので一週間の猶豫を願ひ、すぐさま馬車をケンブリッヂ大學に飛ばしてその博士達に尋ねたが、誰一人として答へてくれるものがなかつた。あゝ自分の命はとても助からぬ、と僧正はがつかりして教會に戻つて來た。すると門番が大變お顏色が惡いがどうかなさいましたかと尋ねた。僧正が涙ながらしか〴〵と事の次第を物語ると、門番は、主人の命に代はる時は此の時と奇特にも覺悟して、僧正の法衣をまとひ、ジョン皇帝の前に平伏した。

『これは僧正案外早く參つたな』
『謹んでお答へを申し上げます』
一、陛下は臨終の際まで生きておいでになります。
二、太陽が出る時馬に乗り太陽の速力と同じ速力で馬をはせる時は二十四時間で地球を一週りすることが出來ます。
三、陛下は今私をカンタバリ僧正と思つておいでになります。

答へ終るや否や法衣を脱いで門番の姿となり首をさし延べた。皇帝はかへつて之を賞しいろ〳〵褒美を遣はして歸された。

罪人後悔

常陸國の山奥に親を殺した男があつた。役人が捕へて調べると、男は不思議さうに、

『他の親を殺したのなら、惡いであらうが、わしは我が親を殺したのぢや。じぶんの親をじぶんが殺したのが、なぜ惡いのでございます』と、云つた。

この男は山中の小屋に育つて、めつたに里へ出たこともなく、字は一字も知らず、鳥獸も同様で、人間の道も知らなかつたのである。しかし知らなくても罪は罪であるから、役人は領主の徳川光圀に言上した。光圀はそれを委しく聽いてか



ら、男を學者にあづけた。
『この男に學問を教へよ。念を入れて教へよ』と、申しつけた。
學者はいろはから教へはじめた。男はだん〲字を覺え、書物も讀めるやうになつた。かうして三年經つと、學問のおかげで男は人間の道がわかつて來た。親は大切にしなければならぬこと、それを殺したのは大罪であることがわかつて來た。
『おゝ、わしは大變な事をしてゐた。大不孝者であつた。あゝ濟まなかつた濟まなかつた』
非常に後悔して、
『わしのやうな惡人は、世間への見せしめのために、どうぞ所刑をして下さるやうに』
と、じぶんから願ひでた。
その時になつて光圀は、はじめて男を牢に入れ、規則通りの所刑をしたさうである。（西山遺聞より採る）

眞の泣き笑ひ

吳服屋の年期小僧から、大日活の重役とまでなつた尾上松之助が、まだ二十歳そこ〲で一座を率ゐ、霜月も早や末の德山で開演中、舞臺は『大藏卿』の幕が開いて、出語りのチヨボが觀客の心をそそつてゐる時だつた。



尾上松之助

『音羽屋さん、電報です！』
と、座方の者が差出したのを封切つて見ればそれは『チチキトク』の五文字！
しかも舞臺裏からは、『大藏卿の御還行……』と多勢の和す聲が大藏卿の登場を促してゐる。大藏卿の松之助は片手に電報、片手に檜扇をとつて夢心地に舞臺に出て、
『お京……京と申しまする……京に田舍あり、田舍に京ありしあな、アッハハハ……』と父の訃を胸に秘めながら阿呆の眞似をして、扇で顏を隱した時は、眞に泣き笑ひで、それが父何も知らぬ見物から大喝采を博したのは、腸を抉られる思ひであつたといふことだ。

至孝の橘妙仲尼

但馬權守橘逸勢の女は名を妙といふ。承和元年父逸勢は罪によつて伊豆の島に流されることになつた。妙は泣き悲しみつゝ父の後を慕つて行つた。警固の士共それを咎めて追ひ返さうとした。そこで妙は士共の目にかゝらぬやう晝はやすみ夜の間に追ひつくやうにして父の駕籠を離れなかつた。



かくて遠江國板築驛まで行つたが、

其處で逸勢は急病によつて俄に死んでしまつた。妙は泣き〳〵その屍を葬り、墓の傍に草庵を結んで住んだ。そして自ら髪を剃つて尼になり名を妙仲と改めた。朝夕の念佛供養怠ることなく九年の間一日の如くであつた。見る人涙を流さぬはなかつた。

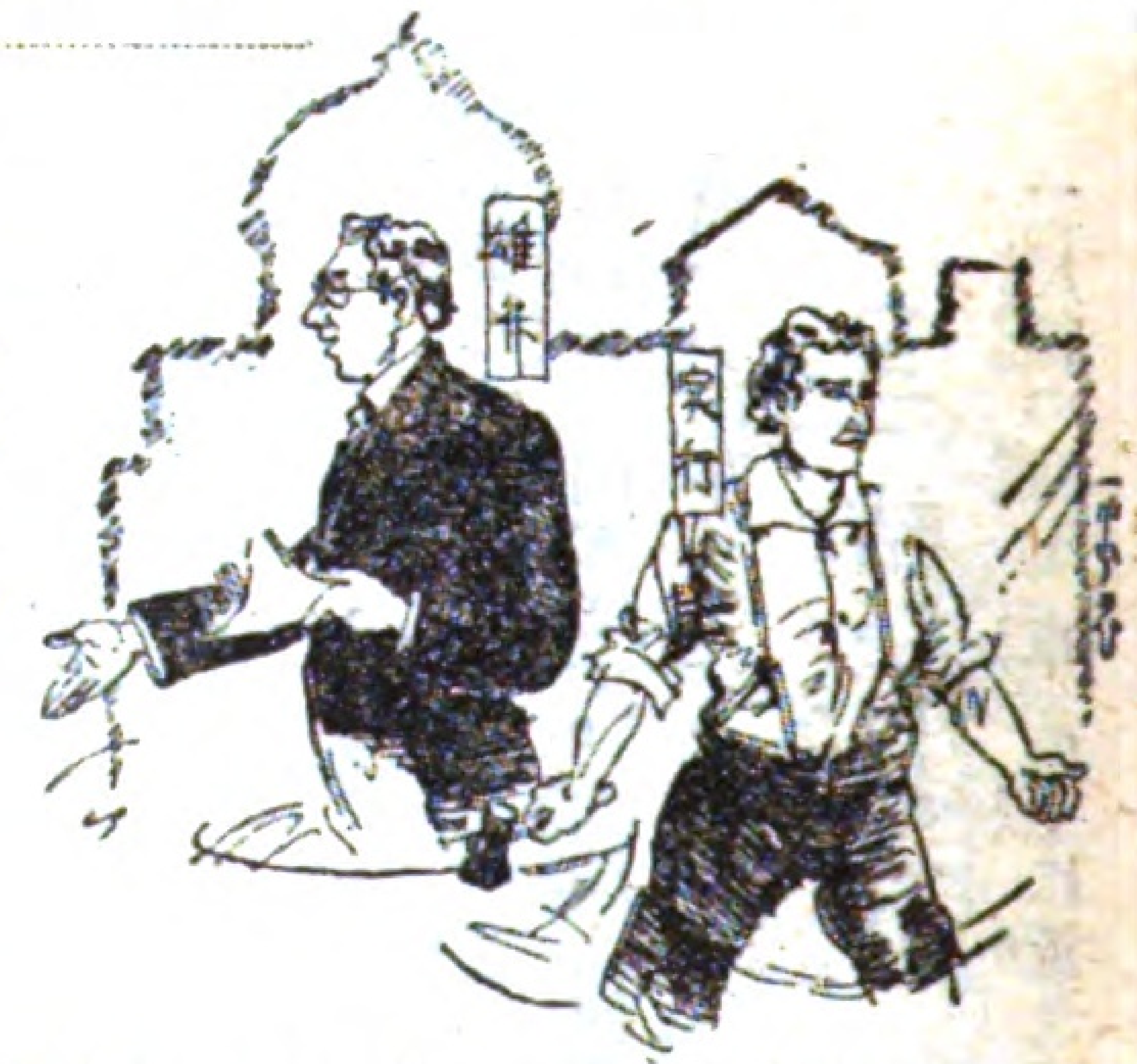
この事が遂に天朝に聞えて、嘉祥三年五月詔して逸勢に從五位下を追贈し京都に歸つて葬ることを許された。妙仲の悅び如何ばかりであらうか。自ら棺を負うて京都にかへり、厚くそれを我家の墓所に葬つた。

實行

アデンの人民が大公會堂を建立するために建築家を選定することになつた。

そして、二人の建築家にその意見をきいて、公衆の判斷を竢つて、そのいづれかの一人に委任することにした。

で、ある日、群衆の前で、二人の建築家が、おの〳〵その所說を吐露することになつた。



一人の建築家は大雄辯家で、まづ壇上に立つと、建築といふものの根本定義から、公會堂建築はいかなる樣式に於てなさるべきであるかといふやうなことについて滔々數千言を費して壇を下つた。

次に、他の一人が壇に上つたが、彼は、前者の雄辯に比して言葉すくなく次のやうな一句を吐いたのみであつた。

『アデン市民諸君、私は前辯士のおつしやつたことを實行しようと思つてゐるだけです。』

アデン市民が、二人のうちの誰を選んだか？　それは語る必要はなからう。

（プルターク『道德』より）

心の醜い貴人

ソクラテスが或る時友人と共に散步してゐると、向ふから一貴人がやつて來たので、ソクラテスは直ちに禮をし、敬意を示したのに、その貴人は聊かの答禮もなく、傲然として行き過ぎた。

友人はそれを見て大いに怒り、

『あんな無禮な男を、貴君は何故叱責しないのか』と訊くと、ソクラテスは何氣ない樣子で、

『君がもし途中で、容貌の醜い人に遇つても怒らないだらう。それと同じく、態度の傲慢な人は、その心が醜いのであるから、何んの怒ることがあらうか』

と答へて、平然として散步を續けた。

萬人熱狂 新案智慧くらべ

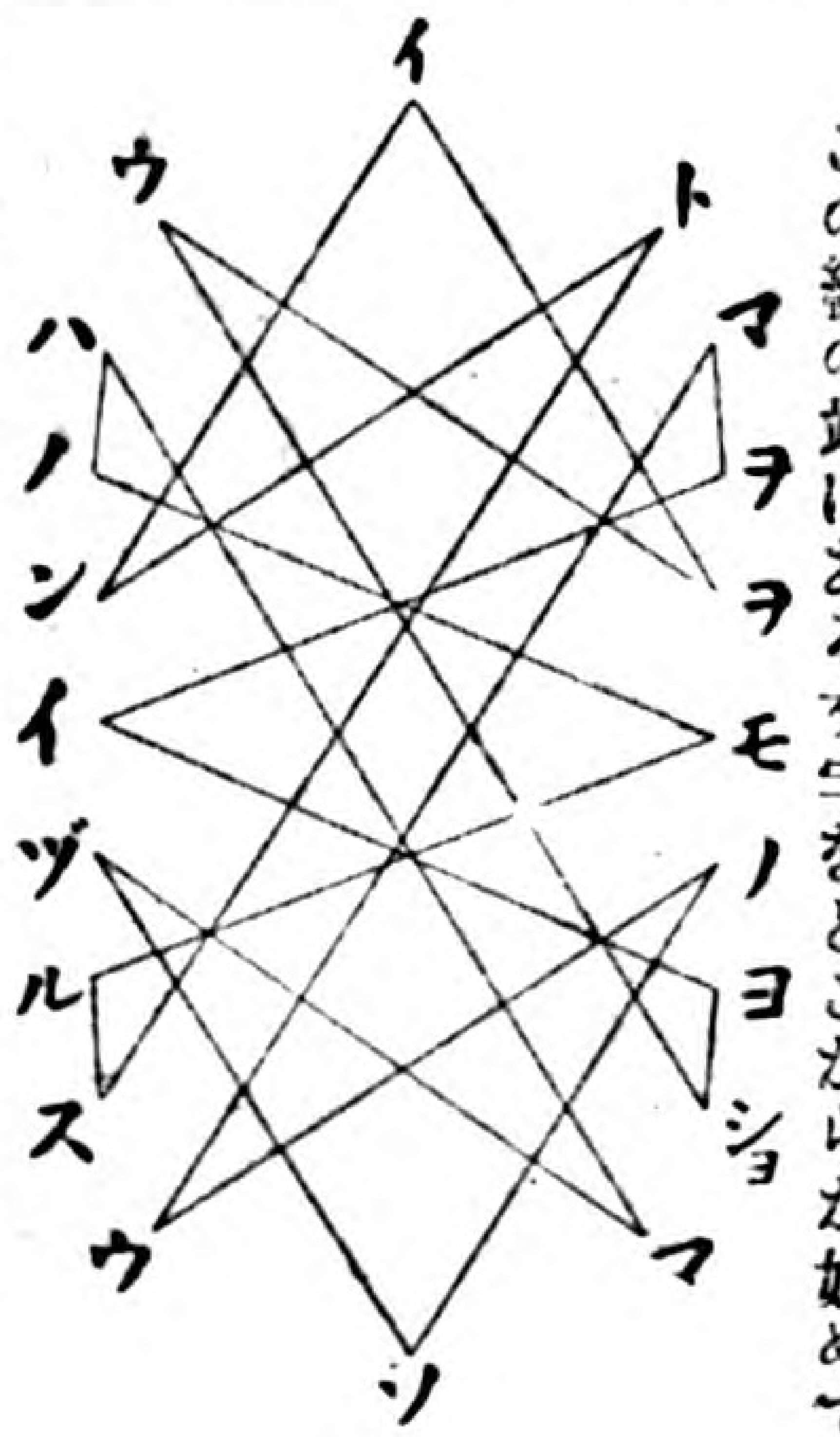
(一) 船長の計略

或る外國船が西印度洋で、暴風雨に遭ひ沈沒して、乘組員三十人は一隻のボートに乘り移つて漂流し始めました。數日後船長は、この儘三十人でゐては直ぐ食料が無くなるのに氣がつきました。そこで一同に相談して三十人中十五人は犧牲となつてボートを去る事に決しました。一同も此際とて船長の命令に從ふことになりました。處が三十人中十五人は白人、十五人は黑人でした。で船長は身贔屓して白人だけを助けたいと考へて、皆に『全員入り混つて並んだ上順々に數へて十人目十人目に當つた者から船を去つて貰ふ事にしよう』と圖りました。一同は船長の云ふが儘に並びました。そして其結果は可哀相に黑人は全部ボートを去らねばならぬ事になりました。一體船長はどう云ふ風に一同を並べたのでせうか？



(二) 何處から？

この線の端にある文字をどこからか始めて線を辿つて讀んでゆくと、昔からの有名な一句の格言が出來ます。問題は何處から、始めて讀むかにあります。



(三) 結び目造り

二尺程の紐を卓の上に置きます。今此紐の兩端を持つて、決して其を離さずに結び目を造らうとするには、どうしたら良いでせうか？

(四) 家族調べ

或る家族が集りました。其處に祖父一人、祖母一人、父二人、母二人、子供四人、孫三人、兄一人、妹二人、息子二人、娘二人、舅一人、姑一人、嫁一人ゐる筈ですのに、頭數は七人だけしかありません、どういふわけでせうか？



(五) 考へ物

(1) 死人に附き物で上から讀んでも、下から讀んでも同じ物は何アに？

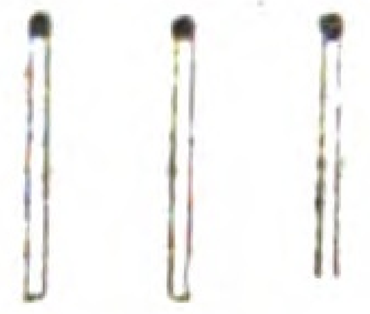
(2)夜なく〳〵人を挾んで食ふ怪物は何アに？
(3)將棋の駒二つでお勝手道具の名となります。ハテ何でせうか？
(4)涼しさうで暑いものは何アに？
(5)黒くて白いものは何アに？
(6)一つしか無いのに澤山のものは何アに？

(六) 林檎の置き場所

頓狂者の太郎は、お母さんから頂いた林檎を、いきなりお道化た恰好で身體の或る部分に置きました。所が不思議!!他の人からは前後左右から見えるのに、太郎だけは林檎をどうしても見る事が出來なくなりました。太郎は林檎を身體のどこへおいたのでせうか？

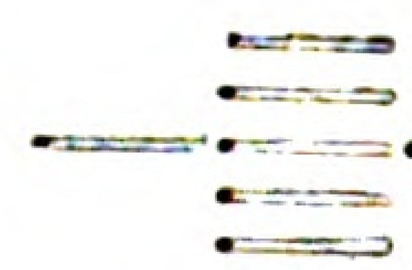


(七) 三から四を



三から四を產み出す魔術！マッチ棒三本を使つてやつて下さい。折つてはいけません。

(八) 縱橫とも五本



七本のマッチ棒を圖の樣にならべます。橫から數へれば三本、縱から數へれば五本ですが、今これを橫から數へても、縱から數へても同じく五本ある樣にするには、どう置きかへたらよいでせうか？

(九) 文字割り

これは何でせう？一家揃つて樂しむ事の出來る文字割り、少年少女諸君の推理力を養つて、笑ひの中に其數學的知識を增進する面白い文字割りです。

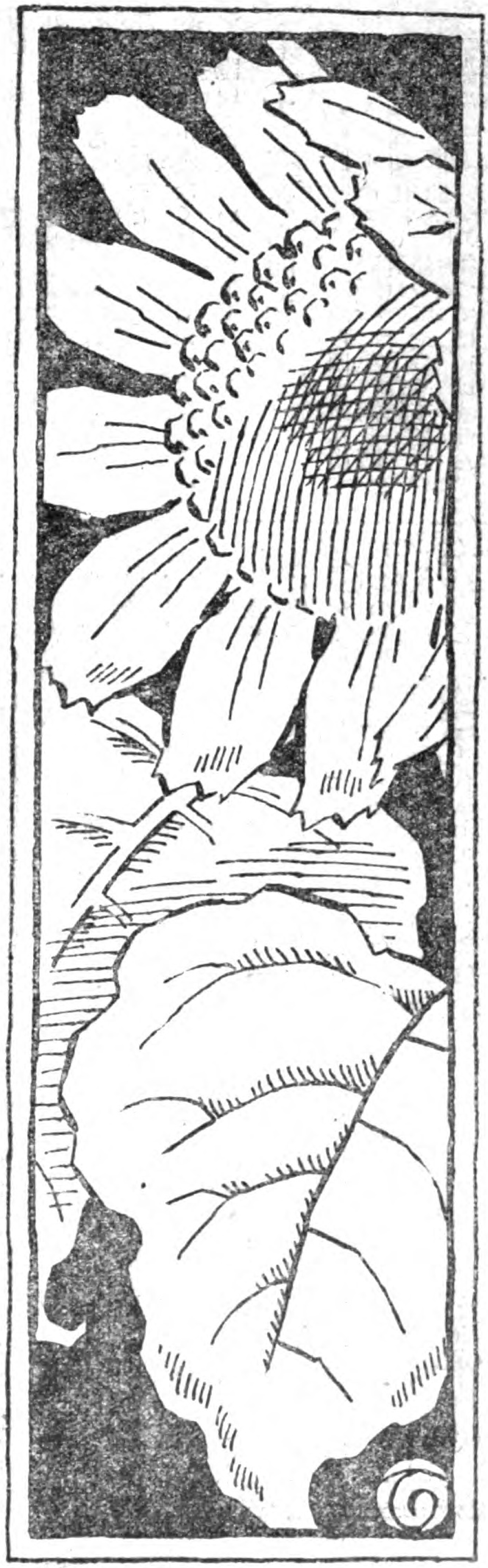
さて、異つた文字は全部で十あります。そして各文字は1、2、3、4、5、6、7、8、9、0と十の數字を代表してをります。で今ンクシイチをフサワッで割るとサウと割れ、殘りがワイとなつた。この與へられた割算に依つて各文字がどんな數字を代表してゐるかを研究し、愈々その數字がわかると今度は數の順序に各文字を並べて下さい。すると日本で最も有名な物の名前が出ます。勿論各文字がどんな數字を代表してゐるかを知るには、頭を非常に數學的に働かして頂かねばなりません。割り算の式を見ると、チからチを引いてイが殘つてゐる。この事によつてイは0の數字を代表してゐる事が判ります。これと同樣に他の數字も考へ出す事が出來る筈です。



(十) 空ッぽ

お腹の空き切つた男が、その全く空ッぽの胃袋の中へ幾つ玉子を食べたら空ッぽでなくなるでせうか？

（解答は四〇五頁にあり）



東京行進曲

菊池寛
挿繪 寺内萬治郎

新しき姉妹

折枝の井澤道代が、父の家に引きとられる日が、到頭來た。

その日、この新しい家族を迎へるために、藤本家では、家族だけの晩餐の用意が整へられてゐた。

良樹は、折枝をたゞ一人で迎ひに出かけて行つた。伯父の家

に引きとられてゐた折枝は、そこの背後の高い崖を昇れば二三分でも、藤木家の人となる事が出來たし、遠廻りをしても十分とは、かゝらなかつた。

折枝は、頭をオールバックにして、一年近くの間に、身體にしみ込んだ藝妓臭を出來るだけ、除かうとしたが、しかし着物の着こなしや帶のしめ方に、仇な藝妓趣味が、ほのかに現はれるのを、どうともすることも出來なかつた。しかし、それはよほど目の鋭い通人でなければ、看破出來ないことで、普通の人から見れば、折枝の生れつきの氣品と美貌とは、彼女を完全な一個の令孃に見せてゐた。

良樹は、折枝をつれて、自分の家の門をくゞつた。

『わたし、何だか恐いわ。』

折枝は、親しげに良樹に云つた。

『なに、心配することはないよ。自分の家だと思へば、いゝんだよ。君の部屋まで、ちやんと出來てゐるんだから。』

良樹は、折枝に力をつけながら、內玄關を上つた。

父の居間で、折枝はみんなと初對面の挨拶をする筈だつた。

折枝は、藤木家の門の前を、今までに、いく度か通りすぎたことがある。しかし、中へは入つて見ると、外から見たよりは、もつと素破らしい家だつた。

伯父の家などと比べると、これが同じ人間の住家かと疑はれる位立派だつた。

洋館の長い廊下を通つてから、今度は日本建の廊下に移つたが、それが亦右に折れたり左へ曲つたりして、二十間も歩いた頃、やつと良樹は折枝を振り返つて云つた。

『これが、お父さまのお部屋だよ。』

『さう。』

折枝は、良樹につゞいて、その部屋へは入つた。藤木氏は、嚴肅な顏をして坐つてゐた。

そして、その横に一人の美しい令孃が坐つてゐた。

『お父さん。道代をつれて來ました。』

良樹は、さう云つて父に挨拶した。

『うむ。よく來たね。その後ずーつとたつしやだつたか。』

藤木氏の言葉には、父らしい慈愛がこもつてゐた。

『はい。おかげさまで。』

『これが、なつ子なんだ。』

良樹は、なつ子を道代に紹介した。

『まあ！ わたし、なつ子ですの。ほんとうに、よくいらつしやいましたわねえ。わたし、隨分お待ちしてゐましたのよ。』

なつ子は、自分の席をはなれ、道代のすぐ傍へ來て挨拶した。

『わたし、道代でございますの。どうぞよろしく。』

『わたしこそ。』

二人は、初めて顔を見合はした。道代は、一目なつ子を見て、何と云ふ清純な感じの人だらうと思つた。なつ子も道代を見て、何と云ふ美しいきよらかな人だらうと思つた。

『わたし達、同い年ですつてねえ。』

なつ子は、なつかしさうに云つた。

『さうださうですね。わたし、こんなうれしいことございませんわ。』

道代は、なつ子が何のこだはりもなく、姉妹らしい親しさを見せてくれたので、胸が一杯になつて云つた。

『あなたは、何月にお生れになつたの？』

なつ子は訊いた。

『わたし、三月の二日ですの。』

『わたしは、十月の三日よ。だから、あなたがお姉さまなのよ。わたし、うれしいわ。お姉さまが、一人殖えたのですもの。』

父は、二人の娘が親しむのを見て、充分満足した。



『あはゝゝゝ。いゝ遊び相手だね。仲よくしなければいけないぞ。』

と、藤本氏は云つた。

『しますとも。ねえ！』

なつ子は、道代を見返つて、いかにも親しさうに、目くばせした。

道代は、なつ子にどんなに感謝しても、足りない氣持だつた。

『早百合は、どうしたんだ。早く來るやうに云つたら、どうだ！』

父は、良樹に云つた。良樹は、早百合が道代に對して、どんな態度をとるかと氣になつた、しかし、まさか初對面から、非常識なことはすまいと思つた。彼は、呼鈴を押した。女中が、走しつて來た。

『あのね。上のお孃さまに、すぐ此方へ來るやうに云つて來てくれ！』

『はい！』

女中は、走しり去つた。四人は、緊張した氣持で、早百合の來るのを待つた。だが、早百合は容易に來なかつた。五分ばかりして、前の女中がやつて來た。

『あの、しばらくお待ちになつ



て下さいつて。』

さう云はしてからも、早百合はなか〳〵來なかつた。早百合が來ない以上、四人は何となくそれ以上の話に進まれず、時々顏を見合はしながらだまつてゐた。

急に、廊下にや〻あらい衣ずれの音がした。

と思ふと、そこへ盛裝した早百合の姿が現はれた。彼女は、どこか外出でもするやうに、錦紗の着物に鹽瀬の丸帶をしめてゐた。

彼女は、つんとして、道代の方をふりむきもしないで、部屋へは入つて來ると、父の傍へぴつたり坐つた。

そして、初て道代の方へ目をやつた。

『道代、これが早百合だ。早百合これが道代と云ふのだ。』

父が、二人の娘を引き合せた。

早百合は、この異腹の妹を見たときに、その美しさに先づ壓倒されずにはゐなかつた。何と云ふ美しい女だらうと思つた。彼女は、今まで、たいていの女に對して自信があつた。映畫スターの筑波雪子とか、夏川靜江とか、美貌を以て鳴る女優の寫眞を見ても、彼女はフ、ンと鼻で、あしらふ位の自信があつた。だが、この初對面の妹を見たときに、彼女は自分の自信が危く搖りうごかされるのを感じた。そこに、あきらかな自分の敵手を見たやうに感じた。

『わたし、道代と申しますの。どうぞよろしく。』

道代は、なつかしげに姉を見上げて云つた。だが、早百合の美しい目には、むしろ險しい色が浮んでゐた。

『さう。わたし早百合。』

早百合は、頭をかるくうごかしただけだつた。

『あの、これからどうぞよろしく。』

道代は、もつと早百合に親しみたいために、二度くり返して云つた。

『……』

早百合は、だまつてまじ〳〵と道代を見てゐた。そして、その左手の無名指にかゞやいてゐる父からの贈物であるダイヤを見ると、彼女の敵愾心は更につのつた。

『あの、あなたはどこの學校を出たの。』

早百合は、いきなりきいた。

『え〻、わたし、あの本所の方の小學校ですの。』

道代は、美しい眼をみはつて答へた。

『小學校ぢやないの。女學校よ。』

早百合は、訊問するやうな口調だつた。

『女學校は出ませんの。』

道代は、かなしげな眼をして答へた。

『まあ。女學校も出てゐないの。』

早百合は、あきれたやうに、目をみはつてみせた。
『そんな事をきいて、どうするんだい。』
良樹が、いきなり口を出した。
『だつて、そんなこと位、訊いたつていゝぢやないの。』
『だつて道代は、貧乏な家に育つたんだもの。女學校へ行かれなかつたとしても、道代の責任ぢやないよ。』
良樹は、早百合を叱りつけるやうに云つた。
『さう。ぢや、今まで何にしてゐたの？』
早百合は、兄に反抗するやうに訊いた。
『そんな事も、きかなくつてもいゝ。』
良樹は、云つた。
『いゝえ。訊きたいわ。だつて、これから一所の家に住むんでせう。わたし、きゝたいの。』
早百合は、意地わるく頑ばつた。父も良樹も、蒼くなつてだまつた。だが、道代は少しもわるびれず答へた。
『わたし、藝者を致して居りましたの。』
『まあ！　おどろいた。』
早百合は、嘲笑と輕蔑とを、いつぱいに現して云つた。
『すみません。すみません。』
さう云つて、道代は顔を伏せるとしく／＼泣いた。

早百合の魅力

早百合は、隔日には佐久間と會つてゐた。ダンスは大嫌ひであつた佐久間は、いつの間にか、早百合にステップの踏み方を教はつてゐた。スポーツで、鍛へた彼の身體のフオームは、彼をすぐ形のいゝ踊り手にしてしまつた。
折枝を失つた彼の心の空虚は、だん／＼早百合に依つて、滿たされて行つた。
どこのダンス場でも、二人の踊る姿は、みんなの注目の的になつてゐた。
でも、早百合は佐久間とだんだん親しくなつたことを、兄にはかくしてゐた。四時前になると、早百合はきつと、會社にゐる佐久間に電話をかけた。
『ねえ。わたしよ。今日どう？』
『僕は差支へありません。』
『ぢや、いつもの所で待つてゐてくれる？』
『えゝ。承知しました。』
佐久間は、だん／＼自分が早百合に對して下手になつてゐることに氣がついた。
カフエ・リッツで、二人は待ち合はした。そして、活動寫眞か、でなければダンスへ行つた。その間も、早百合の美しい眸

や、やはらかな指先は、佐久間を誘惑した。だが、その歸り道などでどんなにさびしい夜道を通るときでも、早百合は決して佐久間に、唇をゆるさうとはしなかつた。

佐久間が、早百合の燃ゆる唇の魅惑に堪へ切れなくなつて、彼女の顔をいだき寄せようとすると、早百合は定まつて云つた。

『いけないわ。頰だけよ。』

『だつて。』

『いゝえ。いけないわ。』

『なぜ。』

『わたしは、結婚する人でなければ、唇をゆるさないことよ。』

佐久間は、彼女の顔をはなして、溜息をついた。

そのくせ、彼女は一しよに活動を見てゐると、きまつて佐久間の手をつねつたり、そつと耳をひつぱつたりした。たまには、耳たぶに唇をふれさせながら、冗談を云つたりした。

佐久間は、かうした早百合の肉體が、彼にとつて堪へがたき魅力になつて行つた。早百合の戀愛技巧にだんだん刺激されて來た。そのためには、結婚と云ふ正當な代價を拂つてもいゝとさへ思ひ出した。

いづれの妹？

良樹は、折枝を一日も早く、佐久間の手に嫁つてやりたかつた。佐久間が、それを聽いたとき、どんなに歡喜の聲をあげるだらうと思ふと、自分の心さへ躍り上るほどだつた。でも、折枝が自分の家の人になり切るまでは、出來るだけ秘密にして置きたかつた。佐久間にも、かくして置きたかつた。

折枝は、いよいよ藤本家の人となると、早百合との間は最初怖れてゐた通り、面白くなかつた。折枝は、あらゆる努力で、早百合の機嫌を取らうとしたが、早百合は心の扉をピッタリと閉めて、折枝を受けつけなかつた。早百合と、仲が惡いとすると、折枝のためにも、なるべく早く佐久間と結婚をさせたかつた。

折枝が、藤本家へ來てから、十日ばかり經つた頃、良樹は折枝に云つた。

『ねえ、道代。君は、佐久間君となら、結婚してもいゝんだね。』

『…………』

折枝は、顔を赤くしたまゝ、何も云はなかつた。しかし、折枝の氣持はすつかり、分つてゐた。

『ぢや早速、佐久間君に話して見よう。佐久間は、駭いて目をまはすだらう。』

と良樹は云つた。



『でも、あの方のお心をよくおきゝになつて下さい。』と、折枝は云つた。

『よく、訊かなくつても分つてゐるが、むろん、一月前も今も同じか、よくきいて見よう。』

良樹は、その日、會社の歸りに佐久間を誘つて、御飯を一しよに喰べた。彼は、話の中途でいきなり云つた。

『君は、僕の妹を貰つてくれないか。』

良樹は、佐久間がきつと、駭くだらうと思つてゐたが、意外にも佐久間は、それを兼て豫期してゐたかのやうに答へた。

『うむ。貰はうかと思つてゐるんだ。』

『えゝつ!』

良樹は、駭いて聲をあげた。

『早百合さんだらう。』

『えゝつ、君は早百合が好きなんか。』

『うん。まあ、好きと云つてもいゝね。僕は、だん〳〵あの人の魅力に堪へられなくなつたんだ。』

良樹は、青くなつて、口をつぐんだ。彼は、折枝がほんとうは、自分の妹であること、妹を貰つてくれないかと云ふことは、實は折枝を貰つてもらひたいことであることを、佐久間を駭かせながら話すつもりだつた。だが、この意外な新事實を聽くと、彼は茫然として、口がきけなかつた。

『實は、君に云はれなくとも、僕の方から君に頼みたかつたのだが、折枝の事があるから、あまりうつり氣だと思はれたくないから、辛抱してゐたんだ。一つ君が、盡力してまとめてくれないか。早百合さんは、少し婿婦らしいが、あの位なのが却つて、手答へがあつていゝかと思ふんだ。』

『………』

良樹は、心が混亂してしまつて返事が出來なかつた。

彼は、早百合よりも、折枝の方をどれだけいとしく思つてゐたか分らなかつた。早百合などは、佐久間が駄目になれば、いくらでも新しい候補者を見つけて來ることは分り切つてゐた。だが、そんなことは分り切つてゐても、折角佐久間が、結婚を申し込んでゐるのを、兄として邪魔することは出來なかつた。もし、そんなことでもしようなら、たゞでさへ道代を憎くんでゐる早百合は、道代に對してどんな敵意を見せるか分らなかつた。それは一家の中に地獄を作ることだつた。彼は、だまつてなりゆきを見る外はなかつた。

『ね、君一つ、君の家の方をまとめてくれないか。早百合さんなら、僕の父も折枝とは違ふから、すぐ承諾してくれるんだ。ねえ、君一つたのむよ。』

『あゝいゝとも。』

良樹は、さう答へる外はなかつた。

兄妹愛

良樹は、自分の心の計畫が、覆されたので、茫然とした。彼は、折枝の道代に、どう打ちあけていゝか分らなかつた。彼は、それから二三日の間は道代と家で、顏を合はすとき、つい面をそむけたいやうな氣がした。しかし、道代はいつもの通り、無邪氣で、佐久間がどんな返事をしたかを、きゝたがるやうな容子は、少しも見せなかつた。だが、心の中でその結果を知りたがつては、ゐはしないかと思ふと、良樹は絶えず、心が責められた。

佐久間と、その話をしてから、四日ばかり經つた頃だつた。ある晩、十時過ぎて、良樹が書齋に一人ゐると、扉をノックするものがあつた。

『誰だい?』

『わたしなの。は入つてもいゝ?』

それは、早百合だつた。

『うむ。』

早百合は、純白な夏服を着てゐた。

彼女は、は入つて來ると、椅子を兄の椅子のすぐ傍へ運んで來て、坐つた。

『お兄さんは、おせつかひね。』

彼女は、いきなり云つた。

『なぜ?』

『だつて、佐久間さんに、私を貰つてくれつて、云つたんですつて。』

良樹は、馬鹿々々しくて、返事が出來なかつた。

『おほゝゝ。わたし、お兄さんが、そんなに氣がきくと、思はなかつたの。よく、氣がついたと思つて、わたし感心しちやつたわ。』

良樹は、妹がにくらしくて、たまらなかつた。

『わたし、ほんとうは、まだ佐久間さんと結婚したくないの。結婚するにしても、もつと戀人同志でゐたかつたの。でも、お兄さんが折角云つて下さるんですもの。結婚してもいゝわ。お兄さん、お父さんに話して下さる?』

『……………』

良樹は、あきれて口がきけなかつた。

『お兄さんが、いやなら私から直接お父さんに話してもいいの。』

良樹は、こんなことなら、佐久間にほんとうの事を話して、道代を選ぶか早百合を選ぶか、ハッキリ定めさせたかつたが、しかしもうどうすることも出來なかつた。

早百合が、佐久間と結婚すると云ふ話は、良樹が話さなくつ



ても、すぐ道代の耳には入つてしまつた。

　ある日、良樹は愛する妹を呼んだ。

『おい。佐久間君のこと兄さんが話さなくつてももうお前には分つてゐるだらうね。』

『えゝ。』

『かんにんしてくれ。お前のことを話さない前に早百合のことを云はれたのだよ。兄として、早百合の話をぶち壊すわけには行かなかつたのだよ。』

『わたし、何とも思つてゐませんの。』心の底は知らず、道代はおだやかに云つた。

『そんなこともないだらうが。』

『いゝえ。ほんとうでございますの。お兄さんの

妹にして頂いたことだけで、私充分滿足してゐますの。私お兄さんの妹として、もつともつとお家にゐたうございますわ。』

道代はさびしく笑つた。

『ほんとうか。』

『えゝ。ほんとうですわ。』

『ぢや、お兄さんも、お前を妹として、出來るだけ愛してあげよう。そして、きつときつとお前を幸福にしてあげよう。』

『ありがたう、お兄さま。』

二人は感激の涙の中に手をとり合つた。かつて、戀人だつた妹と良樹は、今心からなる友愛を誓ひ合ふのだつた。

×

早百合との婚約が正式に定まつたとき、佐久間は藤本家を訪問した。そのとき、良樹は彼に新しい妹を紹介した。

『佐久間君。これが、僕の二番目の妹なんだ。』

佐久間は、折枝を見ると、色を失ふほど、おどろいた。

『なぜ！　なぜ！』

『お恥しいが、父が外の女に生ませた子なんだよ。』

道代を遠ざけて置いてから、良樹は云つた。

『えゝつ！』

『僕の父が、折枝を世話したのは、つまり贖罪だつたからなのだ。』

『さうか。それで君も救はれたわけだねえ。』

『うむ。僕も、それと知つて、どんなに氣持がよかつたか分りはしない！』

『だが、なぜ君は折枝さんが君の妹だと云ふことを、僕にもつと早く知らしてくれなかつたのだ。』

佐久間は、うらめしげに云つた。

『佐久間君、それは君の方が無理だよ。僕は、いつか君に、僕の妹を貰つてくれないかと云つたのを覺えてゐないかい。僕は、あのとき、君が折枝を愛してゐてくれることだけを知つてゐたが、早百合とのことはちつとも知らなかつたんだ……』

『えゝつ！』

佐久間は兩手で顏を掩つたまゝ、しばらくは顏を上げることが出來なかつた。

早百合と佐久間が結婚式をあげてから間もなく、良樹は會社の用を兼ね、英國へ二三年行くことになつた。彼は、そのとき妹の道代も、一しよに連れて行つて、英國で新しく教育し直して見たい氣がした。頭のよい道代だから、凡てを新しくやり直しても、決しておそくはないと思つた。良樹が父にそのことを相談すると、父も大贊成だつた。

『三四年、外國へ行つてくれれば、新橋に出てゐたことなどもみんな忘れるだらうし、英國風の教育を受けさせることも、わるくはないからね。』と云つた。

×　×　×

だから、道代は今ロンドン郊外のある尼僧院の附屬女學校に居る。

（完）



バルカン半島中の秘密國

人外魔境脫出記

布利秋
挿繪 齋藤五百枝

一

『もう不可ん』

幾ら藻掻いても、のた打廻つても、冷たい死の手は私の頸ねッこをしッかと押へてしまつたのだ。

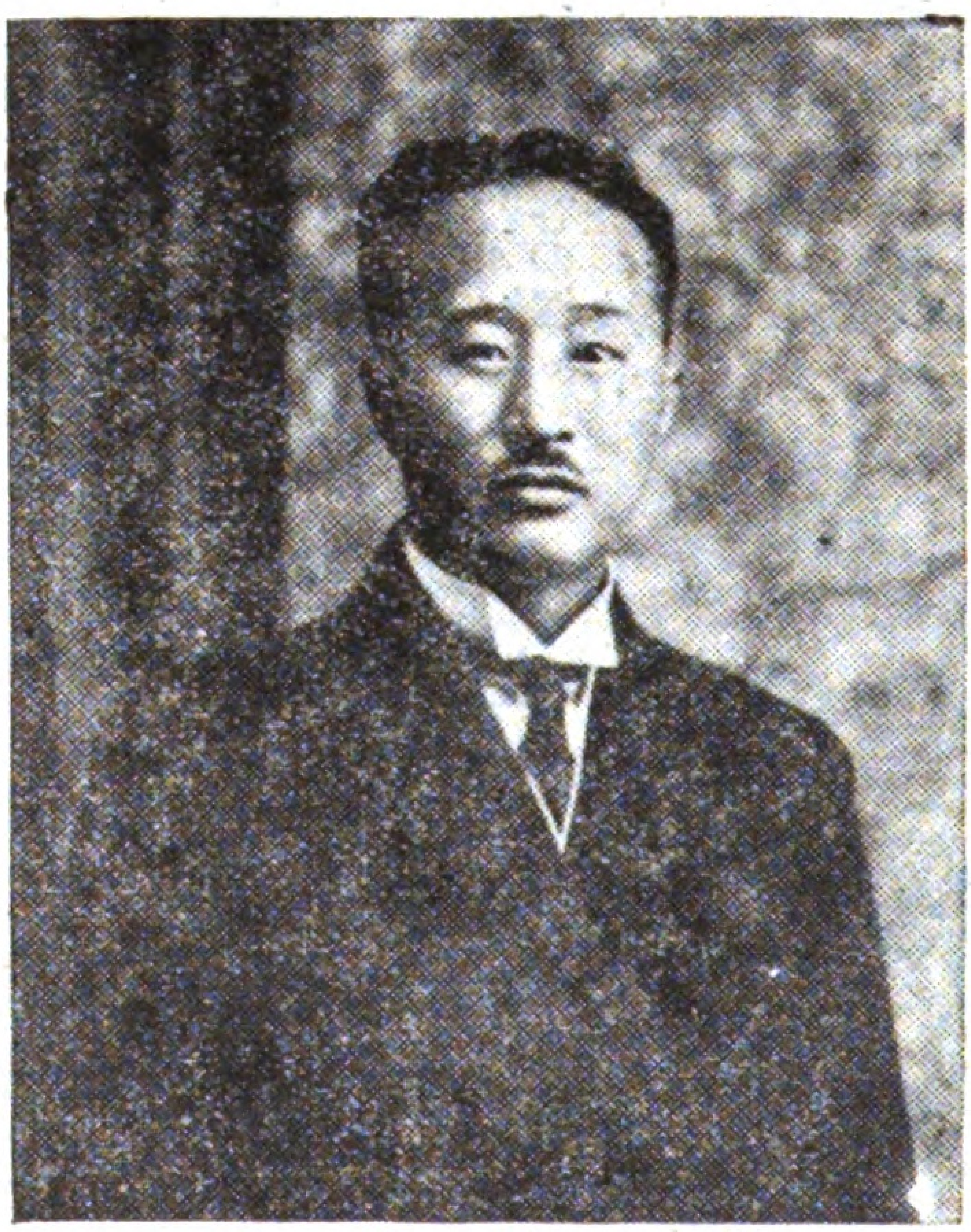
いやでも應でも私は死を決するよりほかなかつたのだ。

――それが、かうして生き永らへて、再び怪異な過去の世界をふりかへることの出來るのは、全く奇中の奇である。よく無事でゐたものだ、よく恐しい死の淵から逃れ出る事が出來たものだと今もつて不思議でならない。

私は、現在、世界遍路の旅を終つて、十八年ぶりで母國にかへつて來たのである。そして、私をうんでくれた此の國の温かいふところに抱かれて、陰慘な惡夢にうなされてゐたやうな過去の出來事を諸君の前に展開しようと云ふのである。

地中海の眞ン中に、ぬつと長靴を突出したやうな、伊太利半島と、アドリヤ海を隔てて、相對して居るのが、世界大戰の後、新たにうまれたバルカン半島の中のユーゴースラビアである。海岸に沿うて、ヂナルアルプスの山嶺が東南に延び、その極まる處にモンテネグロがある。モンテは『山』ネグロは『黑』山が黑ずんで居るので、此ういふ名がついて居る、だから『黑山國』と書いてゐる。此の黑山國とバルカン半島の突端の希臘とに挾まれて居るのが私のいふ未開國アルバニヤである。

大きさは、略我が臺灣位、人口は大略二百萬と見ればいゝ。元は王國だつたが、現在は、大統領が國政を統裁して居る。


布利秋氏

これが又頗ぶる怪しげな元首で、國民から選擧されたわけではなく、國中の有力なブルジョアが推薦したもので、議會は存在はして居るが、帝制ロシア初期の議會の如く變態的なものである。私の入國した頃は、此の大統領さへも居らず、回々教、カソリック教、希臘教、此の三つの宗教團が三巴になつて、勢力爭ひをして居つた。國中、どつちを向いても、山又山奥地に入ると、今だに原始的な拜火教も殘つて居る。

こんな未開國を何の爲訪れたのかといふ疑問が起るであらうが、私の立場からいふと、現在歐洲の一角に、まだ此ういふ野蠻國が存在して居るといふ、單にそれ丈でも、見逃す事の出來ぬ興味の對象であつた。歐米の新舊大陸を跨にかけて歩いた私が、只一つ此の國だけを取りのこしてゆくのは、いかにも殘念であつた。入國したら危險が伴ふことは分つてゐたが、それでも、何としても思ひ切れなかつた。

『よし、行かう』

私は、非常な覺悟をして、入國の仕度をした。

バロナを出た舟は、小半日もかゝつて、對岸のヅラゾへついた。

よつてチラナで、早速旅券のビザをもらつた。

『君は、山越しに、ユーゴースラビヤへ出るといふのだね、危険なことだ、やめたらどうか』

　去年の林檎のやうに小皺がよつて居る副領事が眉をひそめた。

『それは、豫め承知して居ますが、前人未踏の地を歩きたいんです』

『隨分風變りだね、君は東洋の旅行家なんだね』

『さうです』

『ぢやア教へるが、成るべく乗合客の澤山ある馬車にのつて行くがいゝ、……分つたね』

　親切に教へてくれた。

　處が、折あしく私が、チラナから乗つた馬車には、客が一人しか乗つてゐなかつた。それも途中で降りて了つたので、結局、私一人になつて了つた。

　馭者のアルバニヤ人は、默つてゴトゴトと馬車を走らせて居る。馬車といふと、いかにも體裁がいゝが、實は、ごく



粗末な簡單な構造で、その上、馬は、ひよろ〳〵に痩せ衰へて居る。國境までゆくと宿屋があると聞いて來たので、ぜひ今夜はそこへ泊らうと思つた。

　夏の終で、夕暮がせまつてくると、黒ずんだ山の肌が、反映をうけて、パッとかゞやいて居る。馬車は谷間の山道を登つて

ゆくのだが、人通りが全く途絶えて居る。時々聞き馴れぬ鳥の啼くのが、積みかさなつたやうに深い森の中からもれてくる。巨人の鼾のやうな水聲が遙かに流れてくるので、河に沿うて走つてゐることも、ほゞ推察される。

と、この時、行手に當つて、一色にぼかした夕闇の中から吐出されたのは、同じ構造の馬車だ。

『はゝア、歸りの馬車だな』

私は、さう思つた。此方からもすゝむ、向うからもすゝむ、路は同じだ。近よるにつれて、向うの馬車は、速度を鈍らせたが、丁度私の乗つてゐる馬車と摺違ひにならうとした瞬間、ひよいと馬車を横に向けて、道路に立塞つた。一間半位の狭い山路だ。此方の馬車はすゝむことが出來ないで、ぴたと馬を停めた。

『變なことをするな』

私が座席から半身をのり出させると、向うの馬車からは、三人の獰猛なアルバニヤ人が、ひらりと降りた。見ると、三人とも拳銃を持つて居る。



『おや』

私は、どきんとした。

二

何やら切裂くやうに鋭く叫んで、三人はやにはに私の馬車の馭者を引ずり下した。射つのかと思ふと、さうではなく、銃の

臺尻で毆りつけて、その場に昏倒させて了つた。

今度は、私に向つて來たが、何をいつてゐるのか、言葉は一切分らない。私は、仕方がない、下手に抵抗するよりも安全な方法をとるつもりで、亞米利加流に、ハンド・アップをして、彼等の爲すまゝに任せた。先にたつた屈强の奴が、私を馬車から引ずり下した、私は馬のやうに亂打する彼等の手中にあつて、手出しが出來なかつた。彼等は、私のコートを剝ぎ、チヨツキを取り、ポケツトに入つて居る金をのこらず掠めた。殘つたのは、シヤツと、パンツと、靴と、これ丈しかない。山の中の一本路、逃げるにも逃げられず、反抗するにしても、此方は一人、相手は三人のアルバニヤ人、何うにも動きがとれなかつた。

すると、彼等の中の一人は、私の乘つてきた馬車から馬を外した。何うするかと思ふと、自分達の馬の前へこれをつないだ。

何かしら、三人して聲高に叫んだが、今度は馬を外したボロ馬車に手をかけて、えつさ〳〵と谷底へつき落した。馬車は、こつぱ微塵になつて、脚下の谷に殘骸を横へた。可哀さうに、馭者はまだ息を吹返さずして、路傍に倒れたまゝである。彼等は、再び私にピストルをつきつけて、馬車に乘れと指圖した。

私は、觀念して、彼等の云ひなり次第になつて、馬車にのると、三人はもう一度昏倒してゐる私の馭者を毆りつけた。

がら〳〵ッと、二頭立といひたいが、事實二頭曳の馬車が動き出した。

彼等は、手眞似身振で、しきりに私に話しかけたが、一向通じない。

私は、首をふつて、分らぬといふ表情をして見せた。

日は暮れる。谷といふ谷は、刻々闇の色につゝまれてくる。

馬車は下り路と見えて、勢ひよく走る。方向は全く分らぬが、今降りてゆく谷が、私が最初登つて來た岨路とは違つた方角であること丈は想像出來た。

『何處へゆくのだらうか』

私も心配になつたが、突嗟の場合にも、馭者を殺戮せずして、毆り倒したに止つて居る、又旅行者としての私に對する態度も、脅迫して掠奪したに止つてゐる。此の分では、まさか一命にかゝはるやうなこともあるまい、機會を見出せば逃出すことも出來ようかと、不安の中にも幾らかの望みをつないだ。

どの位の距離を走つたであらうか、時計は已でに奪はれてゐるので、時刻も判然しなかつた。只、私の腹加減で推して見ると、夜の十時前後と覺える。

水のやうに流れる月あかりにすかすと、一丈餘もあらうかと



思はれる高い土塀が浮き出て見えた。

馬車は、土塀に沿うて行つたが、見あげると、一何の装飾があるわけでもなく、又何の技巧が加へてあるわけでもなく、亂次のない無恰好なもので、滿洲

の部落でよく見るやうな、あれと同じ形である。

やがて、馬車は停つた。彼等は私を抱くやうにして引出したが、そこが表門であつた。太い丸木でつくつたもので、門番がぬつと立つて居る。

『門をあけろ』

恐らく此うい ふのであらう。彼等は、門番に聲をかけると、中から門を外した。私は到頭土塀でかこまれた一廓の中に拉し去られたが、すぐ眼の前には、木造の草葺屋根の低い粗雜な建物が五つ六つ見える。一人の子分につれられて、此の屋内へ入ると、始めて頭目らしい男の前に引き出された。

『や！』

私は、頭目の姿を見ると、ゾツと身ぶるひした。たつた今までは、命に別狀はなからうと信じ切つてゐたが、此の男は、又何といふ物凄い容貌であらうか。恐く剃刀を當てたことはないと見え、茶褐色の頭髪もがま髭も蓬々と生えのび、日にやけた赤煉瓦色の顏、大きないかつい鼻は、その方へ顏全體が集中して居るやうだつた。薄氣味わるくじろ／＼と見下す眼は、東洋人のやうに瞳が黒かつた。人種學の上からいふと、アジア系とアリヤン系との雜種であつて、皮膚の色は、吾々とかはらなかつた。もう五十近い年配であらうが、見るからに巨大ながつしりした骨組や、ふん張りのある肩が、いかにも腕ツぷしの強いことを示して居る。大江山の酒顚童子は、露西亞人であらうといふ說があるが、頭目の形相には、お伽噺に聞いた酒顚童子のやうな慓悍な面影がある。頭目をはじめ、此の山寨の子分の服裝も、餘程文明人とは違つて居る。東北人の穿くモンペのやうなもの、下を細く上を膨らませた恰好のズボンをつけて居る。脚には草鞋のやうなもので、あとで分つたが藁や布や獸皮をまぜた簡單な靴を穿いて居る。

『此奴にかゝつたら、もう迚も逃れることは出來まい』

さう思ふと、急にがつくりとなつて、私は口が利けなくなつた。その一刹那の自分の態度を潤飾せずして、率直にぶちまけるが、きつと私の顏も土氣色にかはつてゐたに違ひない、手足もふるへてゐたに違ひない。情ないが、日本帝國にうまれた日本人も、かうなると形なしである。

頭目は私に何かいうたが、不可解である。私は、入國前にアルバニヤ土語の研究はして居らない、從つて土語は單語一つ知つては居らない。

此方の言葉も向うに分らぬので、只默然として、重苦しく相對した。頭目は、子分に何かいひつけると、やがてそこへパツと花のさいたやうに、美しい姿をあらはしたのは、眉目形のととのつた二十二三の女性である。

『エレンカ・キセル？』

彼女は、突然私にかう問ひかけた。エレンカ・キセルは、（希臘語は分るか）といふ意味だ。

『あッ』

私は、飛上つて喜んだ。簡單な希臘語なら私も知つて居た。この場合、たとへ一言でも半句でも、言葉が通ずるといふことは、百萬の味方を得たよりも心強かつたのだ。

『少しは知つてゐる』

『さうか』

女は、につこりと笑つた。胸に十字架をかけて居るので、クリスチヤンであることも判つた。

『どうして、私をこんな甚い目に會はせるのか』

私は、女に向つて反問した。

『いや、お前は捕まつたのです、お前はもう此處から一歩も外へ出ることは出來ないのですよ』

から云つて居る。

それから此女を通譯にして、頭目と會話をつゞけた。

『お前は何處の國の者か』

頭目が質問した。

『日本人だ』

『日本？ そんな國があるのか、何の邊だ』

小首をかしげて居る。

『支那の隣だ』

『さうか、支那なら知つて居る』

『一體、これから私を何うしようといふのか』

私がきく。

『お前はこゝで奴隷として一生涯働かねばならぬ』

私は此の一語をきくと、ぐんにやりとなつた。泣くにも泣かれず、せつぱ詰つてそこへ突伏して了つた。

女が、私の手を取つたので、引かるゝまゝに、跟いてゆくと、寢室へ案内してくれた。むさくるしい土間である。

『こゝへ寢るのか』と、私がいふ。

『さうです』

『餘り甚いぢやないか』

『待つてゐなさい、わたしが枯草を持つて來てやる』

女は、どこからか枯草をどつさりかゝへて來た。

『わたしは、カテリナといつて、もと希臘のサロニカの生れだが、お前のやうに、こんな處へつれて來られて、今では仕方がなく頭目の妻になつて居る』

始めて身上話をした。

『どうして、アルバニヤへ來たのか』

『さう、わたしの配偶者が、ふとした間違から人を殺した、それで罪に問はれることになつたもので、國境を越えて、こゝへ



落ちのびたんです、わたしは夫の跡を追うて來たが、どうしても行方が分らない、致方なく又國へかへらうとする途中、虜になりました、あの頭目には、まだ一人、アルバニヤ生れの妾が居る……』

聽いて見ると、彼女も氣の毒な運命で、其の夜からいろ〳〵親切にしてくれるのは、云はゞ同じ運命におかれた私に對する同情のあらはれだつた。

『神さまに祈りなさい』

カテリナは、さう云ひ殘して、部屋を出て行つた。無論入口の戸の鍵は下されて居る。寢るといつても、寢衣があるのではない、シャツとパンツと靴、そのまゝで、掻集めてくれた枯草で鳥の巢のやうな牀をこしらへた。

だが、神經がさえて來て、どうしても眠られなかつた。蠻地特有の蚊までぶうん〳〵とうるさく、此の哀れな犧牲者の血を吸ひにくる。日本の蚊のやうな生やさしいのではなく、圖體の大きい、小憎らしいやうな藪蚊である。

私は、悶々として、夜つぴてまんじりともしなかつた。

『何とかして逃出す工夫はないかしら』

智慧をしぼつて見たが、監視がきびしいので、所詮不可能らしかつた。それでも、逃げよう逃げようといふ思は、胸一ぱいであつた。

かうして、第一夜は明けたのである。

三

でも、三日位たつと、疲れが出て眠ることが出來た。私の仕事は先づ臺所の手傳で、男女六人程のアルバニヤ人がゐて、一切きりもりして居る。酒も手作りなので、果物の汁を搾らねばならぬ。三度の食べ物も作らねばならぬ。これは唐黍を搗つたものに饂飩粉をまぜて燒くのだ。うまくも何ともない、全く腹ふさげなのだ。つんで來た山茶で茶も作らねばならぬ。毎日ではないが、一週間二度位賭場が開かれるので、あとでその掃除もせねばならぬ。奴隷としての勞働は、相當にあつたが、夜七時頃食事がすむと、私は寢室の土間に投りこまれて、外から鍵をかけられる。だから、尾籠な話だが、朝戸をあけてくれる迄は、一歩も外に出られぬ爲、小水も大便も、土間へ垂れ流しである。

『どうせ此のまゝ死ぬのだ』

さうなると、ぼんやりとして、一向食慾が起らない。飲みたくも、食べたくもない。私は骨と皮ばかりになつて、日に日に痩せ衰へてゆくのが、自分にもよく分つた。

賭博が行はれる晩は、騒々しい雜音が、私の寢室にも、手にとるやうに聞えてくる。がら〳〵ツと物を投げる音だの、土語

で笑ひざわめく聲だの、非常に賑かである。

『又始まつたな』

只、さう思ふだけで、中の容子は分らなかつた。其の中に、一度だけ、カテリナに伴はれて、賭博場を見たことがある。粗末な丸木のテーブルがあつて、丸木の切株を椅子に代用して居る、完全なテーブルや椅子などは無論ありやしない。電燈がないので、石油を錻力罐に入れて、火を點けて居る、部屋中、油煙で眞黑にくすぶつても、彼等は平氣で居る、賭博はテーブルを挾んで向ひ合に坐ると、木で出來た圓い札があつて、これを一つづつ持つて來て、目盛のしてある盤の上へ並べる。何のことはない、挾み將棊の要領で、二人で勝負をきめる。その間、痰は吐散らす。唾は飛ばす、甚しいのは、其の場で、大小便までするので、翌日の掃除は鼻抓みだつた。

不安の中に一月餘も過ぎ去つた。

すると、ある日、頭目は、一黨を引きつれて狩に出かけた。これは、猪とか鳥とかいふ獲物を農作物と交換する爲であつて山塞に殘されたのは、門番の男と、妾のカテリナと、捕虜の私と、此の三人だけである。

『逃出すのは、今だ』

こんな好い機會は、又と來さうもない。私は躍上つて喜んだが、さて難物なのは、門番である。私は、臺所から酒を持出して、彼にしきりにすゝめたが、此の男泥鰌のやうに醉つても、容易に眠らうとはしなかつた。

その中に、一行が狩からかへつてくる時刻が迫つて來た。

『あゝ、駄目だ』

がつかりして居ると、カテリナが來て、

『お前に一寸見せるものがある、わたしに從いて來なさい』

引ぱるので頭目の寢室へ案内された。彼女は、床板をあげた、中は地下室らしい。彼女が先に立つて入つてゆくので、私も、土の段々を降りた。ひやりと底冷たい感じがしたが、どつちを向いても、厚ぼつたい闇だ。

『氣を落ちつけて、よく手で觸つて御覽』

さゝやくやうにカテリナは云つた。

『何かあるのか』

穴藏へ入つた刹那は、明るい處から不意に暗い處へつれこまれたので、眼がくらんでゐた。しばらくして、暗黑に馴れてくると、小さな直徑五寸位の土窓から、夢のやうに微かな光が忍び込んでくるのに氣づいた。その光をたよりにして、そつと壁にさはつて見ると、何か此う硬い細長いものが吊してある。」

『分つたか』と、カテリナがいつた。

『これは何か』

『鐵砲ですよ、よく御覽』

『何？』

驚いてもう一度瞳をすゑると、今度は穴の中が明るくなつた。私の眼が見えて來たのだ。意外、繪に描いたやうに、ぞろりとぶら下つて居るのは、どれもこれも骸骨なのだ。

『みんなで、十七ある、全部外國人です、英國人、露西亞人、ルーマニア人、波蘭人、獨逸人、ハンガリー人、塞耳亞人、ブルガリヤ人、土耳古人、希臘人、伊太利人、西班牙人、ホルトガル人、アラブ人、埃及人、瑞典人、丁抹人、……だがね、まだ東洋人の骸骨は一つもないので、十八人目には、日本人のお前の骸骨を飾ることが出來るといつて、頭目は大喜びです……』

『では、私を殺すつもりなのか』

『無論、今少したつと、人骨祭がある、その時お前を殺すのだが、それが頭目の非常な名譽になつてゐるんです、……さア、長くこゝに居つてはいけない、立ちなさい』

カテリナは、手をとつてくれたが、私はそこへべたとなつて了つて、動けなかつた。御恥かしい譯だが全く腰が抜けたのである。それが祟つて、今でも一寸どうかすると、腰がふらつく。先日、背後から自轉車に衝き倒された時も、ハツと思ふと、腰がたゝなくなつた位。

カテリナの手につかまつて、辛うじて穴蔵を這出したが、此の山塞の怪異なる秘密を知つた私は、もうそれ以來、食物が喉を通らなかつた。何といつて、其の時の私の感情を云現すべきか、適當な語彙が見出せない。

運命だ、簡單にさう片づける氣にはなれない。私の郷里愛媛縣には、親も居る、兄弟も居る、こゝで人骨祭の犠牲になつて死ぬとしても、せめては、親兄弟に此の事を知らせたい、八郎は世界遍路の際、行方不明となつて、消息がない、いづれ死んだのだらうが、東に向つて手を合せていゝか、西に向つて回向していゝか、それさへ分らぬといふのは、悲しいことだ、昔から犬死するといふことがあるが、犬死しても、死んだこと丈は傳へてくれる、こゝで今私が死んだとしても、これを國元へ傳へる方法がないのである、それが一番私の心を暗くしたのである。

カテリナは、時々來て、十字架を私の額にあてた。

『神さまに祈りなさい』

さういつてくれるが、たゞもう氣落ちのした私は、魂の抜け出た人のやうに、ふら／＼となつて、痩せ衰へて行つた。

祭がいよ／＼一週間後に迫つた。

『いよ／＼お前を犠牲にすることになつた、ついては食事をとつて、安心して死になさい、わたしが毎日祈禱つてあげる』

カテリナに勵まされて、私も初めて心から神に祈禱をさゝげて見た。そして飲まず食はずで、病氣といつはつて部屋に寢て

居つた。

夜があけて、日が暮れる、――日一日と、祭が近づく。私の最期の時も近づく。

私の頭は、冴えてくる、神經は尖々しくなつてくる。

『あツ！』

天啓である。思ひもうけぬ素晴しい妙案が、私の腦中に電のやうに閃いた。

『さうだ、すぐに……』

私は、身内の元氣をもりかへして、カテリナの處へ相談に出かけて、ぜひこれ丈の事を頭目に通譯してくれと頼んだ。

それは此うなんだ。

(私は何もかも運命と諦めて居る、で、絶對に逃出さうとは思つてゐない、ついては人骨祭當日に私を殺す丈は止めて欲しい、東洋人の骸骨が望みなら、こゝに私といふ生きた骸骨が居る、生きた骸骨は、物をたべるが、同時に働いて居る、どうか私に働かせる丈働かせて、病氣で死ぬまで待つてくれ、もし、物をたべてわるいといふことなら、一滴の水一片のパンも與へずに干乾にしてくれ、それでも滿足である、生きた骸骨をもつて居ることも、死んだ骸骨をもつて居ることも、結局同じではないか、遲かれ早かれ骸骨になるのだから、その間私を奴隷として使役した方が、お前の得ではないか――かういふことを、理由を含めて、頭目が納得出來るやうに傳へてくれないか)



これだけのことをカテリナに徹底させるには、實に骨が折れた。何せ、私の希臘語の

知識といつても、極めて淺い。カテリナの話にしてからが、ところ／＼の單語が分るので、それで大體を想像する程度だ。簡單な會話ならそれで事が足りるが、此ういふ複雑な會話になると、餘程六かしい。私は、私の知つて居る希臘語の語彙をのこらずぶちまけて、いろ／＼に工夫をこらし乍ら、カテリナに十分諒解出來るやうに話しこんだのだから、ほんとうに必死だ。分らぬ處は手振身振で補つたことは云ふまでもない。

『よく分つた』と、カテリナはうなづいた。

そこで、早速頭目に會つて、此の交渉をした。カテリナが一生懸命になつて通譯してくれた。いくら蠻人でも、人間は人間である。どうやら私の意見がのみこめたらしい。



四

『それも一理ある』

頭目は人骨祭の日には、日本人を殺さずして、私の身代になる木の首をつくつて間に合はせるといつた。

これこそ、ほんとうに萬死中の一生だつた。

おかげでその日は、世にも不思議なる人骨祭を目撃することが出來た。この祭は、彼等の年中行事の一つで、穴窖から人骨を出して來て飾り立て、踊つたり謠つたりすることになつて居る。だが、一月餘も奴隷として現在働いて居る私の前で、さういふことも出來なかつたと見え、人頭にかはるものを木で細工して、四五十人の土人が神輿でも擔ぐ様にして、廓内の廣場で踊り狂ふのだつた。木をくり拔いて、それへ糸を通して拔くと、妙な響を出す樂

盤や、ポンコ〳〵と叩く丸い木魚のやうなものや、多分馬の尾だらうが、細い糸を張つて、ビーン〳〵と音をさせる琴や、がさつな音のする鐵笛や、さういふものを鳴して興をそへ乍ら、濁酒を呷つて居る。

その中に、劍舞がはじまつた。赤い頭巾のやうな帽子をかぶつて、例のモンペのやうなズボンをはいて、青龍刀のやうな蠻刀をもつて踊る。踊り乍ら、時々チャリン〳〵と刃を合せては、又踊る。他愛もないものだが、彼等は夢中になつて踊る。飲める丈飲んで、謠へる丈謠つて、踊れる丈踊つて、愉快をつくすのである。

翌日の跡掃除は私の役目で、相かはらず至る處に人糞が堆くなつてゐる、一々その始末をせねばならなかつた。

その日、裏打といつて、二十人餘の者が集つて一口飲んだ後、晝から博奕がはじまつて、夜になつたが、まだ止まなかつた。

私は、いつも七時か八時頃は、寢室に入ることになつてゐたので、その晩も時刻が來たので、枯草の上にごろりと横になつてゐた。人骨祭に助かつたので、幾らか氣がのび〳〵したのである。

その時である。

博奕場が急に騷々しくなつた。がたんといふ物音、罵しりわめく叫聲。

『何か起つたな』

私が、むくりと刎起きた途端、あわたゞしい音が、部屋の前で止つた。いつも鍵がかけてあるのだが、その夜は、その騷ぎの前、まだ誰も鍵を下さなかつた。

『ヌノ』

私の名をよんで、ころげこむやうに部屋へ飛込んで來たのは、血相かへたカテリナである。

『何うしたか』

『今だ、逃げるのは今だ、さア、わたしと一緒に來なさい』

息をはずませて居る。

『仲間同志の喧嘩をはじめたのです、頭目が仲裁に入つたが、どうしても利かない、博奕場は引くりかへるやうな騷ぎです、……早く仕度をしなさい、神さまがお前を救つて下さる時が來たのです』

口早に説明してくれた。

博奕場は、ごつた返して居ると見え、わツわツと騷ぎ立つて居る。私は、カテリナに引ずられるやうにして、部屋の外へ出た。一歩、一歩が、雲の上を踏むやうな心持。足がてんで地につかなかつた。

門の前までくると、此の騷にもかゝはらず、門番がちやんと

拵へて居る。

『拙い、裏へ廻りなさい』

取つてかへして、裏手へ出る。此の山寨は、後方に高い山をひかへ、前方をぐるりと半圓形に高い土塀でかこんであつたが、その山の手と土塀との繼目がある。そこまで來たが、身の衰弱してゐる私には、一丈餘の塀に飛上る氣力はなかつたのだ。

『わたしの肩にのれ』

カテリナが、さういふので、兩肩の上にあがつたが、それでも塀の頂は、私の胸の處まで來ない。學校時代には、鐵棒は得意だつたが、何うしても、懸垂が利かない。仕方がない、御免蒙つてカテリナの金髮の上へ乘つた。それで、やつと乳から上が、塀の外へ出たので、身體をもち上げることが出來た。私は何は構はず、身をかへして土塀の外へ飛下りた。『左様なら』といふ希臘語は知つてゐたが、その最後の別れの言葉も投げかけずに……

私は無我夢中で谷へ降りて、そこに流れて居た川に沿うて、下へ〳〵と走つたなら、海岸へ出られるだらうと考へた。どういふ路をどうして走つたのか分らぬが、意識づいた時には、綿のやうに疲れて岩穴に眠つてゐた自分を見出した。日がかんかんと照つて、四邊は明るくなつて居る。

『追ひかけられては大變だ』

又、勇氣をふるひ起し、川下へ半里ばかり降ると、一軒の農家の前へ出た。裏手では善良さうな農夫が、馬車に野菜物を積んで居る。

私は、かけつけて、話しかけようとしたが、何も分らない。

『チラナ、チラナ』

チラナへゆくのだといふ意味をあらはす爲に、市の名をよびつゞけた。

『これへ乘れ』と、農夫は、手で指した。私は疲れた體を野菜の中に忍ばせたが、此の馬車がチラナへついたのは、午後二時頃だつた。シヤツ一枚に、パンツを穿いてゐたが、帽子もかぶらず、跣足のまゝの私が、町の土を踏んだ際は、事實胸が張り裂ける程の喜びだつた。自分の持つて居る總ての物をさゝげて、此の農夫に感謝しても、まだ感謝し盡せない位に思つた。しかし、私は無一物だ。

『どうしたら好いだらうか』

此のまゝ別れるには忍びない。手は、ひとりでに、パンツのポケットの中に引きいれられた。

と、いつの間には、私のポケットには、金が入れてあつた。私は愕然とした。無論、カテリナが用意してくれたのである。何は構はず、突嗟に、此の金をのこらず掴み出して、農夫に與へた。幾らあつたのか、勘定が出來ないので分らぬが、助けて



くれた農夫は却つて私のことを拜んでくれた。だが、あの場合、よくもこゝ迄氣がついて、私の知らぬ間に、ポケットへ旅費を突込んでくれたものだと思ふと、可憐なる不幸の女性、カテリナの親切に今更乍ら眼がしらの熱くなるのを覺えた。

（わたしは最う何うなつてもいゝ、こゝで死ぬつもりだが、お前は、遠い遠い日本から來たのだ、此の機會に逃がしてやる」

彼女の心意氣は、私には分りすぎる程分つて居る。私を此の人外境から救出してくれた彼女は、私が一生涯忘れてはならぬ恩人である。

私は、タラナに居る佛國副領事に事情を打あけて、旅費をかりうけた上、又伊太利へもどつた。銀行が利くやうになつて後、厚い感謝の意をこめて、この金を送り返した。

それが捕はれてから四十二日目であつた。

アルバニヤが、いかに未開國でも、此うした雲南の土匪のやうなものが存在して居るのは、此の文明の世に解き難き謎としか思はれぬ、しかし佛國領事の説明する處によると、彼等を掃蕩することは此の國に於いては望み難い、なぜといつて、國内にいざ革命でも起るといふ場合は、これが政府の手で買收されて、忽ち傭兵となるからである、從つて腫物にでも障るやうにして、ソツとして置くのである。そんなことゝは知らず、これに引ツかゝつたのが、私の不幸で、人骨祭の犧牲となるのを免れ得たのは、云はゞ不幸中の幸ひである。

それにしても、カテリナは何うしたらうか。

夢に相見るより外は、再びめぐり會ふことは出來まい。さう考へると、私の心の扉は堅く閉されて、ともすると、沈鬱になり勝である。

（終）



新作講談

よく耐へた秀吉

眞下醒客
挿繪　伊藤彦造

一

主君信長公の御本葬だけは自分の手で……と目論でゐた處へ、又も秀吉に先を越されて、あべこべに案內狀を突きつけられたのだから柴田勝家、自暴くそで仕方ない。と云つて、主君の御本葬とあれば、列席しないわけにもいきません。重臣達と相談の結果、

『どうせ行くなら、織田家の元老ぶりを……』

と云ふので、先驅、供廻りの末に至るまで、總て、目さむるばかり綺羅びやかに扮裝たせて、長柄、飛道具、二本道具、先箱の裝ひも嚴めしく、總勢實に一萬五千。威風堂々として、越前北の庄を押出したのは、案內を受けた翌々日の正午過ぎのこと。途中、岐阜城に立寄つて、織田家の三男神戸三七信孝に謁えました。そして人を遠ざけてのヒソ〳〵話。

『そんな事情ゆゑ、その際には三七樣にも、隨分とおぬかり無く……』

勝家は、自分の肚裏を打ちあけて、堅く契約ふところがあつた。

『何分とも、宜しなに頼みますぞ。』

それから兩將、相連立つて出發、道を急ぐ。丁度京の入り口、日野岡峠の手前まで來ると、どうした事情か、先供がピタリ止つて動かない。

樣子を探らせると、峠の入口に、今度新しく關所が設けられて、來る者〳〵を一々嚴重に調べるといふのです。

それを聞いた勝家の顏が、サツと變る。

『馬鹿ツ！ 餘人ならば兎に角、織田家の元老たる予の手の者を、取調べるとは以つての外の曲事！ 誰ぞ、もう一度行つて、確と樣子を視て參れ！』

『はハッ…』

處が、その次の報告は、尙と好くない。峠の入口に大きな立札が建てられて、黑々と、

此ノ度、紫野大德寺ニ於テ、總見院殿信長本葬執行候ニ就イテハ、洛中洛外ノ混雜ヲ前以ツテ禦グ爲メ、

一、長柄飛道具ノ類ハ、一切都ニ入ルベカラザルコト。

一、十萬石以下ノ諸侯ハ供方七人ヲ限リ、又十萬石以上ノ諸侯ト雖モ供方三十人ヨリ多ク隨行セシメザルコト。

右條、萬一違背スル者ハ曲事タルベキモノ也

奉勅 油小路大納言藤原公貞 判

天正十年十月

羽田長門守

謹而承ル

とあると云ふのではありませんか。——これによると、二萬人近くも從れて、大威張で乘込んで來た勝家も、僅々三十人以上召連れて行くことが出來ない。と言つて、『奉勅』とある以上、それを破れば曲事。臣下として、朝廷の叡慮に背くやうな事は、尙更できない。

『うむ、みんな猿面の小刀細工だ。……察するところ彼奴、賄賂を以つて公卿方を手に入れ、さてこそ右の高札……うむ、それに相違ない……』

秀吉が自分への面あてにした仕事だと睨んだから、勝家の腹の蟲は一層鎭まらない。だが制札の文面は儼として犯すべからず、さすが不敵の勝家も、しばし思案に暮れましたが、

『他の者なら兎に角、この柴田が、たつた三十人ばかりの端した人數で、入洛が出來るものかい。——さア逆戻りだ。戻れ返せ！』

そのまゝ、廻れ右をさせて、サツサと引き返しはじめた。

と、ゆくりなくも出逢したのが北畠中將信雄、瀧川左近將監一益の二人。この二人も行列はなかなか美々しい。大した威勢です。

處が、高札の一件を聞くと、失望は一益も同じこと。以

つての外の面持で、不都合だ！無法だ！とさんざんに罵り散らす。

二

が、彼には機を見るの明があります。敵を容る丶の大腹が



まります。

『だが、折角やつて來て、このまゝ引き返すと云ふのも、他に聞かれて餘りに大人氣ない。それに對手は油斷のならぬ秀吉、我等が居らぬとなれば、天下諸侯の面前で、何をやらかすか知れたものでない……のう、柴田殿、こりやうつかり引上げられぬわい。で、拙者は已むを得ず三十人の腹心だけで參らうと思ふ。貴殿も不滿ではござらうが、然うなされては如何ぢやな?』

事をわけて言はれて見ると、勝家も漸くその氣になつた。だが、『流石は。』と言はせるつもりで、立派に扮裝せてやつて來た大勢の供廻りからきらびやかな長柄飛道具まで、そのまゝ、そこへ殘して行くことは、勝家としてどんなにか心殘りだつたに違ひない。已むを得ず腹心の供三十人だけにして、苦い顏、酸ぱい貌で、あと振り返り〳〵、關門を潜つて行く勝家の姿は、淋しくも亦、あはれ深いものでありました。



打ち揃つて、途中まで行くと、

『お、これは柴田殿はじめ、皆樣お揃ひにて……實は、主人秀吉、本日皆樣これへお越しの事と存じ、お粗忽の無きやうにこれまでお出迎へ申せとの儀にて、夙よりこゝにお待ち申して居りました。よくこそ。』

秀吉の家來數名が、禮を盡して慇懃に出迎へます。

――どこまで拔目のない秀吉だらうと、一益は心密に恐れをなしたが、勝家はたゞもう一途に憤ツ腹。

『えゝ、邪魔だッ！ そこ退け！』

『でも、主人よりの……』

『煩い。身等はまだ猿を親戚に持つた覺えはないわ。ワハヽハ、。』

叱言は言つたが、田舍者の京は不案内、元老面をさげて、そこらで間誤つくのも、餘り賞めた圖ではない。それに折角迎へに來たものを追ひ返しては、秀吉を恐れるにもあたる。えゝ、まゝよ！ と、案内されるがまゝに跟いて行くと通されたのは目のさめるやうな立派な旅館の、しかも特等室です。善盡し美盡して、下へも措かぬ歡待に、何とやらひよんな氣がして、勝家等、柄にもなく安き心もありません。

が、やがて、毒饅頭を頂かされる心配もなしと知ると、『元老の威信。』といふやつが、反對にモク〳〵と頭を擡げます。

『さうだ、せめて看板だけでも……』

その翌日、どこから見つけて來たか、障子二枚分もあらうといふ大きな板へ、墨くろ〳〵と書きも書いたり、

北國藩鎭織田家之元老柴田修理進源勝家本陣

この素敵滅法界もない看板を見て、佇まる者はあつた、呆れた顏や舌を出す者や笑つて行く者は澤山あつた、併し感心したり賞めたりする者は、生憎ひとりも有りませんでした。

そればかりか、どつちへ行つても、秀吉を讃美する噂ばかりです。

『都の奴等は、どれもこれも猿面を神か何ぞのやうに思つてをるらしい……』

いよ〳〵癪だ。いよ〳〵業自棄だ。煮ても燒いても食へない猿面！この調子だと、瀧川の言つたやうに、明後日の晴れの場には、何をするか分つたものぢやない——考へると、勝家、魂も身に添はぬ心地。

三

十四日の夕刻までには、徳川家康の名代を始め、毛利、上杉、吉川、小早川等の名代、みな、それ〲の贈物を携へて、乘り込んで來ました。その外、近國近在に於ける一郡郷の主長は勿論、案内の行かぬ者までが、

『一代の武將信長公の御本葬を、山崎の一戰に見事光秀を伐つたあの筑前樣が執り行はれるさうぢや。定めし見物であらう、盛な事ぢやらう。遠くの方からでも拜まいでは。』

と、これ又、思ひ〳〵の香奠持つて、我れ勝ちにと押かけたものです。

洛中洛外、ごつた返すやうな人の波、人の海……

『香奠と言へば、さうぢやつた、他のことにかまけて、すつか

り忘れてゐた……』勝家が驚いて、一益の旅館へ人を遣ると、これも丁度それの相談に出かけようと思つてゐた處だ――と言つて、すぐにやつて來ました。

『本來ならば拙者家臣としては一番近い身内ではあり、當家にとつては古老株。今度の事は自ら施主となつて、何も彼もやらにやならぬ、否、やる積りぢやつたのが、――そ、それが……。』

勝家は又しても癇癪に喉がつまる。一益はそれと見て、

『あの羽柴奴に先を越されてしまうたばつかりに……不滿はお互ひ同じ事ながら、とりわけ、お元老の御胸中、お察し申す。』

『從つて、その香奠、寺への寄進にしてからが、先君菩提のため故、あの猿面なぞよりずんとはずまにやならんのぢや。が彼奴の事だ。拙者の向ふをはる氣で、或は黄金の十枚位出したかも知れん。』

『とすると、貴殿などは差し當り、十五枚と云ふ處かな？』

『勿論、その位は喃。兎もあれ、至急、調べて見させよう。』

勝家はすぐに從者を呼んで、旨を含めた。從者は頷いて出て行く。……その戻つてくるまでが、勝家にはどんなに長かつたであらう。

『ど、どんな樣子ぢやつた……？』

從者の姿を見ると、いきなり頭から浴びせかけた。

『は、餘り澤山なので一々張出されたのを記して參りました。』

『ぐづ〳〵しとらんで、早く秀吉のから、そこで讀め！』

『はハツ、では第一番から、えーと黄金五十枚に白銀三百枚。』

『な、なにツ、黄金五十枚？――そりや何者ぢや』

『羽柴筑前守秀吉とございます。』

『えツ、秀吉？……』勝家は我が耳を疑うた。否、それは彼のみではない、一益とても怪訝な顏附で、

『大方、讀み違ひぢやろ。もう一度讀み直して見い。』

『は……黄金五十枚、白銀三百枚、靑銅一萬貫、白米千俵――羽柴筑前守秀吉…』

いよ〳〵出て愈々奇です。靑銅一萬貫、白米千俵が增加してゐる。勝家は勿論、大腹といはるゝ一益も、さすがに言葉がありませぬ。

『彼奴に五十枚納められたとすると、柴田殿、貴公は少くも七十枚位は、出さんけりやなるまい喃？』

『ところで、七十枚は愚か、只今、手元にあるものと云へばたつた五枚だけぢや。』
　言ふのも口惜しさうです。
『うーん……それぢやで喃。……これ、次は何程か？』
『はッ……次は黄金二十五枚、白銀百枚、白米三百俵――池田勝入齋入道信輝。』
『ほう、あの馬鹿坊主め、豪いことをし居つたな。……次は？』
『黄金二十枚、白銀百枚、白米百俵――高山右近太夫信房……』
『何ぢや、高山までが……？』
『その次は、黄金二十枚、白銀百枚、白米百俵――前田又左衛門利家。』
『もう宜い。退れ！』
『はハッ。』
　従者は骨を折つて、叱られる。こんな間尺に合はぬ話はありません。あとに殘つた勝家に一益は、どうしたものか？　と、暫くは青菜に鹽の無言の行。やゝあつてから、
『兎に角、できるだけ工面して見よう。』
と云ふので、それ〴〵腹心の者を、八方へ飛ばしました。
が、固より都には緣の薄い二人です。その上、多くは秀吉黨、その手の廻つた後とて、思ふやうに集らない。詮方なく勝家一益自身に飛び出して、公卿殿上人の間まで叩頭九拜。それでも尙思ふやうには行かないで、十四日の夕景までに、辛うじて黄金五十枚――黄金だけはどうやら秀吉と同額にのぼつたが、白銀は二百枚、白米に至つては秀吉のやつと半分といふ情なさ。一益になると、それよりもずつと下つて、黄金三十枚に白銀百枚、白米は僅かに百俵です。
　然るに、秀吉はまだ此の外に、五十石の寺領と、別に太刀代として一千貫が寄附されてありました。
『何うすればかうも喰ひ違ひばかり續くものか？』
　勝家はその夜、をのゝく拳を握りしめて、不滿限りない過去の數々を思ひ、明日の晴れの場面を眼のあたりに描きつゝ、とう〳〵一睡もしなかつた。
　あゝ、兩雄、最後の對決の日も、餘すところ僅かに一夜……

四

　天正十年の秋十月十五日――幸ひに晴。いよ〳〵その日がやつて來たのです。
　都大路は、この盛儀を觀ようとする群集で、芋を洗ふやうな大混雜。その群集警固のためとあつて、紫野大徳寺門外三町四面には獅子垣を結ひめぐらし、小西彌九郎、生駒新八兩人の兵一千人が、これを固め、それ〴〵遠見の者を配置して、遠近

ひとしく眼を光らしてゐる。又、門内には帷幕を垂れ、そこ彼處に詰所、番所が設けられて、警固の武士、長柄を立て、鐵砲に火繩を挾み、スハと言はゞ、すぐにも討ち出さんばかりの勢ひで、みな、小具足に身を固め、威儀嚴重に備へてゐる。とても物々しい光景です。

『チエツ、どうせ猿めの細工だ。くそ、何とでもして見ろ!!』

勝家はもう、眼に入るすべての物が癪の種。――あたり構はず、ペツ／＼と唾吐きかけながら、僅かな供人を左右に案内に從つて通されたのは、本堂左側に設けられた『織田家大身席。』てふ張紙の下。

見ると、もう丹羽、池田、前田、細川、筒井、佐々、中川、紀井、高山、細川、蜂谷、金森、森、堀等、織田家恩顧譜代の顏が、それ／＼設けの席を塡めてゐる。さてまた向う側、猖々緋で卷きたてた大柱右の『諸侯名代席。』には、上杉、徳川、毛利、吉川、小早川、浮田等、天下諸侯の名代までが綺羅星と居並んで、供人まで入れると、その數實に千數百名――もう立錐の餘地もない。

まづ入堂して、誰もの眼を驚かしたのは、その莊嚴さでありました、とりわけ人目を惹いたのは、きらびやかな棺の前、金銀づくめの燭臺や香爐などの背後――その中間に燦として輝く金襴の壇上へ、恭しく安置された、扨も大きな白木の位牌です。それには、

總見院殿　贈太相國一品　泰巖劍空大居士

の十七文字が、墨痕淋漓とをどり、そのわきには『贈從一位太政大臣。』と添書がしてありました。

『はてな、いつの間に右大臣から……?』

誰しも然う思ひました。無理はない。これはつい二三日前、この度の葬儀の次第を聞召され、朝廷から特に贈官になつたもので、言はゞこれも秀吉の功であります。

兎に角、秀吉がいかにこの葬儀に力を竭したか、又それが如何に盛儀であつたかは、『惟任退治記。』に、

――先づ棺槨は金襴を以つて、之を裹み、軒の瓔珞、欄干の擬寶珠、皆、金銀を鏤め、八角の柱、丹青を畫き、八軒の間、彩飾を致し、御骨は沈香を以つて、佛像を彫刻して、棺槨の中に奉納し……云々。』とか『警固の侍三萬許り。』とか、『見物の輩、貴賤雲霞の如し。』とか、その衆僧の如きも『洛中洛外、禪、律、八宗、九宗の僧侶、幾百なるを知らず云々。』などとあるに徴ても想像されるでありませう。

その莊嚴にして絢爛、眼も眩きばかりのよそほひには、喧嘩じかけで乘込んで來た勝家ですら、自づと頭が下がる程でした。

『それにしても、猿面奴、どこに引つこんでるか、チツとも姿

を見せないぢやないか。』勝家の頭脳は、席についても少しも落ちつかない。たえず底光りのする眼を動かして、右方の帷幕の邊りを睨めつけて居ます。――その下を、時折、秀吉の近臣や係役人が、出たり入つたりしてゐたので。

五

やがて、定刻。――寺外に鳴り響く梵鐘につゞいて、大磬が鳴る、太鼓が鳴る。それから又、二番鐘、三番鐘――それを合圖に、臨時に造り渡した假廊下を、きらびやかな法衣を身に纏うた當日の大導師、紫野大徳寺百七世、嶺宗宋和尚が、五山十刹、洛中の諸寺諸山五百餘の大衆を率ゐて、しづ〳〵と入堂して來る。――それが順々に席に着く。

それから、起龕、鎖龕、奠湯、奠茶などといろ〳〵やかましい儀式がある。一々記せば大變なこと。すべて略します。それが滯りなく終ると、いよ〳〵大導師の嚴かな偈。――

四十九年夢一場。威名說什麽存亡。
請看火裡烏曇鉢　吹作梅花遍界香。

嚴かにもしめやかな讀經の聲が、金鐃の音、法鼓の響と共に、暫し堂内を揺りうごかしました。

『只今、燒香の順序を讀み上げまするにより、各々、席を離さず、暫くお控へ下さるやう。』

お經の終るのを待つて、聲高らかに斯う叫んだのは、今日の法要奉行長谷川丹後守。それと同時に、燒香の次第書を手に捧げて立つたのは、前田德善院玄以法印。

法印、今しもその第一行を讀み上げようとする、途端。

突如として、寺内に鳴り響く大音聲！

『あいや、それなる次第書、讀みあぐるに及ばず、亡君の弔合戰に大功ありし侍從信孝樣こそ、今日の燒香第一番でおはする筈！……さゝ、侍從樣には、疾やく〳〵御進み、御燒香あらせられませい！　柴田修理進勝家、イザ介添へ仕らう。』

滿座、水を打つたやうな靜寂の中へ、突如として、捲き起つた一大旋風であります。時が時、場合が場合、列座の面々は太く愕きました。愕いて、顏を擧げると、大紋の袖クルリとはねあげた勝家が、恐しい權幕で、左手上座にある信孝の膝を押して、今しも引き立てようとしてゐる。

『これは!?』と、皆々、固唾を飲む、間もあらせず、又もや耳を裂く大音聲――

『あいや、信孝樣には、その御燒香、暫く、暫く……かく申すは、先づ以つて故右大臣家の御二男におはす中將信雄樣御燒香あつて後、御三男信孝樣遊ばさるゝが御順當かと存じ申す。……さゝ我が君、早う御座を起たれて、お燒香なされませ！　長門介添仕りまする!!』

誰かと見れば信雄の第一家老、岡田長門守直教。これ又、躍氣となつて、信雄を促し立ててゐます。
　これでは正しく味方の同志討ち——さすがの勝家もギヨッとした樣子です。顏をしかめて何か言はうとした時、
『あいや、御兩人、…………』
　まづいな……と視て、飛んで出た仲裁者は、餘人ならぬ瀧川一益でした。
『それがし憶ふに、信雄樣は御二男、信孝樣は御三男にはおはすものゝ、共に等しく織田家の後見職。……して見れば何れを先、何れを後と致すも如何なもの。よつて本日は、御兩所、同時に御燒香あつて然るべきかと存じまする。』
　さすがは一益、至極尤もな言ひ分です。思ひもかけぬこの助け舟に、先づホッとしたのは勝家で、
『然らば相燒香にて……』と柄にもなくニッコリして見せる。
『では、よろしく…』と、岡田長門も喜んで同意して、座を立たうとすると、一益が傍から、
『信雄樣には、拙者代つてお附添ひ申さう。』
　信雄の介添役を勝手に引きうけてしまつた。彼も拔け目がない。二公達をかこつけに、さうして、勝家と一緒に秀吉より先へ燒香を濟まして、『ふゝん、どんなもんだい。』と云ふ處を見せるつもり。で愈々四人が燒香すべく進み出ました。

六

兩公達は、勝家、一益に附添はれて、正面燒香机の前に直り、額いて、さて香箱に手を遣らうとした。その刹那のこと、
『信雄、信孝！　その燒香、暫く待てッ！　羽柴五位少將、改めて見參せん!!』
　百雷の一時に落つるが如く、堂を搖がす大音聲に、並み居る大名小名、思はず耳を立てたが、まして臆病者の信雄信孝の如きは、差出した手を引込めたまゝ、身ぶるひして其の場に立ち竦んでしまひました。
『スハこそ。』と、滿座、息づまる許り……
『お、お、おのれ……この燒香、何故あつて差止める？　ぶ、無禮であらう、……秀吉!!』
　赫怒した勝家が、癇癪に齒がみをしながら、いきなり立てた——その言葉の終るか終らぬに、堂外數歩のところ、ドドンと起る砲聲一發!!!　それを合圖に、前面——右方の帳幕が、サッと切り落された。
　と、そこへ、神々しいばかりに扮裝つた秀吉の姿が、浮き出たやうに、スックリと現はれたものです。さても變つた扮裝よ。頭には纓したる黑色の冠、身には黑地輪無唐草の闕腋



「[illegible]の袍を着し、花鳥を縫つたる平尾に玉の石帯をつけ金の魚袋に螺鈿の太刀ゆるやかに佩き、窠に霰の大口に白き襪沓……と云つた衣冠束帯の正装で、右手には笏、左手には三法師秀信を抱き奉り、悠然として立ち現はれた。威風あたりを拂ひ儼として犯すべからず。

更に見よ。その後、左右には、鬼をもひしぐ剛の加藤、福島、平野、糟谷、脇坂、石川等、大剛の勇士が、いづれも肌着の上に小具足を着け、肩衣引つかけ、袴の股立高く取

りあげてスハと言はゞ摑んでも殺さんず勢ひ、爛々たる眼、八方を睨め廻して、寸の隙もあらせぬ物々しさ。さすがに剛愎の勝家も、これにはアッと氣を呑まれて、頓には言葉も出ぬのであります。

滿座の面々、どうなる事かと、手に汗を握り、しはぶき一つ起てる者もない。憐氣に滿ち、水を打つたやうな靜寂の中から、突き破る秀吉の重々しい聲が、再び、

『やよ、不孝不德の信雄、信孝ー不忠不義の勝家ー益ー 心



あらば、よく承はれ!』

一語一語、凛乎として骨を刻むが如し。

『其の方等、何を狼狽へてか、先君のお跡目を繼がれし三法師君のお燒香も未だ相濟まざるに、靈前に近寄り、非禮の行爲をするぞ。以つての外の不埒! 疾く、疾く、そこ退れッ! 控へい!』

怒號するどく、ハッタと睨め据ゑられると、信雄信孝の二人は、面上土の如く、慄へあがつて、ズル〳〵に元の席へと引込んでしまつた。

『無、無禮の一言! 聞き捨てならぬぞ! こ…こりや、藤吉! さ、猿面! うぬれ、土百姓の昔を忘れたか! み……水呑百姓……』

勝家は顏中を口にしたやうな物凄い形相で、喚めきたてたが、餘りの激情に、たゞ口をモガ〳〵するばかりで、後が出ない。

『うろたへまいぞ、勝家、身分を顧みよ、場所柄を辨へよ、心靜かに物申せ。』

秀吉にたしなめられると、勝家の聲がいよ〳〵高じる。

『こ…此奴が、此奴が……うぬ、水…水呑百姓の倅のくせに、そ、その扮裝は何ぢや。豪さうに、公卿衆か何ぞのやうに、衣冠束帶が聞いて呆れるわ。この、身の程知らぬ横着者めが! は、恥を知れ! 恥を……』

短氣者の勝家、こゝまで來ると、我れを忘れたやうに、太刀の束頭を叩きながら、秀吉目蒐けて、躍り出ようとした。瞬間、グイと其の袖を摑んだのは一益。それと見て秀吉、

『誰そある、勝家、逆上と見ゆる、介抱して進ぜよ。』

隨分な皮肉。重ね〳〵受けた侮辱を、一時に報い得たやうに。

『だ…だまれ、猿面! う…汝こそ、人並に耳あらば、よく浚つて承はれ!』

勝家は嚙みつくやうにいふ。

『…勿體なくも、信雄信孝の兩卿は、故右大臣樣の公達、三法師殿には叔父御に當らるゝぞ。……それも信忠樣(信長の嫡子)のお燒香なら、いざ知らず、今日の御法要は右大臣信長公の御本葬ぢや。その父君の靈前に、兩公達が揃つて先に御燒香なさることが、何故に惡い。な、何が非禮だ?』

と、あら〳〵しく床を叩いて、

『その上、不忠不義と申したな。主を蔑にしたその雜言、反逆にも等しいぞ。……むゝ、よめた。察するところ、汝、今日の法要を機會に、諸大名列座の前に主を罵り、己が威福を示して、織田家の柱石を奪はんの心底であろ。いや、それに違ひない。……獅子身中の蟲とは汝が事、正しく光秀以上の大逆臣、

もはや容赦はならぬ。勝家、故右府公に代つて……成敗する……あゝ、こりや、勝家の家人は居らぬか、玄蕃は――毛受は居らぬか。逆賊秀吉の首打てツ！』

『おお……』と言ふより早く、勝家の背後に控へてゐた佐久間玄蕃に、毛受勝助の二人、大紋の袖まくりあげ、拳を握つて、躍り出た。だが、さうは行かない。秀吉の左右には、加藤がゐる、福島がゐる。平野、糟谷、脇坂、石川、一騎當千の猛者が虎のやうな眼を光らして、いざと言はゞと待ち構へてゐます。それを見ると、玄蕃も毛受も、思はず立ちかけた膝を又崩して了はねばならなかつた。腸は煮えくり返りながらも、度膽を抜かれてはどうすることも出來ないのでした。

七

『これ勝家、血迷はずと、よう承はれ！』

重苦しいやうな沈默の上を、秀吉の凛々たる聲が流れます。

『勿體なくも、これなる三法師秀信卿は、既に信長公のお家督と定り、勅を以つて三位中納言に任ぜられ御幼少ながらも今は天下の武將と具り玉ふ御仁。されば織田家の宗族にして、汝等一同の爲には歴然たる御主君ぢや。……然るに信雄信孝は、先君の息とは申しながら、一旦他家を継いだ上は、右大臣家の嫡統とは申されぬ。即ち北畠、神戸は、外様の臣下ぢや。外藩臣子の分際として、先君のお世継、四海の棟梁たる三法師君を差し措き、先んじて焼香をなさんとする。これを非禮と言はずして、何をか非禮と云ふか！』

勝家は外方を向いてゐる。馬耳東風といふ形です。秀吉は委細かまはず。『然し、三法師君には未だ御若年にして、その志ありと雖も、その言葉足らず、仍つて、秀吉、三法師君に代つて、汝等にとくと申し聴かせる――必ず、秀吉の一言と思ふな。』と、ピシリ抑へておいて、『先づ、北畠信雄に物申さん。』秀吉は徐ろに信雄の方に向き直つて、

『これツ、信雄！　そこ許は織田家にとつては大切なる御人。過ぐる五月、拙者、上意により中國に出陣。然るに常時同じく中國に軍馬を差向けるやう、先君より命を受け、二萬の兵を伊勢の桑名まで繰出しておきながら、京都の大變を聞くや、吃驚仰天、戰備を亂して、そのまゝ己が居城安土へ逃げ歸つたのは誰ぢやつたか。聞きしに勝る臆病者！　呆れはてたる不孝者！

何の面目あつて、先君のお家督を爭はんとしたか……?!以後もある事、よく〳〵改悛の状を明かにして、主君の前に謝罪せい!』

父信長の慘死を耳にしても、光秀を討つことも出來なかつた過去の數々を、天下諸侯の前にぶちまけられて、ピシ〳〵とやッつけられる。信雄は穴あらば入りたい心地、顏赧らめて俯向いてしまひます。

『さて、神戸信孝には……』

秀吉が得意の面容で、信孝の方を向いて、かう言ふと、

『だ、だまれ、猿面!』と怺へかねた勝家が又喙を容れたので、信孝も後について、

『ほざくな秀吉。われは汝のためには主筋。……然るに、家來たるの分際を忘れて、さつきから默つて聞いて居れば圖にのつて、主を呼び捨てにするとは、無禮でないか、不忠でないか、逆心でないか。』と噛みかけて肩を聳かす。

『その理由聞かせうぞ。憚りながら、本日の秀吉は、畏れ多くも十善萬乘の勅命により、この大法要の施主となつたるもの。勅命の前には皆これ一切平等の臣下、呼び捨ては當然であらう。さ云ふ御身こそ、勅許の秀吉に言葉を返すは、明かにこれ違勅ぢや。御身は違勅の罪の恐ろしさを知らぬか?!』

威嚇されて、信孝はペシャンコに參つてしまふ。勝家はそれを不甲斐なく思つたが、もう舌が痺き縺り、咽喉が硬ばつて、聲が立たぬ。秀吉の舌鋒はいよ〳〵鋭い。

『これ、信孝!御身も亦大阪に在陣し、二萬餘人の軍勢を率ゐて、京近き津の國にありながら、光秀の反心を聞くや、取る物も取りあへず馳せ上つて合戰すべきを、日向守の軍威に怖れ、丹羽五郎左衞門の江州にあるを呼び戻し、それでもまだ戰を起す勇氣もなく、この秀吉の上洛を待つて、辛うじて事を決したなどは、何といふ不覺、何といふ未練。

それのみかは、自ら采配執つて諸軍を指揮することも出來ずして、總大將の位を我れに讓り、しかのみならず、山崎の合戰、齋藤内藏助のために戰備を破られ、遠く宇治まで敗北したは、見下げ果てたる不器量人。何の顏あつてか、人に先立つて燒香なさんとする?身の程知らぬとは御身がこと。向後、よく〳〵愼まれい!!』

何といはれても、抗爭ふ勇氣は、もう彼になかつた。併し秀吉の滔々懸河の辯はなほ續く、

『次に、柴田勝家、瀧川一益に物申さう。』

『だ、だまれ、猿面!ほざくな藤吉!う、汝、亡君の御恩を報ぜんための法要と見せかけて、實は三…三歳の幼君を挾んで、私かに己が威を振ひ、天…天下の…』

『うろたへるな、勝家。汝こそ、織田家の舊臣、先君の姻戚に

繋りながら、先君大變と知るも弔合戰を急ぐ心もなく、偶ま上洛せんとすれば上杉勢に追撃たれ、徒らに日數のみ重ね、光秀の首だに見ず、どの面さげて此の席に列り、圖々しくも、かかる大言が吐けると思ふのか！眞に、武門の恥を辨へ知らば、この靈前にて腹搔切り、潔よく殉死して、罪を謝すべきであらう！』

秀吉は光秀の首が取つてあるから、どんな事でも言へるが、勝家には、腹は立つても、それがないから、

『な、な、何をッ、馬鹿なッ！』

徒らにたゞ泥つ返して見るだけのこと。

『又、瀧川一益もその罪、柴田に比すべきもの！』

と斷じて秀吉は更に勵聲一番、

『柴田、瀧川の腰拔武士！信雄、信孝の臆病者！卑怯者ならずば、よく承はれ！かく先君の仇さへ討つ事も叶はずして、三法師君の御家督を妬み、謀計を構へて、これを奪はんとする――何たる曲事ぞ！殊に勝家の如きは、織田家の舊臣なれば、正しく幼君を守護すべき隨一人。然るにも拘はらず、却て、淸洲の會合にも、先君の御無念を晴せし拙者の功を嫉むに急にして、主家再興の大業を忘れ、徒らに元老面して無禮雜言、傍若無人の振舞をなせしこと、そも幾度なりしぞ。これ皆

われを怒らせて亡き者にし、己れひとり天下を我物になさんの野心に外ならぬ。その心根のさもしさは、まこと笑止の至り、憫然の限りぢやつた。幸ひにして我れ、その危難を免れたは、これ天道、偏へに汝の不忠を憎み、微臣の誠實を憐れませ給ひしに因る。神は非禮を受け給はず、汝等の不忠不孝は、こゝに窮き奉れる先君英靈の許し給はざるところ。我れ今、勅命の重きを頭に頂き、先君の御遺志を繼がるゝ三法師君の仰せに從ひ、汝等が罪科を匡す——なんと、申譯あるか、如何に……？』

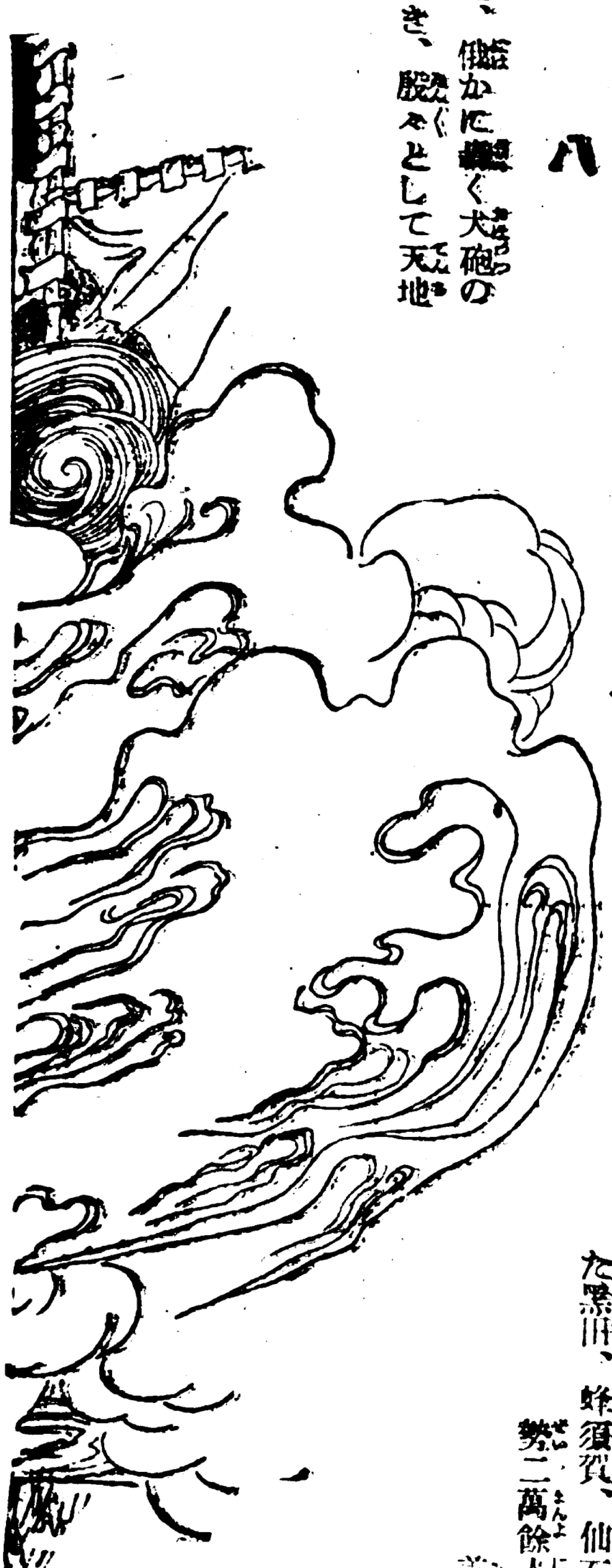
井然たる理路、凜乎たる威風、一語は一語より深く鋭く嚴かに、風霜の凄味を帶びて、滔々飛じ終るや否や、秀吉の手にせる笏が、サツと舞つた。

八

と、俄かに轟く大砲のひゞき、殷々として天地を揺かすと同時に、どつと起る鯨波の聲、金鼓の音！

『これは!?』と愕いて、滿堂總立となる。さてキッと眼を堂外にやれば、こは、そも……幾千とも知れぬ兵卒が、何れも鐵砲の筒口揃へ、槍の柄をしごいて、本堂の四方を圍み、一人も漏らすまじき勢の凄まじさ。かの天地もくづるゝ鯨波の聲は、そこから起るのでありました。

それぱかりか、更に耳を澄ませば、寺外三四里四方と思はれる邊りからも、殷々たる砲聲に交つて、海の遠鳴りのやうな物凄い地響が、どーツ〳〵と聞えて來ます。



これ、秀吉の命を受け、八幡、大津、伏見、深草、醍醐、山科、嵯峨、東寺、四ツ塚等の要所々々に伏せてあつた黑川、蜂須賀、仙石、淺野、大谷等の手勢二萬餘人、總指揮官たる羽柴美濃守秀長の狼煙を合圖に——寺の周圍を遠巻する小西、生駒の兵等と相呼應して、一齊に吶喊をつくり貝鐘を鳴らしたから



八方より大德寺目がけて押寄せて來る、人馬のどよめきであります。

これを見、これを聞いた座中の面々何れも、安き心はなく――中にも信雄信孝の二人は、顏色蒼然として、座にもたへぬが如く、ガタ〳〵と慄へ出す。大腹な一益の顏にも、生氣はない、勇猛で知られた勝家も、針の筵に坐する如く、『おのれ、おのれ！』と憤怒の形相物すごく今にも身體全體痙きつッて了

ひはせぬかと思はれる許りに狂ひ立ちながら、何うする事も出來ぬ。たゞならぬ此の騒音と、重苦しい沈默……その間に秀吉は、一聲高く、

『いづれ、罪を匡し、惡を誡むべきなれど、今日は先君御送葬の爲め姑らく猶豫いたし、追つて後日の沙汰と致すであらう！』

と、結んで退壇。

それから前田德善院に命じて、燒香の次第書を朗讀させ、勝家一益等を尻目にかけつゝ秀吉は悠々と、三法師君と共に、當日、第一番の燒香を濟ませたのでありました。

九

この結果は、申すまでもなく賤ケ嶽の合戰となつた。そして一擧に、秀吉は勝家を斃してしまつた。

――思へば秀吉は、勝家からまんまと天下を握らして貰つたやうなものです。時に秀吉四十五歳。信長に仕へてから實に二十五年目……一口に二十五年とは言ふものの、二昔半の歳月は決して短いものではありません。

しかも草履取の輕輩から成り上つたものです。その歩みて來つた道程も、もとより坦々たる往來ではない、崎嶇、羊腸、多くは血腥い戰亂の巷に、生命を的の危い仕事でありました。

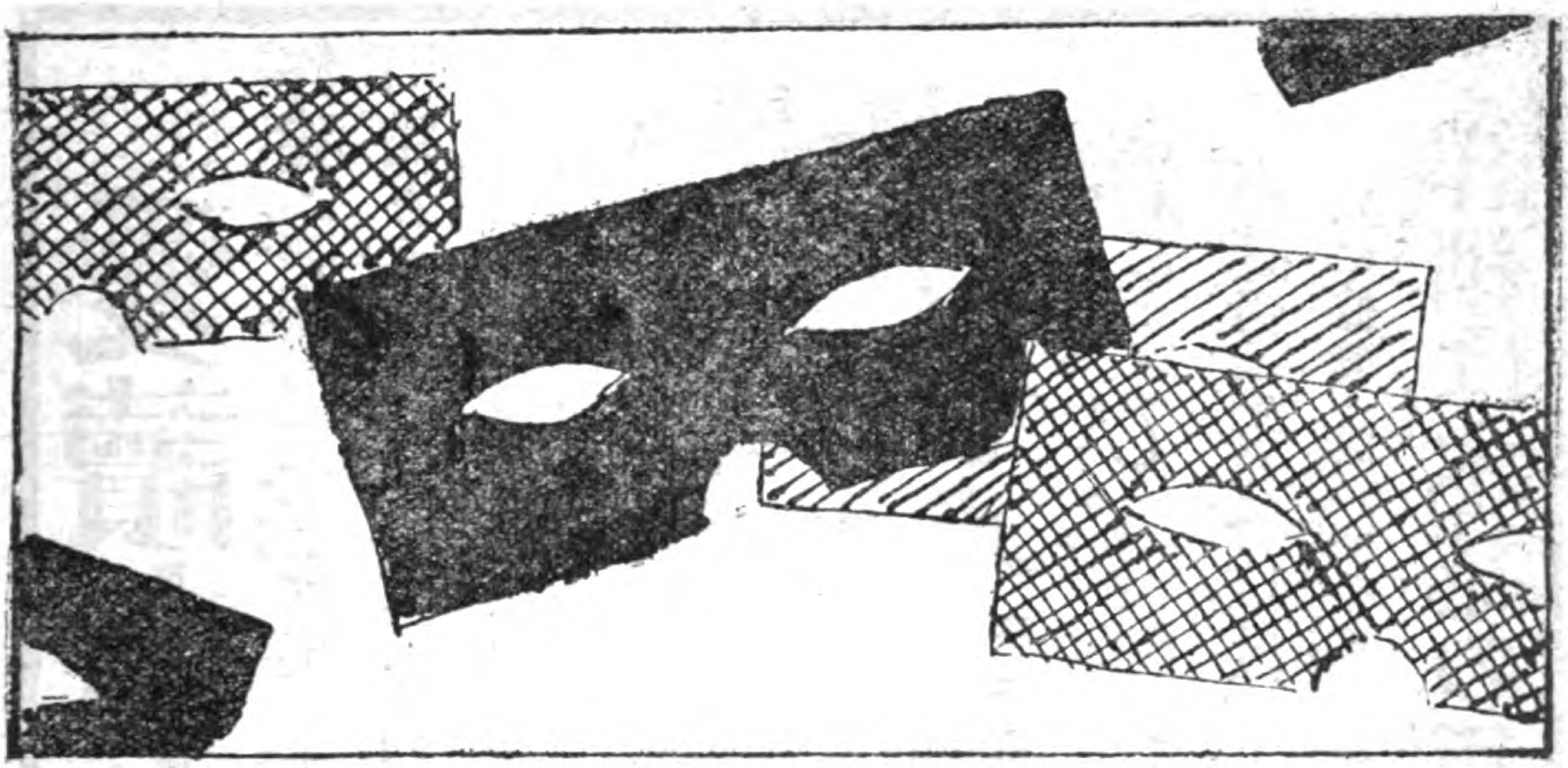
その上、先輩には勝家のやうな意地惡い輩、小舅が澤山あり、それ等の人から、どの位愚弄され、輕蔑されたか知れぬ、どのくらゐ憎まれ、嫉まれたか分りません。

その間に、身を措き、敢然として、しかもよく對者の感情を破らず、傷けず、その身も亦、ねぢれず、歪まずに巧みに切りぬけ、游泳して、今日を迎へたのであります。

人は、秀吉を觀る――誰しも一寸、天賦の英才に任せ、風雲に乘じて、一擧、天下を掌握した好運兒かのやうに想像されませう。だが、一代の英傑秀吉にしてからが、深夜、思ひを二十五年前の昔に馳せ、ひとり火も無い供待部屋で、ふるへながら主人信長の草履を、肌身につけて暖めつゝ待つてゐた當時の事に想到したなら、

『よくもこれまでに、切り拔けて來たものだ。』と、我ながら感心し、今昔の感に堪へなかつた事であらうと思ひます。その二十五年の、いかに長かつたことでありませう。――恐らく平々凡々たる現代の二十年勤續、三十年勤續などとは、比較にもなりますまい。

何は兎もあれ、彼が勝家から受けた侮辱に對して取つた態度は、吾等に何を物語つてゐるでせうか。……事が日本だけに、我々は、韓信の股くゞり以上、切實に、『耐へ忍ぶ。』ことの尊さを、訓へられるやうな氣がします。（完）



理想小説

死よりも强し

鶴見祐輔

挿繪　野崎貞雄

一

『とう〳〵見付かつたわね』
女はさう言つた。
『………』
男はだまつてゐる。
『見付かつてもいゝわ。どんな眼に會はされてもいゝわ。私、あなたと一緒なら、どんな非道い眼に會はされてもいゝの。殺されてもかまはない。あなたと一緒に死ぬのならうれしい』
さう言つて女は、につこりした。
『私、もう先から覺悟してゐたのよ。どうせいつかは露見るのだわ。さうすれば、あの殘忍なヨハノウスキーがたゞでは濟まさないことは解つてゐるわ。

だから私は覺悟してゐたの……』

さう言つて女は、蒼ざめた顔をあげて、剛の顔を見上げた。

しかし、小笠原剛は依然として、石像のやうに、兩腕を組んだまゝ、默つて突つ立つてゐた。きつと正面を睨んで、きりゝと口を引きしめて。

『あなたまだ怒つてゐるの？』

女は甘えるやうに下から見上げた。

さう言つと女は、右手を剛の左の二の腕に輕く添へた。

しかし剛は振り拂はうともしないで、そのまゝ默つて立つてゐた。

ガタン！

と大きい音がすると、大勢の足音は、どや／＼と部屋のうちに入つていつた。

しかし！　それはこの二人の居た部屋ではなかつた。隣の部屋だつた。

『さあ／＼、こゝで一杯やらうぢやないか。上の連中の空騒ぎより、もつと眞劍に面白くな』

『さうだ、さうだ。さあ三鞭酒を抜かうよ』

『おつと、承知だ』

『さあ、ドン・カルロス、貴樣一つ西班牙の闘牛士の話でもやれよ』

『カールメンが居ればなあ！　アハハハハハ』

と、その最後の聲を聞いた刹那に、剛は思はず電氣に打たれたやうに、ピンと飛び上つた。さうして、きつと隣の部屋の方を睨むと、一心に聞き耳を立てた。

『眞逆！』

と、彼は自分の耳を疑つた。

『眞逆、吉川勇がこんなところへ來るわけはない。人違ひに違ひない……

しかし、よく似た聲だなあ！』

彼はさう思ふと、激しく胸の動悸することを覺えた。

『さあ、みんな注いだか？

よーし、さ、ヒツプ、ヒツプ、フレー！』

と、音頭を一人が取ると、大聲がフレーと言ひながら盃を舉げたらしい。

がちや／＼がちやつ！　と、椅子を引き寄せる音がしたかと思ふと、ドヤ／＼と腰を下したやうだ。

『諸君！

これから我々の新入會員、西班牙の同志、ドン・カルロスの演説がありまーすつ！』

と、一人が少し醉ひの廻つた聲でどなると、一同が、ヒヤヒヤと手をたゝいた樣だ。

剛は息をこらして聞いた。

『兄弟よ！』

その聲を聞くと、剛はドキンとした。

『兄弟よ！　それから姉妹よ！』

と、聲はつゞく、

『私は英語がよく出來ません。我が西班牙の國風に從つて、色色まぜこぜの言葉で、お話しをします。

西班牙の南、アルハムブラの古城に近く、オドロクナといふ町があります。その町に一人の美しい少女、オレダヨといふのが居りました。その少女の戀人に、タスケニキタゾといふ若人が居ました。その若人がある日、山へ獵にゆきますと、モスコシノシンボウダといふ奇麗な花が、樫の木の下に咲いてゐました。

そこでこの花を摘み取らうとすると、どこからともなく、花の生命を奪つてはいけないといふ聲がします。

ふと梢を見上げると、マッテロオガサワラといふ神話の神さまが、木の枝に立つて居られました』

『おい〳〵兄弟！　馬鹿に六ケしい名前ばかり付いた話だなあ。面白くもなんともねーや。

その位でよせ〳〵！』

『さうだ、そんなけち臭い話はよせ〳〵』

『さあ、もう一度飲んで、無禮講でポーカーでもやるか』

『よからう！　よからう！』

と、酒の廻るにつれて、段々と聲が高くなつていつた。

剛は頭から水を掛けられたやうにぞーつとした。

『吉川の奴、助けに來てくれたのか。有りがたい！』

彼はさう思ふと、思はず涙が一杯、眼に溜つてきた。

眼ざとく見付けた女が、

『まあ！　どうしたの、そんなに涙なんか浮めて、え？』

と、彼の顏を見上げた。

涙がやがて、はら〳〵、はら〳〵と、剛の頰を傳つて流れた。彼は女の言葉などは少しも耳に入らなかつた。

『とう〳〵助けに來てくれたのか。吉川！　面目ない。こんなざまで俺は、倫敦で貴樣に再會しようとは思はなかつた。

申し譯ない！』

さう心の中で言ふと、止め度なき涙が、後から後からと、彼の頰を傳はつて流れた。

吉川が、こゝまで來るには、隨分な苦心もし、危險も犯したことだらう。如何に生死を契つた心友とは言ひながら、よくこの窮地に陷つた自分を、こんなにまでして救ひに來てくれたものだ。

先生の大事なお仕事のお伴をしてゐながら、こんなつまらぬ



陥穽に、易々と小供のやうにころがり込んで、先生の最後の重大時期にお役に立たないのみならず、恐らく先生に大層なご心配をお掛けしたに違ひない。

その拔き差しならぬ瀬戸に追ひ込まれた俺を、馬鹿と見下げもせず、こんな危險を犯してまで助けに來てくれたのか。

後から、後から、後からと、小笠原剛の頰に淚が傳は

つて現れた。

隣の部屋では誰かマンドリンを弾き出したやうだ。

すると、やんやといふ聲々がして、さつさつといふ靴音がし出した。ダンスが初まつたらしい。さうして、部屋の隅に酔つた聲の歌が聞える。大分酒が廻つたらしい。

ドン！と隣の部屋の戸が開いた。

すると手に取るやうな近くで、

『こんな狭い部屋では駄目だ。さあ、廊下で踊らう』

といふ聲の主は、正しく吉川だ。

ドン！

と音がして、剛の部屋の戸が開いた。

『や、これは失禮々々！お二方で、お樂しみのところを！お邪魔いたしました。アヘヘヘヘヘ』

と、いふ吉川の聲する方を見ると、これは如何なこと、西班牙風にもみ上げを長くのばし、八字の口ひげを墨で引いて、眼に黒い半假面を被り、闘牛士のいでたち、長い黒マントの下に、燃えるやうなズボン、黒の長靴。

『やあ／＼、そこなるお二人さま。お樂しみの一幕相すみますれば、ちと私共のむれにもお加はりになつて、タンゴの一曲、お舞踏の足どり、お見せ下さりましてはいかゞ、アァヘヘヘヘヘヘ』

と、聲高らかに笑つた。

『これが吉川か！』

と、剛は心の中で驚き駭いた。

『これがあの生眞面目家の、鹿爪らしやの吉川か！』

と、彼は我れと我が耳を疑つた。

『そのご服裝では、今宵の假裝會のお仲間入りは六ヶしからう。ご遠慮は、ご無理ご座らぬ。えゝと、あ、さう／＼、これなる一包の品物、御見參の引出物、進上いたしまする。快よく御納め下されい！さ、ご遠慮なく、ご遠慮なく。早々と身仕度なされて、我々の舞踏會中のお仲間入りを！』

と、勇は大きいマントのうしろに忍ばした一包の品を、どつかと剛の前に投げ出すと、

『トーレアドー、トーレアドー、ラ・ザララララー』

と、どこで憶えたかベースの聲で、カルメンの一曲を唄ひながら、うす暗い廊下をむかうへ踊つて行つてしまつた。

剛は脱兎のやうにその包に跳りかゝると、さつと部屋の扉をしめて、さら／＼とその包を開いた。

衣裳、帽子、靴、つけひげ、一切の品物がばら／＼と包の中か

彼は驚く女に、
『さあ、お手傳ひ、お手傳ひ！』
と、小聲で命令すると、自分の着物の上に、衣裳を附けだした。鏡の前に立つて彼は、つけひげ、かつらの一切をつけ、眼の上に黒の半假面を被むると、誰が見ても、小笠原剛の俤も見られない十六世紀英國の貴族になり上つた。エリザベス女王の君寵をほしいまゝにしたレスター卿のなれの果だと言つても、假裝會では立派に通用する服裝風采だ。
『さ、おいで、
とう〱、あなたが私を助ける時が來ましたよ』
さう言つて彼は、驚き怪しむ女の手を取つて、部屋の戸をあけようとすると、
『駄目々々、それではまだ駄目。
一寸お待ちなさい？
私が劍を捜してきてあげるから』
女は、すばやく、戸口から抜け出すと、暗い廊下のむかうに消えていつた。
と、息せき歸つてきて、
『さ、この佩劍を私、盗んで來てあげたわ、さ、これをお付けなさい。
それでいゝわ。
さ早く逃げ出しませう！』
女は剛の手を取らんばかりにして、彼を急がした。
女はやがて剛と同じやうに、眼の上に黒の半假面をつけて、地下室の廊下から、階上に通ずる階段にかゝつた。
その刹那である。
『待てつ！』
といふ大きい聲が、剛の耳許で響いたのは。

二

『えつ？』
と、思はず剛が踏みかけた足を階段に止めてきつと、振りかへると、印度人に扮した脊の高い男が、薄明のうちに突つ立つて、
『君方は一體、どこへゆくのだ！』
と、矢繼ぎ早やにまた第二の質問を浴びせた。
『………』
剛はだまつたまゝ、上から彼を睨みつけた。とう〱見附かつた。も早や遁れられないところと、彼は觀念して、何か言はうと思ふと、
『オツホホホホホ』

といふ高い笑ひ聲とゝもに、剛の連の女は、

『第七天國へ！』

と、言ふなり剛の手を取つて、すた〳〵と階段を足早やに登り出した。

『待て！』

もう一度その丈の高い印度人の聲が、耳許に聞えたと思つた瞬間に、ドサンと音がした。曲り階段を上りながら剛が下を見下ろすと、件の印度人は、もんどり打つて廊下に殪れてゐた。

『トーレアドー、……』

カールメンの曲がもう一度聞えたと思ふと、黒いマントをくる〳〵と巻いた鬪牛士が、トン〳〵、トン、と階段を二段宛一跨に飛びながら昇つてきて、剛の側をすれちがひさま、

『早く、表玄關へ！　見附かつた！』

と、小聲に叫んで、階上に消えていつた。

剛が素破と走つて、階上に出ると、

『この中に闖入者がゐる！　玄關を締めろ！　側門を閉せ！　みんな假面を取つて身分をあかせ！』

と、大聲に叫びながら、大舞踏室のうち、應接間、食堂、控へ室の隅々まで走り廻つてゐる二三人の人がある。

案内を知らない剛が、たゞ人波のうちに揉まれながら、途方にくれてゐると、

『假面を取つてはいけませんよ。どんなことがあつても！』

と、私語くものがある。件の女である。

見ると、二三百人に及ぶ假裝の人々は、半ば驚き半ば怪しみながら、騷然として立ち騷いでゐる。

その時である高い聲が滿堂に叫き渡つたのは。



貴婦人方！　紳士方！
なんとうまく〱と擔がれましたな。實はこれが今夜の餘興の大切でご座ります。
それではこの道化芝居の一幕をもつて、今宵の假裝舞踏會はお開きと致します。
それではご苦勞さま。
皆さま、左樣なら！　ご機嫌よう。お風を召さぬやう御引取り下さいませ！
アツハツハツハハハハハ。
グード・ナイト！」
と、それは西班牙闘牛士の服裝の男だ。
その聲は朗〱として廣間より應接間、應接間より食堂まで流れていつた。
驚きに顔色を失つてゐた婦人たちが、



初めて元氣を取り直して、

『オツホツホツホツホホ』

『うまく擔がれたわね！』

『上出來々々！』

と、口々に叫びながら、笑ひ興じて雪崩のやうに玄關にむかつて流れていつて、とり〴〵に歸り支度を初めた、また何か邪魔の入るのを恐れるかのやうに。

『違ひます！　違ひます！

今のは違ひます！　皆さまお待ち下さい！』

と言ふ二三人の聲が、もう一度室の隅々で起つた時には、もう群衆は制止することの出來ないやうな勢をもつて正面玄關から雪崩れ出てゐた。

主人の財務官夫妻は、突嗟の機轉で、玄關の前に立つて、歸りゆく人々と握手しながら、

『左樣なら、また明年！』

『この次は、同じ筋書では、もう欺されませんよ』

『えゝ、來年はまた來年の趣向！』

『有りがたう』

と、一人一人と挨拶してゐる。

蒼くなつた二三人の召使が、走り寄つて彼の耳に何か私語いたときに、財務官の顏はちらと心配さうに曇つたが、それも突嗟の間で、彼は露西亞人らしい大腹中で、

『まあ、いゝさ。

一人の日本人に逃げられても、三百人の倫敦社交界の人々の不興を買ふよりましさ。日本人といふ奴は、すばしこい奴だな。

いゝよ、いゝよ』

と、小さい聲で返事した。

しかしその晩彼は、ヨハノウスキーと二人ぎりになつたときに、

『また、日本人の奴に出しぬかれたな！』

と、歯がみして口惜しがつた。

しかしその時はもう小笠原剛は、吉川勇と一緒に、日本公使館の一室へ入つてゐた。

三

『あゝ段々山が遠くなつてゆく』

『うん、もう家は見えないね』

『早いもんだね』

『あの山影が、水平線下に沒したら、もう英國の見納めかな』

『馬鹿に心細いことを言ふね』

『だつて、何時また英吉利へ來られるか解らないぢやないか』

『うん。それもさうだなあ』
『短かかつたけれど、實際思出が多いなあ』
『さうだ、貴樣は一生忘れられまいね』
『うん、あんなことを二度もやつてたまるもんか』
『アツハハハハ、しかし小笠原、あんな目に會ふところが貴樣の身じやうだつて、先生は言つてらつしやつたぞ』
『いや、どうかそれだけはよしてくれ。先生のお前に出ると、俺はとてもきまりが惡くてたまらないんだ』
『恥しくないく〳〵と、貴樣は口ぐせのやうに言つてゐたが、本當はきまりが惡いんだな。アハハハハ』
『……』
『まあ、いゝよ。そこが貴樣の皆なに可愛がられるところだ。あの女にも可愛がられたところだ。だから先生も、小笠原のすることは、何をしても憎めない、と仰有つたわけだ。まあ、そんなしよげ返らずに、もう少し英吉利の話でもしようや』
『うん、貴樣とは、横濱で分れて以來、隨分永いことになるなあ。お互にこの一年半は、色々の經驗をしたなあ』
『さうだ。それがお互の目的だつたんだものね。廣い世界に出て、腕一杯色々な經驗をして今までの日本の青年のだれもしなかつたやうな修業をしようつてね』
『さうだ。お互は確かに、珍らしい經驗を澤山したなあ』
『さうよ。あの露西亞財務官邸の夜會ぶち壞しの一幕なんか、まだ日本の青年は一人だつて經驗したものはないものねー』
『アツハハハハ。貴樣が大テーブルの上に立ち上つて、妙な訛りのある英語で、これで今夜の假裝會はお開きと致します。皆さまお引き取り下さい！　とやつたときは全く痛快だつたね』
『アツハハハハ、さうして貴樣が、あの女と間違へて、米國大使の令孃の手を引いて財務官夫婦の前を悠々と出ていつた樣子つたらなかつたなあ。アツハハハハハ』
『しかし、女を取り替へたお陰で、俺は首尾よく逃げ出したんだぞ。米國大使の令孃の手を引いてゐれば、誰だつて俺を脱走囚人とは思はないからな』
『しかし、よく米國大使の令孃が、默つて貴樣に手を引かれて出ていつたなあ』
『そこは人格的魅力よ』
『アツハハハハハ、小笠原らしくなつてきたなあ』
『しかし、女といふものは、強い男に牽かれるんだ。あの大臣



ぎの最中だから、みんな上を下への大騷動だらう？　そこで俺はわざと悠然と、あの令孃の傍に進み寄つて、令孃、私にあなたを護衛する光榮を與へ給へ、とやつたのさ。すると娘さんが、有りがたう騎士よ、と言つて手を渡したもんさ。どうだ。かういふ藝當は貴樣にや出來めへ。吉川！』

『うん、女のことは貴樣の方が上手だな。欺されるのも、欺すのも！』

『馬鹿を言へ！　人聞きの惡い！』

と、言つてゐるところへ、

『やあ、こゝでしたか』

といふ聲が後にした。

剛と勇とが、びつくりして、つと後を向くと、そこに瀟洒たる小早川輝男の姿が立つてゐた。

『や、飛んだところを聞かれたなあ！』

と、剛が例のくせで、頭をかくと、

『おい小笠原君、西洋で頭をかくと先生に叱られますよ、アハハハハ』

と、輝男にまぜつかへされる。

『いや、今日は何と言はれても、敵はない。何しろ僕は前科者だからね』

『アハハハハ、何の前科だらう？』

と、輝男が一寸揶揄する。

『いや、ご免〳〵、さう二人でやられては、とてもやり切れない！』

と、逃げ出さうとすると、

『おい、待て〳〵！ さうあわてゝ逃げるな』

といふ聲がして、中江眞人先生が、歩み寄つて來られた。

『おや〳〵、先生まで、お見えになつたのですか』

と、剛は愈々觀念する。

『いや、今まで下の廣間で事務長に捕まつて色々食堂のテーブルのことなど話し込まれて時間をつぶしてしまつた。早く、甲板へ出て英國の島影を見送らうと思つて、氣が氣ではなかつたんだよ。

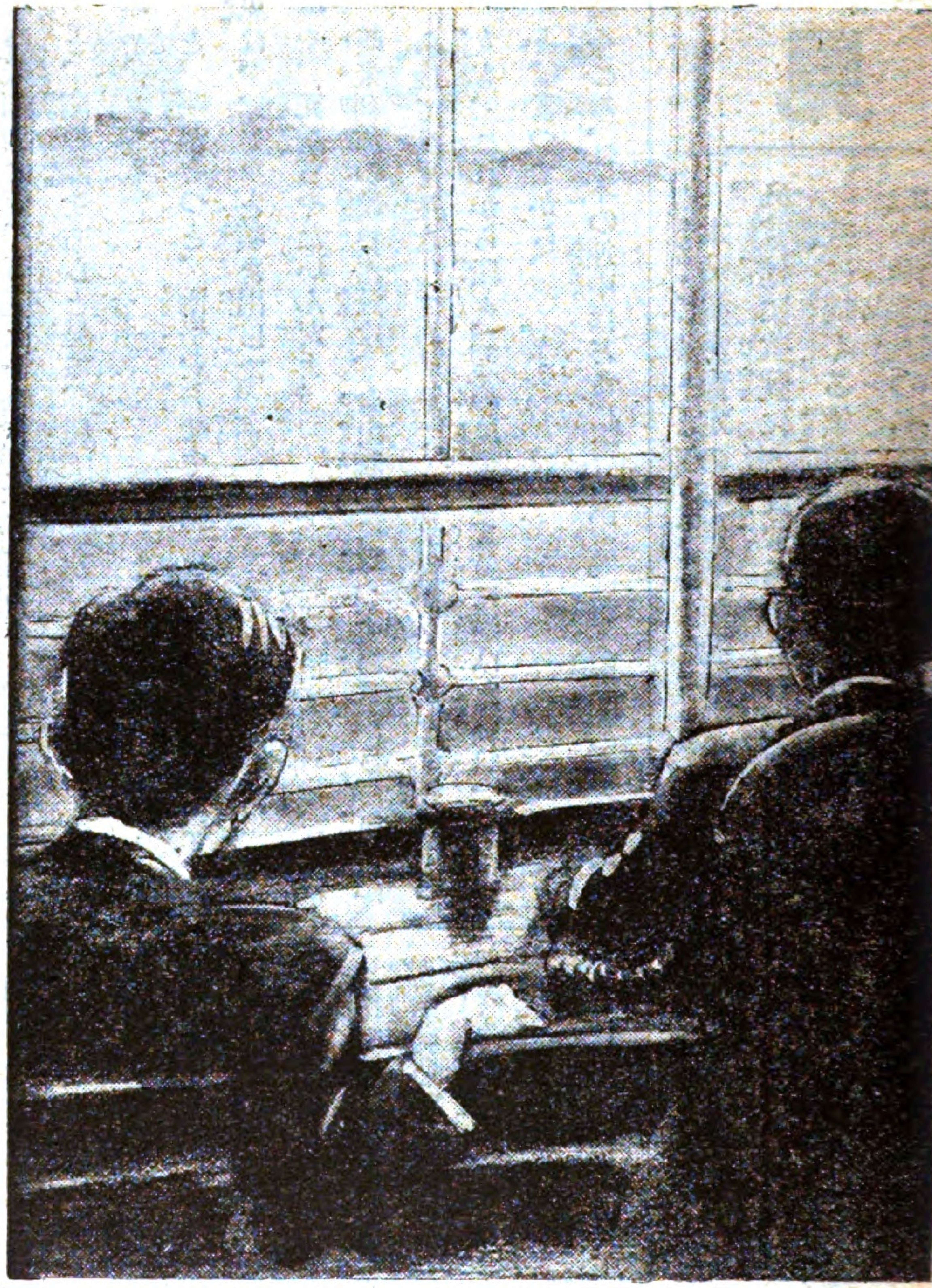
あゝ、もうサウサムプトンの町は、波のむかうに消えてしまつたね。

もうぢきあの山の頂が波の下に沈むとそれで英吉利にお分れだ……』

と、先生はぢつと眼を据ゑて、懐し相に英國の山々を見送つて居られる。

『隨分、色々のことがあつた……しかし、仕事は首尾よくすみ、かうして四人で無事に此國と別れてゆけるのは、實にうれしい』

さう言つて先生は、三人の若人の顔を見廻して、愉快相につこりされた。



三人は默つて先生と英吉利の島影とを交る〳〵眺めやつた。

『これから、米國だ』と、先生は靜かに言つて、

『十九世紀は英國の時代、二十世紀は、米國と……それから日本との時代……』と、附け加へられた。

『吉川は知つてゐるが、米國は不思議な國だよ。ことに今、あ

の國には、ローズヴエルトといふ傑物がゐる。あの男は、どんな大仕事をしでかすか解らない。あの男をつかまへて、日本の味方にしておかなくては、まだ〳〵日英同盟だけでは油斷は出來ない』と、先生は半ば獨り言のやうに言つて、

『亞米利加には、奇麗なお孃さんが澤山ゐるよ』

と、剛の顏をちらと見て、微笑された。

『や、どうも』

と、剛がそつと、兩手を合せて拜むまねをしたので、三人は思はず、ドッと噴き出した。

『や、冗談ぢやないんだよ。亞米利加の娘さん達は、自由闊達に育つてゐるから、血色からして生き生きしてゐて見てゝも氣持がいゝんだ。世界中の女も、これから段々、あの眞似をするに違ひないね』

と、言つてから、

『今ごろ、日本の連中はどうしてるかな。哲人學園の若い者は、よく勉強してるかな』と、言つた。

『さうですね。この間受け取つた手紙によると、先生がお留守だと、まるで學園は氣が拔けたビールのやうだ相ですね』

と剛が言つた。先生の顏が一寸曇つた。

『困るね。それは困つたことだ。僕が一寸留守して、それでは困るね。僕が死んだらどうする……』

三人は、はつとして默つてしまつた。

ある恐れが、剛の胸のうちに滲み込んだ。

『成程さうだ。いつまでも先生ばかりお賴りには出來ないんだ。我々が一本立になつて先生のお仕事を繼いでゆかなければならぬ日が、何時來るか解らないんだ』

彼はさう思つて肅然とした。

英吉利の島影が、蒼茫とした夕ぐれの海のむかうに、段々、段々と消えてゆく。

四人の姿が大きい大西洋横斷汽船の甲板の上に、沈まんとする日の殘照をうけて、くつきりと浮み上つてゐる。(つゞく)

見

本號掲載豫定の『好敵手物語』は更に感銘深く、更に興味豐かなるものを掲載せんと努力したため、遂に次號に割愛するの止むなきに至つた。

次に掲ぐる雄篇、悉くこれ盛夏の候奮闘精進の結晶、推く積まれたる作品中より擇びに擇びぬいた珠玉の名篇、一讀手に汗を握り、再讀卷を措く能はざる痛快淋漓の物語、乞ふ!! 刮目して次號

よこの大讀物!!

誌上を御期待あれ、

◉好敵手物語（マクドナルドとロイドヂョウヂ）　澤田謙

▽世界大戰を繞る悲劇（大川平三郎對藤原銀次郎）　石山賢吉
▽事業界兩横綱の好取組（伊藤印達と大橋宗銀）　赤松月船
▽天才同志の五十七番將棋（伊藤博文と大隈重信）　高木哲夫
▽憲法發布後の暗闘（初代伯圓と初代伯山）　榎本芝水
▽鎬を削る苦心の二名人

◉滿蒙開發の人柱　衆議院議員　牧野良三

開拓者の赴く所、其處には數奇なる運命が常に横つてゐる。印度開拓の恩人、クライブの身邊にも。我滿鐵副社長だつた中西清一氏の生涯にも……

『今後十年にして、我國の鐵は自給自足の確信がある』と前商相中橋德五郎氏をして聲明せしむに至つた其の礎、そも誰人の築く所か？　濛々黑煙を吐く鞍山製鐵所地下に立つ人柱、嗟乎此の悲壯悲痛の物語!!　事、我帝國の重大政策、尊き開拓者の血涙物語、一言一句苟しくもせざる愼重なる筆者の態度は稿を改むる事、實に五度、これ次號掲載の止む無きに至つた。

◉長篇小説　霧の中の曙　野村愛正

次號より連載の小説である。これこそ野村愛正氏が數年間に亙つて、案を練り想を磨いて漸く出來上つた一大力作！　世にこんな面白い小説はない。その鋭さ、その深さ、その美しさ、その悲しさ、正に天下無類である。世に一大センセーションを捲き起すべき大傑作である。必ず御期待あれ！



家庭セクション

御存じでせうか

三須裕

○手の置きどころ

手の置きどころといふことがありますやうに、手の置きどころには困ることがあります。餘り氣取つて色色の形を作りますと、如何にも態とらしく見えて反つてをかしいことすらあります。といつて正しく合はせて膝の上に乘せた手でもそれに作意がありますと、おとなしさを越えて反つていやにすましてゐると人に思はせます。



手はその形の如何に係はらず、常にその手先に力を入れず、寧ろ手先きの力は拔いて、自分がしたいと思ふ恰好にして手を置きますと、其形の何う斯うでなく安らかな感じに見えるものです。

○女の眼鏡とおしろい



女の眼鏡は何うしても顏をいかつく見せます。そこで大抵の人が縁なしにしますが、縁なしは破損し易いので困ります、女持としての縁はセルロイドか鼈甲の細いのが一番顏をやさしく見せます。玉の形はあごの丸い人は普通の楕圓、細い人は圓形が似合ひます。それから白粉は眼の周圍に普通よりは白めにつけ、其上に紅をやゝ濃いめにつけますと、眼鏡のためにいかつく見える眼はやさしく、球を通して眼の働きのにぶつた眼がはつきりして來ます。

○子供服の買ひ方

子供服は出來合ひで澤山です。唯買ふ時、身のたけとゆきだけを見て、それで合ふと思つてはいけません。無論たけとゆきの合はないものゝいけないことは分り切つて居りますが、それと同時に肩幅と胸廻りをよく合はせて見ないといけません。子供服の形のいゝ線は、この肩幅と胸廻りの工合一つでできるもので、こゝの調子がゆるやかに合つて居りますれば子供服は可愛ゆく見えるものです。たけやゆきは短くとも平氣ですし、長ければ直せますが、肩幅と胸廻りばかりは素人の手では何うにも

ステッキ判斷



(一)石突の擦り減つたのや泥のこびりついたのを平氣で突いて歩くのは、神經の鈍い人。

(二)ズル〳〵引きずつて歩くのは、呑氣者、心にくつたくが無い代り、締めくくりも無い。

(三)突かずに、宛も拔刀をさげた樣な恰好に持つて歩く人は、鼻息が荒くて[illegible]虚勢を張りたがる。

家庭重寶記

○鍋と釜

○銅の鍋は後始末が悪いと酸化して有毒な緑青を生じ易いものです。煮物は直ぐ他器へ移す事が大切です。



○鐵の鍋は澱粉質（芋類）を煮た後では、よく冷水に浸し、油物を煮た後は熱湯を注ぎ、一度流してから糠か藁灰で洗へば永保ちします。

○アルミ鍋は鹽氣を嫌ひますから鹽氣の物を煮た後は石鹸で十分洗つておきます。灰を用ゐると地質が次第に損はれて薄くなります。

○お釜を新調する時は、なるべく底の厚いのを選びます。底が薄いと急に熱が冷めたりして、溫度を保ちにくいため、おこげやむらが出來やすいおそれがあります。

○食物に對する好惡の矯生法



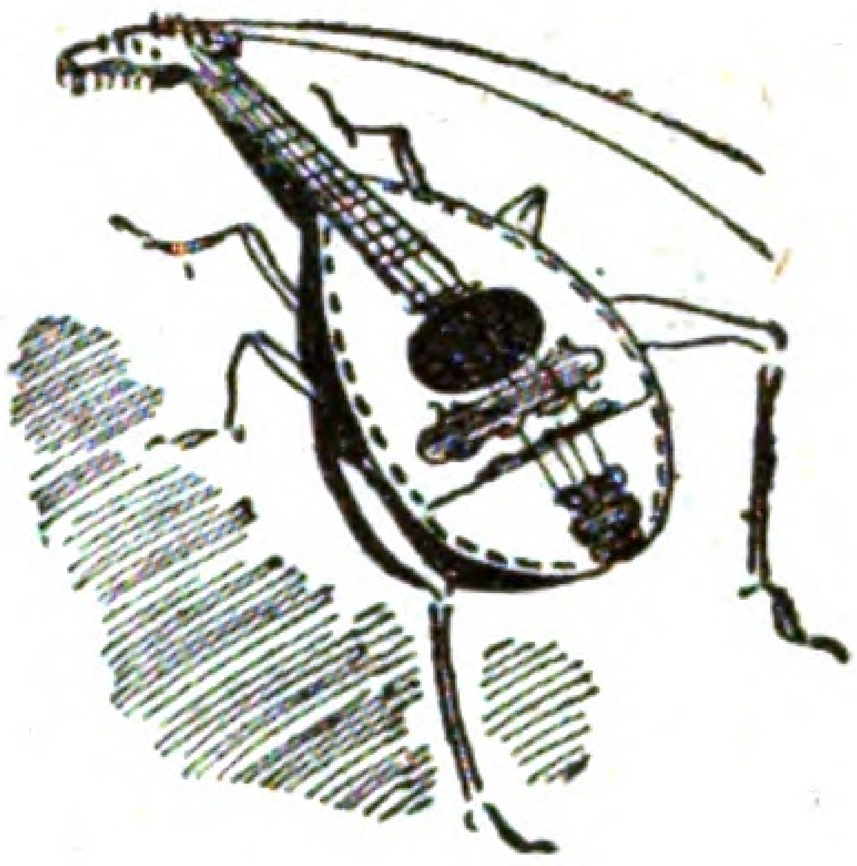
子供が食物に好き嫌ひを感じるのは、主として體質からくるのでありますが、發育上に非常に影響がありますから、幼さい時から出來るだけ雜食させる習慣を養はなくてはなりません。それには器物はもとより調理法なども、なるべく子供の興味をひくやうに注意し、また一方榮養についての知識を與へることが大切です。ある牛乳の非常に嫌ひな子供が、コップに入れた牛乳を麥稈で吸はせたことから急に好きになつた例があります。また今まで好きであつた鷄肉を急にいやがるので調べて見たところ、鷄を殺すところを目撃したゝめであることが分りました。とろゝの嫌ひな子供が、これは舌切り雀の糊だとだまされて、興味をもつやうになりました。母の注意一つで或る程度までは、子供の食物に對する好惡は矯正できるものであります。

○水引の扱ひ方



水引は注意して扱はぬと折目が出來て色が剝げ落ちます。白い部分が手垢で汚れたのも見よいものではありません。汚れた手は洗つて、結ぶ前に水引に息をかまけすと、しなやかになつて結び易いものです。結ぶ時には白い方を動すやうにして、赤い方はなるべく動かさぬやうにします。





趣味の科學

秋の野に鳴く蟲のいろ〱

德川生物研究所員農學士　大町文衛

―奇々妙々蟲の樂器―左利き右利きの樂人―蟋蟀仲間の變り者―之はビックリ世界無比の大跳躍―戀愛に耽溺する蟲類―珍妙な昆蟲の耳―半陰陽鈴蟲、松蟲―



大町文衛氏　筆者は故大町桂月氏の令息、多年服部廣太郎博士等と共に生物學――特に昆蟲によつて生物の遺傳其他の研究に沒頭せらる新進の學者である。

奇々妙々蟲の樂器

春光麗かな樹間に囀る小鳥の音樂も美しいが、月冴え渡る秋の野に鳴く蟲の音も、人の詩情を唆るものである。背景的な季節の影響もあらう、小鳥の聲は快活、蟲の聲は哀愁を感ずるが、本質的にも兩者には大なる相違がある。

小鳥の聲は、咽喉から出る。人でいふと聲樂家だが、蟲の聲は翅から出す。造物者の與へた神秘的な樂器を翅に着けて、孜々としてこれを彈ずる、人でいふと正しく器樂家なのである。

ブン〱と八釜しく翅を鳴らして、花の蜜に集まる蜂や虻、古障子に留まつて、チクタクと懷中時計のセコンドの如き音を立てる茶柱蟲、これらは單に音を出すだけで、所謂鳴く蟲とはいへない。飛蝗の仲間で其等の蟲よりも稍ゝ音樂的な音を出すものもあるが、これも唯、後脚を翅に擦り合はせて、簡單な音を出すのみで、まだ〱鳴くとはいはれない。

特別な樂器を備へ、これを奏して、微妙な樂音を發するものこそ眞に鳴くといふ可きであるのだが、それには蟬の如き半翅目に屬する蟲と、螽蟖や蟋蟀の如き直

翅目に屬する蟲の二種類の區別がある

蟲の樂器！　はて何んな樂器を持つてゐるのだらう？　調べて見ると實に巧妙で、造化の神が如何に微妙な細工をするものか、同じ目的を達するのに種々異つた方法を用ゐるか、驚歎の外はないのである。

先づ、蟬の發音器を見るとそれは不思議にも腹部に隱されてゐるので、蟬は實に腹で歌ふ樂人であるのである。然しその發音の方法は大體人間と同じで聲帶の如き薄い膜が腹部にあり、それに附隨した筋肉によつて激しく振動させて鳴くので『みん〳〵』でも『かな〳〵』でも『つく〳〵法師』でも聲こそ變れ發音の理は同じであるのである。眞夏の暑い日盛りに、腹部に波を打たせて鳴いてゐるのは、見るだけでも暑さうである。聲も暑苦しいものが多い。

蟬は主に夏の蟲であるが秋の鳴く蟲、そして遙かに美しい聲の持主は、螽蟖や蟋蟀の仲間で、その樂器は、蟬と違つて翅にあるのである。今、蟋蟀について檢べて見ると、右の翅に鑢狀をした一條の隆起線があるが、これはヴヰオリンでいつて見れば弓に相當するものである。それを左翅の硬い處に擦り合はせると音が出る。しかも共音は、翅の下部に張られた發音鏡といふ薄い膜に共鳴して、美しい大きな音響となる。翅の硬質部が即ちヴヰオリンの弦、發音鏡が即ち胴に相當するのである。秋になつて親になると、彼等は、この翅からなる發音器を、切りに擦り合はせて、戀歌を奏でるが、それは樂人が、熱情をヴヰオリンに托して表現するよりも更に切なるものがあるやうである。



唯。蟲の樂人は何れも雄で、演奏の目的も雌を呼び、雌に媚び、戀を遂げんがために外ならない。從つて雌には發音器が發達してゐないが、雄と異つて産卵といふ大任がある。雌は樂器の代りに、産卵管といふ細長い管を尾末に持つてゐるのである。人間で云へば、雄は浮れ者で雌は世話女房といふ處である。

左利きと右利きの樂人

蟋蟀や螽蟖の仲間は、皆器樂家だが、その奏で方は千差萬別である。

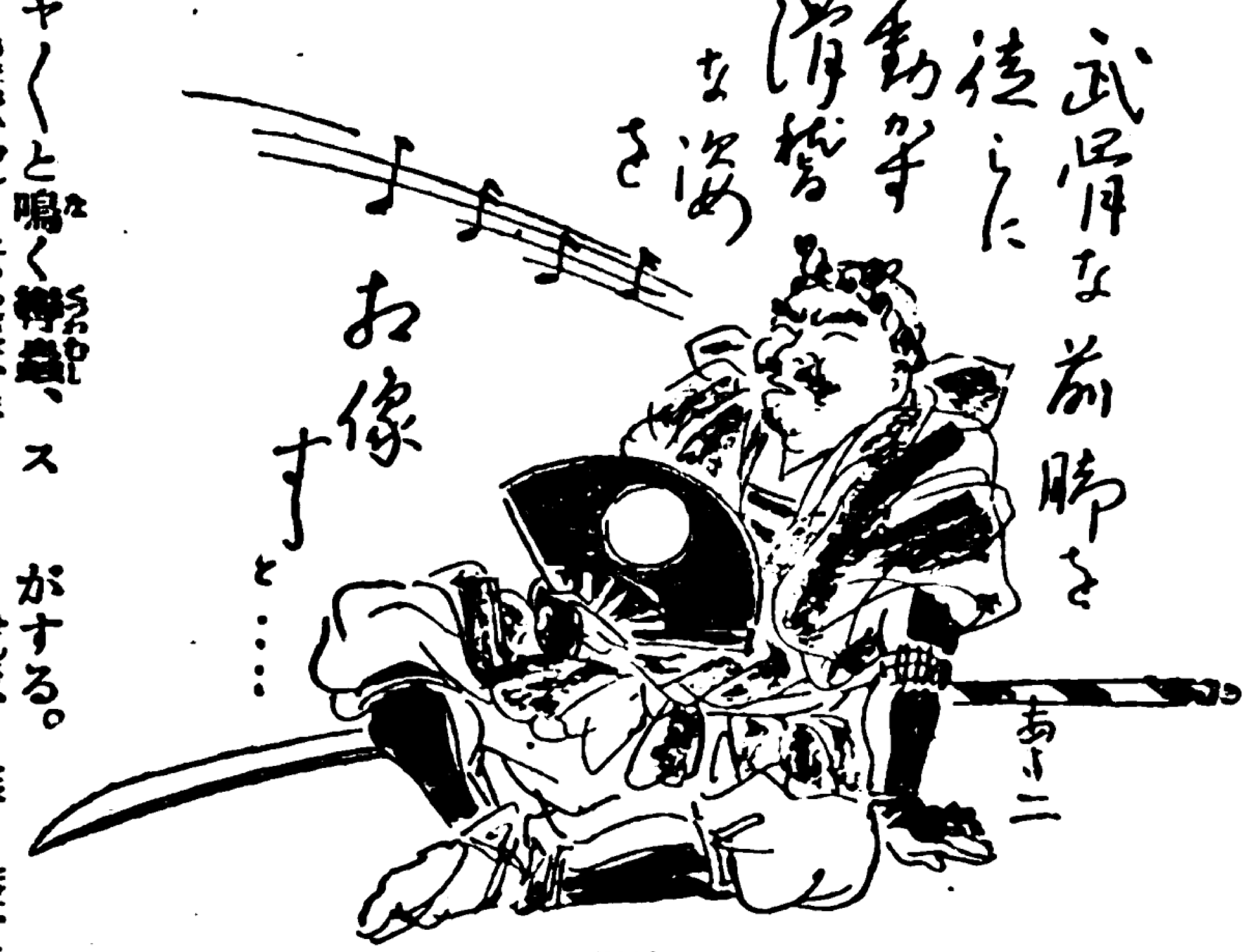
蟋蟀の仲間は右の翅が上にあるので、つまり右手に弓を持つて奏でるやうなもので、エンマ蟋蟀の如きは翅を少し立てて鳴くかと思ふと、鈴蟲の如きは翅を眞直に立てゝリーンリーンと鳴く、また

蟲、馬追蟲の如く螽蟖の仲間は左利きで、左の翅を上にして鳴いてゐる。

蟋蟀の翅は平で、鑢状の腺も發音鏡も非常に發達してゐるが、螽蟖の方は三角の稜をなしてゐて、發音の部分は、その山の一部にしかついてゐない。鳴く時も殆んど翅を立てずに鳴いてゐる。蟋蟀仲間と螽蟖仲間の區別は、そこにもあるのである。

蟋蟀仲間の變り者

嘗て本誌にも秋の樂壇消息として書かれた如く、螽蟖仲間には、ガチャ〱と鳴く轡蟲、スイッチョ〱と鳴く馬追蟲、蟋蟀仲間にはリーン〱優しく涼しげに鳴く鈴蟲、チンチロリン勇ましく鳴く松蟲、チンチンと鉦でも叩く如き聲で鳴く鉦叩き、調子の高い涼しい聲でリリ……と鳴く草雲雀、朗らかな、然し何となく遣瀬ない聲でコロ〱リ……と鳴く閻魔蟋蟀、等等、蟲の樂壇は毎秋多士濟々の感がある。



然るに何ぞ、かくの如き藝術家揃ひの中にあつて、これはまた變りも變つた荒武者が二人ある。一人は昆蟲のスポーツ界切つての跳躍の名人ノミバッタで、他は土掘りの達人ケラである。

一見しただけで其武骨の程が察せられるが、ケラの如きは武骨を通り越して滑稽な感がする。

一體蟋蟀仲間は、凡て繊細な長い觸角を絶えず振り立てゝ、見るからに華奢であり、優美であるに反して、この二匹の觸角は短かく太く、ぶつきら棒である。また鈴蟲や松蟲の雌は、尾端に細長く尖つた産卵管があるのに、ノミバッタもケラも、丸腰の兵隊さんのやうに、ぬつぺらぼうで不恰好この上ない。

脚も頑丈無類である。土掘りの達者ケラの前脚はもぐらの手の如く立派な土掘器になつてゐるが、ノミバッタの後脚は、これに劣らず、ビール樽のやうに異常な發達をしてゐる。

併し、流石がは頑強な生れだけあつて、他の蟋蟀類が、訪れる冬の寒さに堪へず、悲歌を殘して死に絶えるに反して、この二匹は土の中へ潜り込んでゐて越冬する。そして春暖を待つて又そろそろと這ひ出して來るので、ケラの如きは、二年三年の壽命を保つといはれてゐる。唄は下手でも、見掛けは醜惡でも、巖の如き頑健な體格を持つてゐる方が、眞の優者であることは、蟲も人間も變りのない法則らしい。

尤もケラは歌も唄ふ。一種の哀調を含んだ聲で、チ、、、と鳴く。世人から蚯

蚓が鳴くと誤られてゐるのはこのケラの聲であるが、併し、その逞ましい武骨な前脚を徒らに動かす滑稽な姿を想像すると、何う考へても、辨慶が小唄を唄つてゐるやうなお道化た感がする。兎に角、この二種は、蟋蟀仲間の奇物變物に相違ないのである。

之はビックリ世界無比の大跳躍力

ケラは鳴くがノミバッタの方は鳴かないのである。然しその跳躍力と來たら、實に驚くばかりで、ケラの前脚どころの騒ぎではない。僅か二分五厘位の小蟲であるが、一跳びピョンと反ねようものなら、オリンピックの走幅跳、走高跳は愚か義經の八艘飛びも顔色なしの跳躍を見せる。私の實驗した二匹のノミバッタは、十回跳んだ平均が、甲は六七・三五センチ、乙は四一センチ、その最大距離は甲の一〇一センチであつた。甲の身長六ミリ半、乙の身長六ミリに比較すると、甲は平均身長の百四倍、乙は九三倍、最大距離となると實に百五十倍を安々と跳んだ譯である。

今、この割合で、人間が跳躍出來たとしたら何うだらう？ 走幅躍の世界記錄で凡そ七米餘、走高躍が二米餘であるが、迚も問題になつた話ではない。五尺の男が、やッ！ と掛聲諸共一跳びしようものなら、悠々五百尺から七百五十尺位は飛べるのだ。丸ビルや新築議院の屋上を跳び越すなぞは、お茶の子さいさい、九百八十四呎の巴里エッフェル塔の天邊へも、一跳半で跳びつける。二十遍も跳ぶ氣なら、海拔一萬二千尺の富士山の頂上まで、ちよつと行つて來る位雑作もない話だ。何と世界の跳躍選手達、ノミバッタの脚力に、垂涎三千丈たらざるを得まい。



併し、流石に跳躍の名人、その後脚の逞ましさは驚くばかりだ。腿節の發達はビール樽の如く膨れ上り、脛節は針の如く細く眞直に深く強く跗節は二つに分れてゐる。しかも腿節と脛節との繼ぎ目には、精巧なバネがついてゐる。成程、これでは跳べる筈だと、感嘆の外はない。

戀愛に耽溺する蟲類

螽蟖や蟋蟀は、蟻や蜂の如く集團的な社會生活は營まない。その親となつてからの短かい一生は、專ら戀愛と繁殖で終るのだ。典型的なボヘミアン、模範的ト



ウルバドウルだ。しかし、それも彼等としては無理もない事であらう。

蟬の如きは、成蟲の時代より、幼蟲時代が遙かに永く、或種のもの丶如きは、幼蟲の儘で、地中に埋もれでゐること十三年又は十七年、成蟲となつて世に出るや十數日で死ぬものがある。短かくも儚い一生の全部を、戀愛と産卵に費して仕舞ふといふ事は哀れにも思へるが考へれば繁殖といふ事こそ動物の最も重大な使命であるのである。

螽蟖も蟋蟀も、秋の末に産卵すると、卵はその儘冬を越し、翌年の初夏に至つて孵化する。孵化した時、蟬の仲間は、成蟲と全く違つた形をしてゐるが、螽蟖や蟋蟀は、親によく似た形をしてゐる、唯翅がないだけで。それが七八回脫皮する內に、翅が生え、完全な成蟲となるのである。

珍妙な昆蟲の耳

螽蟖や蟋蟀の雄が鳴くのは、雌を呼ぶためであることは誰も知る通りだが、して見ると、呼ばれた雌には、その美しい音を聞き分ける耳がなくてはならぬ筈だ。

『昆蟲に耳あり。』といつたら、人は不思議に思ふであらうが、それは事實である。では一體何處にあるだらう？

獸類の耳は大概頭の兩側にある。だから、耳は常に頭部にあると思ふのも當然。だが、いつも頭部になくてもよい筈であらう。便宜上なら、軍艦の腹に海底聽音器がある如く、人間の耳が、臍の邊にあつても差支へあるまい。腕時計でも嵌めたやうに、手首に耳があつて、必要に應じて、ちよい〳〵出して音を聽いてもよいではないか？

こんな氣紛れな空想をしたら、人は嗤ふであらう？ところが、昆蟲仲間では、これが空想でないから面白い。即ち蝗の類は、腹の第一節の兩側に鼓膜狀の耳があり、螽蟖や蟋蟀の類になると、前脚の脛節の兩側又は一側に、小さい孔があり鼓膜が張られてゐる。處もあらうに、向脛に耳ありとは、實に面白いではないか！

半陰陽の鈴蟲、松蟲

自然の野山で鳴く蟲は、秋風の立つ八月にならねば親にならぬから、鳴く音も聞かれない。然るに、夜店で賣る蟲は、初夏の頃から鳴いてゐる。

これは、早くから適當な溫度を與へて、人工的に成長させたものであるが、

こんな蟲を、何萬と飼つてゐると、その中に奇態な不具者が生まれて來ることがある。

その不具者の一つは、ギナンドロモーフと呼ぶ畸型兒である。例へば左の翅が雄で、右の翅が雌であるとか、右側の腹に睾丸があるかと思ふと、左の腹中に卵巣がある。雌雄混淆の變態であるが、如何に現代流行のモボやモガが、奇を好み、變態を喜ぶとて、モボの胸に乳房をつけたり、モガの口に髭を生やすことは出來まい。否、單に裝飾にしても、右半身は男裝し、左半身は女裝するなど、突飛な變り者も出ないであらう。

またインターセックスと稱する變態になると、身體には睾丸もあり、交尾期になると切りに雌を追ひ掛ける紛れもない雄だが、翅ばかりは雌である。これ等は始め雄として生れたものが途中から雌となつたのではないかと考へられる。

奇想天外頓智讀み番附

横綱	姿（妹）	前頭	趣（掏摸）	前頭	烟（マッチ）
大關	李（茸）	同	蓑（枯草）	同	萩（菊）
關脇	拾（拜む）	同	⿱羊衣（洋服）	同	綻（縫ふ）
小結	鮪（魚屋）	同	⿱竹雀（雀）	同	霰（晴）
前頭	侍（坊主）	同	倅（僕）	同	魁（地獄）
同	闇（訪ねる）	同	晒（午後）	同	泊（晒す）

行司	借（舊弊人）	伯（西洋人）	
年寄	泉（米汁）	歪（惡事）	
	狂（獅子）	俳（乞食）	

横綱	好（娘）	前頭	莊（夏草）	前頭	矼（石工）
大關	橙（猿）	同	習（白鳥）	同	檸（栴檀）
關脇	奇（贊成）	同	酒（水鳥）	同	飽（財布）
小結	鯉（漁村）	同	蚤（蚯蚓）	同	篤（幼馴染）
前頭	糖（南京米）	同	粕（白米）	同	紛（解く）
同	訪（訛）	同	杢（大工）	同	焚（山火事）

蟲の世界でも、こんな不具者は、氣の毒なもので、性的に全然不能である。殊に後者の如きは、睾丸をもつてゐる所は雄であるので、その側に雌を入れると、翅を立て丶盛んに振動させて摩擦させるが、それは雌の翅をしてゐるので音が出て來ないのも悲哀である。雌も知らぬ顔の半兵衛でゐるので、いくら雄が雌を追ひかけても徒勞である蟲と雖も、健全な女性は、健全な男性を好むのであらうか。

こんな不具者がどうして生れて來たか？ と研究すると、性は如何にして決定するかといふ生物學上の大問題の核心に觸れることが出來るので、こんな不具者は、我々生物學者にとつては、學問的に興味が深いのである。又、こんな不具者の多く出るのは、蟲界樂團の兩大關松蟲と鈴蟲の仲間であるのも皮肉である。

（キング記者の乞ひに應じて漫然と蟋蟀其他の鳴蟲の種々相を記す）



飛んだ間違ひ物語

お門違ひ

生方敏郎

大正四年の初夏のことだつた。

私は、長谷川天渓さんに少々用事があつて、當時氏が住んで居られた芝區神谷町のお宅を訪問した。私は、長谷川さんが博文館から歸られる時刻を見計らつて、よそから廻つたのだから、それは凡そ夕暮れ近くの時刻だつたと思ふ。

神谷町の停留所で電車を降りて、あの賑かな通りを二三十歩行つて、右側の路地を這入る。前にも二三度お訪ねしたことがあるので、その家を探すに左程骨折る必要もなく、夏の夕ぐれの涼しさに、私は、いい心持で、玄關前に小ざつぱりと打水のしてある長谷川さんの家の千本格子の戸を開けた。

案内を乞ふと、まだ若かつたその頃の奥さんが、玄關へ出て來られて、

『長谷川は、まだ歸つてまゐりませんが、もうやがて戻るだらうと思ひますから、暫時二階でお待ち下さいませ』

と、云はれた。だが私は、ではこの間にぢき近くの麻布我善坊に居る正宗白鳥君に、一寸逢つて來ようと考へたので、

『少しそこらを歩いてまゐります』

と云つて、ひと先づそこを出た。我善坊までは、芝と麻布と區こそ違ふが、ここから目と鼻の間なので、忽に白鳥君の家まで行くには行つたが、生憎と御夫婦共にお留守なので、大方觀劇にでも行つたのだらうと考へながら、私は再び神谷町へ歸つて來た。

この往復の間は、時間にして見れば、まことにわづかなのだが、神谷町の電車通りまで來ると、何處もすつかり電燈が煌々と點いてまつたく夜の氣分だつた。

だが、私がその路地へさしかゝらうとする刹那に、この界隈の電燈がぱツと消えて、にはかに闇を作つた。この停電のために電燈の消えることは、その時分あまりに屢々あつたことなので、口の惡い新聞などでは、これを東京名物の一つに數へた程だから、私は格別驚きもせず路地を這入つて、再びその家の玄關先に立



つた。

家の中では、あわてゝる様子で、裸蠟燭を點けた人があちこち動いてゐる様だつたが、

『先程は失禮しました。もうおもどりになりましたか』

と、私が訊くと、取次の夫人は、

『どなた様ですか』

『生方です』

私は、今の先訪ねたばかりなのに、改めて名前を訊かれたりするので、少し變な氣がしたが、恰度その時ぱツと點いた電燈に照らし出された姿を見ると、先程の夫人とは全く別人で、もつと年寄つた夫人であるから、又私の名を訊き返したのも合點が行つた。

その老夫人は、取次ぐために奥へ這入つたまゝかなり暫く出て來なかつた。私は何をしてるのだらうと少し焦れるやうな氣持になつた時に、老夫人は再び玄關に現はれて、

『只今主人は湯に入つて居りますので、誠に失禮ですが、暫く二階でお待ち下さいませ』

と云つて、私を上まで案内しようとするから、



『わかつて居ります。わかつて居ります』

と云ひながら、實際幾度も前に訪ねて來てよくわかつてゐるので、案内されるのが無用と考へ、ずん／＼梯子段を上つて行つたが、その老夫人は、矢張私の後について來た。梯子段の向きや座敷の間取等は別に變つたこともないが、いつも梯子段を上るとすぐに目につく大きな本棚が見えないのが、少し物足りないやうに感じて、次の室即ち座敷へ通ると、そこには既に先客があつて、いろ／＼御馳走を並べた膳を前に置き、膳の傍に德利が一本あり、荐りに一人で飲んで居る様子だつた。私を見ると、座敷布團を辷り下り、

『弟がどうもいろ／＼御厄介になります』

と云つて、叮嚀に挨拶するから、私も御辭儀を返した。そして更に名刺を私に呉れたから、私も自分の名刺を出して渡すと、その客は、

『いや、もう御高名はとうから伺つて居りますし又弟からもお噂はかねてから訊いて居ります。私は弟とは全く方面違ひの事をして居りますが、矢張文學とか美術とかは好きでしてね』

などと話されるので、私は今貰つた名

刺をそつと見ると、

『宮内省官吏　河合五郎』としてあつ、た。（もうその名刺を失つたので、宮内省の役向きや名前が或は少し違ふかも知れないが、それは河合氏に許していただく）

　私は、この人を長谷川天溪さんの令兄と考へたので、假令宮内省につとめても繪や文學が好きだと云はれるのは、この弟にしてこの兄ありで、最も自然なことゝ考へた。老夫人は、私がこの室へ入つた時に、座布團を進め、階下へ降りた、と思ふとすぐ又、茶を持つて引きかへして來て、私に進め、

『誠に失禮いたします。もう少々お待ち下さいませ』

と云つて、又階下へ降りた。

　後は河合氏と私と二人きりで床の間の方を見ると、とても大きな繪馬を衝立にしたものが飾つてあるので、私はこれまで長谷川さんの二階には書物ばかり澤山あつたのに、それがみんな取りかたづけられて、これまで全く見なかつたそんな大きな繪馬の衝立があるので、何んとなく奇異の感じを懷いた。又、床の間には、鎧櫃だの弓矢だの並んでゐるのも、唯漠然とだが、奇異の感じがした。しかし、私は、

『これア面白い衝立ですな』

と云つて、その繪馬を話題にしようとした。河合氏は、先づ盃を私に進め、自分で酌をしながら、

『あなたも美術はお好きと見えますね』

と、大變機嫌がよく、それから二人は、去年の文展の噂やら、日本畫の將來などについて、大分話がもてた。

　さうしてゐるところへ、階段に人の跫音がするから、居ずまひを直して、心待ちに長谷川さんを待つて居ると、上つて來たのは全く別人だつた。

『いやア生方君、どうもしばらく』

と挨拶した顏を見れば、これは全く思ひがけない昔の友達の、日本畫家河合英忠君だつた。

『ほんたうに君しばらくだつたね、この頃はなか〳〵盛んに毎年帝展に出品するぢやないか』

と、私が云へば、英忠君は、若々しい顏を電燈の下に輝かせて、

『いや、君こそずゐぶん盛んに執筆するぢやないか』

と云つて、私を褒めてくれる。

　河合君と私とは、明治四十年頃、東京朝日新聞社に机を並べて毎日わい〳〵やつて居た間柄なのだ。だが河合君は、記者といふよりは社の繪かきで、その後間もなく私は辭めて文學を以て立つやうになり、河合君は又朝日を辭めて大阪に行き、大阪毎日新聞社に入社し、數年間、寒暑の見舞、年賀狀のやりとりを怠らなかつたが、この二三年、一寸御無沙汰してゐる間に、河合君はめき〳〵賣出して、秋の上野の文展に、毎年々々作品を出品するまでになつた。別れてから今日まで、まる十年も過ぎて、今夜初めて再び邂逅つたわけだが、見ればあんまり以前と變つても居ない。

『君は相變らず若いね、却てあの時分よりも艶々して居るぜ』

『なアに今湯から上つたばかりだからね、僕は實際はもうお爺さんになつたよ、君こそいつもほんたうに元氣がよくて羨しいよ』

二人は久しぶりで邂逅つたのが腹の底から嬉しく、朝日新聞に居た頃の昔咄を、それからそれと、とめどなく話し合つた。だが話の杜切れ目に、私はふと長谷川天溪さんのことが頭へ來た。

『長谷川さんはずゐぶん湯が永いな、まだ這入つて居るのかしら』

と、私が獨言のやうに云ふと、英忠君は調子を合せて、

『あの人はいつも永湯のやうだよ』

と云つて、更にそれ前に老夫人が私の前に運んで來た膳の上の肴を見て、

『君、その鱸の洗ひは、イキがいいと思ふんだ。やつて吳れ給へな。それからその伽羅路は一寸おつなものだぜ。よく朝日に居る時分にやア飲んだもんだつけなア。まアも一つ重ね給へ。ほんたうに久しぶりで友達に邂逅つて、こんな懷しいことはないよ。今夜はゆつくり飲まうぢやないか』

と云つて荐りに進める。私は、一方嬉しくもあつたが、しかし又他方實に變な奴だと思つた。如何に舊友に邂逅つて嬉しいからと云つて、偶々長谷川さんの二階に落ち合つたのに、まあ長谷川さんとどんなに親しい仲か知れないが、他人の物を我物顏に喰への飲めのと荐りに進めるとは、妙な男もあるものだと思つた。



然るに人の氣も知らずに英忠がます〳〵い機嫌になり、

『やア實に今夜君に逢はうとは思はなかつた。今夜は實に愉快だ。又どうか度々遊びに來てくれ給へ』

『ウン、僕も行きたいには行きたいんだがね、なか〳〵これで子供が多いものだからね、出ようと思つてもさう出かけられないんだよ』

『そりやアさうだね、しかしまア忙しくつても亦仕事ばかりもして居られまいから、時たま息抜きに會つて飲みながら話すのも惡くはないよ』

『ほんたうに大阪は食物も旨いしね、酒もいいしさ、あつちに居ちやア面白い所へもずゐぶん遊びに行くだらうね』

『いや、その方は駄目だよ』

『でも僕が行つたら案內してくれるかね』

『そりやアするとも』

『僕も奈良へ、是非行きたいと思つてゐるから、その時大阪へも廻るし、さうしたら屹度君を訪ねるよ。さうだ、君のお宅を伺つて置かうか』

『僕の家かね、僕はずッと此處に居るよ』

『さうか、君はもうずッと東京かね、僕はまだ君は大阪に居るとばかり思つて居たのだ。それなら屹度お訪ねするよ』

『是非來てくれ給へ』

『何處だね、君の家は？』

と、私が訊くと、英忠君は怪訝な顏をして、凝乎と私の顏を瞶める。

『こゝが僕の家だよ』

『えッ』

と、今度は、私が狐につまゝれたやうに思つたので、道理で先程梯子段を上る時から腑に落ちぬことばかりだつたと心づき、

『さうか、や、實は君の家と知らずにお訪ねしたんだよ。實は今夜長谷川天溪さんを訪ねるつもりで來たのだがね……長谷川さんはいつ越されたかね』

『いや、越しはしないだらう』

『でもこゝは君の家だといふぢやないか』

『さうだよ、こゝは僕の家で、長谷川さんはすぐこの隣りだよ』

これで大笑ひになつた。

後で、長谷川さんのところへ行き、この話をすると、長谷川さんも腹を抱へて笑ひ、

『こゝと、隣家と、その奥の家と三軒全く同じやうな出來なので、皆がよく間違ふンだ。しかし君のは全く念入りで間違ひの傑作だよ』（了）

黒木家の出來事

齋藤浅次

事件は僕の友人黒木の家に起つた出來事である。

黒木の家には、妻君の妹の勝子といふのが同居してゐた。

彼女は婚約の間柄であつた飛行將校が、不幸にも飛行機の墜落といふ哀しい運命に遇つて結婚前に慌たゞしく此世を去つてから、雄々しくも職業婦人として立つてゐたのであつた。

彼女は非常な犬好きだつた。

黒木の家に來る時にも、可愛いゝスパニールを一匹連れてゐた。ところが同じ腹から生れても、彼女の姉である黒木の妻君は、また思ひ切つた犬嫌ひだつたので、この點だけは夫婦の間にも勝子の來る前から問題になつてゐた。

しかしその頃は、二人共勝子の不幸に同情の念が强かつたので、兎も角、自分達の方から折れて、犬も快よく一緒に置いてあげようといふことに一致してゐた。

この同情が、双方の楔になつてゐる間は、至極平穏無事だつた、勝子も毎朝安

心して姉に犬の事を賴んで出掛けた。

しかし人間の感情が、昂奮性を失ふのは、存外手間暇のかゝらぬものだ。妹がだんだん孤獨の生活にも馴れて、却つて晴れ晴れした娘時代の美しさに輝いて行くのを見るにつけて、姉の同情もいつしか薄らいで行くのをどうすることも出來なかつた。

さうなると、再び頭を擡げ出したのが、彼女の犬嫌ひである。

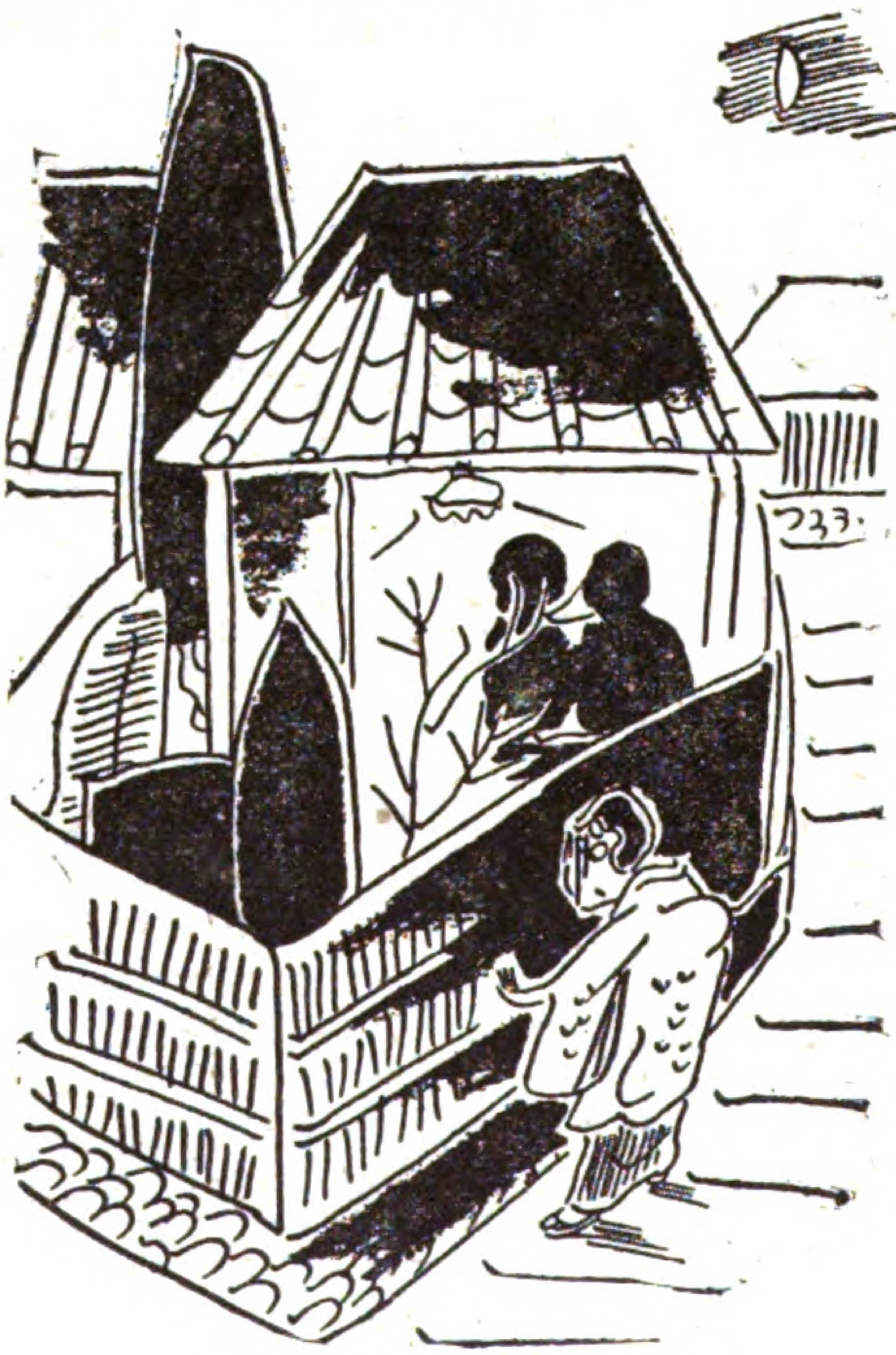
人懷つこい性質のスパニールが足元に纏ひつくのを、着物を汚すと蹴飛ばすこともあつた。掃除した許りの緣側に泥脚を載せられると、思はず聲をあげた、度重なるとヒステルカルに、はたきの柄で頭をひつぱたくこともあつた。

妻の犬嫌ひが段々露骨になるにつれて、黑木は反對に犬に對して同情が湧き、果はだんだん犬好きになり出した。犬を中にして、夫婦の間に小さな反目が起つた――その渦中に、いつしか勝子が引込まれてゐた。

ある日、いつも勝子よりは歸りの遲い夫が、珍らしく早く、一緒に連立つて歸つた。

どちらに訊いても、電車の中で逢つたといふことだつた。

また或る日、こんどは早い筈の勝子が、遲くなつて、夫の歸りに逢つたとか



で、仲睦まじく並んで玄關を跨いだ。

でも、眞逆――と打消した姉の胸に、一抹の暗い影が淡い浮雲のやうに過ぎた。

さかしい勝子がこれに氣附かぬといふ筈はなかつた。

氣附くと同時に、彼女は早くも此家を出ることを決心してゐた。彼女は何でも心の穗に出たことを、考へあぐね思案に暮れる女ではなかつた。

恰度黑木の家とは隣合せの、家主の庭一つを隔てゝ、一軒の家が空いてゐたのでこゝに移ることに決めたのである。

黑木も妻の心持を薄薄察してゐたので、勝子の引越には强て反對しようともしなかつた。

明日の日曜に引越すといふ土曜日の夜が來た。

新しい家も、黑木の家と同じ家主の所有で、荷物なども家主の庭傳ひに運ばせてくれたので、殊更人手を借りる必要も

なかつた。
　夕飯を濟せてから、黒木は勝子の室に行つて明日のことなど、打解けた話を交してゐたが、妻は何う思つたか緣側に廻つて、二人の話を偸聽かうとした。
　そんな人間が外に居ようとも知らずに、室の中では二人が何か睦じさうな語らひに餘念なかつた。
　大きな影法師の所へ、一つの影法師がピツタリと喰付いたまゝ暫くは離れなかつた。
　やがて、黒木の聲が考へ込んでゐるやうに聞えて來た。
『……少しあの家は、大き過ぎないかねえ――』
　偸み聽く妻にとつては夫の妹に對してかうした干渉がましい言葉が、もうムカムカと癪に觸るのである。
　あの人は、何かといふと、妹に親切を見せたいのだ。家が小さからうが大きからうが、妹が勝手に選んだものを、餘りといへば餘計なおせつかひ過ぎる――
　彼女は息を殺して猶も聞耳を立てた。

　四月とはいへ、まだうそ寒い夜氣が、腰のまはりに冷々と感じられた。
『でも私、兄樣と二人でなら、大丈夫持つて行けますわ』
　姉はこの聲にハッとした。世界がグルグル廻りながら、脚元から地の底にめり込むだかと思はれた。
　矢張り……矢張り妹も私の眼を偸んでゐたのだ、新しく家を借りたのも、前から夫と一緒に計畫したことなのだ。自分は何といふ馬鹿だつたらう。
『折角此家に馴れたのだから、僕はズツと置いてもよいと思ふが、政子があれだからね』
　政子といふのは妻の名だつた。
『えゝ、姉樣は昔からあゝなんですよ、仕方がありませんわ』
　何を！　小開襯れた妹づれの、あの口の利き樣はどうだ。飛込んで叩き据ゑてやりたい、あの口を！
　すると、こんどはまた夫の聲が聞えて來た。
『全く、可愛相だなあ』

　あゝ、おまでがあの口の利き樣、私が可愛相だといふ前に、自分逹の不仕鱈を考へるがよい！
『でも、近いから矢張り此處が懷しくて、毎日來るだらうと思ひますわ』
　畜生！　矢張り自分でなく妹のことを可愛相だといつたのだ、もうこれまでだ。彼女はフラ〳〵と立上つた。二人の中へ躍り込みたい心をヂツと抑へて、そのまゝ逃れるやうに自分の居室へ戻つたが、彼女はもう何をする氣にもなれなかつた。
『口惜しいツ』と其場に泣倒れたは、暫く經つて、黒木が傍へ行つた時には、妻君は狂氣のやうになつて、彼を罵つた。心配しておろ〳〵する勝子を彼女の室へ押しやつてから、黒木は再び妻君をなだめようとしたが、妻君の昂奮は容易に納まらなかつた。
　翌る朝、妻君は床を出て來なかつた。黒木はウン〳〵唸つてゐる妻の手前、勝子を手傳ふこともならず、行つたり來たりしてゐるうちに、勝子の引越はボ

ツボツ終りを告げて、最後に犬と犬舍だけが取殘された。

そこへ、ヒョツコリ顏を出したのが僕だつた。

黑木は地獄で佛といつた樣に、僕に委細の話をした。が『何が妻君をさうさせたか』は、彼自身にも僕にもまだハッキリしなかつた。

そこには何かの間違が潛んでゐるやうに思へた。僕は勇を鼓して、妻君にも話を聽いてみた。

聽いてゐるうちに、僕には耐らなく面白くなつて來た。危く吹出しさうなのをヂツと怺へた。

嫉妬は男女を盲目にするつていふが、からも飛んだ間違をし出かさうとは、全く空怖ろしさのこみ上げるのを禁じ得なかつた。



僕は妻君の手を取つて、無理に犬舍の傍に引張り出した。可愛いゝスパニールが、立派すぎる犬舍の奥の方に小さく蹲つてゐるのを追出して、自分で犬舍を持上げたが、一人では迚も一寸と運べさうもない。

『奥さん、一寸半分助けて下さい』

『どうするんですの？』

妻君は妙な顏をした。

『問題はこれですよ、これが二人の話の中心だつたんですよ、どうです「貴方と二人なら大丈夫持つて行けますわ」……』

僕がさういつて勝子さんの聲色を眞似ると、妻君は『あらやーだ』と娘のやうな科をして逃出してしまつた。後見送つて黑木と僕はドッと聲をあげて笑つた。

勝子は、その後黑木の骨折で、僕と二人で家を持つことになつた。

首を拔いてくれ

沼田寛吾

退職砲兵中尉のルドーは、田舍で牧師をしてゐる兄のところを訪ねて行つた。

『おい』

兄の牧師は、下男をよんで、よつく言ひふくめておいた。

『弟は私とちがつて軍人だ。少しばかり氣が短かいから、ハキ〳〵と、よく氣をつけてお世話しなくちや、不可んぞ』

『へーい』

しかしこの下男は馬鹿に大きな身體を持ち扱ひかねたのか、のろ〳〵と氣の抜けたやうな返事をするだけであつた。

やがてルドー中尉が着いた。兄弟は久し振りの對面で、積る話しに夜を更かし、やがて寢る時間になつた。

『ぢやあ、疲れただらう。さ、もう寢みませう』兄弟はやつと腰をあげた。

中尉が自分に當てがはれた寢室に入つてゆくと、いままで兄弟の物語を、ボンやり突つたつたまゝ聞いてゐた下男は、ノソ〳〵ついて來た。

中尉はボツ〳〵寢卷に着かへようと思つて、安樂椅子にドッカと腰を下ろすと、下男はその前に、ノッソリ突つ立つてゐた。

その顏が何とも滑稽であつた。

『おい、君、……手傳つてくれるのかね』中尉は下男に言つた。

『へーい』

『ぢやあ、氣の毒ぢやが、俺の腕をはづして、卓子の上に置いてくれ』

『ヘイツ』下男は眼を丸くして中尉の顏をみつめた。しかし中尉は平氣な顏で、左の手をズッと延ばした。

『いゝから、この手をウンと引ッ張つてくれ』

下男が、恐る恐る手を引ッ張ると、これは不思議！中尉の手はスポーンと抜けてしまつた。

『今度は脚だ。脚もついではづして、腕の傍において貰はう』

人間の生きた身體がバラ〳〵に離れるのを見て、下男は恐ろしさにブル〳〵慄へ上つた。咽に何かつかへて、口も利けなかつた。

それでも下男は、言はれる通りに脚を引つぱつた。脚も雜作なく抜けた。

下男が蒼くなつて慄へてゐるのを、中尉は面白さうに、殘つてゐる方の手で煙草を吹かしながら、ニコ〳〵眺めてゐたがちよつと冗談を言つて見たくなつた。

『おい、君』

『……』

下男は眼をクリ〳〵と動かしたきり、返事もできなかつた。

『ついでのことだ。今度は俺の首もはづして呉れ。……俺はグツスリ寢みたいのだ』

『呀ツ』

餘りのことに、下男は到頭床の上にへたばつてしまつた。それでもやつと、窓のところまで這つて行つて『化物ツ！』



大聲揚げて叫んだのは、窓から飛びおりて、小一町も逃げ延てからであつた。

『旦那様、大變でございます。弟御様はお化けでございますよ。……いやさ、お化が中尉様に化けて……』

あまり下男が蒼くなつて騷ぐので、牧師はまたガタ〳〵慄へてゐる下男をつれて、中尉の寢室へ行つて見ると、中尉は左手と右脚の義手義足を、卓子の上に載せたまゝ、グッスリ寢こんでゐるのであつた。

ルドー中尉は、戰爭で負傷して、退職にこそなつてゐるが、有名な勇士であつた。

お化中尉！ しかし如何に便利な科學文明でも、それだけはできなかつたのか、首だけは拔かないで、そのまゝに眠入つてゐた。

狂人の登廳

澤田謙

今度の總選擧で、英國勞働黨の見事な勝利ぶり、その堂々たる組閣ぶりなどは、全世界に大きなセンセーションを與へてゐるが、何しろ英國では、二度目の勞働内閣のことではあるし、大して異常な出來事とは感じなかつた。

それよりも、世人を呀つと仰天させたのは、五年前、はじめて勞働黨が内閣をつくつた時であつた。

『英國にいよ〳〵社會革命が起つた！』

米國の新聞記者が、ペンを一本握つたまゝ、慌てゝ倫敦に馳けつけたのは、このときであつた。何しろその二年前までは、絶對の非戰論を唱へたために、逆賊よ、獨探よとまで言はれて、散々迫害されてゐたマクドナルドが、首相兼外相になつたのだ。驚いたのも無理はない。

あの鐵道ストライキのとき、百萬の勞働者の采配を振つて、一週間のあひだ全國の汽車をピタリと停めた鐵道勞働組合の親玉トーマスが、殖民大臣になつたのだ。これも英國人を呀ッと言はせた。

『こんど俺達の大臣には、ストライキの親玉がくるさうだ』

『物騷だぜ、これまでの役人は、ブルジヨアの配下だからつてんで、みんな首になるさうだ』

『さうなると俺なんか豪氣だな、官吏勞働組合の會員だもの……さしづめ局長といふところかな』

こんな戯談を話し合ひ乍らも、一種の不安をもつて新大臣を迎へたのであつた。

そんなことゝは知らぬ一人の老人。古い中折帽子を冠つて、よぼ〳〵と殖民省の門のところを、入つて行かうとした。

『コラ〳〵、お老爺さん、何處に行く』

門番は老人をさへぎつた。

『此處はお前さんなんかの入るところではない』

『此處は殖民省ぢや、なかつたかね』

『さうだ、殖民省だよ』

『ぢやあ、俺は入らにや、ならぬ』

『何だと？』

『俺は此處の役人だもの』

門番はその老人の見すぼらしい姿を見て、プッと吹き出した。

『俺は十何年も此處の門番をしてゐるが、お前さんのやうな役人は見たこともない！』

すると老人は平氣で答へた。

『そりや、さうだらう。俺はたつた昨日から、此處の役人になつたのだ。俺は殖民大臣だ。』

『えッ』門番は驚いて、老人の顏を見つめてゐたが、やがて氣の毒さうに口のなかで呟いた。

『可哀さうに、お老爺さん、氣が狂れてゐる』

しかしそれこそ、飛んだ間違！　であつた。この見すぼらしい老人こそは、新殖民大臣、鐵道勞働組合會頭、トーマスその人だつたのである。

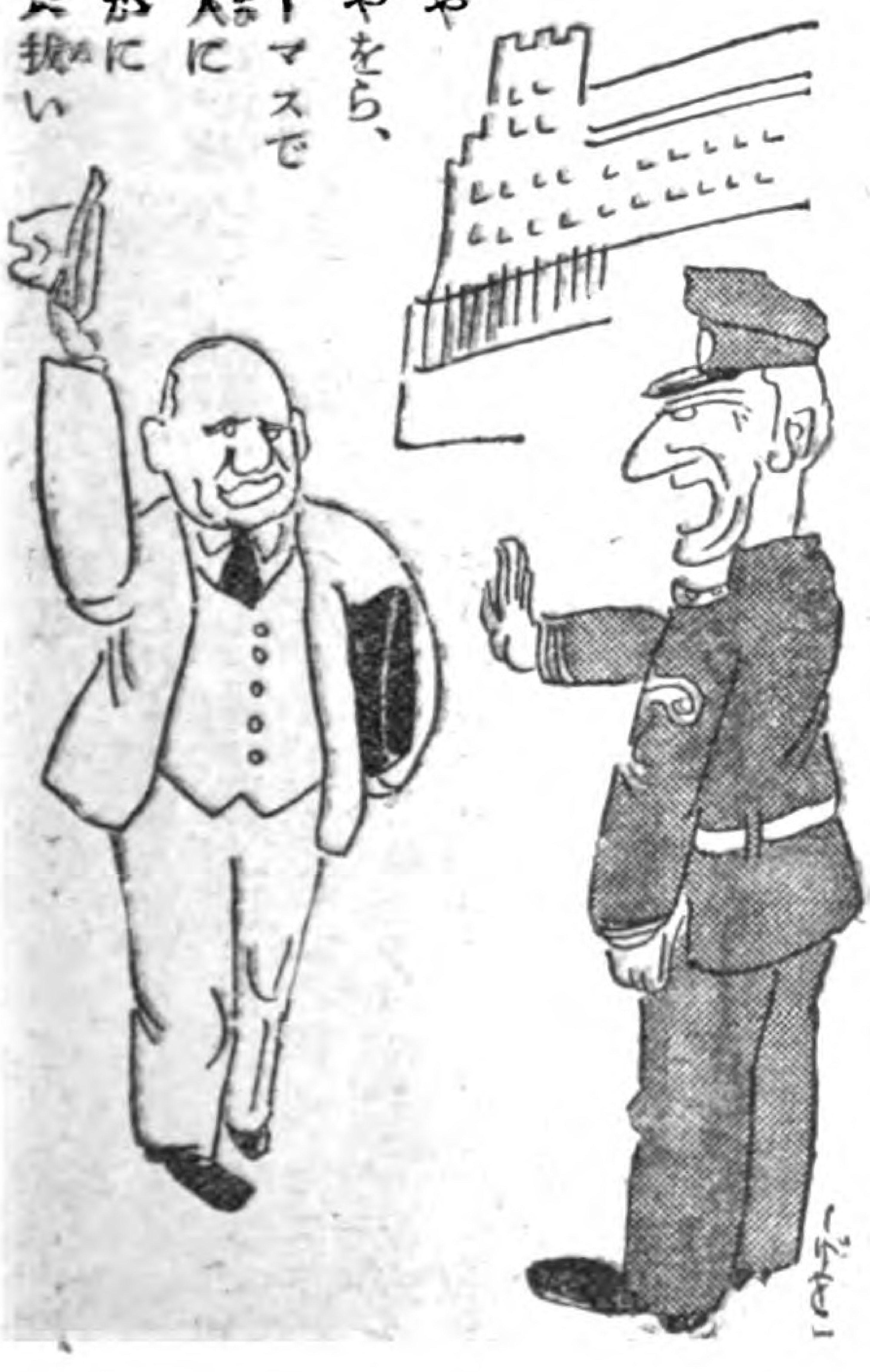
さア門番は、氣が氣でない。人もあらうに殖民大臣閣下を、狂人扱ひにしたのだ。それでなくてさへ、人心何となく不安な折柄。『これは首だな!?』

しかしそれも、飛んだ間違！　であつた。新大臣はそんなことを、少しも氣にかけてはゐなかつた。

そればかりではない。勞働内閣そのものが、少しも過激なことはなく、却つて從前の内閣よりは穩當な善政振にやんやと喝采を博し、下落してゐた英國の公債もドン〳〵騰るといふ有樣であつた。慌てゝ英國に渡つて來た米國の新聞記者達も、狐につまゝれたやうな形で、歸つて行つた。

それから四五日して、倫敦で盛大な午餐會があつた。朝野の名士が出席し、英國皇太子殿下も御臨席になつてゐた。

この午餐會で、宴やうやく盛なるころ、やをら立ち上つたのが、トーマスであつた。彼は例の狂人に間違はれた話を、いかにも滑稽な口調でスッパ抜いた。滿場は笑ひさゞめいた。



そのあとで、トーマスは附け加へた。

『このとき私は、英國はまことに廣大な國であると、感じたのであります。狂人とまで間違はれた人間が、陛下の御親任を得て、光榮ある殖民大臣の椅子に着くといふごときは、決して偏狹な國のできることではありません。

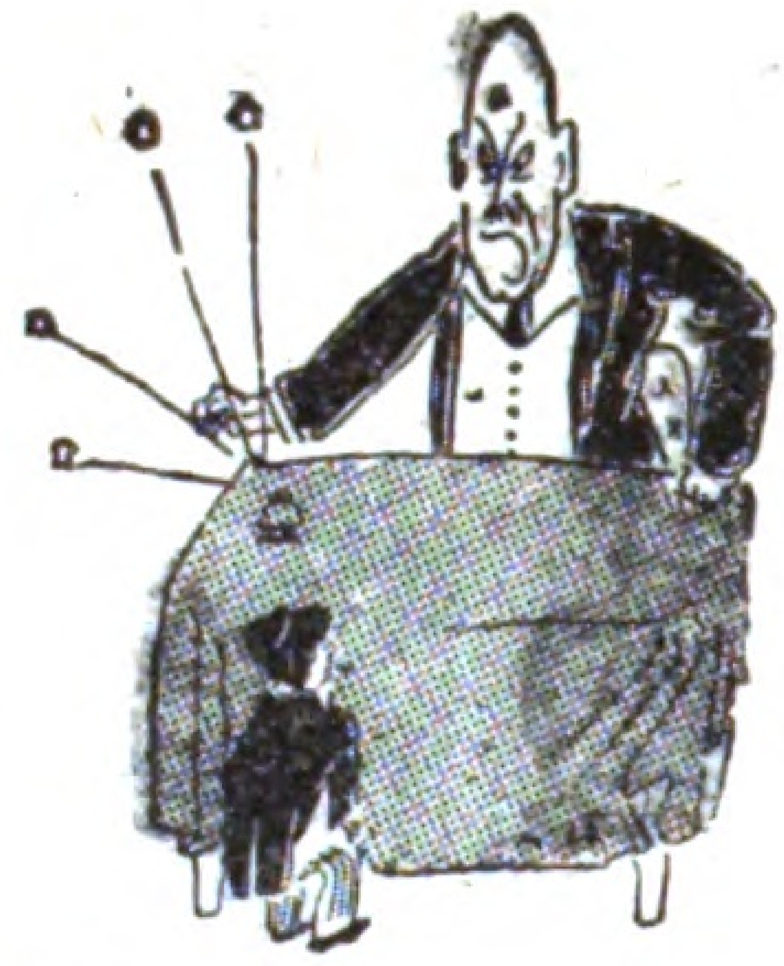
顧みればわが勞働内閣が成立しましたとき、社會一般は、一種不安に包まれたのでありました。そのとき、そんな御懸念を少しも遊ばされなかつたのは、此

別に御臨席になつていらせられる皇太子殿下をはじめ、英國王室の方々だつたのであります。何故ならば、戰爭が一度び勃發しましたとき、身命を抛げうつて陛下に忠誠をつくし、祖國を護つたものは、實に我々勞働者であつたといふことを、よく御記憶になつてゐたからであります。國を護るものは、決して貴族や富豪ばかりではない。勞働者こそは國民の中堅である。戰時においてよく國を護つたものは、平時においてもよく國を治むるものであることを王室が誰よりもよく御存知であらせられるからであります』

拍手はながく〳〵續いた。そして事實は、トーマスの言つた通りであつた。

カン違ひ

山縣五十雄

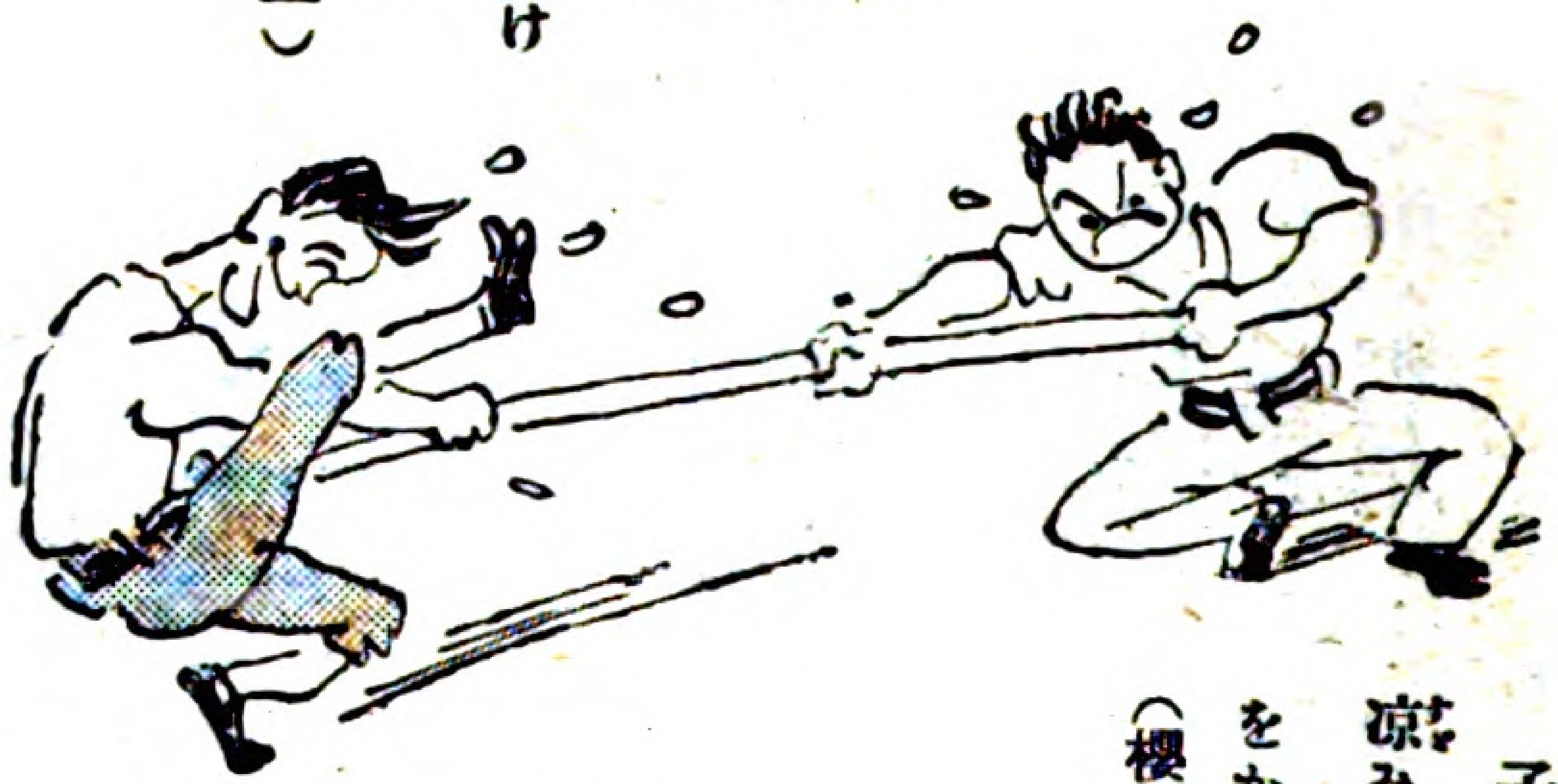


京城の氣候は大陸的で冬は寒氣が甚だ強く、氷點以下二十度に下ることもある。かゝる時にはビールまで氷結するのであるが、然しかゝる嚴寒の日は永く續かず、一兩日たつと寒氣が弛み、暖い日がまた兩三日續く、かゝる現象をあちらでは三寒四温といふが、其意味は寒い日が三日續けば其後には暖い日が四日來るといふのである。

寺内元帥（正毅伯）が朝鮮總督在職中のことである、伯は頗る嚴格な、職務に忠誠な人で、公務については其部下に對する態度は峻烈を極めたものであつた、それで總督府の官吏は屢々伯の叱責を受けるので、戰々兢々としてひたすら過誤なからんことを努めたが、一方に於て伯はまた頗る温情の人で、後進の者を愛し、彼等の爲めに何彼とよく世話を燒いた、本文の記者は總督府の機關英字新聞ソール・プレスの記者として、永く伯の眷顧を受け、其間屢々示された温情を感銘して居る者である。

或冬の暖い日であつた、伯は例の如く總督府に定刻に登廳したが、屬官等の多くは既に出勤して居たけれど、各部の長官其他の高官はまだ一人も出て居ない、伯はかくと知つて甚だ不機嫌であつた、そこへ折惡しく顔を出したのはある部の長官であつた。假に岩本と名づけておく、其人は定刻より遲れて出勤し、既に總督が出て居られると聞いて大に恐縮して、あわてゝ伺候したのであつた、總督は其長官が頭を下げてにこやかに朝の挨拶を申し上げるのを聞いた後、『岩本、此頃は官紀が大分弛んだのう』と、重い口調で言はれた、長官の方では叱られたとは氣がつかず、寒氣が弛んだことを言はれたと思ひ違へて、『ハイ、大分温かでございます』と調子を合はして下げた頭の上に百雷が落ちて來た、『寒さの寒氣ぢやない、役所の官紀ぢや』びつくり敗亡、長官は一言も答へ得ないでコソ〳〵總督の室から逃げ出した。

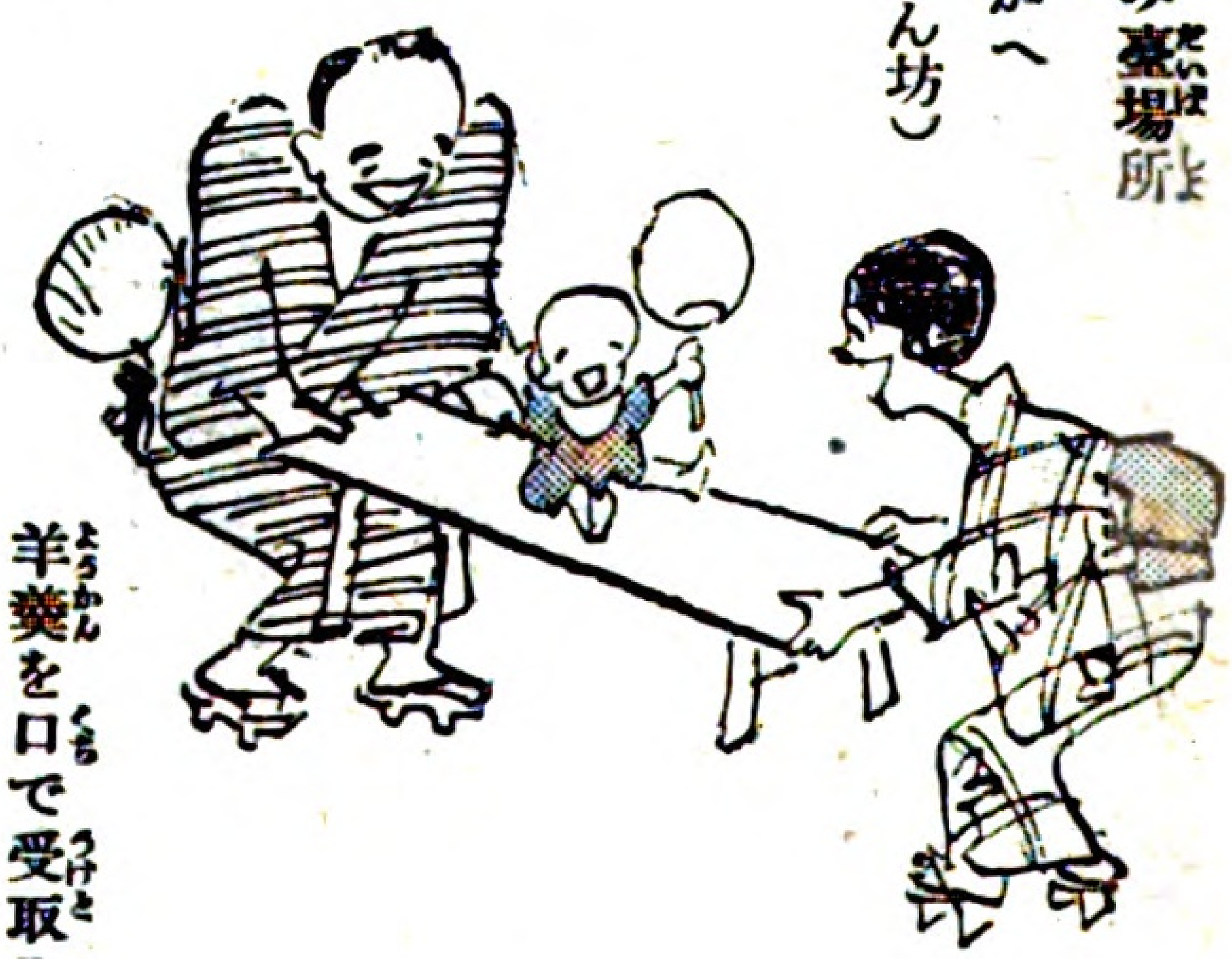

豆腐屋を呼んでやつてる雨宿り（三千草）
二割引買つて來たのは疵があり（淺芳）
自轉車は追拔かれると意地になり（いはほ）
微笑んで角力を見てる大きいの（三茶）
優勝旗捧げて主將涙ぐみ（八道）
丸髷を水に映して飯は焦げ（白雲坊）
泣いた子へ我も我もと譯を聞き（素女）



棒押は笑つた方が負けになり（節一）



待呆け蟻の世界はよく稼ぎ（美水）



子を乘せたまゝ涼み臺場所をかへ（櫻ん坊）



羊羹を口で受取る野良歸り（深月）



迷ひ子の鼻を巡査はかんでやり（若翁子）



大掃除出て來た指輪妻拜み（周吉）



夏泥棒巡査の目より蚊が怖い（金次）



小說に泣き／＼菓子も喰つてゐる（寅夫）

川柳漫畫

素文

大日本雄辯會講談社ニュース

○笑ひは良き血を作る　イタリー俚諺

○一番空費された一日は笑はなかつた日である。　チャムオフート

○怒れる拳笑顔に當らず　日本俚諺

笑へ！笑へ!!笑へ!!!

『落語全集』（全三巻　一冊一圓）大刊行

◇家を明るく、世を平和にする全集

◇老少男女、日本人なら誰でも熱狂

本誌愛讀者全部、御申込を乞ふ

愛讀者の皆々様から、熱烈な御要望の『落語全集』いよ〱準備整ひ、豫約募集を開始いたしました。

○

修養講談の二大全集が完了近づくにつけ、是非引續き、あんな立派な、良い全集を出して貰ひたいと、日々机上山をなす皆々様からの御希望、その中にも最も大多數を占めた落語全集！　皆々様の御滿足期して待つべしと思つて居ります。

○

講談と落語とは昔から併び稱せられた日本生粋の大衆文藝、講談全集あるところ落語全集なかるべからずとは誰方も仰せらるゝところ、名士學者の方々も、日本の大文獻、大にやれと、口を揃へて激賞推奬せられて居ります。

○

落語の面白いことは、今更申すまでもない。何が面白いといつてもこれほど面白いものはない、落語を聞いては閻魔樣でも笑ひ出す。年頃の娘などは死ぬほどに笑ふ。而も、その笑ひの中に、道徳があり、常識があり、人情の機微あり、世態の裏表あり、大論文大演説も以て及ばざるものがあります。

○

偉人哲人で落語を愛した人は頗る多い。伊藤山縣等の維新の元勳隙あれば卽ち名匠を招じて之を聞き、紅葉、漱石等の文豪又屢々席亭の門をくゞつたこと、洽く世の知るところであります。

○

あに、偉人文豪とのみいはんや、落語こそ大衆文藝中の大衆文藝、青年男女、紳士淑女は勿論、お爺さんもお婆さんも女中さんも丁稚さんも、學問のない人にも面白く、ある人は更に感服、日本人なら誰でも熱狂!!

○

尤も、舊來の多くの落語中には、時代にふさはしからざるもの、又風教上如何かと思は

る丶ものもないでもありませんが、今回、それらのものは悉く省き、且つ、一篇々々文豪大家の嚴密なる校閲を經、眞に理想の落語といたしました。

かくて精選された、古今名作中の名作落語百數十篇！　尚又、落語の源泉ともいふべき小噺、笑話、雜俳類もつまとして之を加へ、

恰も日本生粋の滑稽文藝集とも稱すべき名全集となりました。

○

而も、その立派なこと、安いこと！　本文用紙は極上ラフ八百頁以上、一流大家の面白い面白いさしゑ殆ど每頁の如くあり、パラ〳〵と開いた丈でも面白く、裝幀は典雅なる綾織の總布表紙で函入り、書齋に架し、應接に飾つて燦然と光を放つ見事なものであります。

○

この――まるで幸福と賑ひとそのもののやうな全集、一册一圓、全三卷タッタ三圓！全く奉仕的の計畫です。

又とない機會です、この機會を失はれては終生の恨事、本誌の愛讀者は、一人殘らず、ぜヒ御申込み下さい

○

修養、講談二大全集は申込み遲れて買ひ損ね、中途から申込をされた方が多數にありましたが、右最初の聲明もあり殘念ながら全部お斷り申上げたこと、曩にこの欄でも御報告申し上げた通りであります。今度こそは洩れなく一早く御申込下さい。

○

〆切――は、十月十日、例により嚴守いたします。然し此際一日も早く御申込下さい、お申込み順によつて配本、何しろ大部數につき、お申込の遲い方は配本が遲れませう。念のため御注意申上げます。



小說家　中村武羅夫先生曰く

諷刺と警句と滑稽と愛嬌と無限のユーモアに滿ち、輕妙洒脫、惡意が無く垢拔けのしてゐる處、世界に誇るべきユーモア文學。

法學博士　下村宏先生曰く

笑へ、笑へ、ユーモアなくして何の人生ぞや、外國には我落語に比すべきものなし、之ぞ特に我等の爲に生み出されたものらしい。

三越取締役　濱田四郎先生曰く

小說よりも講談を好み、講談よりも落語を喜ぶ小生は、今回、落語全集の發刊を聞いて悦び之に過ぐるものなし。

近事片々

○鶴見祐輔先生の『母』七月十日迄に百二十版を越す、やがて二百版に至らん。

○佐々木味津三先生の右門捕物帖、亦増刷又增刷！

○婦人倶樂部、毎號々々賣切れにて全國大騷ぎ、全國婦人の興味、全く本誌に集まる。

○肺病胃腸病に大効ある新榮養素酒母を澤村博士發見詳細本誌代理部へ御問合せ下さい。



五十錢玉物語

谷孫六

五十錢玉一つが廣大無邊の働き

『五十錢玉よ……お前が二つあれば、東京市内を自動車で乘り廻はせる』

『五十錢玉よ……お前が二つあれば、一千頁もある本が買へる』

『五十錢玉よ……お前が二つあれば、一等席へをさまつて、活動寫眞が見られる』

『五十錢玉よ……お前が二つあれば……』

『もうよして下さい、私は一つで生れて來た五十錢玉です、二つ宛に扱はれることは侮辱を感じます』

『だけども、お前が一つだつたら、カフエーで一杯の珈琲を呑むにしてからが、二十錢の珈琲だのに、三十錢も餘計置いて來てさへ、あの女給達の手の平で、赤ン坊のやうにコロ〳〵させられながら、輕蔑されてしまふお前ぢやないか。そればかりではない。牛肉屋の女中ですら、お剩錢の中の五十錢を、わざとの心持で謹呈するのに、當然のやうな顔をして、帶の間へはさんでしまふぢやないか、暗から暗へ葬られてしまふ五十錢玉、それでもお前は悲しいと思はないのか……』

『それは私と云ふものを知らないからです』

『だつてお前そうぢやないか、生ビールが二杯、トンカツが一皿で、あとライスカレの一つも食べたい腹だのに、もう消えちまつてるお前ぢやないか……』
『それは私を知らないからです』
『お前まだそんなことを云つて居る、何もかも大袈裟になつた世の中だ、お前がいくら威張つたつて、お前一つでは子供だつて喜びはしないよ』
『それは喜ばせないからです』
『あれツ、まだあんなことを云つて居る。碌な猿股一つ買ふことさへ出來ない癖に、大きなことを云ふものぢやない』
『それは買ひやうが悪いからです』
『強情だネお前は……そんならお前が力一ぱい働いたら、どれ程の仕事が出來ると思ふのだい』
『それでは私の力を知りたいと云ふのですか、この五十錢玉の威力を……？』
『威力を……？　大きく出たネ、俺達の一日の小遣さへも持ち切れないぢやないか……？』
『それは私を輕蔑して居るからです』
『馬鹿ア云へ……どう考へたつて獨り歩きの出來ないお前だ、云ひ分があるなら云つて御覧……』
『よろしい、云ひませう。驚いちや不可せんぜ、多寡が五十錢玉一つと侮つて、私の力を理解しないあなたなら、云ふなと云つても云はずには居られません』
『よう……昻奮したネ』
『まアお聞きなさい、先刻のあなたは女給達にさへ輕蔑されると云ひましたよ』
『あゝ、その通りだもの……』
『その五十錢を上野の停車場へ持つて行つて御覧なさい、柏まで乘つて二錢のおつりが來ます。東京驛なら程ケ谷まで行かれる五十錢玉です。飯田町驛なら國立まで用達しに行かれます、市内電車なら、七遍乘つて一錢の剩錢が來る。朝の割引なら十一度も乘れる五十錢です。』
『……なる程』
『どうです、碌な猿股一つ買へない私ですが、買ひやうに依つては、褌が五本も出來ます』
『そんな馬鹿なことを……晒布一反の値段は幾らすると思ふんだい、お前が二つなければならぬ世の中だ、お前一つなら、どんなに先方を勉強さしたところで半反だ、半反の晒布は一丈三尺だぜ、六尺が二本、あとに殘るのは一尺だから、布巾位が關の山だ』
『それだからあなたは私を知らないといふのです、千里の駿足も與太ツ平の手に逢つてはどうすることも出來ません……』
『與太ツ平……？』

五十錢安の聲で　四十七萬圓が煙

『まあお聞きなさい、多寡が五十錢玉一つと、あなた自身からして輕蔑してしま

ふものだから、他人にまで侮辱されるんです。それは成る程、五十錢では半反の晒布しか買ひ得ません、一丈三尺を六尺づつに切れば二本と一尺にきまつて居ます、けれども昔、寛政の改革に、松平越中守定信、乃ち有名な白河樂翁公は田沼意次の放漫政策から、奢侈頽廢に陥つた時世をつく〴〵嘆じながら、何とかして救濟したいと日夜苦心致されました。しかし物價は騰貴する、失職者は群をなす、金はある所だけに集中され、庶民塗炭の苦しみに藻掻くばかりであります。こんな場合にどうすれば宜いとか云ふ思案は、今も昔も變りはありません。丁度今の濱口首相が組閣第一日に第一聲を揚げたと同じやうに、消費節約、勤儉力行と云ふことでありました。そこで松平越中守は絹物禁止、奢侈は曲事たるべき事とまで突込まれて、消費節約の街頭宣傳を致しました。



現内閣が組閣した其の日から一本槍に其の方へ政策を傾注されて居るのも無理でないと思ひます』

『おい〳〵、お前は政治の話をするつもりなのかい』

『まあお待ちなさい。そこで松平越中守は、江戸市中を視察して廻りました。そしてこれは無駄だと思ふものはドシ〳〵命令して直させると云ふ辛辣さです。其の一例を擧げますと、便所は蹲んでするものだから其の戸は半分でよろしい、立つて居て寝る奴はないから蚊帳は半分でよい、と云ふやうな事まで指摘されました。其の時に生れたのが紐をつけた三尺の褌です、今日でも重寶に用ひられて居る越中褌、乃ち越中守が發明したから斯る名稱までつけられたものであります。私は謹んで現内閣に此仕法をお薦め致します』

「何だ、越中褌の講釋か、あれは三尺だらう、それに紐が三尺として、半反では三本と紐だけぢやないか」

「それがです、もしそれで宜いとすれば、松平樣の御仕法通り、何の不思議もありません、松平樣の御時世と、濱口さんの御時世とは違ひます、少なくも當今の時世に於いては、より以上の緊縮を行はなければなりません、六十億の借金に苦しむ萬民は、其の心を一にして此の難局を打開せねばなりません、世人往々にして日露戰後や歐洲大戰後の好況を夢み、今に景氣が出るだらう位に考へて居りますが、今日の日本は、日本それ自身が先づ立直して行かねばならないのです」

「おい、好い加減にしろよ、褌一本で國家の經濟を論じ、天下の大勢を談ずるなどは、少し釣合が取れな過ぎるぜ」

「いや／＼そうではありません、今其の褌を説明します、一丈三尺の晒布から、まづ三尺の布片を取ります、そして其れを八本の紐に作り上げます。あとの殘りは二尺づつ五つに切ります、五つに切つた晒布を、三尺の紐へ前後にくくります、輕便な褌が出來るではありませんか、乃ち半反の晒布で五本の褌と三本の紐が出來る譯になります」

「なる程」

「あなたに云はせると五十錢で二本しか締められない褌でも、わたしに云はせると五本になります、乃ち三本餘計なものが出來るから七十五錢の金を生み出したと同樣ではありませんか、これを日本七千萬の同胞で、其の半數を男子とし、三千五百萬人が一齊に行つたら、二千六百二十五萬圓の金を生み出したことになります。

「なる程」

「褌一本とも云はれないことでせう。五十錢玉の働き一つで二千六百萬圓の金を生み出すことが出來るのですもの……」

「なる程大きなものだな、それだのにお前はどうしてそう輕蔑されるんだらう」

「それは一般の人達に數の觀念が無いからです、五十錢々々と一口に云はれるやうなもの、もし兜町の手振り小僧が東株五十錢安と手を振つたらどうなると思ひます」

「五十錢安なら、買つたものは五十錢損をすることになる、十株で五圓、百株で五十圓だ」

「その通りです、千株で五百圓、一萬株で五千圓、十萬株で五萬圓……」

「それは幾ら云つても同じことだよ、五十萬株なら二十五萬圓だ」

「それが東株だけでも親が四十萬株、新が五十四萬株あるのです、五十錢安となれば、此の九十四萬株がみんな五十錢安いのです、すると四十七萬圓の金が煙になつてしまふのと同じです、尚ほ取引所に扱はれて居る建株と云ふものは二百三四十種あります、これがみんな五十錢安

となつたら……』

『判つた、よし、もう判つたよ、恐ろしく大きな數字を出して威かさうと云ふのだな』

『いや、さうではありません、假りに小さな問題でも、注意をするとしないでは大へんな相違です』

『例へばどんな問題だね』

置き場所に依て光が違ふ五十錢

『一寸訪問をする場合にもです、よくあることですが、坊ちやん、おとなですね、何かお土産と思つたのですけど、急いだもんだから何にも買つて來なかつたんですよ、さア伯母ちやんがお小遣ひを上げませう、何か好きなものを買つていらつしやい、と、申譯のやうな事を云ひながら、私をつまみ出してやるのです……』

『ふむ、よくあることだな』

『その時の私のつまらなさつたらありません、頂いた坊やはお母さんの顔と見比べて、どうしたら宜いか迷つてしまひます。お母さんは、さんざ辭退をしてどうも仕方がないと云ふ樣な風に、折角ですから頂いて置きなさい、そしてお辭儀をなさい、と云ふのです、何と張合のない五十錢玉ではありませんか、坊ちやんは不承不承に其の五十錢玉を頂いてお母さんに預けてしまひます。お母さんはテレ隱しに、其の五十錢玉を其の儘下へ置いて、明日貯金なさいよ、ですつて、折角子供を喜ばさうと思つた五十錢はお母さんから訓戒されるやうな材料になつてしまひます』

『ふむ、よくある圖だな』

『私は泣きたくなつてしまひます。坊ちやんには感銘されない、お母さんには仕方なしの御禮と來るのですもの、それを一寸氣を利かして頂いたらどうでせう。先づ實用石鹼を二個買ひます、此の代金二十錢、飴ぱんを二十錢買ひます、キヤラメルを二つ買ひます。奇麗な包紙で三包みのお土産が出來ます。坊やは喜びます、お母さんも嬉しさうにお禮を云ひます、何だか知らないが賑やかなお土産と見られるだけで、私の値打以上に喜んで呉れます、こんな時の私は晴々しくこうした人達を眺めます』

『なる程さうだな』

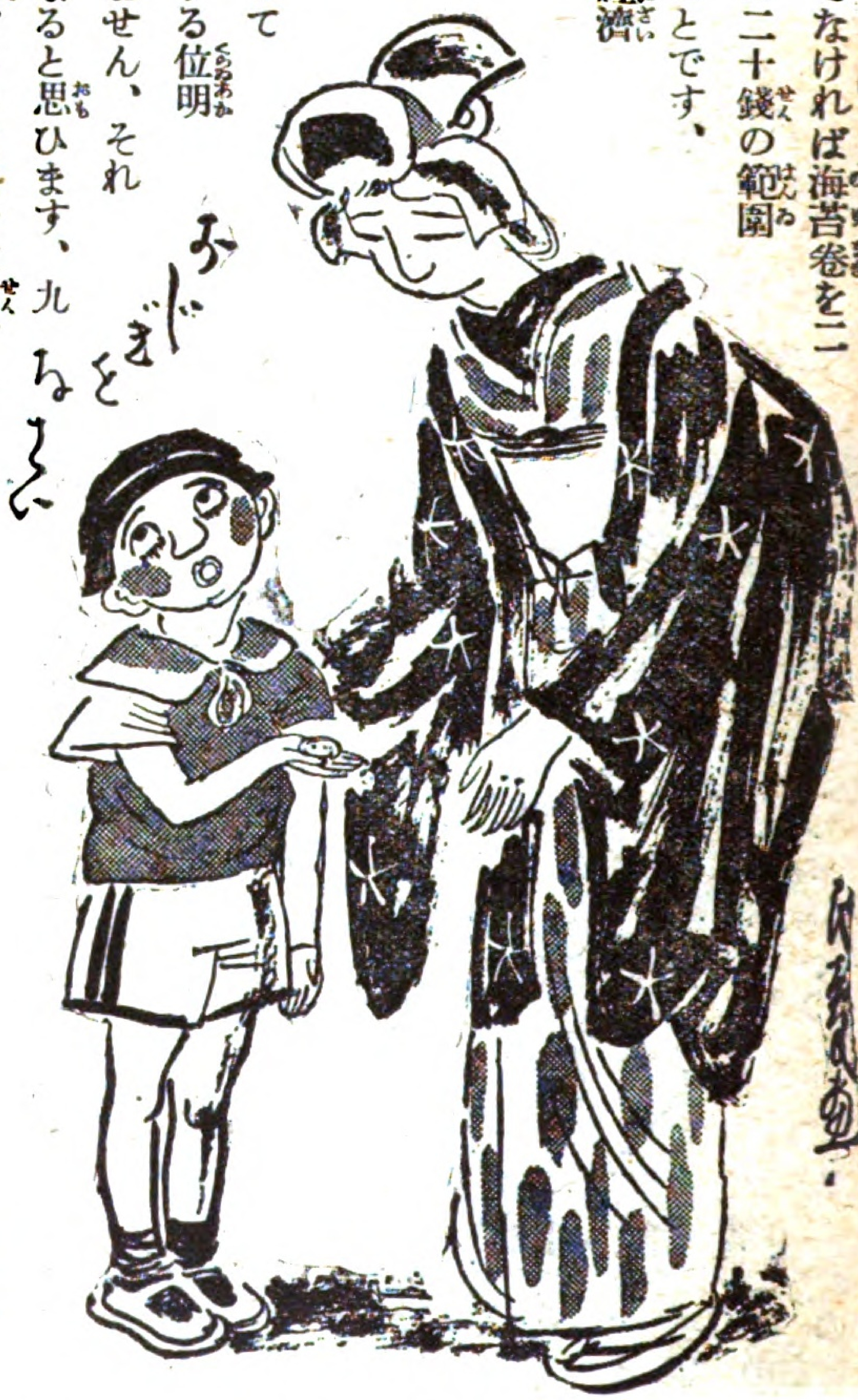
『あなただつてさうでせう、朝の出勤間際に、五十錢玉を一つ、蟇口の中へ入れて貰つたとして、其の日一日を有効に考へて使はれるのと、何だ五十錢位と云ふ考へで使はれるのと大へんな違ひがある筈です。おい、給仕、鰻丼を一つ、と簡單に吩咐けてしまふと、それで私はフイです。それよりは朝の割引電車で往復九錢の切符を買ひます。社へ行つたらバツトを一つ買ひます、これが七錢、晝の時分にバタパン四半斤、牛乳一合、これは高くて二十錢と見ます、でなければ

ザル蕎麥二つ、でなければ海苔卷を二十錢、と云ふ風に二十錢の範圍で晝食を濟ますことです、そうして置けば經濟で、そして晩飯が家でおいしく頂けます、どんなまづいものでも、家中揃つておいしく食事をする位明るいものはありません、それで合計いくらになると思ひます、九錢に七錢、二十錢、〆めて三十六錢、これであなたは一日不自由なし、明日の朝になつて奥さんから、また五十錢玉を一つ受取る時、おや、こんなにもお金が殘つてるわ、とお褒めに預ります、十四錢の金が、こんなにもと感じさせるだけで、五十錢玉の得意頂上です』

『なる程な』

『そうした私の働きをすつかりお判りになつたとすれば、あなたはお金儲けの出來る資格が出來て來たと云ふものです、しかし同じ五十錢玉でも其の居場所と其の持主の心持一つで大へんな違ひになるのですから、其處もよく考へて置いて頂かないと困ります』

『すると、同じ五十錢玉でも、持主の心懸け一つで四十錢になつたり一圓になつたりすると云ふのかな』



『まあ、そんな極端な例を云つて居るのぢやありません』

『しかし、大藏大臣の蝦蟇口にある五十錢だつて、與太ッ平の火鉢の抽斗にある五十錢だつて、五十錢に變りはないぢやないか』

『ところが有るのだから氣をつけなければなりません』

『そんな馬鹿な話があるものか、政府が刻印を打つて拵らへた五十錢玉に、二タ通りの使ひ道がある筈はない、それは成程、先刻のお土産だの、晝飯のバタパンなどだつたら、お前の云ふ通りだ、同じ煙草でも敷島なら二つと十四錢だが、朝日なら三つと五錢になると云ふ勘定だから、心の持ちやう一つで、いくらでもお前を光らすことが出來る。けれども持主に依つて其の效力が違ふなんて云ひ出すと、僕

はお前を信用出來なくなるね』

『そこです、もう少し深く考へて下さい、お前さんの蟇口にある五十錢と、銀行の金庫の中にある五十錢とは、まるで違つた働きをするのです』

『はアてな、そんな不思議なことがあるものかな』

『話して上げませうか』

『聞かう……』

一錢の据置きで數へ切れない金

『お前さんが銀行へ金を預けて、五十錢の利子を貰ふとすれば、乙種の銀行でも、五千圓の金を預けなければ、五十錢の日歩と云ふものは取れないのです』



『なる程、百圓で一錢の日歩だな』

『さうです、特別當座で一錢以下と云ひます、甲種の銀行だと八厘以下です、これが當座預金だと乙種で四厘以下ですから五十錢の日歩を取るには一萬二千五百圓からの金を預けて置かなければなりません』

『ふむ、大へんな事だな』

『それを反對に、今度はあなたが銀行から金を借りるとなつたらどう云ふ計算になりますか、しかも銀行は規定された擔保がなければ金を貸しません、有力な擔保を入れて銀行から金を借りるとしたらどうですか』

『さア、銀行に依つていろ〳〵あるだらうが、まあ日歩一錢六七厘と云ふところかな』

『一錢七厘として三千圓の金を借りると、もう五十一錢の日歩を取られてしまふ勘定ぢやありませんか』

『さうだ。百圓で一錢七厘、千圓で十七錢、三千圓で五十一錢になる』

『さうすると、あなたが銀行へ預金すると、當座預金なら一萬二千五百圓、特別當座で五千圓の金が無ければ五十錢玉一つにならないのを、借りるとなると三千圓の金で取られてしまふと云ふことになるのですね』

『さう云ふ理窟だな』

『だからあなたの蟇口の五十錢と、銀行の金庫にある五十錢とは大へんな相

違だと云ふのです』

『それぢや、どうすれば宜いのだ』

『人から金を借りないことです、尤もそれ程大きな開きがある金でも、それより以上に儲かる仕事があつて借りるのなら、それは結構です、返す的が充分で、しかも利鞘が多く生れると云ふやうな金だつたら、ドシ〱借金をすることです、だが、暮し込みや、足りない生活を補ふために、あてなしの借金をすると、何遍か繰返して居るうちに、どうにもこうにもならなくなつてしまひます、金を借りる立場と、貸す立場とには、こんな開きがあるのですから、平常の心懸け一つで、なるべく借りない算段をすることです』

『その心懸けと云ふ奴が却々六ケ敷いんでね』

『なんのあなた、馴れです、熟練と云ふのも變な言葉ですが、氣の持ちやう一つです、一錢だ一錢八厘だと云ふ金が數重なれば五十錢にも一萬圓にもなるのですから、その呼吸さへ呑込んで置けば間違ないことです。そこで一錢か二錢の金で考へて見ようではありませんか、米が無くなつた、米屋へ電話をかける、女中は無遠慮に電話を鳴らして、お米屋さん、明日の朝のが無いんですから、直ぐ届けて下さい、それつきりで電話の用が濟んだとします。誠に重寶な世の中です、今が今と云ふ話が今直ぐに解決するのですから便利なものです、だがこれだけの事で三錢の金が煙になつて居ます。米なんて云ふものは、明日の米が無くなるまで氣がつかずに居るものではありません、毎日手をつける米櫃ですものあと幾日で米がなくなる位は、誰だつて判る筈です、して見るともう一日前に端書で用を達したとしたら一錢五厘で濟むぢやありませんか、米屋の注文位だつたら、書損じの端書を黑く塗つて、鉛筆で書いたとて間に合ふ用件です、そんなことから勘定して見ると五十錢玉一つが、電話だと十六回で二錢殘りと云ふことになります、端書だと三十二回で二錢殘りになります、



一年が二年に使はれます』

『恐ろしくこまかい事を云ひ出したな』

『そのこまかいのが積りつもつて莫大もない數字が出來上るのです、或る暇な人が紀元元年に一錢の金を年一割の複利で据置きに預けて置いたら、二千五百年目には一一〇〇二二九五〇二七九一七五六四六二〇五一一七六三五三二八〇四〇七〇〇八二〇七四一九九〇四四九三五六二五六八三〇〇七三〇九八九五六〇五八四九五二一三六七三三二八六五八二六八六〇六八三六八四五八〇二四八〇八〇一圓と云ふ金になると云つて居ました。日本の總財産千二十三億四千二百萬圓はおろかな事、世界一の成金國たる米國の總財産七千六百二十三億五千六百萬圓だつて、足許にも追ひつかぬ數字になるぢやありませんか、僅か一錢の金でも、こうした働きを持つて居ます、況んや五十錢玉の私として實際に働く偉大さを示さなければなりません、そこで私に斯うした名案があるのです』

『名案……？』

『それは現に或る人が實行して居る事なんです』

『どんな名案だい……？』

『三千圓もするダイヤモンドの指環を買つて、そして毎年私が生れて來ると云ふのです』

『五十錢玉でかい』

『いや五十錢玉は毎年生れる力の役廻りで、これには資本が要ります』

『そうだらうと思つた、話があんまりうま過ぎる、三千圓もの資本があれば、五十錢位の金は何でもないさ』

『三千圓の資本ではありません、ほんの僅かです』

『いくらだい……？』

『いまお話しします』

三千圓の指環を買ふ重役の心持

『ある會社の重役さんの話です。この重役さんは私をよく面倒見て下さいました、そして金と時間と云ふことを尤も有利に、寸分の隙もなく働かすのに妙を得て居る方でした、だから私などは其の人の蟇口へ入ると、出るのが厭な氣持でした、けれども實に巧妙に働かされるのです』

『ほう、今時感心だな』

『その重役さんが或る日の事でした、坊ちゃんと奥さんとで、うれしい晩餐を取られながら、例の通り面白い有益な話をして聞かして居たのです。すると奥さんが急に淋しさうな顔をして、自分の指先を見つめながら、部下の奥さん達でさへダイヤの指環を嵌めて居るのに、私はエンゲーヂリングが一つきり、しかも八圓で二個の金指環です、淋しいやうな、見せつけられるやうな氣がしてならないと云ふのです』

『ふむ奥さんらしいな、何處の細君でも

『すると重役さんは、しみ〴〵と同感されました。無理もない、今度のボーナスには屹度買つてやると云はれました』

『なか〳〵圓滿だな』

『奥さまは心から嬉しさうでした、しかし經濟的な主人公の氣持をよく呑込んで居ますので、ダイヤであればどんな小さなものでも良い、自分も持つて居ると云ふことさへ判れば宜いのだから、せめて二百圓位なところで……と云ひました。すると重役さんはかぶりを振つて、いやいやどうせ買ふんなら三千圓見當のでなければ無駄だ、あとで買ひ替へたりなんかしては却つて損だと云はれるのです』

『ふむ、喜んだらうな奥さんは……』

『喜ばれたどころではありません、感謝



ふ幸福なんだらうと云ふのです』

『無理もない突如として三千圓の指環なんだからな』

『そんな譯ですから、家庭は至極圓滿、明るい幾日かを過ごしました。そして奥

樣は節約に節約をして家事一切を最も經濟に切り盛り致しました。重役さんも此の上もなく喜ばれまして、あんなに一生懸命やつて居るんだから、早く滿足さしてやりたいと思つて居ました』

『そうだらう、しかし結構な家庭だな』

『軈てボーナスの日が來ました。奥樣の心の底には燦然たる動悸を打つて居ました。送り出す朝の玄關でも、三つ指をついて、いとも謹嚴に、軈て惠まれる幸福へ、ありつたけの感謝をさゝげて、晴々しい主人の後姿を見送つたのであります』

『うらやましいな』

『奥さまは其の日一日仕事も何も手につきません、幾度時計を見たことか、何度火鉢へ炭をついだことか、ワク〳〵した心持があつちの部屋へ行つたり、臺所へ行つたりさして、ポーツとした幾時間かを過ごしました』

『おい、好い加減にしろよ、俺まで待ち

違いぢやないか』

『やがて日が暮れました、いつも歸りは五時なのですが、今日は五時少し過ぎたのにまだ歸つて參りません、奥さまは何度も何度も玄關へ出て見ました。六時になつても歸りません、多分あの事で三越へでも廻つたのだらうと奥さまは高鳴る胸を抱いて、いそ〳〵と夕飯の仕度にかかりました』

『焦れつたいな、まだ歸らないのかい』

『歸りました、六時一寸過ぎだと思ひます、晴々とした顔の重役さんは、靴脱ぎで、踵と踵とを擦り合はして靴を脫ぎました。奥さまは臺所から飛んで出ました』

『あゝよかつた、そこでダイヤモンドの指環は……?』

國家の爲になる 大ダイヤの指環

『重役さんはニコ〳〵した顔で着物に着かへました、奥さまもいそ〳〵と取なしました。其の夜の膳はいつにない御馳走で、明るい團欒です、奥さまは今か〳〵と待つて居ました。ですから何を話しても只愉快な笑に消化されてしまひます。やがて重役さんは、丸い長い筒のやうなものを取出して、重々しく封を切りました。奥さまは先づ第一に昇給の辭令を見せるのかなと直覺しました。次に來るべき自分の喜びを伏線とした奥さまの笑顔は何に譬へるものもありません』

『さうだらう』

『重役さんは輕い咳を一つしまして、さアお前さんにダイヤモンドの指環を買つて來たよ、と丸い筒をクル〳〵と繰りひろげました。奥さまは腑に落ちない顔をして可愛い目をパチ〳〵させながら、それを見つめました、そして之れは何かの間違ひだらうと云ふやうに口元で笑ひながら、それは十圓の勸業債券ぢやありませんか、と念を押しました』

『はゝあ、間違つたな』

『いゝえ、間違ではありません、重役さんは大きくかぶりを振つて、間違ひではない、これがダイヤの指環だと斷然云ひ切りました。奥さまはタフンと腰を下ろしてプーツとしました。そして今までの喜びを裏返したやうな顔で、あなたはわたしを侮辱して居ます、いくら氣が變になつたつて、ダイヤの代りに債券を指へ卷いて歩けますかと云ふのです』

『無理もない、俺も細君に同情する』

『ところが重役さんは、カラ〳〵と笑つて、お前まあお聞き、この債券は勸業銀行で發行して居る債券だよ、政府が特に勸業銀行だけへの特權を與へて發行さして居る一等三千圓割增金附勸業債券だよ、と念を押しました。奥さまは、そんな事は諄々と說明されるまでもなく存じて居りますと云ふやうな顔をして、一向に取合ひません、そればかりでなく、あなたはわたしを馬鹿にして居ると云つ

て、大へんな價値です』

『そりや當りまへだよ』

『しかし主人公はそんなことで屁古垂れません。お前そう云ふけれど、此の債券は三千圓の籤が當る可能性を持つて居るんだよ。當らないとは限らない。當つたら其の三千圓でダイヤモンドの指環を買ふが良い、と云ふのです。成る程それはその通りです、けれども奥さまはそんな子供騙しのやうな事を云つてわたしを馬鹿にするのだといつかな肯きません。主人公はやゝしばらくして、諄々と說いて聞かせます、ねえ、お前、ダイヤの指環を嵌めて居ながら、お米を磨ぐときはどうするか、糠味噌を搔き廻はすのに豈夫ダイヤの指環を嵌めては居られまい、其の時はちやんとはづして金庫の中へしまつて置かなければなるまい、金庫の中や簞笥の中へしまつて置くのだつたら、指環だつて債券だつて變りはない筈だ。だから此の債券が當るまで。お前はお米を磨いだりお香々をつけたりして居たらどうだ、と云ふのです。奥さまも聰明な方ですから此の道理がやゝ腑に落ちて來ました。しかし心中不均の取れないことは、顔つきで判ります』

『なる程な』

『そこで主人公は尙話しつゞけました。ダイヤの指環を金庫の中へしまつて置くだけでは何の足しにもならない、債券なら第一國家の爲めになる、勸業債券は、零細な資金を集めて、國家的公共的事業の資金に貸附けるものである。かくすれば、國家の爲めになつて、ダイヤの指環になつて、しかも毎年五十錢と云ふ利子が生れて來る、と云ふのです』

『奥さまはすつかり納得されました。そこで私五十錢玉は毎年其のダイヤモンドの指環のところへ行くことになつて居るんです』

――をはり――

次號豫告！

五分間物語

谷　孫六

五分間と云ふと一時間の十二分の一です、この五分間に世界はどう變つて行くでせう、五分間の動き、それがどんなに驚くべき結果を齎すでせう五分間を無爲に過して取返しのつかない事になつてしまつた事もあり、五分間を有效に利用して、大成功を收めた例もあります。其の五分間をお考へ下さい。私が書く迄に、まづ皆さんがどう考へられるか、それだけでも此物語は有效であるに相違ありません。

誌上雄辯選手權大會

誰にも出來る大懸賞！

何人も奮つて御投稿あれ!!

大人物出でよ、大雄辯家出でよ、行詰つた日本の現狀を打破して、光輝ある新日本を建設する、此の外に道はない！　雜誌『**雄辯**』が、毎號**誌上公開演說會**を設けて、諸君の自由なる使用に當つる所以のものは、實に、わが將來の日本を一身に背負ふ大雄辯家大人物の輩出を念願して止まないからである。

特に昭和五年新年號に於いては、**誌上雄辯選手權大會**として、莫大の頁を割き且つ其の演說原稿を廣く天下に募集することにした。有志諸君は奮つて投稿せられよ、選者は左記永井鶴見の兩先生、これこそ眞に大雄辯家たるべき登龍門！　當選の榮を贏得らるゝことは、軈て諸君が大雄辯家として天下に名聲を博する第一歩となる

會演說原稿募集

であらう。

演題は何でも結構、思想に、政治に、經濟に、文學に、社會に、家庭に、都會に、田園に、諸君の選擇に任せる。既にどこからの演說會で演說したものでも結構、但し自己の演說に限る。

注意　文體は其の儘演說として高唱し得らるゝもの

賞品

一等（一名）優勝大カップ
二等（一名）書籍戸棚
三等（三名）金側腕時計金鎖付
四等（四名）本社特製金メダル
五等（二十名）本社發行演說講演集
六等（一千名）本社特製雄辯繪葉書

◆規定◆

◇長さ四百字原稿用紙五枚以內
◇原稿には住所氏名明記の事
◇封皮には『雄辯選手權大會原稿』と朱書のこと
◇規定に反するものは採らず。又原稿は一切返戻せず
◇宛名は東京本鄉駒込坂下町大日本雄辯會講談社『雄辯』懸賞部
◇賞品は發表後十五日以後に送る

締切　十月二十五日　發表　雄辯新年號

選者

永井柳太郎先生
鶴見祐輔先生

名著紹介

清秋來る！ 燈火讀書の好期です!!

左に近時評判のもののみ選拔御紹介申上げます

註文の仕方はこれの終りにあります

◉小說・大衆文藝

著者	書名	內容	定價	送料
鶴見祐輔	母	薄倖なりし母君の弔合戰として一字一涙渾身の熱誠をこめて描いた母の一生	二、〇〇	一三
佐々木味津三	右門捕物帖	美男俠氣の名同心右門の捕物記、怪奇艷麗、可憐：：興味横溢の名作十數篇。	一、六〇	一三
佐々木邦	脫線息子	美しい令孃を見染めた新太郎君が結婚迄の苦心が脫線又脫線寳に滑稽無類	二、〇〇	一三
佐々木邦	愚弟賢兄	愚直で無邪氣な貢二君の學校卒業前後から恥しい戀と新家庭生活。頗る面白い！	二、〇〇	一三
山中峯太郎	新郎新婦	若い士官と華かな美人とが胸轟かす縁組ノ物語。出雲の神様も微苦笑の滑稽小說	二、〇〇	一三
佐々木邦	主權妻權	若い新婚者の戀愛生活家庭生活の描寫、何人も笑ひ出さずにはゐられない快讀物	二、三〇	一三
佐々木邦	次男坊	快氣豪快頭がよくて金がある次男坊が學校に戀に求職に痛快なる大脫線大騷動！	二、〇〇	一三
岡本一平	人の一生	三百有餘の名漫畫と、奇想天外の名漫文、笑ひ乍ら世態人情を知る。	二、三〇	一〇
佐々木邦	世間相人間相	家庭に會社に路傍に人生の諸相、眞面目の樣で滑稽溢トテモ面白い諧謔小說集	二、三〇	一三
谷脇素文	川柳漫畫 うき世さまぐ	名川柳一千句に獨特の名漫畫を配し世態人情を活寫し笑ひ乍ら數へる所亦多し	二、三〇	一三
佐々木邦	親鳥子鳥	哄笑微笑樣々な笑の中に美しい家庭情味と涙ぐましい母性愛を活寫親も子も讀め	二、〇〇	一〇
加藤武雄	髷	嬌婦妖婦と嘲罵され喜んで戀人の凶刃に倒れた美人房子の哀史一讀何人も熱涙！	二、三〇	一四

●こゝに列記の書籍は全國の書店で御取次致します、書店へ遠い方は發行元（東京、本鄉、大日本雄辯會講談社）に御注文下さい

小杉天外	藤娘	才智容色世に優れた博士夫人が許されぬ戀に戀人を殺し自ら亦命を絶つ大悲劇！	二、二〇	一三
中村武羅夫	女王 前篇	一家再興のため奮闘する快青年を巡る三人の處女、死よりも强き愛の力！	二、五〇	一四
中村武羅夫	女王 後篇	孔雀の如き名家の令孃、可憐な町娘、淋しき文士の妹、淸き戀悲しき戀熱烈な戀	二、五〇	一四
岡田三郎	聖火	處女時代の秘密から破婚された美人が恐しき男性への復讐魔となつた悲痛な生活	二、二〇	一三
小杉天外	眞空鈴 前篇	妖婦の淫蕩生活が捲起した大悲劇、亂淫の罪惡が如何に深刻なるか驚くべき物語	二、二〇	一三
小杉天外	眞空鈴 後篇	罪の子と生れた美しき姉妹の盡くるなき業苦は波瀾又波瀾實に先生畢生の大作	二、二〇	一三
佐藤紅綠	第一歩	父の爲淫蕩の妖婦を殺した少年其他ドン底に蠢く人々を描寫し人の肺腑を抉ぐる	二、二〇	一〇
中村武羅夫	處女	淸く美しく逝きし一處女の生涯を寫し、處女神聖の讃歌を奏する大傑作！	二、二〇	一二
佐藤紅綠	幸福物語	踏まれ乍らも花美しき月見草、悲慘なる境遇の中に幸福を見出す一處女の奮闘物語	二、二〇	一三
加藤武雄	審判	兄弟と知らず熱愛する男女の悲戀、母の秘密が產んだ深刻息詰まる様な事實物語	二、五〇	一三
中村武羅夫	女人群像 前篇	職業婦人として立つ美しき處女の貞操戀愛等を深刻に描寫した萬人必讀の大快著	二、五〇	一二
中村武羅夫	女人群像 後篇	一身の幸福を犧牲にして病父を養ひ、妹を扶け働く職業婦人の血涙奮闘を見よ	二、五〇	一四
長田幹彦	波のうへ	飛行將校墜落自殺に絡る一美妓の哀婉悲壯の運命物語馬場孤蝶近松秋江諸氏激賞	二、三〇	一三
中村武羅夫	夜の潮	某上流家庭の戀愛事件、爛せる肉慾生活から次第に目覺むる靈の曙を描く	二、七〇	一四
菊池幽芳	妖美人物語	妖艶な美人が自己の秘密の爲、子に別れ戀を捨て數奇な一生を終る運命悲劇	二、三〇	一四
本田美禪	血染の伽羅 前篇	元祿の大江戶紅顔の若衆に仇と知りつゝ身を焦す美娘あり美女を追ふ俠勇士あり	一、八〇	一三
本田美禪	血染の伽羅 後篇	出沒する怪盜あり波瀾又波瀾哀戀濃艶の一大情史	一、八〇	一三
前田曙山	大望	美貌の後室の執拗な戀と美男采女――幕末の奥御殿に起つた戀と罪と復讐の物語	二、三〇	一三
吉川英治	劍難女難	兄の仇を報いんとする美男妖婦あり美女あり劍と戀の大渦卷！手に汗握る面白さ	二、五〇	一四
下村悅夫	悲願千人斬	土岐家の孤兒を守る豪僧白雲上人が、義憤に燃ゆる千人斬、深刻極まる歷史小說	二、四〇	一四
村上浪六	妙法院勘八	由緒ある家に生れ乍ら伊達姿、劍を執ては無敵の快腕二人の美女の戀に板挾み！	二、三〇	一〇
小泉長三	だゝつ兒羅漢	家光の甥、美男俠骨全國を睨に天下御免の我儘者が不敵の大活躍！壯絕快絕！	二、五〇	一四

●こゝに列記の書籍は全國の書店で御取次致します。書店へ遠い方は發行元（東京、本郷、大日本雄辯會講談社）に御注文下さい

著者	書名	内容	定價
吉川英治	坂東俠客陣	念流秘密の秘文を死守する美女を中心に怪盜劍客俠士美妓等々卍巴の大波瀾！	二、一四〇
江見水蔭	搦み蜘蛛	家庭教師と或青年、戀愛に貴公子掏摸毒婦等を配し無と罪を描いて悵長し。	二、一五〇
村上浪六	浪六名作選集	所謂浪六式の名篇中選りに選つた面白い傑作を收む義理あり涙あり人情榮の極致	二、一三〇
本田美禪	お洒落狂女 前篇	綺羅びやかに扮飾し嬌態の限りを盡して男といふ男を惱殺する狂美人を中心に、色好み男の智謀の高官好色の勇者勇み肌の江戸ッ兒等の波瀾又波瀾！狂女の胃動に伴く一脈の鬱氣純情、之を助くる疑問の怪人、構想雄大興味横溢！眞に大傑作！！	一、八〇
本田美禪	お洒落狂女 中篇		二、一五〇
本田美禪	お洒落狂女 後篇		二、一五〇
福[illegible]琴月	靜御前	平氏の敗將將軍の末路等人義經の活躍佞人奸臣の秘策より生別死別の哀戀悲曲	二、一六〇
筑波四郎	探偵十種	明治大正間の有名な事實犯罪の行方ピス強盜清水定吉色仕掛美人の枕探し等々	二、一〇〇
筑波四郎	探偵事實奇譚	日英「靈の裏面」、虛無黨の爆裂彈「カイゼルの密使」等政治外交の秘密探偵譚	二、一〇〇
渡邊霞亭	千鳥ケ淵	純な美少女が性に覺め行く春の夢に華を起し初戀の墮落の悲劇を描き涙潸然	二、一〇〇
富田十一	肉の榮光	全身に燃えさかる情火の嵐みの恐ろしい渦卷！美と陞の囂の首都に浸る肉の香り！	一、四〇

著者	書名	内容	定價
本田美禪	亂れ燒刄 後篇	道義より資金、貞操より愛慾の大江戸に花の如き姉妹の戀の波瀾繪卷物の如し	二、一三〇
前田曙山	復讐	牢中に呻吟廿年彼が脱獄以來の冒險と血涙によつて如何なる大復讐を決行するか	二、一〇〇
奥野他見男	君は燃えたり火の如く	戀の美酒に醉ふ若き男女の張き、有名な他見男先生の快筆紅き血潮は躍り立たん	二、〇〇

◎隨筆・傳記・評論・紀行

著者	書名	内容	定價
杉山茂丸	俗戰國策	伊藤山縣桂等の智囊として活躍した著者が公にした大事件の眞相小說より面白し	二、五〇
田中光顯	維新風雲回顧錄	幕末爭亂の間命を的に奔走した著者が當年の回顧錄、一讀血湧き肉躍る活歷史！	二、〇〇
林田龜太郎	日本政黨史 上卷	明治維新以來今日迄政黨の消長政局の變轉等波瀾萬丈の面白い我が憲政の活歷史著者は政界通の第一人者、	二、八〇
林田龜太郎	日本政黨史 下卷	血涙の奮鬪した黨人志士の面目紙上に躍如たり	二、五〇
杉山茂丸	百魔	明治大正政界財界の裏面に重要なる活動をした著者が遭遇せる有無名傑士を語る	二、七〇
杉山茂丸	百魔 續篇	筆端豪快！驚くべき大事件の眞相、巨人傑士の言動等目に見る如く快談を極む！	二、七〇
佐藤鐵太郎	新日本への道	赤誠忠の著者が國體の眞髓を明かにし國民の行路を指迷、實に救世濟國の快著	二、〇〇

●こゝに列記の書籍は全國の書店で御取次致します。書店へ遠い方は發行元（東京・本郷・大日本雄辯會講談社）へ御注文下さい

著者	書名	内容	定價
久木獨石馬	人物評論 政界縦横記	伊藤山縣西園寺始め現代政界の巨頭を物語り縦横に批評す。面白くて痛快！	二、二〇 三〇
林田龜太郎	政界側面史	政局の變轉大人物の汚隆閥族葛藤の裏面等を如實に寫した面白い側面史。	三、〇〇 一六
谷孫六	岡辰押切帳	岡辰老人の金儲け實際談、一度本書を繙かば妙案續出不景氣何するものぞ！	一、八〇 三〇
大瀧鞍馬	三井王國	巨人傑漢雲の如く活躍！今日の王國を現出せる風概を描いて頗る面白い	二、〇〇 一〇
大瀧鞍馬	三菱王國	一世の快傑岩崎彌太郎の奇略縱横の雄飛を描いて彼の面目躍如たり	一、七〇 一〇
安田與四郎	株式市場の表裏	著者は實際の財界通で加ふるに名文の人、何人も一讀忽ち株式必勝の方法を知る	一、八〇 一〇
鶴見祐輔原著 澤田謙譯	現代日本論	著者が米國大學に於て政治に思想に文藝に現代日本を闡明し講述せる世界的名著	一、六〇 一〇
服部純雄	教壇隨筆 雑草の花	溫なる教育家の純情熱涙迸つて此の尊き人生記錄を成す、無限の興味と感激！	一、八〇 三〇
佐藤紅綠	東西婦人觀	古今東西各地各界婦人の面白い有益な話婦人問題の重大な指針何人も必讀すべき快著	二、〇〇 三〇
高島米峰	思ふまゝ	寶良露膽の新鋒の下の力持等々人觸れば人を斬り馬觸れば馬を斬る痛快なる批判	三、三〇 三〇
北原白秋編	日本民謠作家集	子規獨歩等より雨情、八十等に至る迄一流大家傑作中の傑作を選んだ珠玉の名篇	二、五〇 一四

著者	書名	内容	定價
北原白秋編	現代民謠選集	民謠は民族の聲である一度唄へば情緒無限を謳る各地各所識人士の傑作集	二、三〇 一〇
田山花袋	花袋行脚	現代隨一の紀行家たる氏が史蹟名勝を訪ねて歴遊せる旅行記物語としても面白い	二、三〇 一〇
北畠利男	歐米大人物立志傳	現代歐米の大實業家、發明家等の苦心慘憺たる奮闘傳で悉く血と汗と涙の記錄	一、八〇 一〇
澤田撫松	大正婦人立志傳	我國婦人界に輝く十七婦人が有ゆる艱難誘惑に打克ち榮冠を得るに至る血涙記錄	一、八〇 一〇
井關十二郎	現代 立身成功の近道	著者自身の體驗、偉人の名訓を引き興味ある實話を以て就職成功の要訣を説く	一、八〇 一〇
鶴見祐輔	思想山水人物	世界の大人物を訪ひ思想を尋ね詩想迸つては一木一草にも無限の感慨を託す。	二、五〇 三〇
鶴見祐輔	南洋遊記	椰子の葉蔭に涼風薫る全南洋の實際と樂園を叙する寫眞豐富案内記としても上乗	六、〇〇 一八
鶴見祐輔	中道を歩む心	我等は如何に生くべきか何を爲すべきか著者の赤心を披瀝して理想の境地を叙す	二、五〇 一四
鶴見祐輔	英雄待望論	世界の大偉人大政治家大思想家を熱血の筆にて描き讀者をして感奮興起せしむ	、五〇 一八
澤田謙	ムツソリニ傳	鍛冶屋の息子から出世した世界驚異の大英雄の面目躍如として小説よりも面白い	一、三〇 三〇
中村孝也	源九郎義經	波瀾萬丈の英雄を詩筆に託せる不朽の史話、勇ましくも又哀れなる一代、繪卷	二、八〇 一六

●こゝに列記の書籍は全國の書店で御取次致します。書店へ遠い方は發行元（東京、本郷、大日本雄辯會講談社）に御注文下さい

著者	書名	内容	定價
由良樺人	快傑レーニン	彼の生ひ立、思想、交友、嗜好、革命運動の眞相等を赤裸々に解剖描出し壯快なる偉人傳	一、五〇 一八
鶴見祐輔	北米遊說記	單身米大陸に飛込んで彼地の名士民衆を相手に戰へる一年有半の熱血壯烈の手記	二、五〇 一三
松枝保二	米國排日の眞相	著者が親しく彼地にありて經驗せる排日の實狀八千萬國民への大檄文何人も讀め	一、五〇 一八
ヘンリーフオード原著 加藤三郎譯	今日及明日	一勞働者より自動車王となつたフオード氏が體驗より語る處世訓事業經營の要訣	二、三〇 一三
鶴見祐輔	壇上紙上街上の人	世界と日本各方面の人物の印象を物語る。政治家あり、文人あり、女優あり：：。	二、七〇 一四
横山桐郎	蟲の世界を探ねて	蟲の世界にも熱烈な戀愛があり生活の問題があり爭鬪もある著者一流の輕妙な名文	二、二〇 一三
松村松年	驚異と神秘の生物界	深く探れば探る程天理の神秘よ自然の靈妙驚くの外ない見よ世界學界評判の名著！	二、三〇 一三
日下部四郎太	異國行脚	科學者の面白い世界見物記笑ひながら世界の事情を探り自然と科學の謎をとく	二、八〇 一四
日下部四郎太	二人行脚	博士の彌次喜多日本見物記滑稽諧謔の中に人情風俗を知り學理と趣味の無盡藏！	三、五〇 一四
丘淺次郎	煩悶と自由	生物學の見地から人類の退化說を斷言し文化を論ず有益で面白い人類の大寶言！	上製 四、五〇 一七 普及版 二、八〇 一四
松村松年	進化と思想	「自然は男性を虐待す」始十三章博士一流の生物學の蘊蓄と達識、[illegible]	三、〇〇 一八

著者	書名	内容	定價
本社編纂	明治大帝	大帝側近奉仕の顯官名士が當時の事實を謹述し帝の御面影髣髴として感激無限	五、〇〇 二四
近藤蕉雨	社會萬般番附大集	政治人事實業歷史文學精神衛生酒將其他萬般何でも一目で役立つ未曾有の大寶典	二、〇〇 一六
後藤新平	英佛米首相官邸	ポアンカレー、ボールドウイン、アスキス其他歐米第一流人物に會見せる印象記	三、三〇 一〇
安藝愛山	家庭百話	お爺さんから女中さん迄誰にも面白い例話無限の教訓あり處女令孃大部數申込あり	一、八〇 一八
上杉愼吉	日米衝突の必至と國民の覺悟	彼等が抱ける日本征服の野心とその眞相悉く喝破言々人の肺腑を刺す快著	一、八〇 一八
永田秀次郎	全國民に訴ふ	日本の國體の光輝共產主義の眞相を究明し國民として履すべき道を示せる大絕叫	一、二〇 一四
本社編纂	大正大震災大火災	凄慘を極めたる大震災當時本社が危險を冒し撮影せる數百枚の寫眞と血淚の實記	一、五〇 一三

◎雄辯書類

著者	書名	内容	定價
加藤咄堂	雄辯法講話	「雄辯家たらんとするものは本書によりて學べ」と小久保喜七氏が激賞	二、〇〇 一四
本社編纂	模範的式辭挨拶五分間演說集	積んですぐ役立つ現代名士の日常各種場合の名演說百數十篇、社交禮法を附す	一、八〇 一〇
本社編纂	テーブル・スピーチ	あらゆる場合の卓上演說例を擧げ其要諦を會得せしむ活動せんとする現代人必讀	一、〇〇 一八

書名	内容	定價	送料
本社編纂 泰西雄辯集	デモステネスよりリンコルンに至る史上英傑の大獅子吼集何人も奮起熱狂	二、〇〇	、四
本社編纂 青年雄辯集	鶴見祐輔森戸辰男其他現代に活躍する諸氏が青年時代の處女演說出世演說を集む	二、〇〇	、四
本社編纂 講演資料逸話集	演說に座談に巧みに之を引用せば、對者に感動を與へ說話の効果を高からしむ	、八〇	、四
本社編纂 永井柳太郎氏大演說集	有名な「西にレーニン東に原敬」始め氏の代表的名演說集。眞に大雄辯！	一、五〇	、四
本社編纂 鶴見祐輔氏大講演集	現代日本の有する世界的新人が世界の大勢文明の趨向偉人の面目を識る大熱辯！	二、二〇	、一三
本社編纂 下村宏博士大講演集	著者は我が新聞界の權威者國際、經濟、教育、婦人其他各種問題に一世の卓見	二、〇〇	、一三
本社編纂 道重信教師大講演集	一世の高德增上寺の貫主る師が人生の惱を喝破し永遠の生命の爲所信を披瀝す	一、八〇	、一三
本社編纂 新井石禪師大講演集	參禪悟道の禪師が熱誠を傾けたる大講演！禪機の妙諦、信仰の奧義を知る	二、〇〇	、一三
本社編纂 高田早苗博士大講演集	大早稻田を建設せる教育界の先覺者、修養問題教育問題人生問題等眞に大識見！	二、〇〇	、一三
本社編纂 中島德藏氏大講演集	高遠なる哲學倫理を俗に碎いて說く。道德に思想に家庭に社會に千鍋火の如し。	二、〇〇	、一二
本社編纂 谷本富博士大講演集	時代を拔く大識見！世を恐れざる大情熱！戰爭を按じ英雄を論じ熱狂奮起せしむ	二、〇〇	、一〇
本社編纂 尾崎行雄氏大演說集	有名な、桂公彈劾演說シーメンス問責普選の精神今氏一代の代表的名演說を收む	二、〇〇	、一〇
本社編纂 犬養木堂氏大演說集	「無政府以上の惡政內閣」「大臣責任論」を始め代表的名演說眞情切々人に迫る	二、〇〇	、一〇
本社編纂 高島米峰氏大演說集	日本のバーナード・ショウ、家庭に社會に宗教に、明快なる一大痛棒を揮ふ	二、〇〇	、一〇
本編纂 濱口雄幸氏大演說集	莊重の辯、堂々の識見、殊に氏の財政演說は天下無双本書一讀大に學ぶ所あらん	二、〇〇	、一〇
本社編纂 加藤咄堂氏大講演集	通俗講演としては天下第一の人、何人にも面白く感激に富む典型的雄辯集	二、〇〇	、一三
本社編纂 賀川豐彥氏大講演集	弱き者の味方惱める者の助言者、見よ！火の如く燃えさかる人類救濟の大絕叫！	二、〇〇	、一三

金言

書籍は今も尙奇蹟を行ふ即ち人をして悟らしむるなり

（カーライル）

◀御註文には▶

…以上の本は全國書店にありますが賣切れの時でも御註文があれば書店は喜んで本社から取寄せて差上げる筈です。

…書店へ遠い方は直接本社へ御註文下さい、本社への御註文は、恐入りますがすべて前金に願ひます。

…御送金は振替貯金が最も安全且つ便利です。

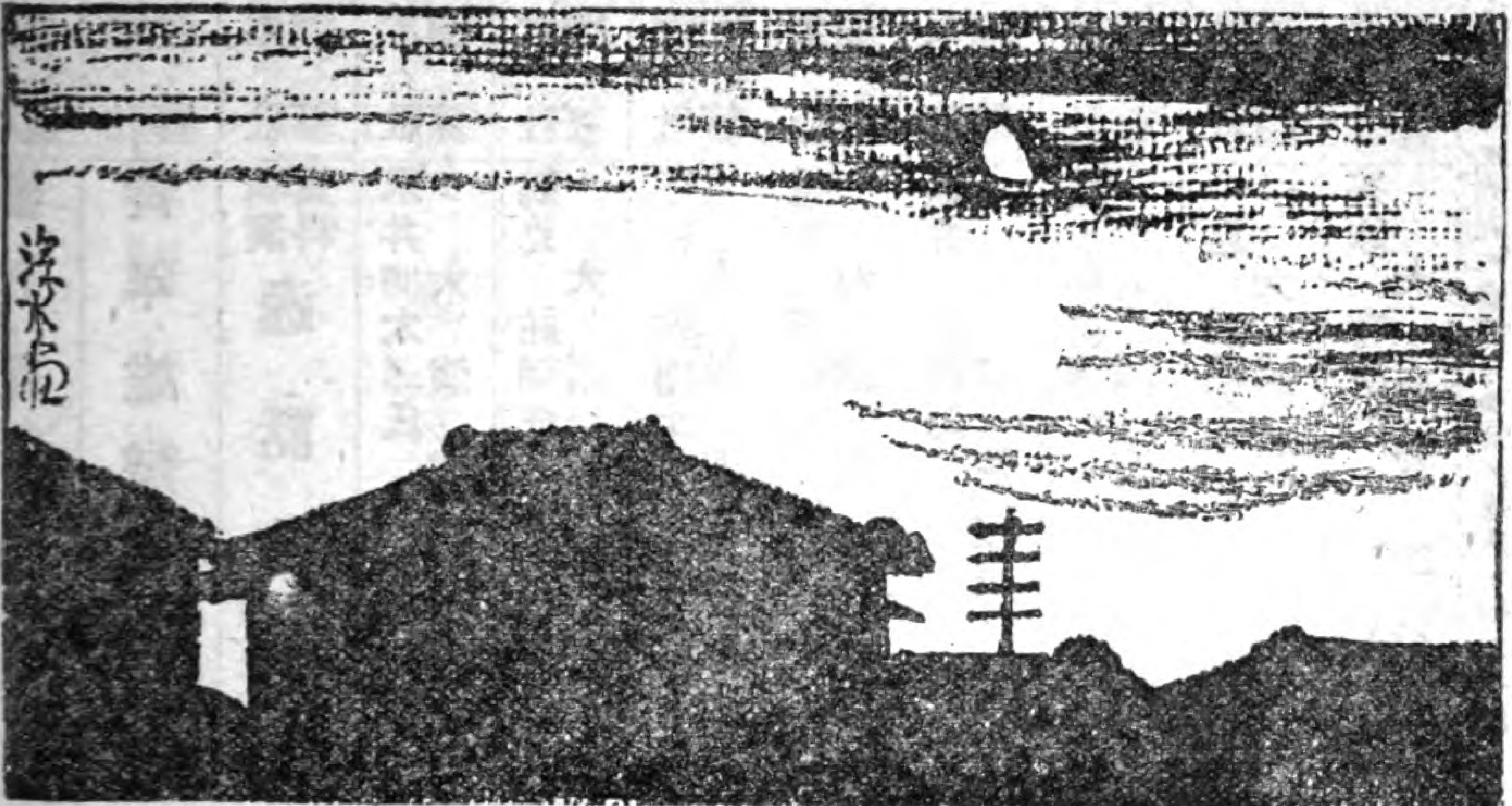
振替口座　東京三九三〇

大日本雄辯會講談社

…爲替や郵便切手の御送金は書留に願ひます、切手は可成大きい金額のもので必ず一割增に願ひます。

…代金引換、集金郵便は本社では扱ひません。

●こゝに列記の書籍は全國の書店で御取次致します。書店へ遠い方は發行元（東京、本郷、大日本雄辯會講談社）に御注文下さい



春遠からず

加藤武雄
挿繪 伊東深水

『可厭な奴！』

『いゝえ。無理をしちやあ駄目だ。あんたは病氣なんだから――。』
と、禮吉は起きあがらうとするみち子を抑へて、
『だが、みち子さん、どうしてこんな事になつたの？ どうして姉さんと一緒にゐないの？』
水野の話を思ひ浮べながら訊いた。
みち子は、驚きと訝りと思ひ掛けないめぐり合ひのよろこびとでかきみだされた禮吉の表情を、熱ばんだ眼でじつとみつめてゐたが、
『姉さん！ 姉さん！』
と、裂けるやうな叫びをあげると、兩手を顏にあてゝ激しくすゝり泣きをはじ

めた。
『姉さんがどうしたの？　泣かないで僕に話して下さい。』
『早く姉さんのところへ行つてあげて――行つてあげて頂戴。』
『何處に姉さんは居るんです。』
『一緒に行くわ！　私一緒に行くわ。』
　みち子は、然う叫ぶと共に、とう／＼起きあがつてしまつた。
『いゝえ。あんたは病氣なんだから――無理をしちやいけない。』
『いゝえ。大丈夫よ。私、一緒に行くわ。』
　押問答をしてゐるところへ、せか／＼と息を切らして水野が歸つて來た。
　水野は、禮吉が此の少女とかねてからの知合だつたといふ事を聞くと、ひどく驚いて、
『然うか？　こりやあ不思議だ。正に一つの奇蹟つてもんだ。だが、一體どうして君がこの小ちやいお孃さんと――？』
　しかし、みち子の焦燥は、そんな問答の餘裕を與へなかつた。
『行きませう。一緒に姉さんのところへ行きませう。』
　みち子は、禮吉の膝にしがみつくやうにして云つた。
『姉さんのところへだつて――？　姉さんがあつたんだね？』
　水野は益々驚いて、くる／＼と眼を圓くした。
『行つて頂戴。一緒に行つて頂戴。』
　みち子はヒステリックに繰返した。みち子は堅く信じてゐるのだ。此の人こそあの不幸な姉を幸福にして呉れる人なのだと。此の人こそ、あの不幸な姉の救助者としてひそかに探し求めてゐた人だつたのだと。
『だが、あんたは身體が惡いんだからね。外へ出たりしちやいけないんだ。姉さんの居るところさへ教へて呉れゝば僕が一人で行きますよ。僕が行つて伴れて來てあげますよ。姉さんは何處にゐるのです？』
『伴れて來て――伴れて來て呉れる？』
『えゝ。伴れて來てあげます。』
『ぢや、伴れて來て頂戴。姉さんは小石川にゐるの。』
『小石川？』
『えゝ。小石川の――。』
　と、みち子は町の名と番地の名をはつきりと禮吉に告げた。
　それをみち子の口から聽くと、禮吉は長い間の苦心が漸くそこに酬はれた事を知つた。おゝ！　彼女の所在がとう／＼判つたのだ。彼女と會ひ得る日がとう／＼やつて來たのだ。禮吉は、今日の此のみち子とのめぐりあひに、神の意志を、運命の導きを感じた。彼の心は踊躍した。

『ぢや、僕はこれから直ぐに行く。行つて、姉さんを伴れて來てあげませう。姉さんは、あんたが此處にゐる事を、知らずにゐるんですね。』

『えゝ。――でも、私の事なんかどうでもいゝの。早く行つて――。』

みち子は喘ぐやうに云ふと、俯伏に身を伏せてしまつた。衰弱した身體がそれ以上の緊張に堪へられなかつたのだつた。

『水野君。ぢやあ君頼んだよ。僕は一寸行つて來るから――。』

禮吉は水野に云つた。

『わからないな。どうも――。何が何だか僕にや些ともわからない。』

『あとでよく話す。ねえ君、それはメルヘンぢやあ無い。ロオマンスなんだ。』

『うん、何だか悲劇のにほひがするな。』

水野は、再び顔を振りあげたみち子と、起ちあがりかけた禮吉とを代る〲眺めて云つた。

『悲劇は悲劇でも、もうこれで多分「幸福な終」だ。此の子の姉さんを、僕はどんなに探してゐたか知れ無い。探してゐた人にやうやく會へることになつたのだ。いや、これも全く、君のおかげだよ。君に感謝する。』

二三分の後、禮吉はタキシに乗つて小石川へ急ぎつゝあつた。

教へられた町はすぐに知れた。番地もすぐにわかつたが、しかし、その番地の、それらしい家は――おゝ！彼はそのぴたりと鎖された門の前に立つて茫然として自失した。それは、空屋になつてゐるでは無いか？

あの西大久保の露地裏の家を岡本氏と共に尋ねた時と同じ失望が、いや、その時以上の失望が彼を打碎いた。彼は、そこにはりつけられた貸屋札の、黄昏の空氣の中にほの白く浮んだのを惡魔の咒文かの如く打眺めながら、しばらくの間ぼんやりと突立つてゐた。

もしかしたら、みち子が番地を覺え違へてゐたのかも知れない。さう思つて、彼は、それに近い番地をも念入りにしらべて見たが、矢張駄目だつた。

禮吉は、すつかり悄げきつた氣持で、空しく引返して來た。寝床の上にふるへながら待つてゐたみち子は、禮吉から、その家がもう空屋になつてゐたといふことを聞くと、

『ぢやあ、姉さんは又何處かへ轉したのか知ら？』

と、途方にくれたやうにその眼をみはつた。

『弱るらしいね。近所でいろ〱訊いて見たけれど、矢張わからないんだ。』

『どうしたんでせう？　姉さん――。』



空に姉を呼ぶみち子の聲は、もう泣き聲に變りかけてゐた。
『――何だか僕にはよくわからないんだが、みち子さんは、どうして姉さんのところを出て來ちやつたの？』
禮吉は、最初の疑問に返つて斯う訊いた。
『…………。』
みち子は、涙ぐんだ眼で空をみつめたまゝ答へなかつた。
『ねえ。僕にわからない事だらけだ。僕には何にも隱さなくてもいゝんです。話して下さい。ね。』
『わからんね、どうも――。』
と、水野もそこで口を入れた。實際、水野には何が何だか些ともわからなかつた。
『…………。』
しかし、みち子は矢張默つてゐる。
『お母様はどうしたの？』
『お母様は病院へはひつてゐるの。』
みち子はやつとそれだけ答へた。
『ぢや、あの家に、みち子さんと姉さんと二人でくらしてゐたんだね。』
みち子はうなづいた。
『で、姉さんは、どうしてゐたの？　何處かへ勤めてでもゐたの？』
『さうぢやあ無いの。』
と、みち子はかぶりを振つたが、
『乾度然うだわ！　乾度然うだわ！』
さう抑へつけた調子で獨語のやうにくりかへした。彼女の顏は、見る〳〵激しい憎惡の表情で引歪められて行つた。
『どうしたの？』
その急激な表情の變化におどろかされながら禮吉は訊いた。
『さうだわ！　あいつが又姉さんを何處かへつれて行つたんだわ！　さうだわ！　乾度然うだわ。』
みち子は、早口に云つた。
『あいつ？』
『あいつだわ、あいつだわ！　あいつが姉さんを苦めてゐるんだわ。』
みち子は、狂氣染みた調子で繰返した。
『あいつッて、一體何人の事なの？』
『私、だから、出て來ちやつたんだわ。だつて、私がゐると、姉さんが――姉さんが――。』
と、みち子は兩手で顏を抑へ、俯向いたまゝで身悶えしながら泣き出した。
『泣いちやいけない。ね、泣かずに話して下さい。あいつッてのは何人なんです？』

だが、みち子はしばらくの間どうしても泣き止まなかつた。

『ひどく昂奮してゐるんだよ。熱もかなりあるんだから、まあ、あまり訊かない方がいゝんぢや無いかな？』

水野は、心配さうに云つた。

『あゝ。それはさうだが――だが――。』

だが、禮吉は、矢張訊かずにはゐられなかつた。あいつ？　あいつとは何人だ？　彼はその疑問の前に苛立たずにはゐられなかつた。

『ぢやあ、みち子さん、それだけ僕に話して下さい。姉さんは何人か男の人と一緒にくらしてゐたの？』

あの活動女優の云つた事は矢張うそぢや無かつたのか知ら？　さう思ひながら禮吉は訊いた。

『え？　あんたの姉さんは何人かと結婚してゐたの？』

『うゝん。』

とみち子は弱くかぶりを振つた。

『結婚してたんぢやあ無いんだね？』

『あんないやな奴！』

みち子は吐き出すやうに云つたが、

『でも、その人からお金を貰つたんだもの。お金が無ければお母様は病院へはひれないし――。』

悲しげに嘆息しながら云ひ添へた。

『わかつた！　それでわかつた。』

禮吉は沈痛にうなづいて、

『で、その人は何て人なの？　何處にゐる人なの？』

性急に問うた。

『何處にゐるんだか知らない。』

『名は知つてゐるでせう？　何て人なの？』

『榎木つて云ふのよ。』

『榎木？』

『えゝ。可厭な奴！　私、大嫌ひ。』

その男が、今眼の前に居でもするやうに、激しい憎惡を以つてみち子は叫んだ。

『榎木何て云ふの？』

『それツきり知らない。』

『どんな人？』

『可厭な奴よ。』

と、みち子は繰返した。

『若い人？　いくつぐらゐの人？』

『そんな事知らない。』

口にするのも汚らはしいといふ風にみち子は云つた。

『ぢや、みち子さんは、その人が嫌ひだからそれで姉さんのところを出て來てしまつたのだね？』

『えゝ。――私がゐるもんだから、姉さんがいろ〳〵心配するの。私やお母さんさへ居なきや、姉さんだつてあんな奴の――。』

みち子の言葉は嗚咽で中斷された。

『わかつた！　みち子さんの話はよくわかりましたよ。ぢや、それでみち子さんは出て來ちやつたんだね。姉さんに默つて出て來ちやつたの？』

『私、死んぢまはうかと思つたのよ。』

すゝり泣きの口もとに、淋しい微笑のかげがちらと浮んだ。

みち子は家出をしてから今日までの、日數にすれば二十日あまりの事を二年も三年もほどの長さに思ひ出すのであつた。本當に死んでしまふつもりで、街から街へとふら〳〵と歩いてゐるうちに、お腹が空いて來てくたびれて來て、何處だか知らないが、橋の傍に積んである切石の上に腰をかけて、遠くの空に明滅する電燈廣告の赤い灯や青い灯をぼんやりと眼にうつしてゐるところを、見知らぬ小母さんに聲を掛けられて、小母さんが親切に云つて呉れるのでついその氣になつてあとをついて行くと貧しげな家ながら、ひどく大事にして呉れて、――だが、それも最初のうちだけでだん〳〵邪慳になつて來るばかりか、何か氣味の悪いたくらみをでもする樣子が勘づかれて來たので、思ひ切つてそこを逃出して、そして、こゝに救ひ入れられたまで



の事を、それからそれへと思ひ返すのであつた。

『そんなつまらない事を考へちやいけないね。――默つて出て來て、ぢやあ姉さんは心配してゐるでせう？』

禮吉は、いたましげにみち子を見やりながら、

『だけど、もう大丈夫だ！　僕がその可厭な奴から屹度姉さんを取返してあげますよ。』

『姉さんは、何處へ行つたんでせう？』

『榎本――と云ふんだね。ただ、榎本とだけぢやわからないが、ねえ、みち子さん、その男の事を知つてゐるだけ話して下さい。』

『でも、私、何にも知らないの？』

『いくつ位の人？』



『三十くらゐ。』
『どんな人？』
『可厭な奴！』
『可厭な奴。は、はゝ。』
　と、禮吉は淋しく笑つた。
『うん、いくらかわかつて來たよ。』
　今まで默つて二人の會話を聽いてゐた水野は、頓狂な調子で斯う云つたが、
『かあいさうに！　ぢやあこの小ちやいお孃さんは死ぬ事なんか考へてゐたんだな。成ほど、こりやあメルヘンぢやあ無い。』
　と、次第にしんみりと聲をおとして、
『お伽噺の中の小ちやな王女だと思つてゐたが、立派に悲劇の一役者だつたんだな。ところで、此の子の姉さんつて人と、君とはどういふ關係になつてゐるんだい？』
『僕は、まだ、その姉さんて人と知合にはなつてゐないんだ。外ながらちらと見ただけなんだ。』
『わからないな。だつて、君はその人を探してゐたといふぢやあ無いか？』
『探してゐる事は探してゐるのだがね。これには簡單には話せない事情があるんだ。』

　と、ふと思ひ出したといふ風にして、みち子が突然云ひ出した。
『あの指環、私、姉さんにあげたのよ。』
『然う？』
『だつて私には勿體無いんですもの。姉さんに上げたら姉さんずゐ分よろこんだわ。』
『あ、然う？』
　――どんな事をしても探し出さなければと、禮吉は改めてその心に誓はずにはゐられなかつた。

會見

　榎本――三十歳ぐらゐの男――。
　禮吉は、歸りの途で、斯う心の中に繰返し續けた。繰返してゐるうちに、ふと、彼は思ひ當つた。榎本――榎本欣助！
　さうだ。あの男かも知れない。いや、あの男に違ひ無い。あの男なら、あの活動女優の藤代とも交際があるわけだ。藤代が、それとなくほのめかしたのは、あの男の事だつたのだ！　さうだ。あの男だ！　榎本と聞いてゐながら何故もつと早くあの男を思ひ出さなかつたらう？　あの男なら有名な放蕩兒だ。窮境につけこんで、金しばりにして美しい娘を蹂躪する――

愛讀者諸君の熱望により

面白い全集！

集 全二巻

豫約募集

人心益々險惡に赴き、なんとなく不愉快なことのみ多くて困つて居るこの時に、落語全集が出て天下を哄笑せしめることは此上もなく良いことです。

この外、小笠原長生、幸田露伴、吉岡彌生、豊島豊次郎、武田鶯塘、八波則吉、松村介石、笹川臨風、佐藤紅綠、道重信教、伊藤金次郎、谷本富、高田義一郎、堀内信水、西川光二郎、岡鬼太郎、三田村鳶魚、下村海南、菅原時保（順不同）その他の諸先生より、この計畫に對し熱烈なる御援助御賛同を得ました。

本計畫一度傳はるや
各方面に大歡呼起る！

良い全集だ。結構な思ひつきだ。一日も早く出してもらひたい。出る日が待遠しい。等々

歡喜・滿足・激勵・期待の書狀毎日引きもきらず、編輯局一同歡喜勇奮

詳しい内容はぜひ裏面を御覧下さい！



――いかにもあの男のやりさうな事だ。

さうだ。あの男に違ひ無い！

彼は、そこに榎本欣助の生しろく膏ぎつた頰や、食肉鳥のそれのやうな貪慾な眼や、肉感的な厚い唇やを思ひ浮べた。欣助とは、大學時代に、一二年同じ教室に學んだ事もあり、友だちといふ程では無いが知合の仲ではあつた。禮吉にとつては、凡そ嫌ひな人間だつたので、さうした存在にはいつも顏をそむけるやうにばかりした。だから、榎本と聞いても、直ぐには思ひ出せ無かつたのであるが、おゝ！　あの人を苦めてゐるのは、あの榎本欣助だつたのか？　さう氣がついて見ると、彼は全身の血が一時にくわつと沸き立つやうな氣持がした。

さうわかつて見ると、彼はもう一刻も猶豫してはゐられ無かつた。禮吉は運轉手に命じて、自動車の方向を麴町の方へ變へさせた。麴町中六番町――榎本の邸の所在をうろおぼえの記憶の底に探りながら。

その邊に多い大邸宅の中でも、押しも押されもしない構への榎本の家を見つけるには、さう手數はかゝらなかつた。

門前で自動車を降りると、禮吉は耳門をあけて中にはひつた。植込の中に白々と浮んだ玉川砂利を踏んで玄關に立つた時、禮吉の胸は流石にわなゝいた。

取次に出た小間使に名刺を渡してから、やゝしばらくの間待たされたが、やがて請じ入れられたのは、玄關に續く應接間だつた。

あけ放たれた窓口からは、涼しい風が流れ込んで、白い紗の窓帷が、折々、明るく漲つたシャンデリアの光波を煽つてゐた。露臺に近い卓の上には、何か飲料をのせた盆などが置かれ、對ひ合はされた二脚の椅子にも、來客があつたらしい樣子が示されてゐた。さう云へば、玄關に立つて取次を待つてゐる間に、何か面白さうにさゞめき合ふらしい聲が漏れきこえたが、一方の聲ははなやかな女の聲であつた。それにしても、歸つた樣子もないのに、客の姿が見えないのが不思議だつた。

『やあ！』

さう云ひながら、はひつて來た欣助は、浴衣の着流しで、片手に團扇を持つてゐた。

『珍らしい人が見えたもんだ。どうした風の吹き廻しなんかね？』

と、欣助は、にこ〳〵と笑ひながら云つた。

稀に會ふ人に對しては、打解け過ぎた言葉附なり態度なりであつた。そのぞんさいさは、しかし、好意のあらはれであるよりも、むしろ彼のもちまへの尊大さを示すものに外ならなかつた。

『遲くなつてからお邪魔をして濟まないです。』

禮吉はぎごち無く云つた。

『いや。――だが、ずゐ分久振だね。まあ、こつちへ來給へ。こゝの方が涼しい。』

欣助は、窓際の椅子へと禮吉を導いた。そして、自分は兩脚を踏みはだけるやうに、行儀わるく腰をおろした。

『實は、突然、妙な事でおうかゞひしたんですがね。』

『ほう！ 何か僕に御用なんかね。』

さう云はれて見て、禮吉は、あまりに不用意に飛び込んで來た事に氣が附いた。このむつかしい用件の爲めには、もつといろ／＼策を講じる必要があつたのだ――。だが、斯うなつてはもう一直線に目的に向つて進むより外無かつた。禮吉は腹を据ゑ、まともに相手の顔を見つめながら云つた。



『妙な事なんです。いや、はなはだ不躾な話で、少し言ひにくいんですがね。僕は誠意を披瀝して君にお願ひするのです。』

『何だか大へんむつかしさうな話だが、まあ話して見給へ。』

『ぢやあ率直に申上げますが、君は今ある女の人を世話をしていらッしやるでせう。實はその女の事でうかゞつたのです。』

『ある女を？ 僕が世話をしてゐるッて？』

欣助は、さも不思議な話を聞くといふ顔附で問ひ返した。

『さうです。君が世話をして居るその女の事です。その人に是非會はして貰ひ度いのですがね。――ある事情があつて、是非その人に會はなき

やならないんです。』

『僕が世話をしてゐる女――なんて、どうもをかしいですね。』

欣助はしらを切つた。

『名を云ひませうか？　鏑木しげ子。鏑木しげ子と云ふ女の人に是非會はして貰ひ度いのです。』

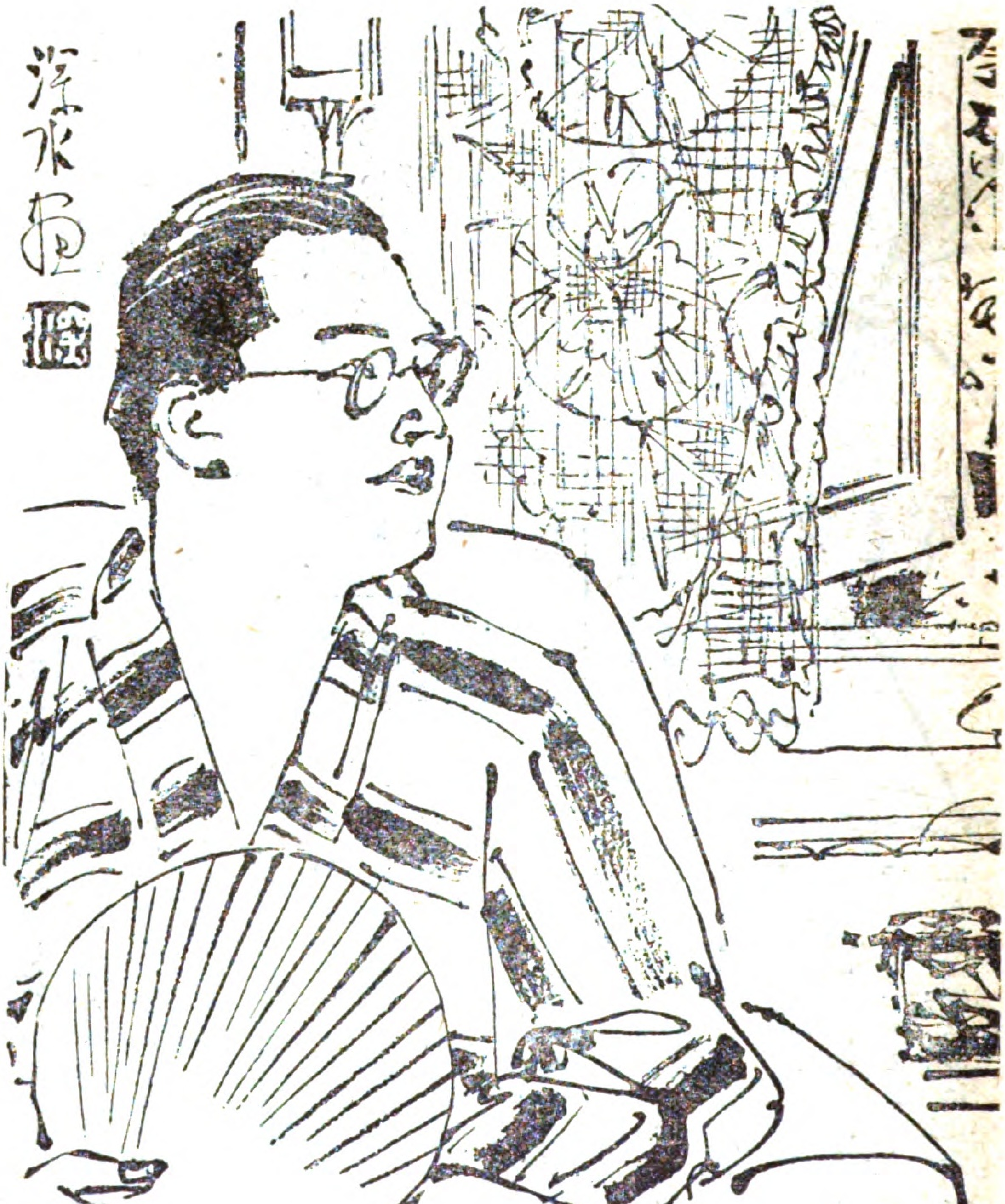
『鏑木しげ子なんて、まるきり知らない名だな。どうもをかしいな。』

と、欣助は首をかしげたりして、

『君、そりやあ何かの間違ひぢや無いんかね。』

『君は、鏑木しげ子を知らないといふんですか？』

『知らないね。』



『そんな筈は無いんですがね。どうして君は隠すんです。』

禮吉は思はず昂奮して云つた。

『些とも隠しなんかしやしない。君が勝手に一人定めに定めてそんな事を云つても、僕が知らないものを仕方が無いぢや無いか？』

欣助の口もとには冷笑が浮んだ。

『本當に君は知らないんですか？』

『知らないね。君は何か飛んだ思ひ違ひをしてゐるらしいよ。』

冷然として云ふ欣助の顔を、禮吉はじりじりとした眼眸で睨みつけるやうにしたが、その時ふと禮吉の心を、疑惑の影が掠

めて過ぎた。榎木といふ苗字は世間に澤山ある。此の男だと思ひ込んだのは速斷だつたのぢや無いか知ら？ 此の男の云ふ通り、自分は飛んだ思ひ違ひをしてゐるのぢや無いか知ら？

禮吉の顔に躊躇の表情が浮んだのを見てとると、欣助はにやりと笑つて云ひ續けた。

『鏑木しげ子なんて、僕あそんな女の事は何にも知らないんだが、一體、その女は君とどういふ關係の女なのかね？』

『別にどういふ關係ッて事も無いんだが、是非會つて話し度い事があるんです。』

『何の關係も無い女に會つて話し度いといふのはどうもをかしいね。は、は！ 君こそ隱しちやいけない。その女が君の戀人か何かで、君が血眼になつてその女を探してゐるとでも云ふんだつたら、僕は大いに同情するがね。』

『いや、そんなわけぢや無いんです。』

『そんな譯で無かつたらどんな譯なんです？』

『君は本當に知らないのですか？』

『全然知らないのだ。僕は全然知らないんだが、その女が、ぢや何人かの圍ひ者にでもなつてゐるといふのかね？』

『鏑木しげ子といふ女に、小石川の林町に家を持たせて居たのは、ぢやあ、本當にあなたぢや無いのですか？』

『僕ぢや無い。それは僕ぢや無いが、しかし君、君は、そんな人の妾になんかなつた女にどうしてそんなに執着をもつてゐるのかね？』

『執着を持つてゐるわけぢやあ無い。たゞ、是非會つて話し度い事があるのです。』

『どんな話だね？』



『それは、あなたに云ふ必要は無いと思ひますがね。』

『は、は！ まあ、そんなにはにかまなくてもいゝ。君は矢張その女を愛してゐるんだよ。それは君の顔を見たばかりでもわかるんだ。』

と、欣助は意地わるくからかふやうな調子で云つて、

『だが、僕あ君に忠告し度いね。そんな女は



まあ思ひ切る事だ。人の妾になつてる女なんか愛したつて馬鹿らしいぢやあ無いか？』

『本當の愛の前に、人の妾だらうと何だらうと、そんな事は問題ぢや無いんだ。』

禮吉は我知らず激越な調子になつたが、

『は、は！』

と欣助は嘲るやうに笑つて、

『本當の愛の前に――か。とう〱語るに落ちたね。だが、若しそのもう一人の方の男も矢張、その女を本當に愛して、その女と正式に結婚しようとしてゐるとしたら、君はどうするね？』

さういふ欣助の顏に、禮吉は複雜な表情を讀んだ。さうだ！矢張、此の男だ。此の男に違ひ無いのだ。

『ぢやあ、君は――。』

と、禮吉はいら立たしく云つた。

『君は本當にあの人を愛してゐるといふのか？』

『何だつて？――いや、僕あ、今云つた通り、君の云ふその女の事なんかまるきり知ら

無いんだ。たゞ、假に然ういふ場合を考へて君に訊いて見たばかりだよ。』

『いや、君はとぼけてゐるのだ。あの人の妹と僕は會つたのだ。その妹の口から、たしかに聽いたのだ。』

『何人に會つて何を訊いたのか知らないが、それは君の誤解だよ。僕あ何にも知らないんだ。』

欣助は飽迄も白々しく突ッぱねた。

禮吉はきッと唇を嚙みしめながら、燃え輝く眼で、あくまでもとぼけおほせようとする欣助の顏を見つめてゐたが、

『いや、突然やつて來てこんな事を云つたんで君もずゐ分不愉快だらうけれどね、僕の云ひ方が惡かつたらゆるして呉れ給へ。僕があの人に會ひ度いのは、愛とか何とか、そんな問題でぢやあ無いんだ。あの人の一身上に就いて、ある人から賴まれてゐるのだ。ある人の賴みによつて、僕はあの人を探してゐるのだ。たゞ、一寸會はせて貰ひさへすればいゝのだ。あの人は何處にゐるか、あの人の居るところを敎へて呉れ給へ。あの人の小さい妹も、あの人の事をひどく心配してゐるのだ。』

訴へるやうな調子になつて云つた。

『折角だけれど、本當に僕あ何にも知らないんだよ。』

『どうしても知らないと君は云ふのか？』

『知らないのだ。』

『君は、あくまでもしらを切るつもりなのか？』禮吉は再び氣色ばんだ。

『しらを切るにも切らないにも、知らないものは知らないと云ふ外無いぢやあ無いか？』

激しく燃えせまる禮吉の眼を冷やかに見返しながら欣助は云つた。

二人は無言のまゝ、しばらくの間激しい睨み合ひを續けた。

『よろしい！』

と、禮吉はやがてきッぱりと云つた。

『君が飽くまでもしらをきるといふんなら、僕としては別に手段をとらなきやならない。僕は君に云ふが、どんな事をしてでもあの人は屹度僕の手に取返して見せるから――』

『取返すッて？　は、は！　もし、その女が僕の手にあるとしたら、僕だつて然うやみやみと取返されなどはしなからうよ。』

『いや、もう君に云ふ事は無いんだ。ぢや、僕は失敬する！』

禮吉は椅子から立ちあがつた。

『歸るのかい？　まあ、いゝぢやあ無いか？まだ早いんだからもう少し話して行き給へ。どうだね？　何か訊くのありさうなその君の戀愛事件を、改めて話して呉れ無いかね？――君の愛人は病氣で亡くなつたとか聞いてゐたが、今の話のは、ぢやあそれ以後のなんだね？　どうもなかなか大變早いね。』

『何を云つてゐるんだ！』

禮吉は激しく叩きつけるやうにいふと、くるりと脊を向けて扉の方へ歩き出した。

『歸るのかい？　は、は！　君は怒つたのかい？』

欣助は禮吉を送り出しながら、その脊に冷たい嘲笑をあびせかけた。

禮吉を送り出して、欣助が元の應接室に歸つて見ると、そこに藤原藤代が、水色のワンピイスに豐滿な身體を包んで笑ひを含んで立つてゐた。——藤代は、露臺に出て、そこで、二人の會話をすつかり聽いてゐたのであつた。

『ほ、ほ！　もう歸つちやつたのね？』

『ふん！』

と欣助は鼻の先で笑つた。

『駄目よ。しらを切るならもつと上手にやらなきや——。』

藤代は笑つて、

『だけど、何だかかあいさうだわね。あんなに一生懸命に探して居るのにさ。』

『いやに同情するんだな。』

『同情なんかしやしないわ。だけど、榎本さん！　本當に何處に隱して置いてあるの？』

『それを君に云つたら、君はあの男の許へ知らせてやるかも知れんからね。』

欣助はにやくと笑つた。

『斷じてそんな事はしなくてよ。私あんたの味方よ。』

『さうかな？』

『然うよ。——だけど、餘つぽどしつかりしてゐないと、あの人に取返されてしまつてよ。』

『馬鹿な！　あんな男なんかに大事な玉をさうやみくと取返されてたまるもんか？』

『大事な玉だつて？　ほ、ほ！　あんた本當にあの人に惚れちやつたのね？』

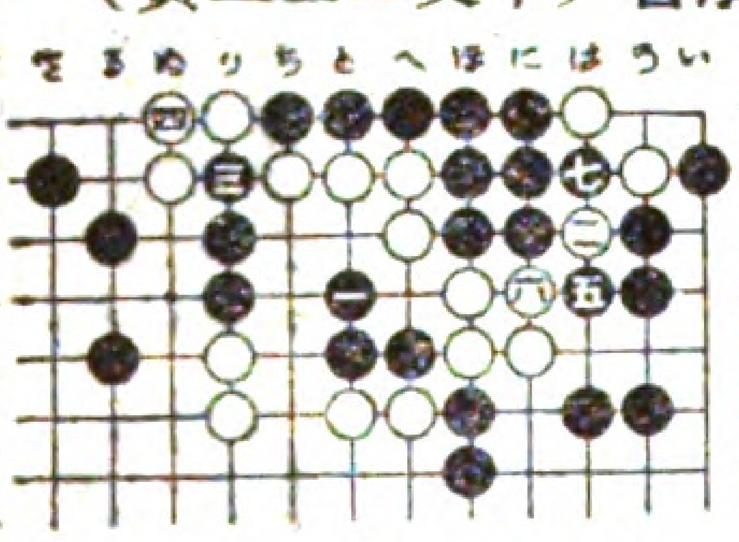
『然うかも知れないね。いや、對手が彼の男だとわかつて見りやあ一層の事あの女を手離す事あ出來無くなつた。僕あ、どんな事があつても、あの女と結婚するよ。』（つゞく）

娛樂室解答（本文二三二頁）

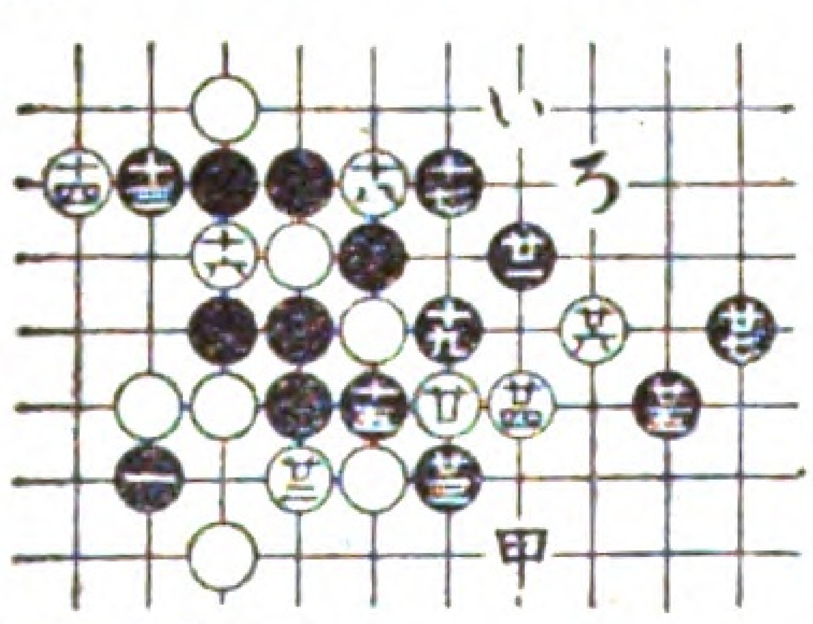
詰碁解答

黒先白死

白八。二ノ處　白十。ニノ三
黒九。ニノ二　黒十一。七ノ處



聯珠の解



◎黒（廿七）と打つて次は『甲』で四三勝白が其筋を止めれば（廿九）から『いろ』の四追で勝

△此變化を詳しくすればなかく複雜しますから略しますが。大略を記せば黒（十三）と引て（十四）の止めを餘儀なくさせ……（十九）と四追含みに打ち（廿一）と引いて白に（廿二）の四三含みを打たせて（廿三）と止め・からの四追含み等等双方に共妙味のある珠順に運ばれて居ます。

詰將棋解答

△三七銀▲二九王△三九龍▲同王△二八銀▲二九王

△一八銀▲同王△二七と▲二九王△二八と▲三九王

△五八桂▲或は又。△三七銀の時▲同桂△同と▲

△一七王△二七銀▲　△　▲　△　▲



探偵實話

巴里の大強盜團

大下宇陀兒
挿繪　椛島勝一

（一）

その頃——といふのは、今日探偵の父祖として仰がれてゐる、イー・エフ・ヴイドック探偵が巴里警視廳にあつて數多の難事件を片端しから解決し、その名聲日に日に揚がりつゝあつた頃のことなのだが、當時、流石のヴイドック探偵でも、ほとほと手を燒いてゐる一つの事件があつた。

巴里全市民の心膽を寒からしめた、凶惡無双、然も眞に神出鬼沒を極めた強盜團の出現がそれである。

手口などから見て、それが決して一人や二人だけの強盜でないことは分つた。少くとも十數名協力一致しての犯罪ではあるらしかつた。が、それにも拘らず、警視廳では、その仲間のたつた一人をも捕まへることが出來ない。

今日は或る富豪の邸宅が襲はれたかと思へば、その翌日はすぐと或る大銀行の金庫が破壞される。さうして、それらの被害報告は毎日のやうに警視廳へ送られて、その報告書だけが机上に山をなす有樣。

係官達は終日この事件に沒頭し、あらゆる方面から對策を練つたが、強盜團の活動は一向に竭まない。係官達は萬策盡きて、遂には警視廳備付けの前科者名簿などを持出して來て、その中から怪しさうな奴を選み出し、それを片端しから克明にひつくゝつては調べても見た。すると又、中にはなるほどいかにも強盜團の一味らしい、妙に怪しい奴がないでもないが、といつて、これが調べを進めるに從つて證據が薄弱になる一方。結局は折角檢擧しても大抵が證據不充分の放免となる。遂に名探偵ヴイドックすらが、全市民の輿望を裏切つて、殆

んど何等の見込みを立てることが出來ず、強盜團の跳梁跋扈はやがてその極に達せんとした。

　この痛快を極めた探偵事實譚は、この時に端を發するのである――。

（二）

『兄貴、コンスタンチンの親分に會つて見ねえか。』

『なに、コンスタンチン？　いつたいそれアどんな男だ。』

『どんな男かつて、それア會つて見さへすればすぐに分るが、何しろ大した親分だぜ。惡いこたあ言はねえから、一度顏を合はせて置きねえ。』

『さうかい。それほどお前が言ふんなら、ちつたア骨のある男だらうて。よオし、それぢア都合のいゝ時に會はせて呉れ。』

　或る晩、それは巴里でも無賴漢共の寄り集まることで有名だつた或る料理店でのことであつたが、そこの一隅の卓子に席を占め、こんな風に話し合つてゐる二人があつた。

　一人は惡賢こさうな小若い男、他の一人は相當年配の痩せこけた、眞黑な顎髯を茫々と生やした男である。

　小若い方は、名前が遺憾ながら知れてはゐない。が、他の一人は仲間うちからヂャーメンと呼ばれ、又綽名を「大將」などとも呼ばれてゐた。そのヂャーメンに、小若いのが、コンスタンチンといふ男を紹介しようといふのである。

　こゝで少しくこのヂャーメンといふ男について説明して置けば、これは近頃めき／＼と仲間うちに賣出して來た男であつた。

　初めのうちは、一人つきりでこの料理店へ來ては下等なジン酒をグビリ／＼と飮んでゐた。前言つた通り氣味の惡いほど痩せこけてゐて、唇の色もあまりよくない。それでどこか病人ぽいところさへあるのだが、元氣のあることは驚くばかり、それに仲々氣前がよかつた。懷中にはいつも不思議なほどの金を持つてゐて、酒を仲間に惜氣なく振舞ふ。忽ちそれが皆んなの人氣を集中し、彼が料理店に姿を現せば、すぐと二三人の仲間が蠅の如く寄つて來るやうになつたのである。だんだん聞いて見ると、彼は最近まで何かの重罪のため囚はれて、鐵製の鎖を足頸に篏められ、奴隷同樣に或る船の櫓をさせられてゐたとのことであつた。その刑期が充ちて放免されたのか、それとも刑期中に脱走して來たのか、その點はいづれとも分らない。が、兎に角、彼の足頸には兩方とも、その鐵の鎖の痕が殘つてゐた。その傷痕が今では痛々しい水虫に變つて、ジク／＼と膿のやうなものが始終流れ出してゐる始末。

『兄貴、痛かねえか。』

と仲間が訊くと、



『フン、足頸のちつとやそつと痛え位、娑婆にゐられさへすれア忘れてゐるよ。』

彼はそんな風に答へてゐたものなのである。が、そこでかうしたヂャーメンに、今、仲間の一人が紹介しようといふコンスタンチンとは何者なのか。折も折、二人がそんな話をしてから間も無くのこと、その料理店へは、年頃三十がらみの、がつしりした恰幅の男が這入つて來た。

するとそれを見た小若い男が、すぐにヂャーメンの耳に口を寄せたのである。

『兄貴、來たぜ。』

『何が來たんだ？』

『コンスタンチンの親方だよ。元はね、何でも劍術の師匠をしてゐたとかいふんだが、兎に角、挨拶だけは通して置きねえ。』

見ると、そこに居合せた無頼漢達は、コンスタンチンに向つてペコ〳〵と頭を下げ、只管彼の機嫌を損ぜぬことに勉めてゐる。いかさま、この界隈に名を知られた大親分らしい。

『なるほど、大したものだナ。』

チャーメンは呟くやうにか



う言つたが、やをら立ち上ると、ツカ〳〵とコンスタンチンに近付いた。

『兄貴、一つ煙草の火を貸して貰ひ度えんだが——』

恐れ氣もなくかう言つたヂャーメンの言葉に、コンスタンチンは一寸吃驚したやうに振向いて、ぢつとヂャーメンの顏を見詰めた。

『どうしたい兄貴、火を貸して貰ひ度えと言つてるのだぜ。』

ヂャーメンはコンスタンチンの手にした煙草を、遠慮もなくぐいと引寄せて自分の口へ持つて來る。

コンスタンチンの顏に、見る〳〵豪快な笑ひが浮んだ。

『面白え！』

彼はかう言つて、ドシンとヂャーメンの肩を叩いたのである。

『兄弟、お前は大した度胸を持つてゐるね。うん、大いに俺ア氣に入つたぞ！』

（三）

同氣相求むるとでもいふものか、かくして最初の出會で忽ち打解けて了つたヂャーメンとコンスタンチンとは、それから後

日を經るに從つて親密の度を增して行つた。

チヤーメンがコンスタンチンを誘つて酒場から酒場へと連れ廻せば、コンスタンチンはチヤーメンを晩餐に招待し、この席で彼の乾兒を一人一人、チヤーメンに紹介した。

その乾兒にはジユーベルトといふ男を筆頭に、五人の主だつた無頼漢がゐたが、彼等も親分同樣、チヤーメンに對しては一目置いた。その膽力、その勢力から言つて、チヤーメンはコンスタンチンの乾兒として迎へられたのではあつたが、乾兒達の中では、彼が一躍して親分の一の腕と頼まるるに至つたのである。

チヤーメンたるもの、かくまでにコンスタンチン一味から好遇されては、又人一倍の忠勤をも勵まねばならぬ。彼は常に、『親分のためにならば、どんな荒つぽい仕事でも行り遂げて見せる。それには乾兒達の力を決して借りない。必らず自分一人で行つて了ふのだ。』と豪語してゐた。といつて、彼等が知合になつてからかなり久しい間、生憎にもさうした種類の仕事は一向に起つて呉れなかつたのだが、そこで或る日のことである。コンスタンチンがふと次のやうに言ひ出した。

『オイ、チヤーメン、俺は久しぶりで大仕事をやらうと思ふ。お前、一緒にやつて呉れるか。』

『やるとも！』チヤーメンはすぐに答へた。『俺ア退屈で困つてゐたところだ。何なりとも御手傳ひをさせて貰ひ度えが、兄貴、その大仕事といふのはどんなことだ？』

『なにさ、その仕事といふなア他でもねえ。早い話が押込みなんだ。お前しかし、さうと聞いて尻込みなんかしやアしめえな。』

『押込みと言へば强盗だね。うん、そいつは仲々面白さうだ。だが兄貴、俺が何故尻込みをするつてんだい？』

『大抵は大丈夫だと思ふけれど、ほら、この一件についちア、ヴイドツクといふ奴が躍氣になつて騷いでゐるぜ。』

ヴイドツクと聞いて、流石のチヤーメンも少しばかり顏色を變へたが、忽ち又カラ〲と笑つた。

『兄貴、冗談も休み〲言つて呉れ。なるほど、俺だつてヴイドツクの噂ぐれえは知つてるんだ。が、彼奴だつてまさか生きてゐる人間で無えことはあるめえ。』

『何、何が生きてゐる人間ぢアねえといふんだ！』

『つまりよ、ヴイドツクだつていつかは死ぬ時があるだらうと言つてるのさ。定命で死ぬか、それとも誰かの手で殺されるか、どうせ二つのうちの一つなんだ。兄貴、一寸待つてゐて貰はう、俺がちよいと行つて片附けて來よう。』

大膽といふのか無謀といふのか、チヤーメンはすぐにヴイドツク探偵の邸へ押しかけた。そしてそれから數日間といふも

の、邸外に現れるヴイドツクを待ち伏せした。一擧に彼の息の根を絶たうとしたのである。

尤もこの時は、それに氣付いたものかヴイドツク探偵、何處かへ姿を隱して了つて邸外へは一向に姿を現して來ない。

それでもチヤーメンが根氣よくヴイドツク邸を窺つてゐるのを見て、待ち切れなかつたせゐもあらうが、コンスタンチンは遂に言つた。

『いよ〳〵チヤーメン、何もヴイドツクを殺さなくてはならぬこともねえ。奴もこつちを怖がつてゐるんだ。それよりか一つ、手取り早いところで、仕事の方をやつて了はう。』

チヤーメンもそこで答へた。

『よからう。大いに贊成だ。この俺だつて、何もヴイドツクを殺さにやならんとも思つてはゐねえ。只、兄貴が彼奴を怖がつてゐるから、一寸安心をさせてやりてえと思つただけだ。奴が逆に俺達を恐れて姿を隱してゐる間に、一つ、その大仕事といふのをやらうぢやねえか。』

(四)

名探偵ヴイドツクが姿を隱してゐたのは、果してコンスタンチンやチヤーメンの一味を怖がつてゐたためであらうか。それとも又、何かひそかに畫策するところがあつたのであらうか。

コンスタンチン、ジユーベルト、それにチヤーメンの加はつた一味こそ、巴里警察が血眼で探してゐた大規模の強盜團であつたことはいふまでもない。實は警察當局でも、このコンスタンチンといふ男については、最初から薄々怪しいと思はぬでもなかつた。が、悲しいことには前言つた通り、そこに確實な證據といふものが一つもない。それで已むなく手を附けずに置いたものなのである。姿を隱してゐたヴイドツク探偵が、その間に何か畫策してゐたであらうことを、讀者諸君も多分御推測になる筈である。

それは兎に角、かくしてチヤーメンがヴイドツクを附け廻してから數日の後、彼等の一味は愈よ仕事にかゝることになり、そしてそれには、先づ首領の隱れ家へ集合し、種々の手筈が打合されることになつたのだつた。

その打合せの會合には、集まるものヂヤーメン、ジユーベルトを初めとして主立つた乾兒七八名。コンスタンチンが議長格で、乾兒達はぐるりとそれを取卷いてゐた。表面は親しい者同志の何氣ない會食のやうに見せかけて、その實は殆んど軍律的嚴格さと緻密さとを以て、押込强盜の手順が協議されるのである。

例へば、目差すのは巴里シヤンゼリゼーに宏壯な邸宅を構へてゐる或る大銀行家であることが、首領コンスタンチンから初

めて打明けられ、それには又、銀行家の邸へは、彼等と氣脈を通じた一人の女が女中として既に棲み込ませてあり、充分に手引のついてゐること、邸宅へ這入るには、コンスタンチンが常に『錠前屋のお孃さん。』と稱して肌身離さず持つてゐた萬能鍵が使用されることなどが話された。

續いて又、一味のもの〻役割としては、先づコンスタンチンに率ゐられる一隊が眞先きに忍び込み、主人銀行家を初め家人の誰彼を容赦なく縛り上げて了ふこと。その間に、他のジューベルトを頭とする一隊は、どし〳〵と財寶を邸外に擔ぎ出して來る。さうして一方チヤーメンは、仕事の間邸外にあつて、主として警戒歩哨の任に當り、若し萬一にして彼等の擧が當局の者に嗅ぎつけられ、警官隊でも押し寄せて來るやうな場合になれば、或は極力その防害に勉め、或は素早く彼我勢力の優劣を看てとつて、一同に引揚げの合圖をする。――凡てそれは、後になつて發表されたところなのだが、彼等が容易に尻尾を現はさなかつたのは無理もない、彼等は常に仕事にか〻る前、このやうにして微より細に渡る、あらゆる手順を定めたものなのである。

協議が一通り終ると、コンスタンチンは最後に言つた。

『よオし、それだけして置けばヴィドツクなんか百人來たつて大丈夫だ。が、皆んな確乎りやつて貰はなくちやいけない。決してへまをやらないやうに。それから猶一つ言つて置くが、この中に若し一緒に仕事をやるのが厭だとか、或は又裏切りでもしようといふ者がゐるんなら、こいつは今のうちに遠慮なく名乘つて出ることだ。場合によつては器用に仲間から除いてもやらうし、又、いつもの通り素晴らしい御馳走を喰はしてもい〻。』

これも矢張り、コンスタンチンが常に並べる凄文句なのである。

その座にあるものは、一人一人、仲間を裏切らないといふ宣誓をした。詳しくは分らぬけれど、その宣誓の樣式も又一風變つた物凄いものであつたのであらう。

宣誓が濟むと、あとは少時の間、前祝ひの意味の酒宴である。宴の果てる頃から、乾兒達は一人づつそつと座を外して、コンスタンチンの隱家を出て、目差すシャンゼリゼーへと向つたのであつた。

（五）

夜の散歩を娯しんでゐるやうな男、又は何かの用事を、深夜になつて急に思付いたといふやうな顏をした男、さうした怪しげな人物が二三人づつ、何處からともなくシャンゼリゼーの街へ現れて來たのは、この夜も眞夜中に近くのことである。

『いゝか、皆んな來てゐるか。』

とある建物の蔭で、首領コンスタンチンは役付きの乾兒を呼び集め、こんな風に念を押した。

『大丈夫です。皆んな合圖のあるのを待つてゐます。』

『ジューベルトもチャーメンも準備はいゝな。そして、ポリの手が廻つたやうな氣配もないな。』

『至極安全です。誰も怪しい奴なんか見ませんでした。』

『よオし。ぢア一つ始めるぞ。』

ヒソ〳〵とこんな會話が取交されると、總ての手筈通り、一同は銀行家邸宅の中庭へ這入る門の方へ廻つて行つた。そのうち二人が龕燈をぶら下げ、コンスタンチンはギラ〳〵と光る短銃を握つてゐた。そして一様に、黑いマスクで覆面をしてゐたのである。

門は錠が下りてゐたけれど、コンスタンチンが例の『錠前屋のお孃さん。』で少しばかりカタコトとやつてゐると、すぐにそれが外れて了つた。

が、生憎なことには内側から閂が入つてゐて開けることが出來ない。

『畜生め！』コンスタンチンは、手引をする筈だつた女中のことを思出して呟いた。『奴、うつかりしてゐて、閂を拔くことを忘れやがつた。』

『女中が裏切つたのぢやアないだらうか。』

『なアに、あの女だつて命の惜しいこと位知つてゐる。裏切りなんかするものか。――仕方がねえから塀を越すんだ。』

チャーメンも手を貸して、一同は塀を乘り越えて這入つて行つた。そして、チャーメンだけは、弓なりなつた塀の一部、恰度建物の影が落ちて暗くなつた處へ一人殘り、街の方を見張りした。

『いゝかいチャーメン、お前の役目が一番重大なんだ。』

『いゝとも。何もかも俺が心得てゐるよ。』

馴れてゐるだけに仕事は早い。彼等はそれから忽ちのうちに庭へ面した窓硝子を切り取り、一人が先きに忍び込んで掛金を外しそしてドヤ〳〵と中へ入つて行つた。

少時の間、カチャ〳〵と金屬の觸れ合ふやうな音がしたり、低く押へつけるやうな聲が聞こえて、頻りと邸内を物色する樣子。

やがて間もなく、一人の奴が重たさうな袋を肩にして庭の方へ出て來たのだが、するとその時のことである。

塀にまたがつて街の方を見透してゐたチャーメンが、その男に向つて鋭く言つた。

『オイ、早くしろ。ポリスの奴がやつて來る。とても敵ひさうもねえ位に手が廻つてるんだ。親分に早く告げて來い！』

豪膽を以て鳴るチヤーメンの言葉に、一種の差し迫つた急を告げる響があつた。男はあたふたと邸内へ取つて返し、續いて一同、ドヤ〳〵とチヤーメンの見張場所まで逃げて來た。

『どうした〳〵、ポリスの奴は？』

『叱ッ！　向ふにゐるんだ。早くしろ！』

『逃げるのか。』

『さうだ、手が廻り切らねえうちに、俺の行く方へ隨いて來い。さもなきアすぐとふんづかまるぞ。』

チヤーメンの言つたことは本當である。

この時、早くもこのことを知つた警察官の一隊は、手に手に武器を携へて、シヤンゼリゼーの大通り附近を、犇々と取卷いてゐたのである。チヤーメンの指差した彼方には、その前哨を勤める警官が、ぢつと佇んでこちらを見てゐた。



『オイ、何をしてるんだ！　そんな姿なんかいゝ加減なところへ放つて置け。早くしないと間に合はないぞ！』

チヤーメンはかう叱咤してスル〳〵と塀にそつて走り出したのだつた。

（六）

いつたい、どうしてその筋の手配がかうも早く廻つたのか、誰も考へてゐる暇などはなかつた。それから後彼等は、ヂャーメンの導くまゝに、五つ六つの横町を過ぎり、ひたすらに足を急がせた。

幸にもその間警官隊の追跡は急激でない。一同が闇に紛れて逃げ去つたのを、まんまと見失つて了つたやうにも見える。やがて彼等は、とある一軒の空家の前まで出たのであるが、その時ヂャーメンは、一時こゝへ身を隠した方がいいと言ひ出した。聞いて見ると、それはヂャーメンがずつと前に少時住むでゐたことのあるアパアトだといふのであつた。家具も何も置いてない、ひどくガランドウなアパアトではあるが、この際何よりも屈竟な隠れ場所である。彼等は跫音を忍ばせてそのアパアトの階段を上り、行詰まりのやうになつた一室へ這入ると、そこで漸くホッと息をついたのだつた。



『豪い目に遭つちまつた。ヂャーメン、よくお前は氣が付いたなア。』

最初にふとかう言つたのはコンスタンチンである。



その言葉でやつと落着いた乾兒達も、續いて口々に、チャーメンの處置が素晴らしく氣が利いてゐたと言つて賞め出した。そして又、警察の手配がどこからついたのかを不審がり始めた。流石のコンスタンチンも、これには尠なからず驚いたらしい、彼は只『そんな筈はねえんだが、しかし手配のあつたことは慥かなのだし――』と同じ言葉ばかりを繰り返し、中には又、銀行家の女中が怪しい、門に閂をしてあつた點もあるし、あの女が裏切つたのに違ひないと、そんなことを熱心に主張する者もあつた。

　さうして、その中にあつて只一人、默々と彼等の昂奮したお喋りを聞いてゐたのがチャーメンである。

　彼は、一同をそこへ連れ込んだ後、自分は入口の扉に近く座を占めて、殆んど一言も喋らずにゐた。時々、瞳を鋭く光らして、何かの物音をぢつと聽き取らうとする風が見えただけである。

　そのうちにコンスタンチンが、ふとそれに氣付いて言つた。

『どうしたんだチャーメン、妙に考へ込んでゐるぢアねえか。お前は前にこゝで住んでゐたつていふことだが、何か



思出したことでもあるといふのか。』

『なーに、思出すことなんかありアしねえ。』チャーメンは苦笑しながら答へた。『只ね、こゝの部屋は、まるで鼠落しのやうな部屋だと思つてゐるんだ。』

『鼠落しだつて、フン、どうしてそんな氣がするのかね。縁起の悪いことを言ふもんぢアねえぜ。』

『いや、縁起が悪くつても仕方がないのだ。鼠落しに違ひない。』

『何故そんなことをお前は言ふのだ！』

『何故かといふと、俺にはどうもヴイドツクの匂がしてならねえ。ヴイドツクの奴が、こゝへ俺達を連れ込んだやうにしか思へねえ。この部屋は、これアヴイドツクの作つた罠なんだぜ。』

半分冗談のやうにしてから言つたチャーメンの言葉が、一同の胸をヒヤリとさせる。

『下らねえことを言ふなよチャーメン。おどかしつこたしにして置かうぜ。』乾兒の一人が、わざとそんな風に言つて見たが、チャーメンは益々眞面目な顔になつた。

『いや、俺は冗談などを言ひはしない。慥かにこの部屋にはヴ

イドックがゐる。』

チャーメンはかう言ひながら立ち上ると、その部屋の窓を蔽つてあつたカーテンをサツとばかりに引き開けた。見ると、そこには短銃の口を一齊に室內へ向けた警官の一隊。

チャーメンの言葉通りに、早くも手が廻つてゐたのである。コンスタンチンを始め、一同がスハとばかりに逃げ出さうとすると、その時、初めてチャーメンが靜かに言つた。

『騷ぐな。ヴイドックは俺だ。チャーメンに化けて、お前達の動かせない證據を握らうとしてゐたのだ。手向ひすると爲にならんぞ！』

コンスタンチン等にとつては正に靑天の霹靂といふべきところ。

チャーメンこそ、實は名探偵ヴイドックの變裝したものだつたのである。

× × ×

巴里全市を脅かした強盜團逮捕の報が、ヴイドックの功績と共に廣く一般に知れ渡つたのは、それから間もなくの後である。その時ヴイドックの語つたところによると、彼は萬策盡きた後、自ら無賴漢の仲間へ這入つて手蔓を摑むより他はないと思つたとのことであつた。そしてそれには、幸にも當時刑期中に脫走して行方不明になつてゐた、チャーメンといふ男があつた。ヴイドックはそれに變裝したのであるが、變裝で一番困つたことは、ヴイドックが元來肥つた男であつたのに對し、チャーメンが見窄らしく痩せてゐたといふ一事である。そのために彼は殆んど絕食までして身體を痩せさせ、又髮の毛もチャーメンが眞黑な毛を有つてゐたので、染粉を使つて黑く染め、足頸には鐵の足枷の痕までも作つたのである。コンスタンチンが怪盜の正體であることを知りながら、何故すぐと逮捕しなかつたか、それは餘りよくは分つてゐない。が、多分彼は、一人づつ捕まへてゐたのでは、中に風を喰つて逃げるもの丶あるのを恐れ、一網打盡の計畫を樹てたのであらう。

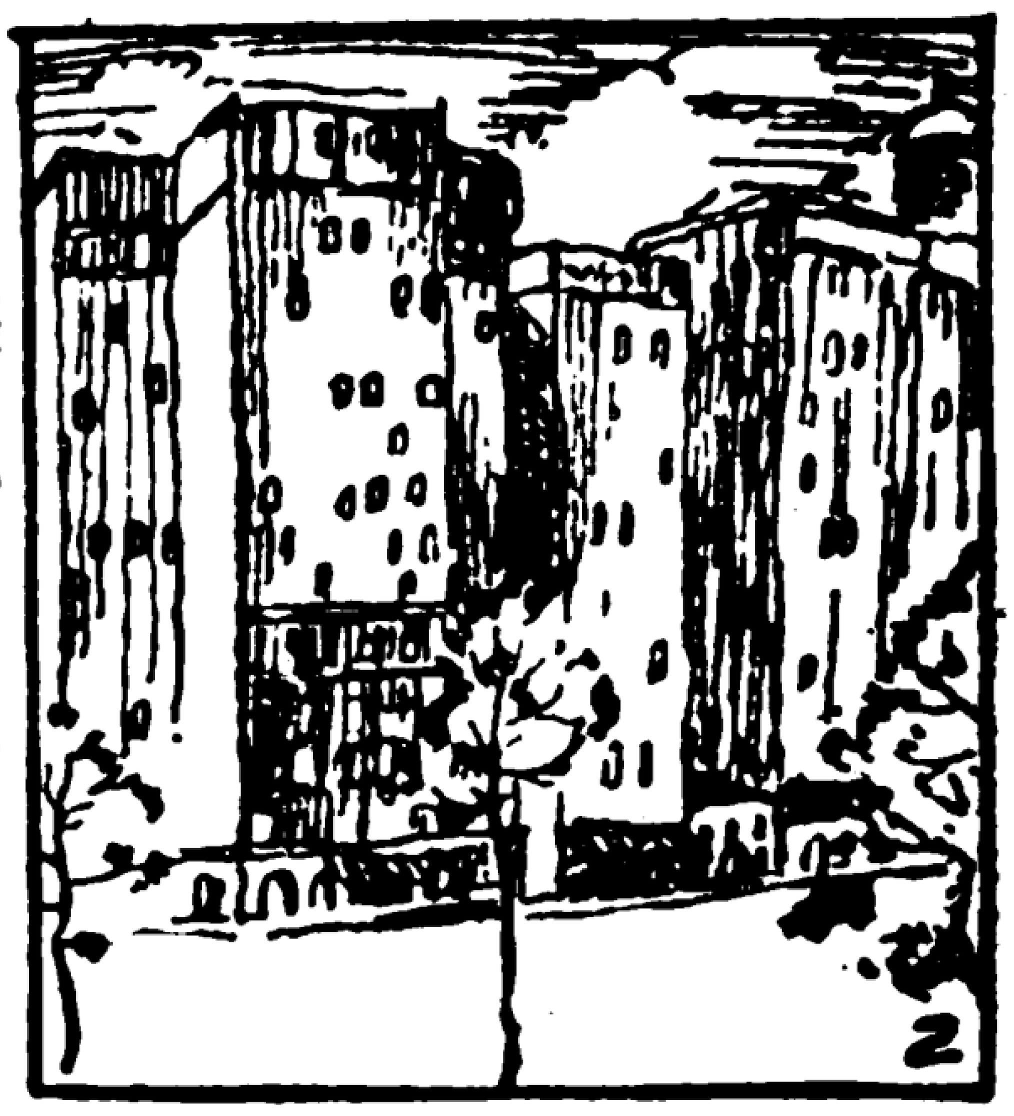
最後に言へば、筆者はこの話を少しく小說風に書き過ぎたやうに思ふ。が、多少の潤色はあるとしても、それが事實譚であることは慥かである。探偵小說界の泰斗コナンドイルの作に「恐怖の谷」といふ名作がある。讀んで見ると、筋が著しくこの事實譚に似てゐるのであるが、筆者思ふに、あの作は、ここにヒントを獲て書き下されたものではなかつたのか。――ヴイドックは、長いこと巴里警察で働いた後、一時私立探偵などをやつたこともある。一七七五年に生れ、晩年は割合に不幸で、一八五七年、貧窮のうちに死亡した。が、先にも一寸述べたやうに、今に至る探偵の父祖として仰がれてゐる人物なのである。

（了）

小ちんまり



〔1〕パパ『此處からお父さんの會社が見えるがどれかあてゝごらん』



〔2〕ドン『左に見える一番大きなビルデングでせう』パパ『まうちやない』ドン『ではその右の大きなの?』パパ『違ふ』

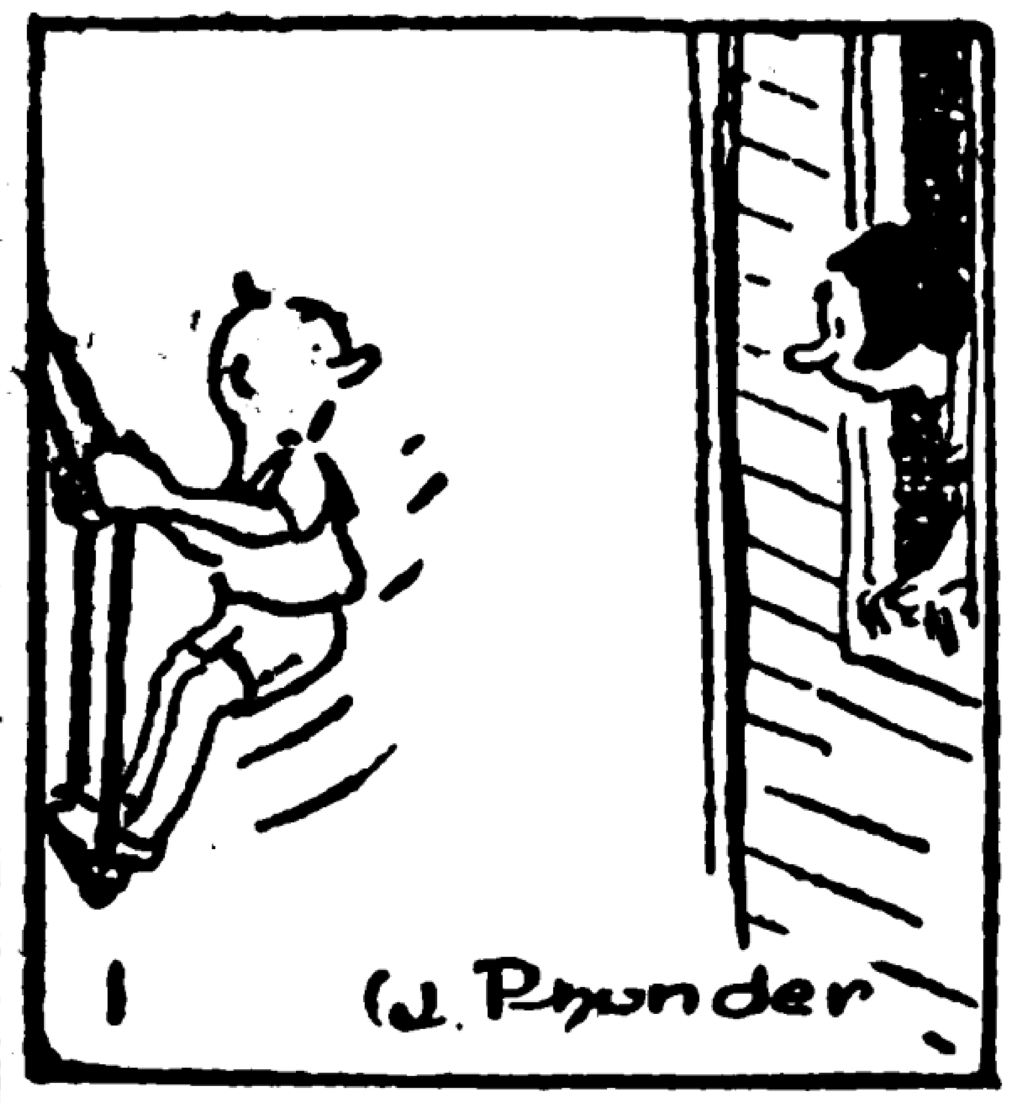


〔3〕パパ『ドンは矢張小供だネ、大きなのばかり見つけてる』ドン『では眞中にある横へ張つた小つぽけなお父さん見たいな建物』



〔4〕パパ『もう歸へらう! ドン』

お使ひ



〔1〕ママ『ドンやお怜悧だから八百屋までお使ひに行つて頂戴』ドン『ハイ』



〔2〕いつもの籠をもつて一目散に八百屋へ。



〔3〕ドン『サー八百屋に來た、エート、アノー???』



〔4〕ママ『八百屋で何を買つて來るやうに言つたつけ???』



風雲天満双紙

佐々木味津三
挿繪 小田富彌

怪教詮議

一

——かくとも知らずに怪しの女行者は、死人の枕元に座を占めると、携へてゐた袱紗包みの中から、先づおもむろに取り出したものは、二十五菩薩三十三觀音のうちにも、それほど異形な佛像はあるまいと思はれる不審な女體の白衣觀音でした。それだけすらもが奇怪なところへ、つゞいて女行者の取り出した品は、紛れなき銀の十字架です。しかもその十字架を白衣觀音の首に懸けると、自らもまた胸に十字を切つて、やゝ暫し怪しげな祈禱を捧げ續けてゐましたが、やがて、あたりを憚るやうに見廻し乍ら、こつそり懷中から取り出したひと品は、白色透明な液體の充たされた一箇のびいどろ罎でした。のみならずその液體を自身の口に含んで、死者の脣を押し開き乍ら近よると、口から口へたらたらと含んでゐた溶液を流し込みました。

と――怪と言ふよりも寧ろそれは、恐るべき靈力を備へた密教でした。殆んど二瞬とたゝないうちに、先づ唇、頰、手足に見る〳〵血色がきざして來ると、何たる不思議！ まさしく今まで死人に相違なかつたお千惠の兩眼が、ぱつちりと見開かれました。同時にむつくり起き上つて、夢から醒めでもしたかのやうに、きよときよととあたりを見廻してゐましたが、

『ま！ どうしたのでムりませう！ わたしはどうしたのでムりませう！』

怪訝にたへないもののごとく聲をあげたので、始終の容子を押入の穴の中から、まのあたり見届けた平八郎正一郎兩人の打ちおどろいたのは言ふまでもないことでしたが、その聲が襖の向うに聞えたとみえて、悅び上つたのは松兵衞一家の者達です。

『生き返へりましたか！ 娘が生き返へりましたか！』

をどり狂はんばかりに駈け込むと、

『有難うムります！ 有難うムります！ 千惠！ 千惠！ そなたもよくお禮を申せ！ 命拾ひを致したのぢや。よくお禮を申せ！』

行者の靈力に打たれでもしたかのごとく、そこへひれ伏しました。逸早くびいどろ壜を隱して、威嚴をつくろひ乍ら、待ちうけてゐた女行者は、怪しの白衣觀音を松兵衞の方へ押し戴くやうにふり向けると、一段と聲に勿體つけ乍ら、おごそかに言ひました。

『自らが力ではありませぬ。これなる豐國觀音の御靈力であるゆゑ、必ずともにこののちご信心致さねばなりませぬぞ。』

『へいもう、こんな嬉しいことはムりませぬゆゑ、娘めにもよく申し聞かせまして、今日からでも御信心致しまするでムります。』

『その言葉に詐りはありませぬな。』

『何の詐りがムりませう！ 一粒種の娘をお救ひ下さいました御恩人でムりますゆゑ、あなた樣の仰せには何なりとも隨ひまするでムります。』

『豐國觀音樣もそれ御きゝ給はゞ、さぞかし御滿足に思召すことでありませう。では、日を改めてまた參ります程に、今の約束忘れてはなりませぬぞ。』

行衣の袖を拂つて立ち上ると、怪しの女觀音を袱紗に包み捧げ乍ら、何喰はぬ顏で引揚げました。

と同時のやうに押入の中から氣色ばむで躍り出た者は、洗心洞黌門弟の大井正一郎です。

『何をおためらひでムりまするか！ 行者め、引揚げて了ひまするぞッ。』

促して、腰の脇差しに反りを打たせ乍ら、追ひ駈けようとし

たのを、だが、平八郎が鋭く呼びとめて制しました。

『ならぬ！　待てッ。』

『なぜでムります?!　すておきましたら、見す見す取逃がすではムりませぬか！』

止められたのを不服さうに振り切り乍ら、血氣にまかせてなほ追ひかけようとした正一郎を再び呼び止めると、不意に意外な言葉を言ひ放ちました。

『待てと言うたら待たぬかッ。逸まつて今うッかり手出し致さば、この平八郎詰め腹切らねばならぬやも知れぬわ！』

『えッ。——すりやまたどうした仔細でムります?!　たかの知れた女行者、それが眼前あのやうな怪しからぬ所業あつたではムりませぬか！』

『さてはまだ氣がつかぬと見えるな。もしや、さうではないかと、最初から疑うてゐたが、あれこそまさしく京都を今騒がしてゐる怪行者の豐田貢に相違ないぞ！』

『えッ！　さうでムりましたか！　あやつめが貢でござりましたか！』

ずばりと斷定した平八郎の一語をきいて、血氣一途の正一郎もしたゝかに打ちおどろいたもののごとく愕然と色を替へました。またこれはいかな正一郎とても色を替へるのが當然でした。眞實行者が豐田貢であつたら、智慧者揃ひ腕利き揃ひと言はれてゐる京都所司代付の與力番士達を向うに廻はして、二度も三度も手を燒かせた容易ならぬ妖術者だつたからです。いや啻に手を燒かせたのみならず、今のごとき妖術を使つて、怪敎を流布するとの嫌疑のもとに所司代詰の與力達が手入れを行つた際、佞辯邪智を奮つて巧みにその犯行犯跡を晦ましたばかりか、不埒至極にも前以つて九條家へ取入り、そのお出入り允許狀を要意してゐたため、手入れに從つた怪敎吟味の首席與力二人が、五攝家出入りのお許しある者を猥りに問責したとの罪をうけ、むざむざ詰め腹切らされた事實がありましたので、さすがの荒門弟正一郎も、それと對手の正體知るや、今さらのごとくに色を替へ乍ら言ひました。

『容易ならぬ奴が敵に廻りましたな。みな弓削めの采配でムりませうか。』

『當り前ぢや。わざとこのやうな騷ぎをおこしておびきよせ。九條家お出入りの允許狀を楯にとつて平八郎にも詰め腹切らせようとしたに相違ないわ。なれども怪敎の正體はもう擧つたぞ。さき程貢めが取り出した白衣觀音は、まさしく切支丹宗徒共が秘かに信仰致す御禁制のマリヤ觀音に相違ないわ。——松兵衛！』

『へえい。』

『娘を生き返へらして貰うたゆゑ、うれしい一途にそちはまだ



目が眩んでゐるであらうが、いぶかしい死に方をさせたのもあの豊田貢ぢや。さりとも知らずきやつの妖術にたぶらかされて、うつかり御禁制の邪教などを信心致すと、一家眷族残らずの者みんな御處刑に遭はねばならぬぞ。よいか。命がをしくば平八郎の申したこと忘れるなよ。』

言ひのこしておくと、胸中すでに對策のなつたもののごとく、迫らずに天滿の屋敷へ引あげました。

二

しかし、歸りつくと同時でした。

歸邸を待ち構へるやうにし乍ら、高弟宇津木矩之允が悄然として書院へ這入つて來ると、猪突に意外なことを言ひ出しました。

『長々御薫陶に預りまして、御禮の申しやうも厶りませぬ。少しく仔細厶りますゆゑ、只今限りお暇下さりませ。』

突然に、しかも聞きずてならぬことを切

り出しましたので、平八郎のいぶかつたのは當然でした。

『不意に何を申すか。暇をくれとは、師弟の縁切れと言ふのか！』

『…………。』

『泣いてゐるな！――そちらしうもない！　仔細を申せ。何のためか仔細を申せ！』

『…………。』

『言へぬはこの平八郎に愛想がついたためか。』

『滅相もムりませぬ！　この上ともお側に、と存じましても、事情が許さなくなりましたゆゑ、何ももうお尋ねなさりませず、お暇下さりませ。』

『ふうむ、さうか。さてはまた不在中何ぞあつたな。――正一郎！』

『はつ。』

『芳音どのをお呼び申せ！』

だが、呼ばれて這入つて來た芳音そのものもまた不審でした。兩眼にいつぱい



の雫をためて、それゆゑにひとしほいぢらしい美しさをました面をそこに伏せると、不意に同じやうなことを言ひ出しました。

『申しあげるのも悲しうムりまするが、もう御厄介になりますこと出來なくなりました。このまゝお暇下さらばしあはせにムります。』

相愛し、相契つてゐる二人が、何ごとか容易ならぬ悲しみにでも出會つてゐると見えて、言葉を揃へ乍ら同じやうなことを切り出したので、やゝ暫しぢつと兩人の泣き濡れてゐる姿を見詠めてゐましたが、炯眼すでに冴えたものか、温容あふれた微笑をのせると、ずばりと言ひました。

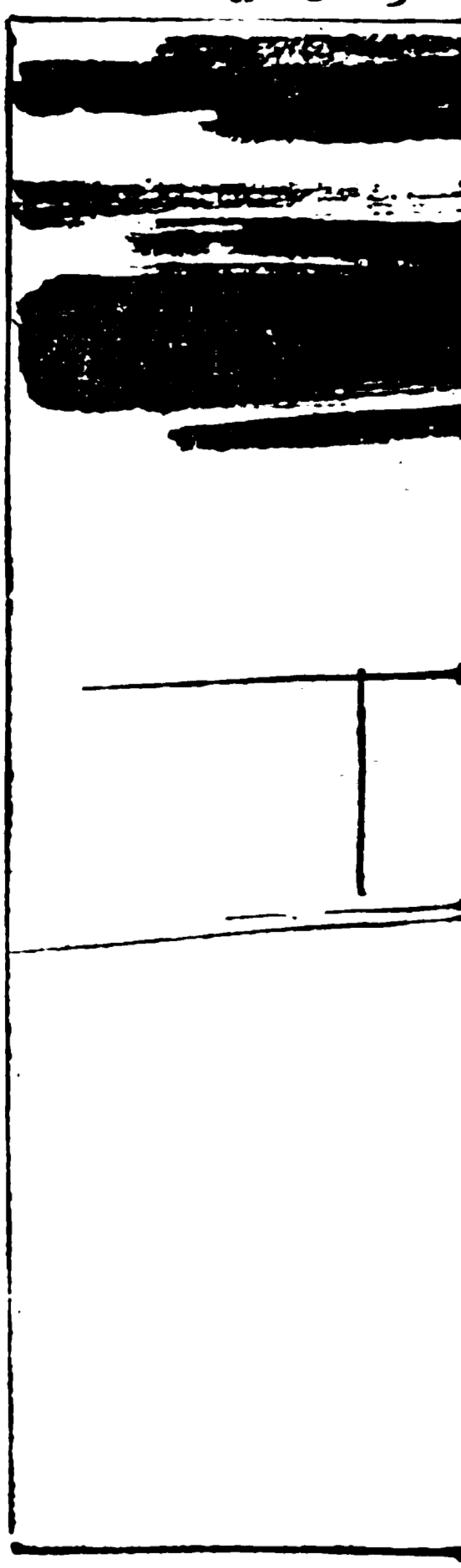
『さうかよし分つた。助次郎がまた何ぞ水を差したであらう。喃！矩之丞！どうぢや。違ふか。』

『………。』

『何をいつまで隱してゐるのぢや。朋輩を傷つけまいとの心遣りから口を割らないであらうが、平八郎には何もかももう相分つたぞ。つまらぬ心遣ひしたとて無駄な手間取らせるばかりぢや。早う申せ！』

『恐れ入りました。では申します。實は……。』

『實はいかゞ致した。』



『御不在中に助次郎殿いづれへか逐電しましてムります。』

『なにッ、逐電致しをつたとな！』

『それもこれもみな手前が不調法致しましたればこそ、先生にこのやうなご心配を次から次へおかけしなければならぬと思ひまするると、身を切られるやうに辛うムりますゆゑ、いつそお暇頂いた方が――と存じましたのでムります。』

言ふと矩之丞は、己れ達の故意ゆゑに、軌則を紊し、塾の圓滿平和を破り、そしてこの上忌はしい波紋の恩師に及ぶのを恐るるものゝごとく、膝のうへに幾粒かの雫を散らしました。愛人の悲壯な心根に、耐らへ忍んでゐた胸が張りさけたものか、芳江の口からもつゝましやかな忍び泣き音があがりました。

その美しい二人の清らかな心に打たれたものゝごとく、平八郎もまた目に幽かな露の光りを見せ乍ら、默然とやゝ暫し瞑目をつゞけてゐましたが、やがてしかし、斷ずるやうに言ひました。



『さては助次郎の背後にも魔の手が伸びたと見ゆるな。——美しい戀を育てるためにはなにもかも仕方のないことぢや。そち達が今更遠慮して身を引くには及ばぬ。みなこの平八郎の德が足らぬからであらうわい。すておけ、すておけ。』

そして靜かに手を鳴らしました。

『格之助。——こりや格之助。』

『……。』

『格之助と言ふに、きこえぬか！』

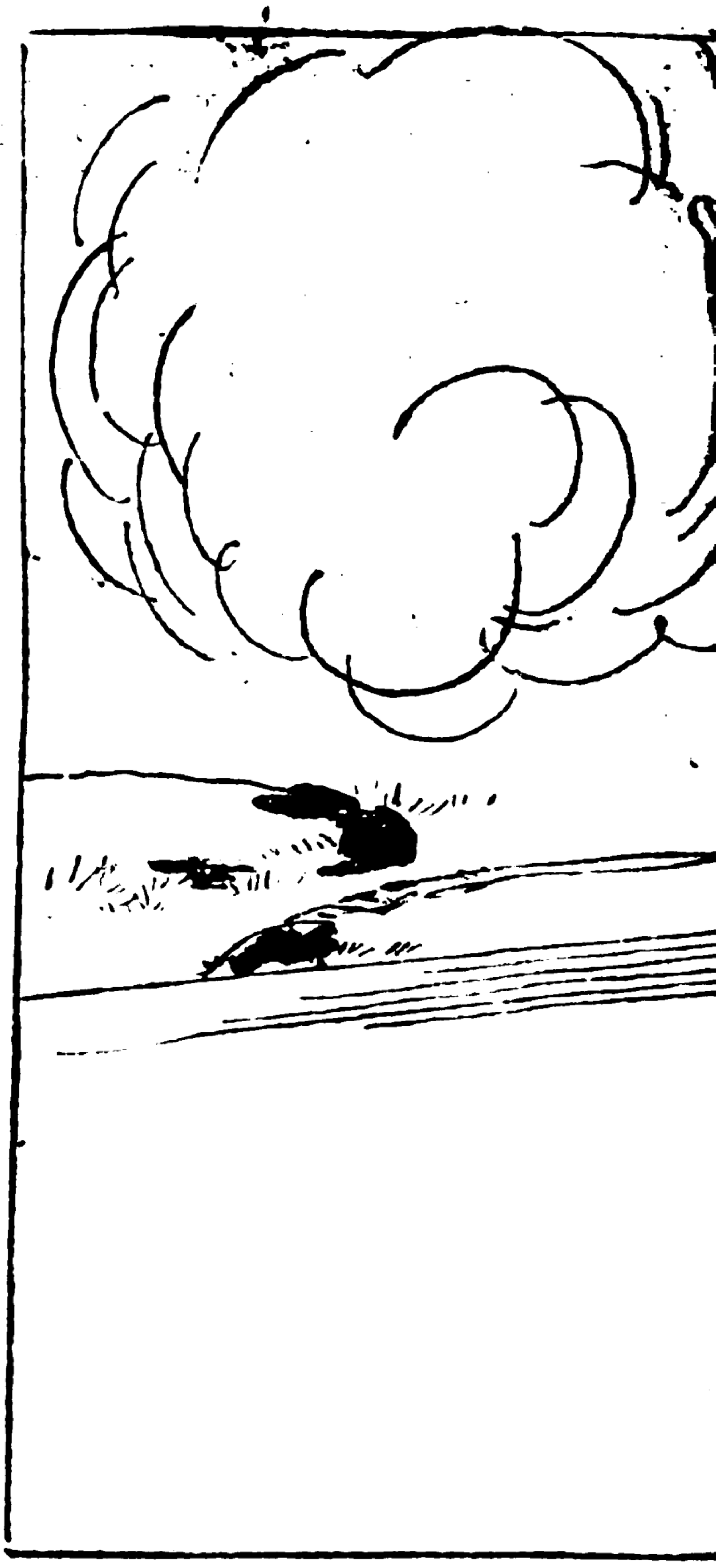
『はつ。只今參るところでムります。——何御用にムりますか。』

『庄司義右衛門にはいつ會うた。』

『今しがた御氣嫌伺ひにいつて參じましたばかりでムります。』

『では大方の容子分らうが、こなひだ中から工夫してゐるとか言うた火藥はまだ出來上らぬか。』

『いいえ出來上りました。實はお父上にもそのこと申しあげようと存じまして、先程からお手すきになるのをお待ち申してゐたのでム



りまするが、あのやうな玉藥見たこともない程の上出來でムりまするぞ。』

『なに、さうか。それ聞かばこうしてはをられぬ。では、正一郎。誰ぞに言ひつけて、迎への駕籠を至急に遣はせ。』

――程たゝぬ間にそこへ姿を見せた者は、平八郎養嗣子格之助が、久しい前から師事してその傳授をうけつゝある細根木流砲術の達人庄司義右衛門でした。

『おゝ。參つてくれたか。わざわざ呼び立て致して氣の毒ぢやつた。實はそちが工夫の玉藥至急に入用なこと出來致せしゆゑ、見せて貰ひたいが持參してくれたか。』

『はつ。何よりも先づ先生のお目に入れねばと存じましたゆゑ、この通り持參しましてムります。』

拵へて來た藥籠を開いて取り出した品は、小さな數箇の黑い玉でした。

『ほゝうこれがさうか。いつぞや聞いた話ぢやと、投げつければ爆發するとかのことぢやつたが、このやうな小さたものが、左樣な不思議な働き致しをるか。』

『はつ。お疑ひならお目にかけませう。』

言ひつゝその一つを取つて、庭の石へ投げつけたかと見えた刹那――。まこと細根木流の砲術家が一心かけて工夫しただけがものはありました。打ち見たところはせいぜい梅干大位な何の變哲もない玉にすぎなかつたのに、そもいかなる工夫が施されてあるものか。石に當ると同時に、轟然と屋鳴り震動せんばかりな恐るべき音を發して、火煙りあげ乍ら爆發したので、それと見るや平八郎は初めて莞爾と打ち笑み乍ら言ひました。

『正一郎！ 持つべきものはよき友ぢやな。庄司の力によつて、豐田貢ももう手足が出ぬぞ。』

『えツ。では、この玉藥がムりますれば、貢の妖術破ることが出來ると仰有るのでムりまするか！』

『念もないわ。先夜參つてわれら四人に施したあの妖術こそは、まさしく切支丹伴天連の眠りの術ぢや。伊賀甲賀の忍道に

於いてもさうぢやが、術者の心掻き亂す工夫さへあらば、眠りの術なぞ破るに雜作はないわ。それには庄司の工夫致したこの玉薬こそ何にもまさる品ぢや。後學のために格之助とその方だけを召し連れいつて遣はすゆゑ、二人とも早う支度を致せ。』
喜び勇み立つたのはお伴を許された兩名です。
『御野袴で厶ります。』
『お草鞋はあちらに取揃へまして厶ります。』
甲斐々々しく平八郎のために、旅の用意をとゝのへておくと、自分達もまた野袴、脚絆、編笠取つて、柄袋かけた一刀勇ましげに握りしめ乍ら式臺におり立ちました。平八郎また同樣。しかしいかなる時も、師の大愛を忘れないのは、さすが天滿の棟領です。
『では矩之丞。つまらぬ心遣ひにくよくよせずと、遠慮なう方晉どのを勞はつて遣はせよ。如才もあるまいが留守中の事は、塾生達への代講、その他警固のことなぞ、萬事拔からずに釆配頼んでおくぞ。』
言ひおくと、まこと疾風迅雷、細根木流秘法の玉薬を懐中深く秘めかくし乍ら、平八郎のたゞちに行き向つたところは東町御番所でした。

三

『御奉行は御出役中か。それともお役宅か。』
『おつ。天滿の先生で厶りまするか。今しがたまでお待ちかねで厶りましたが、御出仕厶りませなんだゆゑ、ほんの只今お役宅へお立歸りなさつたばかりで厶ります。』
『左樣か。では、瀨田！　瀨田！——瀨田はをらぬか。』
呼ばれてそこに姿を見せた者は、平八郎の薫陶うけて、この東町奉行所の與力末席に勤役中の中齋門人瀨田濟之助です。
『何御用に厶ります。』
『そちにも手柄を分けて遣はすのぢや。同心共は誰と誰が手すきぢや。』
『吉見殿に、河合殿がお手あきのやうに厶ります。』
『さうか。九郎右衛門！　郷右衛門！』
さらに二人の同心を呼び招くと、猪突に命じました。
『至急に腕達者な手先共を十四五名選りすぐつて、いづれも素人らしく見えるやうに變相させろ。』
『不意にいぶかしい御命令で厶りまするが、どこへ御出かけなさるので厶ります?!』
『文句は要らぬゆゑ、火急に支度させろ。そち達三人もその姿では目立つゆゑ、何ぞよい工夫致せよ。』
命じておくと、裏庭傳ひに訪れたのは、奉行跡部山城守のお役宅でした。

『お庭先から失禮させて頂きまするぞ。』
ずいと內庭へ通ると、旅姿をいぶかしさうに見迎へた山城守をおどろかして言ひました。
『小町娘共に不埒働いた下手人分つてムりまするぞ。』
『なにッ、目星がついたとな！どこの何奴ぢや。』
『豐田貢めの仕業にムりまするぞ。』
『えッ。――貢と申さば、京都所司代の者共に散々手を燒かせた怪行者の筈ぢやが、あやつのことか。』
『はつ。しかとの確證握りましたゆゑ、かく御暇乞ひに參りましてムります。』
『なに、では、そちが今から手入れに參ると言ふのか。』
『御意にムります。』
『でもあやつめは九條家お出入りの允許狀を持參してゐる筈ぢやが、もしやそれにて手入れを拒んだ場合は何と致す所存ぢや。』
『何の致しやうがムりませう。たとへ五攝家出入りの身分ある者であらうと、天下に許し難き重罪人ならば、これを搦めとるに恐るゝところはない筈。天滿の與力大鹽平八郎の名に於いて、正々堂々と押し入る所存にムります。』
『ふうむ、さうか。そちならでは言へぬ言葉ぢや。いやその方ならでは出來ぬ詮議ぢや。よしッ。面白い！　行けッ。』
『でも支配違ひの京都へ手入れ致さば、所司代方より苦情のあるは必定。その節は御奉行殿も御覺悟がムりませうな。』
『なうてどうしようぞ。高井山城も男のつもりぢや。御城代丹波殿にも早速その趣使者を立てて遣はすゆゑ、心置きなく行けッ。』
『有難うムります。そのお言葉承はらばもう懸念ムりませぬ。では御免させて頂きまするぞ。』
たゞちに奉行所へとつてかへすと、命じておいた瀨田以下の者をそこに勢揃ひさせました。
筆頭の瀨田濟之助は劍客風の變相。
同心吉見九郎右衞門は、大家の用人づくり。
同じく河合郷右衞門は寺侍風。
それに擇りすぐつた目明し手先達が十二人。
ひとりは道中師。それから伊勢詣り。つゞいて祭文語り。さらに飛脚奴。そして番頭。手代。富山の藥賣り。色とりどりの變相に編笠野袴姿の倅格之助と荒門弟大井正一郎を引具し乍ら、天滿の棟領平八郎は、眉宇に強い決心の色を漂はせて、淀川沿ひを伏見街道目ざし乍ら、肅々と經のぼりました。
行き行く大川沿ひの夏の道は、苫舟、傳馬、荷足に涼しい川面風を孕んで、唄ひ流す舟歌も明るく、浪華三郷の碧空は青み澄んだ午下りでした。そして永井三萬六千石の高槻城下に這入

つたのが丁度七ツ下り。

『正一郎。』

『はつ。』

『そちは名打ての食ひしん坊ぢや。まだちと夕食には早いやうぢやが、どこかその邊で用ゐるか。』

『結構でムります。先程からもう袴がこの通りゆるゆるでムいますよ。』

言つたかと思つた間に、まこと正一郎こそは慓悍兒と共にまた快男兒でした。

『ムりました。ムりました。恰好なところがムいますよ。』

忽ち見つけて歸りましたので、しかし、平八郎はまた平八郎らしく細心でした。

『大勢一緒に這入ると目立つゆゑ、ばらばらに參れよ。』



そして支度を摑つてから山崎へ辿りついたのがかつきり暮れ六ツ下り。伏見を通りすぎた時が丁度四ツ。一氣に京へ這入つて、目ざした八阪上町の豐田貢が怪教屋敷に行き着いたときは、巷に人の影も全く途絶えた九ツすぎの深夜でした。

無論のことにその場から怪教詮議に押し入るだらうと思はれたのに、だが、平八郎はそこの小陰に一隊を勢揃ひさせると、先づ命令を與へました。

『對手は油斷ならぬ怪行者ゆゑ、屋敷のうちにどのやうな仕掛がないとも限らぬ。手分け致して外廻りをよく見調べろ。』

『心得ました。』

配下はいづれも俊敏俊鋭並びなき天滿組です。格之助いち人を殘した一隊十六名の黒い影は、吸はれるやうに闇の中へ散り去りました。

程たゝぬまに、第一報を齎したのは慓悍兒正一郎です。

『たかゞ女行者の住ひにしては廣大すぎるではムりませぬか。屋敷廻りは一町四方もムりまするぞ。』

『ふうむさうか。よくよく邪法にたぶらかされてゐる信徒が多いと見ゆるな。そちの脇差しも久し振りに鞘走らねばならぬかも知れぬぞ。』

言つてゐるところへ第二報が、同心吉見九郎右衛門によつて報告されました。

『不思議な住ひで厶ります。これだけの大屋敷ならば、裏門の一つ位あるべきが定なのに、門は表門只一つぎりで、裏側にはくぐり戸一つ厶りませぬぞ。』

『愈よ以つて油斷ならぬな。屋の棟はいく棟位か分らぬか。』

『分りまして厶ります。分りまして厶ります。』

言ひ乍ら斷けつけて報告したのは河合郷右衛門でした。

『――祈禱所らしい大きな建物が一棟、うしろが本殿、廊下を隔てて住ひらしいのが一棟厶りまするぞ。』

『それだけか。』

『いいえ今一つ妙なものが厶ります。目明し共が土塀の上から遠見しての報告で厶りますゆゑ、しかとの事は分りませぬが、〆繩張りめぐらした仰々しい井戸のやうなものが一つあるさうで厶りまするぞ。』

『ふうむさうか。さてはそれも何ぞ邪法の道具ぢやな。瀨田は何を調べてゐたか。』

『道を隔てたまうしろの森に、不審な祠があるとか言うて、みなを引連れ乍らお調べのやうで厶りました。』

言つてゐるところへ、足音忍ばせ乍ら駈け近づいて來たのは目明しでした。

『祠の容子がいかにも不審ぢやさうで厶りますゆゑ、先生にお越し願ひたいとのことで厶ります。』

『よしツさうか。いづれもなるべく靜かに參れよ。』

行き近づいて疑問のそれなる祠を調べてみるに、なにさま不審なことばかりでした。第一は祠の内部そのものです。祠と言ふからには當然なにか御神體が安置されてゐるべき筈なのに、龕燈さしつけてのぞいて見ると、いぶかしいことに二重格子で嚴重に閉された五疊敷位の中は、全くのがらん洞でした。それから第二はその表構造です。どこの祠でも千木、宮居造りであ



るのが普通なのに、屋根の工合、塗り壁の鹽梅、大和風とは思へぬ節がありましたので、炯々と目を光らし乍ら、ぢッと視線をうつした平八郎のその目に、はしなくも移つたのは、屋敷の中の奥住ひと、祠そのものの位置が一本の線の上にあることでした。

『あるべき裏門のない工合から察して、ひよつとするとこれなる祠、秘密の抜け穴かも知れぬぞ。——もうこれだけ調べがつけば充分ぢや。いづれも靜かに引あげろ。』

すぐさま押し入るだらうと思はれたのに、配下の者を引具し乍らひたひたと道を返へすと、祇園裏の小路で見つけた旅籠を叩きおこして、悠々と旅の疲れを解きました。

四

かくしてその翌る朝。

都大路を濃く埋めた京名物の朝霧が散り去つた頃、濟之助以下一隊の配下たちに、きのふと同じ旅姿をさせると、注意深く命令を與へました。

『濟之助は小者六人を引連れて、あの森の中の祠へ見咎められぬやう張り込め。滅多に斬るなよ。——それから九郎右衛門と郷右衛門は、殘りの六人を引連れて、氣取られぬやう信者達の中に紛れ込め。よいか、抜かるなよ。』

二隊に分けて、ひと足先に先發させておくと、自身は深編笠に面をかくし乍ら、格之助正一郎を伴侍らしく見せかけて、愈よ怪行者豐田貢の本城なる豐國觀音祈禱所と、太々しく大門標の出た怪居に乗り込みました。

と——、先づ第一に平八郎の目を聳立たしめたものは、まだ陽が上つて間もないと思はれるのに、絡繹として門内へ這入つて行く怪教信者の群でした。五十人！ 百人！ いや三百人！

『世の中にはずゐ分と愚か者がムりまするな！——よツ。先生先生！ ご覽なさりませ。信者の者誰も彼もあのいぶかしい井戸のところへ參りまするぞ！』

『靜かに致せ。先程からもう目をつけてゐるわ！』

おどろいて囁いた正一郎を輕くたしなめておくと、あとからあとからと絶え間なく續く信者の群に紛れ込み乍ら、胸をどらせて不審な井戸に近づきました。

然るにそれなる井戸が、外見からして凡そ奇怪でした。井戸と言ふからには浩然水を汲むべき用意がしてあるべきなのに、腰高位の丸井桁を圍つた周圍には、さも神々しく小縄を張りまはし、さらにその大廻りには白木格子を嚴重に圍つて。しかもその井戸の側には、大きな獻饌臺を備へつけ、一見して信仰信心の用にでも供すべきものらしい設備が施してありましたので、そも一體いかなる信心用に使用するのか、炯々として目を



光らしてゐるとき——、左右に二人の小童を隨へて、祈禱所の中から靜々と謎の井戸の側へ近づいて來た者は、十八九と見える白衣の袿に、緋色の袴をはいた巫女でした。

と同時です。列を作つて待ちうけてゐた信徒の先頭が、獻饌臺の向うの床几に、生宮のごとく取澄まし乍ら控へてゐる巫女の前に近づいて、不亂に祈禱をささげつゝ賽銭らしい物を臺の上にのせると、何たる奇怪ぞ！ そこに恭々しく供へられてあつた神酒すゞの中から、いぶかしともいぶかし！ しゆうツと水柱が一尺程宙に立ち昇りました。

『よッ！』

『聲を立てるな！』

おどろいて叫んだ正一郎を叱つておくと、聲をおとして傍らの町人にきゝ尋ねました。

『あの井戸は何の禁厭ぢや。』

『あれをご存じないとは、お初の方で厶りまするな。』

『初めて參つた者なればこそ尋ぬるのぢや。不思議な眞似をするやうぢやが、何のお禁厭ぢや。』

『眞似なぞと勿體ない。あれはあなたお曼陀羅の神泉と申しまして、な、ほら、ほら、あゝしてお賽錢を供へまして、自分の願ひごとを鞍國觀音樣にお祈り致しますと、お聞き屆け下さいますときはあの通り、お水が揚るんで厶いますよ。――ま！ 可哀さうに！ 今の方はおきゝ屆けがないとみえまして、な、ほら、ちッとも揚らんでは厶りませぬか。』

水柱の立つ場合もあり、まるで立たない場合もあることが分りましたので、早くも炯眼冴えたものか、不意に二人へ秘かな命令を下しました。

『そら、格之助、正一郎、一兩と二朱銀を別々に遣はすゆゑ、氣づかれぬやう試してみろ。』

と――。何たる奇怪！ 正一郎が二朱銀を賽錢に供へた時は二寸と揚らないのに、格之助が一兩小判を捧げたときは、さながら金箇に何等かの秘術でもがあるかのごとく、しゆッと一尺近くも噴き揚げましたので、二人が立ち戻つたのを待ちうけ乍ら、小聲で鋭い命令を與へました。

『不埒至極な小細工ぢや。九郎右衞門達をこつそり探して參れッ。』あちらの群からひとり、こちらの群がりからひとり、ぽちりぽちりと配下の八人が全部打揃つたとき、祈禱所の中から異國の物と覺しき鐘の音が、妖々とひゞき傳はりました。

『おー 貢樣の御祈禱が始まるやうぢや。さ、參りませう。』

『あい參りませう。』

ぞろぞろと信徒の群が押しかけていつたので、目交せに目交せを送り交はし乍ら胸をどらして、平八郎以下天滿組の俊鋭十人は、こつそり祈禱所の中にまぎれ込みました。（つゞく）

おゝ見よ！ 妖氣殺氣、渦き迫る中に、今にも吾等の偉傑天滿の先生が、その炯眼をギラリ！ 動かせば合圖に、忽ち胸のすくやうな一大騷動が爆發しようつといふのだ。――將に嵐の前の靜さ！

恐らく怪教屋敷には幾多奇怪！ 不思議な仕掛けのあることであらう！ そこに想像さるゝ次號の爽烈快絕の大活場面！ 蓋し佐々木先生特意の壇場である、紙上に一大暴風を捲き起して爽快無比！ 近頃痛快に讀者諸君の溜飲を下げてくれることであらう。

待て、その壯！ その快！

各種懸賞當選披露

六月號誌上 新聞紙上募集 各種物語の部

一等(賞金五百圓)鷲鳥姫物語 東京市四谷區仲町 草壁春秋

二等(賞金參百圓)日東男兒の意氣 福岡縣企救郡曾根村 川江吉男

遺憾ながら三等に該當する作品がありませんでした。規定に從つて三等賞金壹百圓也を左記五名の方々に配分することになりましたから右御諒承願ひ上げます。

等外賞(賞金貳拾圓)

生蕃威嚇飛行墜落記 福島縣岩瀬郡白方村 矢部明雄

或る通譯官の土産話 靜岡縣濱松市三組町 村松常世

扮裝三千歳姫の死 横濱市神奈川町 阪東次郎

頸飾物語 埼玉縣粕壁町 增古二郎

五馱鐵 宮城縣本吉郡鹿折村 大原善二郎

秀逸賞(賞金五圓)

名妓の行方 東京市 小林しげる

無人島に住む女 沖繩縣 新垣隆正

ワシントンと螢人 茨城縣 金澤一二三

選外佳作(無賞)

○丁髷物語狂三生(山形)○湯島小町一輪朝顔忍ケ岡晩鐘(神奈川)○清新、隠れんぼう沼澤勝彌(北海道)○勤王餘補役日物語藤本純一(岩手)○口で投げる井本麻呂(熊本)○追善見物高野卯吉(東京)○金の針大坪さかえ(臺灣)○島崎連(朝鮮)○市丸謙介(岡山)○宮光一路(東京)○瀬南山人(神奈川)○山下參良志(朝鮮)○幸谷保(山口)○石渡義光(北海道)○鍋田秀(三重)○山﨑淺七(埼玉)○澤畑勝雄(茨城)○山内千登子(長崎)○橋本桂次郎(福井)○西谷乙女(北海道)○大石忠男(靜岡)○長谷川三郎(秋田)○石岡常吉(青森)○森口文彦(福岡)○榊原清(愛知)○西田昌一(廣島)○高橋秀夫(香川)○中村幸男(青森)○中川齋(山梨)○阿部海人(宮城)○高田一草(大阪)○岡野淺治郎(北海道)○小島扶男(熊本)○永井義衛(富山)○島内俊擧(大阪)○所榮吉(岐阜)○井ロウメ子(新潟)○藤原鐵一(岡山)

六月號誌上 新聞紙上募集 美談逸話の部

賞金壹百圓 天秤棒一本から巨萬の富を積む迄 大津市甚七町 木村綠生

賞金五拾圓 私の見た六代目と澤正 市外戸塚町源兵衛 木暮冬彦

賞金貳拾圓 玄米家老 豐橋市上傳馬 巽喬次

淺野屋秋台の畸行 石川縣中島局區内 尾崎清郎

賞金拾圓 石川素童禪師の機智 金澤市石坂角場 加藤祐策

双葉より芳し 東京市西小川町 中川庄藏

賞金五圓 母子の再生 新潟縣 太刀川杜鵑

高僧と賊 山口縣 藤本良月

淺野翁の太ツ腹 東京市 水村洋々

發明家の光榮と獨逸の技師 兵庫縣 河西秀一郎

伊藤公と岩田博士 東京市 谷上柏葉

懸題

地獄があるか他數篇 神奈川縣 幸保良男

松山伊賀子女史 福岡縣 堂屋敷竹次郎

三重縣 山口初子

選外佳作(無賞)

○江州商人 柵町潔(福岡)○今釋海中山市太郎 古賀綠(?)○青年志士福田規矩男 内田鈴水(支那)○紙製茶瓶の發明 畑茨城(東京)○血痕斑らの電報紙 松下愛治(東京)○偉人澤村堅操の譽 岡部杏堂(福島)○涙の善導氣高き感化 出廣雲二(廣島)○努力は輝く 川口草笛(岐阜)○岡田氏の奮闘實歴美談 結城朝八(東京)○世界最初の大遊泳 本條定司(佐賀)○川村浜水(茨城)○山本祐嬉(靜岡)○黒澤由治(茨城)○竹森雷温(東京)○佐藤白嶺(新潟)○西原芳月(廣島)○鈴木熊夫(大阪)○戸村保(千葉)○前田鳴水(福井)○山田象水(東京)○南干藏(大阪)○高柳弘(佐賀)○所榮吉(岐阜)○清原恭壽(兵庫)○日當瀬弦麿(鹿兒島)○杉山洋一(東京)○阪中紅潮(大阪)○大澤勝衛(新潟)○豐田重一(東京)○高木實衞(岐阜)○松本馨(岩手)○田丸健(山口)○岡村實(朝鮮)○眞武丈夫(廣島)○市川誠一(北海道)○森猛(大阪)○野崎史子(愛媛)○高畑愁(北海道)○鈴木茂也(千葉)○山口雪殘(兵庫)○白島透谷(福島)○佐賀井濤(秋田)

六月號誌上募集 九大雜誌ポスターの部

賞金五拾圓 長崎市本石町 柴田初治

同 貳拾五圓 東京府下寄山原宿 小池富久

同 金澤市廣坂通 山口右一

同 貳拾圓(二點) 東京小石川區林町 宮崎幹

同 拾圓 名古屋市中區水主町 早川釟郎

選外佳作(一圓圖書券)(一八名)

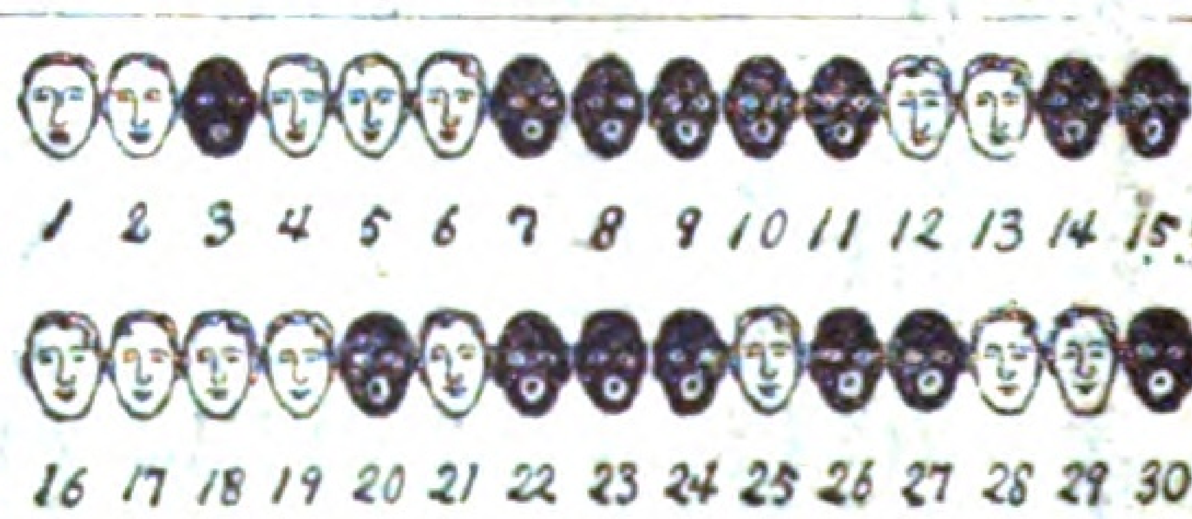
○小松幸男○田中朗照○森茂○小川軍次○井田香月○來栖美丘○堀田美聲○芹野正二○神谷博○金子稔○田中朗照○大林狂二○輻信緒○大上寅治○津田佐一○岡田滋夫○加藤照造○小川軍治

金拾圓 口繪寫眞入選者 福島縣石城郡好間村 白石龍峯

右は前號發表の節掲載漏につきこゝに追加いたします。

智慧くらべ解答(本文二五〇頁)

(一)



(二) 將を射んとする者は先づ其馬を射よ。

(五)(1)イハイ(2)按摩(3)布巾(歩、金)(4)水掛論(5)印度人の幽(6)田毎の月。

(六) 頭の七

(七)



(八)



(九) フヂ
サンハウツ
クシイ
1 2 3 4 5
6 7 8 9 0

(三) 圖の如く腕を組合せ卓の上の紐を取上げ、組んでゐた腕をほどきます。紐にはチヤント結び目が出來てゐます。



(四)



(十)たつた一つ。何となれば一つ食べればもう胃袋は空ツぽではなくなりますから。



今更申上げるまでもなく

子供の教育程大切な事はない

一家の繁榮も
一國の興隆も

實にかゝつてこゝにあります。乍然是程又難しい事はない。やり方如何で

驚くほどの出世もすれば無爲無能で一生を終る事にもなる

どうしても、學校教育と家庭教育とが兩々相俟て遺憾なく行はれねばならぬ

きくところによれば今度小學校の教科書の大改訂が行



はれるが、さし圖の如きも色彩を施し、又全體に亙つて、從來よりはずつと興味を深くする方針であるとか。時代に適應した態度でありませう。

これらの點に於ては

少年倶樂部
少女倶樂部
幼年倶樂部

の三雜誌の如きは、面白くて面白くてたまらず、夢中でよんでゐる中に、不知不識の間に、多大の教訓を與へられる。天下の識者教育者が、『少年倶樂部、少女倶樂部、幼年倶樂部の三誌は、安心して兒童に與へてよい』と證明してゐるのも、寧ろ當然であつて、教科書の改訂方針と思ひ合せ、愈よ確信を以てお奬めする次第であります。



賀川豐彦氏の感激

靑山學院校庭の花岡山、木蔭の芝生に集まつた人々は熱心に耳を傾けてゐる。丘の上から叫んでゐるのは我等が敬愛する賀川豐彦先生だ。

質素な木綿服、黑眼鏡、靜かに暮れて行く夏の夕、先生の聲は實に神の聲の如くに響いて來る。やがて講演を終つた先生と記者は久振りで握手した。



『いや、いつも御盛んで結構。二月號に書いた「黄昏への道」のやうな小説を書けとの御注文、確かに承知しました。彼の時の反響を考へると私は書かずにはゐられません。あの小説を讀んで禁酒した多くの人を私は知つてゐます』と。

いつも變らぬ溫容の內に毅然たる態度、記者は今更のやうになつかしさを感じ、讀者各位になり代り固く〳〵先生の手を握りしめて感謝した。

『飛んだ間違ひ物語』の 飛んだ間違ひ物語

宮尾しげを畫伯に依賴した本號所載『飛んだ間違ひ物語』の挿繪がチヤンと期日に郵便で屆いたので、やれ嬉しやと開いたところ、山縣五十雄氏の原稿『カン違ひ』の一篇だけが入つてゐない。何しろ〆切當日、使を出しても御留守とやらで埒が明かず氣を揉んでゐると、その翌々日のこと、心配してゐた『カン違ひ』の原稿と挿繪が手紙と一緒に屆けられた。曰く――

あの日の午後三時の汽車で急に富士登山に出かけたため、大急ぎでお送りした中へ入れずにおいた事をお手紙によつて發見いたし申譯ありませぬ。「飛んだ間違ひ」の挿繪の飛んだ間違ひでございました。

佐々木味津三氏唸る

いよ〳〵佳境に入つて『風雲天滿双紙』は嘖々の好評、毎日續々と讃辭が舞ひ込むえらい〳〵人氣。

ところが作者はこの酷暑に、かてゝ加へて胃下垂といふ厄介な病氣を患つてひどく惱まされ、流石の鬼才も氣が腐り、筆が澁つてトント運ばず甚だ苦作の態であつた。これではならぬと名藥を思ひついた記者が、讀者諸君からの讃辭を一束にして持つて出かけて

編輯挿話

F氏と寒暖計



編輯室の中は焙りつけるやうな熱さだ。八月八日の晝の出來事、原稿を讀んでゐるM君の額からもペンを走らすT記者の腕からも玉のやうな汗がポタリ〳〵。一番御難なのは反射熱を眞後から受ける編輯長だ。流石剛情我慢の氏も今日だけは堪り兼ねてか『馬鹿に暑いぞ、オイ寒暖計を持つて來い』

やがて机上に立てられた寒暖計の溫度は、衆人環視の中に見る〳〵勇敢に上つて行く。九十三度―五度―七度、丁度時計が二時を示した時だ、今迄、寒暖計と睨めつこしてゐた編輯長、莞爾と笑つてさも滿足相に『諸君、とう〳〵百度迄行つた。どうせ暑いならこゝ迄來ないと洵に不徹底でね』と手拭片手に汗をふくことふくこと。

S記者の縮尻

伊香保の社長別邸で新年號の特別編輯會議があつた翌朝のこと、何時も寢坊のS記者







お目にかけたものだ。ところが案の條。その、如何に期待されてゐるかを如實に見せつけられたものだから『有難いことだ』とスッカリ感激されたところへ、丁度また龜戸の石井君といふ人から『先生の作に心服してゐるものです。私の家の愛藏の書ですが、何かのお役に立てゝ頂きたく特に先生へ贈ります』との意味の手紙を添へて山井流軍法秘傳といふ得難い古書を贈つて來たものだ。愈々以て感動させられた作者、『うむ！病氣位に屁古垂れて居れるかッ』と興奮して唸り出し、早速ペン執るやタッタ、タッタ。忽ち書き飛ばされてしまつた。

本號の作「怪教詮議」の由來にこんな靈藥の物語のあつたことをチョッと御紹介。

名文揃ひ

人情といふものは妙なものだ、自分の話が載つてからスッカリ僕もキング黨になつて仕舞つた。今迄は、キングは通俗雑誌、我々仲間には交渉ないものと思つてゐた。まあ食はず嫌だつた。所がよく〳〵熟讀して見るとスッカリ感心させられた。內容は勿論だが、ハッキリと分る事はいかにも名文揃といふ事だ、訓話にしろ、科學物にせよ悉くが珠玉の文字だ、月刊雑誌としてあれだけに精錬して出す編輯者の苦心は實に大したものだ。…これは慶應大學の重鎭清水教授の賞讃の辭。

通信

私は「キング」創刊號よりの讀者ですが、八月號の『國士物語』には一方ならず感動させられました。私はこれを讀んでゐる時に訪問客が二人もありましたが、之を讀了せずには居られませんでした。かうした感激深い讀物をお蒐めになる記者御一同のお骨折りを感謝すると同時にこの國士物語のやうな悲壯な事實譚を御掲載下さい。（新潟市會津佳思夫）

浩然の氣を養ふはこの時とばかり、いの一番に飛び起きのきて朝の温泉町の散歩と洒落たである。と、前方から歩を運んで來る浴客らしい麗人二人、S君の方をみては微笑む。近づけば近づくほどしげ〳〵見つめる。さてはと思ひ込んだS君、氣をよくして益々反身になつたものである。—まではよかつたが、ふとみるともなしに自分の姿を見ると、これはどうした事だ、肩當て尻當てが出てゐる、浴衣を裏返しに着てゐたのだ。この時S君がどんなあわて方をしたかそれは內證內證。

れ



エッケナー博士特に本誌へ寄稿

何たる快事ぞ—『ツエッペリン伯號』は美事歐亞の空を一飛びに飛んでその堂々たる雄姿をわが帝都に現はした。眞に之れ劃時代的の大壯圖。この大成功は世界人類の共に祝福する處。霞ケ浦に無事着陸するや、總司令エッケナー博士は、直ちに本誌の爲に滿腔の熱意を以て一文を執筆寄稿せられた。然るに惜しい哉時既に遲く、本號は大部分印刷ずみとなり、止むなく次號に花花しく發表する事となつた。御期待を乞ふ!!

難治と諦めた喘息より救はれて

マラソン選手そつちのけの健康に復す

＝喘息エキスとムラセ氏錠の恵み＝

雑誌「鍛錬」主幹 古賀誠

十年來の喘息であつた私

私は釣道樂では敢へて人後に落ちないと斷言するほどの「釣キチ」である。

つい、この頃のこと、それは焼きつけるやうな炎天の八月中旬の或日、私は九州本線「筑前新宮驛」から六町の溜池に鮒釣に行つての歸途、午後四時八分の筑前新宮驛發下り列車に乘るべく釣場を出發すると、發車時刻までには僅かに十分、しかも魚籠の獲物は可なり重く、釣竿が三本と大きい魔法罎を右脇に、そして十分間に六町を駈足で汽車に乘遲れまいとするのである、マラソン選手の健脚なら知らぬこと、老齢の私としては、且つ、十年難治の慢性喘息患者たつた私――一昨年まで――として、まだ喘息の持病があるとしたら、到底、十分間に六町の駈足が出來るものではない、所か、私は九分間に六町を走り抜いて目的の汽車に乘ることが出來た、

煙草も酒も平氣で飲む

きつい喘息の持病があると、激しい運動すると、動もすれば心臓麻痺でやつつけられる、喘息患者の最後は大抵心臓麻痺にきまつてゐるやうだ、九分間に六町を駈足して平氣にゐられるものではない、然るに私は汽車に乘つた時は大汗ダク／＼だつたが、少しも呼吸に障碍を來してゐるとは思はれなかつた、自覺しないから喘息の病根が未だにのこつてゐるとは思へない。

それからも幾度か釣場からの歸りには、以上の如き滑稽をやつたものだが、私は平氣でそれが出來る、一昨年まで惱まされ續いた慢性の喘息は果して根治したのであらうか、私はまだハッキリとそれを確める機會に遭遇しない、と言ふのは、喘息の發作を感じないからである、喘息に禁物の煙草をのむ、酒ものむ、それで喘息が發作しないとすると或は根治したのではあるまいか、しかし私はまだ喘息根治を斷言することは出來ない。

と言ふのは、私は喘息と言ふ強敵に對しては絶えず豫防警戒してゐるから、豫防警戒してはゐるがそれでも九分間に六町の駈足や酒も煙草も平氣でやれるなら、不治の難病なんて悲觀する氣にはなれない。

九十八本の注射よりこの藥

二三年前までは一度喘息が發作すると三ケ月も惱まず九十八本も注射した私が、どうして健康を回復することが出來たかと言ふに、それは「喘息エキス」と「ムラセ氏錠」とを併用したからである、最初は喘息エキスのみであつたが後に「ムラセ氏錠」を服用することになつて、實に著しい効果を自覺することが出來た。

「喘息エキス」は發作時には確かに有効であるし又多く、此種の藥品によくあり勝な麻醉劑でなく然も喘息エキスは他の喘息賣藥のやうな忌むべき副作用も無ければ極めて用ひよ

く全く理想的であり、又た身體の機能を興奮旺盛ならしむる特長を持つてゐることも事實である。又その姉妹藥たる「ムラセ氏錠」は沃度劑であつて――沃度主成分に村瀬式加工――沃度の作用は病的細胞を破壞して患部の血行を促すにある、「喘息エキス」は既に發作したものを鎭靜せしむるのだが、「ムラセ氏錠」はその前に於て喘息驅逐に作用する、譬へば前衞線の守備兵の如し、故に、村瀬氏獨得の「ムラセ氏錠」はこれを持續するによつて、喘息の强敵の襲來を防ぎ得るのである。

私はもうしばらく「喘息エキス」には緣遠くなつてゐるが――それは喘息が發作しないからでその代り常にこの「ムラセ氏錠」を持續服用してゐる爲だと信ずる、私は今の所喘息の妙藥としては以上「喘息エキス」と「ムラセ氏錠」二種の外には何もないと思ふ、自分の體驗によつて同病者には切に沃度劑の持續服用「喘息エキス」の御愛用を勸むる次第であります。(完)

此の「喘息エキス」と「ムラセ氏錠」とは數年來實に何百萬と多數の皆樣に御試用を頂き等しくこの喜びを寄せられる社會的合格品で今更その効果に就いて說明するまでもありません。

斯樣に「喘息エキス」は喘息に効果がある程ですから氣管支カタルは勿論、困難な百日咳にも非常に効驗があり殊に的確なのは喘息發作の兆ある時に一匙か二匙之を用ひますと奇妙にその苦しみから避ける事も出來その効果は實に覿面現に澁澤子爵を首めその他知名の士の中にもこの「喘息エキス」を愛用なされて居る方々も少くありません。

實に「喘息エキス」は名實共に喘息藥物中の隨一恐らく他に匹敵するものはありません。

更に又此の「喘息エキス」の姉妹藥として生れました「ムラセ氏錠」は既に參ケ年前より發表に關るもので常に持藥として御用ひになればその兆をさへ起さなく殊に氣候の變化に堪えられない時でもこの强い消炎吸收の作用により輕症の方なら本劑の服用丈でもこの難關を知らぬ間に容々と過す事も出來、苦しみを未然に防げるわけであります。

どうぞこの記事を御覽の方々は合理的なこの適効藥を以つて常に御無事に愉快に御過しなされます樣記者より切に御奬め申上げます

「喘息エキス」は三十回分貳圓五十錢六十回分四圓八十錢百回分七圓送料内地拾五錢領土五十錢「ムラセ氏錠」は一週間分二圓二週間分三圓五十錢　送料同斷東京本鄕區駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部(振替東京六六二九番)にて販賣

フケぬけ毛をピタリ止める

日本に初めて出來た理想的完全品

クイン一ツで香油とポマードの代用になる

フケが多くて頭が痒い程氣持の惡いものはないのみならず、フケは非常に毛髮を荒しますから毛髮は自然榮養や發育を妨げられて段々赤く細くなり艶を失ひ遂には脱落して了ふ男女を問はず頭髮の抜けたり白毛が出來る程淋しい感じのするものはない。

フケや抜毛は單に毛髮を洗つたり粗雜なフケ止液や在來の怪しげな毛生藥を振りかけた位では何の効果もないばかりか徒らに安價なアルコールに刺戟されて毛質及皮膚面を害する事も實に甚しい。

唯一度でピッタリ止る

本社が特に推薦する「クイン」は純植物性の毛髮榮養料を主としてあらゆる科學の原理を應用し超人的な方法に依り精製された事は申すまでもなく、その不思議な作用は皮膚の深部にまで及びフケの發生をピッタリ止めてしまひます。

一度用ひると二十日間位はどんなにひどいフケでも全く嘘のやうに止り常用すれば永久少くなつて數回後にはあれほどヒドかつたフケ抜毛が全く根本から取除かれて氣分も自然と晴々して參ります。

而も奇妙なことは若はげ髮が薄く切れ易く光澤のない方などが常用すれば必ず一切の[illegible]みを拭ひ去つて眞に一點のフケもなくなり若々しい漆黑な生き生きした頭髮を保つ事が出來ます。

ポマード・香油の代用に

又重寶な事に「クイン」はポマード代用になりますから平素ポマードや水油を御用ひになる方もこの「クイン」一つで何にも入りません、（勿論香油と併用するも可）頭髮を短かくして居られる方に使用して三四時間後に直ぐ洗ひ落してもその効果は變りなく然も粘つく事がないから用ひた後の爽快さは又格別でその中に含有する高貴な香料は馥郁として身に迫りそれが如何にも氣高い趣味と深い教養を象徴するために上流階級の方々は爭うて愛用して居ります。

德川侯爵御夫妻の如き口を揃へて、このクインの實効を賞揚なされ『外遊中なか／＼純良な頭髮化粧品がなくて困りましたが、今回贈られたクインは全く説明書と寸分違はぬ不思議な効果に驚いた、然もサラ／＼して少しも粘付かず抜毛もピッタリ止つて本當に晴々しました』と尚

鶴見祐輔代議士も『私は頭が痒くなると止め度もなく痒くなつてたまらぬ程ヒドイフケ性なのにこのクインのお蔭で忘れた様に快復しました』と喜ばれて居ります。

頭髮病を防ぎ毛質をよくする

新發明のフケ抜毛止「クイン」を一度用ひて二三分すればすべてのカユミを忘れ不快味を一掃しフケや抜毛を完全に止めます。又あらゆる頭髮病を防ぎ完全無害に純良な頭髮を生育する作用のある事は全く之までに見る事の出來なかつた科學の力で正に實驗した記者の體驗より眞に優秀品として切に各位に御すすめ致します。この新發明のフケドメポマード『クイン』は特に御希望の方へ、お頒ちいたします。たゞ御斷りいたしておきますことは、多くの原料のうちで、容易に得難い一品があつて一回の調製數に限りある由でありますから、一品切れになりますと、約四十日間はお待ちを願はねばなりませぬ故お申込はお早くお願ひ致します。

お値段は一圓と一圓八十錢徳用二圓五十錢の三種、送料は三個まで內地十二錢海外は三十錢迄五十錢で、東京市本郷區駒込坂下町四八大日本雄辯會講談社代理部振替東京六六二九番へお頒ちいたします。

治療全く困難とされた
呼吸器諸病の根治藥草遂に發見さる
結核性の諸病や、肺炎、氣管支カタールにも實に好く効く

大正十五年七月號キングに世界唯一の呼吸器病根治藥草ダウンチリメンの發見と題し發表以來該草の取次ぎ申込殺到した爲、弊社代理部はジヤワ島の發見者より取寄せ、一ケ月分金貳圓也の實費にてお頒ちし來りしが喘息、百日咳、肺炎、肋膜、肺炎カタル、氣管支カタル等に驚くべき好成績を舉げ俄然藥業界の大評判となつたが、更に今回日本醫學界の大問題となつた。それは岡部、佐野、合屋、三木の四大醫學博士と小野醫學士他五醫學士に依り三ケ年に亙る專門的御研究が完成されし結果、難治の百日咳や肺炎が四五日で治り流感、氣管支炎等は一夜で又喘息が短日で根治し肋膜や結核にも驚くべき偉効を奏したからであります。左に實驗大家の御批評を發表し御參考に供します。（記者）

▼數十年來の喘息も治る
醫學博士　岡部庸三郎先生談

私は氣管支喘息と百日咳に本草の浸出液で吸入と内服を併用すれば著明な効果のある事を確信する、本草の喘息に對する効果は慢性氣管支加答兒を治して發作を止めるものゝ樣であるから麻醉性のアルカロイド又はアドリナリン注射の如き一時的の奏效とは違ふ。本劑服用に由て幼年より數十年持續せる頑固なる喘息が二ケ年來全く發作を見ない例もある。

▼重症の百日咳が吸入丈で治る
九州大學病院　加藤隆信先生談

僕は二歳と四歳になる子供の百日咳に種々と治療を試みたが一向効果を見なかつた際本草の浸出液を造り專ら吸入として一日三四回づつ應用した處が三日後に至つて急に發作が減少し驚くべき良結果を得た。現今百日咳に確實に奏効する藥劑のない時に本劑の如き副作用の無い有效なる治療藥の出現は誠に喜ばしい事で、余は實施醫家に向つて試用するに足るものとして推奨する。

▼肺炎に顯著なる效果
醫學博士　合屋友五郎先生談

余は本藥草を兩三年來治療上に應用し鎭咳祛痰劑として有効なる事を確信せり、特に吸入料として効果顯著、余は氣管支炎、肺炎、百日咳等に應用せり。胃腸を害する事なき爲め在來の鎭咳、祛痰劑に比し遙に優れるものなり。し

▽實際信用出來る藥である

醫學士 小野忠策先生談

今日迄知られて居る多くの鎭咳、祛痰劑はどれも效くのか效かぬのか曖昧なもので絶對に信用を置くに足る藥はないと云うて差支ない。處が本藥草は一度患者に與へると患者の方から（あの藥は實に好く效く藥ですから）と要求する位に效く、私は最初他の藥劑を用ひて效かぬ場合にのみ本草を使用したが今日では自家藥局に無くてはならぬ重要なる位置を占むる樣になつた。その爲に他の祛痰劑、例へば「ゼネガ根」「遠志」「セラジン」「プロチン」等は却つて邪魔物扱ひにされ近來全く姿を沒した。

▽肺結核、喉頭結核、肺壞疽に有效

醫學博士 三木利一先生談

余は岡部博士より本草を貰ひ受け過去一ケ年に亙り各種呼吸器病患者に使用し顯著の效果を擧げ得た。余の使用したる患者は肺結核、肺壞疽、喉頭結核、肺炎、咽頭カタル、氣管支炎の慢性と急性なり。余は何等副作用なく確效あるので引續き使用しつつあり。

▽慢性氣管支カタールも治る

醫學士 中山弘道先生談

余は三ケ年に亙り入院患者、外來患者、友人家族其の他一般患者の各種呼吸器疾患に相當多數實驗せり、今其の結果を約言すれば、



ジヤワ島のダウンチリメン栽培の状況と發見者佐々木磐市氏及土人

一、本草浸劑は一種の芳香を有し微に澁酸味あれ共何等不快なく小兒も能く服用す。

二、胃腸障碍、其他不快なる副作用も全く認めず、却つて食慾亢進を見る場合がある。

三、余は從來「ゼネガ根」を使用する場合本草を應用したるが何れの場合に於ても本劑は其の效果に於て「ゼネガ」に優るを認めたり。一般に急性、慢性氣管支カタル、氣管支喘息、百日咳には偉效を見たる例多し。

▽ダウンチリメンの特長

ダウンチリメン草の偉效に就ては、前記實驗大家の御批評で充分御分りと存じますが、簡單に特長を述ぶれば(1)副作用がない(2)鎭咳の力が强い(3)强力な祛痰作用がある(4)强力な解熱作用がある(5)健胃作用がある、と云ふのですから百日咳、肺炎、喘息、氣管支炎が治る外に醫者も患者も苦心の肺結核、肋膜、肺炎カタル等に之以上の福音はないのです、結核性諸病の最も恐るべき胃腸障碍の副作用なく好く解熱鎭咳の目的を達するからであります。

▼本劑は原藥草のまゝと、煎じる手數の不用な錠劑の二種類があります。いづれも使用法は現品に添付けてあります。

▼ダウンチリメン藥草約三十日分金貳圓也送料内地拾貳錢、領土五拾錢煎じる世話のない同錠劑小瓶五日分金壹圓也、中瓶十五日分金貳圓八拾錢也、大瓶一ケ月分金五圓也、送料同前、御申込は東京本郷區駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六八一九番）へ

滿天下の愛讀者諸君へ

讀者諸君！　大飛躍！又大飛躍！わがキングは實に破天荒の大發展を遂げて斷然！天下の雜誌界を風靡しつゞけて居ります。此の愉快なる事實は何を語るでせう。世の中を「淸く明るく」といふ小誌の大念願が幸ひにも大なる力となつて天下を動しつゝあることを裏書するものであります。

讀者諸君！　併し乍ら、之れも偏に滿天下キング黨諸君の熱烈なる御鞭撻御聲援の賜に他ならないのであります。之れを思ふ時、我等は常に感奮し興起し、愈ゝ精進努力、全誌悉く寶玉の文字を以て埋め、彌が上にも聲價を輝かさねばならぬことを痛感させられ、猛暑も何んのその、日夜熱魂至誠を籠めて大奮鬪をつゞけて居るのであります。

讀者諸君！　來月號中、特に御期待を願ひたい興味豐な讀物は、先づ「好敵手物語」であります。これこそ近來の名篇、正に快哉！を叫ばざるを得ぬ壯烈無比の物語りであります。更に今一つは、來月より新に掲載する新小說「霧の中の曙」であります。この作こそは野村愛正先生が苦心！實に數ケ年、幾度か構想を錬りに錬り直し、漸く脫稿された會心の作、必ずや滿天下の人氣を壓倒する大雄篇であると信じます。その他、訓話、美談、逸話、どれも之れもが悉く粒よりの名玉揃ひであります。猛躍の十一月號！ぜひ刮目してお待ち下さい。

定價表

	國內滿洲支那（送料共）	外國（送料共）
一冊	金五拾四錢	金七拾錢
四ケ月	金貳圓	金貳圓六拾錢
八ケ月	金參圓九拾貳錢	金五圓拾貳錢
一ケ年	金五圓七拾六錢	金七圓五拾六錢

謹告

◎特大號及增刊號は右表の外でございますから、それだけ餘分に申受けます。但し前金御拂込の方はその中より差引き計算いたしますから何卒御了承下さいまし。
○弊社の圖書雜誌の御注文は總て前金の事○振替貯金にて御送金は口座受入手數料の壹錢御同送の事○郵券代用は必ず一割增の事○雜誌代前金切れ候節は最終の雜誌帶封に『前金切』の印を捺し次の前金領收まで發送停止○前金は本誌到達を以て領收の事と御承知の事○御註文書狀宛名は『大日本雄辯會講談社營業部』の事○郵稅不足又は未納の郵便物は請取不申候○弊社發行諸雜誌廣告料は御照會次第御報知可申上候

昭和四年九月三日印刷納本
昭和四年十月一日發行（第五卷第十號）
編輯人　淵田忠良
發行人　廣瀨照太郎
印刷人　高木鳥三
東京市牛込區市谷加賀町一ノ十二
印刷所　株式會社秀英舍
東京市本鄕區駒込坂下町四十八番地
發行所　大日本雄辯會講談社
振替口座東京三九三〇番
電話小石川（三三五・三三六・三三七・三八〇・一五一一・五五九六
一九八一・六九九二・一〇八・七二七四・三二一〇）
元取次店　東京堂・東海堂・北隆館・大東館